

東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3

東京大学本郷構内の遺跡

# 医学部附属病院地点

— 医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・  
給水設備棟・共同溝建設地点 —

東京大学遺跡調査室 編

1990

執 筆 者

内田哲男  
高田實弥  
東村武信  
望月明彦

大橋康二  
永嶋正春  
藤本 強  
山崎一雄

小川 望  
成瀬晃司  
堀内秀樹  
藁科哲男

小山睦夫  
新美倫子  
松下理恵

佐々木彰  
西田泰民  
宮崎勝美

杉崎隆一  
萩尾昌枝  
宮田安志

(五十音順)

## 序 文

このたび医学部附属病院地点の発掘調査報告書が刊行されることになった。遺跡調査室を中心として種々の形でこの調査に関係された方々にご苦労さまでしたと申し上げたい。この調査が開始されたのは1984年のことであるので、5年以上の歳月が経過したことになる。この間、多くの人々が直接、間接にこの調査に関ってこられた。この地点では、既に工事にかかったところで遺跡が発見されたので、工期、費用の両面で、工事関係者、調査関係者ともに、思わぬ困難に直面し、全学も関係部局も適切な対応を見出すのに大変な苦心をなされた。ともかく調査は終わり、工事も無事終了し、建物は所期の目的に供されている。しかし、医学部附属病院の改築計画はまだその一部が実現しているに過ぎない。なるべく早く、計画全体が完成して、新しい病院として十分な活動が開始されることを期待したい。

学内における埋蔵文化財の調査に関しては、臨時的な体制で試行錯誤を続けてきたが、有馬前総長特別補佐(現総長)をはじめとする関係者のご努力のおかげで、ようやく新しい恒常的な体制が生まれ、今後の調査に備えるため埋蔵文化財調査室が設けられ、また、全学の委員会である埋蔵文化財運営委員会も発足した。これからも、医学部附属病院地区をはじめ、多くの事前調査が予定されている。新体制の下で、これらの調査が円滑に行なわれるように願っている。

今後に残されている課題は少なくない。これまでの調査により出土した資料は、各方面で第一級のものとして注目され、見学者の数も相当多数に上っているという。今後、予定されている調査が進行するにつれ、学内に蓄積される資料もますます増加しよう。このような資料の収納、公開の方法をはじめとして、長期的な視野で解決すべき問題は多い。

一方、今回の調査では、いわゆる「古九谷」の生産地の問題に一つの新しい視点を提出したことをはじめとして、都区内としてはきわめて稀な良好な遺存状態を示す古墳時代の住居址、東国では類例の少ない平安時代の井戸など、多くの新知見が得られ、学界に貴重な資料が提供されたとうかがっている。さらに、豊富に出土した江戸時代の陶磁器などの遺物については、綿密な分析がなされ、従来の生産地の観点とは異なった観点から、消費地における遺物のあり方を明らかにしようとするなど、近世考古学の新しい方法論が個々の遺構から出土した遺物に即して構築されつつあるそうである。江戸時代になると、

多くの品物が遠隔地の間で運ばれ、流通するようになった。たとえば、当初肥前産のものが多かった陶磁器は、時代が下がるにつれ、肥前産のシェアが低くなり、他の生産地のものにとって代わられて行くという。このように、江戸時代における需要、供給の関係の推移が、陶磁器のなかにも見られるのは面白い。このほかにも、誕生間もない近世考古学のこれから取り組むべき課題が数多く提出されている。

いま、日本の近代化の礎になったとされる江戸時代のもつ意味が新しい観点から究明されようとしている。既存の方法論のみにとらわれない、今後の学際的な研究が楽しみな問題ばかりである。総合大学として多くの学問分野を包括している本学は、学際的な研究を推進するには最適の環境にある。この利点を活かし、構内の調査による基礎資料を活かして、独創的な研究が生まれ、江戸時代の持つ意味の解明、さらに日本の近代化の過程が解明されることを期待したい。

本郷構内の多くの建物が老朽化し、キャンパス再開発の必要性、緊急性は誰の目にも明らかである。キャンパス再開発には、遺跡、埋蔵文化財の事前調査は避けて通れない。キャンパス計画を、埋蔵文化財の問題との調和をとりながら、急速かつ着実に進めるにはいかすべきか、全学的な見地から東大人の英知を結集して理想的な方策を確立し、このたび正式に設けられた埋蔵文化財調査室の機能が最大限に発揮できるようにしたいものと願っている。

1989年11月

東京大学総長特別補佐  
東京大学埋蔵文化財運営委員会委員長

伊理正夫



## 序 文

1984年の秋に調査が開始された医学部附属病院地区の建設工事に伴う発掘調査の報告が、いよいよ出版されることになりました。多くの難問を乗り越えて出版まで漕ぎ付けられた遺跡調査関係者の御努力に敬意を払い、その成果に心から祝意を表すると共に、今まで東京大学の地下に眠っていた先人の文化が解明されたことを慶ぶものであります。また、ここに報告された遺跡調査に関して、多くの御配慮を頂いた文部省、東京大学本部に、謝意を表します。

当初はこれだけの大調査になるとは予想しなかったのですが、発掘期間は原澤道美、山中學、森岡恭彦の3代の病院長にわたり、その後の出土遺物などの整理に宮本昭正前病院長が関係され、思いもかけぬ長い期間と多くの費用を要してしまいました。

東京大学、ことに医学部附属病院には大学紛争の後遺症が長く残り、そのため古くなった病院の全面的な改築が認められなかっただけに、歴代病院長を始めとする多くの方々の御尽力により、やっと長年の念願がかない、中央診療棟の改築が開始されたことは慶びに耐えない快挙でありました。ところが開始後間もなく江戸時代の遺跡が出土し、いつ終わるかも知れぬ工事停止に、医学部・病院関係者は途方に暮れ、遺跡と病院改築のどちらが大切かについて議論がなされたことも屢々であった、というのが正直な所であります。

このようにして時が流れ、中央診療棟第1期工事、設備管理棟、給水設備棟が完成し、活動を開始した今になってみると、ほっとすると同時に、急に降って湧いてきた遺跡を、辛抱強く調査されてきた文学部藤本教授を始めとする担当者の御努力に、改めて感銘した次第であります。

しかしながら、病院の改築は緒についたばかりであり、今後外来棟、入院病棟、中央診療棟第2期工事などが計画されています。これらはいずれも遺跡の調査を必要とし、ことに入院病棟予定地は遺跡が数層あって深さ7-8mに及ぶと予想され、病院長の立場としては、誠に頭が痛い所あります。この部分の埋蔵文化財は地下深く良好な遺存状態で埋まっているとのことであり、その埋蔵文化財の価値が大きいほど、また、病院改築が急がれるだけ、その調査には今まで以上の多くの問題が待ちうけている可能性があります。今回の報告書は、今後の調査の重要度を判断するのに、重要な資料となりましょう。

東京大学では、遺跡調査に関する規約が変更になり、本年7月からは埋蔵文化財調査室

が東京大学内の遺跡調査を指導・助言することになりました。今後の遺跡調査および病院建設が滞りなく実施され、可及的短期間に完成することを心から望むものでありますが、そのためには、関係各部の相互の理解、信頼、協調に基づく協力体制と、計画的な調査体制の樹立が何よりも大切であります。関係各位の御尽力をお願いいたします。

終わりに、多くの難問を解決して、このような立派な報告書をまとめられた文学部考古学研究室・遺跡調査室の皆様にご心からお祝いと感謝を述べさせていただきます。

1989年11月

東京大学医学部附属病院

病院長 中條 俊夫

## 例 言

1. 本報告書は東京大学臨時遺跡調査委員会の下に設けられた東京大学遺跡調査室が1984年10月から1987年3月まで医学部附属病院地点で実施した事前調査の報告である。中央診療棟地点、設備管理棟地点、給水設備棟地点、共同溝等建設地点が含まれる。調査面積は7700m<sup>2</sup>である。
2. 調査に関する事務は施設部と医学部附属病院事務部が担当した。直接担当した人々からは暖かい協力が得られた。
3. 本地点から「古九谷」様式の磁器が出土している。その化学的な研究を名古屋大学名誉教授山崎一雄先生にお願いしたところ、数多くの研究者による種々の方法の分析を実施していただき、その玉稿を頂戴することができた。
4. 九州陶磁文化館の大橋康二氏には陶磁器全般にわたる御教示をいただいた。調査室にも数度足をお運びいただいたし、現地調査の折にもお世話になった。
5. 東京国立博物館の矢部良明氏、金沢大学の佐々木達夫氏にも陶磁器について御教示を賜っている。漆資料は歴史民俗博物館の永嶋正春氏に分析していただき、原稿を書いていただいた。
6. 史料編纂所の宮崎勝美氏には、池出土の木札を読んで、原稿も書いていただいた。また多くの文献史料の御教示をいただき、文献の探索をお願いした。
7. 大林組東京大学医学部附属病院中央診療棟等建設事務所長 塩釜寅男氏には発掘調査中、種々の面でご配慮頂いた。
8. 下記の方々をはじめとして多くの方々の御教示を頂きこの報告書はできている。  
安藤博康（東京大学農学部） 稲垣正宏（滋賀県埋蔵文化財センター） 内田祐治（清瀬市郷土博物館） 奥村晃司（東京大学理学部） 小林謙一（慶応義塾大学藤沢校地埋蔵文化財調査室） 阪口宏司（東京大学農学部） 鳴崎 丞（石川県立美術館） 島崎とみ子（女子栄養大学） 高嶋幸男（北海道教育大学） 仲野泰裕（愛知県陶磁資料館） 吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）  
2.~8.の方々および様々な形でこの調査に関係された多くの人々に心から感謝の意を表する。
9. 遺構に関する執筆は原則として調査を担当した者による。第IV章第一節および第V章を除きそれぞれの項の末尾に執筆者の名前を入れている。第IV章第一節の記述の分担は396頁にある通りであり、ここでは執筆者の名前を個別に記載していない。
10. グリッドの南北は真北より1°50'30"東に振れている。遺構の図の方位は真北、図の整理は萩尾・藤本があたり、浄書は萩尾による。図に縮尺の明示がない場合、遺物の図は1/4である。陶磁器の実測・浄書は成瀬・堀内と中村和子・淵上淳子による。中村・淵上の描画力・作図力があって、はじめてこの報告書の図は完成したとも言える。カワラケ・焙烙・灯火具は佐々木が、土器・玩具類・瓦・金属製品・石製品などは小川が実測・浄書を担当した。玩具類・金属製品の実測・浄書は佐藤康子によるものが多い。
11. 写真撮影・現像・引伸は藤本による。
12. 本書の編集は藤本が担当した。

### \* 調査参加者

安保和子 江国典枝 小川 望 佐々木彰 佐藤康子 鈴木竹美 鈴木マサ 鈴木美保  
関沢菜穂子 中村和子 中村仁美 成瀬晃司 新美倫子 萩尾昌枝 藤本 強 淵上淳子  
堀内秀樹 松下理恵 宮田安志 村上伸之

## 目 次

序 文 .....	東京大学埋蔵文化財運営委員会委員長 東京大学総長特別補佐	伊理 正夫	i
序 文 .....	東京大学医学部附属病院 病 院 長	中條 俊夫	iii
第 I 章 調査の経過と概要 .....		藤本 強	1
第 II 章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物		小川 望 佐々木彰 成瀬晃司 藤本 強 堀内秀樹	
第一節 先土器時代の遺物 .....			21
第二節 縄文時代・弥生時代・古墳時代初頭の遺物 .....			23
第三節 古墳時代の遺構と遺物 .....			25
第四節 平安時代の遺構と遺物 .....			36
第 III 章 江戸時代の遺構		小川 望 佐々木彰 成瀬晃司 萩尾昌枝 藤本 強 堀内秀樹 松下理恵 宮田安志	
第一節 中央診療棟建設地点の概要 .....			41
第二節 中央診療棟建設地点の遺構 .....			55
第三節 設備管理棟建設地点の遺構 .....			278
第四節 給水設備棟建設地点の遺構 .....			347
第五節 共同溝建設地点の遺構 .....			363
第 IV 章 江戸時代の遺物		小川 望 佐々木彰 成瀬晃司 西田泰民 萩尾昌枝 藤本 強 堀内秀樹 松下理恵 宮崎勝美	

第一節	陶磁器・土器	392
第二節	各地点出土玩具類	743
第三節	各地点出土瓦	757
第四節	各地点出土金属製品	771
第五節	各地点出土ガラス製品	785
第六節	各地点出土石製品	790
第七節	各地点出土骨・角・貝製品	798
第八節	池出土の木製品	801
<b>第V章 考察</b>		
第一節	江戸時代の基準尺度について	藤本 強 811
第二節	消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析	成瀬晃司・堀内秀樹 821
第三節	医学部附属病院地点出土の徳利について	松下理恵 861
第四節	江戸時代のカワラケの動態と推移	佐々木彰 871
第五節	刻印からみた焼塩壺の系統性について	小川 望 892
第六節	江戸時代の儀礼的な宴会の食器について	萩尾昌枝 908
第七節	医学部附属病院地点出土の動物遺存体	新美倫子 912
第八節	土坑内出土漆関係資料	永嶋正春 923
第九節	化学的研究	内田哲男 大橋康二 小山陸夫 924 杉崎隆一 高田實弥 東村武信 望月明彦 山崎一雄 藁科哲男
参考文献		945
あとがき—まとめにかえて—		藤本 強 949



# 第 I 章 調査の経過と概要

## 第一節 調査の経過

1984年 6月28日のことであった。当時、遺跡調査室の助手をしていた谷豊信君（現東京国立博物館）が附属病院の工事現場でかなりの量の江戸時代の遺物が出土しているといってきた。1983年の11月から開始されていた山上会館・御殿下記念館の事前調査、1984年 4月から始まった法学部4号館・文学部3号館の調査で調査室は手一杯の状態にあった。前者が面積合計7500m<sup>2</sup>、後者が2500m<sup>2</sup>ある。スタートしたばかりの調査室の手には容易ではない面積である。そのうえに既に工事にかかっているところからの遺物の出土、正に暗澹たる気持でこの話を聞いた。早速工事現場に行ってみる。西南の部分では明治時代に建った地下室のある建物の解体が済み、地表下5mほどまで掘られている。その北の道路のあった部分で、断面に多くの遺物を含んだ土坑が顔を出している。道路の幅は15mほどで、その北では建物の基礎を取る工事が進められていた。ここにも黄褐色の盛土かと考えられるものが断面に現われている。基礎はかなり深く入っている様子である。少なくとも道路であった部分は調査が必要な様子をしている。断面を観察すると地表下1mほどは煉瓦やコンクリートの破片を含む近代以降に新しく盛られた土のようであるので、道路部分の西より、遺構かと思われるものが出ているところを中心にして、平面的に表土を剥いでみることにした。7月の第1週に手掘りでこの作業をした結果、ほぼ全面的に道路の下には江戸時代の遺物を多量に含む遺構があることが明らかになった。また、北よりの部分も近代の建物の基礎の間にかかなりの遺構が盛土とともに残っていることが確認できた。

これは予想外のことであった。医学部附属病院の全面的な改築の工事にかかったばかりのところであり、その予定地のほとんどはかつて建物のあったところであり、事前に東京都の文化財の担当者との打ち合わせでも埋蔵文化財の問題はほとんどないであろうとのことで事務的な詰めがあったようであり、工事にかかった矢先の遺構・遺物の出土である。とりあえず、工事は中止し善後策を協議することになったが、工事の強行を主張する声も強かったようであり、かなりの紆余曲折があった結果、調査室の手で調査することになった。とはいっても調査室は山上会館・御殿下記念館、法・文学部の新館の建設予定地の調査で手一杯のところであり、調査を始めようにも人は全く手配できない状況にあった。定員内職員の増員の要望が通り、やや長期にわたる調査体制が組めそうな形にはなってきたが、当座新たな人の確保は困難であるので、法・文学部の調査現場から人を割き10月から調査をすることになった。法・文学部の調査を可及的速やかに終らせ、その主要なメンバーを病院に投入するようにする。それまでは少ない人数で調査するという方針をたてた。当初ここで予定された調査範囲は道路の下が800m<sup>2</sup>、その北の基礎の間が400m<sup>2</sup> 合計1200m<sup>2</sup>ほどであった。その

## 第一節 調査の経過

他の部分は建物の基礎で完全に破壊されているであろうという予想であった。これは病院ののる台地が東に水平に伸びていて、人為的な改変を受けていないと考えていたからであった。調査にかかるときはこのように大規模な調査になるとは全く予想していなかった。面積も1200m<sup>2</sup>、道路の下にも排水管、共同溝などの近代以降の構築物が数多くあり、大規模な破壊がされていることが予測されたので、比較的簡単に調査できるであろうと考えていた。

かくて1984年10月1日に調査を開始することになるのであるが、当初は筆者一人で作業員とともに調査せざるをえない体制であった。さらに当時、筆者の勤務地は北海道にある文学部付属北海文化研究常呂実習施設であったため、筆者が勤務地に帰るときには助手になった小川望が担当することにした。12月からは大学院学生の松下理恵が加わる。細々とした体制である。

当初の予想は調査を開始してからすぐに覆されることになる。中央診療棟の建設地点にあわせて作成したグリッドのGラインにほぼ沿って、大学構内の基幹の排水管が通っており、これを表土の剥取りにあわせて撤去していた。マンホールのところではこれは地表下5m以下にも達しており、層位確認の絶好の指標になるので、重機で抜き取っていた。東にいくにしたがって緩やかな傾斜で低くなっていたロームの上面は26ラインにかかるあたりでガクンと低くなる。地表下6mでようやくロームが現われ、その東はさらに深くなっていることが明らかになった。10月5日のことである。土層の断面をきれいにしてみると、一番下のロームはやや水のついたものであり、この上に厚い自然堆積と考えられる黒色の土があり、その上は暗褐色土になっている。この上は明らかに江戸時代の盛土であり、その厚さは2.5mの厚さがあり、少なくとも三回は整地されている様子がみとれた。容易ならざる調査になりそうなことが調査開始直後にはっきりした。深さも深さであるが、この深さになるとたとえ基礎のあったところでも遺構が残っており、ほぼ建設地域の全面を調査せざるをえないことになる。5200m<sup>2</sup>の建設に関係する部分全面で調査する可能性が強くなってきた。既に建設作業には着手している。工期は厳重に決められていることでもあるし、調査打ち切りの声も強くなる。どうするかについて種々の意見が入り乱れた。結局、建設作業を二期に分け、比較的浅い西の部分から調査していくことにし、調査を継続することにはなったが、一時は調査を打ち切り、直ちに建設作業再開も声高に学内に唱えられていた。こうしたなかにあって、終始暖かい眼で見守っていただいた平野龍一元総長には心から感謝している。

その後、この中央診療棟を動かすために必要な設備管理棟・給水設備棟の建設も決まり、さらにこれらを結ぶ共同溝の建設も決定された。共同溝は文化財保存の見地から費用はかかるが、最低必要な竖坑を掘り、そこから地下深くを推進工法によって建設することが認められ、調査面積は大幅に減少した。しかし、調査しなければならない面積は大きい。

明治時代に作られた建物の地下室で完全に破壊されていた部分に排土することによって、効率よく調査することにし、西側から調査を始めたが、遺構は密集している。大型の土坑に遺物が大量に入っているものが多数あることが明らかになってきた。また石組の溝もかなりあることもわかってきた。さらに大型の地下式土坑も数多くある。人間の数は少ない。土管の抜き取り溝を使いつつかなり効率のよい調査を続けた。2月になり、法・文学部の調査が終了し、成瀬晃司・堀内秀樹の参加、排土の片付けのためのミニユンボ、キャリアーの導入などにより調査は順調に進んだが、遺構



## 第I章 調査の経過と概要

は深く、大型であり遺物は多いものが多数ということで、調査は難航した。3~4月にかけ、重機を入れ、調査未着手の部分の建物基礎の抜き取り、排土をおこなった。案の定、基礎の下に数多くの遺構が全面的に残っており、東側はかなり深くなっていることがはっきりした。4月からは佐々木彰、萩尾昌枝、宮田安志が新たに参加し、作業は進展した。筆者は1985年4月からは東京勤務になり、調査事務所から文学部の授業にでかけ、終るとまた着替えて調査するという毎日を送ることになった。5月には文学部の建設地点で、上に藤棚があり、工事の進行にあわせて調査することになっていた文学部東側の調査をすることになり、二週間ほど筆者がこれに従事した。雨が平年より多い年で、調査の進行は妨げられたが、なんとか7月からは工事が再開できるメドがついてきたが6月28~30日の雨で遺跡は完全に水没し、深いところは1.5m以上の水深がある状況になった。水中ポンプで水を汲み上げ、残っていた遺構を調査し7月3日には工事が再開された。

7月には共同溝の調査を竪坑の部分だけではあるが開始した。これは二週間余で終了している。ここは複雑に絡み合った遺構の多い地点と遺構がほとんどない地点とがあった。設備管理棟の予備的な工事も長い間種々の摩擦があった病院当局と精神科の医局との間で話あいが成立し、平穩裡に開始される。中央診療棟地点では西よりの部分にわずかに残っていたロームの調査、古墳時代の住居址である1号住居址の調査も終え、全員が26ライン以東の後半の調査区に入ったのは7月29日であった。

26ライン以東では、多くの石組の溝が出現し、この実測に多くの時間を割くことになる。北よりのところである。南側は破壊が深いところまで及んでいるところが多く、また遺構の数も比較的少なく調査は順調に進んだ。遺構の残りの良いところでは厚い盛土があり、この排除にかなりの時間がかかった。また後に12号組石と呼ぶ南北に走る溝までの間に広い砂利敷きが上下二枚あることもわかってきた。この上には19世紀の遺物を多数含むゴミ穴がかなりの数存在している。地下式土坑はほとんどないが、遺物を多量にもつ大型の土坑の数はかなり多い。盛土の面が多いので一枚一枚剥がしていかざるをえない。時々排土のための大型の重機を利用しつつ作業を進めた。北東の隅には古墳時代の2号住居址も出現し、共伴する土器もかなりの数発見された。

10月7日には給水設備棟地点の調査も開始する。ここは病院の南の隅にあたっているため、設備管理棟の予備的な工事の合間をみて、調査することになっていた。排土を搬出できるのはわずかに3日間、そのあとは狭い周辺に積み上げ調査せざるをえないという悪条件であった。表土は重機で剥がし搬出したが、70m<sup>2</sup>ほどは精神科病棟の家庭菜園があり、この収穫祭が済むまでは手がつけられない。70m<sup>3</sup>ほどの土を人力で排土しそれを周辺に積みあげなければならないというきわめて悪い条件がさらに重なった。やむをえず370m<sup>2</sup>ほどの調査区を二つに分け、東側の部分を調査し、その排土を周辺に積みあげる。その後調査を終了した部分に排土するという方式を取ることにした。調査にかかると表土の下に遺構のないところでは、全面的にロームが出現した。純粋なロームではあるが、ひび割れが多く柔らかい。その後、遺構の調査をして、これが盛土であることがはっきりした。調査区の北東では、この盛土が全く見えないほど遺構が密集している。しかも遺物は多量である。いくつの遺構が重なりあっているのか見当すらつかないという状況であった。層位を確かめつつ、新しいものから順々に掘り進める。盛土の下は自然堆積になり、ここには遺構がないことが明

## 第一節 調査の経過

らかになってはきたが、北側は深い。沢が入っていることが確実にようになってきた。沢のなかと他の部分では堆積に差がある。これについては基本層序で触れる。中央診療棟地点の状況をみながら、給水設備棟の調査を続ける毎日であった。遺物の多い遺構が多いこと、排土する場所を常に考えながら調査をしなければならないこと、筆者一人しか人員が割けないこと、しかも筆者も常にこの地点の調査にかかりきるわけにはいかないことなどの悪条件が重なり、調査は意外に長引き、11月半ばまでかかった。全面的に剥いだのはロームの上面もしくは後に述べる、ロームを多量に含む二次堆積土の上面までで、後は部分的に掘って遺構・遺物のないことを確かめている。ゴミ穴を中心にして、19世紀の多量の遺物を含む遺構があっただけで他の時期の遺構は全くない。

一方中央診療棟地点は12月下旬に東側部分でも工事を開始したいという強い要請があり、効率的な人員配置をして、なんとか要請にあわせるような状況を作り出していたが、10月の半ばに衝撃的なことが起きた。この段階では広い範囲にわたり鍵層になる下の砂利面を出していた。標高12.2~12.4m、地表からは4m下である。一部分この砂利面を抜いて、破壊が深くまで及んでいる部分がありその下の堆積を調べるために深く掘ったところへドロ状の土のなかに多量の木製品・「かわらけ」が入っているのが発見された。当時調査していた面より3m下である。場所も沢のなか、当時は沢のなかの堆積も十分に把握できていなかった。沢、へドロ状の堆積、木製品という時間のかかる調査対象を最悪の場合、幅20mの沢の調査区にかかっている部分およそ1000m<sup>2</sup>の調査を地表下7mのところですということになる。しかもこれに割ける人員は全くない。調査を進めると凹凸の激しい人為的な遺構であるらしいことが次第に明らかになってきた。いくつかの遺構が切りあっているようであるが、埋土の状況は一つであることを示している。結局、四周が現われ、池であることがわかるのであるが、面積は80m<sup>2</sup>、深さ平均2m、凹凸の激しい底から30cmに「かわらけ」・木製品が折り重なっているという遺構であることが明らかになった。この調査に割ける人員は全くなく、施設部と協議した結果、施設部と病院から人を出してもらい、筆者が発掘を進めるということにした。12月2日から3週間毎日4人ずつの人手を借り、木製品と「かわらけ」を主とする大量の遺物を採取した。2週間で池の調査を終えるメドがついたころ、まず遺構はないと考えていた自然堆積の上面で大型の遺構が発見された。当初は住居址同士の切りあいかと思われたが、結局平安時代の井戸であることが明らかになるのであるが、この底は標高7.3mで、地表下8.7mになる。筆者は10月半ば以降12月25日まで、日曜・祝日も毎日出て、完全に休みを取ったのは雨の降った11月24日と小川望の結婚式のあった12月15日の二日だけという状況であった。12月25日までとにかく工事にかかれるように22ライン以西、Gラインの北1m以北の他の部分の調査も終え、1985年の調査を終了した。

1月は残された中央診療棟地点の22ライン以東の部分の調査と設備管理棟と給水設備棟の間の共同溝の調査を実施した。中央診療棟地点は1・2号組石とその下に出現した木樋の調査に手間取ったがなんとか1月29日までに終了することができた。共同溝は破壊がひどく北側はほとんど調査できない状態であり、南側も比較的遺構が少なく、1週間で調査を終えることができた。1月20日には設備管理棟地点の表土を剥ぎ始める。かなり破壊されている。

2月になると設備管理棟地点の調査を開始する。ここも工事との兼ね合いがあり、西側と東側に

## 第 I 章 調査の経過と概要

分けて調査せざるをえなかった。まず給水設備棟の工事の支障にならない西側から調査をし、給水設備棟の工事が終了した後、東側の部分にかかることになった。破壊されている部分もあるが、複雑な切りあいをしているところがあり、その部分の調査にかなり時間がかかった。地下式土坑も大型ではないが多数あり、遺物の量も多い遺構がかなりあった。西側の調査のあと東側にもかかり江戸時代の遺構、平安時代の住居址である 4 号住居址、先縄文時代の遺物の調査を終了したのは 1986 年 5 月 23 日であった。1984 年 10 月 1 日に調査を開始し、1 年 8 月の長期の調査になった。このあと共同溝関係の調査が 1986 年 10・11 月、1987 年 2・3 月にあり、当座の医学部附属病院関係の調査は終了した。

(藤本 強)

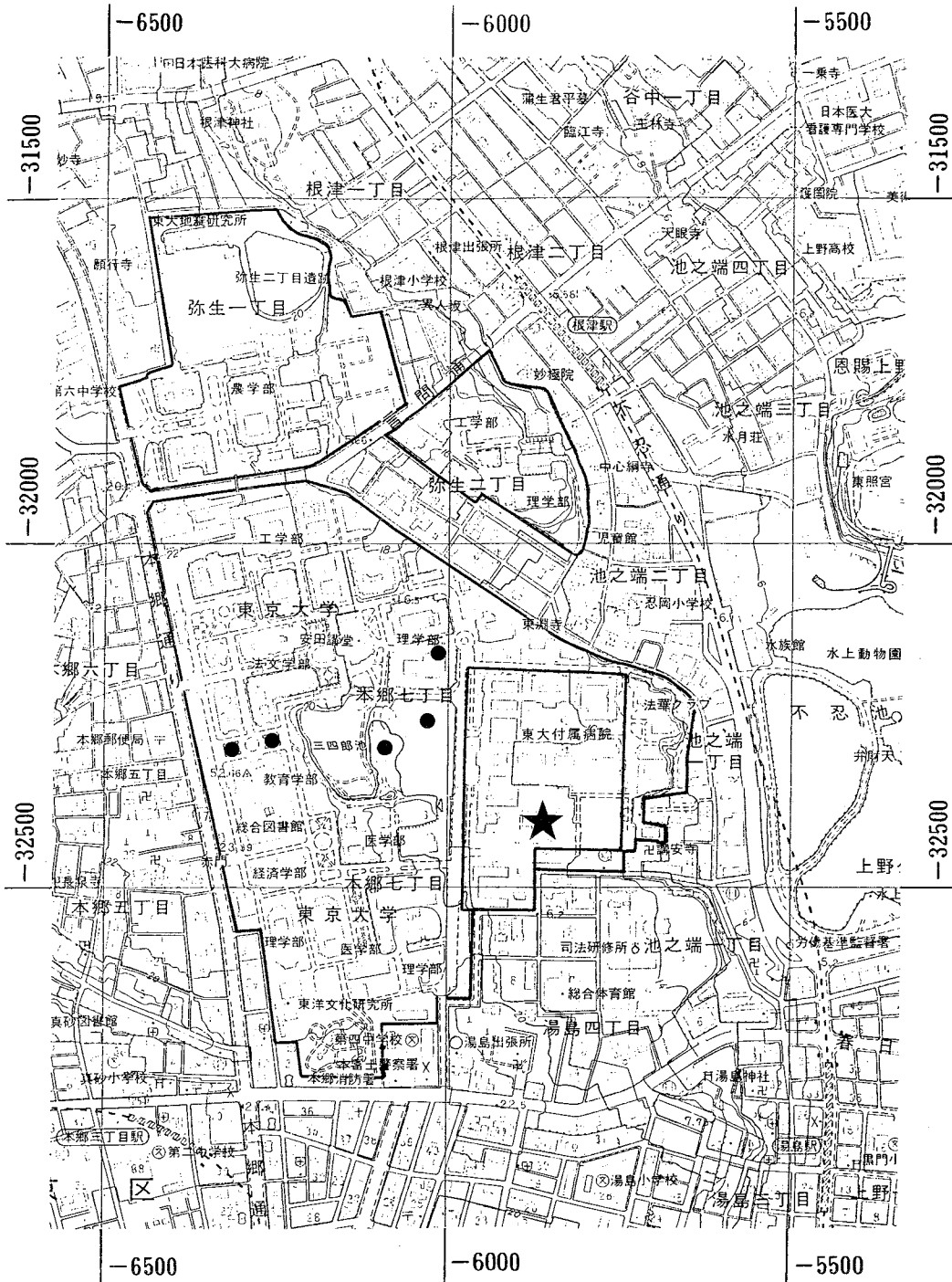
## 第二節 位置と環境

### 1 位置

この報告で報告する調査地点は東京大学本郷構内の東の部分にあたり、竜岡門から第二食堂に至るいわゆるバス通りの東側にある医学部附属病院地区の東南になる。東西およそ 150m、南北およそ 200m の範囲である (I-1・2 図)。本調査地点はいわゆる本郷台地の東の端にあたり、標高 16m ほどの台地が続いている。西はより高い標高 22~23m の台地に緩やかに連なっている。いわば低位の台地にある。東は現在では急崖になって沖積地になるが、これは後世の人為的なものであり、より緩やかに沖積地につながっていたものと考えられる。大規模な造成が江戸時代にも、明治時代以降もなされていたことを示している。本郷台地の東端にあるのが本地点である。今回の調査で、現在はその眼で見ないとその痕跡すら確認することの困難な、本郷三丁目と春木町の間あたりを源流にし、東北流し大学の構内に入り、今回調査の給水設備棟地点、設備管理棟地点を通り、中央診療棟地点に至り、そこで向きを変え東流し、不忍池方面に流れていた沢があったことが確認された。この沢は江戸時代の初頭には、既にかなり埋っており、常時水のあるものではなかったものと考えられるが、沢状の地形をしていたものと推測される。中央診療棟地点の南端では 23 もしくは 24 ラインあたりに中心があり、東端では H~J ラインあたりに中心があったものと考えられる。沢の底までは完全にさらっていないが、底で 10m 内外、上部で 20m ほどの幅をもっていた沢である。平安時代ごろにはかなり埋っており、それから江戸時代までの間にさらに埋ったものと考えられる。そのあと江戸時代にこの上に大規模な盛土がされ、さらに大学の用地になってから大規模な造成がなされ、現在見るような平坦な台地状の地形と沖積地につながる急な崖という地形が作られた。大学の南東の隅から上野方面に向かう無縁坂の傾斜は本来の傾斜に近いものであろう。

本郷台の東縁は縄文時代後・晩期、弥生時代の遺跡がかなり見られるところである (早乙女・渡辺 1979)。今回の調査でも若干の縄文時代・弥生時代の遺物を確認しているが、遺構は発見されなかった。設備管理棟地点ではごく少量ではあるが、先縄文時代の石器と石片を発見している。さらに中央診療棟地点では古墳時代の住居址である 1・2 号住居址、平安時代の井戸が、設備管理棟地点では平安時代の住居址である 4 号住居址が発見されているが、これらはいずれも先程述べた埋っ

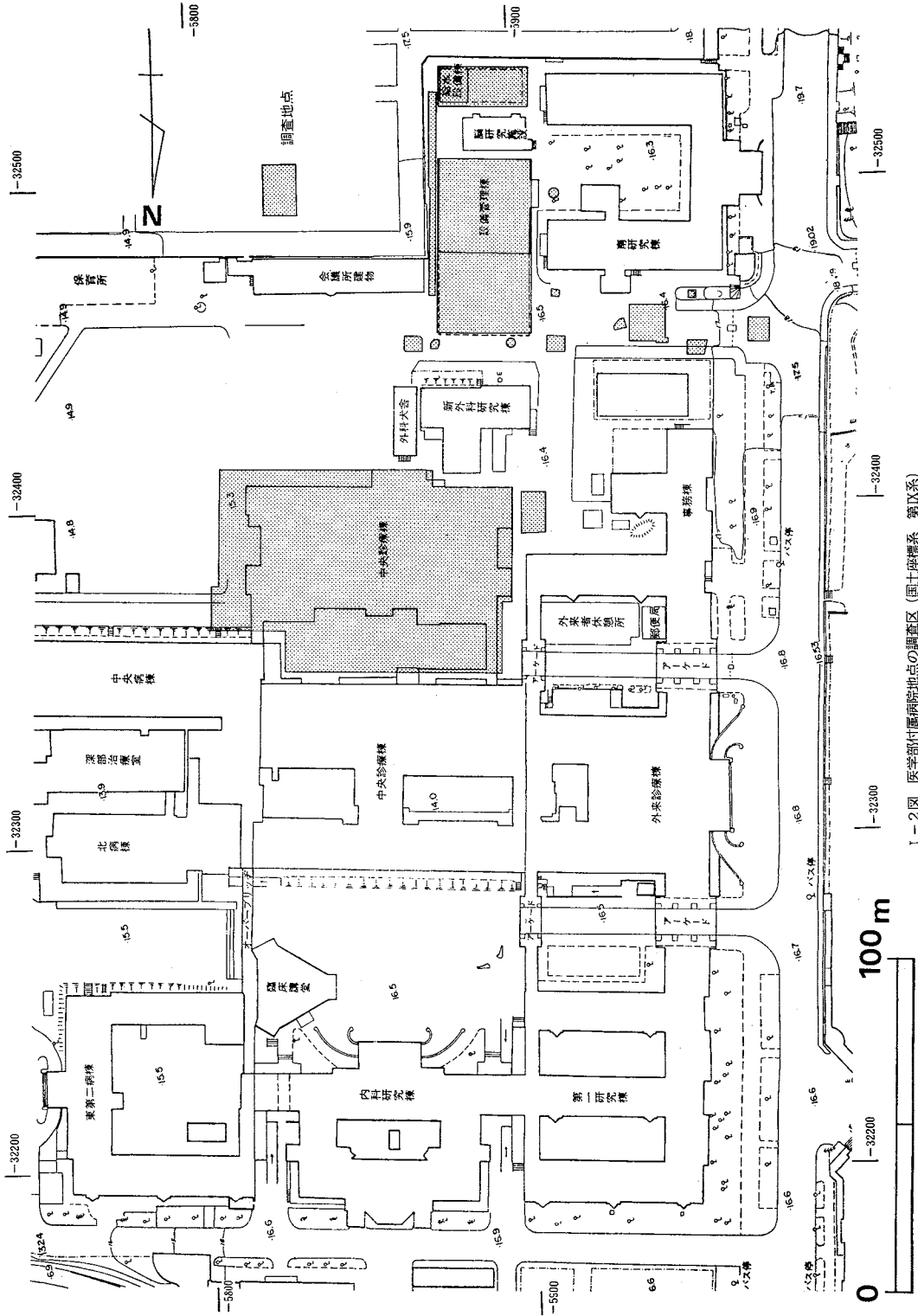
## 第二節 位置と環境



★ 医学部付属病院地区調査地点      ● 他の調査地点

1-1 図 医学部付属病院地点と他の調査地点 (国土地理院一万分の一地形図「上野・日本橋」より)

第I章 調査の経過と概要



1-2図 医学部付属病院地点の調査区(国土座標系 第IX系)

## 第二節 位置と環境

た沢の西側に集中している。台地が沢にむかって傾斜を変えるいわゆる傾斜変換線の付近でこれらの遺構、遺物は出土している。井戸も沢の西側である。これは沢のなかであるが、その西よりである。御殿下記念館建設地点でも平安時代の住居址が発見されている。これも埋った沢の周辺での発見である。沢のもつ意味をあらためて考える必要がある。

江戸時代の遺構と地形との関係はほとんどないといってもよい。ただ埋った沢の上部には初期の井戸が集中する傾向は見てとれよう。江戸時代の池も沢との関係でとらえる必要がある。時期的な屋敷の変遷を考えると、西から東にむかって、つまり高いほうから低いほうにむかって居住区が拡大する傾向はあるが、これは地形との関係だけで考えるのは無理であろう。このような地形との関わり方という観点においても、都市であった江戸とそれ以前のあり方とは全く違うといつてもよいほど異質である。江戸時代には生活に都合の悪い地形は人工的に改変してしまうということがみられるようになる。ここで見られるのはより広い平坦な土地を求めての盛土である。

## 2 江戸時代の調査地点

本調査地点は江戸時代には北側の大部分がまず加賀藩の下屋敷の一部になるが、寛永十六年(1639)に富山藩・大聖寺藩の成立以後は大聖寺藩の上屋敷、富山藩の上屋敷、證人屋敷として利用される。共同溝建設地点の西側の部分は富山・大聖寺藩成立以降も加賀藩の上屋敷として使われる。南側の設備管理棟地点・給水設備棟地点には越後高田の榊原家の屋敷がかかっている。

中央診療棟地点は天和三年(1683)に大規模な屋敷地の改変があるが、それ以降は北側のごく一部に富山藩の上屋敷がかかるが、そのほかは大聖寺藩の上屋敷である。設備管理棟地点は時期によって多少異なるが、AAラインの南1.5m以北が大聖寺藩の上屋敷であった。この南に時期によって幅の変わる無縁坂につながる道があり、その南に(ACライン以南)榊原家の屋敷があった。大聖寺藩の上屋敷の西端は絵図に若干の差があり、確実に押えることができていないが、43ラインの東1m~2mであったものと推測している。これらの比定については第三章の概要とそれぞれの遺構の部分で述べることにする。要するに今回の調査地点のほとんどの部分は大聖寺藩の上屋敷である。

## 3 基本的層序

関東地方南部に通見られる層序であるが、台地上と沢のなかでは大きく異なる。いくつかの興味深い事実が確認できている(1-3・4・5図)。沢筋は違うが、御殿下記念館建設地点と共通するところがある。それは沢のなかでのことである。

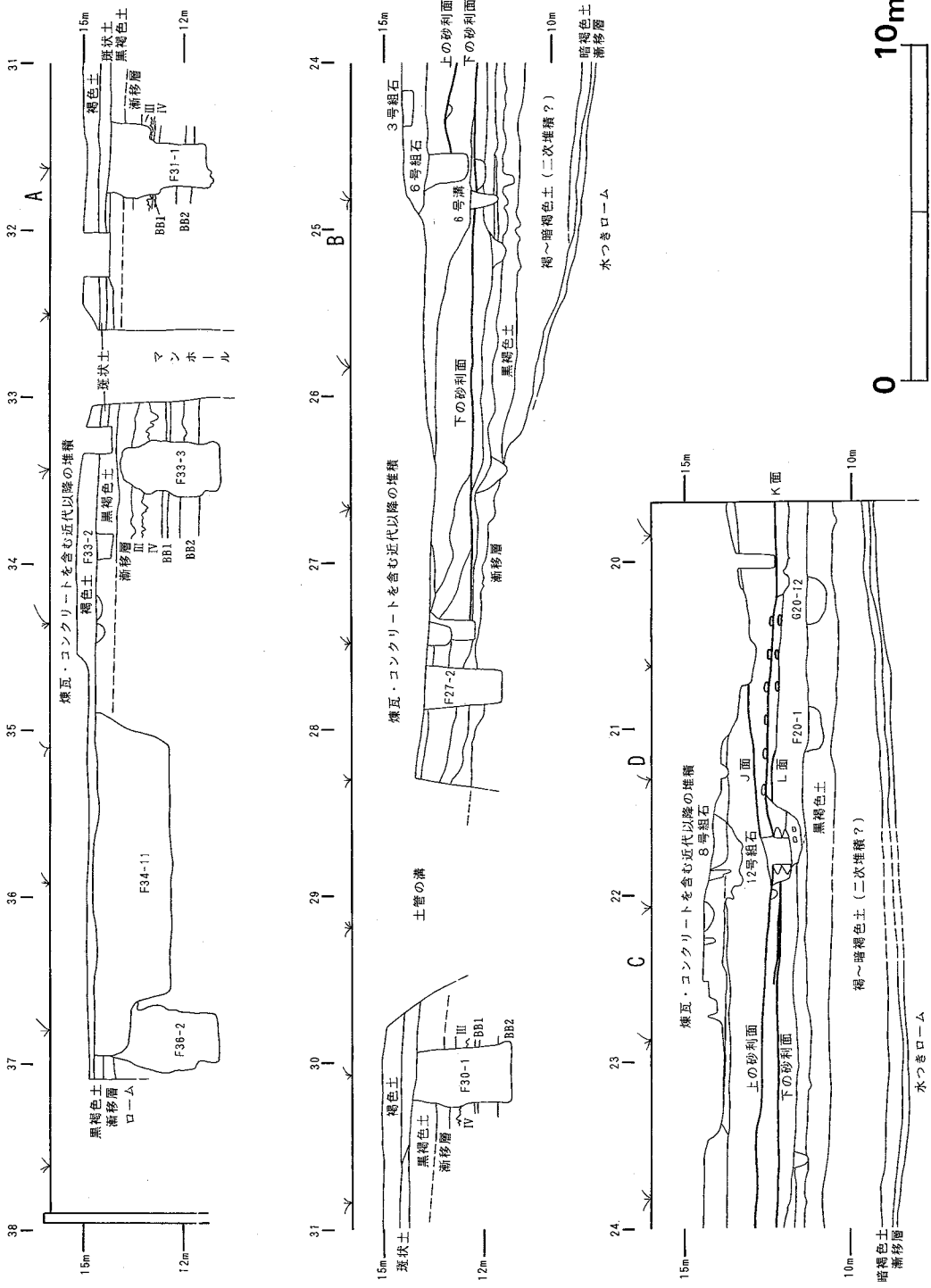
最上部は明治時代以降東京大学医学部附属病院の用地として種々の形で利用されてきたものに関わる土と煉瓦・コンクリートなどからなる表土が薄いところで1m、厚いところでは5mにも達する。これらは建物のなかったところでも深い部分があり、排水用の土管、電気・ガス・上水道・電話の配管、共同溝、暖房配管用の煉瓦製の暗渠、貯水槽などなどにより大きく破壊されている部分がある。建物のなかったところでも地下には多くの構造物が埋設されており、江戸時代以前の遺構を破壊している。その下は直接江戸時代の盛土になっている部分がほとんどであるが、直接ロームになるところもかなりの部分ある。江戸時代の盛土は東に厚く、西に薄い。沢もしくは低いところを埋

## 第I章 調査の経過と概要

め、屋敷のなかを少しでも平坦にし、利用できる面積を増やそうという意図のもとになされたことであろう。盛土は屋敷ごとに若干の差がある。富山藩では調査した範囲では、ロームのみからなる盛土であり、全面的に均一な盛土であった。大聖寺藩は調査した範囲が広いこともあってか、また時期を分けて盛土をしたこともあってか、各種の土が使われており、均一なものではない。越後高田の榊原家ではやはり調査した範囲ではという限定つきではあるが、純粋なロームといってもよい均一なロームのみからなる盛土であった。ここの盛土は調査した範囲が周辺よりやや低いこともあってかかなり厚い。

この下には沢状の地形の部分にしかないが、焼土をほんのわずかに含む暗褐色土がある。20~50cmの厚さがある。沢の中心部分で厚く周辺で薄い。台地の上には全く見られない。当初は人工的なものかと思ったが、給水設備棟地点のほぼ全面、設備管理棟・中央診療棟地点の沢の部分に部分的に見られるもので、少なくとも二つの屋敷にまたがり広い範囲にあるので、人工的なものとは考えにくい。この下にはやはり沢の部分にしかない黒~黒褐色土がある。沢の中心では厚さ1mをこえるところもある。この土の上部10cmまでの間に少量ではあるが、スコリアが入っている。この層は中央診療棟地点の平安時代と考えられる井戸の埋土、1・2号住居址の埋土の最上層にもあり、井戸と住居址を完全に覆っている。1・2号住居址ではもちろんのこと井戸でも水溜、井戸側の部分では埋土の堆積がややあってからの層であるが、井戸を取り巻く竪穴状の付属施設では底のすぐ上にこれが見られる。褐色・赤色のものもあるが、黒色を主にするスコリアで、粒径は1mm前後のものが多い。東京大学大学院理学研究科地理学教室（当時、現地質調査所）の奥村晃史氏によると、一次もしくはそれに近い状態で堆積したスコリアと考えられるということである。外形も噴出・降下時の原形をよく留めており、ほとんど摩耗はないとのことである。平安時代のスコリアであるとする富士の新时期テフラを考慮する必要がある。多摩地区を初めとして、神奈川県などでもいくつかの遺跡で確認されている富士の新时期テフラがある。管見によれば、多摩ニュータウンのII<sub>B</sub>層（阿部1983:18・上条 1984:9）、八王子市館町遺跡のII<sub>A</sub>層（田中 1985:15）、神奈川県大和市周辺の遺跡におけるIII層（中村 1983:7）など 800（延暦19）年、864（貞観6）年の富士の噴火に関するものと考えられている火山灰と同一のものである可能性が高い。粒径はこれらの地域よりはかなり小さく量も少ないが、都心部にもこの時の火山灰が降下していた可能性を示すものである。この下には暗褐色土が堆積する。この暗褐色土は沢の中心では厚く、漸移しつつロームの二次堆積ではないかと思われる褐色土になる。黒~黒褐色土および暗褐色土は沢の縁辺部ではあまりはっきりせず、褐色土のみ見られる部分が多い。この褐色土は台地の縁辺部ではかなりはっきりと確認することができるので、斑状に茶褐色の強い部分と暗褐色の強い部分がある。中央診療棟地点では古墳時代後期の1・2号住居址は明らかにこの褐色土を切って作られており、古墳時代以前であることは確実である。縁辺部ではこの褐色土はロームと黒褐色土のいわゆる漸移層の上に堆積していることは明らかである。沢筋は違いが御殿下記念館建設地点でも沢にのみ堆積している類似の土がある。広い範囲に類似の堆積が見られるので、同一時期の同一成因のものとするのが妥当であろう。ここではこの褐色土の上面に縄文時代後期の堀之内式土器がかなりまとまる形で出土している。多摩ニュータウンのII<sub>γ</sub>層（阿部 1983:18・上条 1984:9）に相当するものである可能性もあるが、はっきりした形で

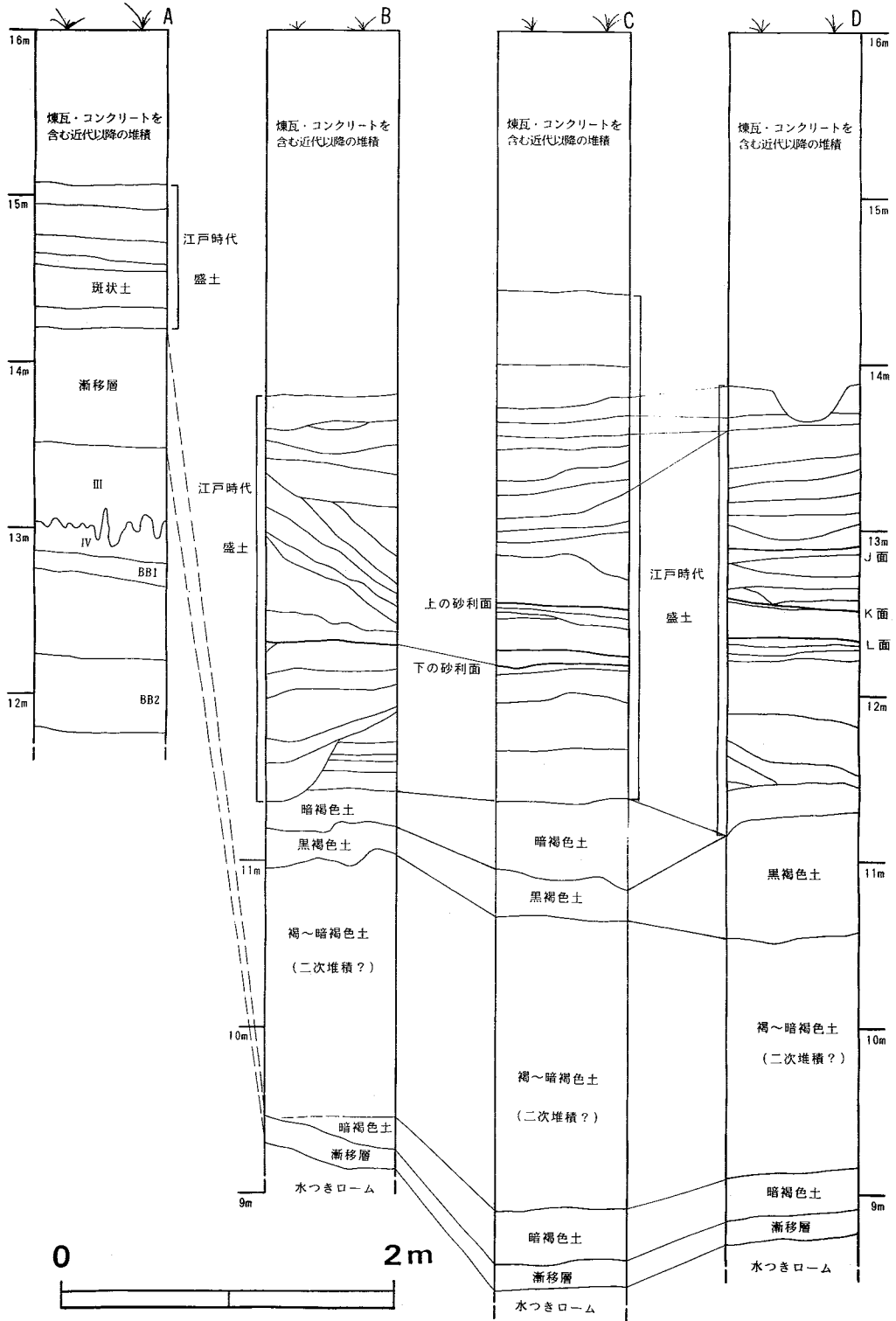
第二節 位置と環境



I-3図 グライン北1m土層図(A・B・C・DはI-4図と対応)

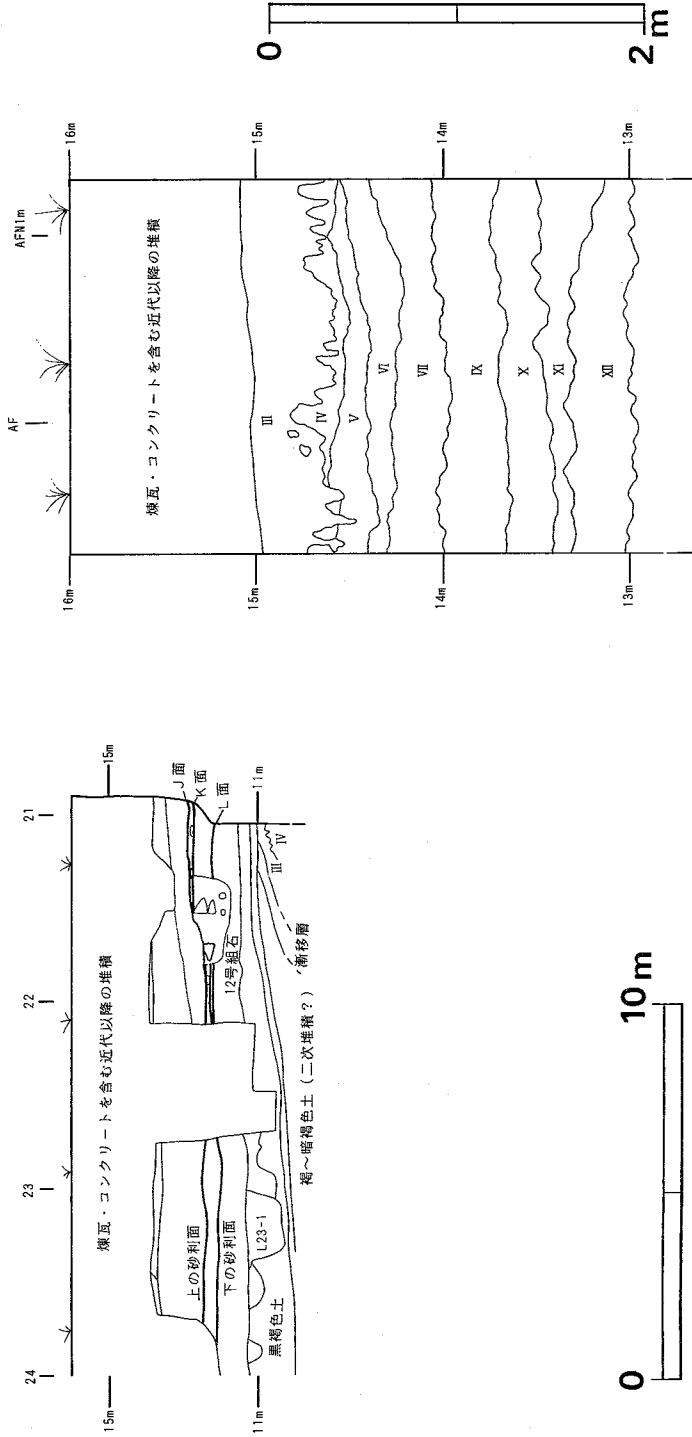
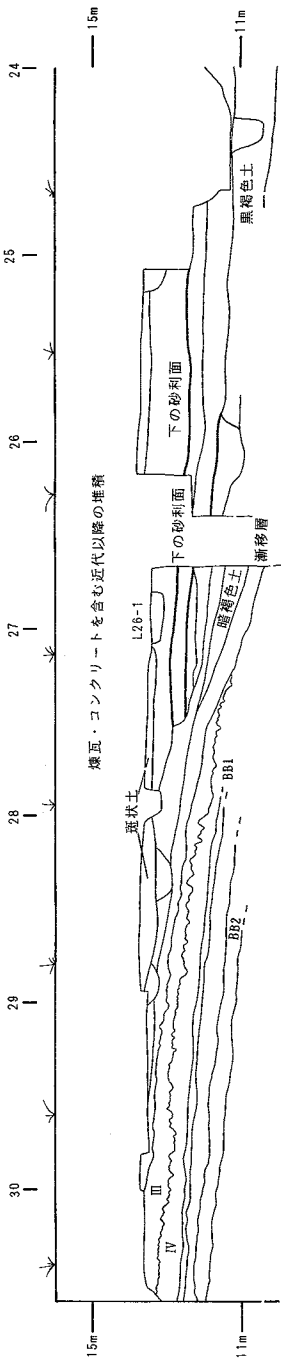


第 I 章 調査の経過と概要



I-4図 Gライン北1m土層図(A・B・C・DはI-3図と対応)

第二節 位置と環境



I-5図 Mライン北2m土層図、38ライン西2mローム土層図

## 第 I 章 調査の経過と概要

はスコリアが見られないことから断言はできない。

沢の中心部ではこの下に粘性の強い有機質を多量に含む黒色土があり、その下は漸移しながら粘土化したロームに達する。このロームは台地上でロームと本郷砂層の境界である標高 10m 以下にもみられ、水によって運ばれたものである可能性が強い。粘性の強いものである。

台地上では、南関東の台地の上の通常の堆積を示す。黒土もしくは黒褐色土があり、いわゆる漸移層、関東ロームのⅢ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ層----と続き、ロームの最下部50cmはいわゆる水つきロームとなり、標高 10m 前後で本郷砂層に達する。より高位の標高 20m 代の台地では明確に見られる東京パーミスはこの調査地点では確認できていない。そもそも存在していなかった可能性もある。この地点のロームに共通していえることであるが、全体的に黒色の物質を多く含み、クラックが入りやすいという特徴をもっている。異物がかなり多いという印象を受ける。高位の台地上のロームとはかなり違った印象である。地下式土坑の天井、壁も落ちやすい。それぞれの層が水性である可能性も捨て切れない。いわゆるブラックバンドの色も淡く、AT 層もガラス質が含まれる範囲が広い。Ⅲ層とⅣ層の間のクラックは沢にむかって下がる傾向がある。それ以下の層にはこうした傾向は認められない。本郷砂層は東にむかって緩やかに下がっている。こうした基本的な層序のなかにこの地点の遺構は構築されている。

### 4 国土座標系

本地点を含め、本郷構内の遺跡の中心は、都市である「江戸」を構成するものであるので、とりわけ国土座標系のなかに位置付けておく必要があると考えていたので、1983年から開始した山上会館地点・御殿下記念館地点の調査にかかる前、国土座標系に位置付けるべく種々の資料を集めた。幸い本郷構内の図書館の屋上には三等三角点「大学」があり、一つの点は確実に確保できる。他の一点を求め、周辺の三角点のあるところに向き探し、また地理調査所にもでかけたが、その位置を確認することのできたものはなかった。なくなってしまっているものがほとんどであることを地理調査所でも確かめた。次善の策として、大学の構内にも設けられている文京区による多角点測量の成果と三角点「大学」を使用し、それぞれの調査地点を国土座標系に位置付けることにした。大学の構内には文京区による多角点が 2 点ある。P26 とされる医学部附属病院北病棟屋上にあるものと P13 とされる工学部 8 号館屋上にあるものである。またこれらの地上点として P26-1 と 2 が附属病院構内に、P13-1 と 2 が言問通りにある。このうち P26-2 は既に「たんぼぼ保育園」の工事の時かと思われるが、調査開始時にはなくなっており、P13-1・2 と P13 も十分な見通しが得られなかった。結局 P26 と P26-1 を利用し、三等三角点「大学」につなぐのがもっとも効率的なものと考えられた。山上会館地点、御殿下記念館地点、法学部 4 号館・文学部 3 号館地点、理学部 7 号館地点はすべてこの方式で閉塞トラヴァースを組んでいる。農学部構内のものは三等三角点「大学」と文京区多角点地上点 P13-2 を閉塞トラヴァースでつないだものである。

本地点はこの調査に関連した工事により、P26-1 がなくなることが予測されたため補助点をあらかじめ作ることにし、P26-1a を「たんぼぼ保育園」の建物の西北の隅近くに設けて P26・P26-1・P26-1a の測量をし、P26-1・P26-1a を通る回帰トラヴァースを実施したものである。この時、P26-1

## 第二節 位置と環境

b という補助点もバス通りに病院構内の道路から出たところの北側の角に設置したが、その後の舗装工事で現在は位置不明になっている。P26-1 も現在は無い。

使用機材は日本光学製の10"読みのセオドライトと光波距離計および東京光学製の光波距離計付きの10"読みのセオドライトである。補助点の設置には5倍角法を用い、温度・気圧補正も正確に行ない、20万分の1前後の精度を出している。X・Y方向とも1mm前後の誤差である。閉塞・回帰トラヴァースの場合には2万分の1以上の精度が出ることを目標にし、すべてのトラヴァースにおいてそれを達成している。文京区の多角点も三角点「大学」も建物の屋上に設置してあるため高度差があり、スティール・テープで距離を測るのはかなり困難であったであろう。光波距離計があつてはじめて出来た精度である。さらに補正をし、X・Y方向とも1cm以内の誤差になっている。

## 5 調査の方法

本地点の調査にかかる前に調査にかかっていた山上会館地点、御殿下記念館地点、法学部4号館地点・文学部3号館地点ではいずれも建設される建物の方向にあわせた5mグリッドを組み調査していた。この地点でもこの方式に則り、グリッドを建物の方位とあわせ5m方眼で組み調査した。グリッドの方位は真北より1°50'30"東に振れている。将来の調査も考えられるので、東西方向に数字を、南北方向にアルファベットを符号として付け、それぞれの方眼の東北の隅の名称を区の名前とすることにした。遺構は遺構の東北の隅がある区の名前で名付けることにした。大型の遺構の場合、主として位置している区と遺構の名称が一致しないものも出てきている。また特に大型の地下式土坑の場合に起ったことであるが、当初複数と考え、別の名称を付けていたものが一つになったことがかなり生じた。この場合には妥当なものをその遺構の名称として採用し、他は欠番としている。欠番になっているものは他の理由でも生じているがかなりある。

確認されたそれぞれの面でもまず平面的に遺構の存在を確認し、遺構が出た場合にはなるべくグリッドと平行した方位で土層図を作るが、その遺構が図としてもっともよくわかるところで土層図をとることを優先にすることにした。調査区が広く、また各所に破壊されているところがあるため、一定地域の調査を終了した後、次の地域に移るという方法をとらざるをえなかった。工事の関係もあり、一定時期の遺構を全面的にだし、その前の時期の遺構にかかるという方法をとることは不可能であった。一定地域内で新しい遺構を掘り上げ、次々に遺構を掘っていくという方法により、中央診療棟地点では西から東に、設備管理棟地点でも西から東に調査を進めた。給水設備棟地点では東から西に調査を進めた。遺物は遺構ごとに取りあげた。江戸時代の遺構の調査が終了した後、それ以前の時期の遺構・遺物の調査をしたが、江戸時代の遺構が深くまで入っていることが多く、その断面でその存在を確認することがほとんどであった。破壊が深くまで入っているので、それぞれの遺構のもつ意味についてかならずしも明らかにできていないが、全体としての遺構群のあり方について明らかにすることに主眼を置いた。主として大聖寺藩の上屋敷の土地利用の変遷については一定の見通しをもつことができた。

都市遺跡「江戸」のなかにおける、大名家の屋敷内における調査では、私達が従来行ってきた調査とは別の視点が必要であることを痛感している。ここでは一つ一つの遺構がもつ意味はもちろ

## 第I章 調査の経過と概要

ん重要ではあるが、それぞれの遺構の関連をつかむことがより重要な意味をもつことになる。こうした視点を常に持ちつつ調査・整理することが必要であろう。(藤本 強)

### 第三節 調査の概要

ここではそれぞれの調査地点における内容よりもむしろ全体としての様相を記述していくことにする。時代を追ってみていくことにする。といっても圧倒的に江戸時代の遺構・遺物が多いが、それらのごく概要についての記述を主にする。

#### 1 先縄文時代の遺物

設備管理棟地点のAF36区のIII層で、東西2.5m、南北1.3mほどの範囲のなかで、黒耀石のナイフ形石器1、剥片1、碎片7からなるおそらく一時期の遺物群を発見している。台地が沢にむかって傾斜を変え始める傾斜変換線に位置している。周辺は深くまで破壊が及んでおり、全貌を把握することはできなかったが、そもそも小規模な遺物群であったと考えられる。法学部4号館・文学部3号館地点でもこの時期の遺物が出土しており、「浅野地区」でも遺物の出土がある(渡辺 1979:12)。いずれも小規模なものであり、本郷台地の東端にこのような小規模な遺物群を残す人達がいたことを示している。

中央診療棟地点でもロームの比較的良好に残っている部分で第二黒色帯の下まで試掘をしたが、なにも発見できなかった。試掘したのはF36・35・34・33区の東北の隅とF31・30区の西北の隅2m×2mである。他の部分では江戸時代の遺構もしくは明治時代以降の破壊により、組織的な試掘を実施することは不可能であった。試掘したところでも江戸時代の遺構があり、2m×2mの範囲を完全に調査できたところは多くない。江戸時代の遺構、明治時代以降の工事などで破壊された部分のロームの断面も精査したが、この時期の遺物は発見していない。

#### 2 縄文・弥生時代の遺物

縄文・弥生時代の遺物の出土はきわめて少数である。しかもまとめて出土している地点は全くなく、小さな、種々の時期の破片が散発的に出土しているだけである。縄文時代の土器の破片も弥生時代の土器の破片も胴部の小破片が中心であり、出土位置は沢の西北部分が多い。1号住居址、2号住居址を結ぶ線の周辺からの出土が多かった。いわば台地の端に近い位置ということもできよう。逆にこれらの時期の遺物が入っている土層がどこに残っていたかという点、この付近にしか残っていなかったともいえるのであって、出土位置から何かをいうことは不可能である。しかし、いかに破壊されているとはいえ、大規模なこの時期の遺跡があれば、その痕跡が確認できると考えられるので、そもそもここには大規模なものはないと思われる。

小破片なので、時期の認定を行なうのは困難なものばかりであるが、縄文時代では早期のものではないかと考えられる条痕のある土器が1、前期初頭の繊維を含む土器片が2、勝坂式・加曾利E式土器の口縁部の破片を含む破片が少量、後・晩期の粗製土器の破片と考えられるものが少量ある。

### 第三節 調査の概要

他は時期の認定をすることの不可能なものである。弥生土器もほとんどが胴部の破片であり、細かい時期の認定を困難にしている。

### 3 古墳時代の遺構・遺物

中央診療棟地点のE・F28・29区に1号住居址を、B・C24・25区に2号住居址を発見している。どちらも一辺5m内外の方形の住居址で、床面から古墳時代後期の鬼高式土器が比較的良好なセットで出土している。住居址の方向は1号住居址が北西―南東で、2号住居址は北―南であり、1号住居址は北西の壁に、2号住居址は北の壁に造りつけのカマドをもっている。どちらも層序のところて述べたように斑状の褐色土を切って構築されている。位置は台地端であり、傾斜変換線の近くである。すぐ南西にある不忍池に注ぐ沢を意識しての居住であろう。周辺からも近い時期の土師器若干が出土している。調査した地点の他の部分からは古墳時代の遺物はほとんど出土していない。

両住居址から出土した土器は近い年代のものと考えられるが、住居址の方向が異なるので同時併存していたとは言い切れない。時期を異にしてあった可能性も考えないわけにはいかない。いずれにせよ二〜数軒程度の小規模な集落であったものと考えられる。耕作可能な土地は限られているし台地の東の端までの距離も長くはない。もし多数の住居がある集落ならば、より多くの居住の痕跡が発見されているであろう。小規模な短期間の集落と考えるのが妥当であろう。

1号住居址・2号住居址とも床面出土の土器は7世紀の前半に位置すると考えられるもので、都区内のこの時期の遺物としては大変に良いセットということができよう。今後の標準的な資料になる可能性がある。このあとで実施される調査で、集落がどのような形になるのか興味あるところであるが、そのあり方しだいで二つの住居址をどのように考えるかが決まってくる。東隣の上野の台地上には現存する前方後円墳(?)、摺鉢山古墳を初めとして、いくつかの古墳があったことが知られている(大谷 1985:128, 中村 1985:162)。こうした古墳とどのような関係にあったのか今後の調査の一つの課題ともなろう。ほかに少数ではあるが、古墳時代初頭の土器の出土もある。

### 4 平安時代の遺構と遺物

中央診療棟地点のJ23区を中心にして井戸が、設備管理棟地点のAA・AB34区に4号住居址が発見されている。井戸は埋まり切った沢の西よりにあり、径6m内外の楕円形の掘り込みのなかに一辺2m弱で、深さも2m弱の方形の井戸側を設けているもので、井戸側の底に一辺80cm、深さ80cmの水溜めを作っている。水溜めは木で囲まれていたものと考えられる。四隅に木杭の痕跡がある。内部から平安時代と考えられる須恵器、土師器が出土している。井戸側のなかの埋土にも、それを取り巻く掘り込みの埋土にも平安時代の富士の火山灰ではないかと考えられるスコリアがある。遺物の量は多くはないが、土師器と須恵器があり、これらは9世紀の前半〜中葉のものと考えられ、井戸の時期を推定することのできるものである。

東国の官衙や寺院址ではない一般的な集落で(現在までのところ官衙や寺院址の存在した可能性は全くない)このような形の井戸が発見されるのはきわめて珍しいことであろう。この井戸も完全に沢のなかに位置しており、沢のなかを深いところ(底は標高7.3m、地表下8.7mである)まで調

## 第I章 調査の経過と概要

査しなければ発見できなかったであろう。この時期の井戸としては一般的なものとするのができよう。将来類似の例が増加することになるだろう。

4号住居址は江戸時代の道路の下に辛うじて残っていたもので、一辺2m強の方形であったのであろうが、南北方向は破壊されていてはっきりしない。東壁にカマドがあり、東西南北に壁がある。沢の西よりの台地の端、傾斜変換線に近い位置にある。遺物は須恵器、土師器の小片があるのみであるが、井戸と同様に9世紀前半～中葉のものである。確認できたのはこの住居址だけであるが、付近はかなり深いところまで破壊されていたので、住居址があったとしても痕跡を留めずに消滅してしまっている可能性がある。集落の全体像、そのなかで井戸とどのような関係にあったのか興味のあるところであるが、時間的な関係に関して決定的な手掛かりがない。台地端に住居、沢内に井戸という形で発見できたことにより、今後の調査・分析の参考にならう。

他の部分ではほとんどこの時期の遺物を確認していない。中央診療棟地点の沢のなかのスコリア混じりの堆積層などでおそらくこの時期のものと考えられる土師器の小片を数点散発的な形で発見しているのみである。古墳時代の集落と同様に眼前の沢と不忍池に続く低地を目的にした居住であろう。御殿下記念館建設地点にもこの時期の居住が確認されており、居住のみられる一つの時期として注意を払う必要があらう。

### 5 江戸時代の遺構・遺物

この地点の調査のもっとも主要の部分占めるもので、中央診療棟地点、設備管理棟地点、給水設備棟地点、共同溝地点の各調査地点の全てで江戸時代の遺構・遺物を発見している。破壊を受けていないところでは大変な密度で遺構がある（付図1・2）し、遺物も百万点のオーダーで数える数量が出土している。今回の調査地点は江戸時代に加賀藩・富山藩・大聖寺藩の前田家の屋敷および、越後高田の榊原家の屋敷と無縁坂に続く道のあったところであるが、その大部分は大聖寺藩の前田家の上屋敷のあったところである。細かいことは各地点の調査の概要の項と遺構・遺物の項に譲るとして、ここではごく概括的なことのみに限ることとする。

今回の調査地点の大部分を占める前田家関係の土地はまず加賀藩の下屋敷になる。当時は屋敷の東の端であり、主要な部分から外れていたものと考えられる。土地利用に大きな転機が訪れるのは寛永十六年(1639)の富山藩と大聖寺藩の加賀藩からの独立である。この時から中央診療棟地点の大部分は大聖寺藩の上屋敷になる。設備管理棟地点の北側の部分も同様である。この前後から上屋敷の第一期の新築工事が開始されたものと考えられる。これ以前には大規模な建物はなく、庭のようなオープン・スペースとして利用されていたのではないかと考えられる。17世紀前半の遺物を大量に出しているのはH・I25・26区にある池である。ここには寛永六年(1629)の紀年銘のある木札を始めとして、大量の「かわらけ」、白木の箸、白木の折敷などの木製品が出土している（藤本・宮崎・萩尾 1987, 萩尾 1988）。儀礼的な宴会の後始末に関係するものと推測される。この年には將軍家光と前將軍秀忠があいついで前田家の本郷邸に「御成」をしている。これに関係したものと考えることが可能であろう。江戸時代の儀礼的な宴会に関する具体的な第一級の資料とならう。

大聖寺藩の上屋敷の第一期の建築に関連すると考えられる遺構は17世紀後半の資料を出土する遺

### 第三節 調査の概要

構である。これらのほとんどは埋土に多くの焼土をもっており、火災に際して放棄されたものと考えられる。大聖寺藩の上屋敷が火災に遭う最初は天和二年(1682)である。この火災により全焼している。このあと天和三年に加賀藩・富山藩・大聖寺藩の間で大規模な屋敷地の移動があり、幕末まで続く土地の境界がほぼ定まったものと考えられる。天和三年の屋敷地の移動は大規模なものであるが、この前と後の大聖寺藩の上屋敷の範囲については、第III章第一節で復元している。

この火災により放棄されたと考えられる遺構はかなりの数があるが、代表的なものは地境の溝・石垣と地下式土坑である。地境では、石組の溝である10・12号組石、大聖寺藩の上屋敷の東端であった6号組石南北部分が代表的なものである。10・12号組石は天和三年まで大聖寺藩の上屋敷の東にあった證人屋敷の地境であり、證人屋敷の廃止でその機能を失ったものと考えられる。6号組石の南北部分は、大聖寺藩の屋敷地の変化にともなって廃棄されたのであろう。また6号組石南北部分と12号組石の間にあった道の舗床面である上の砂利面、證人屋敷内の建物の礎石である1・2号石列も放棄され、上に厚い盛土がさらになされ、東側が平準化される。1・2号石列は江戸間(一間=1.8m)を基準にして構築されている礎石列である。上の砂利面の下にはやはり舗床面である下の砂利面があり、1・2号石列の下には六尺三寸間を基準にしている礎石列、3・4号石列がある。より古いものであろうが、明確な時期を決めることはできなかった。

地下式土坑は6号組石の南北部分の西、32ラインの東に集中してみられる。いずれも断面が袋状のものであり、形にはかなりの変異がある。このなかで特に注目されるのは、破壊されて四分の一ほどしか残ってはいなかったが、五万点近い陶磁器の破片を出土したL32-1である。焼土を主にした埋土よりも陶磁器の破片が多いという状況で発見された。内容は明末の中国製の磁器、1680年以前とされる肥前産の磁器が主で、これに「古九谷」が伴うものである(東京大学遺跡調査室病院班・山崎 1987, 藤本 1987, 成瀬・堀内 1987・1988)。しかもいずれも最上級のものばかりである。出土した場所が「古九谷」ゆかりの大聖寺藩の上屋敷であるだけに興味深い遺物である。

確実にこの時期の遺構とすることのできるものは大聖寺藩の上屋敷に限れば「御殿空間」(吉田 1988:22)に関係すると考えられるもののみであり、「詰人空間」に関係すると考えられるものは全くない。今後の調査の一つの課題である。

この後、大聖寺藩の上屋敷は元禄十六年(1703)、享保十五年(1730)、元文三年(1738)と立て続けに火災に遭い、全焼する。その都度再建されたのであろうが、遺構の時期を確定することが困難である。元禄十六年の火災に際して放棄された遺構は17世紀末から18世紀初頭にかけての遺物を出土する遺構ということで分離することがある程度まで可能であるが、享保十五年と元文三年の火災に際して放棄されたものは遺物の上から分離することが不可能である。

元禄十六年の火災に際して放棄されたと考えられる遺構は天和二年以降、元禄十六年までの間に作られた遺構で、17世紀末から18世紀初頭の遺物を出土するものである。地下式土坑を主にする。地下式土坑の形が大きく変化する。階段の付いた大型のものが出現するとともに各種のものが現われる。「御殿空間」の位置は若干西に寄るようであるが大きくは変わらない。それまで遺構が確認できていなかった33ラインの西にも遺構が現われる。「御殿空間」のものとは作りが異なり、「詰人空間」と関係するものかと思われる。土地利用の変化にともなって現われたのであろう。はっきり断



## 第I章 調査の経過と概要

言はできないが、2号組石もこの時期に作られた可能性が高い。天和三年の土地の境界の変更にもなって、新たに確定した境界を明確にするために設けられたのであろうし、東側ではより高く盛土がなされたため、その高さに合わせて境界の溝も改築されたものであろう。この後の時期に引き継がれる境界・土地利用の形態が定まった時期ということができよう。この時期を代表する遺物を出土しているのはF34-11という大型の土坑である。この土坑の性格はいま一つははっきりしないが、この時期の大変に良好な遺物群を出している。遺物群のなかには最上級のものも入っており、一つの標準的なものになろう。

享保十五年と元文三年の火事に際して放棄された遺構は18世紀前半の遺物を出す遺構と考えられる。もっとも数は多い。二度の火災に遭っているためもあるが、「詰人空間」が明確な形で調査した部分のなかに登場するからでもあろう。「御殿空間」は前代のもを引き継いでいると考えられる。中央診療棟地点の33ラインの西、設備管理棟地点の大聖寺藩の上屋敷部分に数多くの遺構がある。土坑・地下式土坑が中心であるが、「御殿空間」のものとは規模・作りにおいてかなり劣るものである。「詰人空間」の遺構と考えることができよう。地下式土坑の形もすぐ前の時期のもを引き継いでいる。土地の境界・利用形態とも、前の時代のもを基本的には受け継いでいると考えられる。階段付きの地下式土坑F33-3などでこの時期の良好な遺物群が出土している。

元文三年の火災の後、大聖寺藩の上屋敷は大規模な火災に遭うこともなく幕末を迎える。文政十二年(1829)に加賀藩から屋敷の西北部分につながるところを借地して若干の増築をしているが、その他の増改築の記録もないので、元文三年の火災の後で建てられものはそのまま幕末まで使用されたものと考えることができよう。

大聖寺藩の上屋敷に関する絵図は『大聖寺藩史』に所収されている文化年間とされるものがあるだけで、土地の境界については尊経閣文庫所蔵『[加賀藩前田家] 御上屋鋪御地面之絵図』(天保十三年 1842)を参考にすることができる。もし元文三年の火災の後に建てられたものが幕末まで使い続けられたとすると、若干の増改築があったとしても文化年間の絵図に近い形であったものと推測することができよう。18世紀後半以降の遺物を出す遺構が元文三年以降に建築されたものであろう。この時期の遺構の数は少ない。この時期の遺物を出土する遺構は中央診療棟地点ではH・I21区付近に集中し、E・F・G34・35・36区に若干の遺構がみられる。文化年間の絵図とはI20-1、H23-3の井戸で照合することができる。これらの遺構が集中している地点は文化年間の絵図によると「御殿空間」と「詰人空間」である長屋の間の空き地になるようである。「御殿空間」があると考えられるところからは、この時期の遺構は全く確認できていない。浅い遺構が多かったのであろうか。近代以降の破壊によって完全に消滅してしまったのであろう。地下式土坑が確認できていないのも特徴的なことである。たとえ、破壊を受けていたとしても地下深くに掘られた地下式土坑ならばその痕跡が残っていてもよいはずである。それが全く確認できていないことは、少なくとも「御殿空間」には地下式土坑が構築されなくなったことを示している。設備管理棟地点には、この時期のもを出土する若干の遺構がある。井戸・土坑などである。ここでも確実にこの時期のものである地下式土坑は確認していない。

陶磁器はそれぞれの時期の代表的なものが多量に発見されているのは既に述べているが、焼塩壺

### 第三節 調査の概要

(小川 1987・1988) を始めとする「かわらけ」、焙烙、火鉢などの素焼の土器類の出土も多く(小川・小俣 1988)、良好な資料となりうるものである。焼塩壺は200 点以上の各種のものが出土している。他の遺物も多数あり、今後の江戸時代の考古学の一つの標準的な資料になるものばかりである。これまでに触れたもの以外にも、概略を報告した報文がある(上野・小川 1987, 小川 1989, 寺島 1987)。

(藤本 強)

## 第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物

例言にもある通り、本書では遺物の図は特に断わらない限り、1/4の縮尺にしている。この章においてもこの原則に則っており、II-05・09・10 図の遺物の図の縮尺は1/4になっている。

### 第一節 先土器時代の遺物

先土器時代の遺物は設備管理棟地点のAF36ポイント周辺より検出された(II-01 図)。この付近の地形は現在でこそ平坦であるが、それは江戸時代以降の大規模な埋め立てによるもので、元来は不忍池に注ぐ沢が入っていた。

遺物検出地点は、その沢の縁に位置し、北側は緩やかな傾斜になっている。平面的には、東西約2.5m、南北約1.3mの範囲から出土しているが、特にAF36ポイントの西1m付近に集中している。垂直の分布は全てIII層中の出土であり、標高14.52-14.66mの約15cmの間に分布し、特に14.62m付近(III層中程)に集中している(II-01 図・写真1)。

検出された遺物はナイフ形石器1点、剥片1点、碎片7点の計9点で、全て黒耀石の同一母岩によるものである(II-01 図・写真1)。

1はナイフ形石器で、下半部を欠損している。図左縁に先端部から欠損部までブランディングが施されている。欠損は背面からの加撃によるもので、製作途中の調整剥離によって欠損したのではない。

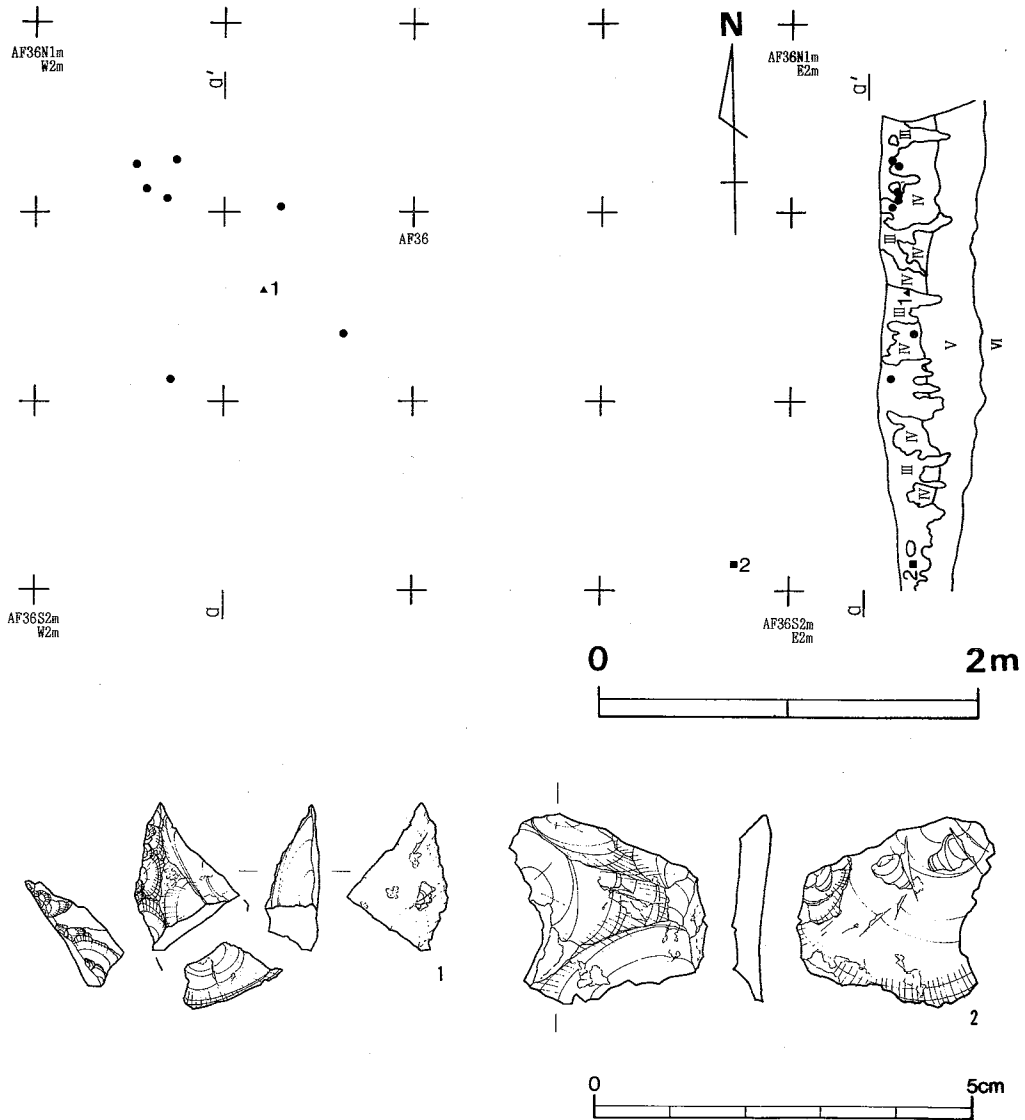
2は横長剥片である。背面の剥離痕から、90度、180度の打面転移を繰り返し、剥片剥離を行っていたことが理解される。

これら以外の図示できなかった碎片は、全て米粒大のもので調整剥離過程において生じたものである。しかし、純粋に石器の製作を想定した場合、その数は余りにも少ない。分布の中心が、AE36-11、AE35-3に隣接しているため、本来の中心はそれらの遺構に破壊されたものとも考えられるが、検出された遺物が全て同一母岩によるものであること、ブロックの検出がほかにないことなどを考えあわせると、たとえその一部が江戸時代の遺構により破壊されていたとしても、元来小規模なブロックであったと考えたほうが妥当である。

周辺の先土器時代の遺跡には、真砂遺跡(岡崎ほか 1987)、東京大学文学部3号館地点(成瀬 印刷中、以下文学部地点と略称)がある。また東京大学「浅野地区」においても、遺物が発見されている(渡辺 1979)。このうち真砂遺跡では、二つの文化層が認定され、IV層からVI層上部にかけて分布する第一文化層からは5ヵ所の遺物集中地点、20ヵ所の礫群が検出され、VI層下部に中心をもつ第二文化層からは2ヵ所の遺物集中地点が検出されている。また個々の遺物集中地点より検出された遺物は複数の石材、母岩より構成されている。これに対し、文学部地点では、III層からV層上

第一節 先土器時代の遺物

部にかけて3ヵ所の遺物集中地点，1ヵ所の礫群が検出されている。ここでは江戸時代以降の遺構による破壊を加味しても，規模は小さいものである。さらに個々の遺物集中地点の総点数も100点に満たない小規模なものである。もう一つの特徴はそれぞれの遺物集中地点が単一か二個の同一母岩で構成されているということである。これはごく短期間の人間の行動によるもので，石器製作も必要に迫られて行ったものと思われる。想像を逞しくすれば，狩猟に出てきた人が前進基地で，石器を追加，修理していたとも考えられるだろう。本地点で検出された遺物集中地点も真砂遺跡のそれとは異なり，文学部地点の様相に類するものであろう。(成瀬晃司)



II-01 図 先土器時代の遺物出土位置・遺物(土層図の水準:14.8m)

## 第二節 縄文時代・弥生時代・古墳時代初頭の遺物

本地点から出土した遺物は、遺構のなかから出土したものを除くと、小破片のみでその数は少ない(II-02 図)。そのなかでも、大半の遺物が江戸時代の遺構の覆土、盛土のなかから出土したもので、自然堆積層より出土したものは10点に満たない。それらは中央診療棟地点のほぼ中央の1号住居址と2号住居址に挟まれた辺りから多く出土している。

1-13は縄文土器である。1は表裏両面に条痕文がみられる。表面は縦位に施文されているが、裏面は縦横に施文されている。早期後葉の所産である。2・3は縄文を地文とする土器で、2は口縁部片で、3は胴部片で羽状縄文が施されている。ともに胎土に繊維を混入し、色は橙褐色を呈している。前期初頭の所産である。

4は胴部片で、両脇に連続爪形文を伴う、断面が三角形の隆帯が貼り付けられている。胎土には黒雲母、白色砂粒が多量に混入している。中期中葉の所産である。5・6は口縁部片で口唇部には連続爪形文を伴う隆帯が巡っている。6には縄文が地文として施されている。ともに中期中葉の所産である。7・8は胴部片で、7には沈線による二条の懸垂文に、縄文の地文が施され、胎土には少量の雲母と多量の砂粒が含まれている。8には沈線による蛇行懸垂文に、撚糸文の地文が施されている。ともに中期後葉の所産である。

9は口縁部片で、波状口縁の波頂部にあたる。波頂部から垂下する隆帯によって区画され、区画内には沈線による紋様が施されている。後期前葉の所産である。10、11は弧状の沈線が施されているが、10は口縁部片で緩やかな波状を呈す。また沈線の両脇には連続する刺突文を伴っている。晩期中葉の所産である。12、13は胴部片で、同一個体である。地文には縄文が施されている。これらのうち、2、7、9、12、13の破片は自然堆積の層から出土したものである。

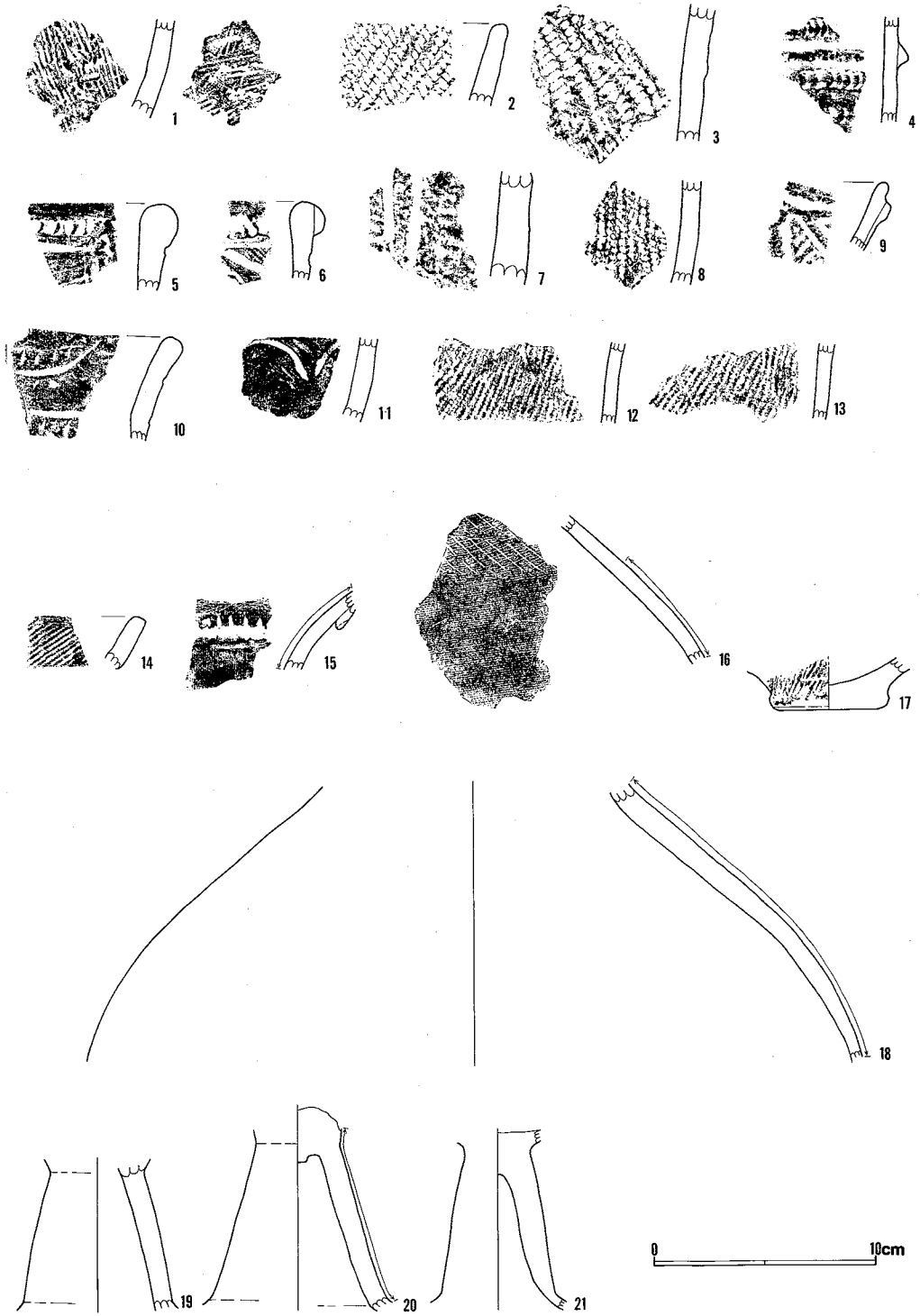
14-21までは弥生時代から古墳時代に属する遺物であるが、全て遺構のなかもしくは盛土のなかから出土したものである。16は平安時代の井戸の覆土から、18は2号住居址の覆土のなかから出土している。

14-18は弥生土器の破片である。14、15は壺の口縁部片で、ともに複合口縁であるが、14には斜縄文が、15には斜格子文と刺突文が施されている。また15の内面には、赤彩が施されている。16、18は壺の胴上半部の破片である。16には斜格子文が施され、無文部には赤彩が施されている。18は全面に赤彩がある。17は壺の底部片で、斜行する櫛歯文が施されている。

19-21は高杯の脚部片である。19、20は器厚が約1cmと厚く、裾は屈曲して広がる。20には外面に赤彩が施され、胎土には黒雲母、白色微砂粒を多量に混入している。21は細身で裾は屈曲して広がる。また器厚は下部に移行するにつれて薄くなり、屈曲部では4mmになる。古墳時代初頭の所産である。

以上の通り、大半は客土中の出土であるが、混入物として古墳時代や平安時代の遺構中からも出土しており、また自然堆積層からの出土も確実に存在していて、調査区周辺における各時代の人々の行動を窺わせ、また今後周辺の調査において遺構検出の可能性もあろう。(成瀬晃司)

第二節 縄文時代・弥生時代・古墳時代初頭の遺物



II-02 図 各地点出土縄文土器・弥生土器・古墳時代初頭の土器

### 第三節 古墳時代の遺構と遺物

#### 1 1号住居址

**遺構** 近世の遺構、E28-1, F27-1, F29-1 の調査中に、壁に古墳時代後期の土器を伴う落ち込みが認められ、これらの遺構の調査後、自然堆積の層である黒褐色土とロームが斑状に入り混じる褐色土の上面を精査したところ、方形の住居址を確認した。

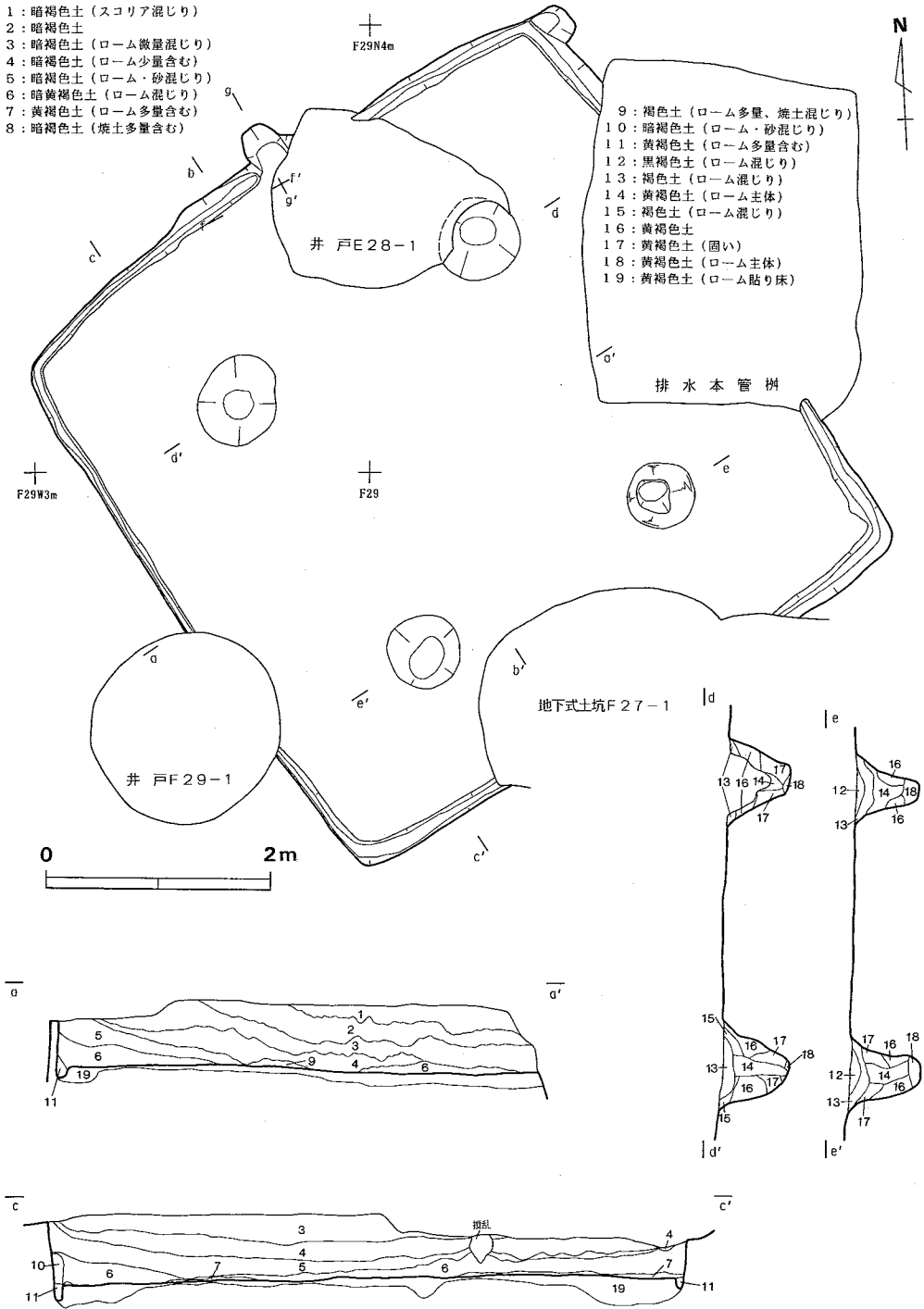
中央診療棟地点の中央、E・F28・29区にまたがって位置する、ほぼ方形の住居址である(II-03・04図)。富士山の新时期テフラではないかと考えられる斑状の褐色土より切り込まれている。E28-1, F27-1, F29-1 および近代以降の排水管の柵に破壊されているものの、残存部はかなり良好な遺存状態である(写真2)。

平面形はほぼ方形を呈しており、規模は長辺6.2m, 短辺5.8m, 深さ約60cmである。長軸の方位はN-34°-Wを指しており、北東壁のほぼ中央にカマドが付設されている。床面は、荒掘りの後、ロームで10-30cmほどの貼り床をおこない、平坦に整えられている。またカマドの西側から西北の隅にかけての床面は特によく踏み固められている。四隅より中央にやや入ったところに、支柱穴と考えられる四基の円形の穴が確認されている。各々の柱穴の断面形はやや播鉢状に開き、その中央に柱の痕跡が明瞭に観察されている。規模は径60-80cm, 深さ60-70cmである。壁は床面から垂直に立ち上がり、壁際には幅10-20cm, 深さ10cm程度の溝が周囲を一周している。この周溝は、床面を掘り込んで構築されたものではなく、荒掘りに貼り床をする際に計画的に周溝を残すような形で構築された状況が看取される。埋土は大きく、2号住居址と同様に黒色のスコリアを少量ではあるが含む上層と、ロームを含む下層に分層され、北より南に傾斜している。スコリアは第I章でも触れているように、富士山の新时期テフラの800(延暦19)年もしくは864(貞観6年)に降灰したものである可能性が強い。

カマドはE28-1によって東半を削平され、全体の様子を窺うことはできないが、比較的小型で、袖部、煙道部、焚口部とも簡略な作りである。規模は、南北が50cmほどである。袖部は、いわゆる山砂(13層)を芯としており、白色粘土混じりの黒褐色土で構築されている。焚口部は掘り込みをもたず、床面がそのまま利用されており、火床面は被熱によって赤く変色し、固くなっている。煙道部も壁の外側に30cm程度突出しているのみである。煙出し穴、煙道とも不明瞭である。

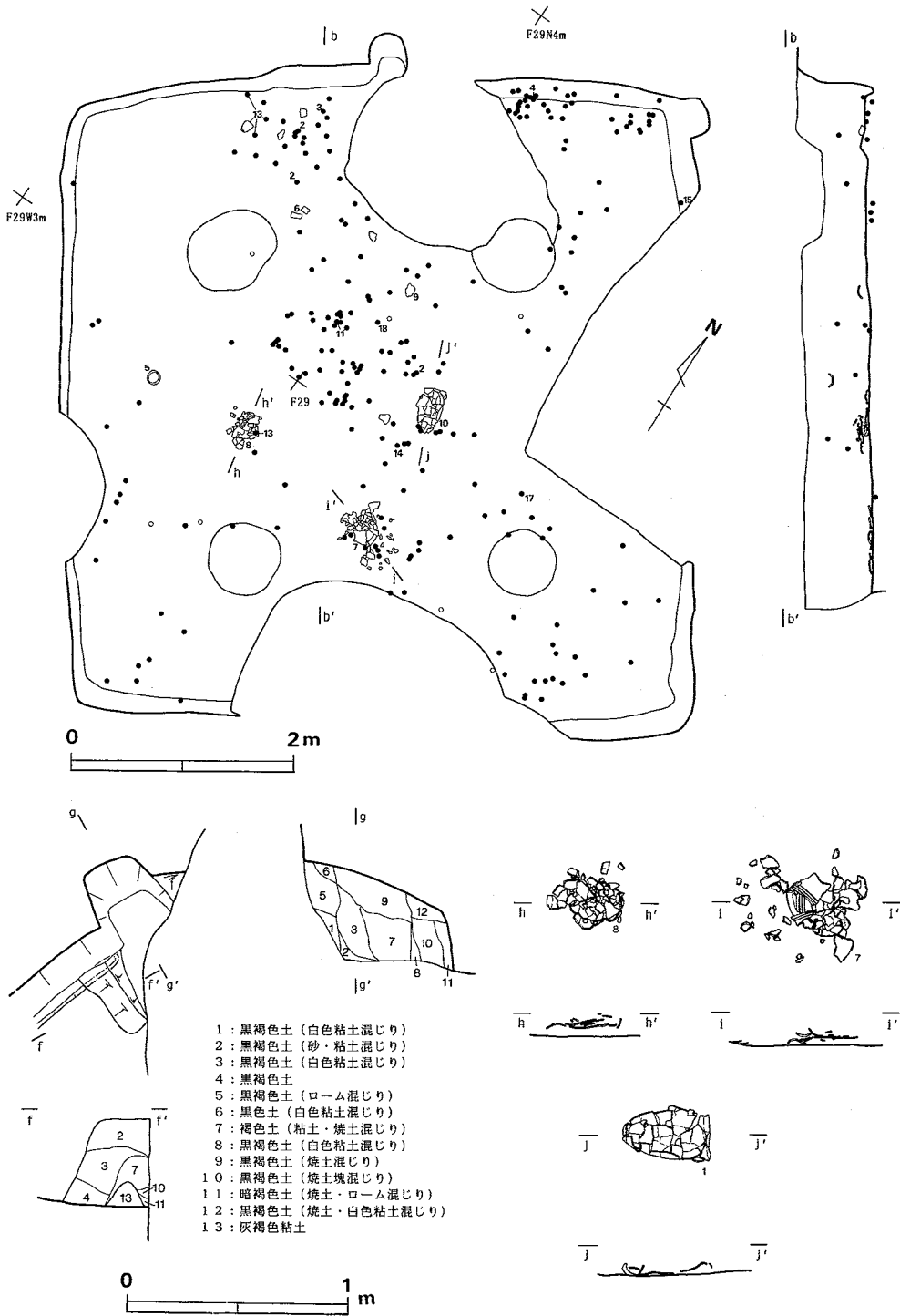
遺物は土師器の坏、甕を中心に400点以上が確認されている。カマド付近が大きく削平されているため、全体の様子は窺えないが、カマドから住居址の中央付近にかけて、床面上から多く出土しており、住居廃絶の際の一括資料としてとらえることができよう。ただ、煮沸用具の長胴甕がカマド付近ではなく、住居址の中央近くから3個体もまとめて確認されていることは(II-04図)、廃絶の際に土器の取捨選択が行なわれたとみられる。須恵器は少なく、1はF27-1の調査の際に崩落した埋土中に含まれていたもので、正確な位置は不明である。遺物群としては1・2号住居址とも良好であるが、かなり特殊な遺物が含まれている(たとえば、1号の5, 12, 13, 2号の9, 10, 11な

### 第三節 古墳時代の遺構と遺物





第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物



II-04 図 1号住居址 (土層図の水準:12.3m, b-b':13.0m, 番号はII-05 図と一致)

### 第三節 古墳時代の遺構と遺物

ど)。周辺に比較できる良好な資料がないこともあろうが、これらは本遺跡が一時的な小集団の集落であった可能性が強いことを含めて注意する必要がある。また両住居址とも土錘が検出されていることも見逃せない。須恵器、比企型の坏、甕などの形態より7世紀の前半の所産ととらえて大過ないであろう。(堀内秀樹)

遺物 本住居址出土の遺物はかなり良好なセットと考えることができよう(II-05図・写真2)。

1は須恵器の坏である。口径11.1cm, 器高3.8cm。色調は灰白色で、胎土には白色細砂粒を少量含む。底部は回転ヘラケズリで、焼成は良好である。2-5は土師器の坏である。胎土には、細かい砂粒を含むものが多く、焼成は良いものがほとんどである。2はいわゆる比企型の坏で、内面と外面の上半に赤彩が施されている。推定口径12.2cm, 器高4.0cm。色調は褐色～黒褐色である。3は推定口径11.3cm, 色調は褐色で雲母などが微量入る。内面には丁寧なミガキがなされている。4は推定口径13.2cm, 色調は内外面とも橙褐色である。口縁部はヨコナデ、底部は不定な方向のヘラケズリである。5は口径10.2cm, 底径5.2cm。器高4.0cm。色調は黒褐色で、内面の中央に放射状の暗文があり、体部下半は底方向への、底には不定な方向のヘラケズリがある。6は土師器の鉢で、推定口径は16.2cmであり、色調は黒褐色で、内面は丁寧なヨコナデで仕上げられている。

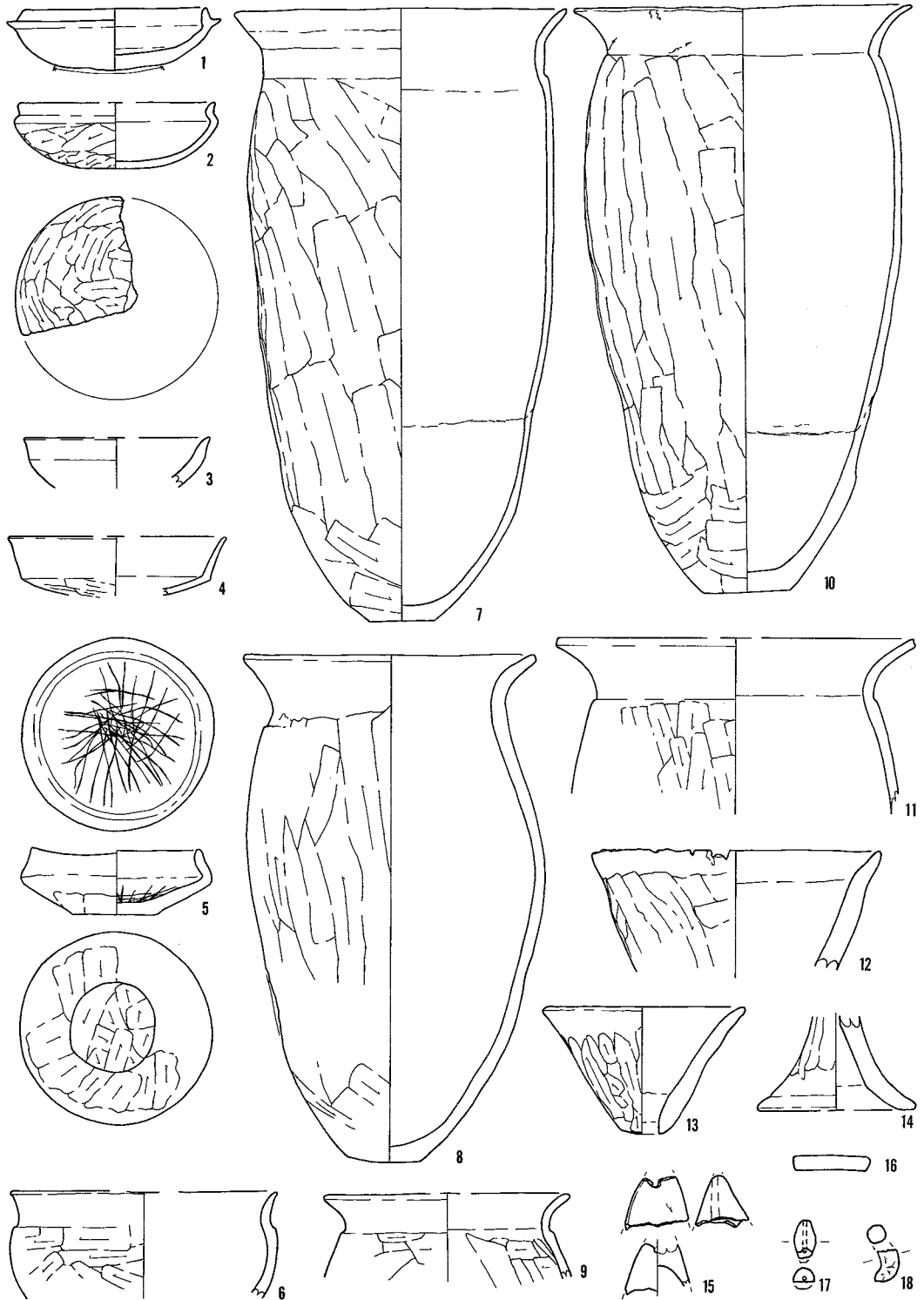
7-11は土師器の甕である。胎土には、石英の微粒子・細砂粒などが含まれていて、焼成は全例ともほぼ良好である。7は口径20.5cm, 底径4.0cm, 器高37.6cmで、色調は外面が暗茶褐色、内面は橙褐色である。内面はナデによって整えられている。8は口径18.0cm, 底径4.6cm, 器高31.1cmで、色調は茶褐色であり、内面はナデによる調整である。胴下半は二次焼成のため表面が剥落している。9は推定口径15.2cm, 色調は淡褐色で、胎土に微量の雲母が入っている。胴部の上半は横方向のヘラケズリで整えられている。10は口径20.8cm, 底径5.3cm, 器高36.0cmあり、外面の色調は胴の下半が黒褐色、上半と口縁部が褐色で、内面は暗褐色である。胎土には雲母、長石などが入っている。外面の胴部の上半は縦方向の、下半は横方向のヘラケズリが施されている。11は推定口径22.1cm, 色調は外面が暗褐色、内面は褐色である。口唇は外側に削がれたような平口縁である。12は土師器の碗であろうか。推定口径17.6cm, 色調は褐色で、胎土には雲母などを含み、口唇の調整はなされておらず、凹凸と亀裂が著しい。内面は丁寧なナデによる調整がなされている。

13は土師器の小型の甌である。口径12.4cm, 器高7.8cm, 底部の孔径は2.4cmである。色調は褐色で、胎土は堅く、微砂粒を微量含んでいる。口縁の外面は横方向のナデ、体部は縦方向のヘラケズリで調整され、内面は丁寧なナデが施されている。内面にはススが附着している。14は土師器の高坏である。脚部のみ残っており、底径は推定で9.6cm。色調は外面が褐色で、内面は橙褐色である。胎土には雲母などが微量含まれている。

15は土鈴であろうか。色調は黒褐色～茶褐色で、外面は丁寧にミガキがなされている。上部に径3mmの孔が穿たれている。16は須恵器の土製円盤である。外面には、タタキ目がわずかに観察される。色調は暗灰褐色で、胎土には砂粒を少量混じている。

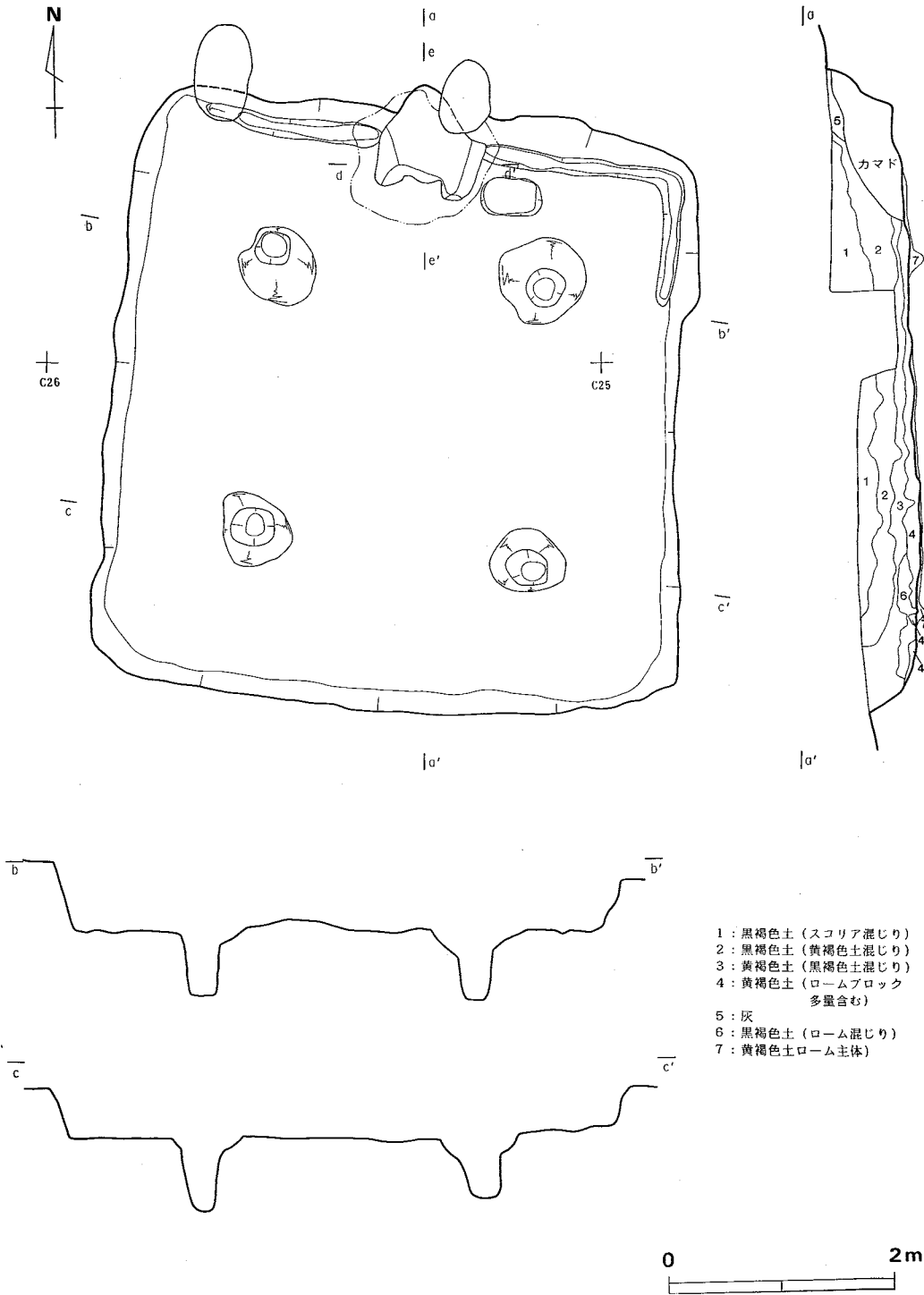
17は土錘である。中膨らみの円筒形をしており、中央に径2mmの孔が穿たれている。最大径は1.4cm, 表面には丁寧なミガキがなされている。18は土製勾玉である。色調は褐色で、胎土には微細な砂粒が混じっている。(堀内秀樹)

第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物



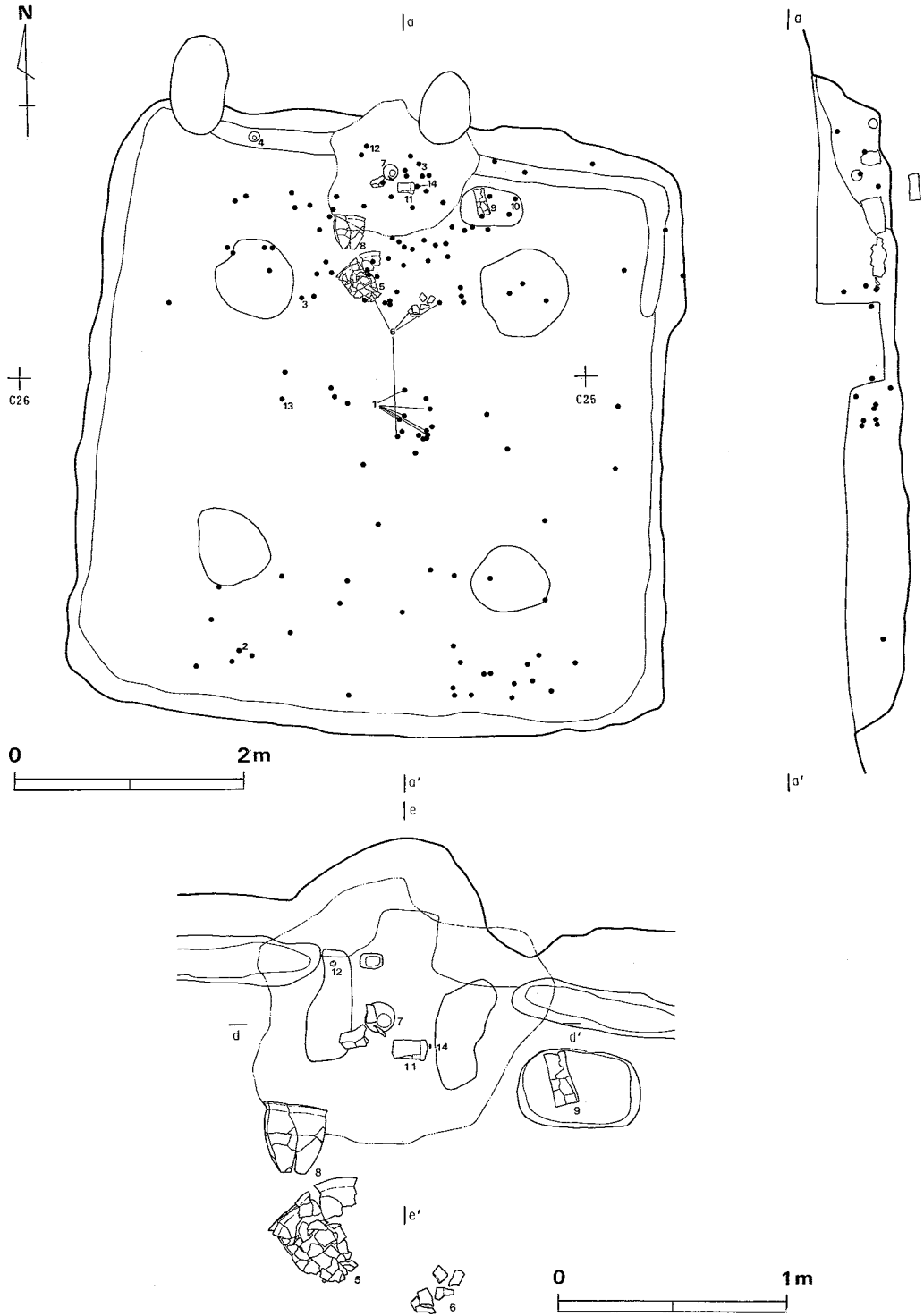
II-05 図 1号住居址出土遺物

第三節 古墳時代の遺構と遺物



II-06 図 2号住居址 (土層図の水準:13.0m, a-a':13.3m)

第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物



II-07 図 2号住居址 (土層図の水準:13.3m, 番号はII-09 図と一致)

## 2 2号住居址

**遺構** 2号住居址は調査区の北東隅のB・C24・25区にまたがって確認されたものである。ローム上面の精査をした際、黒褐色土の落ち込みを発見し、トレンチを入れ調査した結果、古墳時代後期の住居址であることを確認した。

住居址は東西4.9m、南北5.4mの隅のやや丸い整った方形であり、真北からやや東に振れた方位を軸にしている。深さは北から南へ下がる緩傾斜面に位置しているため、北側が深く0.7m、南側で0.4mであった（II-06 図・写真3）。床面は凹凸が激しく、特に住居址の北よりのカマド周辺にはわずかな高まりがあった。床のすぐ上には黒褐色土混じりのロームがあり、そのうえカマド周辺以外は踏み締められた形跡もなかったため、床面と埋土の境の判定に悩まされた。この傾向は壁の近くで顕著であった。埋土は大まかに3層に分けられる。上層はスコリア混じりの堅い黒褐色土、下層は黒褐色土を含むローム主体の黄褐色土であり、中層はこれらの層の中間の層である。それぞれの層の境界はあまり明瞭ではない。上層の黒褐色土に含まれるスコリアは第I章で述べているように、富士山の800(延暦19)年もしくは864(貞観6)年の新期テフラの可能性が強い。

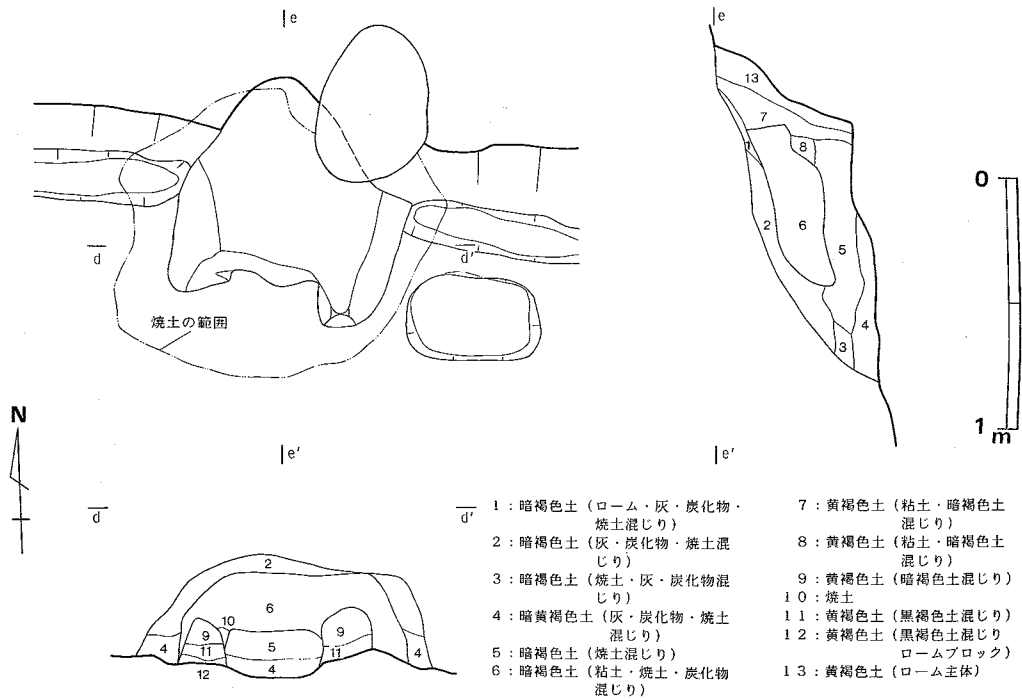
この住居址にはしっかりした構造のカマドがある（II-08 図）。カマドは北壁のほぼ中央で発見されている。カマドの規模は、南北1m、東西0.9m、床面からの高さ0.6mである。煙道こそ確認できなかったが、焚口、袖、天井部などはほぼ完全な形で残っており、周辺からもさまざまな遺物が使用時の痕跡を留めながら出土している。カマドと埋土の境は、いま一つ明らかではなかった。袖の芯に相当する部分は、焼土・炭化物を含む白色粘土で構築され非常に堅く明瞭であったが、それ以外の部分は粘土は含んでいるものの暗褐色土を主体とした土で作られていた。そのためカマドを取り巻く灰・焼土・炭化物混じりの土との境がはっきりせず、粘土が混じる土が存在することによってカマドの範囲としている。天井はやや押し潰された状況にあったが、焚口はほぼ原形を保っていると考えられ、図に示してあるように開口部は整った方形になった。袖もほぼ原形を保っていた。規模は西側で0.3mの幅をもち全長が0.5m、東側のそれは幅0.4m、全長0.6mであった。なお焼土はカマド周辺でもそれほど量は確認されていない。これは焚口内でも同様であり、ここには焼土・灰・炭化物をわずかに含む暗褐色土が主体となった土が詰まっていた。その後カマドの掘り方を検討した結果、周辺の基盤のロームを掘り残した痕跡が認められた。こうした状況は壁際、両袖で顕著であり、壁際では床面より30cm、袖で10-20cmの高まりをもつ。焚口もわずかな高まりをもつが、袖がそれ以上に高くなっているため、相対的に低くなり、焚口を掘り下げると同様な効果をもたらすものと考えられた。また天井部と接する壁には斜めに削り取った部分も認められ、煙道が構築されていた痕跡が明瞭であった。以上の結果から住居構築の前の段階からカマドの設置箇所は既に定まったものであり、計画的に住居が建てられた状況を窺うことができる。

その他の付属施設としては柱穴と貯蔵穴と周溝がある。カマドの東側にあるものは貯蔵穴であり東西0.6m、南北0.4m、深さ0.3mの胴張りのある方形である。この埋土は住居址の一番下の埋土と共通である。四つの柱穴はそれぞれ断面形がわずかに異なるものの上部に浅い掘り込みがあり、その下は垂直に掘り込まれる点は共通する。これらは径0.6m-0.8mの不整な円形であり、0.5-0.7

第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物

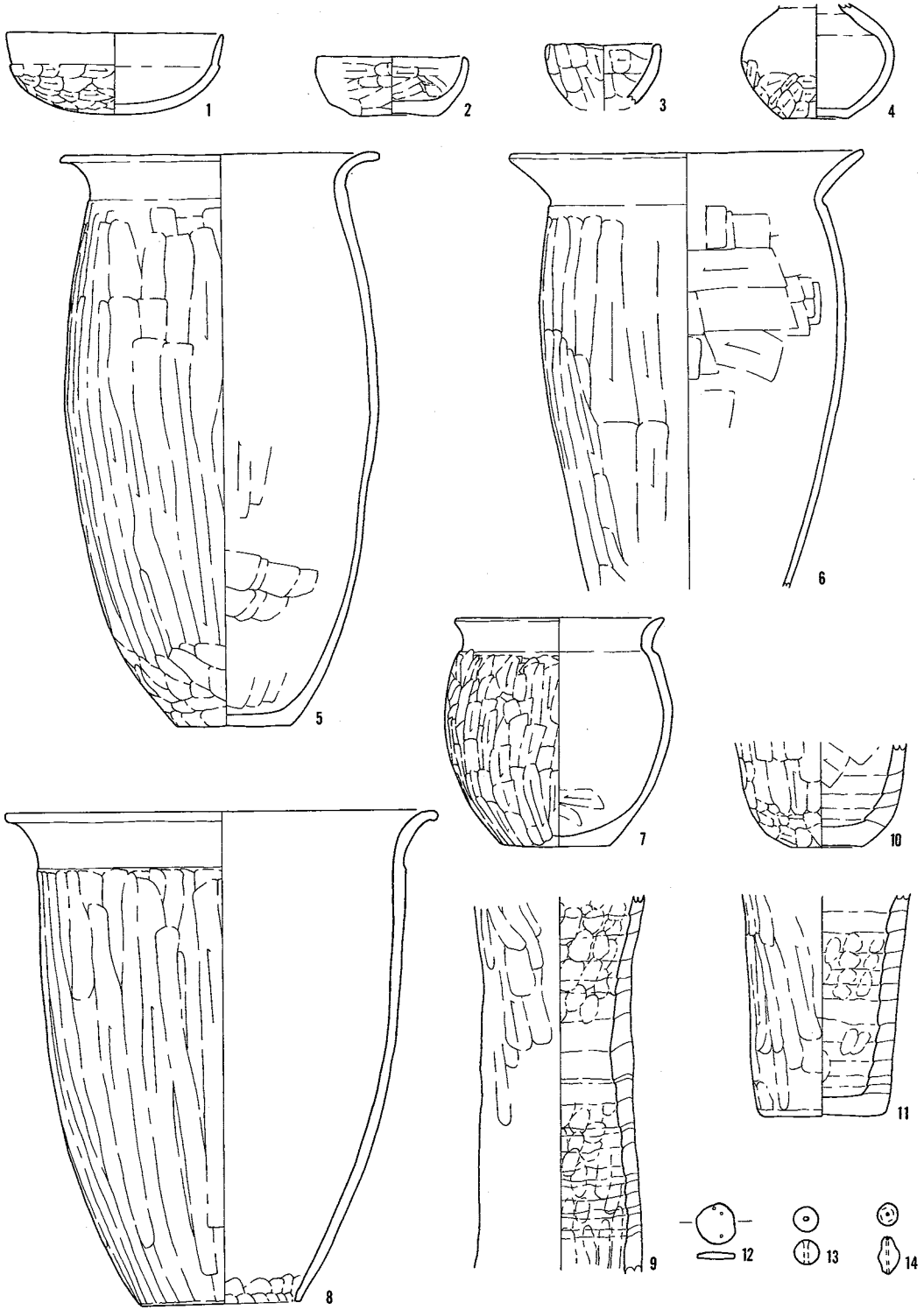
mの深さがある。柱穴の埋土は南側のもではローム混じりの黒褐色土のみ、北側のものはその下に柔らかい黄褐色土が堆積する。周溝はカマドの両側に見られ、西側で1.6m、北西隅には達していない。東側は北東隅を越え、東壁の三分の一にまで達している。もっとも深いところで5-6cmで、末端部分のはっきりしなくなり、なだらかに床に移行する。周溝の埋土は住居址の床のすぐ上の土に似ている。

この住居址からは豊富な遺物が出土している(II-07 図)。焼石を除く遺物の点数は140点以上にのぼる。これらの遺物はカマドを中心に発見されている。カマド周辺のほとんどの遺物は埋土中・下層からの出土である。5・8の土器は完形に近い土器であるが、ほぼ同じレベルで発見され、互いに近接してしかも直線状に並んで出土していることから同時に廃棄されたことは確実であろう。これらが甗と長胴甕であることから、セットになり、この住居址のカマドで煮沸容器として使用されていたものがそのまま廃棄されたものであろう。甗の周辺には炭化物・焼土が主になるカマドに由来すると考えられる土があったが、甗はカマドに直接接しており、上記の推定を裏付けている。5の近くには6の甗の口縁部破片も出土している。焚口の中層から出土した7も甗である。口縁を下にし火熱を受けていたことから、支脚として使われていた可能性もある。9は貯蔵穴の底に接して出土した。支脚として使用されたと思われる円筒形の土器である。この土器は山梨県の姥塚遺跡、二の宮遺跡(猪股 1982)などに類例がある。火熱を大分受けておりカマド内で使用した後、ここに廃棄したものであろう。10も貯蔵穴内の出土である。11はカマド内からの出土であり、9と同じ制作技法による土器である。当初支脚の可能性を考えたが、焚口上面の天井に埋め込まれており、火熱も受



II-08 図 2号住居址カマド (土層図の水準:13.0m)

第三節 古墳時代の遺構と遺物



II-09 図 2号住居址出土遺物



## 第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物

けていないことから、天井を強化するために、用いられた支えの可能性もある。この土器に接して14の土錘が、その近くから3の手捏の坏が出土している。この土器には埋土中層からの破片も接合している。鏡を模した12の石製模造品が天井の西側上面に張り付いて出土している。遺物の性格を考えた場合、興味深い出土状況である。カマド周辺のほかからも完形もしくはそれに近い土器が出土している。4は北壁際の埋土上層から出土した甕である。1は坏で、中央の埋土中層からまとまっていたが、小片の状態で出土している。2の手捏の坏が西南の隅近くの中層で出土している。やはり小片になった状態である。13の土玉は中央の西よりの埋土下層からの出土である。これらの遺物はカマド周辺に比べると層位的に高い位置での出土であるが、破片のいくつかは下層から出土したものと接合もしくは同一の個体であることが明らかであり、ほぼ同時期に廃棄されたものであろう。ほかに甕の胴部、口縁部の破片、黒色処理あるいは赤彩を施した坏の破片も出土している。この住居址のなかからは焼石も数多く出土している。上層から中層にかけて全部で111点ある。

都区区内においてこの時期の住居址の発見例はあまりなく、しかもこのような良好な遺存状態を示す例は稀である。この付近ではほかに1号住居址、平安時代と考えられる4号住居址・井戸も発見されているが、周辺の地形を考えると、現在では跡形もないが、不忍池につづく小支谷があったことが確認できている。1・2号住居址はこのような小支谷を望む緩斜面に位置しており、周辺一帯はいくつかの小支谷が入り組んだ複雑な地形であったと考えられる。調査区の北側については資料がないが、これらの住居址を営んだ集団の集落の規模はそれほど大きなものではなく、最大数軒単位の小集団が支谷と密接な関わりを持ちつつ、生計を立てていたものと考えられる。(佐々木彰)

**遺物** 1号住居址と同じように、2号住居址からも良好な土器のセットが出土している(II-09図、写真3・4)。1-3は土師器の坏である。1を除き、胎土は脆く、焼成も良くない。1はいわゆる比企型の坏である。色調は褐色で、底部はヘラケズリ、体部と内面はナデで仕上げられている。内面および外面体部には赤彩が施されている。内面には弱い沈線が巡る。2は小型の手づくねのもので、口径9.3cm、底径5.3cm、器高3.6cmである。色調は黒褐色で、胎土には砂粒を多量に含み、ざらざらしている。外面はヘラケズリ、内面は荒いナデによる調整である。3も小型の手づくねによるものであり、口径7.0cm、胎土には砂粒を多量に混じえている。4は小型の土師器の甕であると思われる。底径4.0cm、色調はやや明るい褐色で、胎土に砂粒が少量含まれている。胴部上半はナデ、ところどころにミガキが施され、下半部と底部はヘラケズリによる調整である。

5-7は土師器の甕で、いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は良い。5は口径19.6cm、底径7.0cm、器高34.8cmで、色調はやや白みを帯びた褐色で、内面はナデによる調整である。底および胴下半部にかけてススが附着している。6は口径21.6cm、色調は橙褐色で、口縁部と内面はナデによる、胴部の外面は縦方向のヘラケズリによる仕上げである。7は丸胴形の甕である。口径12.8cm、底径6.8cm、器高14.0cmあり、色調は褐色から暗褐色、胴部外面には赤彩がある。内面はナデによる調整である。8は土師器の甗である。口径26.4cm、器高30.0cm、底の孔の径は9.6cmある。色調は白みを帯びた褐色で、胎土に砂粒を多量に含む。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、口縁部は内外面ともヨコナデ、内面は丁寧なミガキ、下端はヘラケズリによる仕上げである。

9-11は円筒形の土器である。いずれにも明瞭な巻き上げの痕跡が認められる。出土位置やほかの

#### 第四節 平安時代の遺構と遺物

遺跡の類例からカマドの道具として使用されていたものであろう。二次的な加熱のため表面が剥落している。9と10は色調・胎土・調整などは類似しており、やや白い褐色で、胎土は粗く、砂粒を多量に含み、内面は巻き上げの後、指の頭による押えのみで調整はなされず、外面には荒いヘラケズリが施されている。10は底部であろうと考えられる。底径は4.3cmである。11は底径7.8cmで、色調は9・10と同様で、胎土には砂粒はなく、良い焼成がなされている。12は石製模造品である。径は2.3-2.5cm、厚さ3mmで、径2mmの孔が3ある。13は土製の玉であり、径は1.5cm、色調は暗褐色をしている。球形をしていて、中央に径2mmの孔がある。表面は丁寧に磨かれている。14は土錘であり長さは2.3cm、最大径は1.2cm、重さは3.1gである。色調はやや明るい褐色で、中膨らみの円筒形をしており、中央に径2mmの孔がある。年代的には、1号住居址と同様に7世紀前葉のものと考えられる。  
(堀内秀樹)

### 第四節 平安時代の遺構と遺物

#### 1 4号住居址

**遺構** 設備管理棟地点のAA・AB34区に位置する。無縁坂に続く道路の下で発見されている。道路の下になっていたことが幸いしたのであろう。周辺では住居址の発見された高さは近世・近代以降の破壊を受けている高さであり、道路以外のところにあったならば、確認されることもなく消滅していたものと考えられる。道路の面を取り除くとすぐに現われた。標高は14.9mである。住居址の作られた面はもっと上にあったと考えられる。住居址の西や南北の端は既に破壊されていた。

住居址は東西2.3m、南北の確認できた部分1.9mであり、一辺2.3mほどの方形をしていたものと考えられる(II-10 図)。真北より若干東に振れた方向に軸をもち、深さは確認したところから床までもっとも深いところで12cmであり、多くは5cm内外であった。床の南側を中心とする大半の部分にロームブロックを主にする土で張り床が施されていた(図中ハッチで囲まれた部分)。東の壁には作りつけのカマドがある。カマドは残存状態が良くなく、底もあまり焼けておらず、それほど長期に利用されていたとは考えられない。カマドの袖は北側はロームを掘り残したものを芯としているが南側にはこれはなかった。カマドの埋土は東に焼土が多く、西に炭粒が多かった。西の壁にもカマドかと思われる掘り込みがあるが、明らかではない。柱穴、貯蔵穴、周溝といった施設はみられなかった。遺物はカマドとその周辺に集中している。いずれも埋土中に浮いた状態の出土である。その時期を明確にすることが困難な小片である。須恵器の破片などから平安時代の初頭に位置付けられるものと考えられる。

平安時代の遺構としては次に述べる中央診療棟地点の井戸、御殿下記念館地点の住居址がある。時期的にかならずしも一致するとは言えないが、いずれも沢のすぐ近くの台地の端にあり、類似した環境に居住していたことを示している。  
(小川 望)

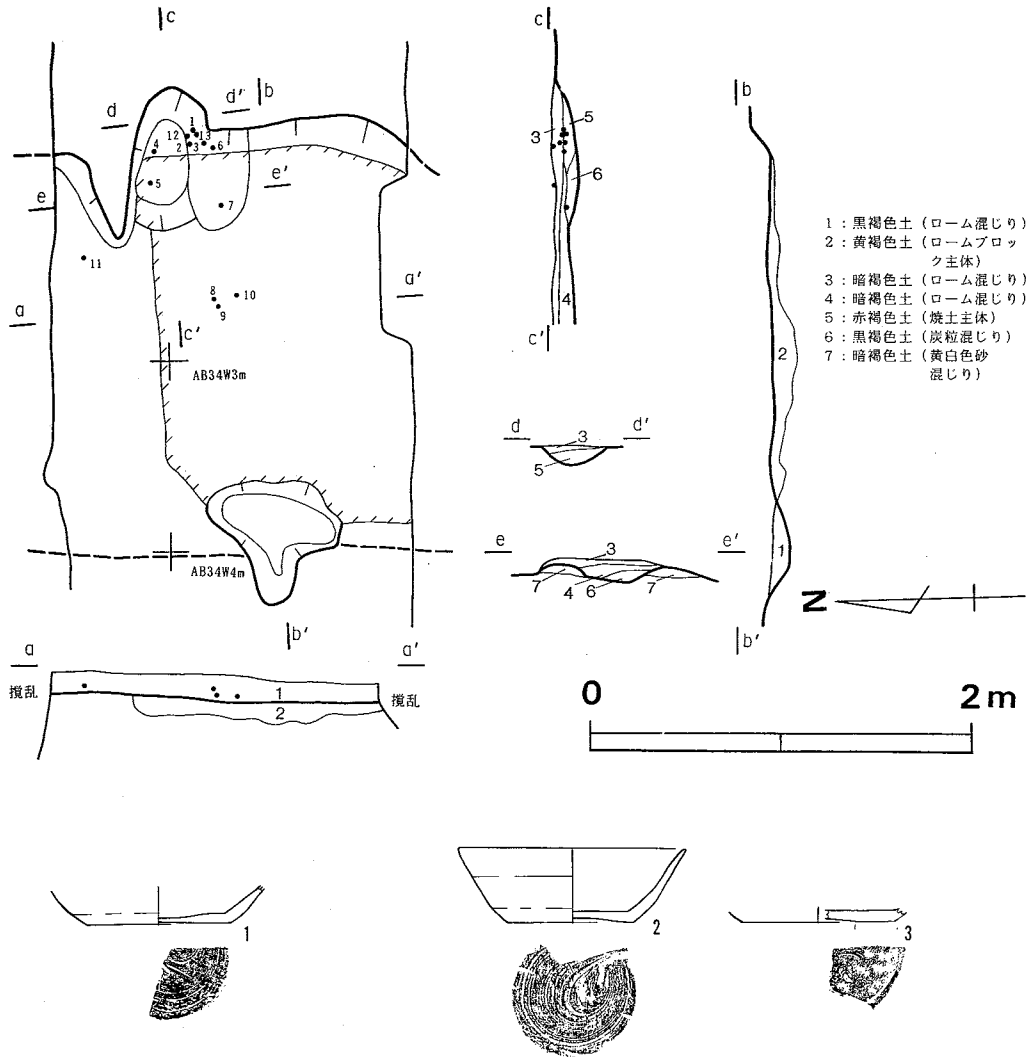
**遺物** 住居址の残存状態が良くないため、遺物の出土量は少なく、遺構を確認した時点で取りあげてしまったものを含めても、須恵器4点、土師器17点の総数21点の出土をみているのみである。

第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物

II-10 図の1は須恵器の坏形土器である。底径は、推定で7.4cmあり、色調は灰褐色、胎土はやや硬質で、砂粒を少量混じえている。底部は回転糸切り離しである。7cm前後の底径をもち、底部切り離し後、無調整のものはその初現段階であり、南多摩窯ではG37号窯式に相当する。このほか小片のみで実測はできないが、「コ」の字状を呈するいわゆる武蔵型の甕の頸部片などが出土しており、遺物群の年代は9世紀の前～中葉とみてよいであろう。(堀内秀樹)

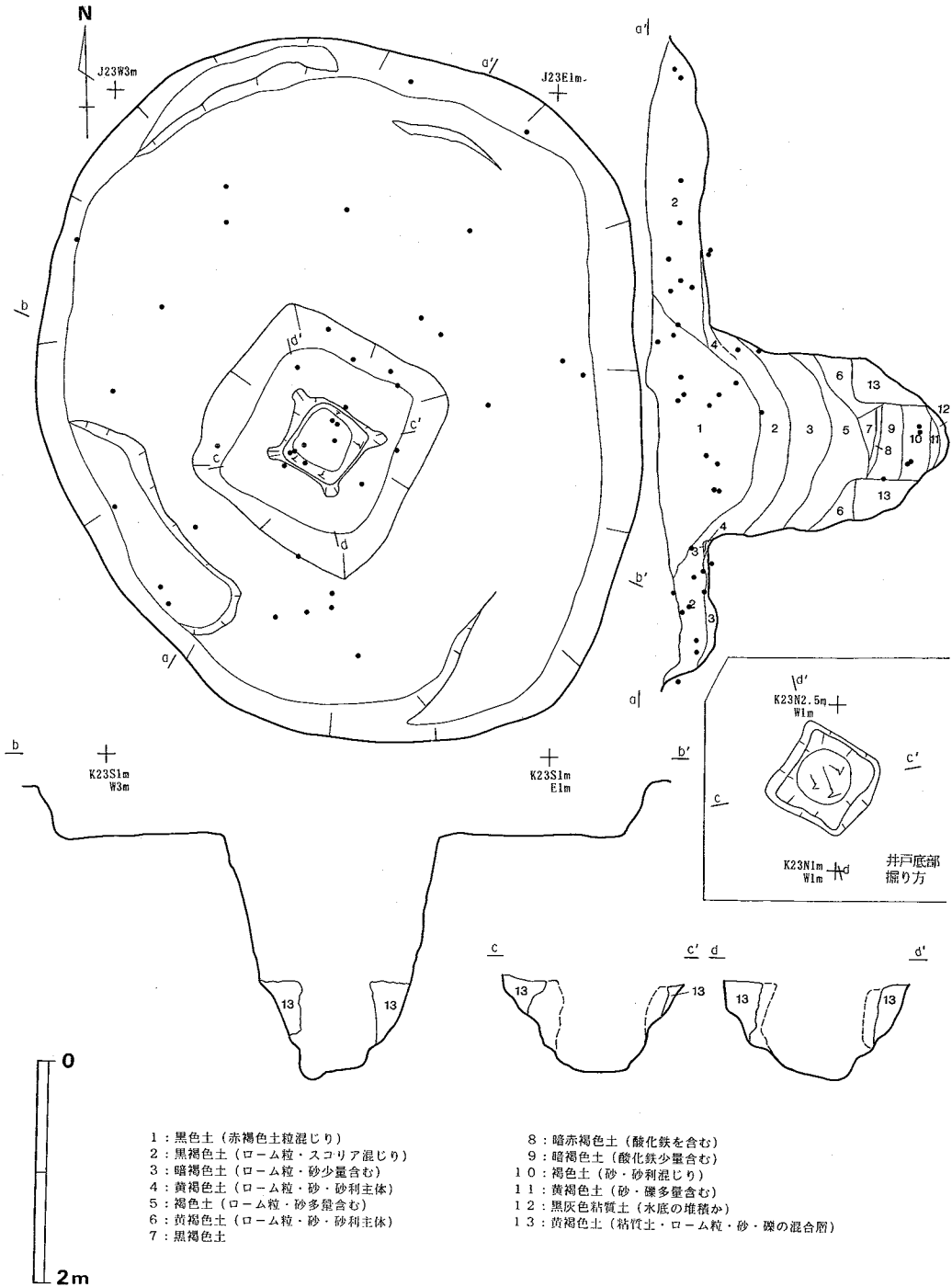
2 井戸

遺構 J23 区に主要部はあり、沢のなかに位置している。自然堆積の暗褐色土のなかで確認された遺構である。この部分上には6mに及ぶ厚い盛土がある。確認した面の標高はほぼ10mであり、井戸のもっとも深い部分の標高は7.3mで、地表下8.7mになる。井戸は二段になっており、南北6.3m、



II-10 図 4号住居址(水準:15.0m, 5.11~13:須恵器, 他は土師器, ハッチ:貼床)・平安時代の遺物

#### 第四節 平安時代の遺構と遺物



II-11 図 平安時代井戸実測図 (a-a'・b-b':10.2m, c-c'・d-d':8.4m)

## 第II章 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構と遺物

東西5.4mの不整な楕円形の皿状の掘り込みがあり、その底の中央やや南西よりに一辺2mのほぼ正方形の深い掘り込みがある(II-11 図, 写真1)。広い皿状の掘り込みの深さは0.5mで、底にはかなり凹凸があり、壁にも不明瞭な部分がある。深い正方形の掘り込みは、皿状の底から2.2mの深さがあり、底や壁は凹凸が激しい。一度底までU字形に掘り、その中央に一辺0.7m、深さ0.8mの正方形の水溜(宇野1982)を設けている。この正方形の部分の四隅には杭穴がある。痕跡は残っていないが板で作られていたであろう水溜の枠を支える杭のための穴であったものであろう。水溜の枠と掘り方の間には粘質土・ローム・砂・小粒の礫からなる黄褐色土(II-11 図の13)がしっかりと詰められていた。この部分の幅は約0.4mである。この詰め土は周辺のローム・本郷砂層をまぜあわせたものと考えられる。井戸側(宇野1982)はその形態からみて素掘りであったものであろう。水溜の深さが0.8m、井戸側が1.4m、合計2.2mになる。井戸はロームを完全に掘り抜き、さらに本郷砂層を0.5m以上掘っている。

埋土は水溜の底に水底の堆積を思わせる黒灰色の粘質土が薄く堆積し、その上には砂・砂利を含む黒～黄褐色土が堆積している。II-11 図の2の黒褐色土のなかには赤～褐～黒色のスコリアが少量入っている。このスコリアは東京大学理学部地理学教室(当時、現地質調査所)の奥村晃史氏によると一次堆積の状態と考えられるという。それは噴出・降下時の外形をほぼ完全にとどめているからとのことである。このスコリアと同一のものと考えられるスコリアは中央診療棟地点、給水設備棟地点の沢のなかで沢を埋める黒褐色土の上部に広く認められるし、1・2号住居址の埋土の最上層にもみられる。このスコリアについては既に触れているように多摩ニュータウンのII<sub>B</sub>層(阿部1983・上条1984)などに見られる富士山の800(延暦19)年および864(貞観6)年の噴火に由来するものであった可能性が強い。

遺物は図にもあるように特定の集中を持たず、小片がまばらに発見されたのみであり、その多くは須恵器、土師器であるが、弥生土器の破片も含まれている。そのなかでは中央の掘り込みの上部で発見された須恵器の坏が器形を窺いうるものである。(小川 望・藤本 強)

遺物 総数で40点ほどが検出されている。小破片が多く、このうち実測することができるのは須恵器の坏形土器2点のみである。II-10 図の2(写真1)は口径12.0cm、底径6.5cm、器高3.8cmで、色調は青灰色である。胎土には砂粒が少量混入する。底部は回転糸切り離し後、無調整である。II-10 図の3は底部片で、推定底径は8.0cm。色調は灰白色、胎土には砂粒を中量と海綿状骨針を微量混ざる。底部調整は回転糸切り離しの後、周辺部をヘラケズリしている。口径、底径、含有物などの諸特徴より、2はG37号窯式に、3は前内出1号窯式に比定できると考えられる。年代的にも4号住居址と同様の年代と推定できよう。(堀内秀樹)



## 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

### 第一節 中央診療棟建設地点の概要

中央診療棟建設地点の調査の経過については既に第Ⅰ章でかなり詳しく述べているので繰り返すことはしない。ここでは中央診療棟地点は広いので、そのなかにどの時期にどのように遺構が存在しているのかに主題を絞って記述していくことにする。といっても近代以降の破壊によって全く遺構の残っていないところもあり、十分に記述できないところが多いが、大聖寺藩の上屋敷についてはかなりの部分を調査していることになるので、絵図・資料などを参考にしつつ記述していく。

#### 1 『大聖寺藩史』と絵図

まず主として『大聖寺藩史』（1938 大聖寺藩史編纂会）から関係のある事項を抜き書きしておくことにする。この調査地点は江戸時代にはまず加賀藩の下屋敷が置かれていたところで、1639年に大聖寺藩と富山藩が加賀藩から分れて成立したあとは南側の大部分が大聖寺藩の上屋敷に、北側が富山藩の上屋敷になったと考えられるところである。『大聖寺藩史』によると大聖寺藩の初代の藩主利治が当時加賀藩の下屋敷の一部であったこの地点に居を定めたのは寛永四年(1627)であり、寛永十六年(1639)六月に当時の将軍家光の許しを得て加賀藩から分れて大聖寺藩の藩主になってから後もこの地点に居住したとされている。この頃は22ライン（12号組石）の東は證人屋敷であったものと考えられる。證人屋敷は寛文五年(1665)にこの制度が廃止されてもそのまま加賀藩の長屋として利用されていたようであり、證人屋敷の大部分の土地が大聖寺藩の上屋敷になるのは天和二年(1682)の火災のあと天和三年(1683)八月のことであるとされている（『越登賀三州志』:525）。同年三月の記録にはこれと若干齟齬するものがあるが（『加賀藩史料』第四編:703～704）、これはそのとおりに実施されたとは記録されていない。考古学的な成果と対照すると、『越登賀三州志』の記載が妥当なものと考えられる。三月から八月の間に変更があったのであろう。八月には富山藩との境界にも変更があったものとされている。この境界の変更は大規模なものであったことが推測される。この火災のあと本郷の加賀藩の下屋敷は同藩の上屋敷になる（『加賀藩史料』第四編:705～706）。證人屋敷の土地は前面37間、後背39間、横東50間・西59間であったとされている（『越登賀三州志』:525）。

慶安三年(1650)に加賀藩の本郷の下屋敷が火災にあったときに利治の父親で加賀藩の三代の当主であり、当時は隠居していた利常が利治の居宅に身を寄せ、利治の屋敷の贅沢さを叱ったとする記事があるところからみると、この頃には大聖寺藩の屋敷は完成していたと考えることができよう。したがって、17世紀の第二四半期に第一期の大聖寺藩の上屋敷はできあがっていたと考えられる。

大聖寺藩の上屋敷が火災にあうのは天和二年(1682)十二月、元禄十六年(1703)十一月、享保十五

## 第一節 中央診療棟建設地点の概要

年(1730)一月、元文三年(1738)一月の四回である。これら四回の火事では、上屋敷は全焼したと考えられる。そのつど新築がなされたものと考えられる。このあとは幸い火災にあうこともなく幕末を迎えるのであるが、文政八年(1825)十二月にはごく一部を焼く火災に見舞われている。18世紀の前半に三度も火災にあっているのが注目される。

江戸のことではないが、国許の大聖寺では元禄六年(1693)七月に居館が全焼している。これは新しく居館を建てることもなく、十年以上もそのままにされ、居館の建築にかかるのは当時の藩主利直が元禄十六年の江戸の上屋敷の火事のあと国許入をする宝永元年(1704)六月のことである。利直が藩主になってから一度も国許に帰っていないということはあるにせよ、国許入にあたっては家老神谷内膳守應の家に入るというのはかなり理解に苦しむところである。その年の十一月に一部完成した新殿に入っている。利直が二度目の国許入をするのは宝永六年(1709)年六月のことである。居館が完成したからではないかと『大聖寺藩史』ではしているが有り得ることであろう。『大聖寺藩史』ではその原因を藩財政の窮乏に求めているが、大聖寺藩の財政状況がもっとも逼迫するのはこのあとの18世紀の四～六代の利章・利道・利精の時期であるとされているので、その折の窮乏ぶりがわかっていこう。この頃の『加賀藩史料』に出てくる大聖寺藩関係の記事は加賀藩に借金を申し込む記事が多く、あとは参勤交代に関するものがあるだけである。この時に建てられた大聖寺の居館はそのままほとんど手を加えることなしに幕末を迎え、さらに昭和9年に火災で焼失するまで存続していた。江戸の上屋敷でも、18世紀の半ば以降手を加えずに利用していたことが考えられる。

資料から見ると大聖寺藩の上屋敷が改変されたのはこれら四回の火災の後と考えられる。つまり17世紀の第二四半期にまず新築がなされ、この時の建物は天和二年の火災で全焼し、17世紀の第四四半期に證人屋敷の一部を取り込んだ形で再建される。これは元禄十六年の火事で焼失する。二回目の再建はこの後、18世紀の初頭になされたのであろう。国許の居館の建築も延ばしているのだから、江戸の上屋敷の建築がどの程度のものであったかのかは不明であるが、従来のものより少なくとも贅沢ではなかったことが考えられる。規模も小さめであったかもしれない。この時の再建された上屋敷は享保十五年に焼けている。三度目の再建がされるが、これまた元文三年に焼失してしまう。四度目の再建が18世紀の第二四半期の間になされたことであろう。これが幕末まで存続した上屋敷の原形になったものであろう。文政十二年に加賀藩に借地をして新しい建物が建築されているが、これは西北の隅のことであり、中心部分には関係ない。

このように資料を見てきたのであるが、大規模に遺構が廃棄される可能性のあるのはそれぞれの火災の後のことになろう。天和二年の火災すなわち1682年、元禄十六年=1703年、享保十五年=1730年、元文三年=1738年である。56年間に四回の遺構が廃棄された可能性がある。

大聖寺藩の上屋敷の絵図面はきわめて少ない。『大聖寺藩史』に収録されている文化年間かとされる絵図が屋敷のなかの様子を伝えているもので、このほか尊経閣文庫所蔵『[加賀藩前田家]御上屋鋪御地面之絵図』(天保13年 1842年、以下「天保図」と略称)に上屋敷の土地の区画についてかなり詳しい記載がある。この図と今回の調査によって明らかになった成果との照合については本章の第三節の道路の項および第五節の概要に記述してあるので、多くは述べないが、この図はかなりの精度をもっているものと考えられる。また現在この図ともっともよく符号すると思われるのは文



### 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

京区立「たんぼぼ保育園」と講安寺の境である。「たんぼぼ保育園」の敷地の東端といったほうがより正確であろう。ここは江戸時代の講安寺との境界をそのまま残しているとみられるところで現在の無縁坂に続く道も江戸時代の様相をよく伝えているものと考えられる。「天保図」によると大聖寺藩の上屋敷の東南の角は現在の「たんぼぼ保育園」の東南の角から道路沿いに五間（あるいは六尺三寸間か）西のところにあったものと推測される。また大聖寺藩の上屋敷の南の境界は大学の用地と無縁坂に続く道との境と一致しているとみられる。

## 2 大聖寺藩の上屋敷の範囲

まず上屋敷の輪郭を推定してみたい。付図1にも見られるように22ラインのやや東に石組の溝である12号組石が南北方向に延びている。この溝は火災に際して廃棄されたことは確実である。さきに見た四回の火災のなかでは天和二年の火災の蓋然性がもっとも高い。この火災を期に12号組石は地境としての機能を完全に失う。天和二年までの大聖寺藩の上屋敷と證人屋敷の西の部分が一体化したことを示すものであろう。これらから12号組石が天和二年までの證人屋敷の西端であった可能性が高いといえよう。さらに「天保図」の講安寺との地境がどこまでさかのぼるかは明らかではないが、仮にそれが天和年間までさかのぼりうるとすると、無縁坂に続く道路を南限に、12号組石を西限に、「たんぼぼ保育園」と講安寺の境を北に延長したものを東限に、10号組石を北限にしたものが、證人屋敷の敷地であったと推測できる。既に見たように、『越登賀三州志』によると證人屋敷の敷地は前面37間、後背39間、横東50間・西59間であったとされている。12号組石がそのまま南に延びて無縁坂に続く道路までであったとすると、その交点と講安寺の西端との距離は68mほどである。37間は江戸間では67.27mである。12号組石と10号組石の交点から無縁坂に続く道までの距離は、正に江戸間で59間である。12号組石と10号組石の交点およびそこから真東に向かい講安寺との地境の北への延長線の交じわる点、両者の間の距離は70m強である。江戸間で39間は70.90mである。東の50間がどのようになっていたのかは明らかではないが、10号組石は調査区のなかで見るとはそのまま東に向かっているもので、どこかで南にむかって曲がっているであろう。この他の南限・西限・北限の距離は文献資料とほぼ一致しているとみてよい。延宝七年(1679)三月板とされる「江戸方角安見図」乾<sup>1)</sup>(『古板江戸図集成』巻四、以下「延宝図」とする)には證人屋敷の名称で掲載されている。この図には證人屋敷と大聖寺藩の上屋敷の間に道があったことになっている。この道が無縁坂に続く道と交差するところに門があったように描かれている。これが「黒多門」であろう。また證人屋敷と富山藩の上屋敷の間、大聖寺藩の上屋敷と富山藩の上屋敷の間にも道があり、大聖寺藩の上屋敷は北の方向にかなりの部分が張り出している。さらに、大聖寺藩の上屋敷の西端は「天保図」よりも西にあり、無縁坂に至る道の北西の角まで西端が延びていたことになる。「延宝図」が正しいとすると天和三年の境界の変更はきわめて大規模なもので、天和三年三月の「口上之覚」は実行されず、別の形で加賀藩・富山藩・大聖寺藩の境界の変更がなされたものと考えられる。後で見るように考古学的な成果と一致するところがある。

證人屋敷に関する文献資料と考古学の成果がほぼ一致したことにより、12号組石は天和二年までの證人屋敷の西端であったこと、加賀藩・富山藩・大聖寺藩の相互の間の問題は別にして、これ

## 第一節 中央診療棟建設地点の概要

らを統合した前田家の屋敷と講安寺との地境は少なくとも天和二年以前にさかのぼること、10号組石は天和二年までの道と證人屋敷の境であったこと、6号組石南北部分は大聖寺藩の上屋敷の東端であったこと、無縁坂への道はこの時点で現在とほぼ同じ四間幅になっていたこと、中央診療棟地点の1・2号石列で推測されていたことではあるが、少なくとも天和二年には江戸間により距離が算出されていたことなどが確実にいえることになろう。また無縁坂に続く道路の方向は真南北ではなく今回の調査で採用したグリッドの方向とほぼ一致すること、現在の医学部附属病院の建物の方向と一致していること、講安寺との地境は明治時代以降に大学の用地が東にかなり入り込むことにより、距離が短くなっているのが確実ではないが、道と直角の方向と比べ、40°ほど東への振れが少なくなっていることも明らかになった。この地境が無縁坂への道と直角であったならば、12号組石と10号組石の交点からの距離は71mほどになり、文献による距離とさらに近くなる。

10号組石はおそらく12号組石と同じ時に廃棄されたものと考えられるが、その後身として6号組石が作られ、以後の大聖寺藩と富山藩の上屋敷の地境になる。これは西になると四間北に張り出すのであるが、その張り出す位置は時期によって違いがあったようで、24～28ラインにかけて東から3号組石北部分、東が確認出来ていないが2号組石、13・4号組石、IV区1号溝などが南北方向に走りその時々地境になっていたものと推測している。6・10号組石から四間北にいったところに2号組石がある。これは天和三年以降大聖寺藩と富山藩の地境になっていた石組の溝である。無縁坂への道から北に江戸間で63間の位置にある。「天保図」に記載されている距離とズバリ一致する。天和三年以降の大聖寺藩の上屋敷の西限は、今回の調査では調査していないので明らかではない。ただ「天保図」によって43ラインの東1m～2mの位置にあったものと推測するに留まる。以上のように絵図と『大聖寺藩史』と今回の調査による成果を総合して、もっとも基本になるであろう天和三年以降の大聖寺藩の上屋敷の敷地の境界を推定した。かなり確度の高い推定であろうと考えている。今後の調査によって確かめることの必要な問題である。なお、「天保図」にある富山藩上屋敷の西端は大聖寺藩上屋敷の西北端から22間である。「天保図」から推定した大聖寺藩の西北端からV区1号溝の西端までは40mである。40mは江戸間で22間である。ズバリ一致している。

V区1号溝の北への曲がりには「延宝図」にある天和三年以前の大聖寺藩の上屋敷が北に張り出す部分の東側にある南北方向の道の角である可能性が強い。つまりV区1号溝は道の東西部分の北側と南北部分の東側にあたっており、道の南北部分の西側はごく部分的にしか残っていないが、E36-6の溝状の遺構であろうと推測される。道の南側はE30-2、IV区3号溝を結ぶ線であろう。この線とV区1号溝との距離は7.6mであり、六尺三寸間の四間になっている。V区1号溝の南北部分とE36-6は幅60cm、底の深さは13.2～3mとほぼ一致している。間の距離は7.2mであり、江戸間の四間にあたる。道の両側の溝と考えることができよう。道の東西部分と南北部分では、基準になる尺度が変わっているようである。道が作られた時期が若干異なることを示しているのであろうか。この道の南北部分の東側はそのまま天和三年以降の富山藩の上屋敷の西端になるのであろう。

天和三年八月以前の大聖寺藩の上屋敷の境界は東が6号組石南北部分、北はIV区3号溝とE30-2を結ぶ線を西にたどり、E36-6に至りこれを北上する。「延宝図」によると、西端は50ラインの西4mほどのところになる。現在の竜岡門の前で東に曲がった道がすぐに北に曲がるが、この道の北の延

### 第三章 江戸時代の遺構

長上まで西端はきていたものと考えられる。「天保図」よりも西端は22間西にあったことになる。講安寺との境から江戸間で120 間西の位置である。北側への張り出しの北端は調査区の外になる。先の證人屋敷の記載、前面37間、後面39間、道幅8 間を120 間から引くと、大聖寺藩の上屋敷の東西は前面75間（調査結果からの推測は約74間）、後面73間（同じく約72.5間）になる。南北は記載も調査結果も一致し、59間である。この部分の面積は4350坪ほどである。大聖寺藩の上屋敷の天和三年以前の面積は5705歩とされているので（『加賀藩史料』第四編:704）、1350坪ほどが北に張り出していたものと考えられる。屋敷の西端から E36-6 までの距離は40.7間と推測されるので、33~34間ほど北に張り出していたものと推測される。西側が92~93間、そこから東に40間ほどいき、南に33~34間いって、再び東に33間ほどいって、南に59間いって、無縁坂への道路になる。道路に面したところが74~75間というものであったものと思われる。天和三年以前の南北に長い屋敷からそれ以降の東西に長い屋敷に変わったものである。史料と実際はほぼ一致しているので、確度は高い。元禄元年(1688)の尊経閣文庫所蔵『武州本郷第図』では西の加賀藩との境界は「天保図」と同じになっており、この時点で境界の変更が出来上がっていたものと考えられる。

### 3 大聖寺藩の上屋敷の内部

屋敷の内部に関しては『大聖寺藩史』・絵図の情報が今一つのこともあり、また破壊が著しいため、十分な復元はできない。遺構のなかから出土した遺物の年代を下限にして、さきに述べた四回の火災の記録を参考にして、大まかな時期を追いつつみていくことにする。私達が考古学的な調査で知ることのできるのは遺構の放棄された年代である。この遺跡の場合には遺構のなかで使用されていた遺物がそのまま出土するということはまず考えにくい。遺構のなかから遺物が出土したといってもほとんどの場合、屋敷の改変にさいして遺構を廃棄もしくは放棄することになり、そのなかに不要なものを捨て、それを私達が遺構のなかから発見するという形である。したがって、遺構内の出土といっても使用状態のまま「遺棄」されたものはまず無く、遺構を廃棄する時に不要なものを遺構のなかに投棄したという性格のものがほとんどであろう。このような性格の遺物であるので遺物のなかでもっとも新しい年代のものがその遺構の廃棄の年代を示すことになる。その遺構の構築の年代を知ることには多大の困難があり、遺物とは別の次元で考えなければならない問題になる。遺構そのものの持つ属性を分析していくことが必要になろう。日常的な廃棄の場であれば、遺構の構築から廃棄までの期間はきわめて短いことが想像できるが、屋敷の改変にともない遺構を放棄することになると、屋敷の改変がない限り遺構は使い続けられることになり、その構築から放棄に至る期間がどの程度であるのか一概に決めることはできない。理論的にはともかく実際的にはもっとも新しい遺物の年代をもって、遺構の廃棄の年代にして考えていかざるを得ない。こうした限界を念頭に置きつつ時期を追ってみていく。

#### 17世紀前半

この時期の遺物を出す遺構はきわめて数が少ない。遺物の数も限られている。一つには屋敷の改変というよりは新築が主であったからであろう。IV区1・3・4号溝、H28-4 の溝、D35-1, L23-1, L22-1, K22-2, H23-4 などの土坑、池である。また層位的にみてI区1号溝、III区2号溝、IV区2・

## 第一節 中央診療棟建設地点の概要

7・8・9号溝，V区1・2号溝などがこの時期に作られた可能性がある。ほかにもH24-4の溝，I24-1・2，J24-1・2などの土坑がこの時期に作られている可能性があるが明確ではない。地境の溝と考えられるものが圧倒的に多い。ほとんどの遺構が自然堆積の面に掘られている。このなかでⅢ区2号溝，Ⅳ区2号溝，H28-4はほぼ直角であり，一連のものであった可能性があり，その後の大聖寺藩の上屋敷の地割の方向と異なった方向をもっているため，一段階古いものであった可能性がある。Ⅰ区1号溝は真南北方向ではないが，Ⅲ区2号溝などは別の方向である。やはり古い可能性がある。他の地境の溝はほぼ真東西南北の方向をしており，その後の屋敷と共通した方向である。屋敷の地割の基本的なものはできあがっていたのであろう。池からは寛永六年(1629)銘の木札，多量の「かわらけ」・木製品などが出土している。12号組石の東では確実にこの時期の遺物を出す遺構は確認できていない。石組の溝にもこの時期の遺物を出すものはない。

これらの遺構を見ると，生活に関係した遺構がほとんどないのが目につく。17世紀前半の遺物を出す遺構というのはその時点で放棄されているものと考えられるので，17世紀前半に構築されていても使われていれば，17世紀前半の遺物は出さないことになろう。17世紀前半に放棄されている遺構はその後の屋敷の新築によって改変されたものに限られることになろう。またこれらの遺構には焼土がほとんど見られないのも一つの特長であろう。つまり火災にさいしての放棄ではなく，新たな工事・建築にさいしての廃棄ということになろう。17世紀前半の大部分の時期には庭などを含む広いオープンスペースとして利用されていたものであろう。

『大聖寺藩史』によると，初代の藩主利治がこの地点に居住し始めるのは寛永四年(1627)であるとされている。利治はこの年には満9歳であり，それほど大規模な居宅を作ってはいなかったであろう。この時に作られていたであろう居宅はその後とも住み続けられ，増築された可能性はあるものの屋敷の大きな改変がなされるまで考古学的には把握できないことになる。寛永十六年(1639)とされる利治の大聖寺藩主就任以降に上屋敷として大規模に整備されたと考えるのが妥当であろう。先にも触れたとおり，慶安三年(1650)頃までには上屋敷として整備が終っていたものと考えられるので，大聖寺藩の上屋敷としての新築工事は17世紀の前半の時期にあたるのであろうが，この遺跡の場合建築の基礎すらほとんど残っておらず，発見しているのは地下深く掘られた遺構のみであるので，考古学的にはその新築の時期を定めるのは不可能である。この時期に構築されたほとんどの遺構は天和二年(1682)の火事で放棄されることになる。次の項でみることにする。

### 17世紀後半

この時期の遺物を出す遺構は数が多い。そのほとんどが埋土に焼土をもっており，火事によって廃棄された遺構と考えられる。その火事は天和二年の火事であろう。大聖寺藩の初代の藩主利治がここに居住するようになって以来，天和二年に焼失するまでに作られた遺構が主体を占めていると考えられる。地下式土坑，井戸，土坑，厠の下穴，石組の溝など多彩な種類の遺構がある。この時期の遺構が集中するのは6号組石南北部分の西，25ラインと33ラインの間，北は2号組石の南7m強から，南はMラインまでの部分である。これらに囲まれたなかの南東の一角にはこの時期の遺構は確認できていない。深くまで破壊されていたからであろうが，元来遺構が少なかったかとも思える状況である。生活に関連した遺構が多いのも注目される点であろう。屋敷の主要部分であっ

### 第三章 江戸時代の遺構

たことを示していよう。これらとともに12号組石の東にも井戸と土坑が中心であるがかなりの数の遺構がみられる。ここには礎石も上下の二段にあり、居住部分であったことを示している。

27ラインの東から12号組石にかけて、上・下の砂利面と呼ぶ舗床面が構築されるのもこの時期であろう。10・12号組石もこの段階で完成している。27ラインの東の盛土面と遺構との対比は6号組石の項で詳しく述べている。他の遺構との関連はかならずしも明らかではないが、特に27ラインの西の台地の上の遺構との関連を知ることはできないが、27ラインの東、12号組石の西には1629年より後に厚い盛土がなされ、その上に下の砂利面が作られる。この面は北はIV区3号溝、5号組石などによる線の北にはみられない。この面の上には遺構はほとんどない。舗床面として利用されていたのであろう。27ラインより西に利治らの居住部分はあったのであろう。それまでにおそらく庭のような形で存在していたものは27ラインの東では埋められ、広い舗床面が作られる。部屋住みの身であり、まだ若い利治のために広大な建物がすぐに作られたとは考えにくい。

次いでほどなくと考えられるが、6号組石の南北部分の西には1mを越える厚い盛土がなされ、その東の端には6号組石の南北部分からなる1m以上の高さのある石垣が築かれ、6号組石の南北部分の西は台地と同じ高さに造成される。間に3号杭穴列、F26-3・4などがあるので、何度かに分けて造成された可能性が強いが、時間的にはきわめて短い間であったものと考えられる。また27ラインの東全面に盛土があったかどうかについては疑問がある。というのは6号組石の南北部分の抜き取り溝は6号組石の東西部分の南18mほどのところで西に曲がっている。その先がどうなるかについては、後世の破壊が深くまで及んでいるため明らかではないが、この部分遺構が激減しているのは確かである。一つの可能性として、盛土は5号組石の南、江戸間で十間までであったとすることができようし、その可能性が高いと思われる。このようにすると、北側の5号組石も石垣であった可能性が出てくる。後に触れるが天和二年の火災の前には、5号組石と2号組石の間の部分は大聖寺藩の上屋敷であったかどうか疑問がある。「延宝図」の道路であった可能性がある。この部分には砂利面はなく、盛土もなされていない。17世紀後半の遺物を出す遺構もほとんどない。明らかに土地利用のあり方に差がある。一段高い部分に「御殿空間」が成立したのであろう。

6号組石南北部分の東には上の砂利面が作られる。南北部分を境にして1m以上の段差があり、そこに6号組石南北部分の石垣があったものであろう。上の砂利面は12号組石まで延びている。北は後に6号組石東西部分になるところであり、南は破壊されていて不明であるが、東西の幅江戸間で八間ほどのところに舗床面が構築されていたものと考えられる。この上にある遺構は1・2号杭穴列だけである。12号組石はこの段階でできあがったものと考えられる。この上の砂利面と呼ぶ舗床面をどのようにとらえるかというのが問題である。一つの可能性としては「延宝図」にある道路として把握するものである。このようにすると実行されなかった可能性が大きいですが、天和三年三月の「口上之覚」の第二項である八間幅の道路の幅を五間にするという記事によく適合する。難点はこれにつながることになっている東西方向の道が確認できていないことにある。東西方向の道があったと思われる部分は5・10号組石と2号組石の間の四間の部分であるが、ここには舗床は発見できなかった。土地利用には大きな差があるのであるが、舗床は確認できていない。この部分は破壊が深くまで及んでいるところであるので、完全に壊されてしまったことも考えられるが、上の

## 第一節 中央診療棟建設地点の概要

砂利面と同じ深さではいくつかの遺構が確認できている。2号組石の南に部分的にあった硬化面が道であった可能性がある。上の砂利面を切る形で6号組石は構築されている。道を溝がよぎるのは若干問題があるようにも思われる。10号組石が12号組石とぶつかる辺りから西ではっきり確認できなくなるのは道であった可能性を示すものかもしれない。となると6号組石の東西部分の構築年代を天和三年以降と考えることも必要になろう。もし上の砂利面が道であるとする下の砂利面とは性格が異なることを考える必要がでてこよう。

12号組石の東は證人屋敷があったところで、天和二年の火災の前にあった遺構は大きく三期に分けることが可能である。自然堆積の面にある遺構、L面と呼ぶ面にある遺構、K面とした面にある遺構である。K面の遺構が火災にあっており、上の砂利面、12号組石とともに天和二年の火災のあと廃棄された遺構である。これには1・2号石列と呼ばれる礎石群があり、H20-4などの土坑がこの面にある。1・2号石列は1.8mを基準にしている礎石列であり、少なくとも1682年以前に江戸間による建築が行なわれていたことを示す遺構である。L面はK面の下にあり、両者にどのくらいの時間差があるのかは明らかではないが、ここにある3・4号石列は1.9mを基準にした礎石群である。遺存状態はきわめて悪く、多くを語ることはできないが、K20-1の井戸はこの面にある遺構である。建て替えがなされたことは明らかであるが、それが何時であるのかは不明である。証人制度の廃止に伴う建て替えである可能性もあるが、確たる根拠はない。六尺三寸間から江戸間への転換を示す貴重な層位的な発見例であるので、時期を認定できるものをさがしたが、確実なものは得られなかった。この下の自然堆積の上面には井戸・土坑がある。江戸時代の初頭のものであろう。

以上のようにかなり広い範囲に建築物などの痕跡が見られるが、天和二年の火災で廃棄された代表的な遺構が集中しているのは6号組石南北部分(25ラインの東2.5m)を東限とし、33ラインを西限とし、5号組石・E30-2(Fライン北1m)を北限とし、南は6号組石の南北部分の西へ曲がる部分とI29ポイントを結んだ線、I29ポイントから29ライン沿いに南下する線で囲まれた部分ということになる。南の限界がどこまでであったかは明らかではない。

この部分にはF30-1・F31-1・G33-10と東西に連なる大型の地下式土坑、間は破壊されてははっきりしないがG32-1・L32-1と南北に連なる地下式土坑がある。前者はほぼ7.5mおきに入口があったものと推測され、東の延長上にはやや規模は小さいが、F27-2がある。F27-2からF30-1までは11.5mの距離がある。これは六尺三寸間の六間に近い。7.5mは六尺三寸間の四間に近い値である。G33-10からL32-1までは28.5mほどあり、六尺三寸間の十五間に近い。これらはほぼ真東西、真南北に並んでいる。単に偶然とするには方向・距離が整いすぎている。計画的な配置がなされていたものと考えるのが妥当であろう。このほかH32-5とした巨大な地下式土坑もあり、G27-1とした凝った作りの井戸もある。I31-1の厠の下穴、E25-3の排水に関係するかと考えられる施設もある。いずれも丁寧な作りであり、規模も大きい。上屋敷の中心部分の遺構としての内容の高さと規模の大きさをもっている遺構ばかりである。いわゆる斑状の土のあるところでは、斑状の土に覆われている。ほとんどの遺構が埋土に多量の焼土をもっている。吉田氏(1988:22)の「御殿空間」が、この地域にあったことは明らかであろう。礎石ははっきりしたものはない。F25-2に玄関部分の可能性があるが、距離の基準がわからない。他の礎石は完全に破壊されてしまったと考えるのが妥当である

### 第三章 江戸時代の遺構

う。

10・12号組石をはじめとする屋敷の境界になる組石もこの時期に整備されていたものと考えられる。しかし、2号組石・6号組石東西部分が、この時期に他の組石とともに構築されていたかという若干の疑問がある。一つは先にも触れたように、2号組石と5号組石の間はこの時期には「延宝図」の道であった可能性が強く、富山藩と大聖寺藩の境界ではなかった可能性があること、IV区3号溝、E30-2と続く土の溝が大聖寺藩の北の境界になっていたであろうこと、10号組石と2号組石の間の段差が大きいことなどが理由としてあげられよう。あるいはV区1号溝もしくは2号溝が地境の溝として機能していたことも十分に考えられる。2号組石・6号組石東西部分は天和三年の境界の変更以降に作られたと考えるのが妥当ではないかと思われる。

はっきりはしないが、この時期には屋敷のなかには六尺三寸間十五間で地割されていた可能性がある。12号組石の下の本樋から27ラインのやや西にある道状の遺構の東端までが六尺三寸間で十五間であり、道状の遺構からL32-1とG32-1を結ぶ線までが六尺三寸間ほぼ十五間である。道状の遺構の北の延長上にはIV区1号溝があり、ここが地割の重要な点であったことを示している。また共同溝のV37-1・V33-3・V31-7と続く地境の溝の可能性のある遺構の12号組石との交点から設備管理棟地点の2号杭穴列の延長上、言換えるなら上屋敷の南端との間の距離も六尺三寸間のほぼ十五間である。途中がわからなくなったり、調査をしていないところを延長上で推定したりしているが、これだけの類例があると単に偶然とは言い切れない面がある。12号組石の無縁坂に続く道路との交点を基点にして、南北方向にも東西方向にも六尺三寸間の十五間で地割されていた可能性がある。これを基本にしてさらに分割するなどして当初の屋敷内の地割がされたのではないであろうか。證人屋敷と大聖寺藩の上屋敷の間にあった可能性のある道路は富山藩と大聖寺藩の成立のあと出来たものであると推定することができよう。地割はそれ以前になされていた可能性もある。

いずれにせよ、この時期の遺構は作りが丁寧である。『大聖寺藩史』にもあるように利治は趣味人でもあり、一流好みであったものと考えられる。それが屋敷の作りの隅々にまで反映していると見ることができよう。また後の時期に比べれば財政的にも豊かさをもっていたものと考えられる。それは遺物の面にも見られる。L32-1の出土品にも見られるように中国製の青花をはじめ、肥前産の染付などどれをとっても最上級のものが中心になっている。また当時既に伝世品になっていたものも集められている。最上級のものを見る眼、それを集めることのできる財力を兼ね備えていたのであろう。こうしたことがF27-1を初めとする遺構からも出土している「古九谷」の創造に駆り立てたのもあろう。種々の面に藩創立当初の勢いが現われていると思うのは読み込みすぎであろうか。盛土一つとってもこのあとの時期よりも丁寧な盛り方がされているように思われる。

この時期に属すると考えられる大聖寺藩の長屋(吉田氏の言う「詰人空間」)に関連すると思われる遺構は中央診療棟地点だけでなく、他の調査地点でも全く確認することができなかった。『大聖寺藩史』所収の文化年間かとされる絵図には主たる建物の周辺にかなりの数の長屋と考えられるものが描かれている。しかし、この絵図で長屋が描かれているところも今回調査しているのであるが、この時期に関しては全くそれらしい遺構を確認することができなかった。設備管理棟地点では17世紀後半の遺物を出土しているのはわずか2遺構のみであり、7号溝と呼ぶ遺構と六尺三寸間で建て

## 第一節 中央診療棟建設地点の概要

られたと考えられる1号礎石列さらに上屋敷と無縁坂に続く道路との境であったものと出来る六尺三寸間の2号杭穴列にその可能性があるくらいで、はっきりと遺物の面から年代が押えられる遺構は見当たらない。調査していない部分に長屋があったのか、地下深くに残るような大規模な構築物がないのですべて壊れてしまったのかは不明である。今後の調査の一つの重要な課題である。

### 17世紀末から18世紀初頭

天和二年以降元禄十六年までの間に建てられ使用されていたと考えられる遺構である。まず天和二年の火災を期にして大きく変化したと考えられ、そのままおそらく幕末まで続いたと考えられる大聖寺藩の上屋敷の境界について見ることにしたい。既に見ているようにこの点に関しては、天和三年三月の記録がある(『加賀藩史料』第四編:703~704)。これは実行されずに、この年の八月に別の形で境界の変更がなされた可能性が強い。この時点で『大聖寺藩史』所収の文化年間の絵図の形になった可能性がある(『越登賀三州志』:525)。その後、富山藩との間で、若干の地境の変更はあったであろうが(「聖藩年譜草稿」)<sup>1)</sup>『大聖寺藩史談』所収:4,『加賀市史料』(六)<sup>1)</sup>:65, 大枠は天和三年の八月に定まったものと考えることができよう。

『大聖寺藩史』所収の文化年間の絵図と「天保図」との間では加賀藩からの借地を除けばほぼ一致する。この借地は文政十二年に加賀藩から942.5坪の借地をしていることが『大聖寺藩史』にも述べられており、「天保図」にある借地と『大聖寺藩史』にある記録の面積はおおむね一致するが、「天保図」の長さの記述に誤があるようで、細部では差異が生じる。

発掘調査の成果からするとこの段階で、6号組石の南北部分の東に大規模な盛土がなされる。それまでは段差があったものが、さらに道によって、大聖寺藩の上屋敷と證人屋敷に別れていたものが一連の平坦なものになる。5号組石と2号組石の間の土地にも土が盛られ、平坦になったものと考えられる。この盛土によって、6号組石南北部分・10号組石は盛土より遙かに下になり、用をなさなくなったものと考えられる。12号組石は地境の機能がもはや不要になり、その後身は構築されない。6号組石南北部分も段差のあるところの土留めの石垣が本来の機能であろうから、もはや必要ではなくなる。10号組石はなくなるが、6号組石に受け継がれ、整理された富山藩と大聖寺藩の地境としてさらに排水路としての機能を持ち続けることになる。6号組石は段を重ねることによって10号組石がもっていた機能を受け継ぐことになる。6号組石の積み方を見ると一気に最上部まで積んだものではなく、盛土も複数回に分けてなされた可能性が強いが、基本的な土地利用のあり方は天和二年の火災のあとに決まったものであろう。

33~27ラインに見られる黒色土とロームが斑状に混じる土もこの時期の構築であろうと考えられる。破壊されているところが多くならずしも十分な確認ができていないわけではないが、この時期の遺物を出土している遺構の多くは斑状の土を切って作られている。

2号組石はこの時点で作られた可能性がある。はっきりはしないが、それまでの2号組石の位置は地境としてかならずしも安定していたものでもなかったようであり、この期に初めて富山藩と大聖寺藩の地境になるからである。また発掘調査の成果によれば、2号組石の東端と10号組石の西端とは10mほどの距離なのに1m以上のレベル差がある。これは石組の溝のレベル差としてはきわめて異常な数値である。東の部分に盛土が進み東の部分の溝の底のレベルが高くなってから



### 第三章 江戸時代の遺構

2号組石が作られたと考えるのが妥当であろう。V区1・2号溝の底のレヴェルは西ではほとんど差がないか、むしろ新しい1号溝のほうが深い、東になると2号溝が深くなることも盛土の進行に合致したものと考えることもできよう。間接的な証拠ばかり列挙したが、幕末まで利用されたと考えられる2号組石がこの時期の構築になる可能性が強いと考えられる。間が四間ある2号組石と5号ないしは6号組石をつなぐ可能性のある石組の溝は東から3号組石北部分、2号組石南北部分、4・13号組石と4mほどの間に三か所がある。底のレヴェルは2号組石が若干高く、また13号組石と層位的な新旧関係があり、もっとも新しいことは確実であるが、3号と4・13号に関しては新旧いずれとも決める手掛かりがない。単なる排水路と考えれば同時に存在していたとしても問題はないが、破壊がひどいためはっきりしない。2号組石の南北部分は短期間のものであろう。

17世紀末から18世紀初頭にかけての遺物を出す遺構はかならずしも多くない。調査区の西から遺構が見られるようになる。E36-2・3・4、E35-4、F34-11などの遺構がこの時期の遺物を出土している。この前の時期にはほとんど遺構のなかったこの部分に遺構が出現する。かなり大型の遺構である。埋土に焼土を多量に含むものときほどでもないものがある。F34-11は後者の典型的な例であろう。周辺にはこれに切られた多くの遺構がある。F34-11に切られているF36-2は埋土に焼土を含み、火災によって放棄されている。天和二年の火災であろう。F34-11はこれを切って作られている。未完成のまま放棄された可能性が強いので、構築はこの間のことであろう。これらの遺構の存在は屋敷の改変に伴ない居住区が西に大きく広がったことを示していよう。

17世紀後半に中心のあった部分には確認している遺構の数は少なくなるが、やはり丁寧な作りの遺構が見られる。G31-1、G30-2、G26-2はほぼ東西に一線上にある類似の遺構であり、いずれも多量の焼土を埋土のなかにもっている。やはり火災に際して放棄したものであり、元禄十六年の火災で放棄されたものであろう。壁が内傾し、底より入口が狭い土坑で、「あなぐら」として利用されたことが推測できる。17世紀後半には無かったタイプの土坑であり、注目される。この時期と考えられる大型の階段付きの地下式土坑F27-1は遺物は少なく、明確な時期を知ることはかならずしもできないが、この時期に作られたものであろう。埋土の堆積状況から見ると、比較的短期間で放棄されたものと考えるのが良いようであるが、若干ではあるが埋土に焼土をもっている。このほかK29-1もこの時期の遺物をもつ地下式土坑である。ここに列挙した土坑はいずれも作りは丁寧であるし規模もかなり大きい。屋敷の中心をなす部分があったことを示していよう。土地利用の形としては中心部分では、天和三年に屋敷地の大きな改変があっても、前代のものを受け継いでいるとみてよからう。この時期から設備管理棟の調査区にも、かなりの数の遺構が出現する。X35-9、X34-1というタイプの異なる地下式土坑が眼につく。多彩な地下式土坑が作られるようになる。設備管理棟地点には、17世紀には少数の遺構しか確認できていないが、この時期になると遺構が増加する。

従来遺構の確認が少なかった中央診療棟地点の34ラインより西の部分、設備管理棟地点に遺構がかなりの数、しかも生活に関連する遺構が増加するようになるのは屋敷内の土地利用、さらに屋敷内のあり方に大きな変化が生じたとすることができようか。17世紀の後半には藩主等の居住したと考えられる「御殿空間」に関連すると思われる遺構しか確認できていなかった。遺構の数は減るが17世紀末から18世紀初頭にかけて「御殿空間」の位置は大きくは変わらなかったようである。17世

## 第一節 中央診療棟建設地点の概要

紀末から18世紀初頭になるとそれまであまり遺構のなかった中央診療棟地点の34ラインの西と設備管理棟地点に「御殿空間」とは異なる家臣団の居住したと考えられる「詰人空間」が成立したことが推測できる。17世紀の後半に家臣団がどこに居住していたかは明らかではない。調査区のなかでは確認できていない。屋敷のなかにあったとしても、別の場所であったのであろう。屋敷地の大規模な改変もあり、これに伴ない屋敷内の新しい土地利用の形がここで出現したのであろう。これはその後の屋敷内の土地利用の基本形になろう。

### 18世紀前半

元禄十六年以降元文三年までの間に入ると考えられるものである。この間には享保十五年の火災があり、このあと屋敷は完全に新しくなっているものと考えられるが、これを分けることは不可能である。本来は元禄十六年以降享保十五年までのものと、享保十五年以降元文三年までのものに別れよう。この時期に入る遺構はもっとも数が多い。17世紀末から18世紀初頭にかけての傾向がさらにはっきりする。二回の屋敷の改変があったので、遺構が多くなるのであろう。この時期に直接関係する記録も絵図も発見していない。調査区のはほぼ全面に遺構がある。遺構が多数あるのは28ラインの西と35ラインの東の間である。大型の遺構も多く、屋敷の「御殿空間」の中心がこのあたりにあったものと考えることができよう。17世紀後半の「御殿空間」があったと考えられる位置よりやや西になっている可能性がある。大型の遺構は焼土を埋土に含んでいるものが多く、火災の際に放棄されたものが多いようである。このなかで注目すべきものは、切りあっている大型の地下式土坑F33-3とG33-5である。両者とも階段のついた地下式土坑であり、階段の部分で切りあっている。入口を一定のところに設ける必然性があったのであろうか。切りあっているのであるから、同じ18世紀前半に属する遺物を出土しているとはいえ、時期を異にしているとみてよかろう。両者とも埋土に焼土を含んでいて、火災の際に放棄された可能性が強い。F33-3が古いのであるから、これが享保十五年の火災の際に、G33-5が元文三年の火災の際に放棄されたと考えることができよう。もしこれが当たっているとすると、中央診療棟地点から発見された大型の作りの良い階段のついた地下式土坑は時期を異にして一つずつ作られた可能性が出てくる。すなわち、F27-1が天和二年から元禄十六年の間、F33-3が元禄十六年から享保十五年の間、G33-5が享保十五年から元文三年の間に作られ使われていた可能性である。もしそうだとすると「御殿空間」の大型の地下式土坑は一つであったものとすることができよう。18世紀の前半には、南にL34-2と呼ぶ階段のついた地下式土坑があるが、これは平面的な規模は大差ないが、深さと作りの良さでは相当に劣るものであり、Gライン上にあるものとは同列に扱うわけにはいかない。最重要の地下式土坑は「御殿空間」に各時期一つであった可能性を示していよう。さらに言うならばこれらが「御殿空間」のいわゆる「奥」にあたると考えられる場所から発見されていることである。この時期の絵図はないが、文化年間の絵図によればF27-1、F33-3、G33-5の階段つきの地下式土坑のある場所はいずれも「奥」と関係の深い場所である。「奥」に関連の深い場所に大型の地下式土坑があるということは地下式土坑の機能を暗示しているということもできよう。

この時期の遺構は調査区のなかの全地域に見られるが、これまでに遺構のあまり無かった2号組石と5号組石の間、さきに道ではないかとした部分にもかなりの数の遺構が出現する。井戸、地下

### 第III章 江戸時代の遺構

式土坑あるいは各種の土坑というように生活に直接関係するものである。居住区が拡大したといえよう。小規模な地下式土坑、もしくはこれに類似する土坑がEラインにそって並んでいる。これらに比べると、28ラインの東の地域には遺構の数は少ない。特に17世紀後半には屋敷の中心であったと考えられるF・G25・26・27区の遺構の減少が目立つ。25ラインの東の地域の遺構の数も少ない。設備管理棟地点はこの時期の遺構の数が多。前の時期から見られるようになる傾向ではあるが、小規模な地下式土坑が目立つ。地下式土坑も各種のものが見られるようになる。生活に関連した遺構が多い。「御殿空間」とは異なるおそらく家臣団の居住する「詰人空間」になったのであろう。

#### 18世紀後半から幕末

この時期に属すると考えられる遺構の数は著しく減少する。元文三年の火災のあと幕末までは火災もなく屋敷の大きな改変もなく幕末を迎えたものと考えられるので、遺構の数が少ないのであろう。また新しい時代の遺構ほど地表からは浅くなるので破壊されたものも多かったのではないかと考えられる。記録も多くないが、『大聖寺藩史』所収の文化年間とされる絵図はそのまま遺構の状態を示していると考えられる。絵図の「御殿」と東北の長屋の間にある上屋がついた井戸と考えられる大きな黒丸とその東西にある小さな黒丸2つとで表わされた井戸がI20-1にあたることは確実であり、その西北西にある黒丸がH23-3の井戸である。この時期の遺構が集中する22ライン東のI20-1の北は絵図では「御殿」と長屋の間の空き地になっている。「御殿空間」からは眼につかないところである。このような空き地に日常のゴミが捨てられていたのであろう。G20-3, H21-1・3・5・10などの土坑, H21-8の放棄された井戸に大量のこの時期の遺物が捨てられている。ほかのこの時期のものが見られる遺構があるのはD34-2, E34-3, F34-1・3, G36-2などで、これも「御殿」と長屋の間の空き地であったと推測されるところである。絵図で見ると「御殿空間」は23ラインと6号組石の交点を東北の隅にして、南にJ23ポイントまで下がり、そこから東にJ21ポイントまでいき、さらに南に下がりM21ポイントに至り、そこから東に向かい、調査区の外に出る線と、23ラインと6号組石との交点から西に向かい、F34ポイントに至りそこで向きを南南西に変え、J35, J36の中間に来て、向きを南にして35ラインと36ラインの中間のところで調査区の外に出る線で囲まれた範囲になる。このなかにはこの時期の遺物を出す遺構はほとんどなく、18世紀の後半以降地下深く作られる遺構は大幅にその数を減じたことを示していよう。絵図ともっともよく対比できる可能性をもっている時期だけにほとんどが破壊されていたのは残念である。

#### 4 各種の遺構の時期による変化

各種といっても具体的に変遷を跡づけることができるのは地下式土坑と井戸にその可能性があるだけで、他のものについては数が少なかったり、変化が少なかったりで、跡づけることは不可能である。地下式土坑では、17世紀後半とそれ以降に大きく分けることができよう。また、18世紀後半以降のものは極端に数が減り、地下式土坑がほとんど利用されなくなったことを示していよう。

ここで見るのはあくまでも医学部附属病院建設地点ではという断り書きつきであるが、おおよその傾向をつかむことはできよう。17世紀後半の遺物を出している地下式土坑は種々の形態のものがあるが、もっとも数が多いのは断面が袋状になる一辺が2m～3mの方形の平面形をしているもので

## 第一節 中央診療棟建設地点の概要

ある。多くのものは底の中央の上に円形もしくは隅丸方形の入口をもつもので、この変異として、F31-1のように入口から入って底に至り、そこから水平方向に大型の地下室をもっているもの、H32-5のように入口から入り一旦底になってからさらに下がり、三室をもつものなどがあるが、入口の断面は袋状である。この時期の地下式土坑の特徴として比較的厚いロームの天井をもつものが多い。それとともに F36-2, F31-1, F30-1 などに見られるように入口から1m~1.5m下に入口部分のもっとも広いところのある地下式土坑があることである。構築の方法に関係するものかと思われるが、この時期の特徴である。これらの17世紀後半の遺物を出す地下式土坑はこの調査地点に関する限り遅くとも天和二年(1682)までには作られていたもので、多くのものは大聖寺藩の第一期の屋敷が完成したと思われる17世紀の中頃には完成していたものと考えられる。屋敷の建築ができ上がってしまってから掘られた可能性を否定することはできないが、屋敷の普請の進行に合わせて作られた可能性が高いと考えられよう。

これに対して17世紀末から18世紀初頭の遺物を出す地下式土坑と18世紀前半の遺物を出す地下式土坑は類似の形態をしており、その差を明らかにすることはできない。多種のものが登場する。まず階段のついた大型のものである。中央診療棟地点のF27-1, F33-3, G33-5を代表例に挙げることができよう。このほか中央診療棟地点のL34-2, 設備管理棟地点のW35-8, X34-1, Y36-1などである。いずれも17世紀末から18世紀前半の遺物を出しているもので、構築は天和二年以降元文三年(1738)までの間になろう。二番目は一辺が1m以下の方形の入口があり、入口が偏っていて入口の下の二ないし三方向に底が広がるものである。いずれも小型であり、深さもロームの上面から2m以下である。天井も低く底から1mほどのものが多い。X34-2, X35-9, X36-2, X37-2など設備管理棟地点に好例が多い。三番目は報告のなかで半地下式と呼ぶ形態のものである。比較的浅く、四周の底に礎石もしくは杭穴があり、杭もしくは柱で上屋構造を支え、壁の板材を留めていたものと考えられる。設備管理棟地点の榑原家の屋敷内のAE34-5, AE35-6, AE36-4などを好例とするが、中央診療棟地点にもK22-1, I20-3などの例がある。I20-3は竹によって壁を留めている特異なもので他に類例がない。四番目は土の天井がないので地下式土坑と呼ぶには抵抗がある形態のものである。四周の壁は内傾し、入口より底が大きい土の天井はない。機能としては地下式土坑と同様であったものと考えられる。G31-1, G30-2などが好例である。他にも変異はあるが、17世紀末以降にこうした新しい地下式土坑が出現する。半地下式のものには18世紀後半にもある可能性があるが、他のものは18世紀前半でこの地点では終るようである。小林克氏(1986)による変遷の様相をほぼ跡づけていよう。各形態のものがどのような機能を果たしていたのか金丸氏(1985)の論稿を参照しつつ詰めていく必要がある。

井戸はきわめて単純である。桶を井戸側に用いるようになるのはこの地点に限れば、18世紀後半以降の遺物を出すものからである。それまでは素掘りのものが中心である。17世紀後半の遺物を出すG27-1には井戸側が用いられ、その上部には桶が用いられていた可能性が高いが、井桁の下は桶ではないようであり、桶を井戸側に用いている例のほとんどは18世紀後半以降の遺物を出土している。一般化することはできないが、この地点の特徴とすることができよう。(藤本 強)

### 註

- 1) 宮崎勝美氏の教示による史料である。

## 第二節 中央診療棟建設地点の遺構

### 記述の方法

本地点の江戸時代の遺構は数も多く、その記述はかなり複雑になる。また屋敷のなかの土地利用も場所によってかなり相違が認められ、ある種の遺構は特定のところに集中する傾向がある。土地利用のあり方を反映しているとみてよかろう。また近世以降の破壊の程度も場所によってかなり違っているので、この二つの状況を勘案しつつ記述することが複雑な遺構のあり方をいささかでも分かり易くできるのではないと思われる。そこで元来遺構が少なかったかあるいは近代以降に破壊され、結果として遺構が少なくなってしまったのかは別にして、遺構が比較的まばらなところを境にして、調査区を9部分に分割して記述することにする。9部分の順序は北西から南東に向かうのを原則とするが、1～8は天和三年以降の大聖寺藩の上屋敷があった部分であるのに対し、9は富山藩の屋敷のあったところであると推定されるので、まずこの調査区の大部分を占める大聖寺藩の上屋敷のあった地点と考えられる2号組石以南の1～8までの地点を記述し、その後、2号組石以北の富山藩の屋敷地であったところと考えられる9の地点を記述する。

個々の部分の記述にあたっては、まずその部分の概況を破壊の状況と遺構のあり方の両側面から記述し、そのあとで個々の遺構の報告をするという形を採ることにする。それぞれの部分の個々の遺構の記述も原則的には北西から南東の方向に進めるが、長大な遺構があったり、また遺構のもっとも東の部分ともっとも北の部分の位置によって遺構の名称とするという原則をたてていたので、見掛け上この原則が貫徹されないところもかなりある。アルファベットと数字による地区の番号がつけられている遺構はもっとも西北の区に始まり、まずアルファベットの順に南下し、終わったところで北に戻り、一つ東に移り、アルファベット順に南下する。溝や組石のような長い遺構はその部分の記述の最後にするか、途中に入れるかしているが、敢えて原則を設けずに関連する遺構との関係をみながら記述している。

(藤本 強)

### 1 E36・E35, F36～F32, G36～G32, H32区の遺構

#### 概況

調査区の北西にあたる地点である。B・C・D36・35区は破壊がひどく、調査不可能であったし、Hライン北1m以南は建物の地下室があったため、地表下5mまで破壊されていたので、遺構は全く残っていなかった。32ラインの西には暖房用の配管の暗渠が南北にあり、これで深い部分まで破壊されていた。Gラインの北1mのあたりには大学の排水本管があり、地表下5mまで破壊が及んでいた。浅い破壊は随所にあり、全容をつかむのを困難にしている。

表土の下は盛土になっているが、東に行くにつれ厚くなる。盛土はあまり特徴のあるものはないが、34ライン以东、28ライン以西にはロームと黒色土もしくは黒褐色土を斑状に混ぜた特徴ある盛土がある。この盛土の上下で遺構のタイプも変化するし、遺物にも差があるように思われる。はっきりはしないが、17世紀末あたりに盛られたもののように思われる。盛土の下は削られている部分

が多いようであり、ローム面がいきなり出現するところもかなりある。

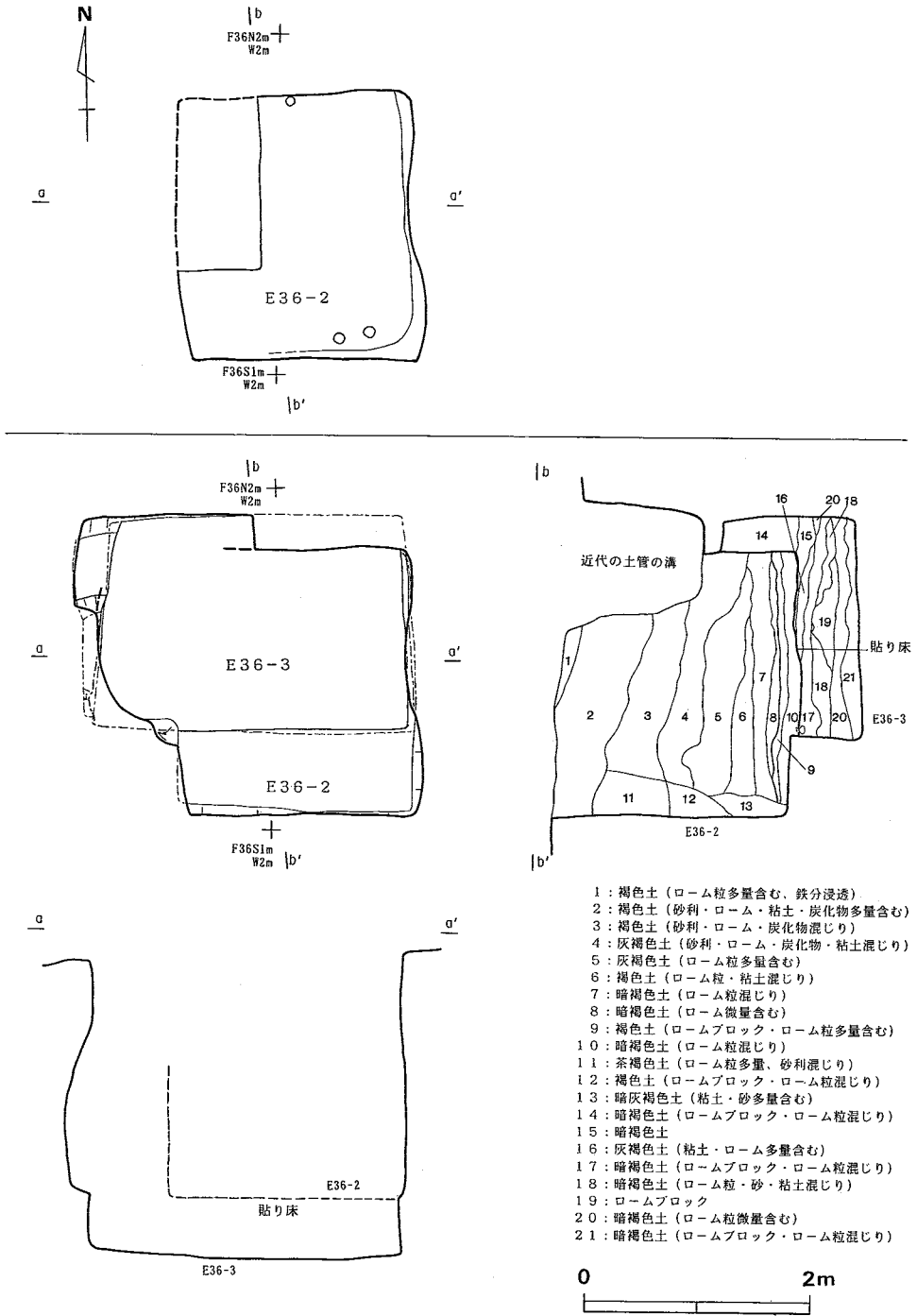
この地点の遺構の特徴は大型の地下式土坑、石組の排水溝、はっきりと認定できる形をした厠の下穴などである。いずれも直接居住に関係するものであり、しかもいわゆる斑状の土の上下でこれらが確認できることは江戸時代の前半から長期にわたり、最重要の居住部分であったことを示している。同様の傾向は E・F・G27区あたりまで続く。特に G ライン上近くに東西に連なる F36-2, G33-10, F31-1, F30-1 の袋状の断面をもつ比較的古相と考えられる地下式土坑、これらはいわゆる斑状の土に覆われているものが多い。斑状の土を切って作られ、未完成かとも思われる F34-11 を含む F33-3, G33-5, F27-1 という超大型の地下式土坑群のもつ意味は大きい。G ラインが長年にわたって、居住区の重要部分として機能してきたことを示している。排水溝かと考えられる F35-1・E35-2, 1号組石の北端がほぼ G ライン上ではっきりしなくなるのも一つの傍証となろう。残念ながら、建物の基礎に関係するかと考えられるものは E33-2 と F32-1 の溝状の遺構が礎石の掘り方の跡ではないかとできるだけ、あとは完全に破壊されている。また H ライン以南が根こそぎなくなっているのも推測を困難にしている。この地点のもう一つの特徴は比較的小さな土坑が数多くあるということである。これも居住区の中心に近かったから、数多くの土坑が残されたとも考えられる。

『大聖寺藩史』(1938 大聖寺藩史編纂会)に掲載されている文化年間かとされている絵図によるとこの部分は上屋敷の中心をなしていたと考えられる。以上の状況を考えあわせると、上屋敷の成立以来、この地点は屋敷の最重要の地区として機能していたものと考えられる。それとともにこの地点から出土する遺物のほとんどが18世紀前半までのものであるということは興味深い。居住は幕末まで続いていたことは確実であるのに、19世紀代の遺物の数は限られているし、それを出す遺構の数もきわめて少ない。『大聖寺藩史』(1938 大聖寺藩史編纂会)によると江戸上屋敷が火災にあったのは元文三年(1738)が最後とされている。それ以後幕末まで大きな火災にはあっていないようである。とすると屋敷内の大きな改変も18世紀なかば以降行なわれていない可能性がある。文化年間とされる屋敷の姿もさらに遡る可能性が強い。もともとこの地点の東側は「御殿空間」の一部であったため、言換えるならば屋敷の「表」の部分であり、日常のゴミが捨てられる可能性は少なかったものと考えられる。屋敷の大きな改変にもなって、それまでの大きな遺構を埋めるのに火災の際の後始末の廃棄物を初めとして種々のゴミが捨てられることはあっても、日常の廃棄には屋敷の「表」の部分は利用されなかったのであろう。逆に言えば、今回の調査結果は火災などによる大規模な改変が18世紀中頃以降なかったことを傍証しているともいえよう。(藤本 強)

#### 遺構各説

**E36-1, E35-3** E36-1は F37ポイントの周辺にある石組の溝である。E35-3 は E36-1の北側の組石の延長と思われる。土管、E36-2 などに切られていて全容は明らかではない。東端は E35-2 近くまでは確認できているが、このあたりで判然としなくなり E35-2 との関係も明らかではない。I 区 1号溝の上に作られている。溝の幅は0.4m ほどであり(III-008図)、基盤の層を削り石を置く面を作り中心部だけさらに掘り下げている。石は種々のものが使われており、丁寧な作りではない。石を固めるために小さな石を詰めており、ローム混じりの暗褐色土で固定している。この土は単に

第III章 江戸時代の遺構



III-001図 E36-2・3 実測図 (土層図の水準:14.6m)

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構

石を固めるだけでなく、溝の形の整形にも使用されている。溝の底はほぼ平坦で、傾斜は認められなかった。底の北側の石列の端に杭穴がある。あるいは石を固定するためのものであったのであろうか。埋土は砂などを含む暗褐色土である。遺物は少量しかない。底にある埋土に鉄分が浸透しているところからみると水が流れていたこともあったのであろう。(成瀬晃司)

**E36-2** E36区に位置する地下式土坑である(III-001図)。いわゆる斑状の土の上面より検出された。E36-3の東半分を切って構築されている。北壁の上部は土管の溝によって壊されている。平面形は南北2.4m弱、東西2.2mの長方形である。底はE36-3の15~17層上面まで掘り下げその上に貼り床(9・10層)をしている。深さ2mが確認できている。壁は垂直であり、南壁に接する埋土(13層)内側に一部木片が残っていること、東壁にも13層が付着していたこと、北壁に1、南壁に2 径10cmの円形の杭穴があったことより、壁は板材で囲ってあったことがわかる。この遺構はその形態より土の天井のない地下式土坑である。このタイプには板囲いをするものが多い。これには機能的な理由もあろうが、本遺構のように軟弱な壁を補強するための構造的な理由も大いに関係していることだろう。埋土はほぼ水平に堆積している。11・12層は板材が腐敗しかかったときに壁との間に入り込んだものであろう。貼り床の9・10層はローム粒を多量に含む締っている褐色土で構成されている。17世紀後半から18世紀前半にかけての陶磁器などの遺物が若干出土している。(成瀬晃司)

**E36-3** E36区にある地下式土坑で北の四分の一を土管の溝で破壊され、東約半分をE36-2によって底の上50cmまで切られている(III-001図)。いわゆる斑状の土の上面で確認され、天井は北と東の一部と南西の隅にわずかに残っているのみである。地下室は東西に長く、東西2.8m強、南北1.9m、底から天井までの高さは1.2m弱である。壁は垂直であるが、西壁の底の上70cmの壁面に幅55cm奥行33cmのテラス状の施設をもっている。テラスの上の壁は垂直に立ち上がり、天井の崩落した痕跡もないことから入口の施設と考えられる。また、この南に隣接して底の上50cmに棚状のものがある。奥の壁は内湾して壁に繋がるが、やや荒い掘り方である。埋土は全体的にロームを多量に含む細かい水平堆積をしている。遺物は18世紀前半の陶磁器が少量出土している。(成瀬晃司)

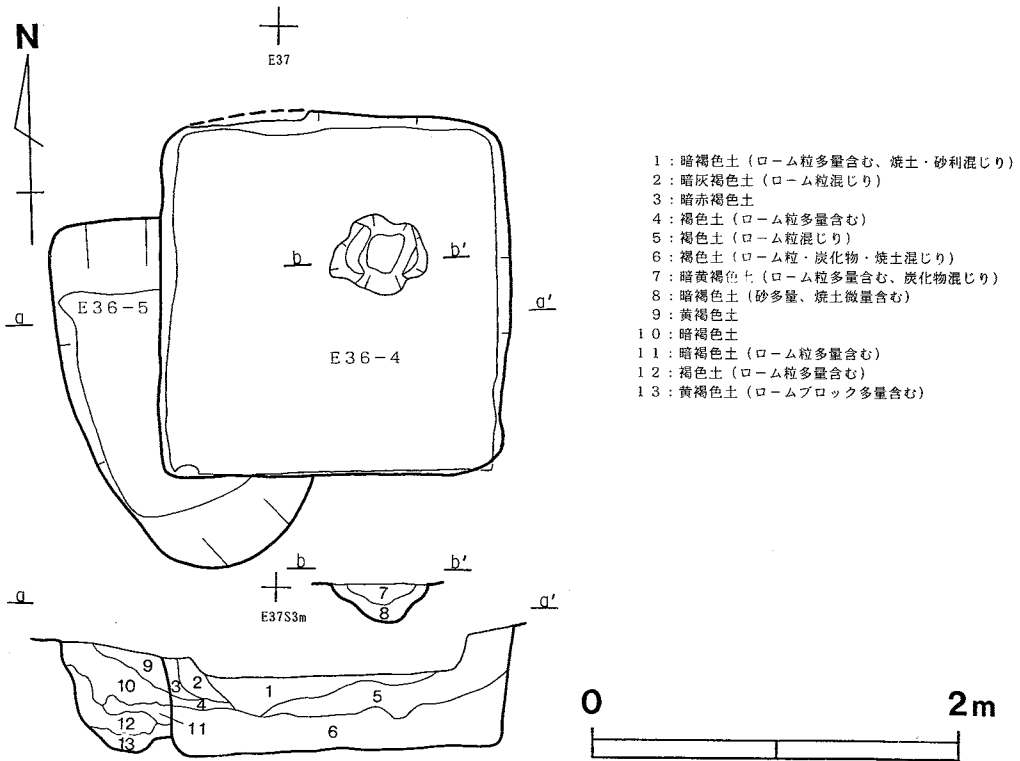
**E36-4・5** E36-37区にある切りあい関係のある土坑である。4が新しい。4は一辺1.9mの方形の、深さ1mの土坑である(III-002図)。底は平らであるが、緩やかに西に傾斜している。壁は垂直であり作りは丁寧である。底に0.5m、深さ20cmの不整形の穴がある。埋土はロームを含む褐色土が主体である。遺物は少量である。性格は不明。5は不整形な形をしている2m弱、深さ0.6m弱の土坑である。底、壁とも凹凸が激しく、これらは根によるものと思われる。遺物はなく、埋土はロームを含む黄~暗褐色土で、埋土・形からみて植栽に関係する土坑と考えられる。(成瀬晃司)

**E36-6** E36区にある幅0.5m、深さ0.4mほどの溝であるが、北端は土管により、南はE36-2・3に切られている(III-003図)。E36-2・3の南には見られないことから、E36-2・3のなかまでの溝であったと推定される。北もI区1号溝との関係は不明である。埋土はローム混じりの暗褐色土を主にする。遺物はほとんどみられない。V区1号溝とともに天和三年以前の大聖寺藩と富山藩の屋敷の間にあった道路の側溝であった可能性が強い。(成瀬晃司)

**I区1号溝** E36区からG35区にかけて検出された南北に延びる溝状の遺構である(III-003図)。北端は破壊されている。また、東西に延びる土管の溝、基礎などにより三か所にわたり切断されて



第III章 江戸時代の遺構

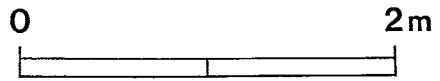
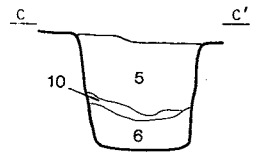
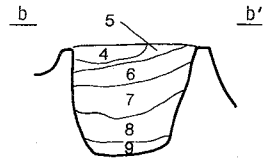
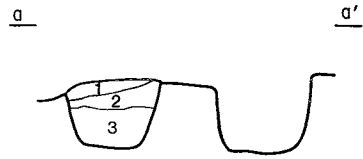
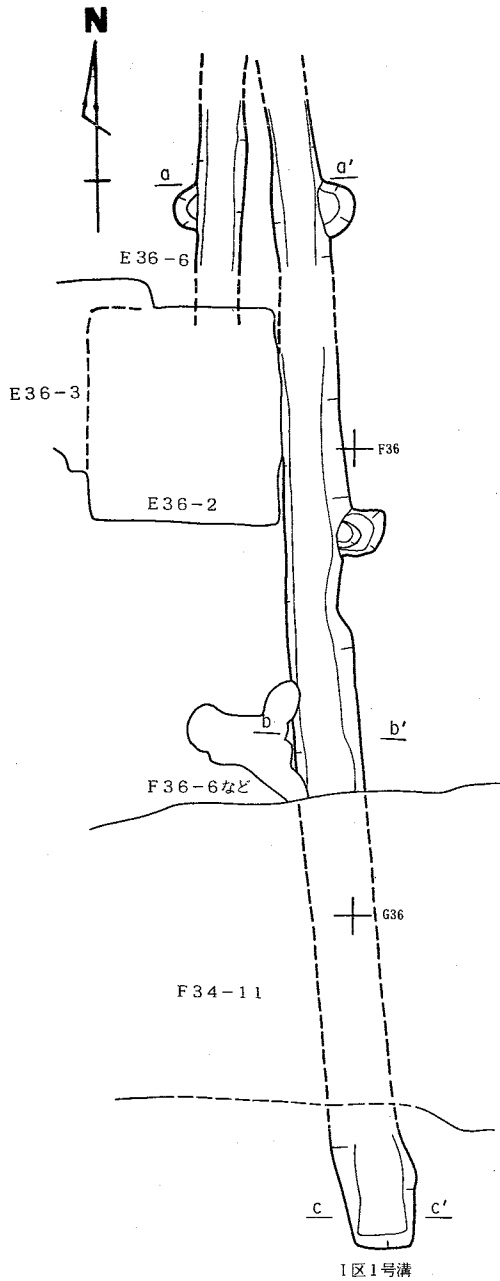


III-002図 E36-4-5実測図 (a-a':14.0m, b-b':13.3m)

いる。重複する遺構のなかではもっとも古い。残っている部分の長さは12.3m弱であり、幅は南端で80cm、北端で50cmと北に進むにつれ細くなっている。底はほぼ平坦であるが、部分的に凹凸がある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁のもっとも高い部分は65cmある。北壁は凹凸があるのに対し、南壁は比較的丁寧な調整が施されている。埋土はロームを含む暗褐色土を基調にし、ほぼ水平堆積を呈す。底がほぼ平坦であること、底に近い堆積に水性化した痕跡が見られないことより、純粹に水路と考えるより、地境の溝として考えるべきであろう。18世紀前半の陶磁器などの小片が少量出土しているが、層位から考えられる年代より新しいのでかならずしも遺構の年代を示しているとは思えない。  
 (成瀬晃司)

F36-2 F・G36・37区に位置する地下式土坑である(III-004図)。F34-11, G36-6と重複しており、F34-11より古く、G36-6より新しい。ローム面で確認されている。土坑の形はやや複雑であり、上面から南北方向に一旦袋状に膨らみ、その中央にやや軸を変じて方形の掘り込みが構築されている。軸が方形の土坑部と袋状の張り出し部で異なるのは、いかなる理由か不明であるが、あるいは方形の土坑を後で拡張して地下式の土坑として使用されたのかもしれない。F31-1・F30-1にも似たようなことが見られ、これらでは構築上の理由ではないかとしている。規模は底で東西1.3m、南北1.6m弱、深さ3.8mである。袋状の部分は東西1.9m強、南北2.9mで、軸は底よりも15度ほど東に振れている。埋土の下部である14~18層はほぼ水平に堆積しているが、袋状の部分の3~13層は中央が高く、壁よりが低い堆積をしている。1・2層は天井の崩落したもので、2層は漸移層~ソフトロームである。

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構

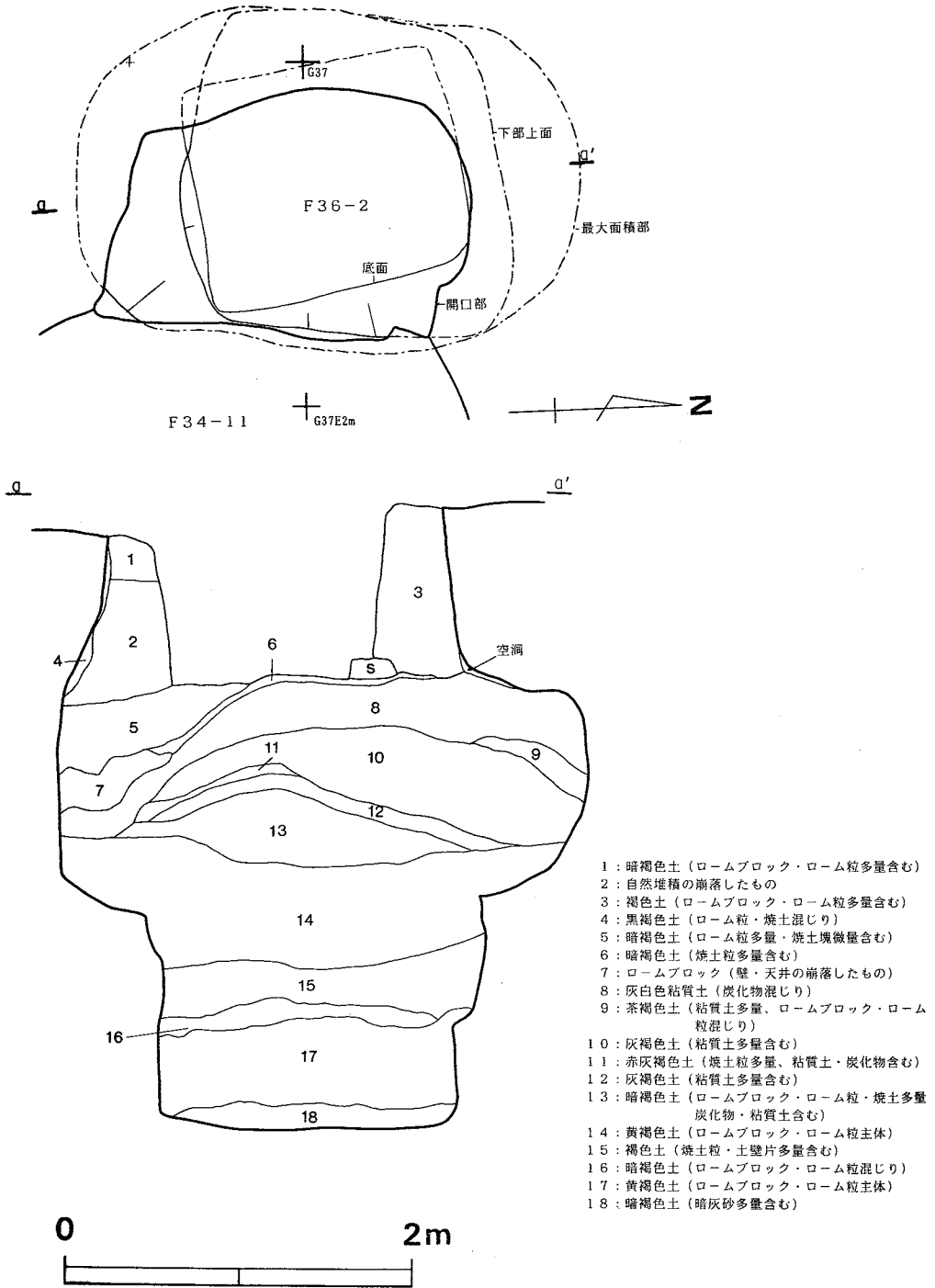


- 1 : 暗褐色土 (ローム粒多量含む)
- 2 : 暗褐色土 (ローム粒混じり)
- 3 : 暗褐色土
- 4 : 暗褐色土 (砂混じり)
- 5 : 暗褐色土
- 6 : 暗褐色土 (ローム粒多量含む)
- 7 : 褐色土 (固い)
- 8 : 褐色土
- 9 : 明褐色土
- 10 : 赤茶褐色土



III-003図 E36-6、I区1号溝実測図 (土層図の水準:14.6m)

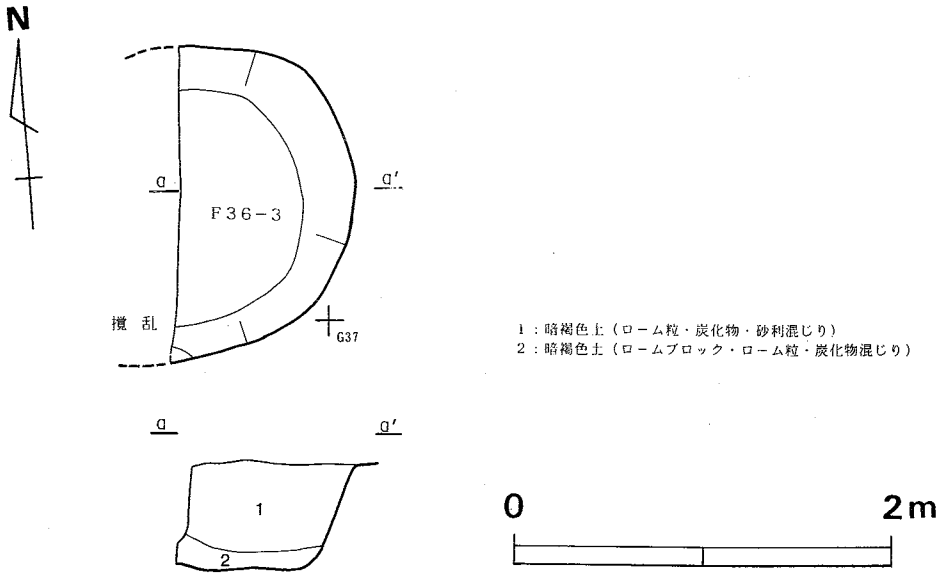
### 第三章 江戸時代の遺構



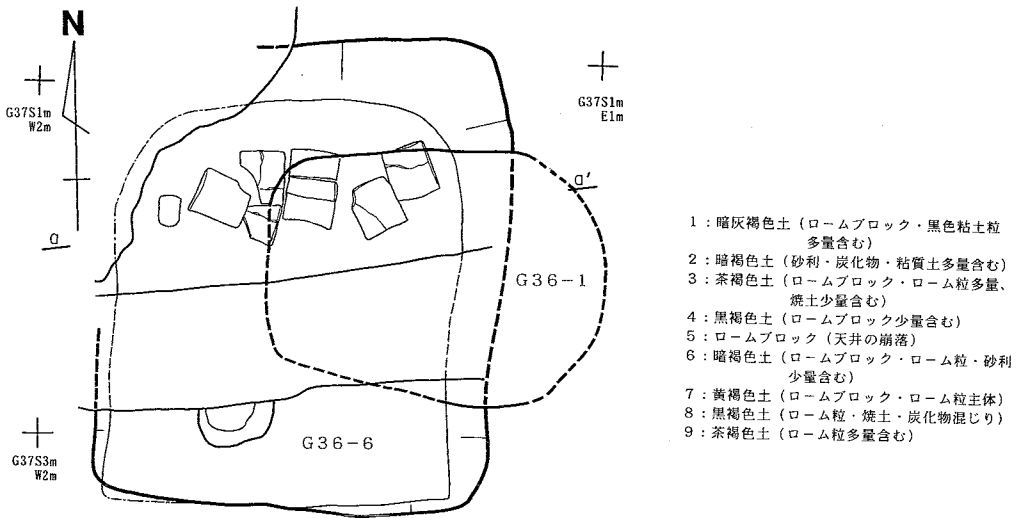
- 1 : 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 2 : 自然堆積の崩落したもの
- 3 : 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 4 : 黒褐色土 (ローム粒・焼土混じり)
- 5 : 暗褐色土 (ローム粒多量・焼土塊微量含む)
- 6 : 暗褐色土 (焼土粒多量含む)
- 7 : ロームブロック (壁・天井の崩落したもの)
- 8 : 灰白色粘質土 (炭化物混じり)
- 9 : 茶褐色土 (粘質土多量、ロームブロック・ローム粒混じり)
- 10 : 灰褐色土 (粘質土多量含む)
- 11 : 赤灰褐色土 (焼土粒多量、粘質土・炭化物含む)
- 12 : 灰褐色土 (粘質土多量含む)
- 13 : 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒・焼土多量炭化物・粘質土含む)
- 14 : 黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒主体)
- 15 : 褐色土 (焼土粒・土壁片多量含む)
- 16 : 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒混じり)
- 17 : 黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒主体)
- 18 : 暗褐色土 (暗灰砂多量含む)

III-004図 F36-2実測図(a-a':14.7m)

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



III-005図 F36-3実測図 (a-a':14.8m)



III-006図 G36-1・6実測図 (a-a':14.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

15層は焼土であり、土壁片や遺物を多量に含んでいる。遺物はそのほとんどが15層からであり、17世紀後半に比定できる陶磁器などが多量に出土している。(堀内秀樹)

**F36-3** F36区南西端から F・G37区にかけてある土坑で、西側は大きく破壊されている。南北1.6mの円形であったと思われる(III-005図)。深さは60cmであり、埋土は暗褐色土を主にする。遺物はなく、時期・性格は不明である。(堀内秀樹)

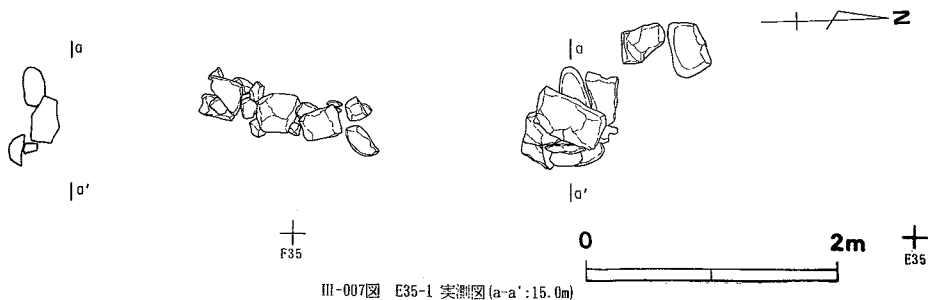
**G36-1** G36-6の上であり、建物の基礎によって大部分を破壊され、底近くがわずかに残っているのみである。東西現存1.4m、南北1.3mの楕円で、深さは30cmである(III-006図)。埋土は暗灰褐色土で、遺物はない。時期・性格は不明。(堀内秀樹)

**G36-2** G36区にある不整な形をした土坑である。北を土管で、南を建物の基礎で破壊されているが詳細は不明である。壁は緩やかに立ち上がっており、底も凹凸がある。最大長3mと大型ではあるが深さは20cmと浅い(III-012・013図)。埋土は上部に炭化物・砂利などを含む灰褐色土があり、ここにかかなりの量の遺物が入っていた。下はロームなどを含む褐色土である。そもそもゴミ穴を目的にして掘られた遺構と考えられる。(成瀬晃司)

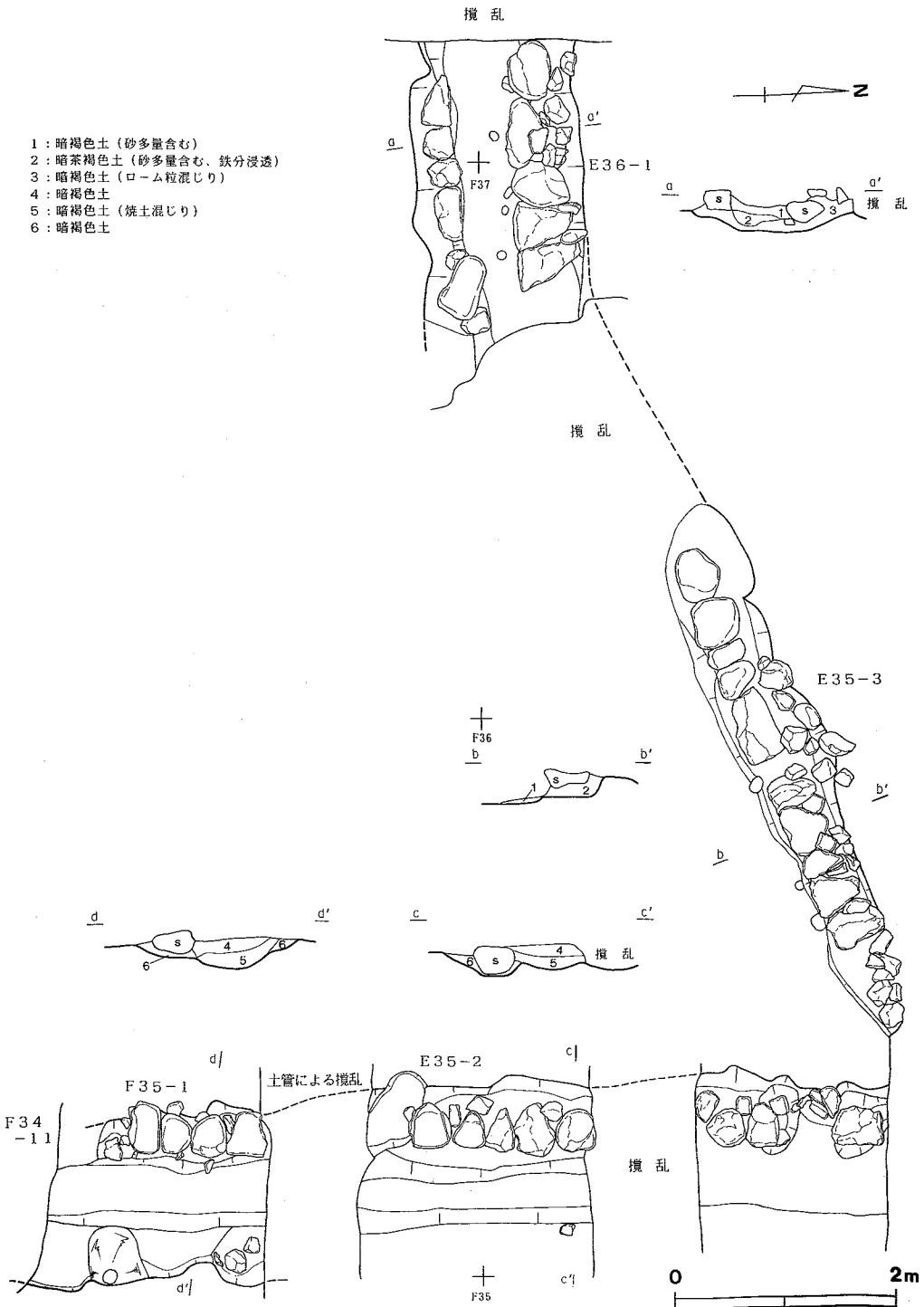
**G36-3・4・5** F34-11の周辺には多くのこれに切られた土坑がある(III-011・013図)。これらもそうした土坑である。これらの上には G36-2がある。次いで3があり、4・5は3に切られている。埋土は3がローム混じりの黒褐色土、4が黒褐色土・褐色土・黒褐色土となっている。遺物もほとんどなく、時期・性格は不明である。(成瀬晃司)

**G36-6** G36-37区にまたがり位置するやや小型の地下式土坑である(III-006図)。F36-2・G36-1に切られており、また西側は近代以降の建物により、中央は土管の溝により破壊されているため残存状態は不良である。漸移層の上の茶褐色土上面からロームに切り込んで構築されている。形は底はほぼ方形をしており、入口は破壊されているため不明であるが、やや小型の入口をもつ袋状の地下式土坑であろうと考えられる。規模は底で東西1.9m弱、南北2.2m弱、深さ1.5m弱である。底と壁は平滑であり、壁は底から垂直に立ち上がる。埋土はロームを含む黄～黒褐色土が中央のやや東から壁にむかって若干下がる堆積を見せている。人為的に埋め戻されたものであろう。遺物は底の直上に平瓦が数枚敷かれたような状態で検出されているほか、埋土中より18世紀前半の所産と思われる陶磁器などが十数点出土しているが、F36-2との層位関係からは、より古い時期の遺構であるものと思われる。(堀内秀樹)

**E35-1** E・F35区にある石積みであるが、E35-2の埋土の上に規則性もなく積まれている。ある



1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



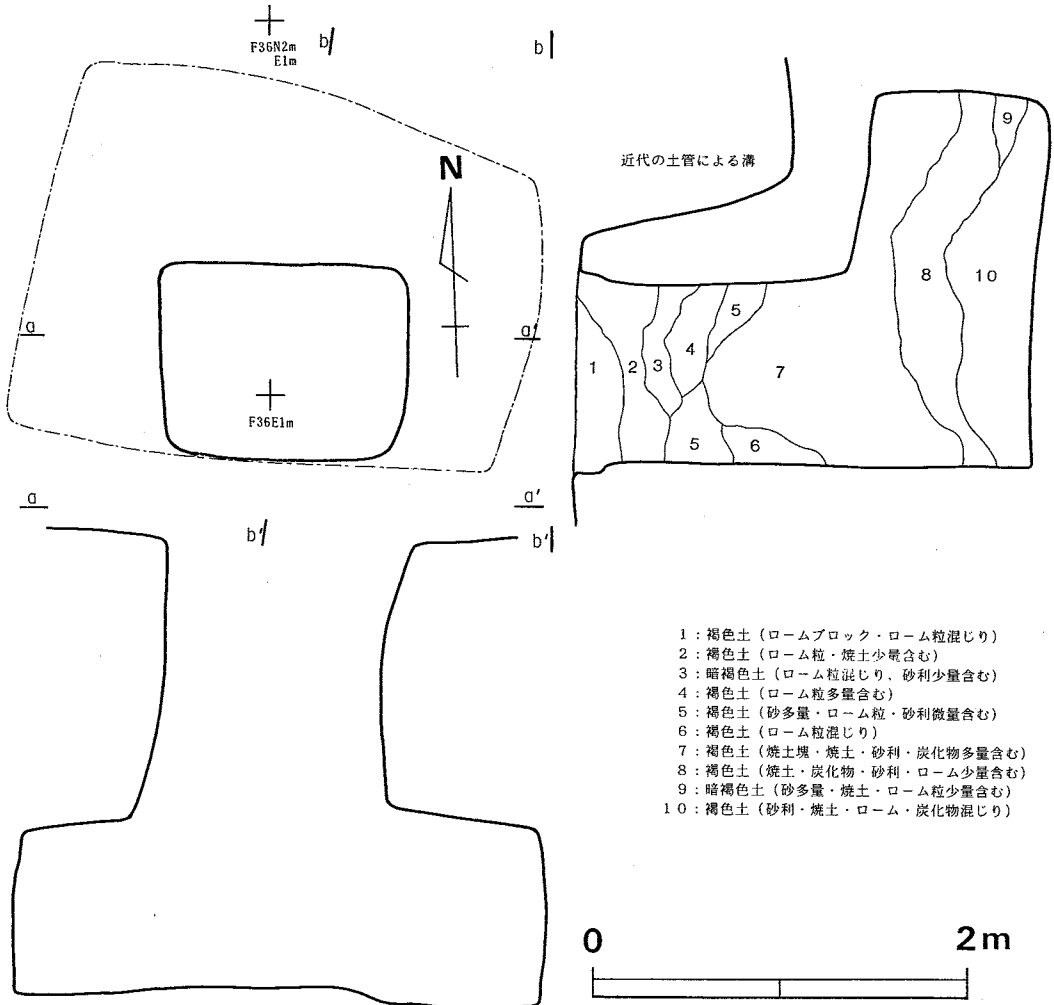
III-008図 E35-2・3、F35-1、E36-1 実測図 (土層図の水準:14.8m)

### 第三章 江戸時代の遺構

いは石を片付ける際に堆積したままにしたものかもしれない (III-007図)。 (成瀬晃司)

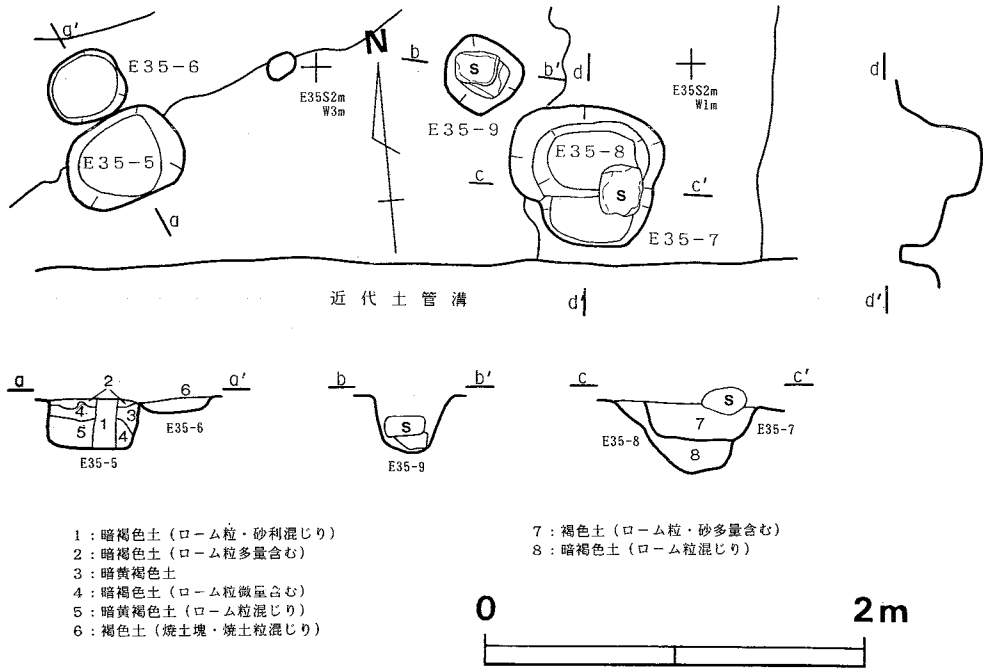
E35-2, F35-1 E・F35区にある石組の溝であるが、東側の石はほとんど残っておらず、掘り方のみで確認できている。北は土管により、南はF34-11に切られている。幅は0.5mほどで北に7.5mで16cm傾斜している (III-008図)。使用されている石は多様で、その上面の高さをあわせるのに掘り方の深さをかなり変えているほどである。石の間にはロームを少量含む暗褐色土がある。埋土は焼土混じりの暗褐色土であるが、上はロームを下は砂利を混じえている。遺物は陶磁器など少量が出土している。底などは赤く固くなっており、火災で焼かれたことを示している。 (成瀬晃司)

E35-4 E35区南東に位置する地下式土坑である (III-009図)。近代以降の破壊もなく、他の遺構との切りあいもなく遺存状態は良好である。入口から直接地下室に繋るタイプで、入口は東西1.3m、南北1m強の長方形であり、地下室は南側以外の三方向に広がり、底の平面形は台形で、東壁が1.6m、西壁が2m、長軸2.7mである。底はほぼ平坦であるが、南東部分がやや低くなっている。壁は入



III-009図 E35-4実測図 (土層図の水準:14.6m)

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



III-010図 E35-5~9 実測図 (土層図の水準:14.4m)

口、地下室ともほぼ垂直であるが、入口部の中央がややくびれる。天井は入口にむかってやや高くなっている。天井の高さは底から1mほどである。天井、壁ともに丁寧な調整が施されている。埋土は凸レンズ状の堆積を示すが、図の1~6層は小刻みな堆積をしているのに対し、7層以下の室内の埋土は全体的に厚く、色調や混入物の類似から一気に埋め戻されたものであろう。7層には焼土塊が、8層には炭化材が多量に混入しており火災などの後始末と考えられる。遺物は7層以下から17世紀末の多量の陶磁器片が出土している。(成瀬晃司)

**E35-5・6・7・8・9** E35区にある小型の土坑である(III-010図)。楕円形、隅丸方形などの形で、深さは20~30cm内外である。5にはほぼ中央に杭痕がある。7・9には石があるがそのあり方は様々であり、また埋土も様々ではない。遺物はみられず、時期・性格は不明である。(成瀬晃司)

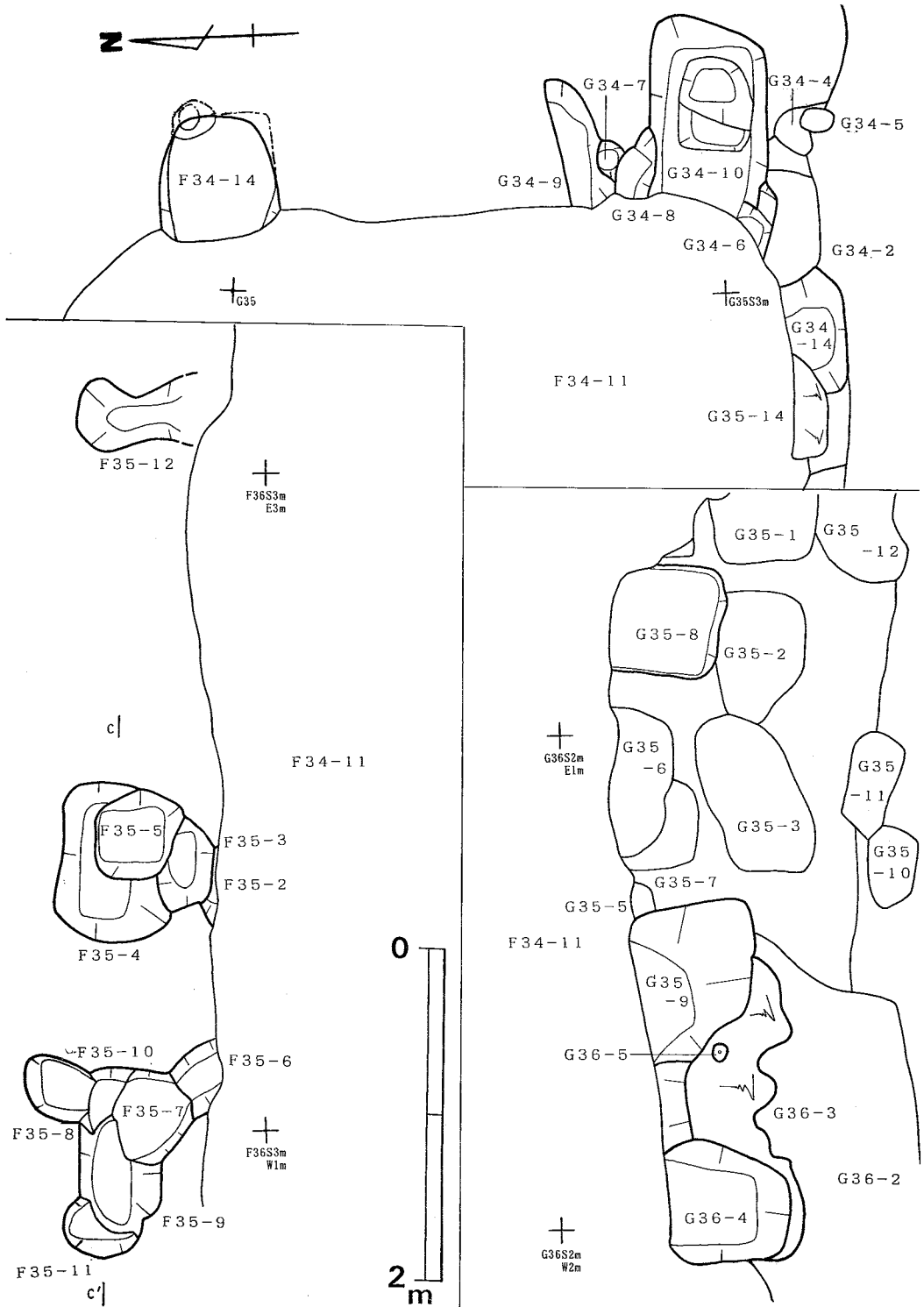
**F35-2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12** F34-11の北壁近くにある小型の土坑で、2~5と6~11は相互に切りあい関係があり、12はこれらの東にある(III-011・013図)。埋土は若干差はあるが暗褐色土を主とするものである。遺物もほとんどなく、時期・性格ともに不明である。(成瀬晃司)

**F35-13** F34-11のなかにあった土坑でF34-11より新しい。径0.4m、深さ0.3mの円形の土坑であり壁はほぼ垂直である(III-016図)。埋土は灰と砂からなっている。遺物はない。(藤本 強)

**G35-1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14** F34-11の南にある土坑であるが、F34-11と建物の基礎により破壊され原形を留めているものは少ない(III-011・012・013図)。形も様々であり、深さも種々あるが特長のあるものはあまりない。埋土も色々あるが、暗~灰褐色土のものが多い。遺物はほとんどみられないものが多いが、3からは銅銭4と煙管が発見されている。相互に規則性がなく、

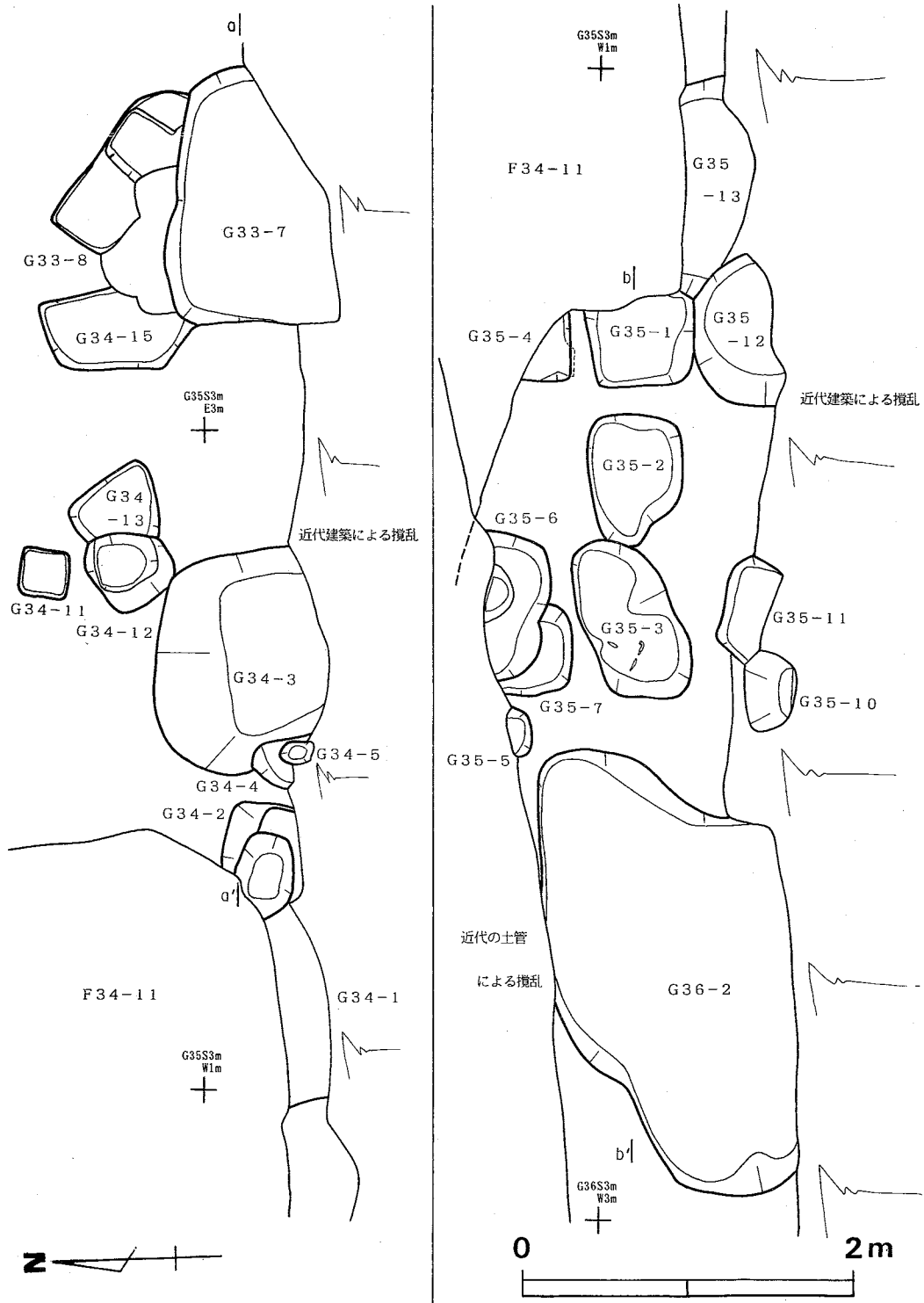


第三章 江戸時代の遺構



III-011図 F34-14, F35-2~12, G34-6~10・14, G35-8・9・14, G36-3~5実測図

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



III-012図 G33-7・8, G34-1~5, 11~13, G35-1~7, 11~13, G36-2実測図

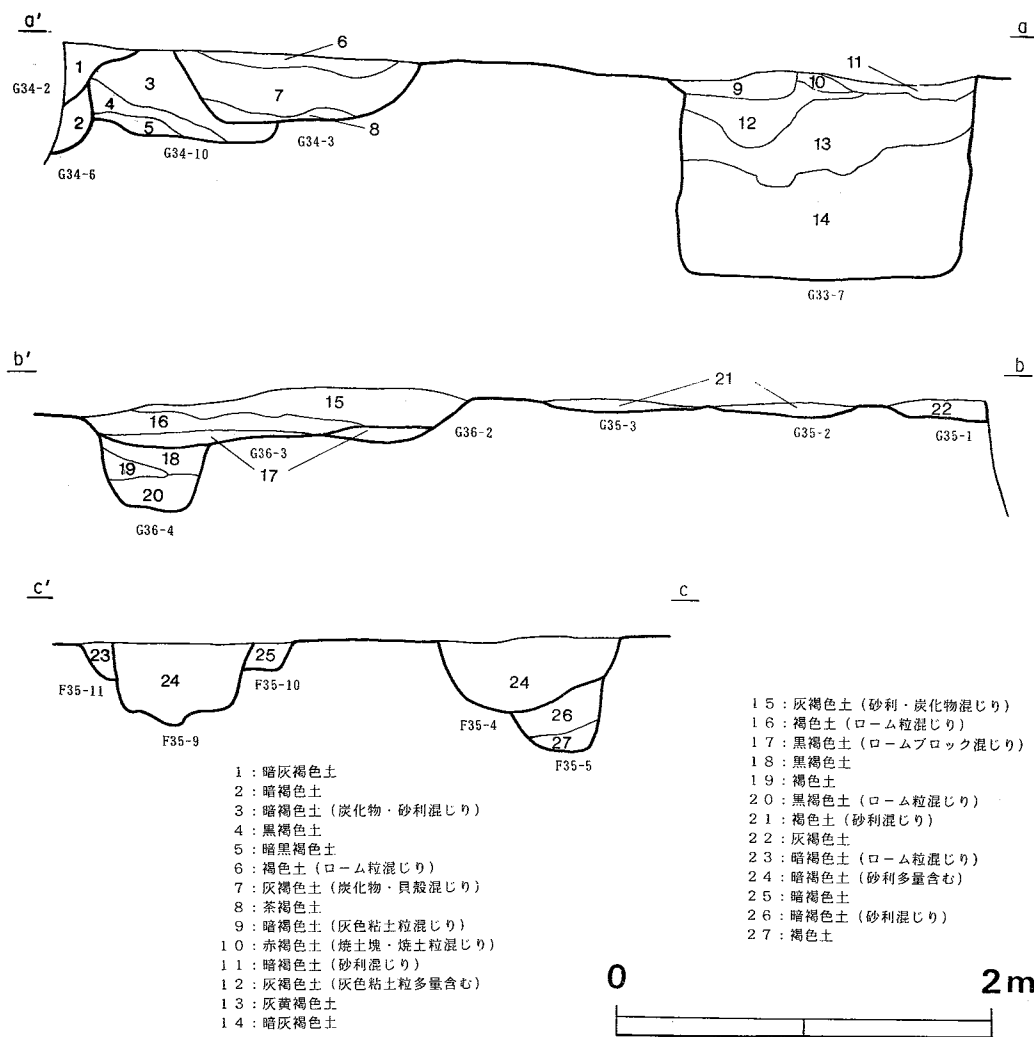
### 第三章 江戸時代の遺構

時期・目的は全く不明である。

(成瀬晃司)

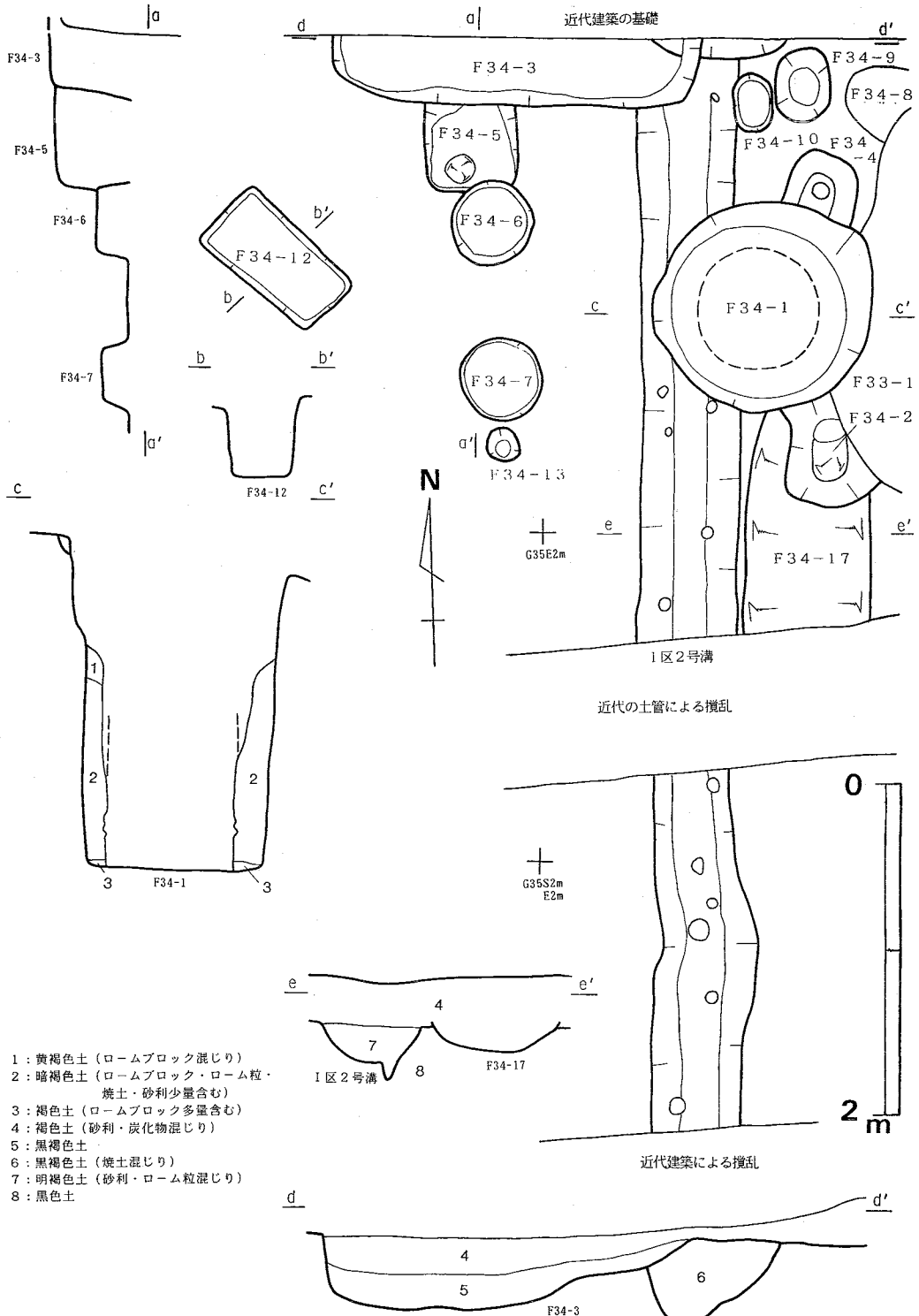
F34-1 F34区にあり、周辺の遺構を切っている。径1.3mの円形の掘り方があり、そのなかに外径74cmの桶を入れている(III-014図)。底には瓦片の入ったロームを約5cmの厚さで敷いている。掘り方の壁・底は工具の跡が残っており、壁は上から下の方向で、底のすぐ上には右から左へ一条の工具のあとが巡っている。桶のタガは2本からなっており、1本の幅は5cm、厚さ2cmである。桶の内部には粘性の強い粘土質の灰褐色土が堆積している。桶と掘り方の間にはローム主体の土が詰め込まれている。埋土の状況、形からみて厠の下穴であることは確実である。(成瀬晃司)

F34-2 F34区の南側に発見された不整形の土坑である。F33-1・F34-1に切られ、I区2号溝の項で触れる2号溝の東にある溝を切っている。現存するのは0.7m×0.6mの楕円形に近い形である。底は小さく、深さは0.4m強である(III-014図)。埋土はローム・砂利混じりの褐色土である。遺物



III-013図 F35-36・G34-36区土層図 (水準:14.7m)

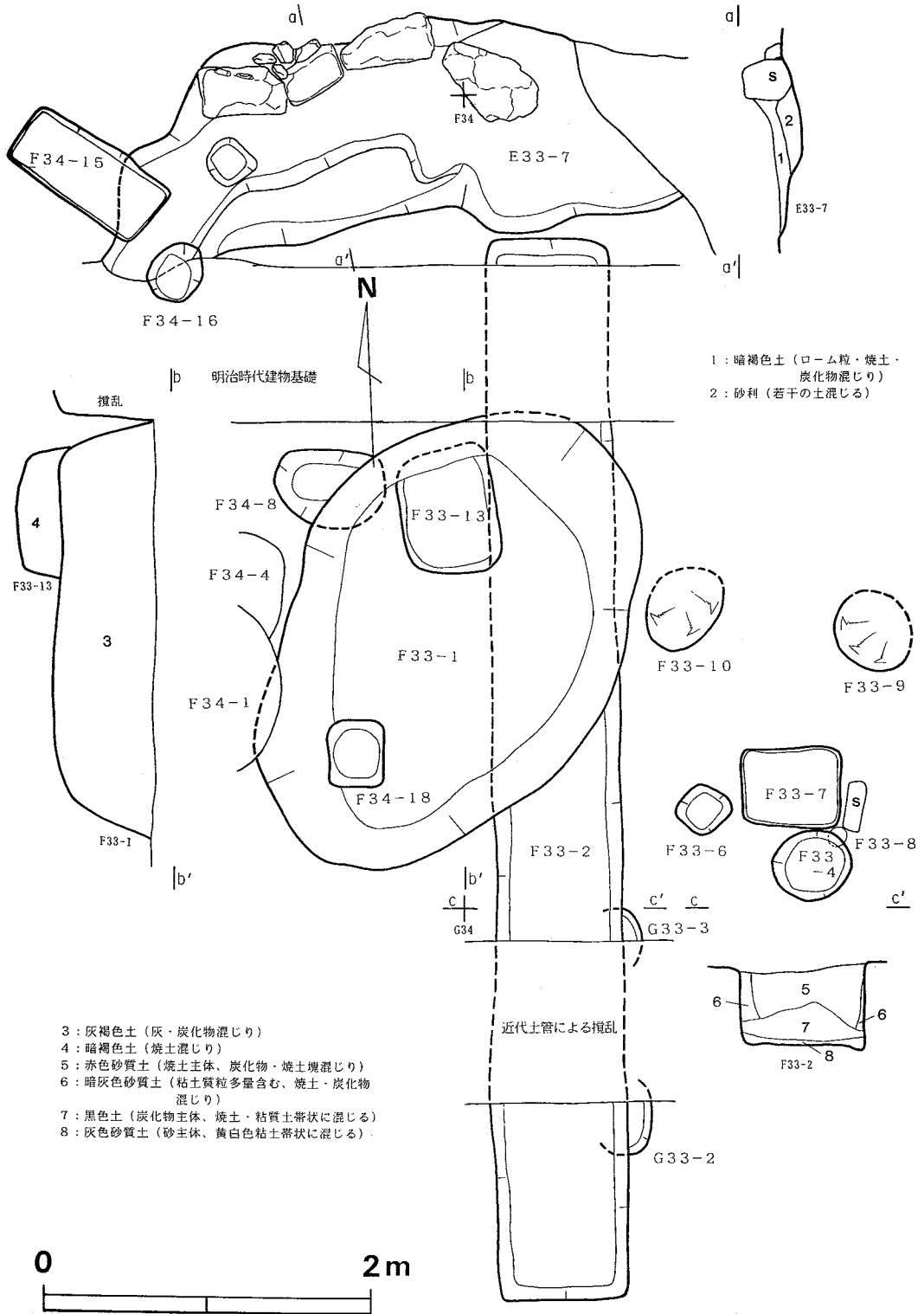
1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



- 1: 黄褐色土 (ロームブロック混じり)
- 2: 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒・  
焼土・砂利少量含む)
- 3: 褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 4: 褐色土 (砂利・炭化物混じり)
- 5: 黒褐色土
- 6: 黒褐色土 (焼土混じり)
- 7: 明褐色土 (砂利・ローム粒混じり)
- 8: 黒色土

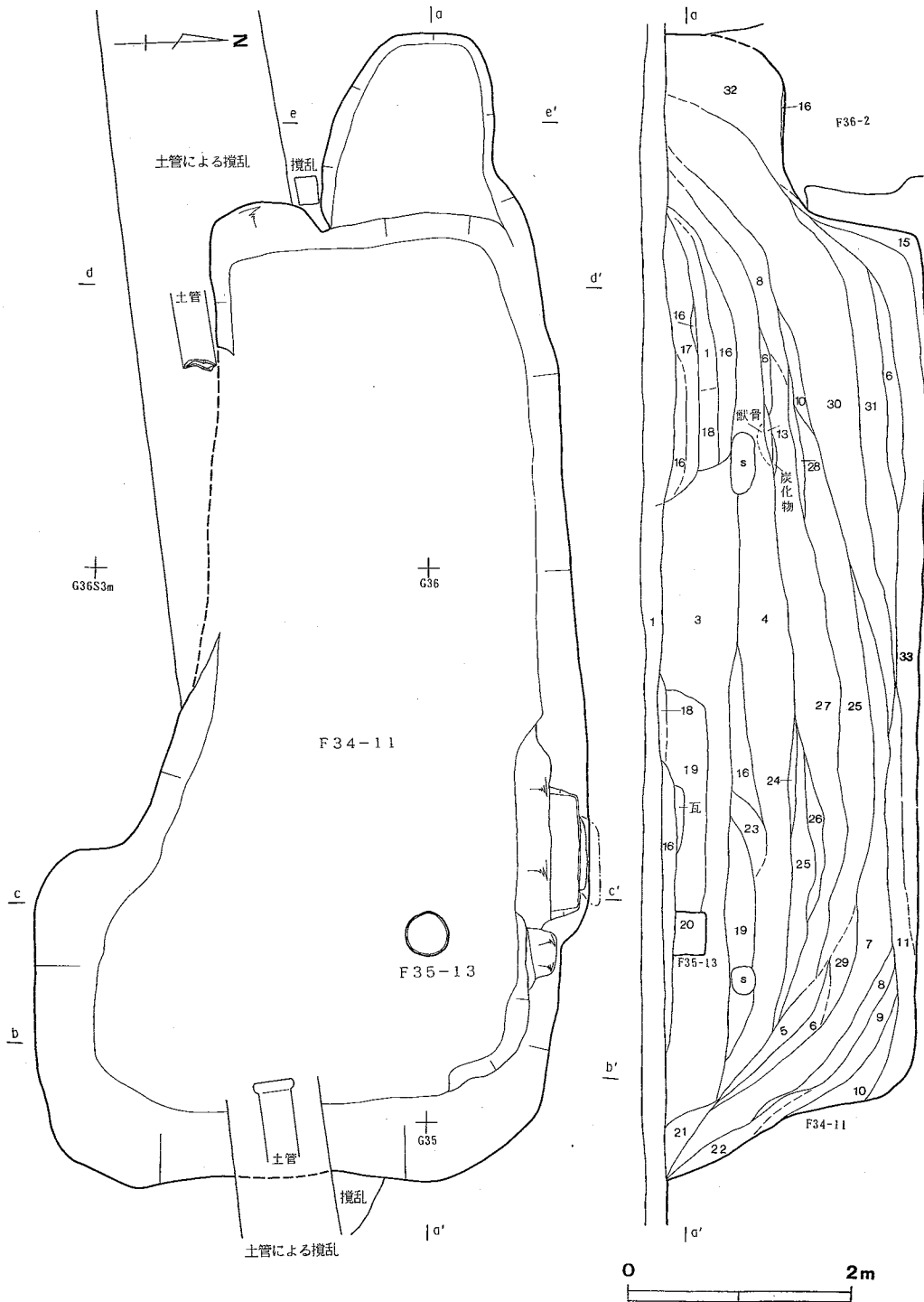
III-014図 F34-1~7・9・10・12・13・17, 1区2号溝実測図 (土層図の水準:14.8m)

### 第三章 江戸時代の遺構



III-015図 E33-7, F33-1・2・4・6~10・13, F34-8・15・16・18, G33-2・3実測図 (a-a': 14.8m, b-b'・c-c': 15.0m)

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



III-016図 F34-11, F35-13実測図 (a-a':14.5m)

第三章 江戸時代の遺構

はなく性格は不明である。

(藤本 強)

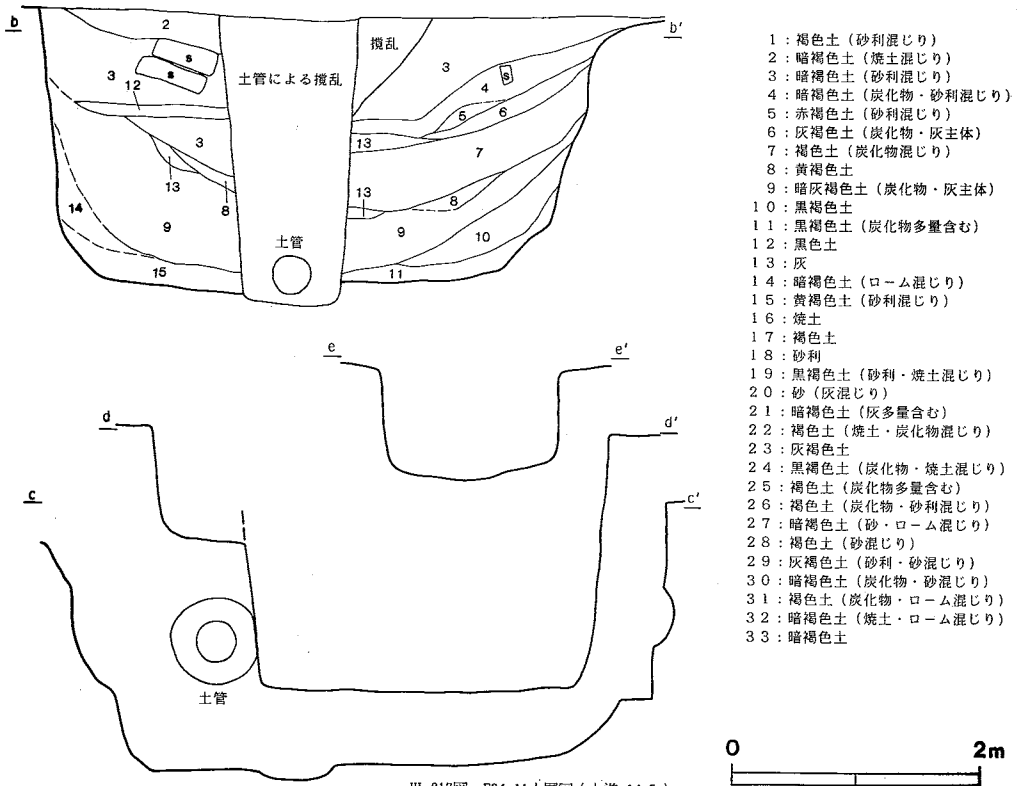
**F34-3** F・G34区にまたがり発見された土坑であるが、北側の大部分は明治時代の建物の基礎によって壊されている。東西2.2m強の長方形の土坑で、深さは0.4m強である(III-014図)。F34-5、I区2号溝などを切っている。埋土は上層が砂利混じりの褐色土であり下層は黒褐色土である。I区2号溝北端近くでF34-3を切る土坑があるが、これは鍋底状の土坑であり、ほとんどを建物の基礎が壊している。3からは若干の遺物が出土している。

(藤本 強)

**F34-4** F34-1の北隣にある土坑で、F34-1に切られている。幅0.45mの長方形の土坑であり、底に径10cm、深さ18cmの杭穴がある(III-014図)。埋土は砂利・焼土混じりの暗褐色土である。遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

(藤本 強)

**F34-5・6・7** F34区の西に南北に連なる土坑である。5は幅0.55m、深さ0.5mの長方形であり、なかに径18cm、深さ16cmの杭穴がある(III-014図)。底は凹凸がひどい。F34-3・6に切られている。6・7は径0.5m、深さ0.2mの類似の土坑である。埋土はともに焼土・ロームを混じえた暗褐色土であり、底に5cmの厚さの砂が敷かれていた。6では、この砂の上に「かわらけ」と寛永通宝30枚が帯状に錆び着いた状態で出土している。紐に通されていたのであろう。これらは、11波の波銭が29枚、文銭が1枚であり、意図的に選択されたものと思われる。7の底の砂の上から「かわらけ」に鉄錆のついたものが、破片ではあるが出土している。6と7とは同一の目的をもった遺構であった可



III-017図 F34-11土層図 (水準:14.5m)

能性が高い。

(藤本 強)

**F34-8・9・10** F34区にはほぼ東西方向で並んであった土坑であるが、規模・方向ともにマチマチである(III-014・015図)。8は東西0.65m, 南北0.5m, 深さ0.6mの長方形の土坑であり、黒色土の埋土である。9は8同様の埋土をもち、0.4m前後の径の楕円形の深さ0.3mの土坑である。10は0.3m内外の大きさの、深さ0.35mの土坑で黒色土が埋土である。遺物はほとんどない。(藤本 強)

**F34-11** F・G34区の西端に始まり、F35・G35・F36・G36区に及ぶ巨大な土坑である。調査開始直後に発見され、周辺のほとんどの土坑を切っているのので、この土坑を調査することにした。数多くの土坑を切っているのので、列挙することはしない。この土坑の中央やや南よりに土管が埋められていた。土管用の溝はオープンに掘られている部分が多いが、場所によっては「いたち掘り」で掘られているところもある。オープンに掘っている場合には幅0.8mほどの溝を地表下4m近くまで掘っている。「いたち掘り」はオープンに掘ったところから横に掘っているものでその長さは2m以下の場合が通例である。近代の掘削技術の一端を示すものである。この土管用の溝はF34-11の東側ではその底を掘り抜いている。

東西10.6m, 南北5mの長方形を基本的な平面形にしながら、それに西と南に張り出し部のついた土坑である(III-016図)。深さは確認したところから2.2mある。底はかなり凹凸がある。西の張り出し部は東西1.6m, 南北1.6mの台形を呈し、深さは1mほどである。壁はゆるやかに立ち上がっており、凹凸もかなりみられる。北の壁には、階段を作りかけたのではないかと考えられる幅1.2mほどの部分が面取りされている。その高さは0.4m内外である。これは未完成のままと思われる。階段かと考えられる部分の東にも壁が掘り込まれている部分がある。埋土は炭化物を多量に含む暗～黒褐色土が主体であり、灰・焼土などの混じり方によって、多くの層に分層することができる(III-017図)。これらの層は基本的にはいわゆるレンズ状の堆積をみせており、自然に埋まったものかと考えられる。最下部の20cmほどの部分は水分がかなり入っている。上部には全面がなく、部分的にしかみられない層もある。これらは一見、新たに切り込んだ遺構があるように思われたが、単なる埋まり方の違いによるものと判断された。遺物の出土量は上から下まで多量である。炭化物の入っている層は特に多く、陶磁器を初めとして、多種多様なものが多量に出土している。

この遺構は一体なんのであったのであろうか。壁も底も階段も未完成の印象がたいへん強い。しかも大型である。この遺構の中心はGライン上にある。Gラインは大型の地下式土坑が東西に並ぶところである。このことを考えると、F34-11は地下式土坑を作ろうとしていたのではないかとと思われる。着手はしたが、天井部が崩落するなどの何らかの事故があり、未完成のままゴミ穴に転用したのであろうと考えるのがもっとも妥当なように思われる。もしそうだとすれば、西側の張り出し部から作業をしていたのではないかとと思われる。ここには底に焼土がある。これが何を意味するかはわからないが、この部分で火を焚いたものと考えられることもできよう。掘削作業に関係するものと思われる。ともあれ、最終的な利用はゴミ穴であるが、これだけ大型のものはこの時期にあっては地下式土坑以外には考えることができない。しかも場所は地下式土坑の集中するGライン上である。先の推測があたっているものと確信する。(藤本 強)

**F34-12・13・14・15・16** F34区にある土坑である(III-011・014・015図)。12・15は長方形であり、



### 第III章 江戸時代の遺構

90×45cm とほぼ同じ大きさであり、埋土も類似のローム・粘土混じりの暗褐色土である。相互の間隔も3.7m とほぼ二間であるので関係は強いものと考えられるが、周辺にはこれに関係すると考えられる遺構は全くなく、また方向はこの屋敷の軸線と大きく離れる。建物ではなく門のようなものを想定すべきであろうか。13・16は円形の小土坑であり、14は F34-11に切られた長方形の土坑である。東北の隅に小土坑がある。遺物はほとんどなく、時期・性格ともに不明である。(成瀬晃司)

**F34-17** I区2号溝の東の幅0.8m、深さ20cmの土坑である(III-014図)。2号溝より上から切り込んでおり新しい。埋土は褐色土である。F34-2 に北を土管に南を壊されている。(藤本 強)

**I区2号溝** F34-G34区にみられる幅0.6mほどの溝である(III-014図)。F34-1・3・10により直接切られている。この付近の遺構のなかでは古いものの一つである。北・南・中央と近代の建物・設備によって壊されている。溝の深さは0.2mほどであり、底および側面の底近くに径8~12cm、深さ15~25cmの杭穴12がある。この杭穴は長方形、円形、半円形などのものがあり、土の完全に詰まっていないものもみられた。埋土は砂利混じりの明褐色土であり、底にはところどころに鉄分の付着がある。簡単な構造の地境の塀に関連したものと考えるのが妥当であろう。方向もこの屋敷の建物の方向である正南北とほぼ一致している。なお、この溝の東に隣り合って幅0.8m、深さ0.1mの溝状のものがある。Gラインの両側0.8mほどしか確認できていない。I区2号溝よりも新しいものである。遺物はほとんどない。(藤本 強)

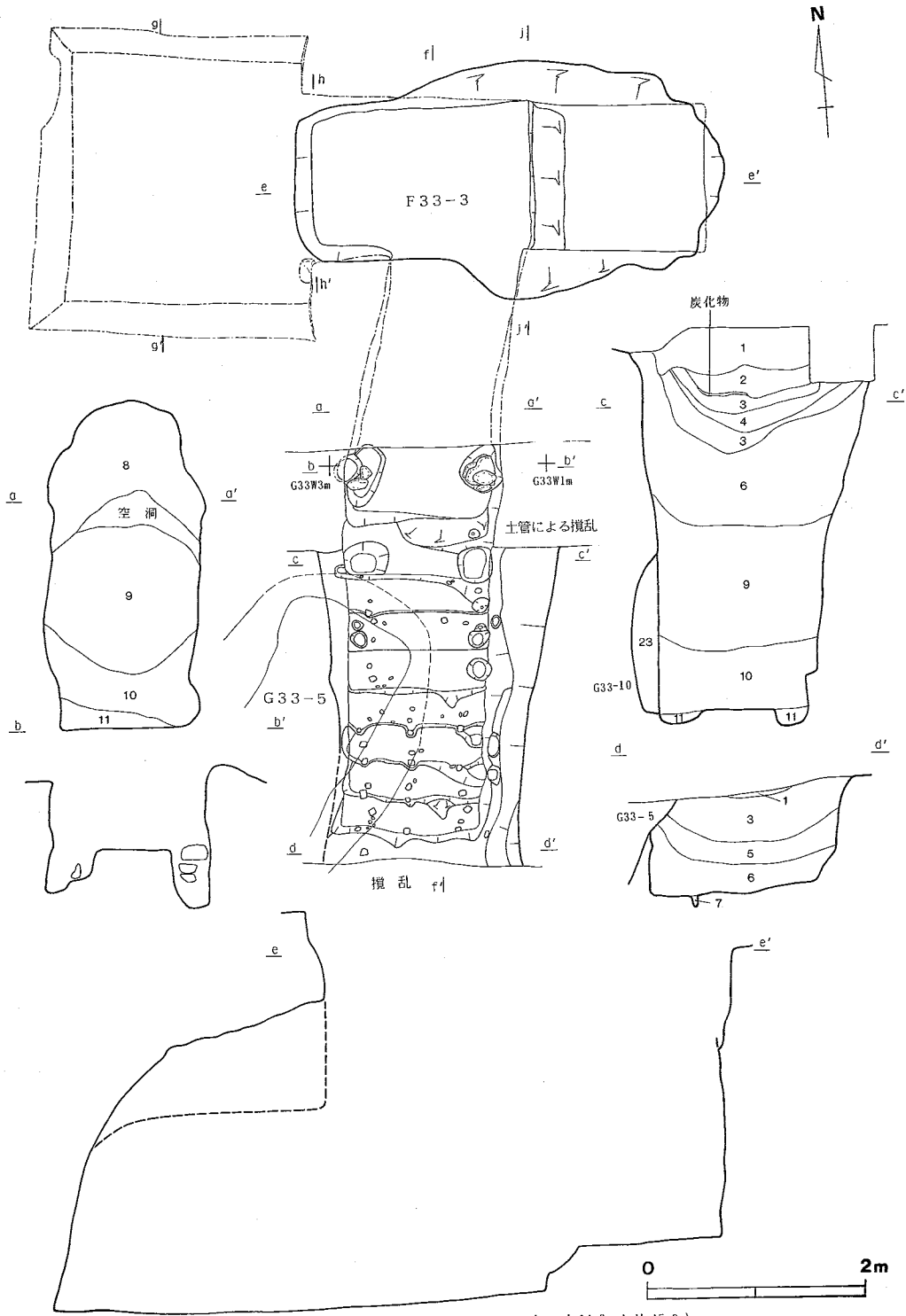
**G34-1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15** F34-11の周辺にある土坑である(III-011・012・013図)。3を除きいずれも小型であり、また他のものと切りあっているため全形がわかるものは少ない。15は五角形の平面形をもっていた可能性がある。埋土は暗褐色土を主にするものがほとんどである。遺物もほとんどなく、時期・性格は不明である。3はやや大型の土坑であり、東西1.3m、深さ0.4mの土坑で、貝殻・魚骨などとともにかなりの量の18世紀代の陶磁器が出土している。灰褐色土を主にする埋土で、ゴミ穴に利用されていたことは確実である。鍋底状を呈する形から考えるとゴミ穴を目的にして構築されたものかもしれない。(成瀬晃司)

**F33-1・13, F34-18** 1は F33-34区にある遺構で、F34-1に切られ、F34-2・8, F33-2を切っている。北は建物の基礎で壊されている。長軸を東北-南西にもつ楕円形の土坑であり、形は不整である。長軸3.1m強、短軸2.1mで、深さは0.6mである(III-015図)。埋土は灰や炭化物を多量に含む灰褐色土である。遺物は瓦の小片を主にしたものである。南西隅近くに F34-18とした一辺0.4m弱の方形の土坑が底にある。この埋土は F33-1と類似しており同一のものと考えられる。この遺構の北側に F33-13と呼ぶ0.8m×0.6mの方形の土坑がある。この埋土は暗褐色土で、F33-1とは異なっている。F33-1 に上部を切られた別の遺構であった可能性が強い。深さは0.3mほどである。

(藤本 強)

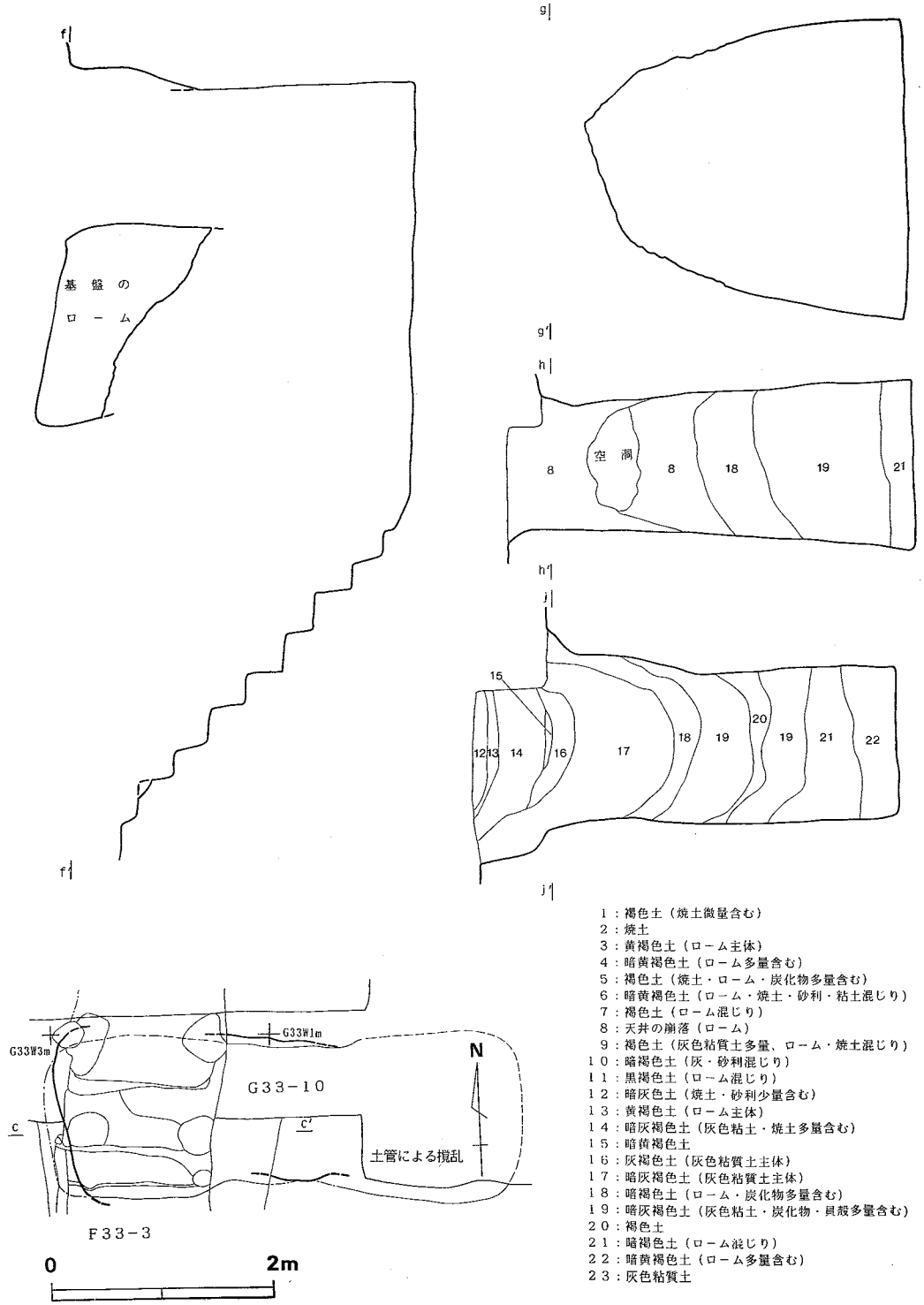
**F33-2** F-G33区にある長方形の土坑である。F33-1・13に切られ、G33-2・3を切っている。近代以降の建物の基礎と土管により大きく破壊されている。表土の下の暗褐色土のなかで確認されている。南北6.5m、東西0.8mの細長い長方形で、深さは50cmほどである(III-015図)。垂直の壁と平坦で壁際のやや窪んだ底をもつ。底は固く南にわずかに傾斜している。壁の一部には鉄分の付着と思われる赤変が見られる。埋土は底のすぐ上の薄い灰色砂質土とその上の炭化物主体の黒色土か

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



III-01附図 F33-3実測図 (a-a':13.0m, b-b':12.0m, c-c'・e-e':14.0m, d-d':15.0m)

第III章 江戸時代の遺構



III-019図 F33-3、G33-10実測図 (土層図の水準:14.0m)

1 E 36・E 35, F 36～F 32, G 36～G 32, H 32 区の遺構

らなる下半部および焼土主体の赤色砂質土と壁際の暗灰色砂質土からなる上半部の二つにわけられる。遺物は18世紀前半を中心にするものの小片が上半部から少量出土している。類似の遺構であるF32-1は本遺構の東8.1m(江戸間の四間半)の位置にある。両者とも埋土には焼土が入っており、長さは若干異なるものの同一の目的のためのものと考えるのが妥当であろう。おそらく建物の基礎に関連するものであろう。(小川 望)

F33-3 F32～34・G33区にかけて検出された大規模な地下式土坑である(III-018・019図)。地下室、竪坑、隧道、階段からなる。地下室と竪坑は東西に連なり、竪坑の南壁のやや西よりから、これに直交するように隧道、階段が南北に連続して、全体でT字形になる。階段はG33-10を切り、G33-5により切られている。南端は近代以降の建物により破壊されている。階段と隧道の接続するあたりを土管が通り破壊している。F33-1は天井の上にあるため、新旧関係は不明である。表土の下にある暗褐色土のなかで存在を確認している。

地下室の底は標高 10.8m であり、南北2.8m、東西2.5mのほぼ方形である。西・南・北壁はいずれも天井にむかって内側に傾斜している。表面は丁寧に整えられているが、壁の上部に下から上に向けての加工痕が認められた。天井は崩落しており、詳細は明らかではないが、残っている部分から判断するとほぼ平坦に加工されていたものと思われる。底から天井までの高さはおよそ1.8mであったものと思われる。竪坑は口の部分がわずかに崩落しているが、約1m下の本来の壁の面で東西3.6m南北1.4mの長方形である。底は東壁から1.3mまでが0.5mほど高くなっている。西側の底は平坦で、地下室・隧道の底と同じ高さである。壁は平坦に調整されている。隧道は天井の崩落が激しく、その本来の姿を推定しにくい。南北の長さは2.4m、幅1.1mで、主軸はやや北東に振れている。天井の高さははっきりしないが、地下室とほぼ同じであったと考えられる。底は平坦ではあるが、壁と天井は粗く作られていたようである。隧道と階段の接点の両脇に石の据えられた柱穴もしくは杭穴が設けられている。深さは底から50および35cm、直径は30および20cmであり、かなり大型のものである。これらの杭穴は、階段に伴う入口の末端を支えるためのものか、あるいはこの部分でG33-10を切っているのでG33-10の埋土からなる軟弱な壁や天井を保持するためのものかと思われる。

階段は幅1.3m、南北の現在の長さは3.2mであるが、破壊を受けているためより長かったことは確実である。ほぼ南北に軸をもち、九段が残っている。西壁は垂直であるが、東壁は崩落のためやや上方が開いている。各々の段の踏み幅は約30cm、けあげは25～30cm、踏み板にあたる部分は平坦で、けこみも垂直である。下から一段目と三段目の東西の端と二、四、六段目の東側の端には杭穴がある。また五、六、七、八段目の踏み板のけこみに接する部分に杭穴が三つずつあり、このほかの段にも杭穴が認められた。これらの杭穴は使用による崩壊を防ぐ目的で木などの踏み板を留めていたものと推測される。埋土は地下室は上半が空洞になっており、下半は大半が崩落した天井に由来するロームブロックであった。地下室の入口にあたる部分には、人頭大の自然石が数個ちょうど入口を閉塞するように積み上げられていた。竪坑の埋土は粘土・貝殻・炭化物などを含む粘性の強い暗灰褐色土を主にし、これにロームを多く含む黄～暗褐色土が入っており、底近くにもロームを含む褐色土がある。隧道では、上半は崩落したロームブロックと空洞、下半は灰色粘質土を主に

### 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

するものと、その下にある暗褐色土からなっている。この下半の堆積は隧道に近い階段の下半の堆積と共通している。一方上半の堆積と階段の南端、すなわち上段側の堆積はやはり共通でロームを多く含む褐色土を基本とする。遺物は18世紀前半の陶磁器を初めとする多様なものが竪坑の暗灰褐色土からきわめて多量に、隧道・階段の下半の暗褐色土からも多量に出土している。地下室からはほぼ完形の徳利が底近くから見出されたのみであった。

この遺構はいわゆる階段付きの地下式土坑であるが、形態や堆積の様子などからみて、当初からこの形で設計され、利用され、廃棄されたものとは思われない。少なくとも、地下室はこの遺構が廃棄されるより前にその使用が天井の崩落などにより中止され、石などを用いて閉塞されていたものと考えられる。階段や隧道がどの段階で設けられたものであるかは一概に決め難いが、地下室、竪坑西半、隧道の底のレベルが等しいことからこれらと階段とが当初の形であったものと思われる。ただし、階段と竪坑との両方に地表からの入口をもっていたとは考えにくいことから、当初竪坑西半は隧道の一部とともに天井をもっていたとも考えられる。竪坑東半はあるいは地下室閉塞の後に拡張されて西半とともに竪坑とされ、隧道と階段はその後ないしはその段階で放棄されたとも思われる。隧道と階段の埋土と竪坑の埋土が異なっていることもこのことを判断させる一つの材料である。

(小川 望)

**F33-4・6・7・8・9・10** F33区の南半に位置する土坑と杭穴である(Ⅲ-015図)。いわゆる斑状の土で確認されている。4・9・10は径50cmの円形であり、4は深さ60cm、9・10は10cmほどである。6・7は方形の土坑で、深さは6が50cm、7が10cmである。8は杭穴であり、埋土はローム・焼土などを含むことの多い茶～褐色土である。6から少量の遺物が出土している。性格は不明である。

(松下理恵)

**F33-11・12** F33区にあり、いわゆる斑状の土の上面で確認されている。11は一辺25cmの方形で、深さは20cm、埋土はローム・焼土などの混じる灰褐色土である(Ⅲ-021図)。12は径2mほどの円形の土坑であり、埋土は暗褐色土である(Ⅲ-021図)。遺物はなく、性格は不明。(小川 望)

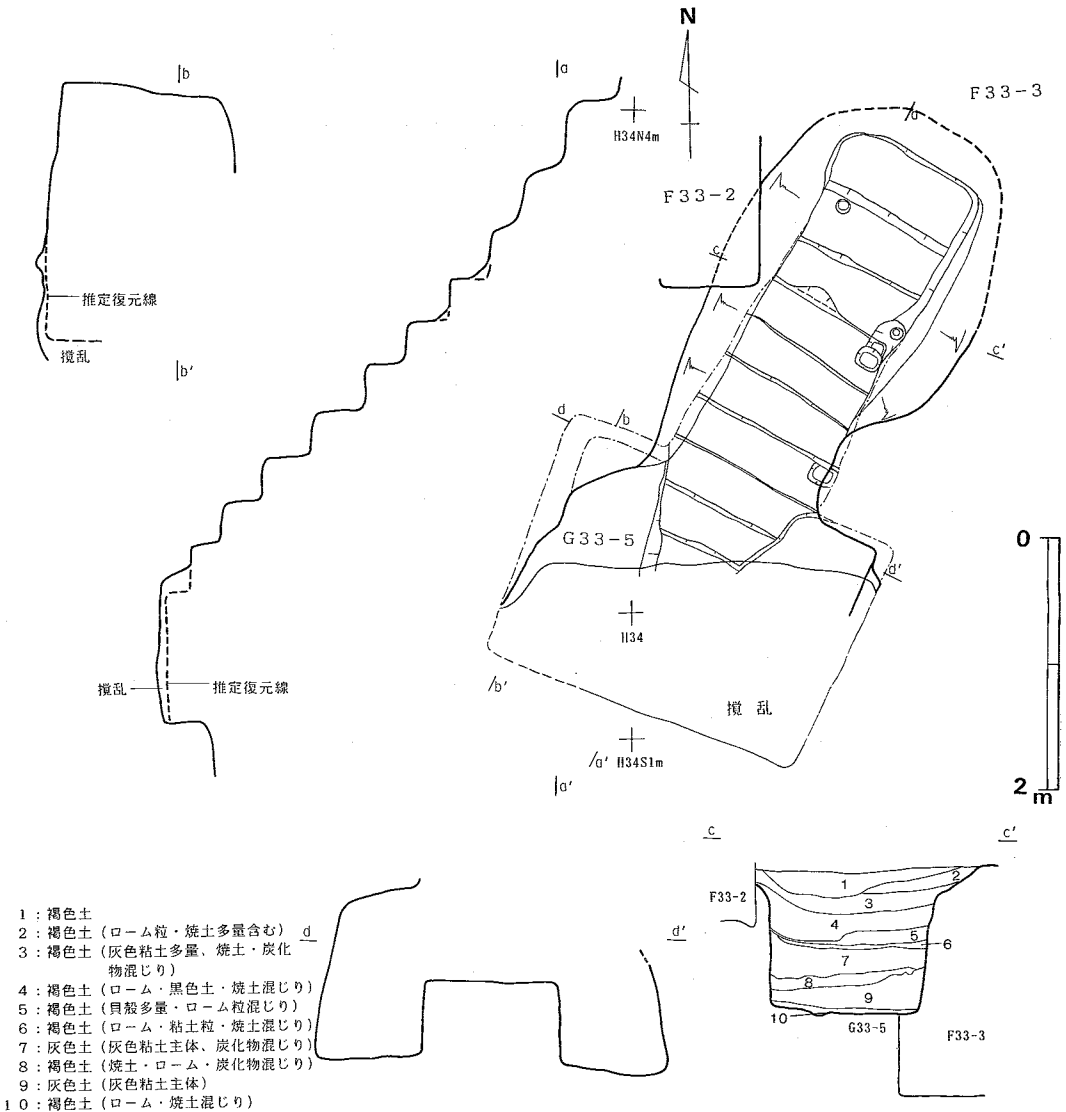
**G33-1・11・12・13** G32-1の北西隅にあり、G32-1・2とも切りあい関係のある土坑である。古い順からG33-13・12・11・G32-1・G32-2・G33-1となる(Ⅲ-021・022図)。13は0.4mの楕円形で、深さは10cmである。12は0.6mほどの隅丸の方形で、深さは25cm、底に平石が入る。両者はいわゆる斑状の土の下で発見されているが、他は斑状の土の上面で確認された。11は一辺0.5mほどの隅丸の方形で、深さは30cmほどである。G33-1は斑状の土の上にある暗褐色土で確認されている。径25cm、深さ40cmで埋土はローム混じりの暗褐色土である。遺物はいずれの遺構からも出土していない。G33-12は石が伴うことから建物の礎石を据えた穴とも考えられるが、方向が異なる。他も形からは同様の遺構かと思われ、またG33-1は杭穴かと思われるがいずれも明らかではない。(小川 望)

**G33-2・3** G33区の西よりにある小型の土坑である(Ⅲ-015図)。どちらもF33-2に切られている。近代以降の土管によっても破壊されている。深さは2が30cm、3が15cmである。埋土は2が灰色粘質土、3が暗褐色土である。遺物はなく、性格は不明である。(小川 望)

**G33-5** G33区に大部分が位置する地下式土坑である。階段と地下室からなり、階段はF33-2にわずかに切れ、F33-3の階段を切る。地下室は明治31年に建設された附属病院の外科研究室の地下

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構

室によってその大半を破壊されているが、標高10.9mにある底がわずかに建物の基礎の下面より低かったためその規模を確認することができた。基礎を作る際にこの底の部分に貫板が一行打ち込まれ、拳大から人頭大の割栗が敷き詰められていた。ロームからなる他の部分との地盤の差を考慮したものであろうか。表土の下の暗褐色土のなかで確認されている。階段は幅が1.1mであり、南北



III-020図 G33-5実測図(a-a':14.0m, b-b'・d-d':12.0m, c-c':14.8m)

の長さは4mほどと推定され、軸は北東に振れている (III-020図)。全部で十段あり、踏み幅は平均40cmほどであるが、狭いものは30cm、最上段は50cmである。けあげは平均30cmである。下から三段目までは地下室のなかにあり、両側から狭められて台形になっていたものと思われる。下から四、七段目の右端、九段目の左端に杭穴が一つずつ見出された。左右の壁はほぼ垂直であり、入口

### 第III章 江戸時代の遺構

近くは崩落のためかやや広くなっている。地下室は底で東西2.75m、南北の幅が2mのやや隅丸の長方形であり、北壁の中央に階段がある。天井は北西の隅にわずかに残るのみであるが、その高さは1.3mである。底はほぼ平坦であり、壁はやや凹凸がある。壁は上方に向かいしだいに狭まり緩やかに天井に移行する。埋土は地下室では壁近くに暗灰色粘質土がわずかに残るのみであった。階段では下半に灰色粘質土が、上半にローム・焼土・炭化物を含む褐色土が積み重なっている。遺物は上部の褐色土から「かわらけ」を主に18世紀代のものが少量見出された。(小川 望)

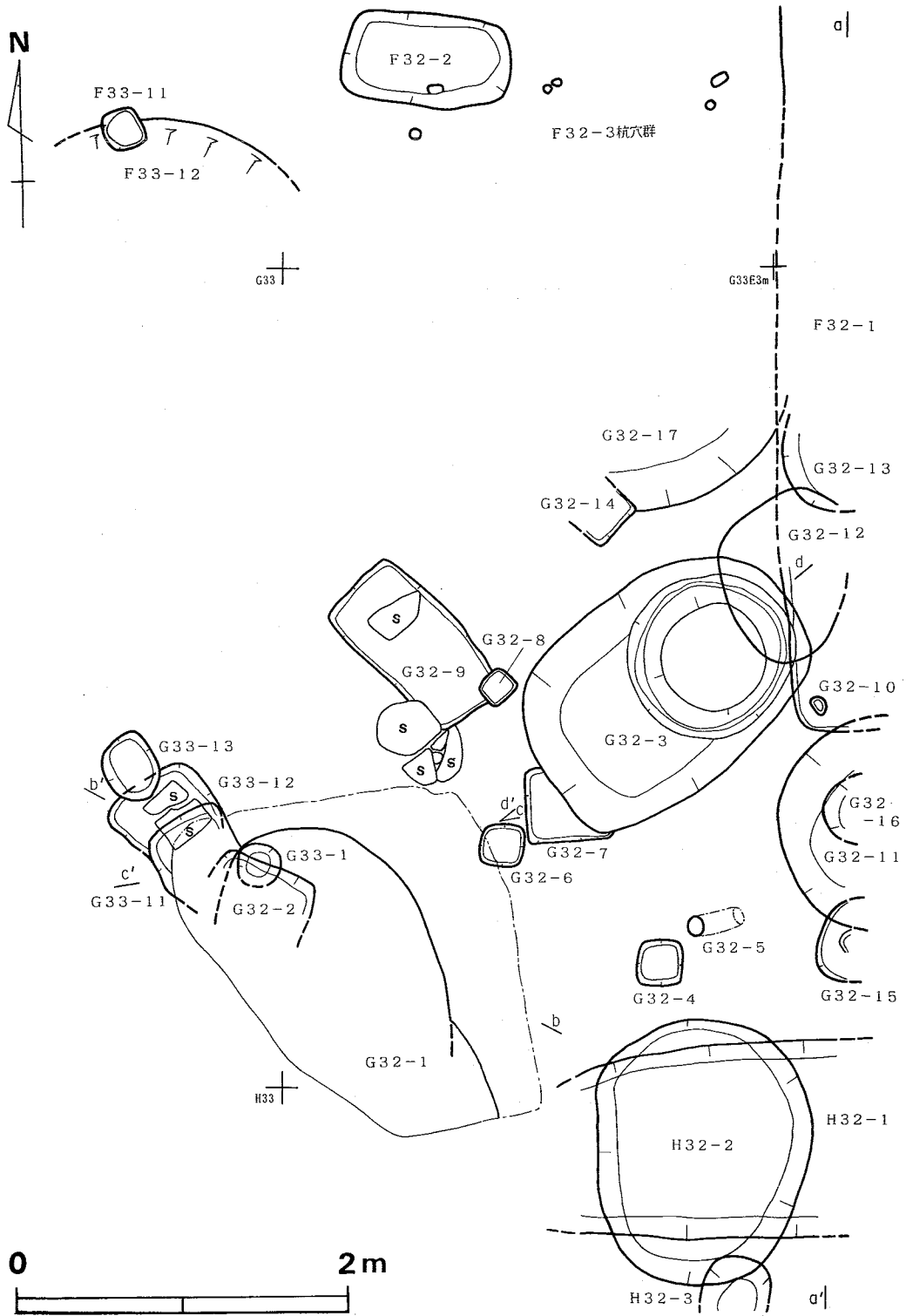
G33-7・8 G33-34区にある土坑で、7が8を切っている(III-012・013図)。7は南を建物の基礎で壊されているが、東西1.5m、深さ1.1mほどの土坑で凹凸のある垂直の壁と平らな底をもっている。埋土は灰褐色土を主にするもので、かなりの量の遺物が入っている。ゴミ穴として最終的に利用されたことを示している。8ははっきりとはわからないが、五角形であったようである。南よりに一段深い部分がある。暗褐色土を埋土にする。遺物は7から少量出土している。(成瀬晃司)

G33-10 G33区に位置する地下式土坑である。F33-3の階段に西半を切られ、さらに近代の土管とそのマンホールにより大半を破壊されている。入口もなく、わずかにその痕跡を留めるのみである。少ない残っている部分から推定できる平面形は東西4.4m、南北1.5mのやや不整な隅丸の長方形で、底は標高11.2m天井の高さは1.7mほどであったと考えられる(III-019図)。残っている壁は比較的丁寧に仕上げられており、ほぼ垂直に切り立ち、緩やかに湾曲して天井に移行する。埋土は灰色粘質土を主にし、マンホールに切られた部分では砂利混じりの暗灰褐色土があったが、マンホール設置の際に入れられたものと思われ、その当時は空洞であったと考えられる。遺物は17世紀後半のものが少量見出されたのみである。この遺構は地下式土坑であるが、入口などがなくなっており本来の姿を推定するのは困難である。埋土の観察などから、ほぼ中央に1m四方ほどの入口をもっていたものと推定している。(小川 望)

F32-1 F・G32区にあり、G32-11・12・13より新しいことは層位的に確実である。G32-3に切られている。全面的に大きく破壊を受けており、残っているのは南北7.2m、東西0.5mほどの部分であり深さは0.4mである(III-021・022図)。長軸方向はほぼ真南北である。底は北へやや傾斜するが平坦であり、ほぼ垂直に切り立った壁をもっている。底は固くなっている。表土と暗褐色土の下にあるロームと黒褐色土が斑状に混じる層の上面で確認している。埋土は焼土・炭化物・砂を含む赤褐色土である。遺物はない。F33-2と同様の長軸の長い遺構であったとも思われるが北側が破壊されているので明らかではない。相互の中心間の距離は8.1m、これは江戸間で四間半になる。底の標高と長軸の長さに若干差があるが、埋土・形・規模ともに酷似した遺構である。同一の建物に関連する遺構であった可能性が強い。(小川 望)

F32-2・3 F32区の南西にあり、表土・暗褐色土の下のいわゆる斑状の土の上面で確認した遺構である。2は1m×0.6mの規模で、深さ0.3mの土坑であり、3は径5~10cm、深さ15~60cmの6杭穴である(III-021図)。2の埋土はローム・炭化物・焼土・粘土を含む灰褐色土である。杭穴はほとんど中空で、暗褐色土が部分的に若干あるのみである。杭穴は二つずつ組になって東西2mほどの範囲に位置する。あるいはF31-29とつながる可能性もある。ほぼ真東西の位置にあり、類似の状況をしている。地境の塀にでも関係するものであろう。2・3ともに遺物はない。(小川 望)

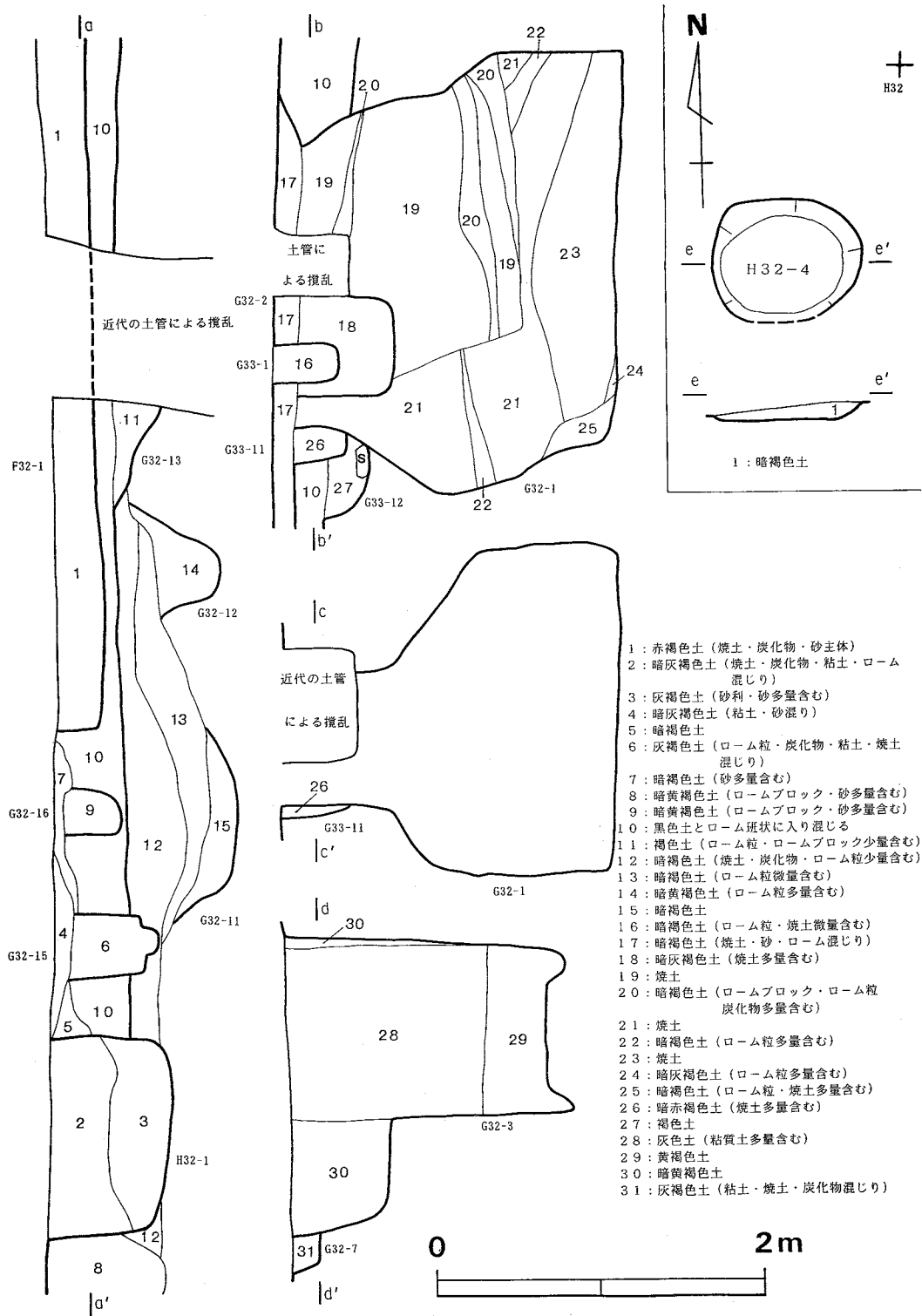
I E 36 · E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



III-021 図 F32-1~3, F33-11~12, G32-1~17, G33-1~11~13, H32-1~3 実測図



### 第三章 江戸時代の遺構



III-022図 F・G・H-32-33区土層図、H32-4実測図 (土層図の水準:14.5m、e-e':14.0m)

F32-4・5 F32区南東にある長楕円の土坑である(III-035図)。上部は破壊されているため、掘り込み面は不明である。遺物はなく、性格もわからない。(藤本 強)

G32-1・2 1は G32区に主要部のある地下式土坑である。G33-11・12を切り、G32-2, G33-1に切られている。土管や基礎によって大きく破壊されている。いわゆる斑状の土の上面で確認しているが後で触れるようにこの切り込みは再掘削のときのものと考えられるので、本来の掘り込みの面はいわゆる斑状の土の下であった可能性が強い。平面形は2mのほぼ正方形であり、深さは2mほどで、底の標高は 12.5m である(III-021・022図)。壁は底から1m までは垂直でしだいに狭くなり入口に至る。底は平坦ではあるが東にやや傾斜している。壁の上部と天井には工具痕が多く残り、底と壁、壁同士の交わるところも比較的凹凸が激しい。埋土は堆積の状況からみて二つに分けられる。III-022図の19・20層が互層で堆積する部分と21～25層の焼土を主にする層からなる部分である。下の層は中央が盛り上がった入口から土が入れられたことを示す典型的な堆積を示している。これから底中央のやや西よりに入口があったことが推測できるが、上部の堆積は埋土で埋められた後、一部が掘られてそこに再び堆積したことを示している。入口は崩落などにより本来の姿を失っているものと思われる。遺物は17世紀後半の磁器、瓦などかなり多く出土しているが、特定の場所に集中せずしかも小片が中心であった。この遺構は天井に入口をもつ地下式土坑であり、埋土に焼土を多く含むことから、火事の後始末にともなって焼けた壁土や器物類が投棄されその後なんらかの理由により一部が掘られた後再び埋められたものと思われる。2は 1の上部にある一辺0.6mの方形をした深さ0.6mほどの土坑であり(III-021・022図)、埋土は焼土を多く含む暗灰褐色土である。既に見たように多数の土坑と切りあい関係がある。遺物はない。(小川 望)

G32-3 G32区に位置し、G32-7・10を切り、G32-12に切られる。いわゆる斑状の土の上面で確認されている。全体は楕円形で、これを切るような形で東側に円形の埋土に差がある部分があるが有機的な関係にある一つの遺構と考えられる。楕円形のもの南北1.8m、東西1.2m 強で、深さは60cm であり、平坦な底と緩やかな壁からなる(III-021・022図)。埋土はロームの小ブロックを含む暗黄褐色土であり、円形の部分の埋土を取り巻く形で入る。円形ものは楕円形のものに接するように掘られ、径は1m、深さは1.6m である。底の壁際の部分は幅20cm ほどの溝がめぐり、その内側の底には樹脂状の物が浸透したようになっており、きわめて固い。埋土は下の四分の一ほどが黄褐色土、その上に灰色の粘質土の粒を多量に含む灰色土がある。遺物は円形の部分から瓦と陶器の小片がわずかにあったのみである。形や埋土から円形の部分に桶がはめ込まれ、その外側に土が入れられ、桶の内側はおそらく厠の下穴に用いられたものと考えられる。(小川 望)

G32-4・5・6・7・8・9・10・12・14・15・16・17 G32-3の周辺に発見されたいわゆる斑状の土の上面で確認された小土坑である(III-021・022図)。相互に若干の切りあいがあるが、大きな意味はない。いずれも遺物はほとんどない。12・17は暗黄褐色土の埋土をもつ深さ15cm ほどの浅い皿状の土坑で、不整な楕円形をしていたものと思われ、植栽のあとと考えられる。5・10は径10cm 前後の杭穴で、深さは40、15cm である。10はほぼ垂直であるが、5は傾斜している。15・16は径40～50cm 深さ30～50cm の円形の土坑で、埋土は灰褐色土、暗黄褐色土である。4・6・7・8・14はほぼ垂直な壁と平坦な底のある一辺20～50cm の方形の土坑で、埋土はいずれも粘土を含む灰褐色土である。深さは 8が45cm

### 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

と深いほかは15～20cm 前後である。9も同様の土坑であるが、0.6×1m で、深さは50cm であり、底と周辺に石がある。こうした方形の土坑は形態から柱に関係するものとも考えられるが、間の距離・方向や他の遺構との有機的な連関をみいだすことはできない。(小川 望)

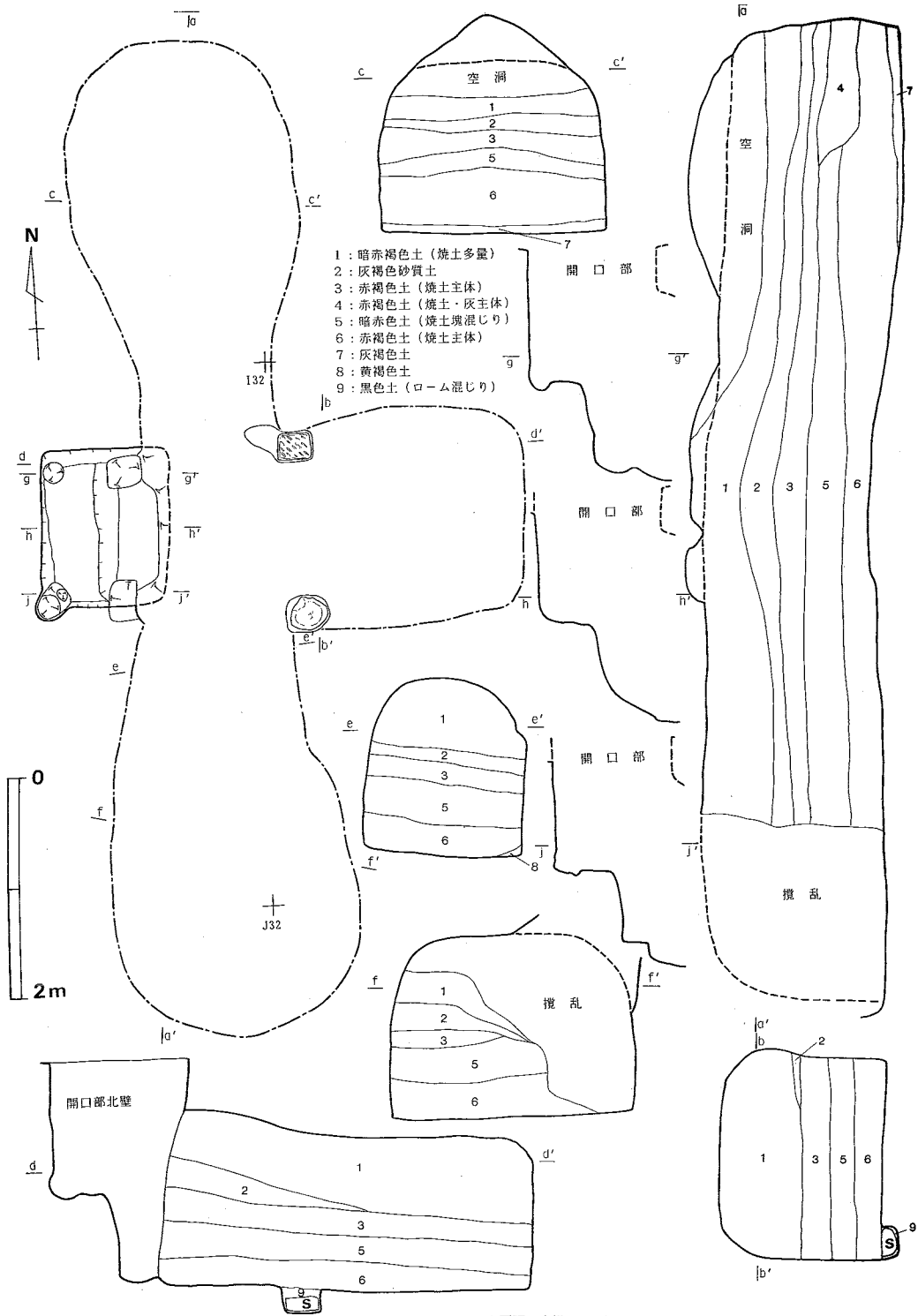
**G32-11・13** G32区にあり、いわゆる斑状の土の下で確認されている。13は斑状の土に覆われている。11はさらに下の面で確認している。どちらも東側を近代以降の工事で破壊されている。いずれも径1.2m ほどの円形の土坑で(Ⅲ-021・022図)、深さ30～40cm の鍋底状の形をしていて、底などは凹凸が激しい。暗褐色の埋土が入る。遺物はなく、植栽のあとかと思われる。(小川 望)

**H32-1・2・3・4** H32区に位置し(Ⅲ-021・022図)、1・3はいわゆる斑状の土の上面、2・4はいわゆるソフト・ロームの上面で確認している。いずれも近代以降の工事で壊されている。1は幅1.2m ほどの溝状に残っているが、西側でやや狭くなり東側にもつながっていないので、細長い楕円形の土坑と思われる。深さは70cm ほどで垂直な壁と丸みのある底をもち、上に粘土を含む暗灰褐色土、下に砂利・砂を含む灰褐色土がある。2は1.6m×1.3m の南北の長い不整な楕円形で、深さ20cm ほどの皿状の土坑である。ローム混じりの黒色土を埋土にもつ。3は径45cm、深さ80cm の底のすばまった円筒形の土坑で、埋土は褐色土が主で、これに白色土と黄褐色土のきわめて固い互層が何枚も入る。4は東西90cm、南北75cm の不整な楕円形で、残っている深さは15cm ほどの皿状の土坑である。ロームを少々含む赤褐色土を埋土にもつ。1・2から18世紀代の少量の遺物が出土している。2・4は植栽のあとかと思われるが、1・3の性格は不明である。(小川 望)

**H32-5** この遺構付近も破壊が深部まで及んでいて、ロームにかなり入った標高13.0m 付近にならないと安定した確認面は得られない。部分的には、さらに深く標高11.0m 以下にも破壊が及んでいる。この地下式土坑は南端が破壊が深いところにまで及んでいるところでまず確認された。ちょうど明治時代の建物の基礎が地下式土坑の南端の部分にあり、この建築にあたって、この遺構が現われたため土坑内の土を取り、そのかわりにグリ石を詰め基盤の安定を図ったものと思われる。このグリ石を取ったところ地下式土坑の底と0.2m ほどの壁の立ち上がり、それに焼土の詰まっている断面が確認できた。北の方向に伸びる地下式土坑があることがわかった。つぎに I32区のローム面の清掃をして、焼土の詰まっている入口をもつ地下式土坑があることが明らかになった。しばらくして H32区の一部でロームが雨上りの日に陥没し、何らかの遺構が存在することが判明した。陥没部を覗き込むと上部は空洞になっている地下式土坑であるが、それがどのような形でつながるのかは全く見当がつかなかった。当初は 3基の地下式土坑があるとばかり考えていた。調査は陥没穴と入口から取りかかったが、どうも両者は一つらしいことが埋土の状況から明らかになった。陥没穴からの調査で北壁が、入口からの調査で西壁が確認できた。西壁は北にも続くが南にも続くことも明らかになった。南に向かう壁は南端の調査で発見されていた壁と同一の方向であることもわかってきた。この地点のロームはもろく日が経つにつれ表面にひびが見えるようになった。天井を残したまま調査するのは不可能なことがはっきりしてきた。そこで J32区の他の遺構の調査が終った後、南の断面から調査することにした。

調査を進めると天井はきわめて簡単に落盤しかなり危険な作業となった。南から掘り進み、入口の手前に達したところ東壁が突如直角に曲ってしまった。壁龕ぐらいのものであろうと思ひ断面

1 E 36・E 35, F 36~F 32, G 36~G 32, H 32 区の遺構



III-023図 H32-5実測図 (土層図の水準: 12.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

をとりつつ掘り進んだが、なかなか東の壁はでない。東西の土層断面を取るべく残しておいた断面は天井ごと崩れ北端で取らざるをえなくなった。とにかく東壁を出し、北にむかって掘り進み、ようやく陥没穴から入れた調査区とつなぐことができた。思いもかけない巨大な地下式土坑を掘ることになってしまった。埋土のほとんどは焼土および焼土塊を多量に含むものであり、焼け跡の始末に入口から投げ込んだものであろう。南北方向では、中央が高く、南と北が低い堆積をしている。東西方向では、東に低い堆積がみられた。入口から3方向に低くなっている堆積である。埋土の上面はかなり平であり、そのうえに20~30cmの空洞がある。ただ単純に投げ込んだのではこのような堆積にはなりにくい。あるいは水などの力を利用したものかとも思うが確証はない。

入口と北・東・南の3室をもつ巨大な地下式土坑である(III-023図)。入口は南北1.45m、東西1.2mの方形である。全体の割には入口は小さい。現存する入口の下1.2mに入口の底があり、さらに0.8m~1.0m下がって地下室の底がある。入口の西北隅と西南隅に径0.2mの浅い掘り込みがある。これらは確認できたところまで上に伸びていた。入口を補強するための施設か上下するための施設を固定していたものであろう。入口と地下室の境は段になっているが、この段の両脇に一边0.3mの方形の浅い掘り込みが認められた。段を補強するための施設の一部であろうか。

地下室の底に降りると正面に東室がある。東室の入口には、30cmほどの平石を入れたピットが左右にある。相互の距離は1.6m、段の脇の北側の穴と北側の石との距離、南側の穴と南側の石との距離はほぼ同じで、これまた1.6mである。これらは有機的な連関をもっており、入口の天井を支える構造物に関連するものであろう。東室は南北2.0m、入口の石から東壁までは2.2m、底から天井までは1.5mである。

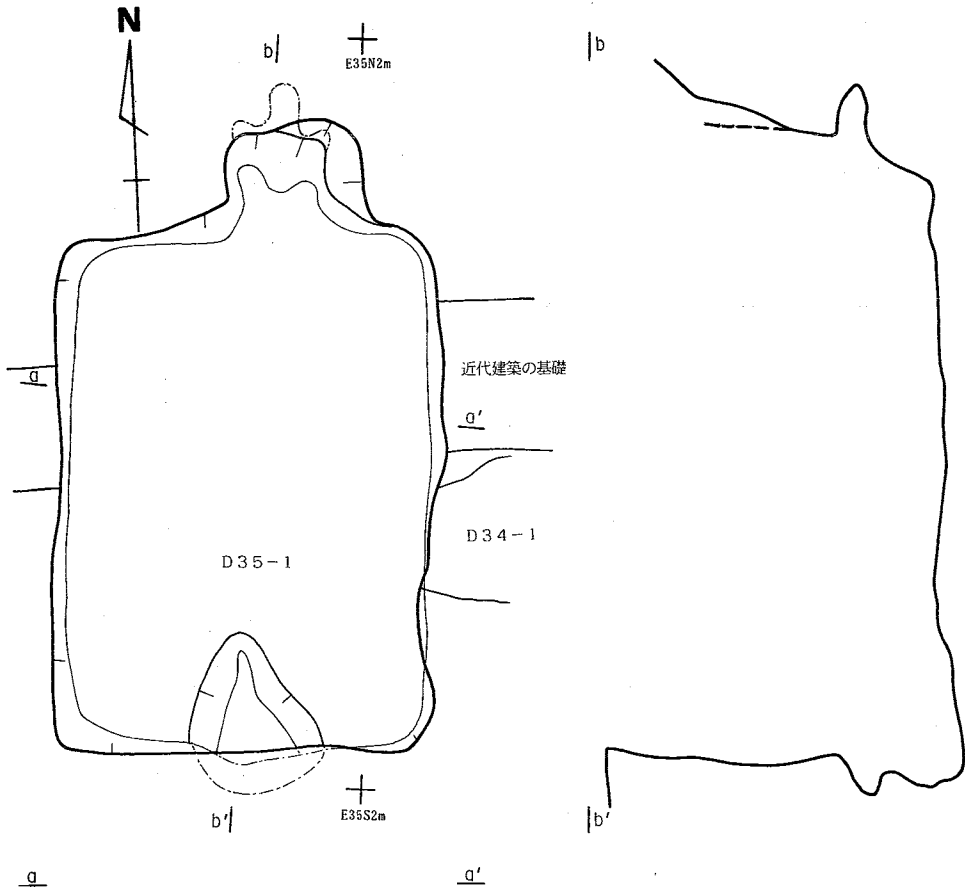
入口を入れて左が北室になる。杓子形をしていて、北になるにつれ、底は低くなる。中央との比高差は0.4mほどである。北室は入口の北の石から北壁まで3.7m、東西の最大幅は2.1mである。天井も北が低くなる。天井の高さは1.5m前後である。反対側に南室がある。これも杓子形をしていて底は南が低くなるが、比高差は北より小さく0.1mほどである。天井はほぼ水平である。部屋の高さは1.6mほどである。入口の南の石から南壁まで4.0m、最大幅2.2mである。作りはまぎれなくというところであるが、対称性はなく、形態からみると古い様相を呈している。最大長は南北9.2m、東西4.4mになる。巨大な地下式土坑である。遺物は焼けているものがほとんどで、17世紀後半の陶磁器を中心にしてかなりの量がみられる。この遺構から出土している寛永通宝は古寛永3、文銭9のみであり、まとまっている。(藤本 強)

## 2 D35~32, E34~32区の遺構

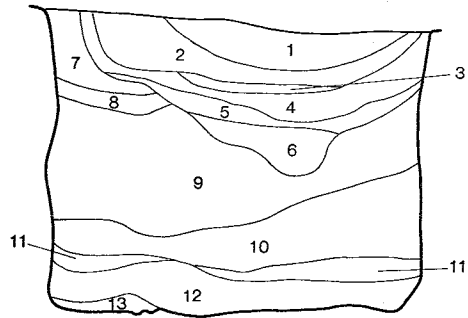
### 概況

比較的狭い範囲ではあるが、遺構が集まっており、他の部分との間に若干の空白があるためにこれをまとめることにした。また、この部分は近代の建築の基礎が東西方向に二本あり、上部を大きく破壊されているところでもあった。小さな遺構は少なく、地下式土坑を初めとする大型の土坑があるところである。上部が破壊されていたのが一因であろうが、そもそも遺構が比較的少ない部分にあっていたのであろう。盛土の面はほとんど壊されていてロームの面になって確認された遺構

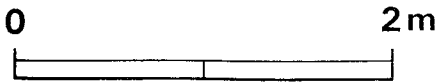
2 D 35~32, E 34~32 区の遺構



a a'



- 1 : 黄灰色砂質土
- 2 : 黄白色土 (砂・砂利主体)
- 3 : 黒褐色粘質土
- 4 : 黄灰色粘質土 (粘質土主体、砂少量含む)
- 5 : 暗灰色粘質土 (砂・砂利混じり)
- 6 : 暗黄灰色粘質土 (ローム粒多量・砂少量含む)
- 7 : 暗黄褐色土 (ローム粒多量・砂少量含む)
- 8 : 暗褐色土 (ローム粒・粘質土・砂利混じり)
- 9 : 暗黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む、砂・砂利・粘土混じり)
- 10 : 暗褐色土 (ローム粒・炭化物少量含む)
- 11 : 黄褐色土 (ロームブロック主体、褐色土混じり)
- 12 : 暗灰褐色土 (粘質土ブロック・砂・ローム粒・砂利多量含む)
- 13 : 灰白色粘質土 (粘質土主体、ロームブロック少量含む)



III-024図 D35-1実測図 (土層図の水準:14.5m)

### 第三章 江戸時代の遺構

がほとんどである。周辺の地点と同様に18世紀前半までの遺物を出す遺構が多い。ゴミ穴を目的にしたのではないかと思われる遺構もあり、周辺の地点と若干の差が見られる。第一節でもみているように、天和三年までは大部分は道であった可能性が高い。

居住に密接な関連のある遺構が多いのは周辺の地点の状況から当然であるが、周辺の地点がいわば上屋敷の「御殿空間」の部分我代表するような遺構が主体であるのにたいし、ここでは「詰人空間」の部分にあたるのではないかと思われる遺構が出現している。地下式土坑もしくはそれに類似する機能をもっていたのではないかと思われる遺構も E ライン付近に東西にあるが、G ラインにそってあるものとは規模・作りに大きな差があり、同一の機能をもっていたとは考えにくい。天和三年以前は道であり、それ以降は上屋敷の最北端に位置する部分だけに「陰」もしくは「裏」の機能をもつ部分であったように思われる。 (藤本 強)

#### 遺構各説

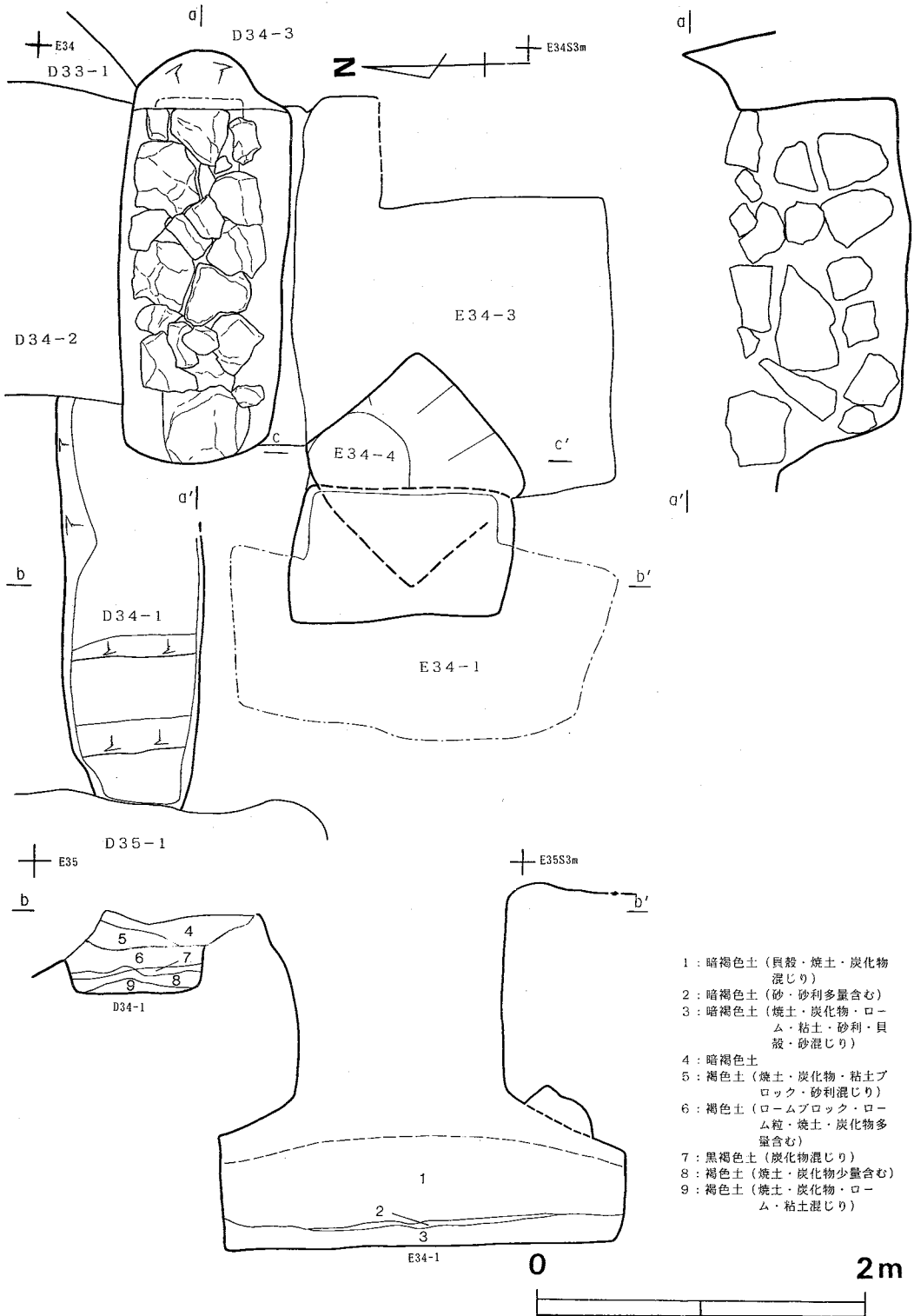
D35-1 E35ポイント周辺にある大型の土坑である。いわゆるソフトロームの上面で確認された。D34-1をわずかに切り、E35-1の石の一部がかかっている。近代以降の建物の基礎により北半は破壊されている。南北2.8m、東西2mの隅丸の長方形であり、北壁中央やや東よりに張り出し部がある(III-024図)。南壁中央の底にも浅い掘り込みがある。こうした部分の壁は凹凸が激しいが、他は垂直であり工具痕が多数残っているが、比較的平らに仕上げられている。底も多少凹凸があるがほぼ平坦である。埋土は底付近の水平の堆積をする部分と、上部の南から北へむかって流れ込むような堆積をする部分にわかれる。遺物は「かわらけ」、陶磁器など少量が発見されている。遺構の時期・性格は不明である。 (小川 望)

D34-1 D34区にあり、D35-1を切り、D34-2・3に切られている土坑である(III-025図)。上部は大きく破壊されている。東西に長く、南北の幅は0.9m、深さは0.5mほどで底には20cm前後の段差が二段ある。埋土は褐色土を主にするもので、焼土や炭化物を多く含む層もある。18世紀代の陶磁器などが少量出土している。性格は不明である。 (萩尾昌枝)

D34-2 D・E34区にある大型土坑である(III-027図)。上部に D33-1、D34-3、E34-2がある。南北2.8mあり、東西は2mである。深さは0.9m、東北と西北の隅が飛び出している。ここから溝が壁沿いに延びている。西壁の南側に二段の階段状の掘り込みがあり、東西の壁には対応する位置に角材をはめこんだと思われるくぼみがある。さらに南側にはよく調整された段があり、E34-3に向かい降りているようである。埋土は下部がロームブロックの薄い層を挟んだ暗褐色土を主にする層で、上部は焼土・暗黄褐色土からなっている。18世紀代の陶磁器などが若干量出土している。E34-3とは同時期に用いられた遺構と考えられる。地下式土坑の入口部分であった可能性が高い。(萩尾昌枝)

D34-3 D34区に位置し、数多くの遺構の切りあいのなかで、もっとも新しい土坑の一つである。東西2.1m、南北1m、深さ1.1mであり、内部に50cmほどの石が多数入っていた(III-025図)。この土坑の上には明治時代に建てられた建物の基礎があり、ロームのないところではしばしばこのような形で石を入れ、沈下しないようにしているの、これもそうした例と考えられる。内部に詰まっているのは石がほとんどであり、上部には暗褐色土が、下には褐色土がある。遺物はみられない。性格ははっきりしない。 (萩尾昌枝)

2 D 35~32, E 34~32 区の遺構



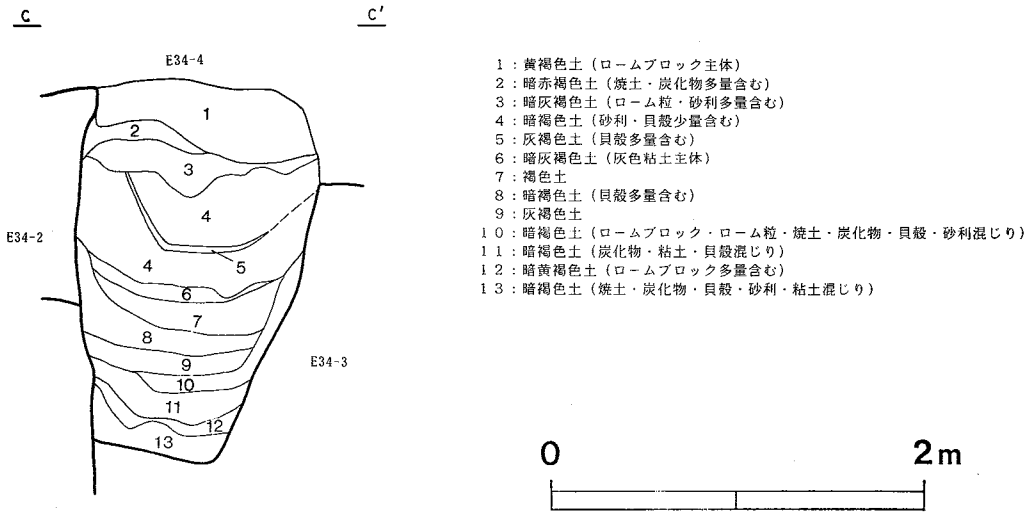
- 1: 暗褐色土 (貝殻・焼土・炭化物混じり)
- 2: 暗褐色土 (砂・砂利多量含む)
- 3: 暗褐色土 (焼土・炭化物・ローム・粘土・砂利・貝殻・砂混じり)
- 4: 暗褐色土
- 5: 褐色土 (焼土・炭化物・粘土ブロック・砂利混じり)
- 6: 褐色土 (ロームブロック・ローム粒・焼土・炭化物多量含む)
- 7: 黒褐色土 (炭化物混じり)
- 8: 褐色土 (焼土・炭化物少量含む)
- 9: 褐色土 (焼土・炭化物・ローム・粘土混じり)

III-025図 D34-1・3, E34-1・4実測図 (土層図の水準: 14.0m)



### 第三章 江戸時代の遺構

**E34-1** E34区にある地下式土坑である(III-025図)。E34-3を切り、E34-4に切られている。入口は南北1.3m強、東西0.8mほどである。南北と西に底は掘り広げられており、南北2.3m、東西1.5mほどになっている。東には既にE34-3があったためこのような形になったのであろう。天井は底から1mほどで低い。埋土は暗褐色土を主にしたもので、焼土・炭化物・砂利などが入っている。18世紀前半を中心にする多量の遺物が出土している。(萩尾昌枝)



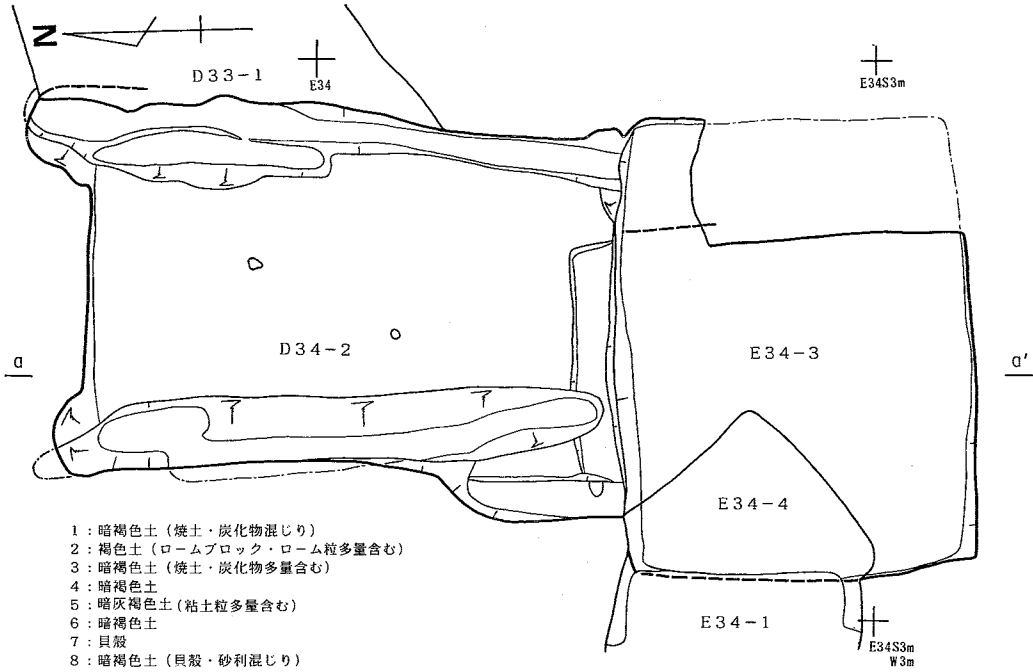
III-026図 E34-4土層図(水準:15.0m)

**E34-2** D・E34区にある不整な形の土坑である(III-028図)。D34-2, E34-3を切り、D34-3, E34-4に切られている。E34-1との間は近代の破壊によってはっきりと確認できていないが、E34-1を切っていると思われる。深さは1.4mと深い。貝殻と焼土が多く含まれ、暗〜暗灰褐色土を埋土の主体にしている。同様な埋土をもつ D33-1とは平面的にもつながる可能性が強く、少なくとも D33-1の上部とは同一の埋土をもっており、同一時期に両者に廃棄がなされていた。この付近の遺構としては稀な18世紀後半の遺物を多量にもっている。D33-1がより古い遺物が中心であるので、あるいはD33-1は再利用された可能性もある。形が不整であること、埋土に貝殻を多量に含むことからゴミ穴が目的であったとも考えられるが、深さが深いことに他の例との違いがある。(萩尾昌枝)

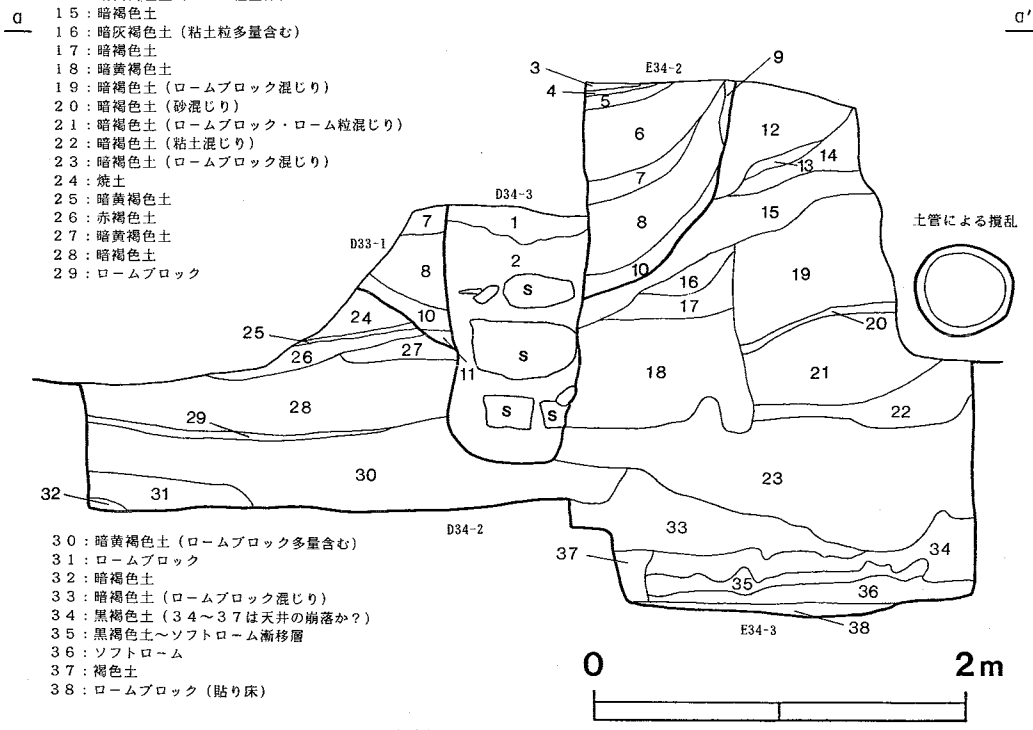
**E34-3** E34区にある土坑である(III-027図)。この上にE34-2・4, D34-3が作られている。E34-1とは直接の切りあいはないが、E34-3がより古いものと思われる。東側に天井が残っており、埋土にも天井の崩落かと思われる土の堆積がある。天井は底から0.8mほどで低い。D34-2を入口にする地下式土坑の地下室であった可能性が高い。暗褐色土を主にする埋土であり、陶磁器などの若干の遺物がある。(萩尾昌枝)

**E34-4** E34-1・3が接している部分にある土坑である(III-025・026図)。この付近の複雑な切りあい関係のある遺構のなかで、もっとも新しい遺構の一つである。一辺1.1m、深さ2mの深い土坑であり、埋土には貝殻・焼土・炭化物が多量に入っている。18世紀前半の遺物若干がみられる。深さは深い、ゴミ穴の可能性が高い。(萩尾昌枝)

2 D 35~32, E 34~32 区の遺構



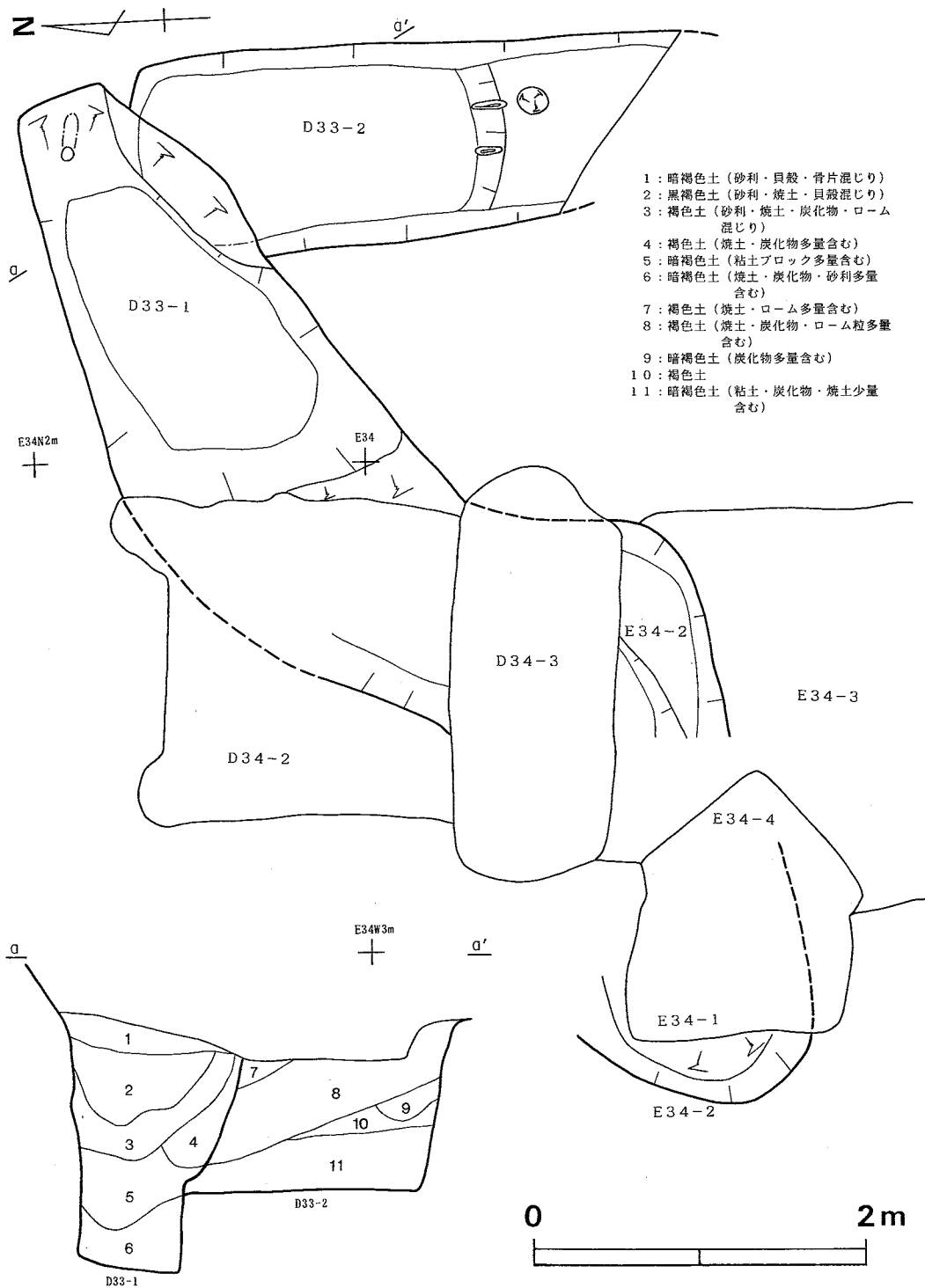
- 1: 暗褐色土 (焼土・炭化物混じり)
- 2: 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 3: 暗褐色土 (焼土・炭化物多量含む)
- 4: 暗褐色土
- 5: 暗灰褐色土 (粘土粒多量含む)
- 6: 暗褐色土
- 7: 貝殻
- 8: 暗褐色土 (貝殻・砂利混じり)
- 9: 暗褐色土
- 10: 暗灰褐色土 (砂・粘土粒混じり)
- 11: 暗褐色土
- 12: 暗黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒主体)
- 13: 焼土・炭化物
- 14: 暗黄褐色土 (ローム粒主体)
- 15: 暗褐色土
- 16: 暗灰褐色土 (粘土粒多量含む)
- 17: 暗褐色土
- 18: 暗黄褐色土
- 19: 暗褐色土 (ロームブロック混じり)
- 20: 暗褐色土 (砂混じり)
- 21: 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒混じり)
- 22: 暗褐色土 (粘土混じり)
- 23: 暗褐色土 (ロームブロック混じり)
- 24: 焼土
- 25: 暗黄褐色土
- 26: 赤褐色土
- 27: 暗黄褐色土
- 28: 暗褐色土
- 29: ロームブロック



- 30: 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 31: ロームブロック
- 32: 暗褐色土
- 33: 暗褐色土 (ロームブロック混じり)
- 34: 黒褐色土 (34~37は天井の崩落か?)
- 35: 黒褐色土~ソフトローム漸移層
- 36: ソフトローム
- 37: 褐色土
- 38: ロームブロック (貼り床)

III-027図 D34-2, E34-3実測図 (a-a': 15.0m)

第三章 江戸時代の遺構

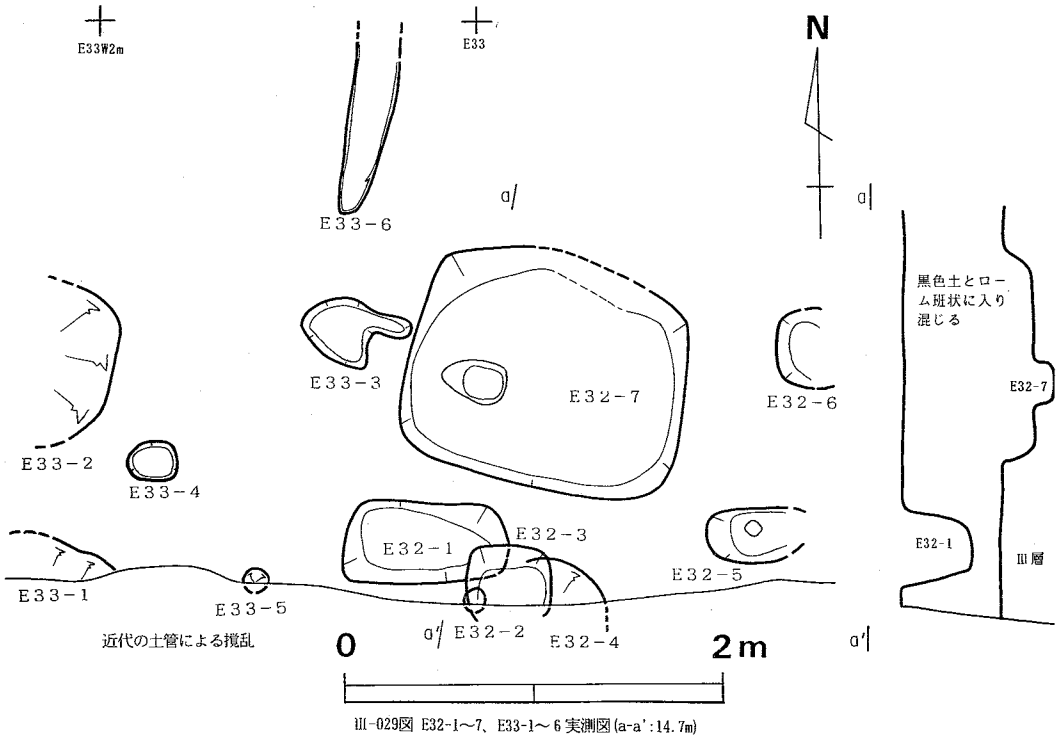


III-028図 D33-1・2, E34-2実測図 (a-a': 13.8m)

2 D 35~32, E 34~32 区の遺構

D33-1 D33区に中心のある不整な形をした土坑である (III-028図)。D33-2, D34-2を切っており, D34-3に切られている。深さは1.7mと深い。埋土の上部には貝殻が, 下部には焼土が多く含まれている。埋土の類似, 平面形が不整でありながらも, 繋りうるものであることから, E34-2と同一の遺構であった可能性があり, 少なくとも D33-1の上部の埋土は E34-2の埋土と同じ時に廃棄されたものと考えられる。18世紀前半に中心のある多くの遺物が出土している。E34-2とは遺物の時期の差が若干あるが, あるいはD33-1は再利用されたのかもしれない。ゴミ穴であろう。(萩尾昌枝)

D33-2 D・E33区にまたがる土坑で, 上は建物の基礎で破壊されているので, 掘り込み面は不明である。北を D33-1 に南を土管で壊されている。南北は現存3.3m, 東西は2mの長方形である (III-028図)。底は南が30cmほど高い。南の高い部分に浅い杭穴状のものがある。底は平らで, 壁は垂直である。埋土は下は炭化物などを含む暗褐色土で水平な堆積であり, 上は焼土を含むものが主になる褐色土で南から北に流れ込むように入っている。遺物は瓦の小片がかなりの量あり, 硯・陶磁器が少量出土している。遺構の時期・性格は不明である。(小川 望)



E33-1・2・3・4・5・6, E32-1・2・3・4・5・6・7 E32・33区にある比較的小型の土坑である (III-029図)。E32・33区の南側は土管により深くまで破壊されている。E32-1・2・3・4・5・6, E33-1・2はいわゆる斑状の土の上面で確認している。E32-4, E33-1・2は長軸0.8mほどの不整な楕円形であり, E32-2は径10cm, 深さ10cm前後の杭穴である。E32-1・3・5・6は長辺40~90cm, 短辺30~40cm, 深さ30~40cmの長方形の土坑である。埋土は多少の違いがあるが, 暗褐色土を主にするものである。いずれも遺物はなく, E33-2に貝殻が入っていたのが注目されるくらいである。E32-7, E33-3・4・5・6は層位

### 第三章 江戸時代の遺構

的に古く斑状の土の下にある暗褐色土から掘り込まれている。E32-7 は長辺1.5m, 短辺1.2m, 深さ15cm の隅丸の長方形で、底に20cm 四方の浅い掘り込みがある。ここには犬と考えられる動物の骨などが発見されている。E33-3 は不整な形, E33-4 は一辺20cm, 深さ 5cm の隅丸方形, E33-5 は径10cm, 深さ50cm の杭穴, E33-6 は幅25cm, 深さ15cm ほどの溝状である。埋土はロームを多量に含む明褐色土を主にする。遺物は E33-3・4から陶磁器の小片が若干と E32-7から「かわらけ」、金属片が少量出土したほかはほとんど見いだされていない。E32-7 があるいは犬の埋葬に関係するかと思われるほかは時期・性格など明らかではない。(小川 望)

E33-7 F34ポイントを中心にして発見された石組の溝であるが、両端は破壊されているし、石もわずかに残っているに過ぎない。直線ではなく曲線状の溝であったものと考えられる(III-015図)。幅50cm ほどで、深さは10cm ほどである。溝の底には砂利が敷かれていたものと思われる。埋土はローム・焼土混じりの暗褐色土である。遺物は若干量の出土を見ている。(成瀬晃司)

D32-1 D31-1と同じように上部は北の一部を除きほとんどない。D32 区の南西部にある地下式土坑である。L字形をしている。南北1.4m, 東西1.8m の方形の南側に1.2m×1.1m の張り出し部のついたものである(III-030図)。南の張り出し部の底は北側の主要部より0.1m ほど高い。この部分が入口であったのであろう。わずかに残っている部分から考えると、主要部には土の天井があったものと思われる。主要部の西の天井は1.3m ほどあったが、東は約70cm しかない。埋土は上部は焼土を多量に含む赤褐色土、下部は純粹の焼土のみでありその下に 2~3cm の黒色土混じりの黄褐色土がある。焼け跡の始末に埋め戻されたことは確実である。18世紀前半に中心のある多量の遺物は焼土混じりの層から出土している。小なりといえども地下式土坑である。(藤本 強)

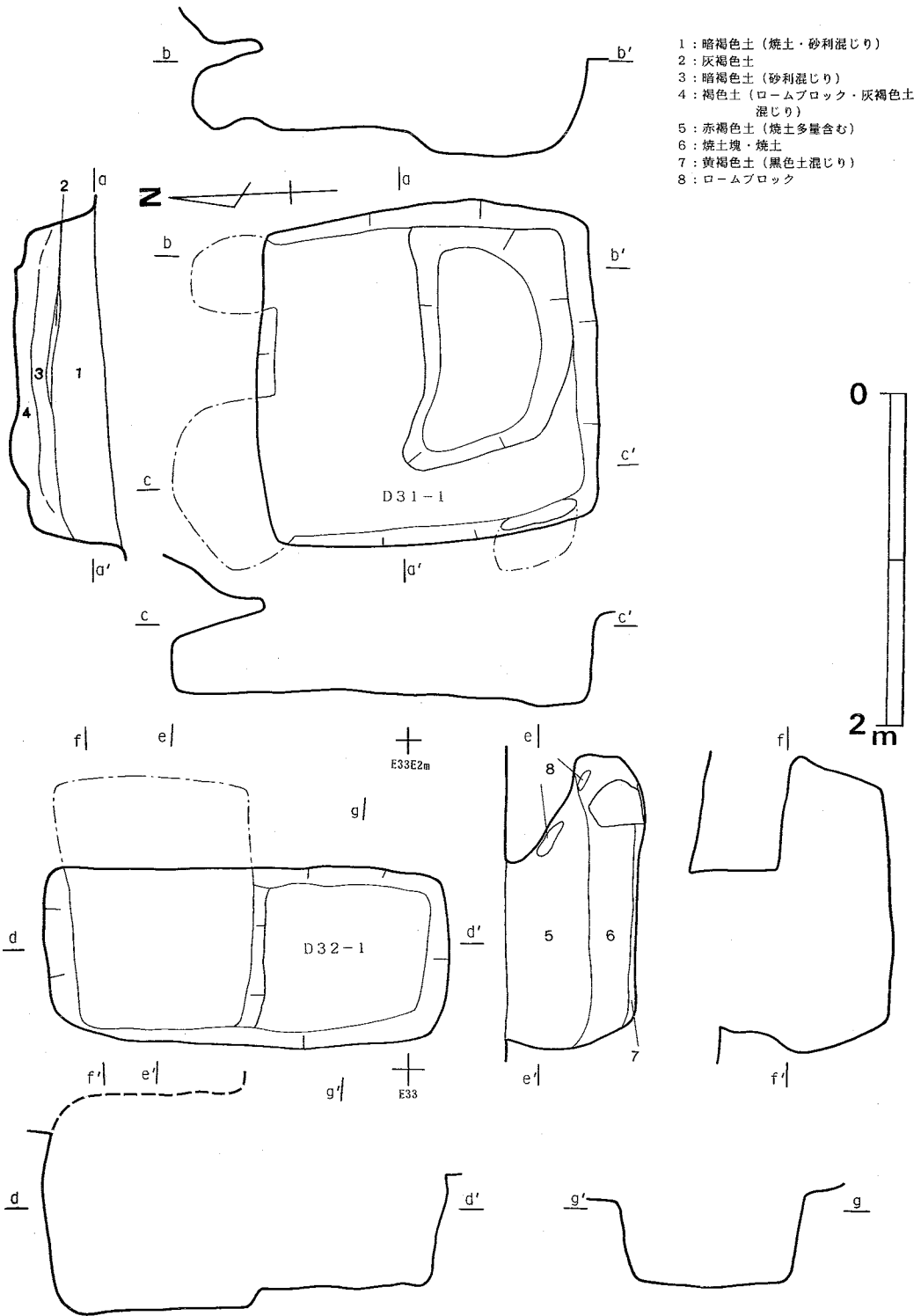
### 3 D31~27, E31~27, F31~27, G31~27, H29~27区の遺構

#### 概況

ここでも H ラインの南は大きく荒れているが、地下室がなくなるので、深い遺構は若干残っている。基本的な性格は1の地点と同じであると思われる。居住区の中心地区であり、「御殿空間」の中心であったものと考えられる。D・E 区は天和三年以前は道であり、それ以降も「御殿空間」からは外れていた可能性が強い。G ライン上の大規模な地下式土坑、1号組石の排水路、厠の下穴、それと F31-21・F29-1・H29-2・E28-1・H28-1・G27-1というような井戸の存在が、大きな特徴としてあげられよう。D 区は基礎があり、破壊が深くまで及んでいたこともあってか遺構の数は少ない。ただ屋敷の北端でもあり、大きな遺構はそもそも少なかったのであろう。G ライン上のものとは異なるタイプの穴蔵状の遺構が東西に並んでいるのが注目される。

28ラインの東 2~3m のところで台地は急速に傾斜を強め低くなる。この東側には厚い盛土がされることになるのであるが、屋敷内の利用という観点からみてもこの地点は大きな転換点である。この東には大規模な地下式土坑はないし、明確な厠の下穴の数も減る。下の砂利面と呼んでいる大規模な砂利敷きもここから東に見られるものであり、少なくとも屋敷としての利用が開始されてからしばらくの間は居住と関係のない形で利用されていたと考えるのが妥当であろう。この点に関しては別の地点で述べることにする。(藤本 強)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



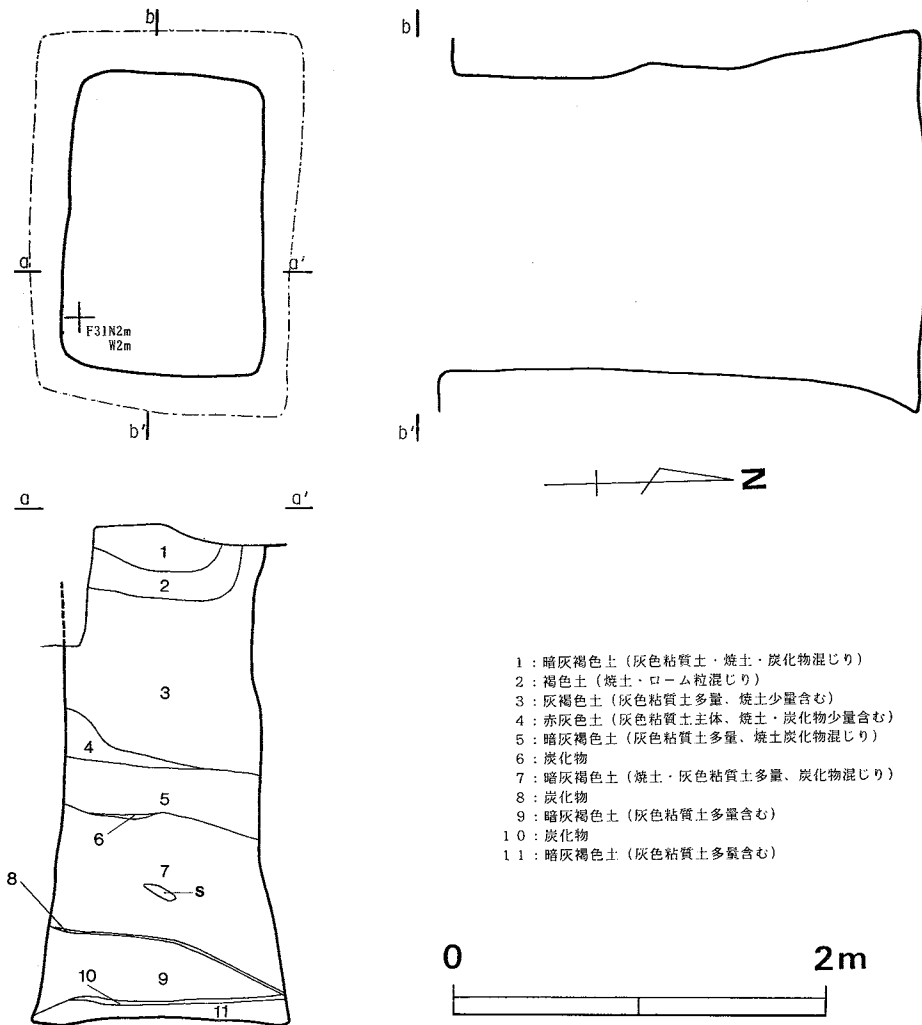
III-030図 D31-1, D32-1実測図 (土層図の水準:13.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

#### 遺構各説

**D31-1** 明治時代の建物の基礎があったところであり、標高 13.2m~13.0m 付近まで上部は荒れていた。D32-1とは1.2mほどしか離れていない。この遺構の主要部は D・E32区にある。一辺2.1mのやや胴張りのある方形で、東南側が0.2mほど低くなっている(III-030図)。東北、西北、西南の隅近くに0.3m~0.5mほどの掘り込みがある。何の目的であるのかは不明である。埋土は上が焼土と砂利を混じえた暗褐色土、中は砂利混じりの暗褐色土であり、ほぼ水平の堆積をしている。最下部はロームブロック混じりの灰褐色土となる。これはいわゆるレンズ状の堆積である。三隅の掘り込みはD32-1のことを考えると、天井部のある地下式土坑を作ろうと試みたのかもしれない。上部を欠くため不明である。17世紀後半の陶磁器などが少量出土している。(藤本 強)

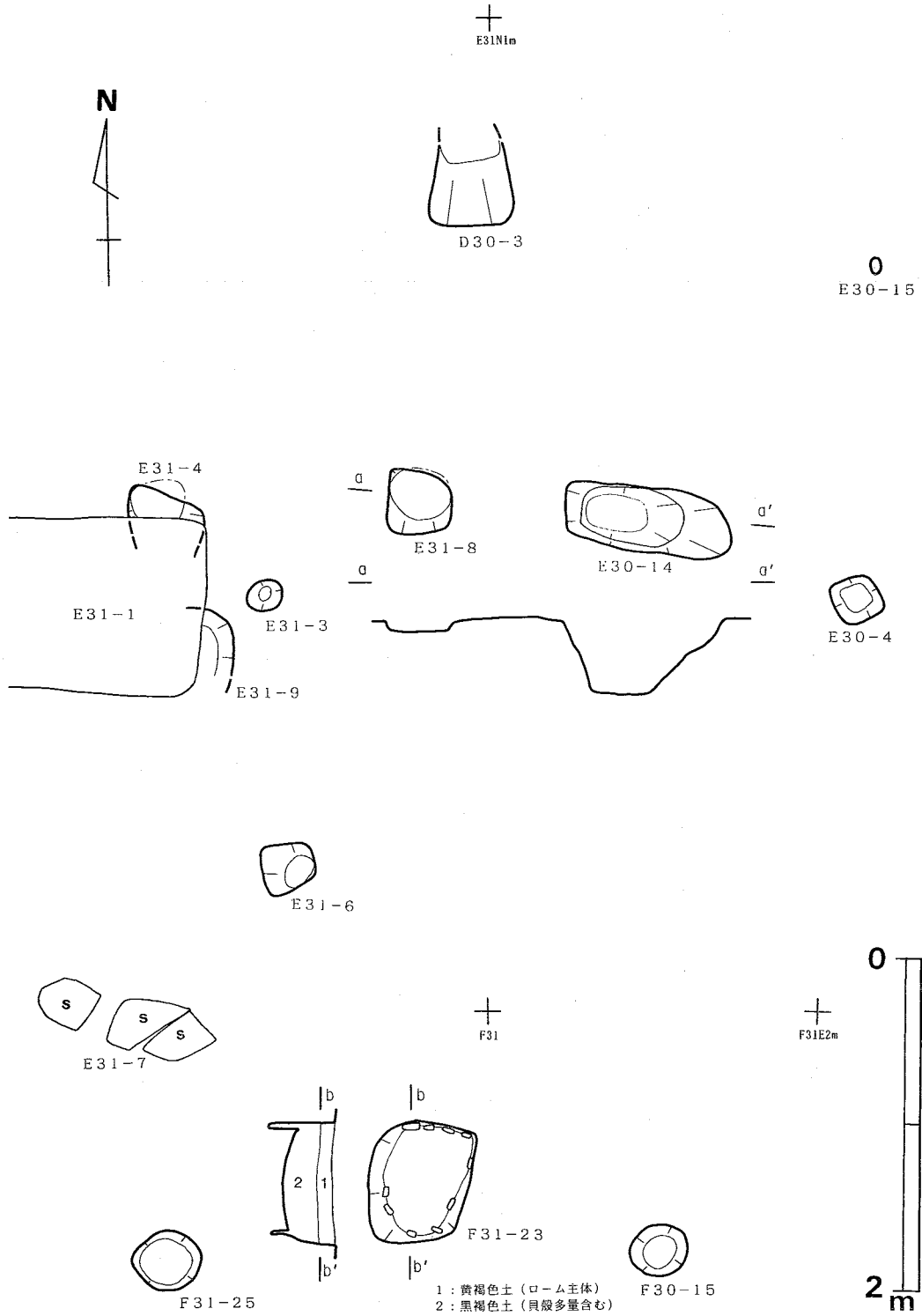
**E31-1** E31区にある大型の土坑である(III-031図)。E31-4・9を切り、南側は土管によって破



- 1 : 暗灰褐色土 (灰色粘質土・焼土・炭化物混じり)
- 2 : 褐色土 (焼土・ローム粒混じり)
- 3 : 灰褐色土 (灰色粘質土多量・焼土少量含む)
- 4 : 赤灰色土 (灰色粘質土主体・焼土・炭化物少量含む)
- 5 : 暗灰褐色土 (灰色粘質土多量・焼土炭化物混じり)
- 6 : 炭化物
- 7 : 暗灰褐色土 (焼土・灰色粘質土多量・炭化物混じり)
- 8 : 炭化物
- 9 : 暗灰褐色土 (灰色粘質土多量含む)
- 10 : 炭化物
- 11 : 暗灰褐色土 (灰色粘質土多量含む)

III-031図 E31-1実測図 (土層図の水準:14.8m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



III-032図 D30-3, E30-4・14・15, E31-3・4・6~9, F30-15, F31-23・25実測図 (土層図の水準:14.0m)



### 第三章 江戸時代の遺構

壊されている。いわゆる斑状の土の上面から掘られている。上面は長辺1.6m、短辺1mで、底は長辺2m、短辺1.4mの隅丸方形であり、深さは2.5mある。平らな底と強く屈曲して上面に至る壁をもつ。壁はすべてオーヴァーハングしていて、断面形は撥形である。埋土は上部に焼土を含む褐色土を主にするものがあり、下部には暗灰褐色土主体で炭化物を多く含む層がある。下の暗灰褐色土から18世紀前半の多種の遺物が出土している。形や埋土から地下式土坑と同様、「あなぐら」として用いられ、その後ゴミ穴として利用・廃棄されたものと考えられる。(小川 望)

**E31-2** E31区にある小土坑である(III-041図)。砂利混じりの暗褐色土を埋土にする。E30-2を切っている。南にあるF31-15はほぼ同規模であり、埋土も共通している。相互の距離は0.9mで、同時存在した可能性が高い。これに連なるものを発見することはできなかった。(成瀬晃司)

**E31-3・4** E31区にある小土坑である(III-032図)。深さは3が35cm、4が77cmである。3の埋土は焼土を含み、4の埋土は暗褐色土である。遺物はない。(堀内秀樹)

**E31-5** E31区にあり、E30-2を切っている土坑である(III-041図)。北側は土管により破壊されている。規模は小さいが深さは65cmと深い。埋土は灰褐色土で、18世紀代の若干の量の遺物がみられる。(堀内秀樹)

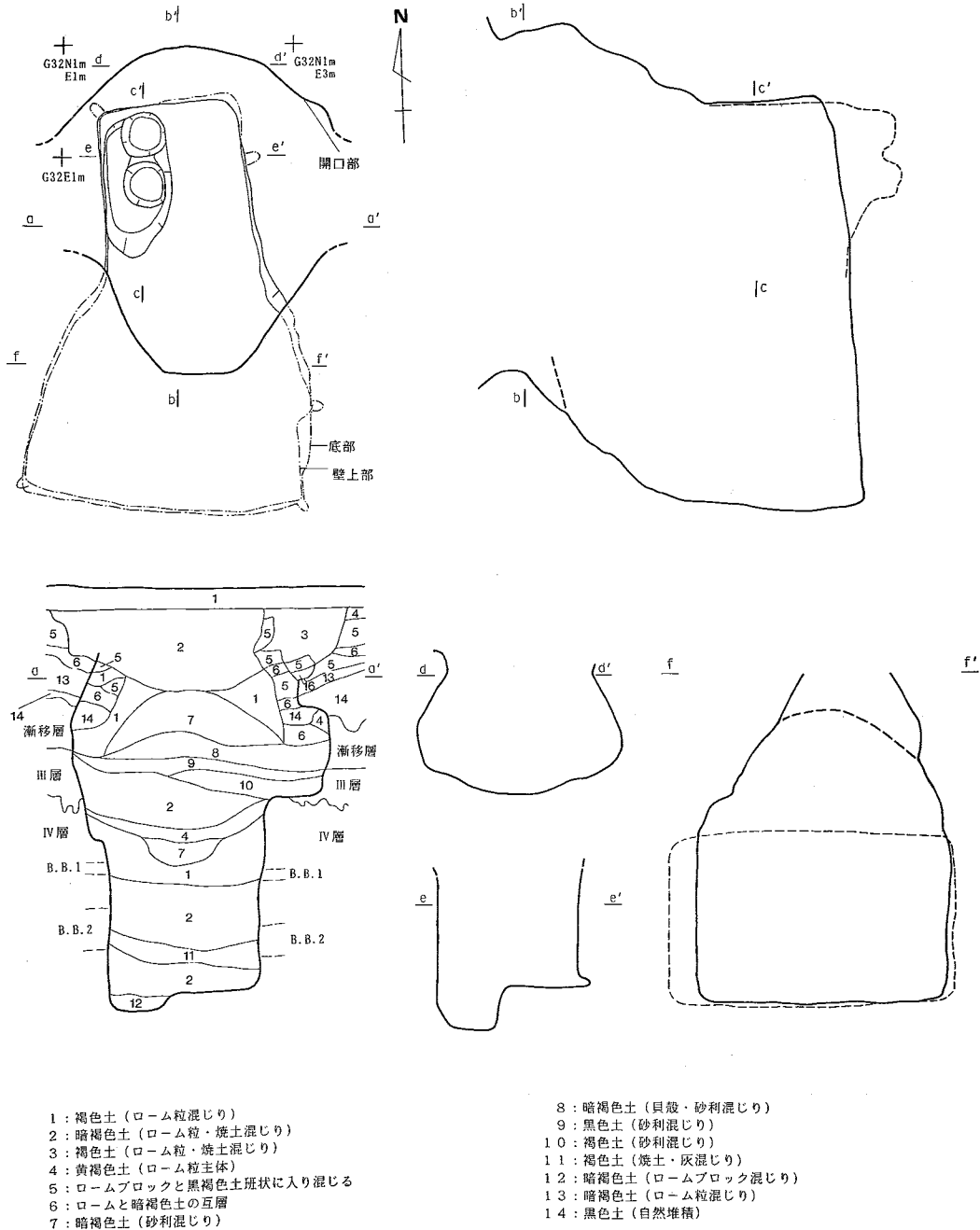
**E31-6・7** E31区南東にある遺構である。6は0.3mほどの土坑であり、7は20～30cmほどの平石が三つかたまっているものである(III-032図)。性格は不明である。(藤本 強)

**E31-8・9, E30-14・15** E31-1の周辺に発見された小型の土坑である(III-032図)。いわゆる斑状の土の下にこのあたりでは薄い砂層があり、E31-9はこの砂層の下、他は砂層の上面で発見された。E30-14・E31-8はローム混じりの褐色土が埋土であり、14は長軸1mほどの長方形、8は一辺0.4mの方形である。15は灰褐色の粘性のある埋土をもつ10cmほどの杭穴であり、9は焼土混じりの褐色土が埋土であり、深さ20cmほどの皿状の遺構である。いずれも遺物はなく、E30-14・E31-8がその東側にあるE30-12・E29-6などの類似の遺構と列をなしているようにも見え、なんらかのつながりが考えられる可能性はあるものの方向は真東西ではなく、性格など明らかではない。(小川 望)

**F31-1** F31区の南端に少しだけかかり、主体はG31区にある大型の地下式土坑である。F30-1と同様に近代に埋設された土管の溝のなかに発見された。切り込み面もF30-1と同じであり、調査時に斑状の土と呼んでいた黒色土とロームが斑状に盛土された面に覆われている。階段付の地下式土坑であるF33-3・G33-5あるいはF34-11はいずれもこの盛土を切って作られているので、これらの遺構との新旧関係は明らかである。G33-10、F30-1とともにGライン上の地下式土坑のなかではより古い一群を形成することになる。しかも大型である。Gライン上の古い地下式土坑のなかではもっとも大型である。土管の溝の底は標高12.1～12.2mであり、この地下式土坑の底面は北側でやや浅く、11.3m強、南側では11.1mである。地表下5m近いところに底があることになる。この土坑の最深部は東北隅にある杭穴(?)の底で標高10.8mを切っている。

上部がどのような形をしていたのかはわからない。現存している上部の平面形はかろうじて崩落を免れたもので、原形を全くとどめていない。現状では、南北2.8m、東西2.4m前後の楕円形である(III-033図)。底面の北の部分と同じか、若干大きい方形であったのではないかと思われるが、確証はない。この土坑も中段が大きく膨らんでいる。崩落その他の要因もあるかもしれないが、元来

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



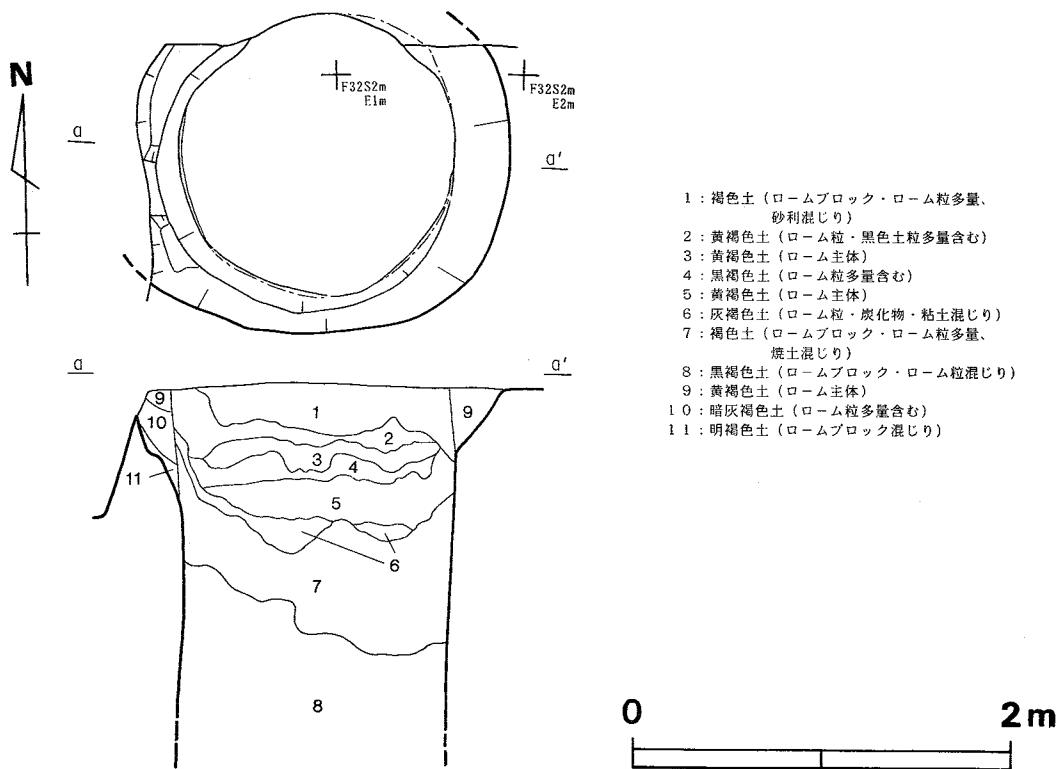
### 第三章 江戸時代の遺構

膨らんでいたものと思われる。特に北側でその傾向が強く、標高 13.6m 付近がもっとも広がっており南北3.4m、東西2.4m がある。壁は底から1.5m ほどは垂直になっている。壁面は東壁を除きよく整形されている。東壁と天井には掘削に使った工具痕がみられる。幅20cm ほどの工具の痕が右下がりて連続してある。天井は弧状を呈していたものと思われ、底から2.5m 以上の高さのあるところが大部分を占めている。

底は羽子板形で北が狭く、南が広い。長軸の方向は南北である。北側のいわば柄にあたる部分は幅1.2m、長さが1.5m ほどの長方形であり、これに長さ2m 強、幅2.4m 強の台形の地下室が付く。したがって、南北の長さは3.6m になる。奥の壁は2.4m×1.5m あり、ほぼ垂直である。北西の隅近くに南北1.2m、東西0.6m、深さ0.3m の不整形の掘り込みがあり、ここに径0.4m、深さ0.2m 弱の円形の杭穴がある。杭穴の埋土はローム混じりの暗褐色土である。上下するのに利用した何らかの施設を固定したところであった可能性が強い。底は平滑にされている。底の4隅と東壁の下に2ヶ所径10cm、深さ10~20cm の穴がある。目的は不明である。埋土は上がロームブロックを含む暗褐色土を主にするものであり、壁に近いところが高くなる傾向があるが、下は焼土を含む褐~暗褐色土がほぼ水平に堆積している。遺物は17世紀後半を主にする各種のものが若干出土している。

(藤本 強)

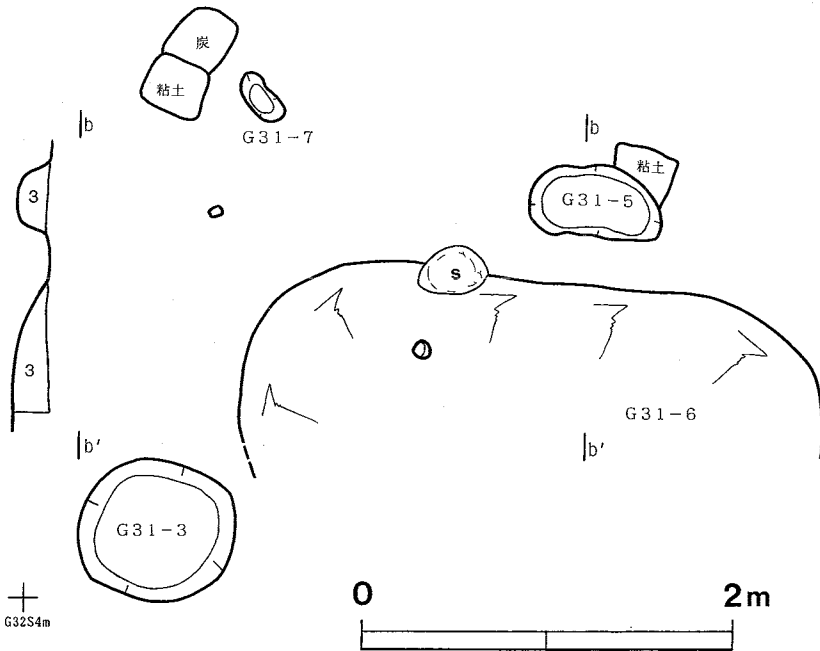
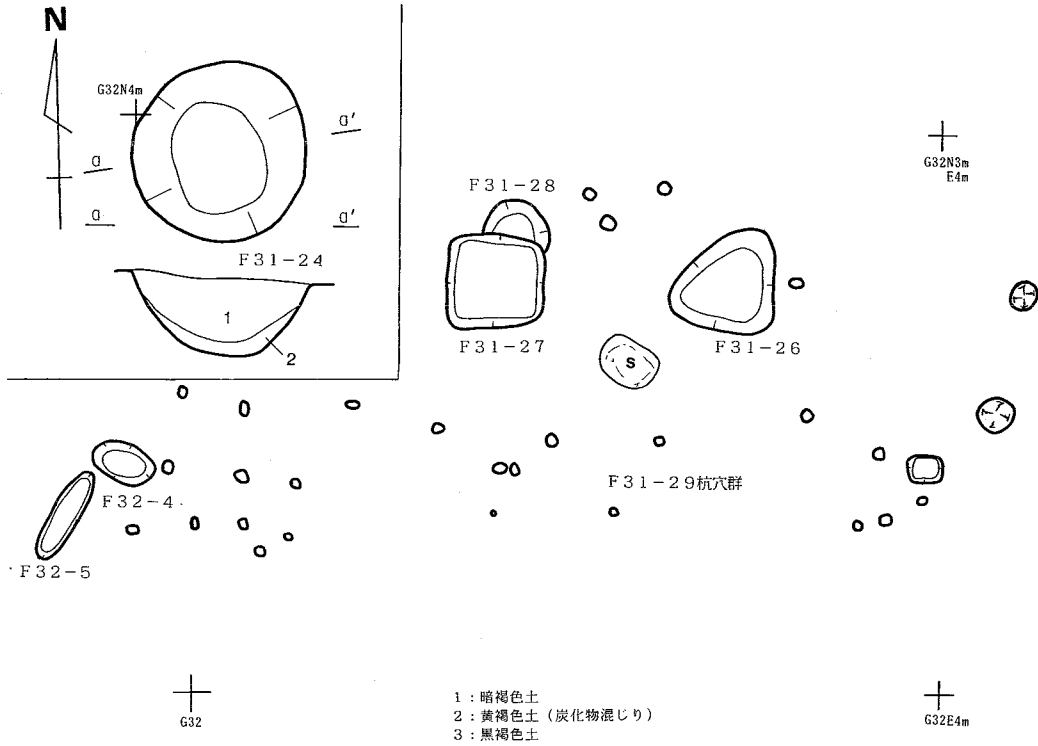
F31-3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・22 F31区にある小土坑と杭穴である(III-041図)。いずれもいわゆる斑状の土の上面で発見している。3・12・14・15は暗褐色土を埋土に



- 1 : 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量、砂利混じり)
- 2 : 黄褐色土 (ローム粒・黒色土粒多量含む)
- 3 : 黄褐色土 (ローム主体)
- 4 : 黒褐色土 (ローム粒多量含む)
- 5 : 黄褐色土 (ローム主体)
- 6 : 灰褐色土 (ローム粒・炭化物・粘土混じり)
- 7 : 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量、焼土混じり)
- 8 : 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒混じり)
- 9 : 黄褐色土 (ローム主体)
- 10 : 暗灰褐色土 (ローム粒多量含む)
- 11 : 明褐色土 (ロームブロック混じり)

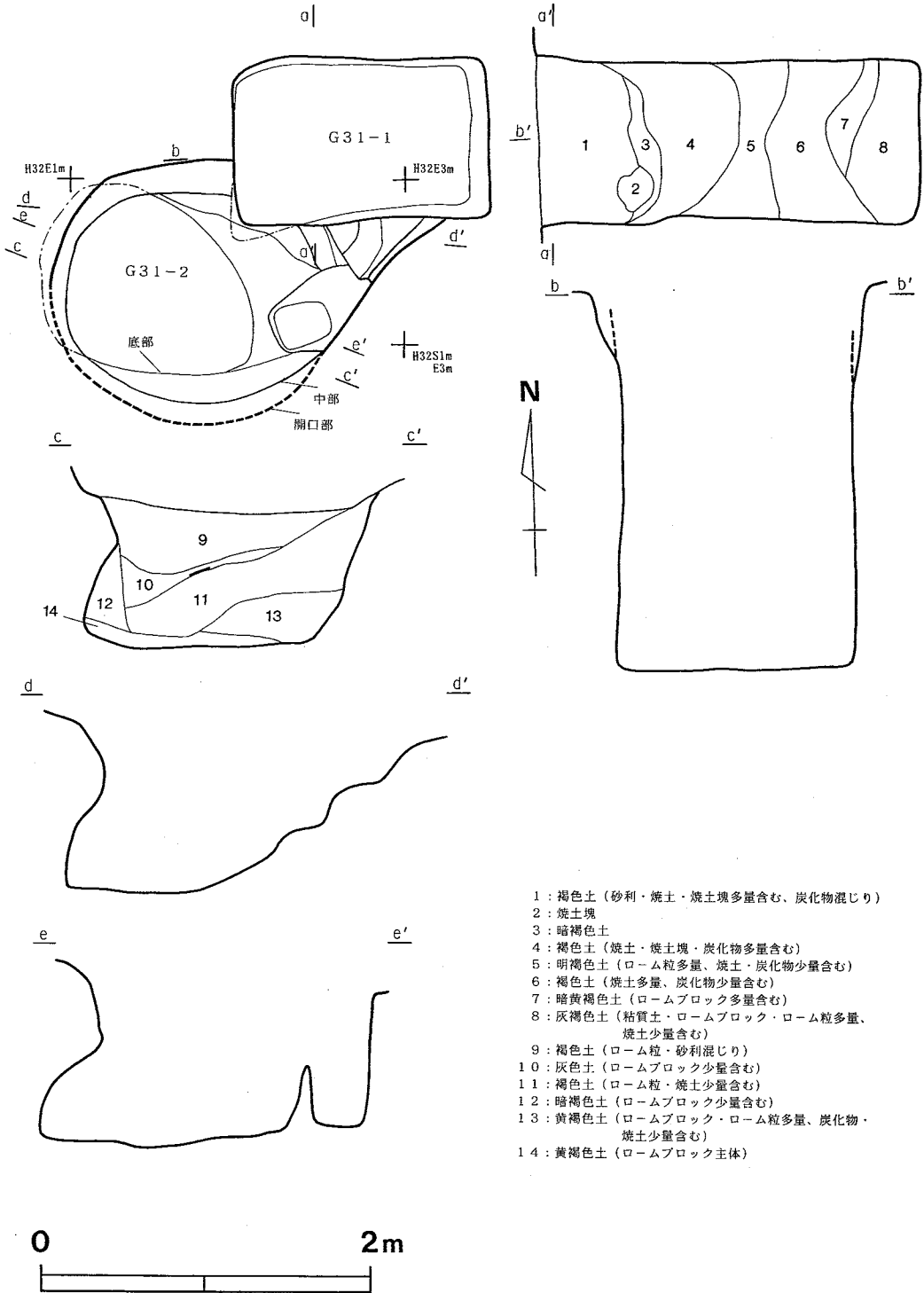
III-034図 F31-21実測図(a-a':14.7m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



III-035図 F31-24・26~29, F32-4・5, G31-3・5~7 実測図 (土層図の水準: 14.0m)

第III章 江戸時代の遺構



- 1: 褐色土 (砂利・焼土・焼土塊多量含む、炭化物混じり)
- 2: 焼土塊
- 3: 暗褐色土
- 4: 褐色土 (焼土・焼土塊・炭化物多量含む)
- 5: 明褐色土 (ローム粒多量、焼土・炭化物少量含む)
- 6: 褐色土 (焼土多量、炭化物少量含む)
- 7: 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 8: 灰褐色土 (粘質土・ロームブロック・ローム粒多量、  
焼土少量含む)
- 9: 褐色土 (ローム粒・砂利混じり)
- 10: 灰色土 (ロームブロック少量含む)
- 11: 褐色土 (ローム粒・焼土少量含む)
- 12: 暗褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 13: 黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量、炭化物・  
焼土少量含む)
- 14: 黄褐色土 (ロームブロック主体)

III-036図 G31-1・2実測図 (土層図の水準:14.0m)

### 3 D31~27, E31~27, F31~27, G31~27, H29~27 区の遺構

する方形の小土坑であり、4・5・6・7・8・9・10・11・13・16・22が杭穴である。杭穴には方形と円形のものがあり、10cm内外のものであり、暗～褐色土を埋土にしている。配置に規則性のないところから植木の支柱がもっとも考えられるものである。17・18・19・20は切りあい関係のある小土坑である。埋土は褐色土か暗褐色土であり、番号の順に古くなる。3には杭痕があるが、中央ではなくこれに伴うものか疑問である。既に触れているように、15はE31-1と共存した可能性が高い。(成瀬晃司)

**F31-21** F31区にある井戸である(III-034図)。いわゆる斑状の土の上面で確認している。径1.5mの大型の井戸である。井戸側は確認されず、木部が腐食したものと思われる。上面はロート状になっており、この部分にはロームを主体にする詰め土が固く詰められている。埋土はロームを含むものであり、人為的に埋め戻されたことは確実である。6層の灰褐色土には18世紀前半の遺物が入っている。この下にある層は大きくくぼんでいる。埋められた土が中心部を主に沈下した可能性がある。こうしたことは埋め戻しが少なくとも2回はあったことを示していよう。またその間にはある程度の時間幅があったことが推測される。(成瀬晃司)

**F31-23** F31区の東北隅近くに、いわゆる斑状の土の下に発見された土坑である。南北0.75m、東西0.6mの不整多角形をしている(III-032図)。深さは0.3m強である。北辺に4本、南辺側に5本、幅6~10cm、厚さ2cmの板材を打ち込んだと考えられる穴がある。深さは8~15cmくらいのもが多いが西の辺に近い2本は40cm・25cmと深い。埋土は上部がローム主体の黄褐色土、下部は黒褐色土である。かなりの量のサザエの殻がみられたのみである。(藤本 強)

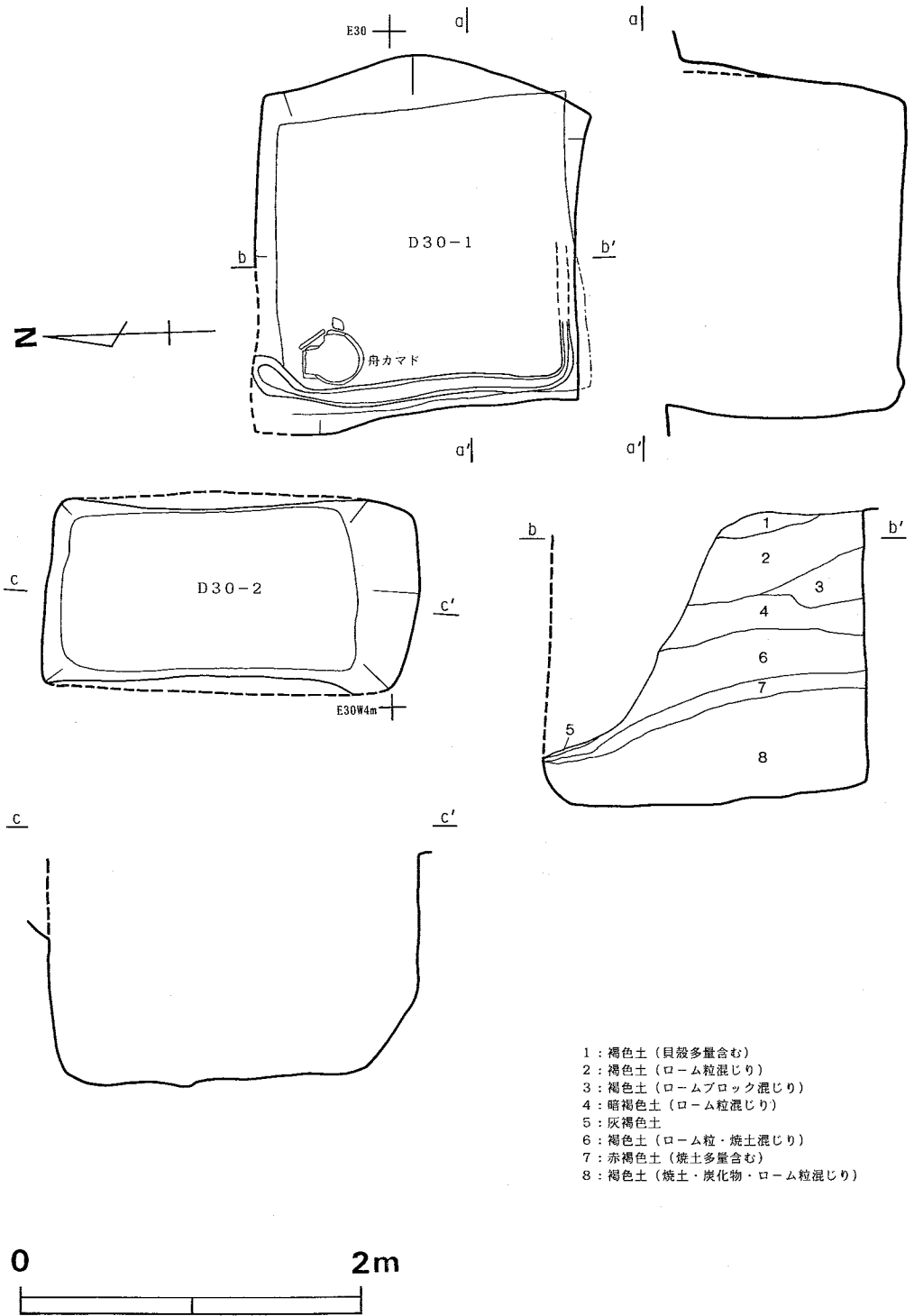
**F31-24** 自然堆積の漸移層の上面で発見された土坑である。F31区の西北の隅に近い。この上は近代の建物のあったところで、上部はこれによって壊されている可能性が高い。径1m弱、深さ0.4mの円形の土坑である(III-035図)。遺物は全くなく、時期・性格は不明である。(藤本 強)

**F31-25・26・27・28・29** 25はF31区の北よりに、他は南よりに位置している。25はいわゆる斑状の土の下で確認されているが、F31区の南よりは破壊が深く、どこから掘り込まれているのか不明である。25~28は0.5mほどの円形もしくは方形の土坑である(III-032・035図)。29は27の杭穴からなる杭穴群である。6~10cmの径、深さはかなりバラツキがあるが、10cm前後のものが中心である。F32-3と一連のものであった可能性が高い。地境の塀などに関連するものであろう。(藤本 強)

**G31-1** G・H31区に位置する大型の土坑である。破壊されていて、いわゆる斑状の土との関係は不明である。G31-2を切り、上面と底はほぼ同じ形の土坑である。長辺1.5m、短辺1mの隅丸の長方形で、深さは2.3mである(III-036図)。底の南西の隅は突き出しており、この部分では壁がオーバーハングしている。底はほぼ平らであり、壁には若干の凹凸がある。埋土は大きく上下二つの部分に分けることができる。上部は焼土・炭化物を多く含み、周辺が高く、中央の低い堆積をしているが、下部は中央の高い堆積を見せている。下部の埋土は底近くは灰褐色土であるが、その上に焼土を含む褐色土が入る。遺物は17~18世紀の陶磁器などの小片が主である。形や埋土の状態から、地下式土坑と同様に「あなぐら」として用いられ、その後火災のあとの塵芥の投棄がなされたものであろう。上部と下部の堆積の違いは投棄の仕方の差を示しているのであろうか。(小川 望)

**G31-2** G・H31区にあり、G31-1に切られている大型の土坑である。南側は近代の建物の基礎により大きく破壊されている。ロームの上面で確認されたが、本来もっと上に遺構はあったものと考

第三章 江戸時代の遺構



- 1 : 褐色土 (貝殻多量含む)
- 2 : 褐色土 (ローム粒混じり)
- 3 : 褐色土 (ロームブロック混じり)
- 4 : 暗褐色土 (ローム粒混じり)
- 5 : 灰褐色土
- 6 : 褐色土 (ローム粒・焼土混じり)
- 7 : 赤褐色土 (焼土多量含む)
- 8 : 褐色土 (焼土・炭化物・ローム粒混じり)

III-037図 D30-1・2実測図 (土層図の水準:14.4m)

### 3 D31~27, E31~27, F31~27, G31~27, H29~27 区の遺構

えられる。袋状の円形部分となだらかに連続する張り出し部からなる。円形の部分の底は径1.2mほどの不整な円形であり、上部は径1.6mの円形であったものと思われる(III-036図)。南東部分に30cm四方の穴がある。付属施設であろう。張り出し部には段をなすような凹凸がある。埋土はロームを多く含む黄~褐色土である。遺物は17世紀中ごろに位置づけられる陶器の小片が2点出土しているのみである。かならずしも遺構の年代を示すものでもなかろう。遺構の性格は不明であるが、張り出し部を階段とする地下式土坑であった可能性もあるように思われる。(小川 望)

**G31-3・5・6・7** G31区にある土坑である(III-035図)。いずれもいわゆる斑状の土の下で確認されている。6は南を大きく破壊されている。5・6・7は黒褐色土を埋土にしており、深さは20cm前後である。3は暗褐色土が埋土になっており、深さは40cmである。いずれも鍋底状の断面をしており、遺物はない。3は植栽に関係するものであろうが、他の性格は不明である。5と7の周辺に粘土や焼土・灰の塊が見られる。また5の東2.5mほどのところにも粘土の塊がある。これらは直線上に並び、なんらかの意味をもつようにも考えられるが、明らかではない。(小川 望)

**D30-1** D・E30区にある土坑で、西半は建物の基礎により破壊されている。上部は大きく破壊されていよう。一辺が1.8mの方形であり、深さは1.5mある(III-037図)。底の西壁沿いに幅10cm、深さ10cm弱の溝がある。底、壁ともかなり凹凸があり、十分な仕上げではない。埋土は上部にローム混じりの褐色土、下部に焼土混じりの褐色土が主になるものがある。遺物は上部に若干あるが、下部にはほとんどなく、底の西北の隅に舟カマドがあったぐらいでほとんどみられなかった。舟カマドは正立した形で出土しており、ほとんど完形である。少なくとも投げ込んだものではないことを示していよう。大型の土坑であり、廃棄にさいし、まず火事の後始末の際に埋め戻され、その後ゴミ穴に利用されたのであろう。(松下理恵)

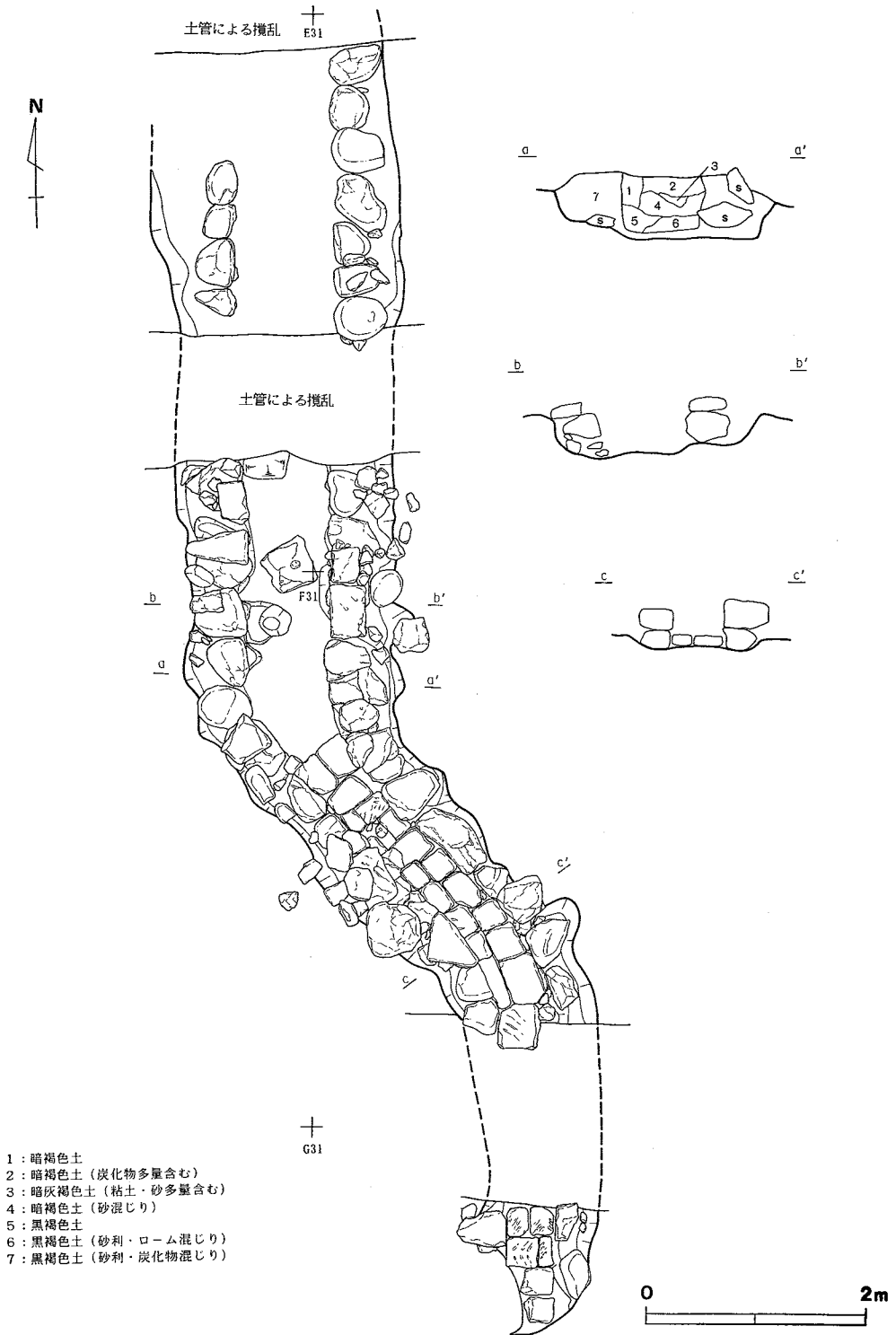
**D30-2** D30区に位置し、建物の基礎により破壊され壁と底がわずかに残るといった状態であった。表土の下の暗褐色土から掘り込まれているものと考えられる。上部は長辺2.2m、短辺1.1mの隅丸方形で、底はやや小さく1.8m、0.9mである(III-037図)。深さは1.3mで、ほぼ平坦な底と垂直の壁をもつ。埋土は底から20cmほどは明褐色土と灰黄褐色土が入り、その上に焼土を主体とする層があったようである。遺物は18世紀前半の陶磁器などの小片が少量見出されたのみであるが、L32-1出土のものと同じ意匠をもつ磁器の皿の小片が目される。形などから地下式土坑と同様、「あなぐら」として用いられ、その後ゴミ穴に転用されたものと考えられるが、すぐ東側のD31-1をはじめ東西に並ぶ一連の大型方形の土坑の一つとして位置付けられ、屋敷内の建物の配置や施設のあり方についての手掛かりになるものとして注目される。(小川 望)

**D30-3** D30区の南西端にある土坑で、建物の基礎により北側を壊されている(III-032図)。深さはかなり深く60cmある。遺物はなく、時期・性格は不明。(堀内秀樹)

**1号組石** S字状にカーヴする石組の溝である(III-038図)。E31区からG30区にかけて検出されたが、南北両端は基礎により破壊されている。また、東西に延びる土管により二か所切断されている。石組の溝は両端に側面の縁石を並べ、溝の底には石が敷かれている。側面の石の間の幅は北端部で1m弱、南端部では0.5m弱になり、南になるにつれ細くなっている。側面の石はもっとも状態の良好なところで三段積まれている。使用されている石は大円礫、切り石と様々で切り石のなか



第III章 江戸時代の遺構



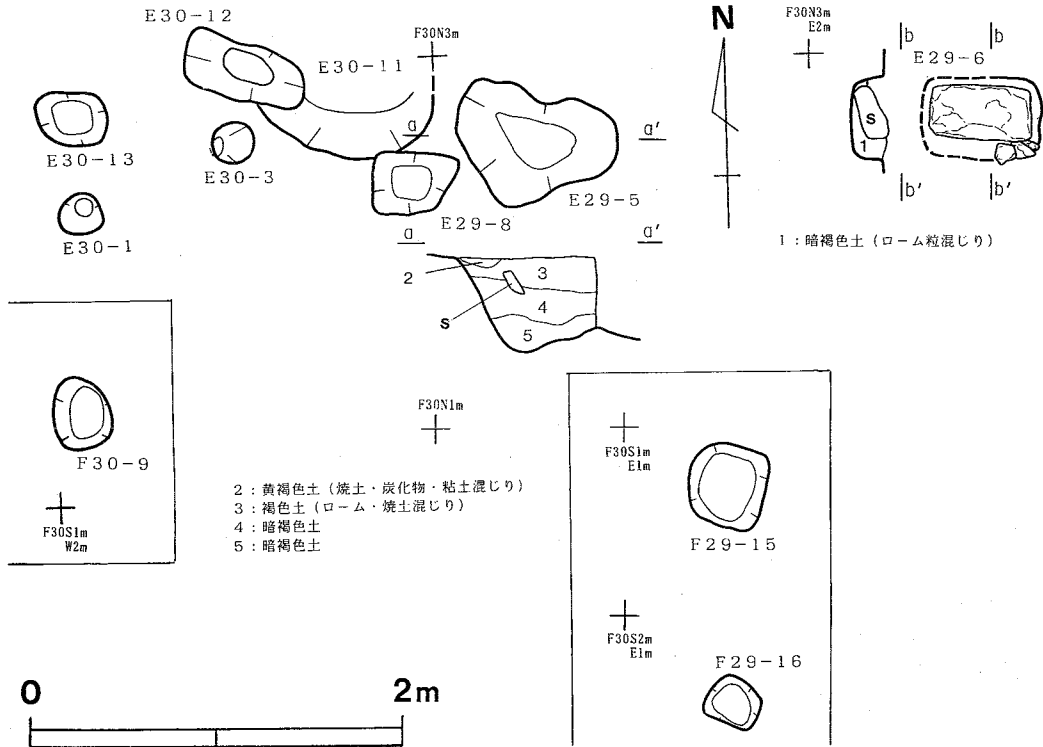
III-038図 1号組石美測図 (土層図の水準:15.0m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

には礎心・ホゾ穴を有するもの、石臼片、凹みのあるものなど再利用しているものもあり、この溝のために切り出したものではないものもある。それらの石の平な面を利用して溝の壁にしている。底の敷き石は厚さ10cmの方形の切り石が使用されている。これらには比較的規格性があり、横二列に隙間なく並べられている。また場所によっては、各列の配列を調整するために加工されている石もある。敷き石の標高は14.50m~14.55mとほぼ平坦である。敷き石は G ライン北側3.5m 以北には残っていない。掘り方の標高は変化していないので、敷き石が遺構廃棄時に抜かれ、他に再利用されたものと考えられる。掘り方は側面の石の埋設された部分で若干凹凸があるが、全体的にはほぼ平坦であり、非常に硬い。埋土はほぼ水平に堆積しており、下層は砂を混じえている。それは流水の痕跡を示すものであろう。礫の間に詰められている土は、小礫、礫の破碎したものを少量混入した黒褐色土である。これは側面の石を覆って壁を作っており、それゆえ使用されている礫が再利用のものなど規格に統一性がないのであろう。18世紀前半の遺物が多量に出土している。(成瀬晃司)

**E30-1・3・4** E30区にある小土坑である(III-032・039図)。20~30cmの規模で、深さは30~40cm内外である。1から少量の陶磁器片が出土している。性格は不明。(堀内秀樹)

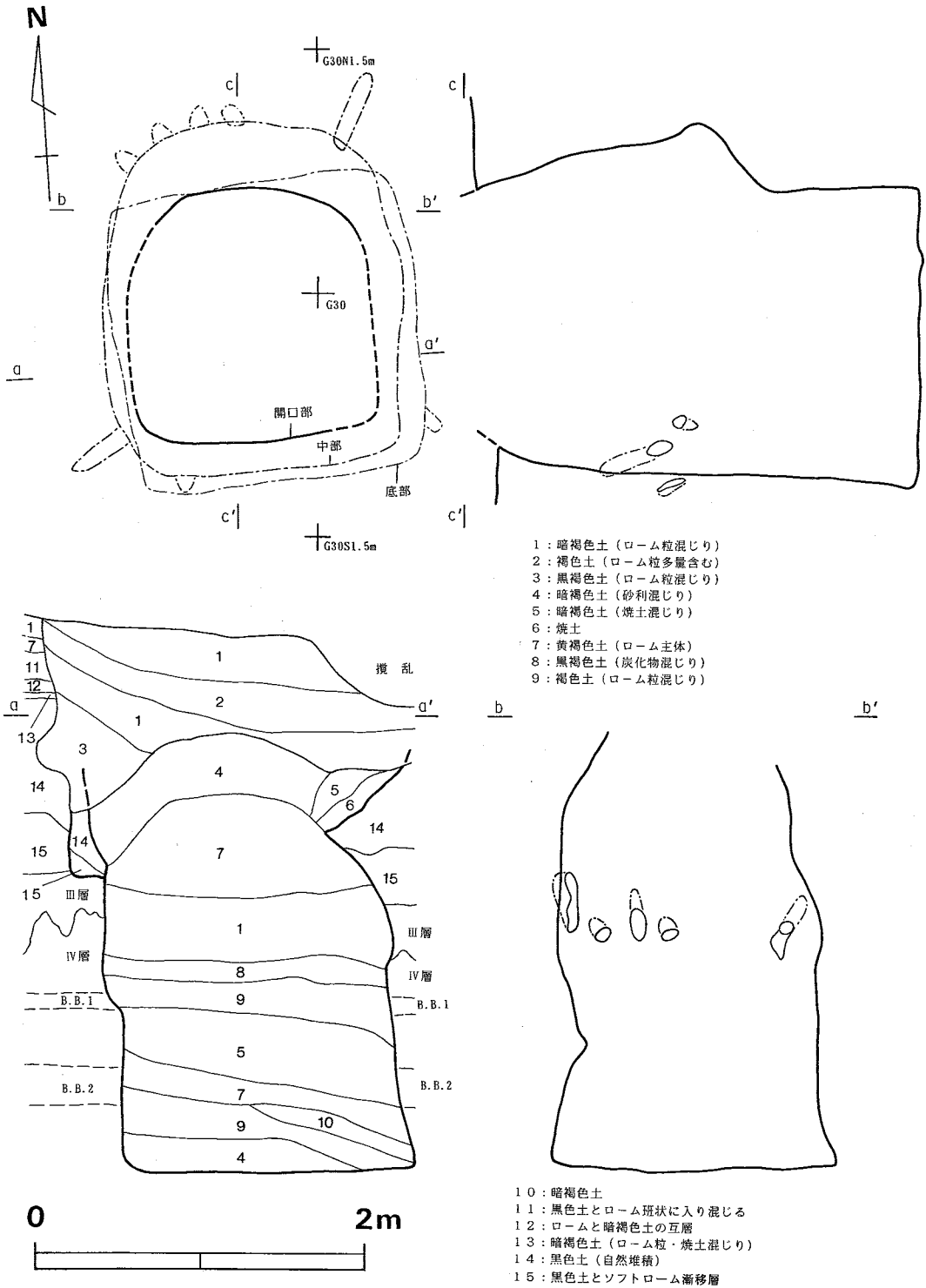
**E30-2** E30・31区にある東西に走る溝であるが、土管などにより破壊されている(III-041・042図)。幅は50cm、深さは60cmであり、黒~暗灰褐色土を埋土にしている。両端は破壊され不明。方向は真東西ではない。18世紀代の陶磁器などの若干の遺物が出土している。(堀内秀樹)



III-039図 E29-5・6・8・15・16, E30-1・3・11~13, F30-9実測図(a-a':14.2m, b-b':13.7m)

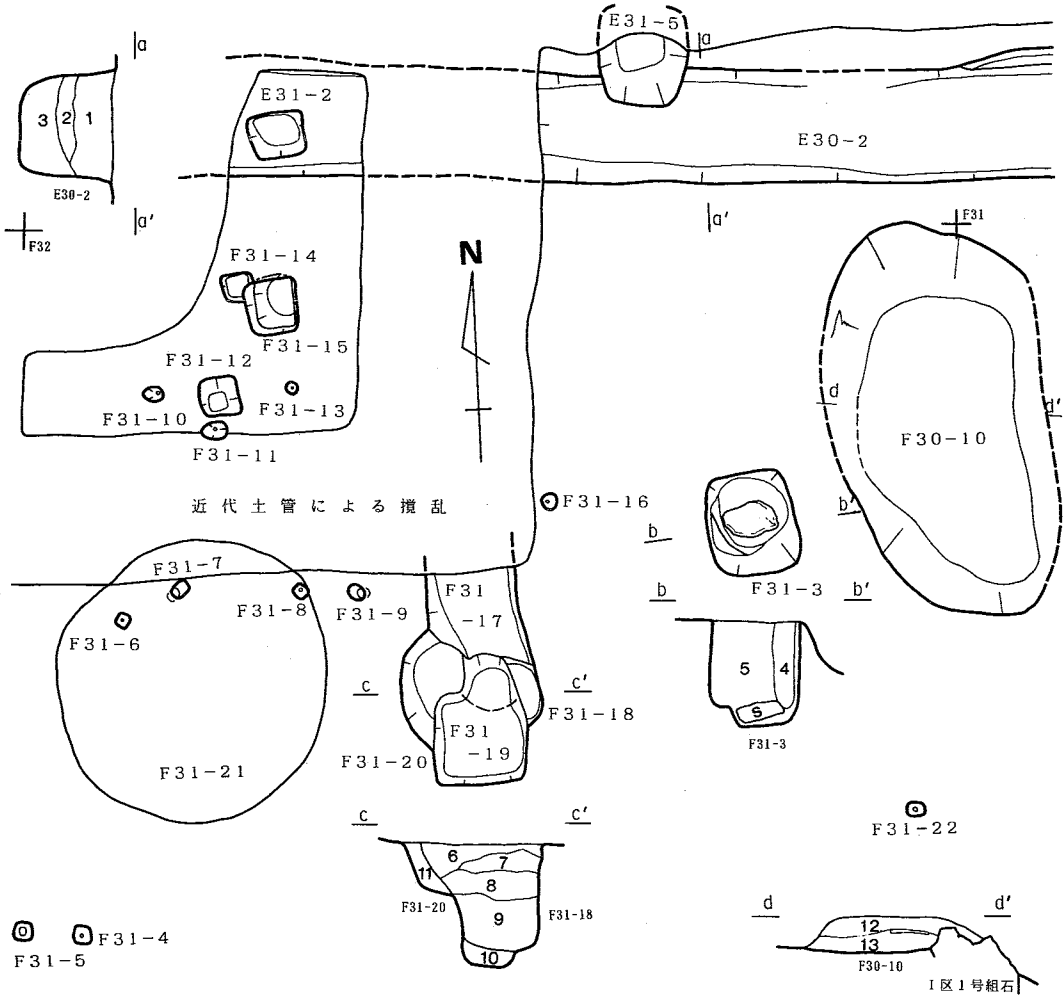
**E30-5・6・7・8・9・10, F30-3・4・5・6・7・8・15** E・F30区にある小型の土坑である(III-032・042図)。

第三章 江戸時代の遺構



III-040図 F30-1実測図 (土層図の水準:14.0m)

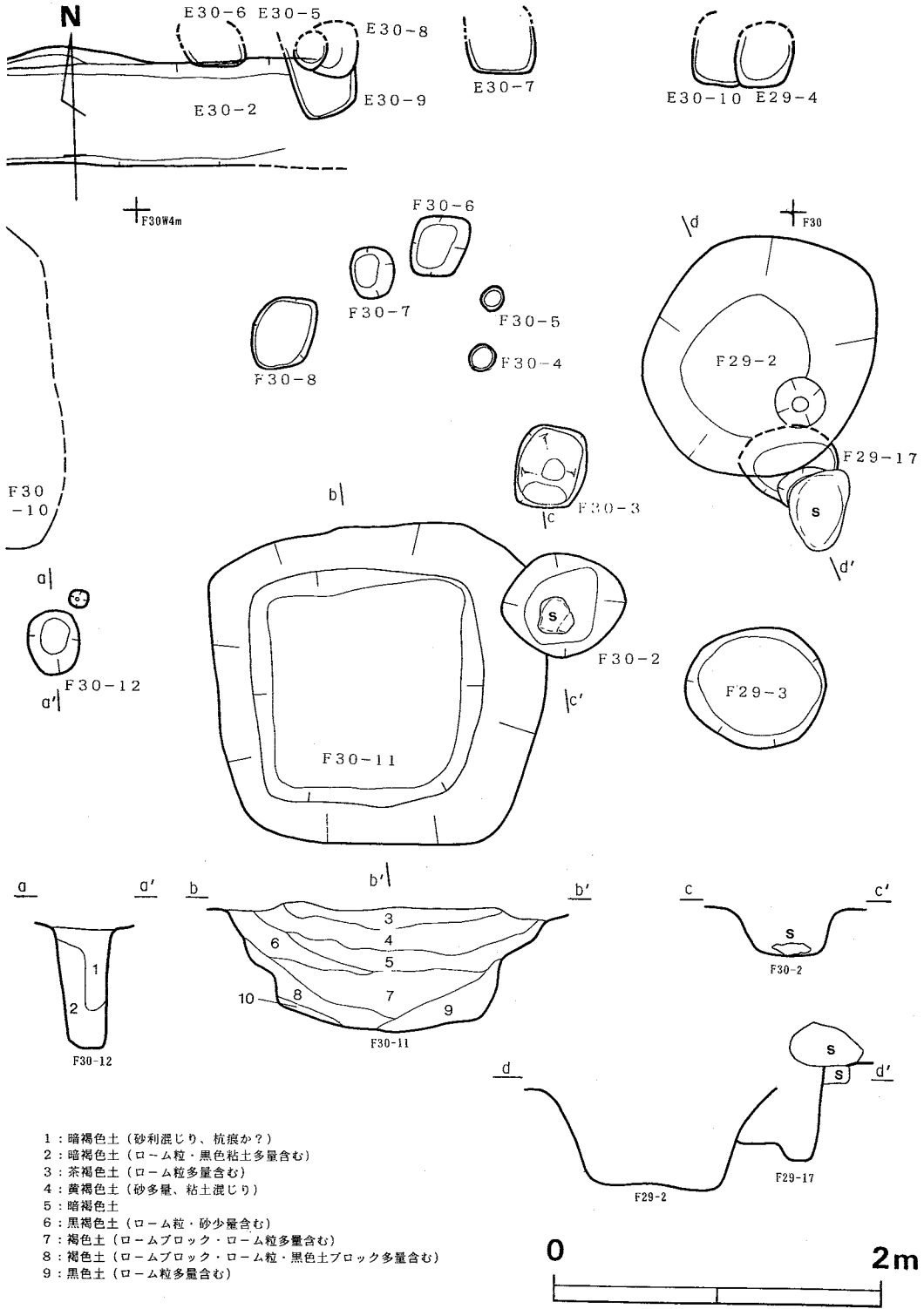
3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



- 1: 暗灰褐色土 (ロームブロック・黒色粘土ブロック多量含む)
- 2: 暗褐色土 (ロームブロック・黒色粘土ブロック少量含む)
- 3: 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 4: 暗褐色土 (ローム粒・砂利少量含む)
- 5: 褐色土 (ローム粒多量含む)
- 6: 暗褐色土 (ローム粒多量含む)
- 7: 暗灰褐色土 (砂利多量含む)
- 8: 暗褐色土 (ローム粒・砂利多量含む)
- 9: 暗褐色土 (ローム粒多量含む)
- 10: 暗褐色土 (ローム粒・砂利混じり)
- 11: 褐色土 (ロームブロック・ローム粒・粘土混じり)
- 12: 灰褐色土 (炭化物多量、砂利混じり)
- 13: 暗褐色土 (砂多量、炭化物・砂利混じり)

III-041図 E30-2, E31-2-5, F30-10, F31-3~22, G30-4実測図 (土層図の水準: 14.7m, d-d': 15.0m)

第三章 江戸時代の遺構



- 1: 暗褐色土 (砂利混じり、杭痕か?)
- 2: 暗褐色土 (ローム粒・黒色粘土多量含む)
- 3: 茶褐色土 (ローム粒多量含む)
- 4: 黄褐色土 (砂多量、粘土混じり)
- 5: 暗褐色土
- 6: 黒褐色土 (ローム粒・砂少量含む)
- 7: 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 8: 褐色土 (ロームブロック・ローム粒・黒色土ブロック多量含む)
- 9: 黒色土 (ローム粒多量含む)

III-042図 E29-4, E30-5~10, F29-2・3・17, F30-2~8, 11-12 実測図 (土層図の水準: 14.5m)

### 3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

15がいわゆる斑状の土の下で確認された以外は斑状の土の上面で確認されている。円形と長方形のものがあるが、長方形のものは0.5m前後で、深さは20~40cm、円形のものには径20~30cm、深さ10~20cmである。埋土は砂利・焼土を含む灰褐色土である。遺物はほとんどない。(小川 望)

E30-11・12・13, F30-9 E・F30区にある小型の土坑である(III-039図)。いわゆる斑状の土の下にある褐色の硬化面で発見されている。E30-11がやや大きく、黄褐色土を埋土にしている。他は0.5m内外で、深さは0.2mほどのものが多く、これらの埋土はローム混じりの褐色土である。いずれも遺物はなく、E30-11が植栽に関係すると思われるほかは、E30-13が西側にある類似の土坑と列をなすようにも見えるが、性格など明らかではない。(小川 望)

F30-1 G30ポイントを中心にしている地下式土坑で、ほぼ中央を東西に土管が入り、地表下4m(標高12.0m)まで破壊が及んでいた。この付近の土管の溝の幅は底で50~60cmである。調査開始直後に土管をまず掘り取った。そのときに断面で発見された。土坑の底は地表下4.8m(標高11.8m)にある。この土坑の埋土の上にはいわゆる斑状の土がある。この土は土坑の上では土坑の形に落ち込んではいないが、それは土坑の埋土の陥没によって生じた現象であり、土坑を覆っていることは明らかである。したがって、F31-1とともにGライン上にある地下式土坑のなかでは古い時期の地下式土坑になる。階段付のF33-3・G33-5などの地下式土坑はこの土を切ってつくられているのにたいし、F31-1・F30-1は斑状の土に覆われている。G33-10などともに一連の古い時期の地下式土坑群を形作るものと考えられる。

上面は壊れていてその全容を知ることができないが、一辺1.6mぐらいの北辺が膨らむ隅丸方形であったものと考えられる(III-040図)。この土坑は確認面から1.4mほど下(標高12.6m)で最大の大きさを持ち、南北2.2m、東西1.8mある。北側の辺は弧状に張り出す。最大の面積をもつところの壁に径8~10cm、深さ15cm内外(最大のものは50cmをこえる)の杭穴が8確認されている。いずれも壁面に斜めに入っている。土坑の上屋の構造に関連するものであろう。これらの杭穴は北辺に5、東辺と西辺の南よりに、ほぼ対称的な位置にそれぞれ1、南辺に1みられる。この下はやや小さくなり、垂直もしくは下膨れの断面になり、底に達する。底は1.85~1.9mの一辺をもつ方形である。底と下の壁はよく整えられているが、上部は調整が雑である。小型ではあるが、作りの丁寧な地下式土坑である。中程が膨らむのはF31-1と同じである。あるいは作り方と関係しているのかもしれない。当時の地表から少なくとも3.5m以上下に底があるので一度深さ2mぐらいまでを掘り、さらにそこから下に掘り下げていったものと考えられることもできよう。こう考えた場合には、中段の膨らみは作るうえでの機能をもっていたものとしてできる。埋土の上部はロームをかなり含む黄褐色~黒褐色土がほぼ水平の堆積を示しており、意図的に埋め戻されたことを物語っている。下部はやはりロームブロックを含む黄褐色~暗褐色土が多いが、焼土がかなり混じる層もある。西もしくは南が高く、東と北が低い堆積をしている。西もしくは南から土を入れ、埋め戻したのであろうか。17世紀後半を中心にした遺物は比較的多くのものがある。(藤本 強)

F30-2 F30区にある楕円形の土坑である(III-042図)。いわゆる斑状の土の上面で確認されている。F30-11を切っている。遺物はなく底に石があるが、性格は不明である。(藤本 強)

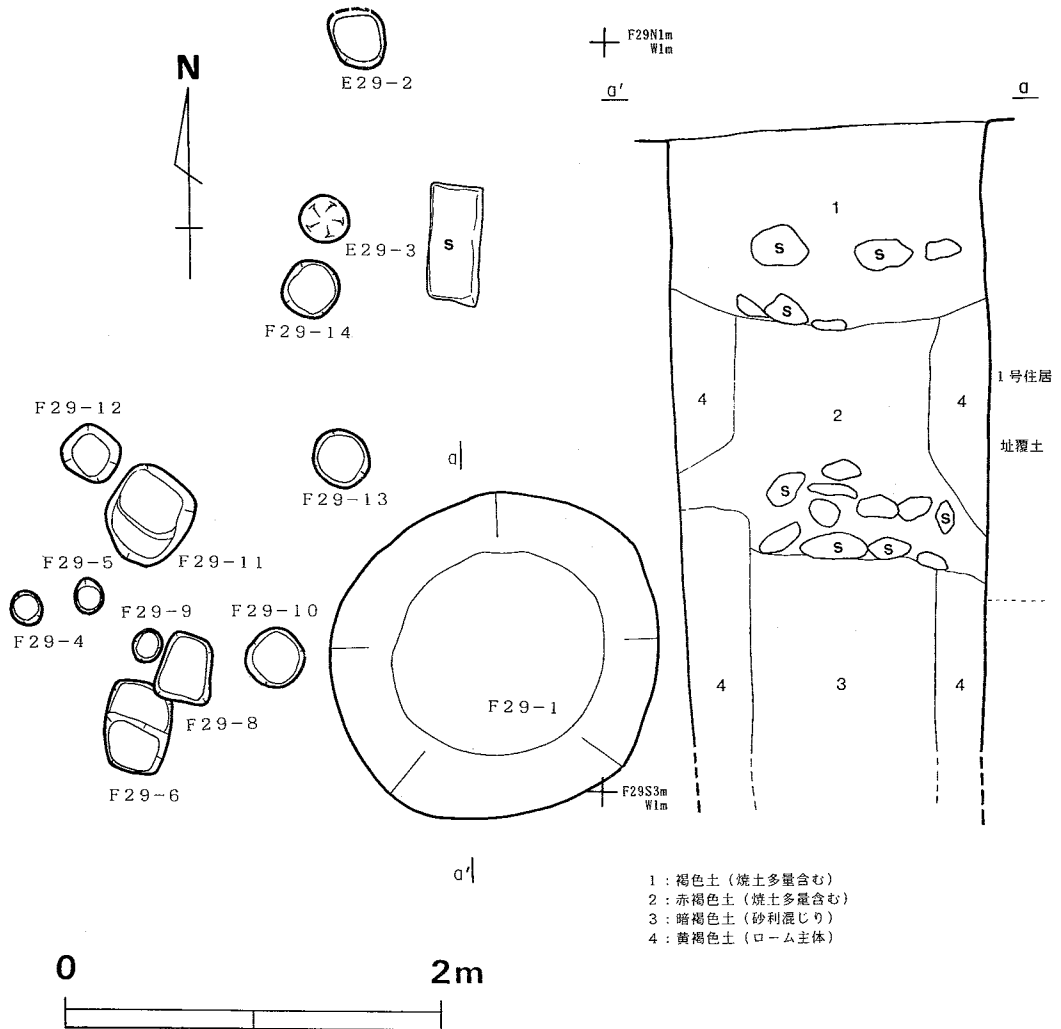
F30-10 F30・31区にまたがる土坑で、いわゆる斑状の土の上面で確認されている。上部は大

第三章 江戸時代の遺構

きく破壊されており、底に近い部分のみが残っている。1号組石の上に埋土がかかっており、それより新しい。長辺2.1m強、短辺1.1mの大型の土坑であるが、深さは20cmと浅い(III-041図)。壁、底ともに凹凸が著しい。埋土は炭化物・砂利などを多量に含む灰～暗褐色土であり、18世紀末から19世紀にかけての多種の遺物が入っていた。形・埋土の状況からゴミ穴を目的にして掘られたものと考えられる。(成瀬晃司)

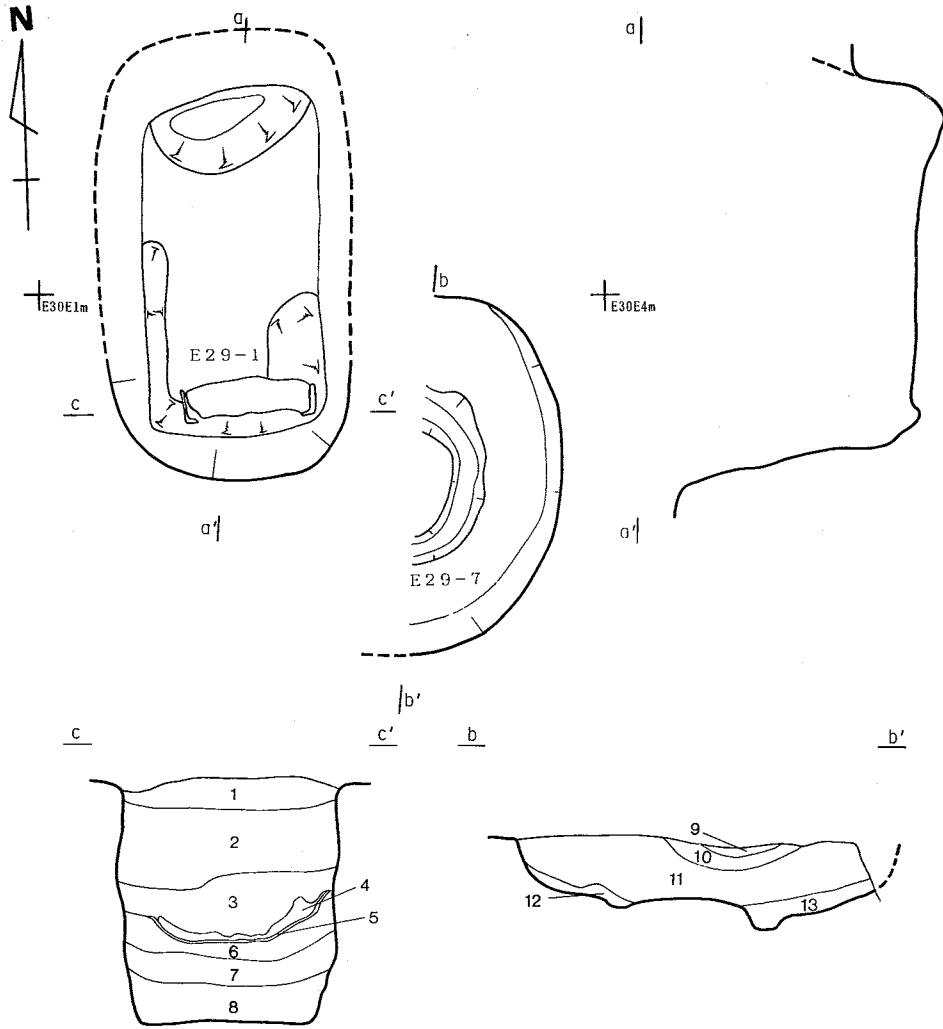
**F30-11** F30区にある一辺2mのやや不整な方形の土坑で、深さは約80cmである(III-042図)。底はやや丸く、壁は途中まで垂直であるが、上部は緩やかに開く。埋土は黒～褐色土で、ロームを混じえるものが多い。遺物は硯1点のみである。時期・性格は不明。(堀内秀樹)

**F30-12** F30区にある径30cm強の小土坑である(III-042図)。北よりに径14cmの杭痕がある。杭痕部分は砂利混じりの、他はローム・黒褐色土混じりの暗褐色土である。北東の隅近くに F31区



III-043図 E29-2・3, F29-1・4~6・8 ~14実測図(a-a'):14.8m

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



- 1: 赤褐色土 (焼土多量、灰・炭化物混じり)
- 2: 赤褐色土 (焼土・炭化物・灰混じり)
- 3: 灰褐色土 (炭化物・灰多量含む)
- 4: 焼土
- 5: 炭化物 (布をはさんだ木)
- 6: 褐色土 (ローム粒混じり)
- 7: 黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 8: 褐色土 (ローム粒混じり)

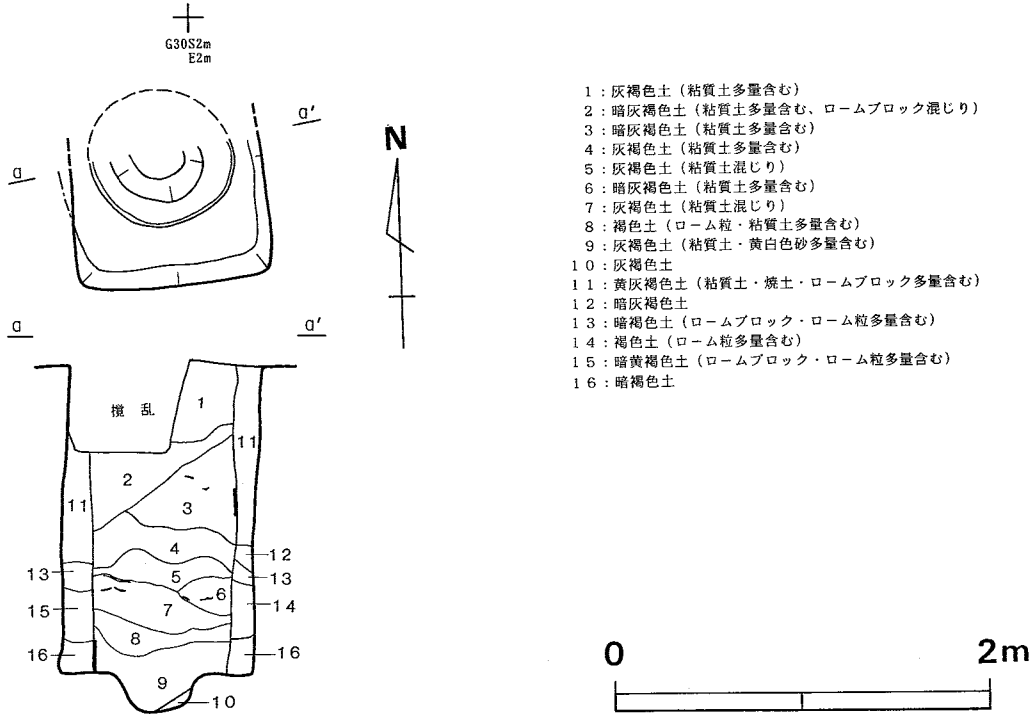
- 9: 黒褐色土 (灰褐色砂・粘土少量含む)
- 10: 黄褐色土 (粘土・砂利・炭化物混じり)
- 11: 黒褐色土 (粘土ブロック混じり)
- 12: 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒・粘土少量含む)
- 13: 茶褐色土 (黒色土混じり)



III-044図 E29-1・7実測図 (土層図の水準:13.8m)



第三章 江戸時代の遺構



- 1 : 灰褐色土 (粘質土多量含む)
- 2 : 暗灰褐色土 (粘質土多量含む、ロームブロック混じり)
- 3 : 暗灰褐色土 (粘質土多量含む)
- 4 : 灰褐色土 (粘質土多量含む)
- 5 : 灰褐色土 (粘質土混じり)
- 6 : 暗灰褐色土 (粘質土多量含む)
- 7 : 灰褐色土 (粘質土混じり)
- 8 : 褐色土 (ローム粒・粘質土多量含む)
- 9 : 灰褐色土 (粘質土・黄白色砂多量含む)
- 10 : 灰褐色土
- 11 : 黄灰褐色土 (粘質土・焼土・ロームブロック多量含む)
- 12 : 暗灰褐色土
- 13 : 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 14 : 褐色土 (ローム粒多量含む)
- 15 : 暗黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 16 : 暗褐色土

III-045図 G30-1実測図 (土層図の水準:15.0m)

の杭痕群に続くであろう杭穴がある。

(成瀬晃司)

**G30-1** G30区に位置するいわゆる斑状の土の上面で確認された土坑である。平面形は隅丸の方形であったものであろうが、北半は土管の構築によって破壊されている。方形の中央に円形の異なる埋土をもつ部分がある。方形のほうは東西1m、南北の残っているのが0.7mであり、深さは1.6m強である(III-045図)。円形の部分は径0.7mで、底が20cmほど低くなっており、この部分の埋土は粘質土を多く含む灰褐色土と暗灰褐色土であり、その外側はロームを多く含む暗褐色土を主にする。両者の境目には部分的に木質の薄片があった。遺物は陶磁器の小片がわずかにあったのみである。形や埋土から G32-3と同じ様に、円形の部分に桶がはめこまれ、その外側に土が詰め込まれ、内側が厠の下穴として用いられた遺構と考えられる。

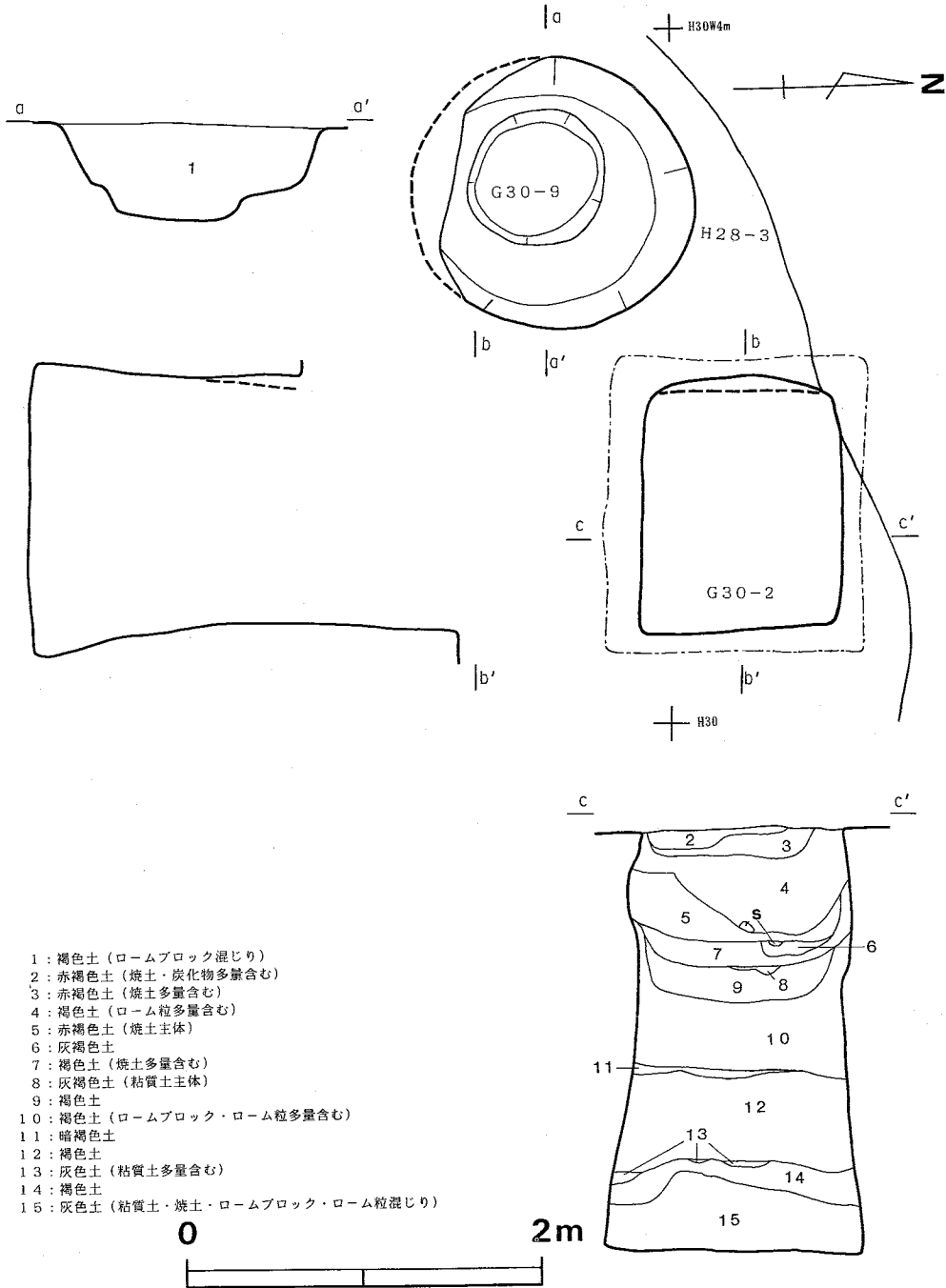
(小川 望)

**G30-2** G30区の南端、一部 H30区にかかる大型の土坑である。いわゆる斑状の土の上面で確認している。上部は1.4mと1.1m、底は1.6mと1.4mと底が大きい長方形で、深さは2.4mであり、平らな底と内傾する壁をもつ(III-046図)。断面形は撥形であるが、短軸側では上部の三分の一ほどがやや脹らむ。埋土はこの脹らみに符合するように中央の下がる堆積をするようになる。これ以下では水平に堆積するのに対照的である。上部ではロームを多く含む褐色土と焼土主体の赤褐色土が交互に入り、底付近には灰褐色土が、その上に暗褐色土がある。焼土主体の部分から17世紀後半の比較的豊富な遺物が見出された。形や埋土から地下式土坑と同様「あなぐら」として用いられその後ゴミ穴としておそらく二度にわたって廃棄がなされたものと考えられる。

(小川 望)

**G30-3・5・10・11・12・13・14・15・16・17, G31-4** G30・29区に位置する土坑である(III-048図)。い

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

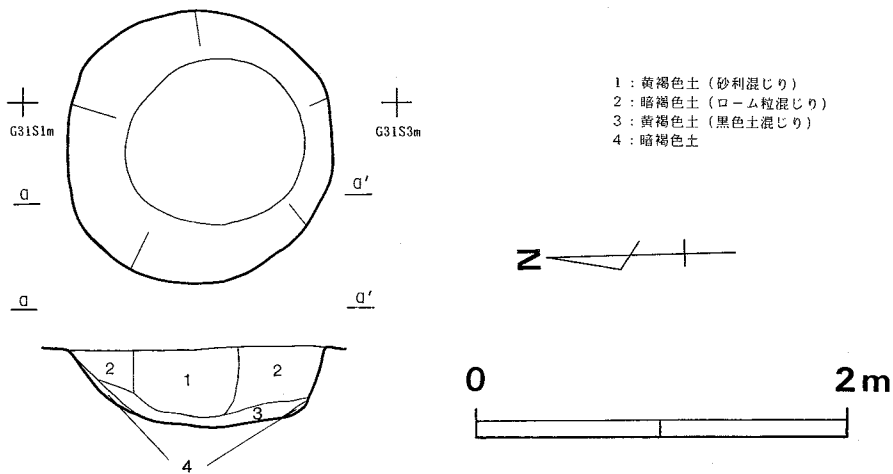


III-046図 G30-2・9実測図 (土層図の水準:14.5m)

### 第III章 江戸時代の遺構

ずれもいわゆる斑状の土の下で発見されている。10を除くと小型で、整った形をしたものは少ない。11は7と2からなる2列の杭列である。相互の間隔は0.7mから1.5mと一定していない。また方向もかなりブレがあり、径10cm、深さ20cm前後とほぼ一定していて、埋土も褐色土と共通しているが、そのもつ意味はよくわからない。そのほかは様々な形をしている。深さの深いものはなく、相互に切りあい関係のあるものもあるが、大きな意味をもたすことはできない。3・5・12・13、G31-4は褐色土を埋土にもち、10・14・15は灰・焼土・炭化物などを含む埋土をもっている。16の周辺には厚さ5cmほどの粘土の塊があった。G30-10からは土錘が出土しているが、このほか注目すべき遺物を出土するものもなく、焼土など火災に関係するかと思われる埋土をもつ土坑もあるが、いずれの土坑の性格も不明である。 (小川 望)

**G30-4** G31・30区に位置し暗褐色土の埋土の小型の土坑で、いわゆる斑状の土の上面で確認されている(III-041図)。遺物はなく、植栽に関係するものと思われる。 (小川 望)



III-047図 G30-6実測図(土層図の水準:14.5m)

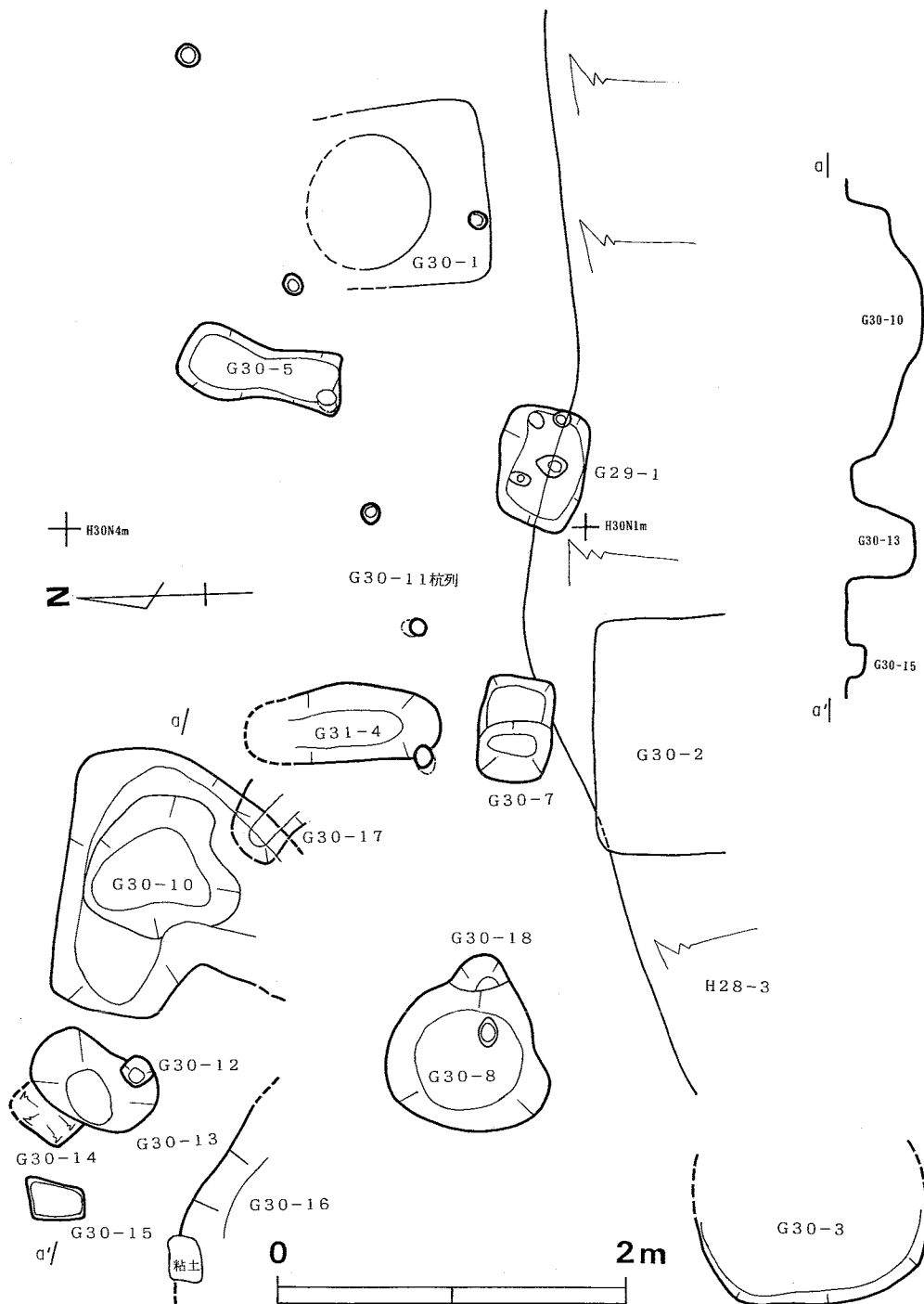
**G30-6** G30区の西端からG31区の東端にかけての土坑で、いわゆる斑状の土の下で発見されたもので、径1.4mの円形であり、深さは0.4mである(III-047図)。断面は鍋底状であり、埋土は暗褐色土が主である。植栽に関連するものであろうか。遺物はほとんどみられない。 (藤本 強)

**G30-7・8・18** G30区にある土坑である(III-048図)。7は方形の小土坑であり、西側の底が15cmほど低くなっている。埋土は褐色土であり遺物はない。隣のG29-1とは形、埋土が類似している。一連のものであった可能性がある。G30-8・18は8が新しい。またG30-11杭列の一つが8のなかに入りこれは8を切っている。遺物はなく、時期・性格は不明。 (堀内秀樹)

**G30-9** G30区の南にかかり大部分はH30区にある。径1.5mの円形で、深さ0.5mの土坑である(III-046図)。底の中央に径0.8mほどの深くなった部分がある。H28-4を切っている。埋土はローム混じりの褐色土である。遺物はなく、時期・性格は不明。 (堀内秀樹)

**H30-2** H30区に位置するごくわずかの部分が残った土坑である(III-049図)。東はH29-1により、他の部分は建物の基礎により破壊されている。いわゆる斑状の土の下で確認されている。埋土は下に暗褐色土、上に焼土などが入る。遺物もなく、性格は不明である。 (小川 望)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



III-048図 G29-1, G30-3・5・7・8・10・12~17, G31-4実測図 (a-a':14.3m)

### 第三章 江戸時代の遺構

E29-1 D・E29区に位置し、いわゆる斑状の土の上面で確認している。ほとんどの部分を破壊されており、南北1.7m、東西0.9mの隅丸の長方形で、深さは1.3mある(III-044図)。底の壁際に深さ10cm弱のくぼみがあり、底、壁ともに凹凸があり粗雑な仕上げである。埋土は上部に焼土を多量に含んだ土があり、下部にはローム混じりの黄～褐色土がある。上部に18世紀代の遺物がかなりの量見られる。そのなかには長持様のものもあり、火事の後始末の際に捨てられたことは確実である。性格は明らかではないが、Eライン上に東西に並ぶ大型の土坑の一つである。(松下理恵)

E29-2・3, F29-4・5・6・8・9・10・11・12・13・14 E・F29区にある小型の土坑である(III-043図)。いずれもいわゆる斑状の土の上面で確認されている。埋土はいずれも砂利・焼土を含む灰褐色土であり、ほとんど遺物はない。西にある類似の遺構とのなんらかの有機的な関連も考えられるが、はっきりはしない。(小川 望)

E29-4, F29-2・3・17 E・F29区にあり、いわゆる斑状の土の上面で発見された土坑である(III-042図)。埋土はE29-4が砂利・焼土混じりの灰褐色土、その他はローム混じりの暗褐色土である。4を除き遺物はほとんどない。F29-2・3は植栽に係るものであろう。(小川 望)

E29-5 E29区にある不整な形をした土坑である(III-039図)。暗～黄褐色土を埋土にしている。陶磁器片などが少量出土している。時期・性格は不明。(堀内秀樹)

E29-6 E29区にある平石の入った小土坑である(III-039図)。建物の礎石の一部と思われるが対になるものは見出せなかった。周辺の破壊が深くまで及んでいたためである。(成瀬晃司)

E29-7 E29区にある2m弱の円形で、深さ30cmの土坑である(III-044図)。底に幅20cmの溝が巡る。黒～黄褐色土の埋土をもつ。遺物はなく、時期・性格は不明。(堀内秀樹)

E29-8, F29-15・16 E・F29区にある小型の土坑である(III-039図)。いわゆる斑状の土の下で確認している。0.5m前後の方形の土坑であり、埋土はロームを含む褐色土である。遺物はなく、E29-8は西側の類似の遺構と列をなすようにも思われるがはっきりしない。(小川 望)

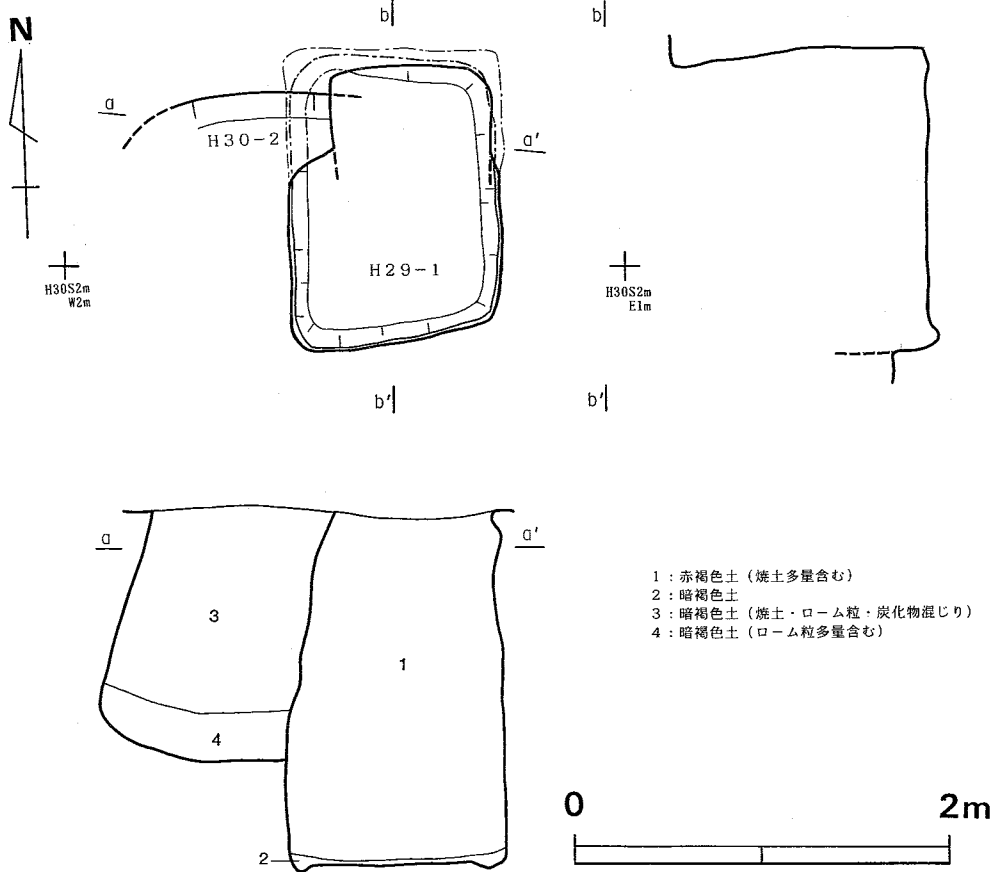
F29-1 F29区の中央東よりに発見された井戸である。径は1.7m～1.8mで、不整な円形である(III-043図)。切り込み面はローム・砂利混じりの暗褐色土であり、この周辺の遺構のなかでは比較的新しい遺構である。上面から1mほどは確認できなかったが、その下には井戸側になっていた有機質のものの痕跡があった。径1.1mの井戸側があったものと考えられる。井戸側と掘り方の間にはロームを主体にする黄褐色土がきっちりと詰められている。埋土は最上部が焼土、人頭大の礫を多量に含む褐色土であり、これを取ると井戸側の痕跡が確認できるようになる。この下はやはり人頭大の礫を含むほとんど焼土からなる赤褐色土になる。この下面は井戸側を壊し、素掘りの壁に達している。何らかの施設があり、それが壊れたのであろうかと思われるが、確認できなかった。その下は砂利混じりの暗褐色土になる。確認面から3.2m掘ったところで危険なのでやめている。1号住居址はこの井戸の断面で発見された。遺物は陶磁器など若干量が見られる。(藤本 強)

G29-1 G29区の西端にある小土坑である(III-048図)。深さは15cmほどである。中央にG30-11杭穴群の一つがあり、切っている。ほかに底の壁沿いに径10cm強、深さ10cm以下の杭穴が3ある。埋土は褐色土であり、形と埋土はG30-7と類似している。遺物はない。(堀内秀樹)

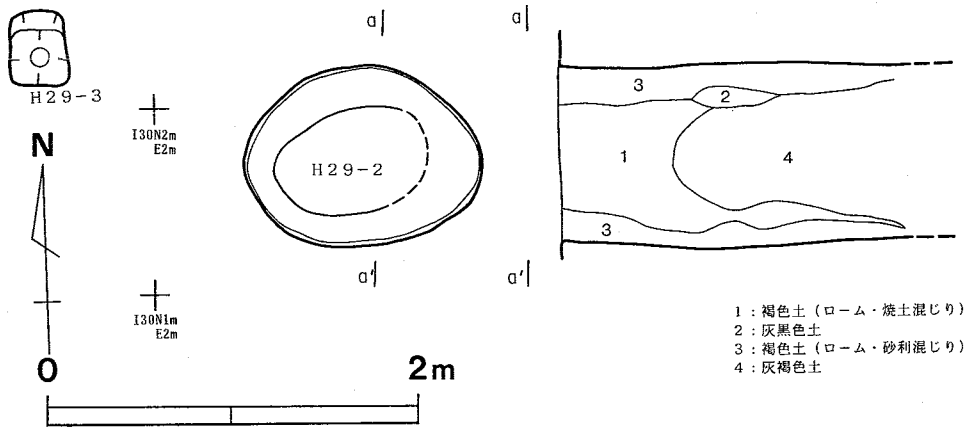
H29-1 この付近では、Hラインの南1mほどで明治時代の建築の基礎があり、その部分は深く

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

まで荒れていた。ちょうどその部分にかかって発見された土坑であり、西隣の H30-2を切っている。どこから掘られているのかは上部がないことから明らかではない。底で南北1.6m, 東西1.15m, 深さ1.9mの長方形の土坑である (III-049図)。上部はこれよりかなり小さく, 東西0.8mぐらいであった



III-049図 H29-1, H30-2実測図 (土層図の水準:14.0m)

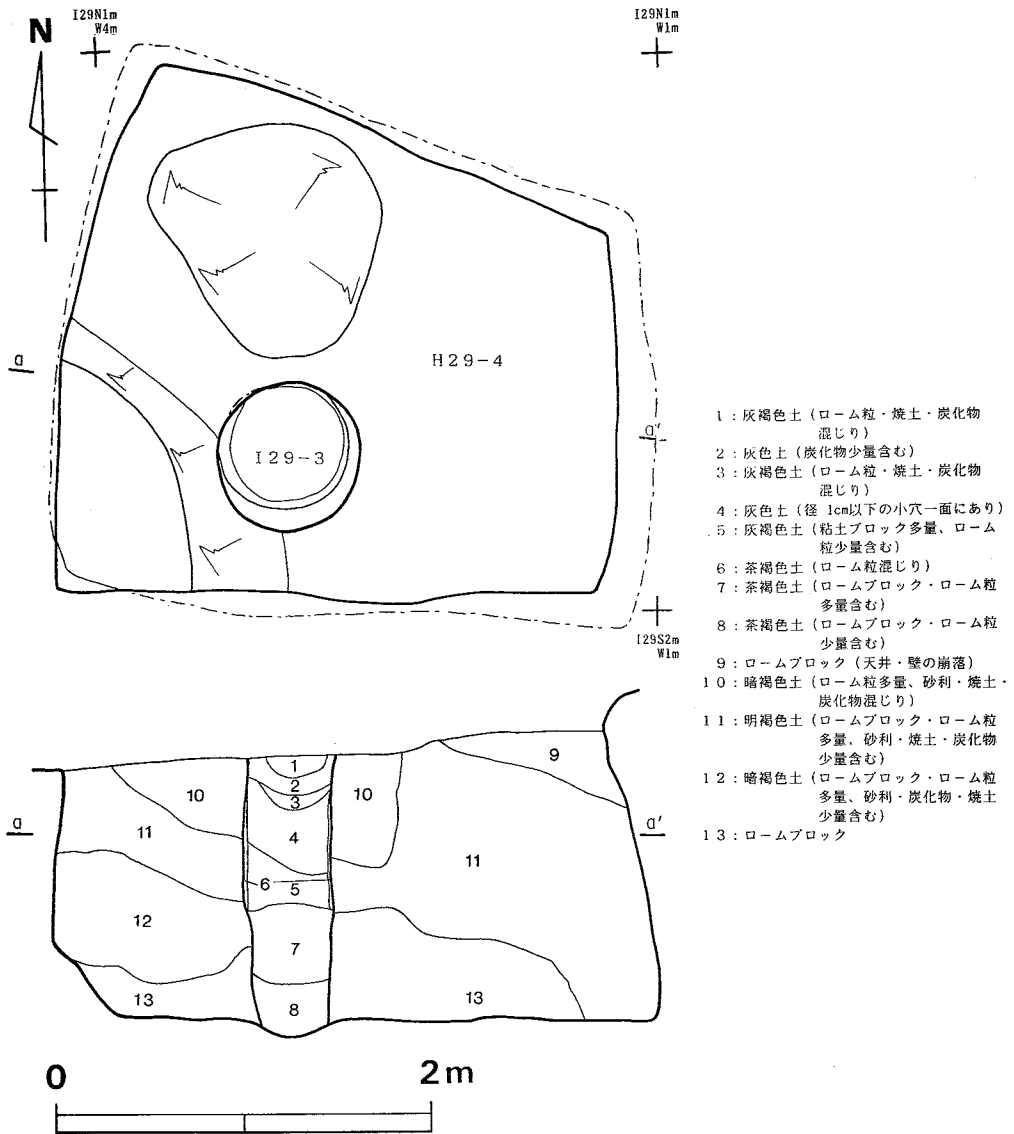


III-050図 H29-2, 3実測図 (a-a':12.8m)

### 第III章 江戸時代の遺構

ものと考えられる。南北は不明である。底には幅10cm前後、深さ5cmほどの溝がある。いわば周溝といってもよいものである。上面より底が大きいが、土の天井は全くなく壁が内傾しているに過ぎない。埋土は底のすぐ上にある暗褐色土を除き、焼土を多量に含む赤褐色土である。火事の後始末で埋め戻されたものであろう。地下式土坑と同様な目的で作られていたものと考えられるが、土の天井を欠いている。遺物は17世紀代の各種のものが多量に出土している。(藤本 強)

H29-2・3 両者とも H29区のほぼ中央にある遺構である。この部分は近代の建物の基礎が深くまであったところで、そこに残っている遺構を調査したもので、上部の構造は不明である。H29-2は不整形な形をしているが井戸と思われるものである。南北1.0m弱、東西1.2m強の楕円形の掘り方



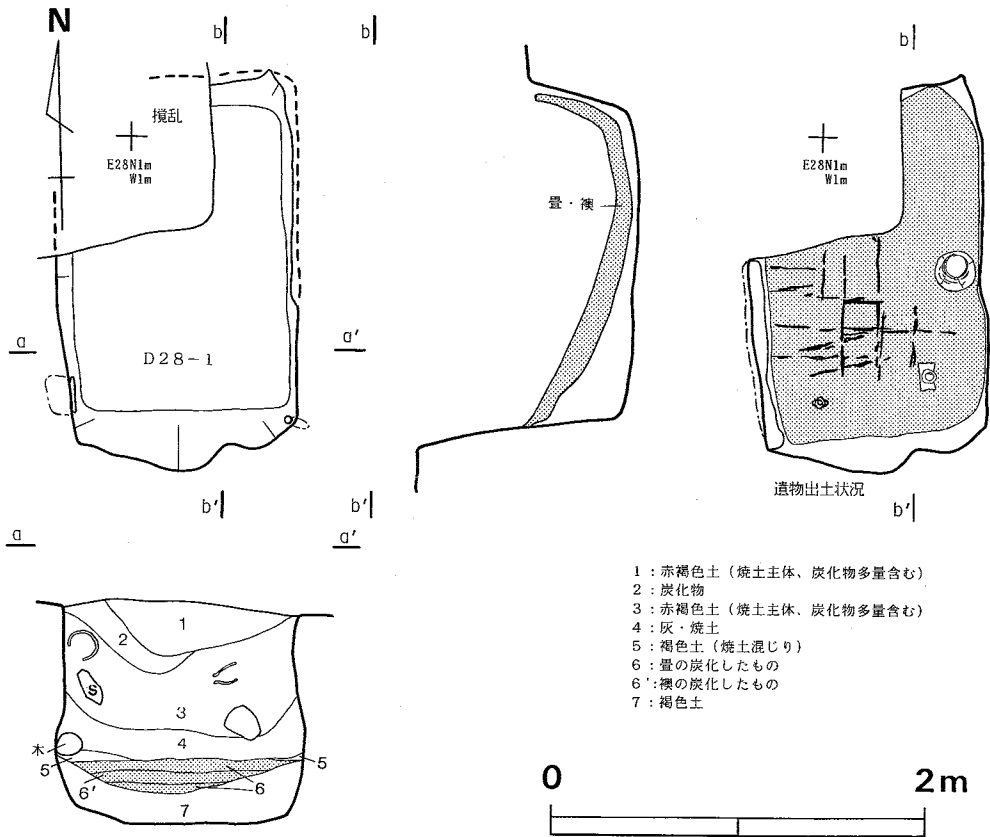
III-051図 H29-4, I29-3実測図 (土層図の水準:12.0m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

のなかに、南北0.6m、東西0.9mほどの井戸側を設けている(III-050図)。井戸側と掘り方の間にはロームや砂利を混ぜえた茶褐色土を詰めている。本地点にはない形の井戸である。遺物はない。H29-3 は埋土にローム混じりの黒褐色土をもつ土坑で、0.4m×0.3mの長方形をしている(III-050図)。底は三段になっている。中央に径10cmの杭穴と思われる低い部分があり、それを取り巻くように0.3m四方の方形の掘り込みがあり、その西に高い部分がある。遺物はない。(藤本 強)

**H29-4** H・I29区にある大型の土坑である。上部は大きく破壊されている。なかに I29-3がある。東西3m、西壁2.8m、東壁2mの台形であり、深さは1.5mが確認されている(III-051図)。底の北よりに深さ15cmほどのくぼみが、南西の隅に30cmほどの高まりがある。埋土は西から東に傾斜しており、天井の崩落かと考えられるロームブロックが東側にあるので、地下式土坑の上部のなくなったものであることは確実である。そうすると南西部の高まりは入口の下によくみられるものとできよう。入口は南西の隅にあったと思われる。埋土はローム混じりの明~暗褐色土である。18世紀の陶磁器など若干量の遺物が出土している。(松下理恵)

**D28-1** D・E28区に位置する比較的大型の土坑である。北西の部分建物の基礎により破壊されている。この地点になるとより西のところでは鍵層になっていたいわゆる斑状の土はなく、斑状の土とほぼ同水準で確認されているが、層位的な目安にはならない。長辺1.9m、短辺1.3mの長方

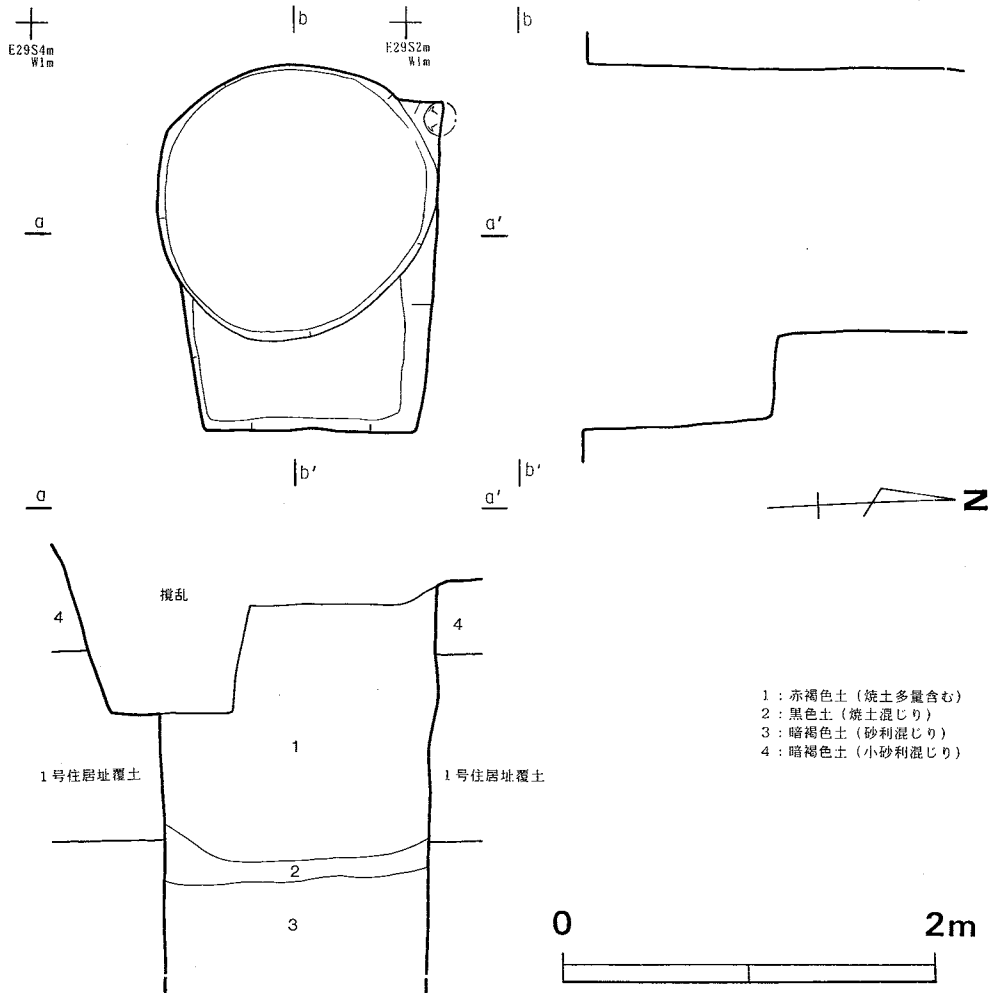


III-052図 D28-1実測図 (土層図の水準:13.9m)



### 第三章 江戸時代の遺構

形で、深さは1.2mある(III-052図)。底は平らであるが壁の近くには凹凸があり、壁にも工具の痕かと思われる縦方向のくぼみが多数見られた。底近くの壁には径4cmほどの杭穴や10cm四方で奥行20cmの方形の穴があった。埋土は底近くに褐色土が、その上に炭化物の厚い層、焼土・灰の層が積み重なっている。遺物は焼土・灰・炭化物の層に集中し、18世紀代の陶磁器や瓦とともにやかんなどの銅製の遺物が多数発見されている。炭化物は丸太などの木製のもののほか、畳・襖などの形を留めているものがあり、火事の後始末をした際に投棄されたことを物語っている。この遺構は西に連なる類似の遺構とともに「あなぐら」として構築されたものと思われるが、最終的に火事の後始末の際に焼けた畳や襖を含む品々を投棄する場所として使ったのであろう。(小川 望)

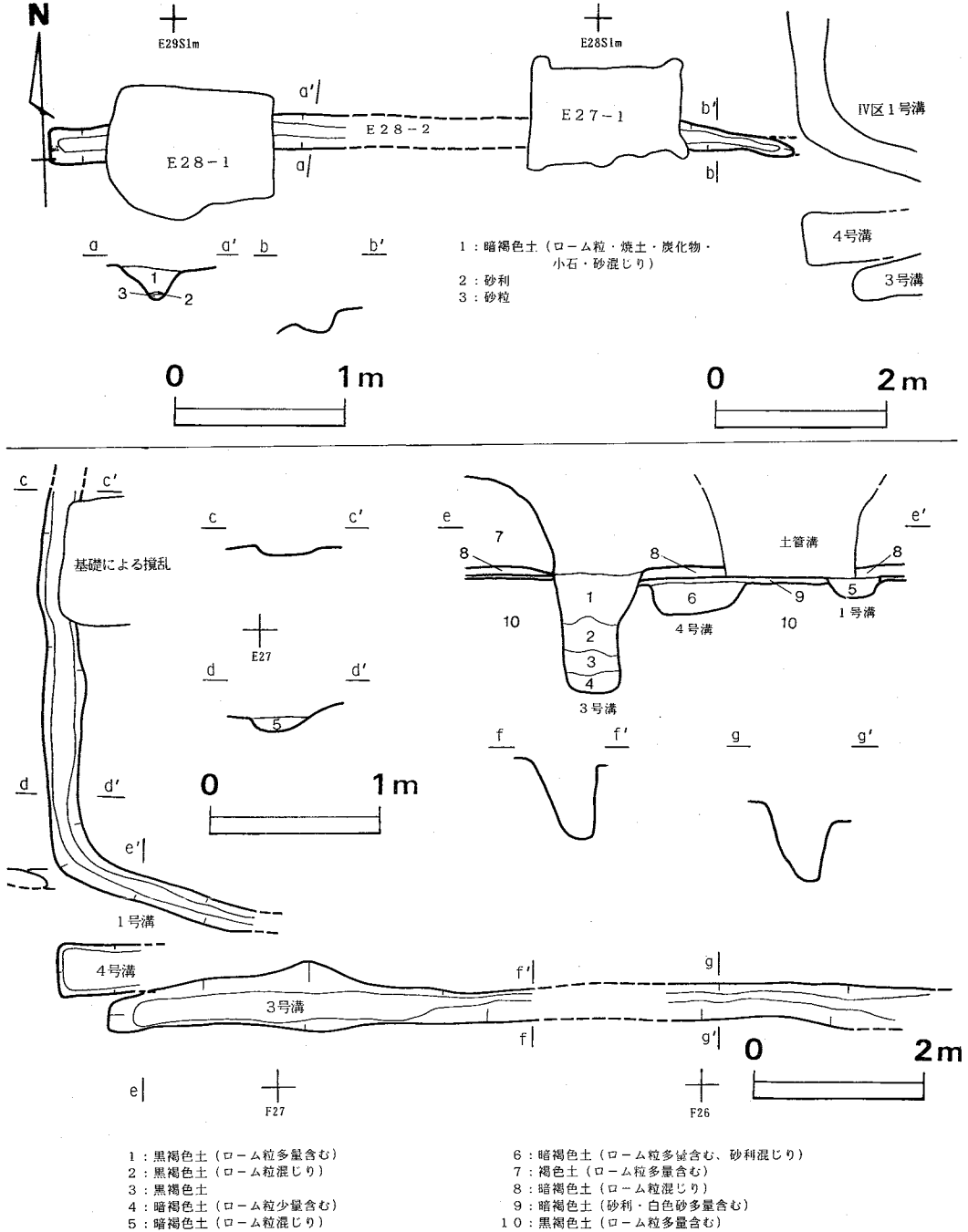


III-053図 E28-1実測図(土層図の水準:14.0m)

E28-1 29ライン上のEとFの中間に現われた井戸である。焼土の詰まった遺構として、確認された。当初円形と方形のものが重複したような平面形がみえたが、掘り進めると東に深さ1.0mの方形の付属施設である張り出し部をもつ井戸であることが判明した。井戸の直径は1.5mであり、若干不整な形をしている(III-053図)。完全な素掘りで使用されていたようで、何の施設の痕跡も

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

ない。埋土は上部は焼土を多量に含む赤褐色土であり、下は大型の礫や瓦を含む暗褐色土である。これらはほぼ水平な堆積をしており、人為的に埋められたことを示している。西北隅まで付属の張り出し部が伸びていて、ここに径20cm、深さ10cmの杭穴がみられた。西北隅を含め張り出し部の



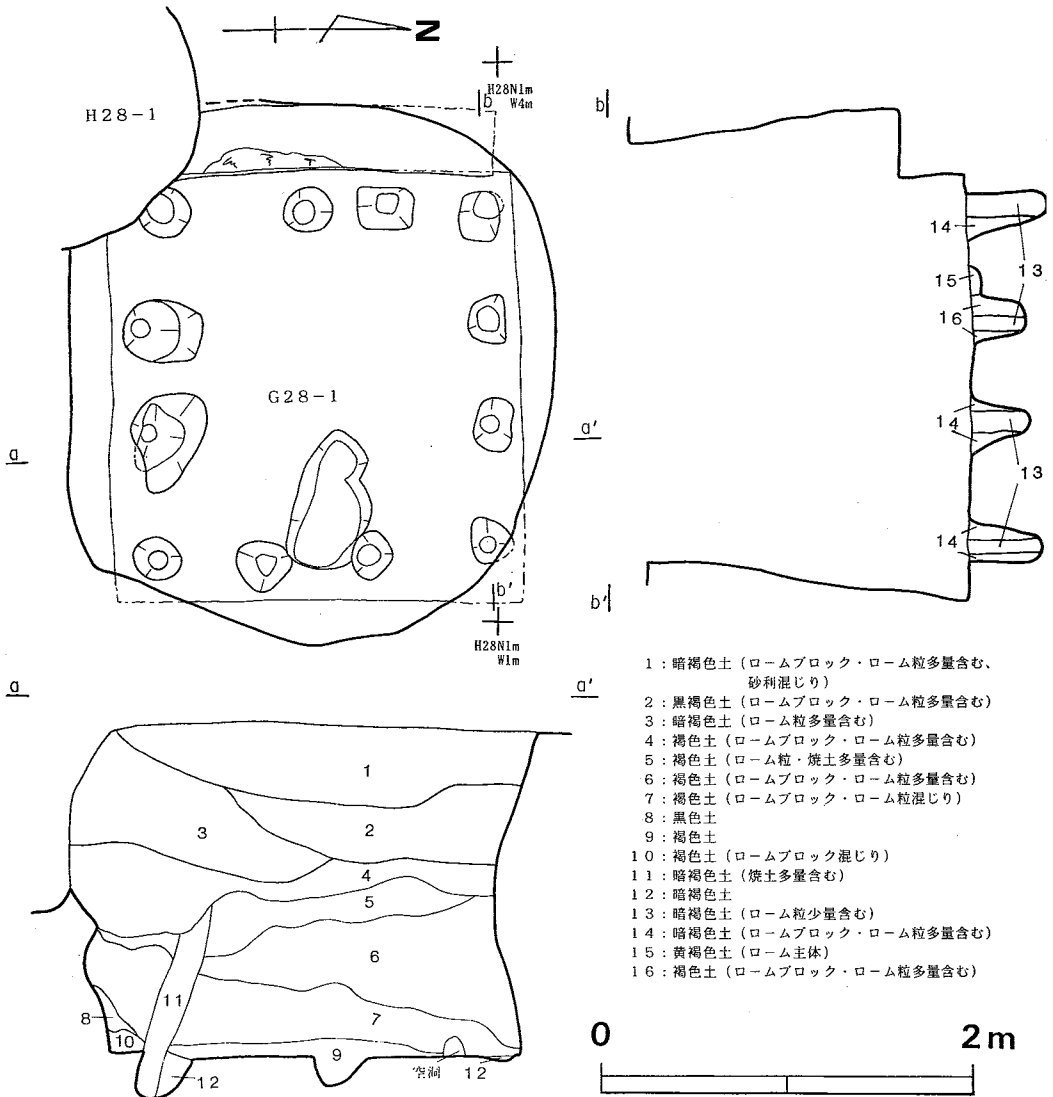
III-054図 E28-2, IV区1・3・4号溝実測図 (土層図の水準:13.0m, a-a'・b-b':13.2m, f-f'・g-g':12.6m)

### 第三章 江戸時代の遺構

埋土は焼土を含む赤褐色土である。この井戸の壁でも1号住居址が確認されている。遺物は18世紀前半のものを中心にして多量のものが出土している。(藤本 強)

**E28-2** Eラインの南3.5mほどのところをほぼ東西に、E27区から E29区にかけて走る溝状の遺構である(III-054図)。この東の延長上にはIV区1号溝がある。IV区2号溝を切り、E28-1、E27-1に切られている。幅は40cm、深さは10~20cmで、東に深くなっている。ローム混じりの暗褐色土を埋土にしており、遺物はない。位置と溝の方向から地境の溝と考えられる。(萩尾昌枝)

**IV区1・3・4号溝** D27, E25・26・27区にある溝である(III-054図)。屋敷の地割りに関して重要な意味のある溝である。4号溝がもっとも古く、1号溝が次ぎ、3号溝がもっとも新しい。3



III-055図 G28-1実測図(土層図の水準:13.8m)

### 3 D31~27, E31~27, F31~27, G31~27, H29~27 区の遺構

号溝・4号溝はほぼ真東西の溝であり、1号溝は南北方向の溝が、E27区の中央あたりで、東西方向に曲がるものである。いずれの溝も後世の破壊や削平により全容を窺うことはできない。

これらの構築と他の遺構の関係であるが、まず自然堆積の黒土上に4号溝が作られる。幅60cm、深さ20cmの溝で、ローム・砂利混じりの埋土である。方向は真東西である。大聖寺藩の屋敷が成立するかどうかの時期であろう。次に4号溝を埋め、1号溝の南北方向の延長線・12号組石・1号溝の東西方向の延長線で囲まれる部分に、土を盛った上で、下の砂利面が作られる。この時に1号溝が掘られる。幅は25~50cm、深さ10cm前後でローム混じりの暗褐色土が埋土である。次いで、下の砂利面の上に上の砂利面が作られる。上の砂利面は、南北方向の6号組石・東西方向の6号組石・12号組石に囲まれた部分にみられる。この時に3号溝も作られる。幅40~80cm、深さ50~70cm、ローム混じりの黒~暗褐色土が埋土である。

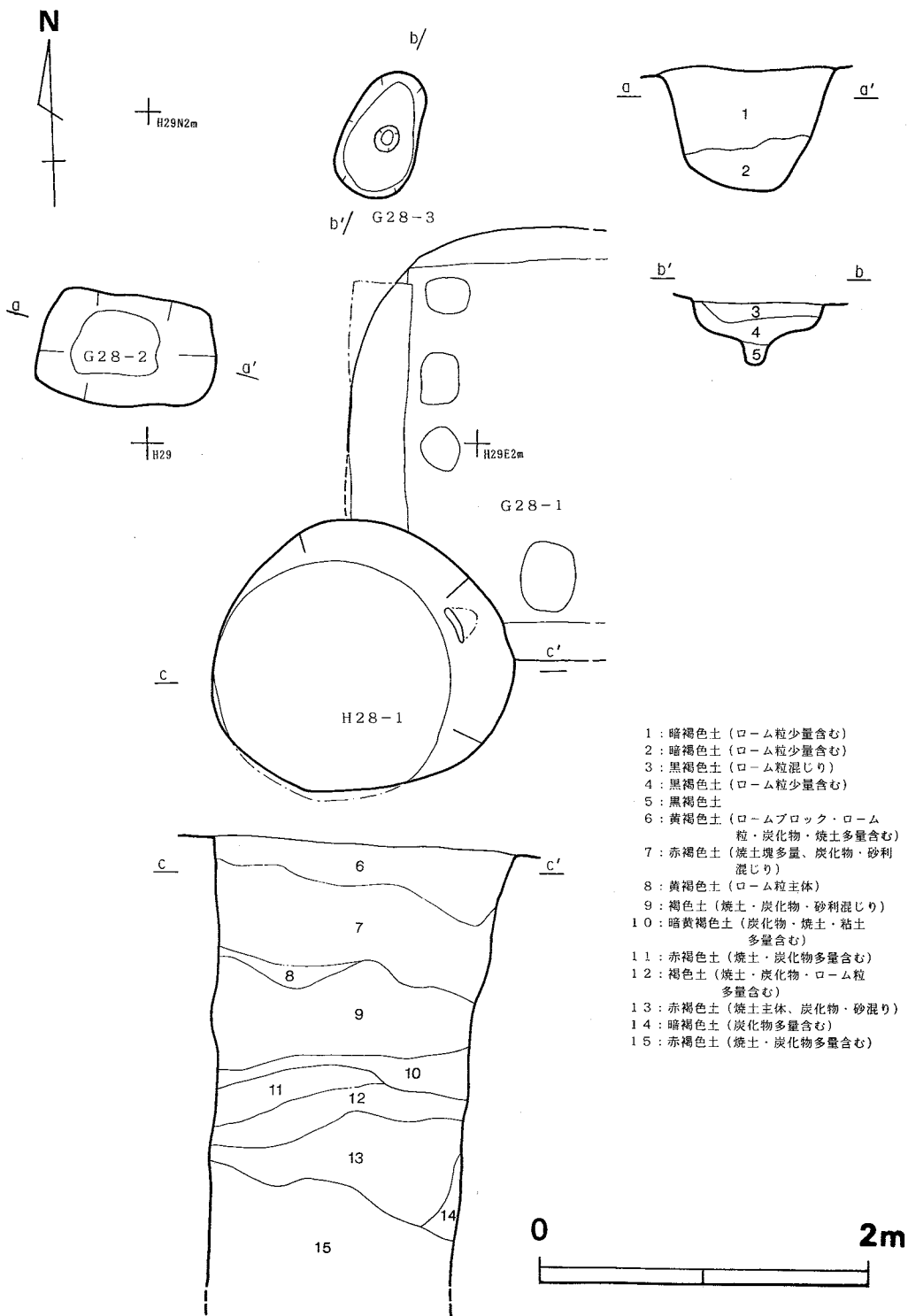
おそらくすぐ後で、3号溝の上に5号組石が作られ、3号溝・5号組石、南北方向の6号組石、27ライン付近の台地の端に囲まれる部分には1mを越す厚さの盛土がなされる。台地の面を東側に人工的により広くしようとする最初の仕事である。3号溝にはこの地割りの意味があったのではないだろうか。5号組石の延長は6号組石になるし、1号溝の南北部分、5号組石、3号組石ないしは4号組石に囲まれた部分は遺構の少ないところである。天和三年以降の大聖寺藩と富山藩の地境であり両者の間を出入りした可能性のあるところである。上屋敷成立以来、幕末まで、地割りということによって重要な位置にある溝である。  
(成瀬晃司・堀内秀樹)

**G28-1** G・H28区にまたがって位置する半地下式の土坑である(III-055図)。6号組石南北部分の石垣状の組石に囲まれて一段高くなったF25-2と同一の面から切り込まれている。土坑の南壁を近代以降の基礎に、西南隅をH28-1に切られ、残存状態はやや不良である。平面形は底で方形、上面では円形に近く、西にはテラス状の張り出しが一段設けられている。底には径20~30cm、深さ40~50cmの円形または隅丸方形の杭穴が12壁際をめぐり、いずれにも明瞭な杭痕が認められている。底は東西2.3m、南北2.2m、深さ2m弱である。テラスは底から40cm上にあり、西壁より40cm張り出している。テラス、底、壁の下半は丁寧に調整がなされ、各隅は直角に作られているが、壁の上部は調整が雑で凹凸があり、張り出し部も上は壁と一緒に入口に至っている。埋土はロームを主にしていて、土坑の廃棄が短期間になされたことを窺わせる。11層は杭痕であると考えられるが、焼土・炭化物を含み、上屋構造を支える杭が火災で焼け、炭状になって残った痕跡であろうと思われる。この遺構は設備管理棟地点の榑原家の屋敷内のAE34-5・AE35-6と同様の半地下式の土坑でありこのような形態の土坑が異なる屋敷から確認されたことは注目しなくてはならないであろう。この土坑が構築されている面は天和二年の火災によって廃棄されたことが推定され、遺物も杭穴のなかから17世紀中葉のものが出土していることから时期的に矛盾しないと思われる。  
(堀内秀樹)

**G28-2・3** G28・29区にある小土坑である(III-056図)。2は深く75cm、3は20cmほどである。3の中央に径16cm、深さ15cmの杭穴がある。伴うものであろう。埋土は両者とも黒~暗褐色土を主にしておりロームを含んでいる。遺物は2の底近くから骨粉が出土したのみである。  
(堀内秀樹)

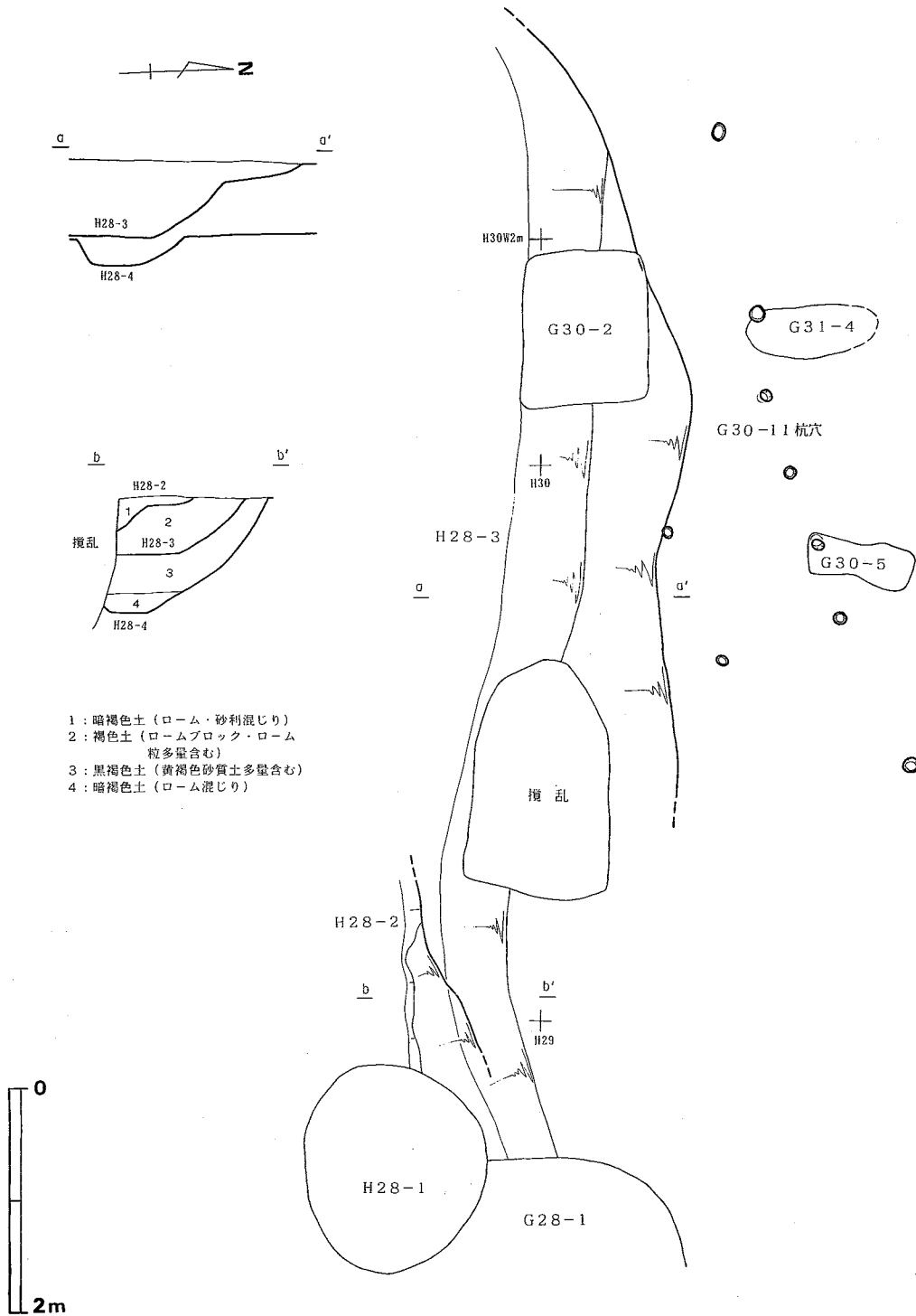
**H28-1** H28区にあり、G28-1を切っている。上部は東北方向に若干広がるが、径1.5mの円形の素掘りの井戸である(III-056図)。東北側の壁に15×20cm、深さ20cmの小孔がある。足場用のもの

第三章 江戸時代の遺構



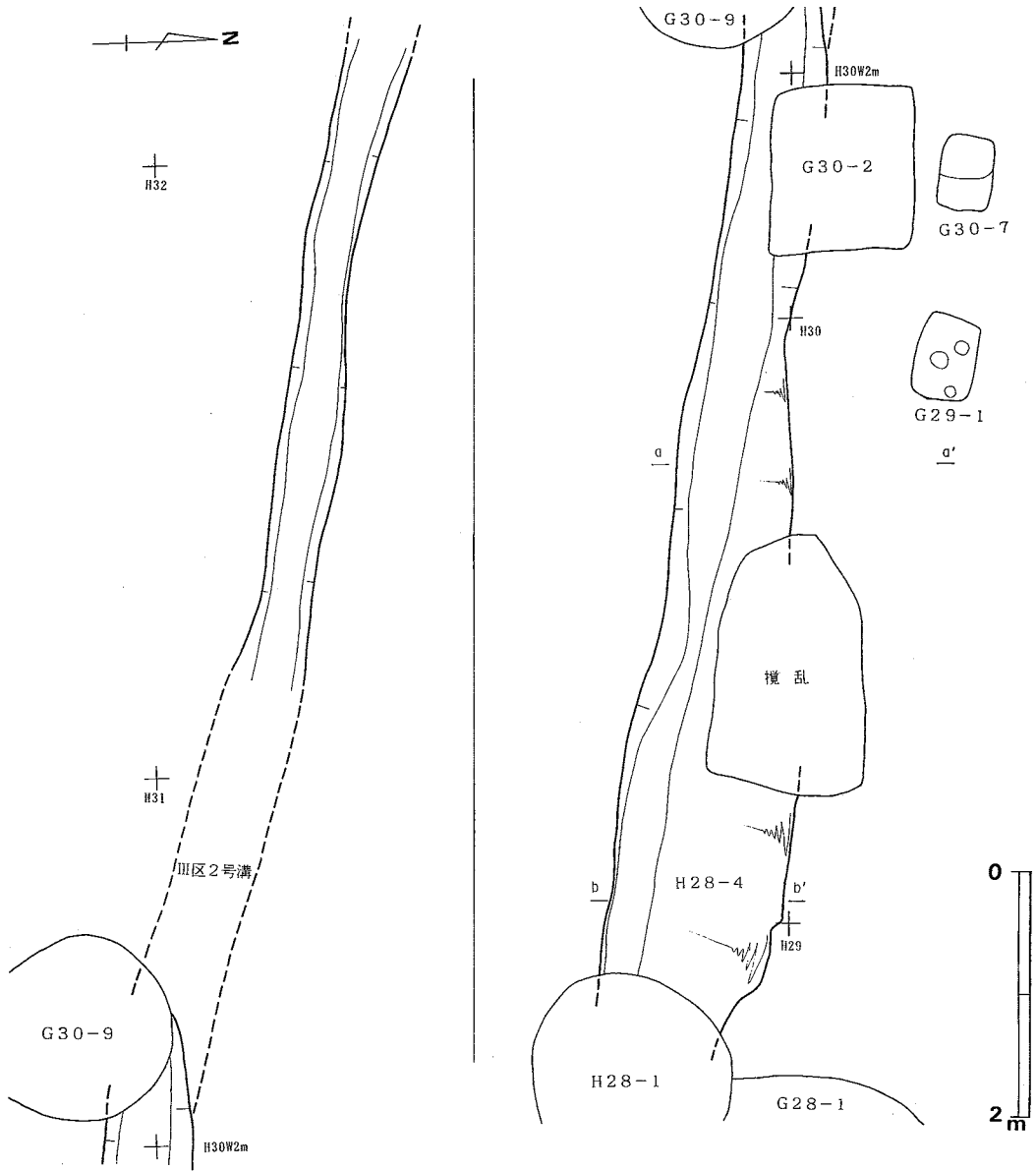
III-056図 G28-2・3、H28-1実測図 (土層図の水準:13.5m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



III-057図 H28-2・3, G30-11実測図 (土層図の水準: 14.0m)

第III章 江戸時代の遺構



III-058図 H28-4、III区2号溝実測図

であろうか。埋土は焼土を多く含む赤～褐色土が主体である。上部には人頭大の石が入っていた。遺物の量は少ない。火事の後始末に投げ込まれた埋土であろう。(宮田安志)

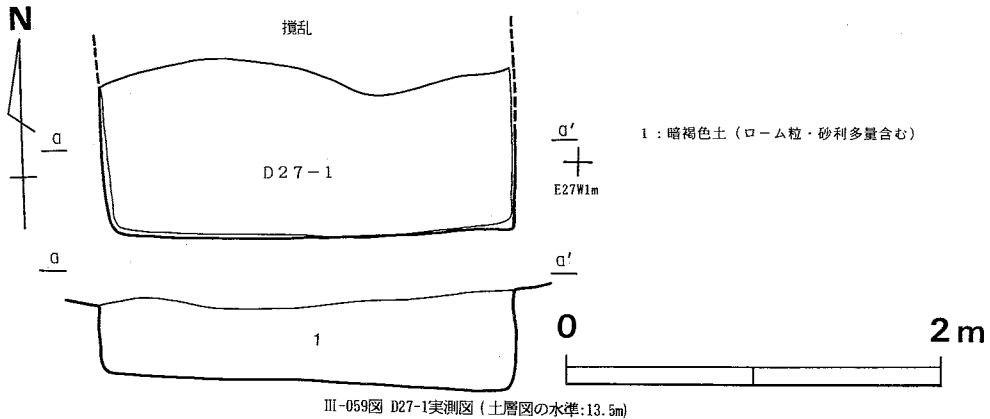
**H28-2・3・4** G・H28・29・30区にある東西方向の溝である(III-057・058図)。2がもっとも新しく3が次ぎ、古いのが4になる。2と3は基礎により破壊されていて、南の立ち上がりは明らかではない。4は辛うじてわかるが、全容をつかむことはできない。幅は2が90cm,3が1.3m,4が1.5mとかなり広く深さは2が30cm,3が50cm,4が1mである。4は周辺の遺構のなかでは古く、ほとんどのものに切られているが、III区2号溝を切っているようである。いずれの方向も真東西ではないので、大聖

### 3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

寺藩の上屋敷が確立する前のものと考えられる。これらの確認はローム面でなされているが、もっとも古い 4 が近世の盛土の最下部から掘っていることが明らかになっている。少量の「かわらけ」などの土器を主にする遺物がある。はっきりした性格は不明である。4 は III・IV 区 2 号溝とともに同時に使われていた可能性が強い。(堀内秀樹)

**H28-5・6・7** H28 区にある小土坑である(III-070 図)。6 はかなり深く 70cm あり、なかに石が浮いた状態で入っている。あとは 30cm ほどの深さである。7 は H27-4・5 と切りあい関係をもつ。いわゆる漸移層の上面で発見された。ローム混じりの暗褐色土・褐色土を埋土にしている。遺物はなく、時期および性格は不明である。(小川 望)

**III 区 2 号溝** G31・32 区の南にある溝であり、ローム面で確認されている。東端は G30-9 に切られているが、東になるにつれ次第に浅くなり、このあたりでわからなくなっている。G30-9 を西の基点として、H28-4 が東に伸びるが、平面的には一見つながるように見えるが、深さにはかなりの差があり、H28-4 が切っているとみるのが妥当であろう。幅は約 0.6m、深さは 5~10cm と浅い(III-058 図)。埋土は黒褐色土で遺物はない。H28-4 とともに IV 区 2 号溝とは直角であり、同じ時期に使われた可能性が強い。(小川 望)



**D27-1** D・E27 区にある土坑で、E27-2 の上にある。いわゆる斑状の土の上面で確認され、底はいわゆる下の砂利面である。東西 2.2m、深さ 60cm の方形の土坑である(III-059 図)。底は砂利面の傾斜にそって、緩やかに東に下がる。埋土はローム・砂利混じりの暗褐色土である。遺物は少量のみで、時期・性格などは明らかではない。(成瀬晃司)

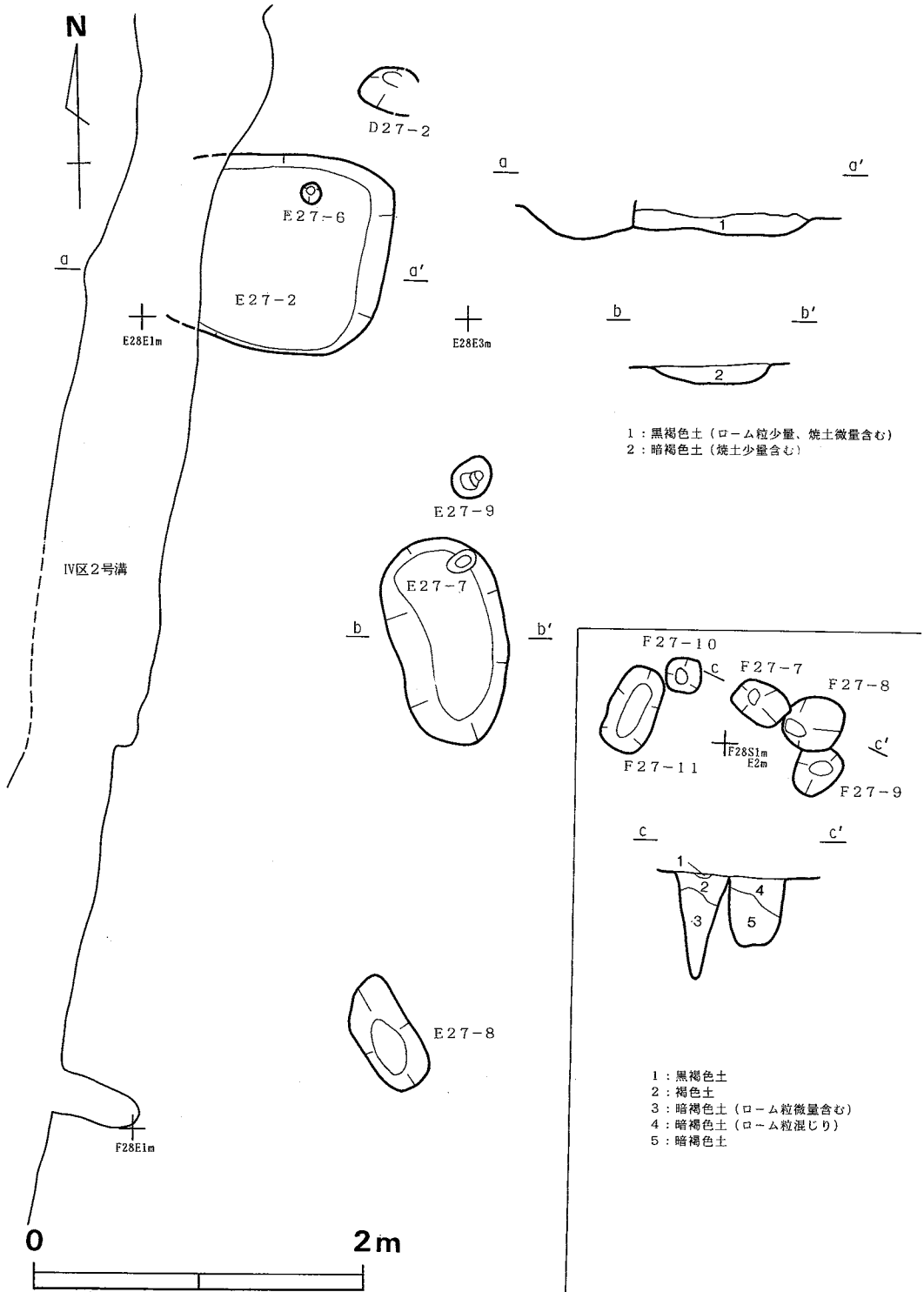
**D27-2** D27 区の自然堆積の黒色土の上面で確認した小土坑である(III-060 図)。楕円形であり埋土は褐色土である。遺物はない。(成瀬晃司)

**E27-1** E27・28 区にある土坑である(III-061 図)。IV 区 2 号溝、E28-2 を切っている。東西 1.8m、南北 1.2m、深さ 1.1m 強の長方形であり。底の四隅と南壁沿いなどに杭穴をもつ。四隅のものが板貼りを支えるための、南壁沿いのはハシゴなどを入れるためのものかと思われる。埋土は焼土を主体にする赤褐色土がほとんどである。18 世紀後半の若干の遺物が出土している。(萩尾昌枝)

**E27-2** D・E27 区にありローム面で発見されている。IV 区 2 号溝、F27-6 により切られている。



第三章 江戸時代の遺構

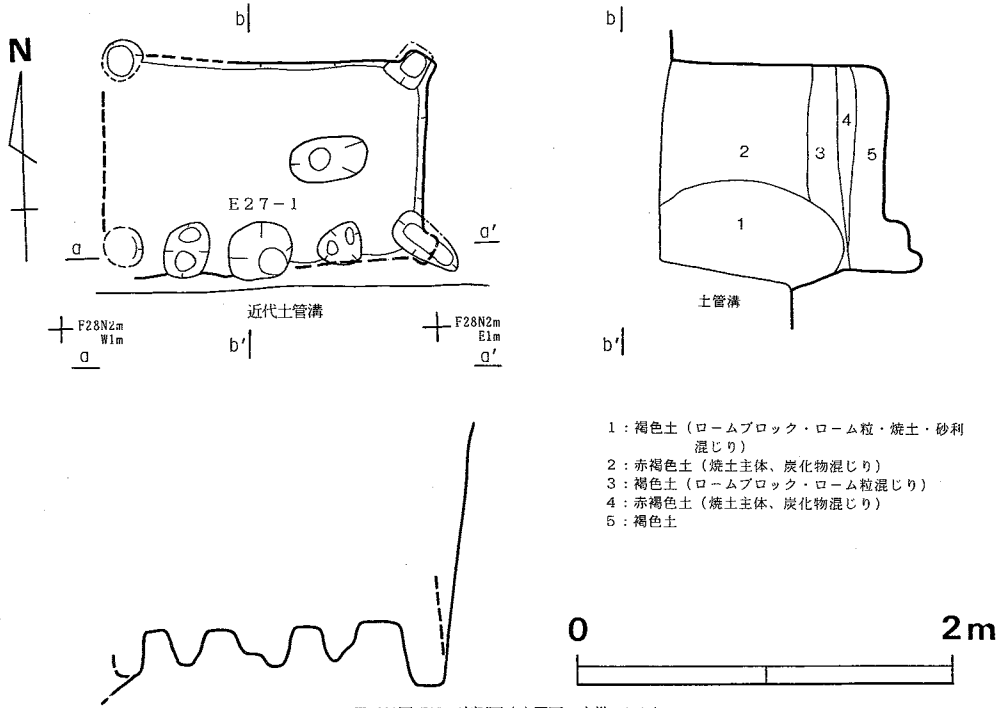


III-060図 D27-2, E27-2・6~9, F27-7~11実測図 (土層図の水準:12.8m, c-c':12.5m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

一辺1m強の方形であり、深さは20cmほどである(III-060図)。埋土は黒褐色土で、遺物は土師器の小片が出土しているのみである。江戸時代初頭を含めそれ以前の年代が考えられる。(堀内秀樹)

**E27-3・4・5** E・F27区にある切りあい関係のある土坑である。いわゆる斑状の土の上面で発見され、4が新しく、5が古い。4・5は0.5m内外の径の円形の小土坑であり、3は1m前後の隅丸方形の土坑である(III-087図)。ローム混じりの暗~褐色土を埋土にする。時期・性格は不明。(成瀬晃司)

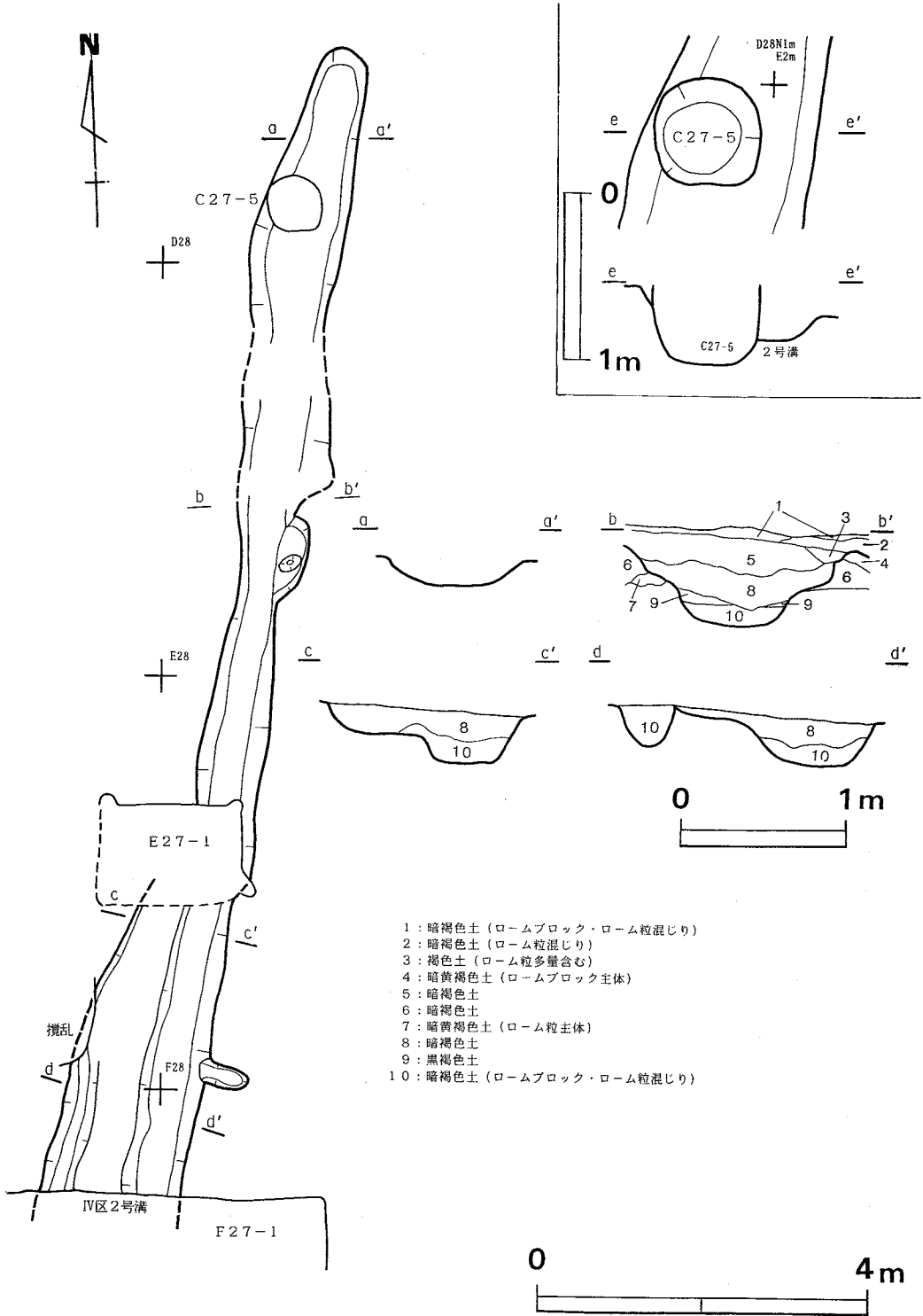


III-061図 E27-1実測図 (土層図の水準:13.8m)

**E27-6・7・8・9** D・E27区の自然堆積の上面で発見された遺構で(III-060図)、6は杭穴、7・8・9は楕円形の小土坑である。6は褐色土、7は暗褐色土、8は黒褐色土、9は黒色土を埋土にしている。自然堆積の上面で発見されたので古いものであるが、詳細な時期・性格ともに不明。(成瀬晃司)

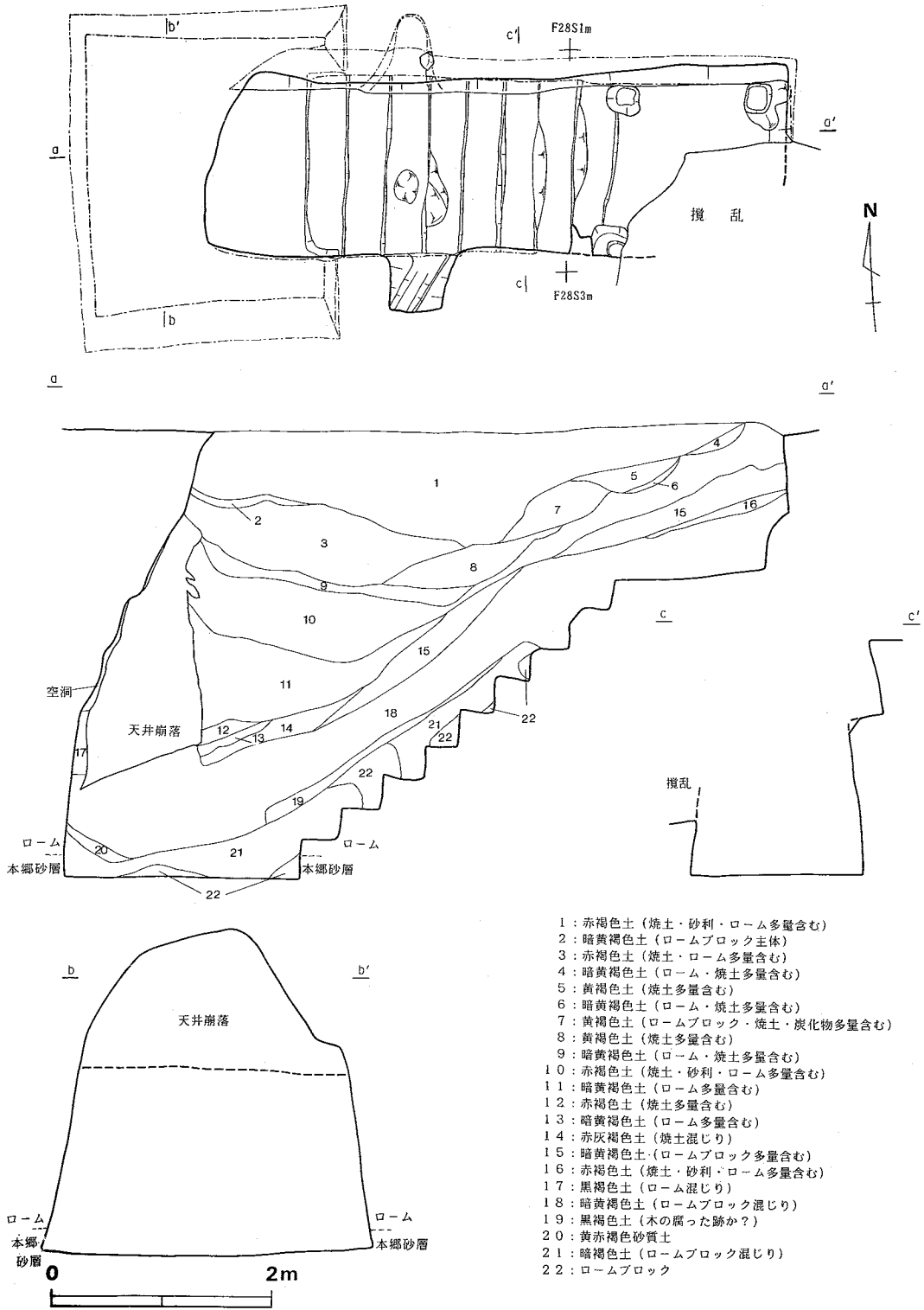
**IV区 2号溝** 北は C27ポイントの南2.4m、西3.3mに始まり、南は F28ポイントの南1.3mでF27-1に切られ、わからなくなる溝である。自然堆積面に掘られ、2号組石の下に発見されたV区1・2号溝よりも古く、大聖寺・富山両藩の屋敷が成立する前の溝と考えられる。E27-2はこの溝に切られているので、より古い遺構になる。上面の幅は0.7m~0.8m、一部で幅が1mをこえるところもある(III-062図)。底の幅は0.4m前後、0.8mになるところもある。溝の作りは粗雑である。深さは0.25mほどで、底は北に高くなっている。北端と南端の比高差は0.3mほどである。現存長は14m、緩やかな傾斜ということができよう。埋土は暗褐色土であり、下部はロームの混入が目立つ。溝のなかの埋土からは江戸時代の遺物は少量しか出土していない。土師器の小片も出土している。この溝の時期ははっきりしないが、江戸時代の初頭を含め、それ以前ということになろう。江戸時代のものであろうが、確証はない。E28 区の南半、F28区には、ほぼ並行に走る幅0.4m、深さ0.2m~0.25m

第III章 江戸時代の遺構



III-062図 C27-5、IV区2号溝実測図 (土層図の水準:13.0m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



III-063区 F27-1実測図 (a-a':14.0m, b-b':12.0m, c-c':13.7m)

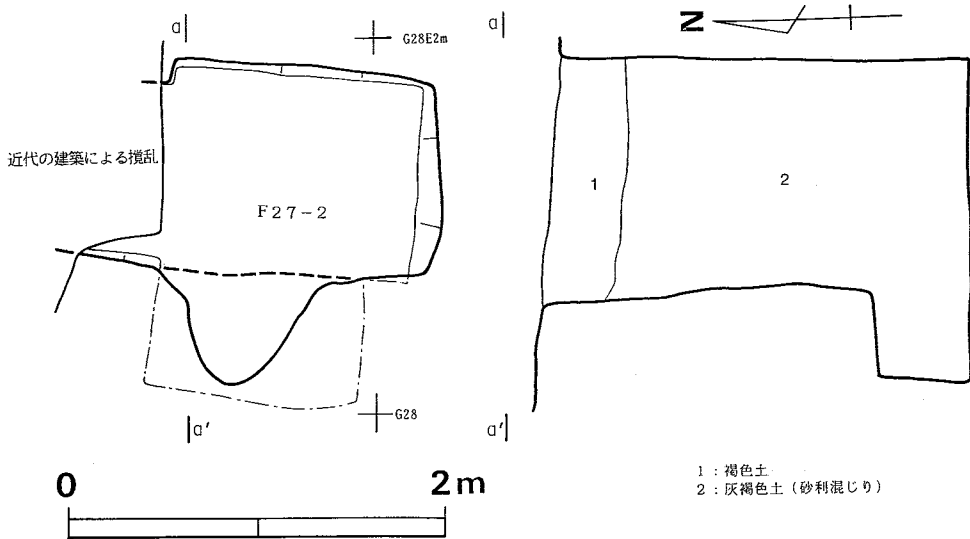
### 第III章 江戸時代の遺構

の溝がある。この溝は近代の建物の基礎に壊され、北はわからなくなる。III区2号溝、H28-4とは直角であり、同一時期の構築・使用かと考えられる。(藤本 強)

**F27-1** F27・28 区にある大型の地下式土坑である。階段と地下室があり東西方向に連なっている。1号住居址・IV区2号溝を切っている。入口と階段の一部は土管により破壊されている。地下室は底が南北3m、東西2.5m、天井はやや小さい(III-063図)。天井の高さは1.5m強であり、底は標高9.5mである。この土坑はロームを完全に掘り抜いており、底は本郷砂層である。この部分で本郷砂層の上面は標高9.7mであり、この上1mほどはいわゆる水つきのロームになっている。天井は一つのブロック状になって落ちており、これらから推測するところでは天井はほぼ平らであり、壁とは直角に交わっていたと考えられる。壁はやや内傾し、周辺部に工具の痕が認められる。

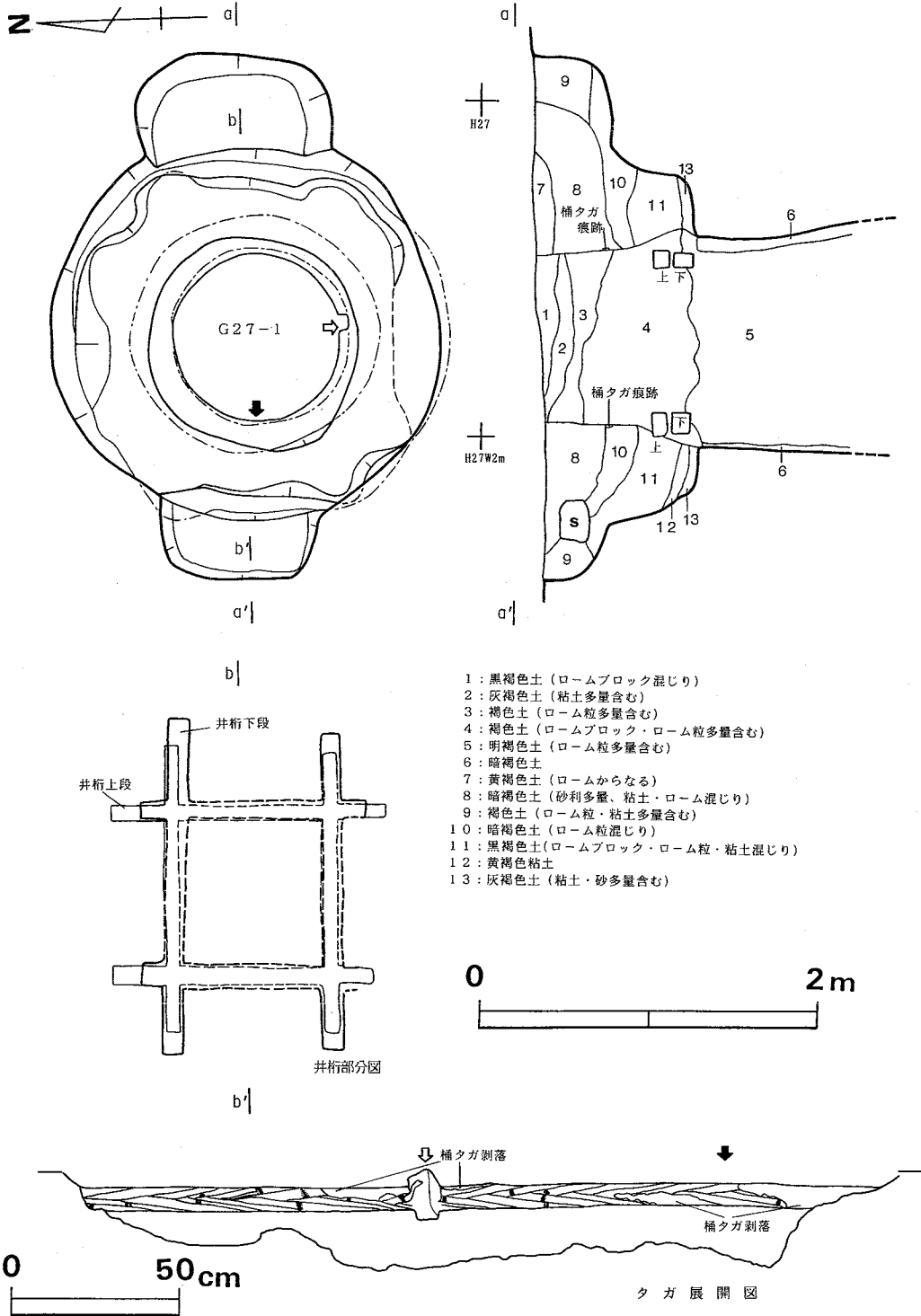
階段は幅1.6m、長さ4.5mで、九段からなる(写真6)。最下段は地下室のなかにある。南側の壁はやや内傾しているがかなり破壊されている。北側の壁には30cmほどの幅の段がある。やはりやや内傾している。各段の幅は30cm、けあげは30~35cm、踏み板にあたる部分は平坦かやや爪先下がりになっていてけこみはほぼ垂直である。下から三段目の上の壁には階段をまたぐように木材を渡したと考えられる穴がある。南側のものは下が溝状にえぐれ、下から三段目と四段目には木材が落下したときにできたのではないかと思われる損傷がある。最上段は広く1.5mの正方形である。それぞれの隅には一辺30cm、深さ40cmほどの柱穴と思われるものがあり、ここが特定の機能をもつ場であったことを窺わせる。入口の幅は階段と同じ、東西は崩落のため明らかではないが、4mほどであったものと推測している。埋土は天井の崩落と考えられるロームブロックが底付近にあり、暗黄褐色土が厚く堆積し、その上に焼土を含む土層がある。遺物は規模の割りには少量で、焼土を含む層を中心にして17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる陶磁器や瓦片がみられる。

この遺構は階段のついた地下式土坑で、当時の生活していた面から一度最上段に降り、ここから階段により地下室に降りるといったものであったと思われる。F33-3などにある踏み板保護のためか



III-064図 F27-2実測図(土層図の水準:14.0m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構



III-065図 G27-1実測図 (土層図の水準:13.7m、タガ展開図:13.2m)

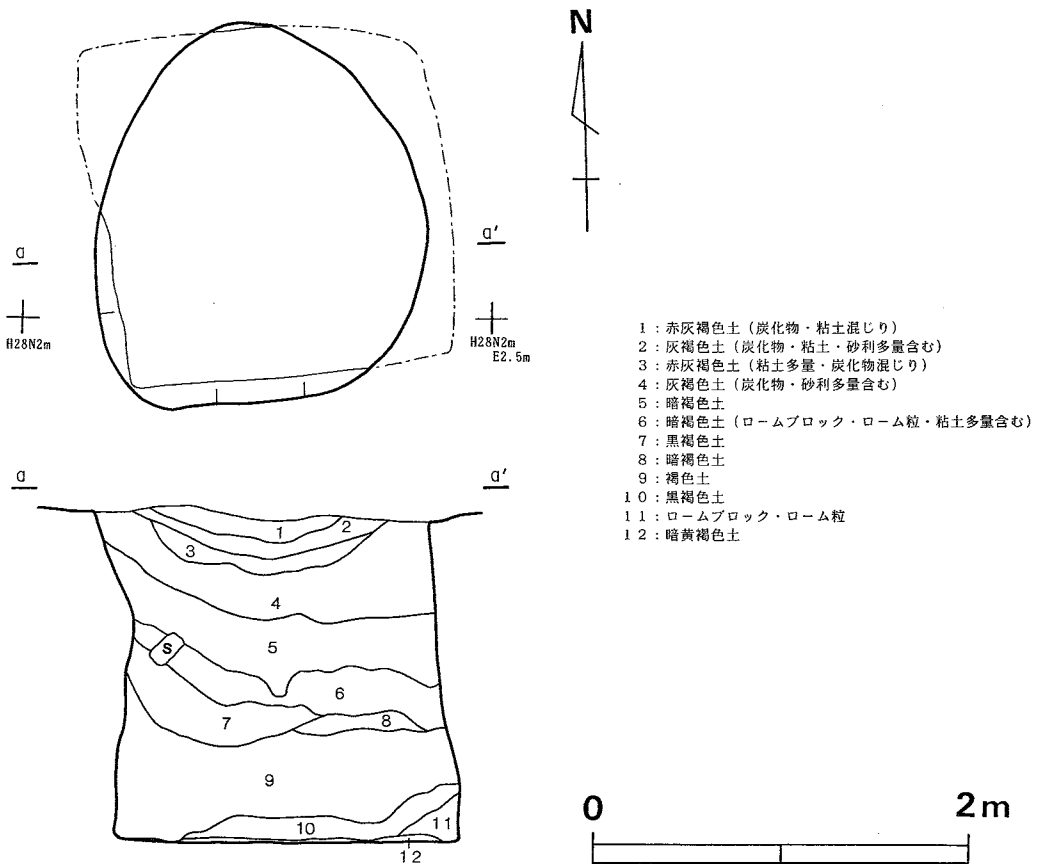
### 第三章 江戸時代の遺構

と思われる杭穴はなく、階段のそれぞれの角も保存状態はよく、長期にわたってその機能を果たしていたとは思われない。埋土からみても入口や天井が崩落し、この段階でこの土坑は放棄され、かなりの部分まで意図的に埋め戻されたものと思われる。その後天井が落ち、ゴミ穴として火災の後片づけの際に焼土などが廃棄されたものと考えられる。(小川 望)

F27-2 F・G27区に位置し、二方向に地下室がある地下式土坑である(III-064図)。北を近代以降に破壊され、全体の様子は窺えない。土坑は底付近で北と西に張り出しており、入口は方形を呈していたと考えられる。地下室はやや小型で、天井も低く作られている。底や壁は、丁寧に調整され、面が直角に構築されている。規模は底で東西1m、南北1.1m、西の張り出し部は間口1.1m、奥行70cm、深さは底まで2.5mある。埋土は大部分が砂利を含む灰褐色土であり、人為的に短期間に埋め戻されたものと判断される。遺物は張り出し部から釣り針、小型の鏡が出ているほか、埋土のなかから17世紀後半のものと考えられる陶磁器などが出土している。(堀内秀樹)

F27-6 G28ポイントの付近にある不整形の土坑である(III-068図)。深さは40cmで、埋土は焼土・ローム混じりの灰褐色土である。遺物はなく、時期・性格は不明。(堀内秀樹)

F27-7・8・9・10・11 F27区にある小土坑である(III-060図)。0.3m強の径をもつ円形もしくは楕

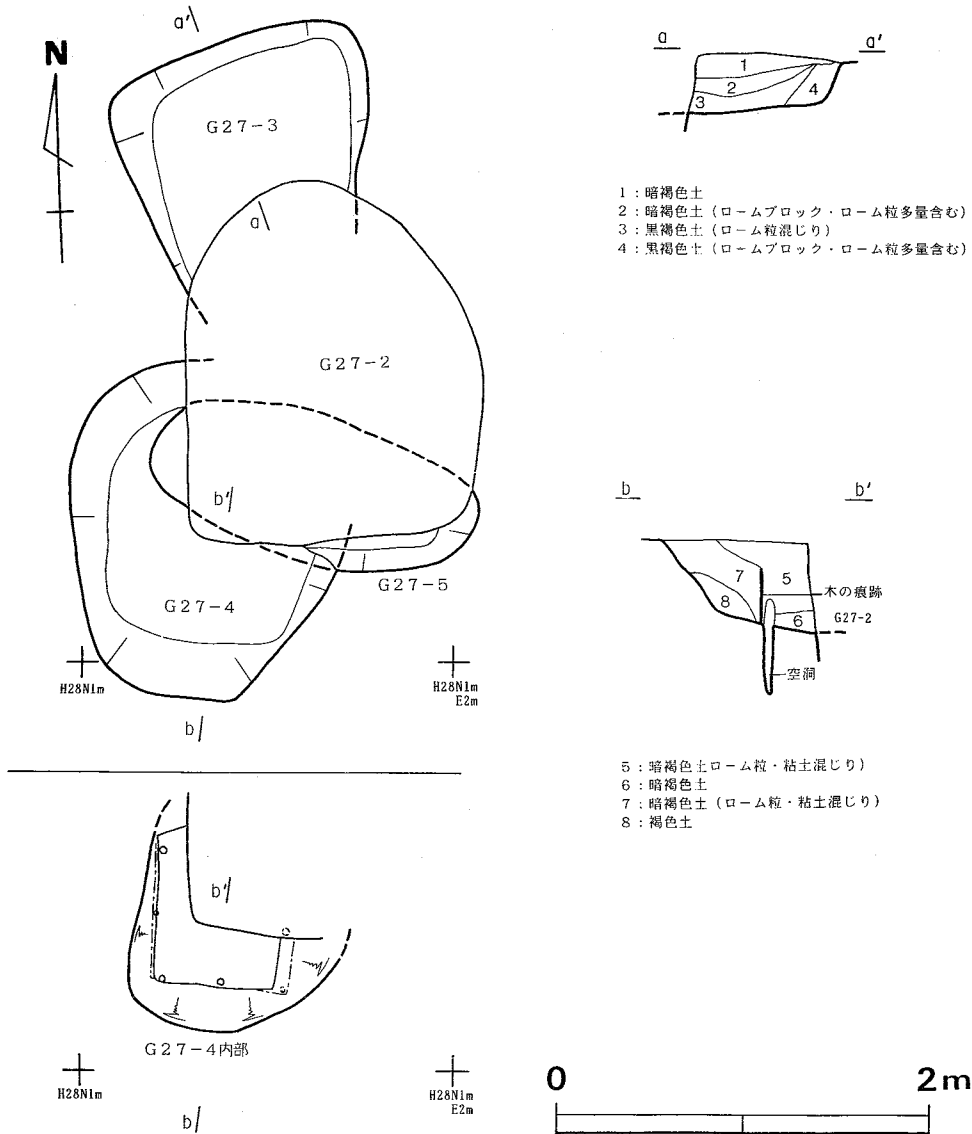


III-066図 G27-2実測図 (土層図の水準:13.5m)

3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

円形の土坑である。深さは7・8が66cm, 52cmと深く、9・10は25cm 前後, 11は10cm と浅い。埋土は黒~暗褐色土が基本になっている。時期・性格はわからない。(成瀬晃司)

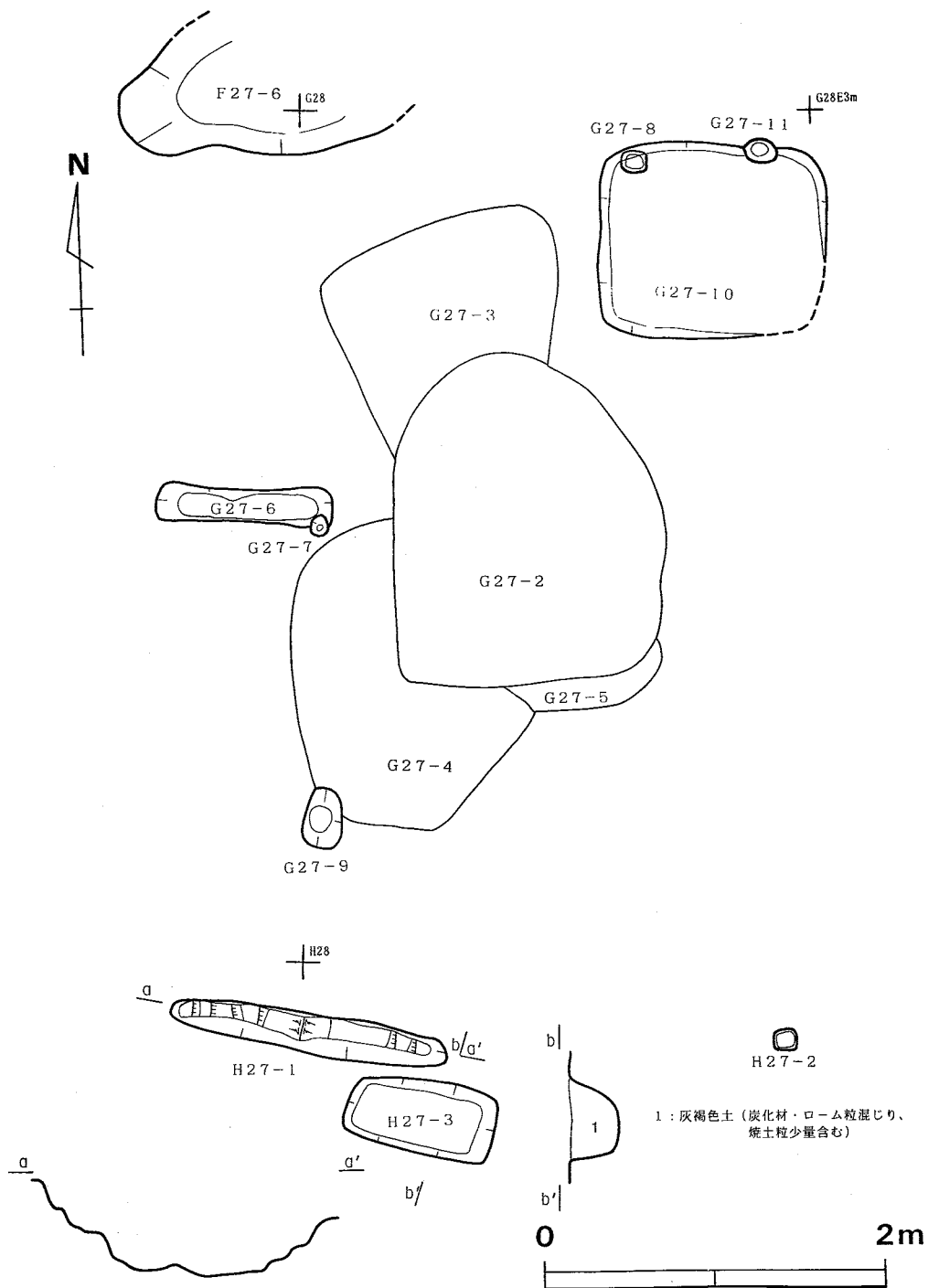
G27-1 G26・27区に位置する井戸である(III-065図)。6号組石の南北部分の西にある一段高いF25-2 を載せる面と同一の面より切り込まれている。土砂崩落の危険があったため、確認面から2m ほどしか調査できなかったが、木部が腐食していたものの全体的には比較的良好な状態で観察することができた。この井戸の形態的な特長は上部の上屋施設の構築のためと思われる掘り込みと張り出し部が認められることである。掘り込みは円形を呈し、その中央には井戸側を入れる穴が穿たれている。底には長さ1.6m~2m, 一辺10cm の角材が「井」形に組まれ、化粧側を支えている状況が



III-067図 G27-3~5 実測図 (土層図の水準: 13.1m)



第三章 江戸時代の遺構



III-068図 F27-6, G27-6~11, H27-1~3 実測図 (a-a':12.7m, b-b':12.9m)

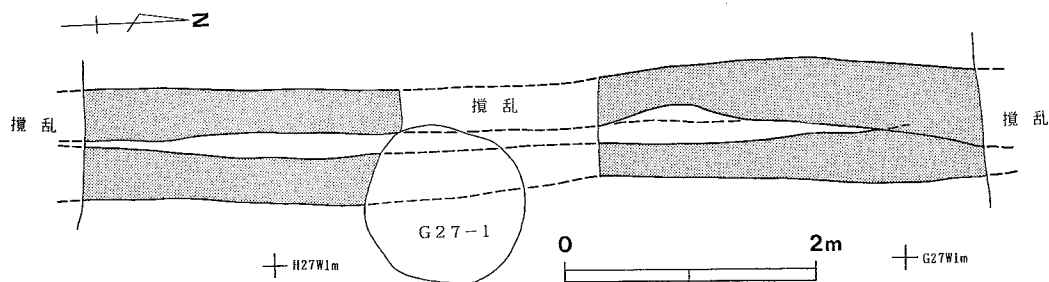
3 D 31~27, E 31~27, F 31~27, G 31~27, H 29~27 区の遺構

観察された。化粧側（最上段の井戸側）は、口径が1mほどの桶が井桁の上に乗せられ、周囲を土で固定されていたものと思われ、土には桶やタガの痕跡が明瞭に認められた。桶の形状より最上段の井戸側は地上に突き出ていたと思われ、張り出し部が上屋施設の柱の埋め込み穴と推定できるので、上部構造は容易に想像できよう。井桁の下は桶の痕跡（土層図の6層）は認められるものの明瞭ではない。外側の掘り方の規模は径2.3m、深さ1m、張り出し部は東側が東西60cm、南北1.2m弱、深さ43cm、西側が東西40cm、南北90cm、深さ30cm、中央の井戸側を入れる掘り込みは径1.25mである。井桁は一辺80cmに組まれている。井戸側の内側は6層にわかれ、ほぼ水平に堆積している。外側は7層にわかれ、桶を固定している状況が看取できる。遺物は少量ではあるが、陶磁器、瓦などが出土しており、時期は17世紀後半に位置づけられる。（堀内秀樹）

G27-2 G27区にある地下式土坑である(III-066図)。6号組石の南北部分の西にあった一段高いF25-2のあった面から切り込まれている。G27-3・4・5を切って作られている。平面形は底は方形、上部は円形を呈する。上部から底まで盛土のなかに構築されていたため、壁の内傾は軽く、底や壁も凹凸が多く、調整も丁寧には行なわれていない。規模は底で東西1.8m、南北1.85m、上部で東西1.8m、南北2m、深さは1.8mである。埋土は中央がややくぼみ、レンズ状の堆積をしているが、人為的に埋め戻していると推定される。遺物は埋土中より陶磁器、「かわらけ」、釘、砥石などが多量に出土しており、特に「かわらけ」が多く検出されている。時期はいずれも17世紀に比定されるものである。（堀内秀樹）

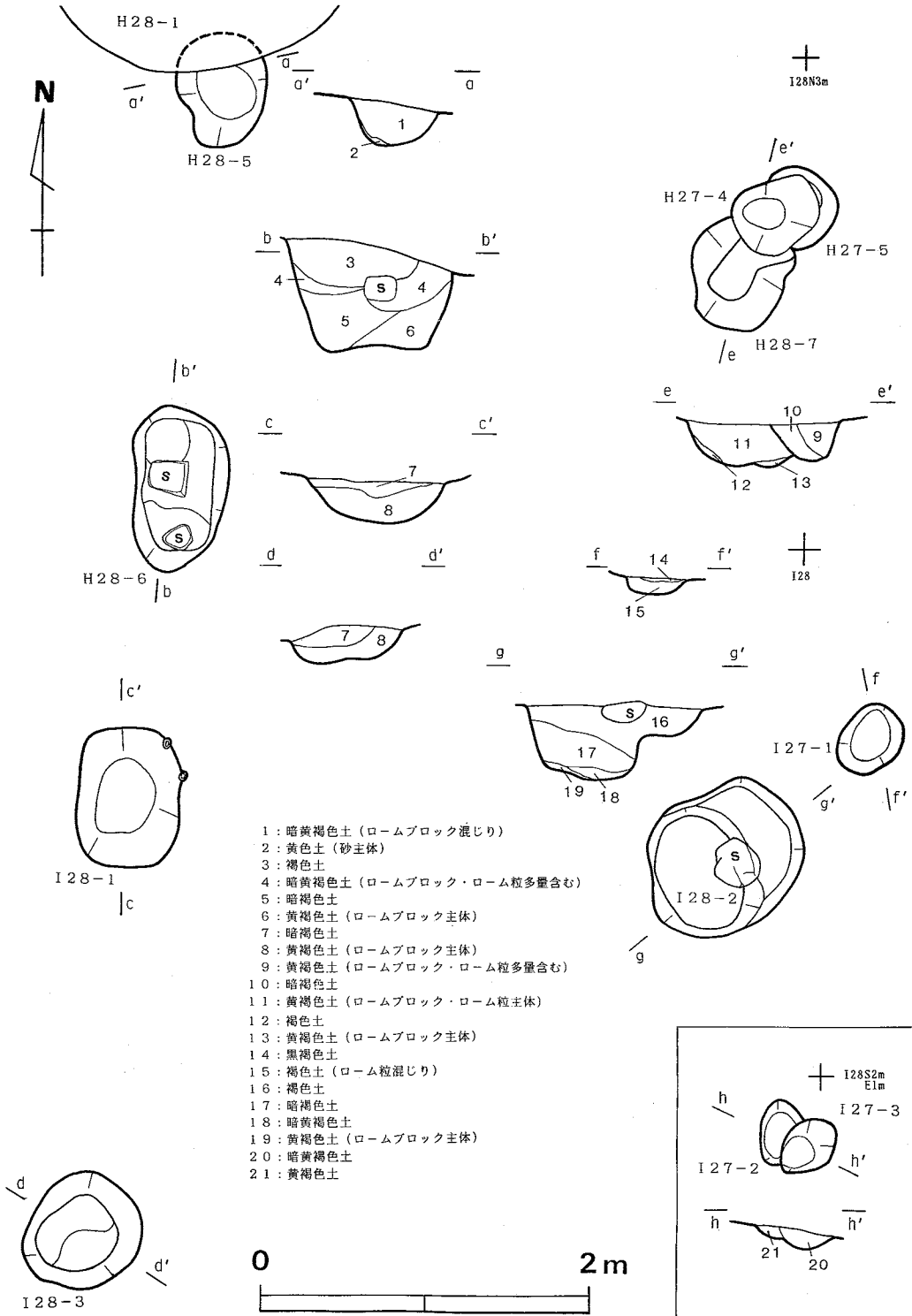
G27-3・5 G27区にあり、3は2に、5は4と2に切られている。3は方形、5は楕円形であったものと思われるが、明らかではない(III-067図)。3は暗〜黒褐色土の埋土、5は暗褐色土を埋土にしている。遺物はなく、時期・性格ともに不明。（堀内秀樹）

G27-4 G・H27区に位置する木枠状の施設を伴う土坑である(III-067図)。G27-2・5と重複しており、2より古く、5より新しい。北東側を2に切られているが、全体の四分之三ほど遺存する。掘り方の平面形は南北に長軸のある楕円形であり、木枠状の板材は杭穴と思われる穴の外側に箱状に確認された。杭穴は円形であり、ほぼ五寸間隔で板材にそって8巡っていたと推定されるが、北東側の2はG27-2に切れ、6のみ確認されている。東西の板材は土圧のためか確認面付近では、やや内側に傾斜している。規模は掘り方が東西1.4m、南北1.8m、深さ50cm、中央の木枠は、東西75cm、南北75cm、深さ50cmである。掘り方は木枠よりかなり大きく作られ、壁、底はなだらかで、規格性をもって作られていない。埋土は掘り込み中央にむかって傾斜し、木枠内は水平に堆積している。



III-069図 遺状遺構実測図（スクリーン・トーン部分きわめて濃い）

第三章 江戸時代の遺構



III-070図 H27-4・5、H28-5~7、I27-1~3、I28-1~3実測図 (土層図の水準:12.7m、c-c'・d-d':13.5m)

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構

遺物は出土しておらず、遺構の性格は不明である。

(堀内秀樹)

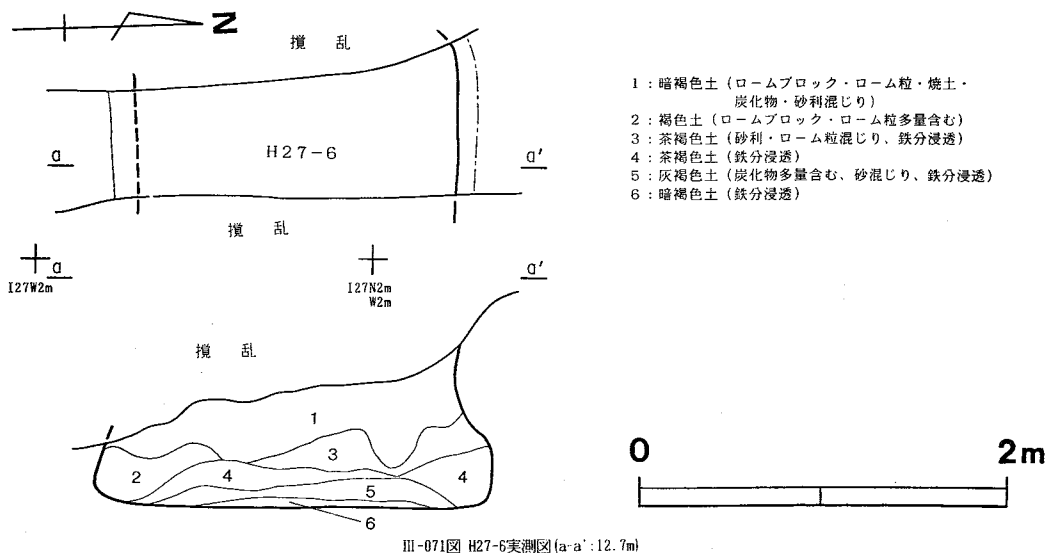
G27-6・7・8・9・10・11 G27区にある杭穴と土坑である(III-068図)。7・8・9・11は杭穴であり、深さは20~30cmである。6は長径1m強、深さ14cmの、10は1.2m内外の一边で深さ20cmの方形の土坑である。10・11はロームの上面で発見している。遺物はなく、時期・性格は不明。(堀内秀樹)

道状の遺構 F・G・H27 区の27ラインの西約2mのところをほぼ南北に走る二条の舗床である(III-069図)。幅40~50cmの部分が小砂利と黄褐色砂質粘土で固められている。両端とも破壊されていて部分的に削平されなかったところでのみ確認できている。屋敷内の道路としてその地割りを考える際に重要な意味をもとう。(堀内秀樹)

H27-1 H27・28区にありローム上面で発見している。東西1.6m、南北25cm、深さ55cm強の土坑である(III-068図)。底は階段状になっている。暗褐色土を埋土にし、遺物はない。(堀内秀樹)

H27-2・3 H27区に位置する。2は方形の杭穴で、3は方形の土坑である(III-068図)。付近は破壊が深くまで及んでおり、関連する遺構は確認できない。(成瀬晃司)

H27-4・5 H27・28区にある切りあい関係のある小土坑である(III-070図)。H28-7とも切りあいがある。埋土はローム混じりの黄~暗褐色土である。遺物はない。性格は不明。(小川 望)



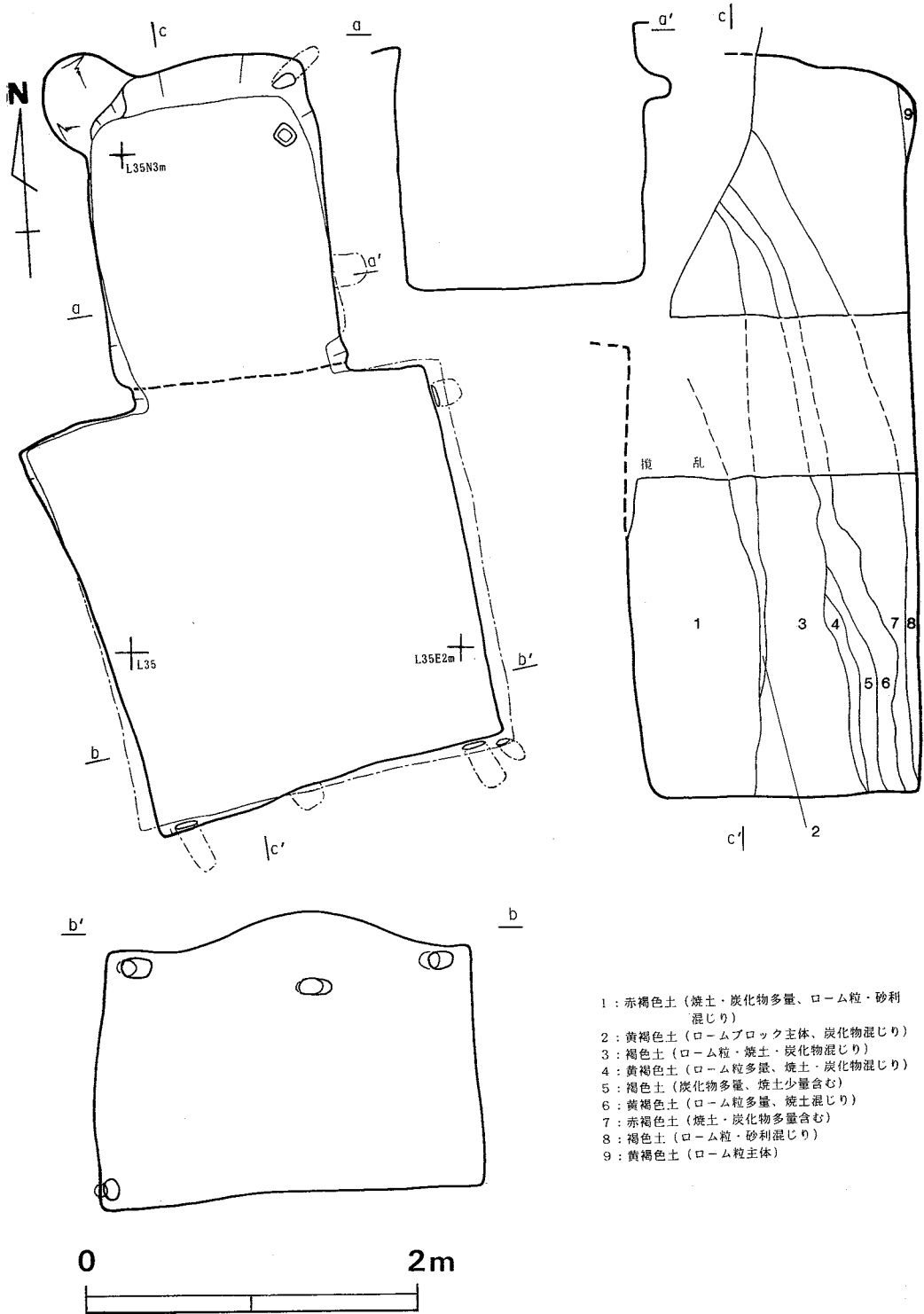
H27-6 H27区にある大部分を破壊された地下式土坑である。南北1.9m、底の標高は11.5mである(III-071図)。上部の構造は破壊されていて不明。埋土はローム混じりの茶~暗褐色土である。埋土下部には鉄分が浸透しているところがある。遺物は「かわらけ」が少量ある。(宮田安志)

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構

概況

この地点の K ラインより北、32ラインより西には明治年間に建てられた建物の地下室があったところであり、完全に破壊されていた。32ラインより東でも破壊は深部にまで及んでおり、標高13

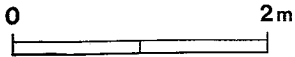
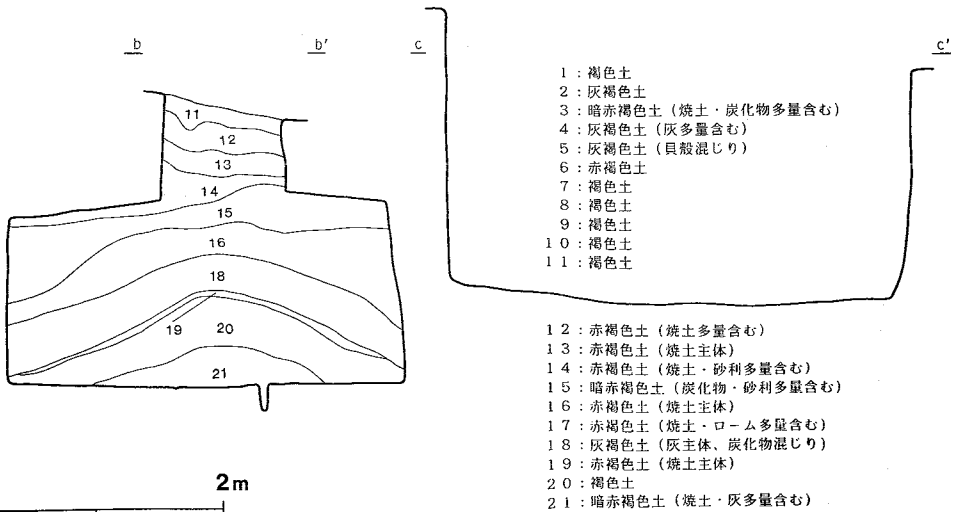
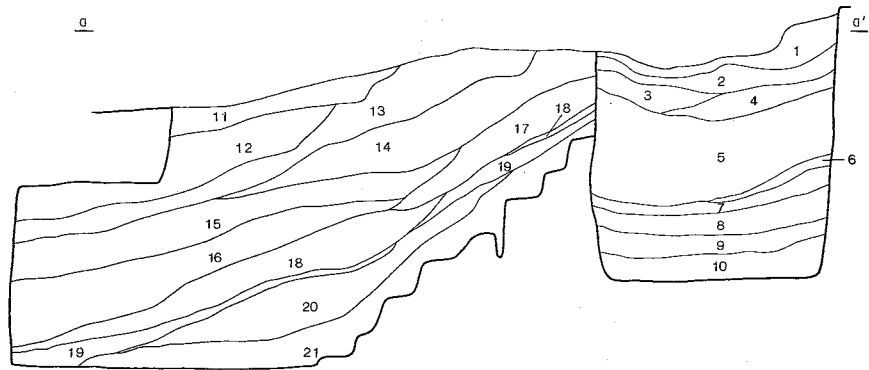
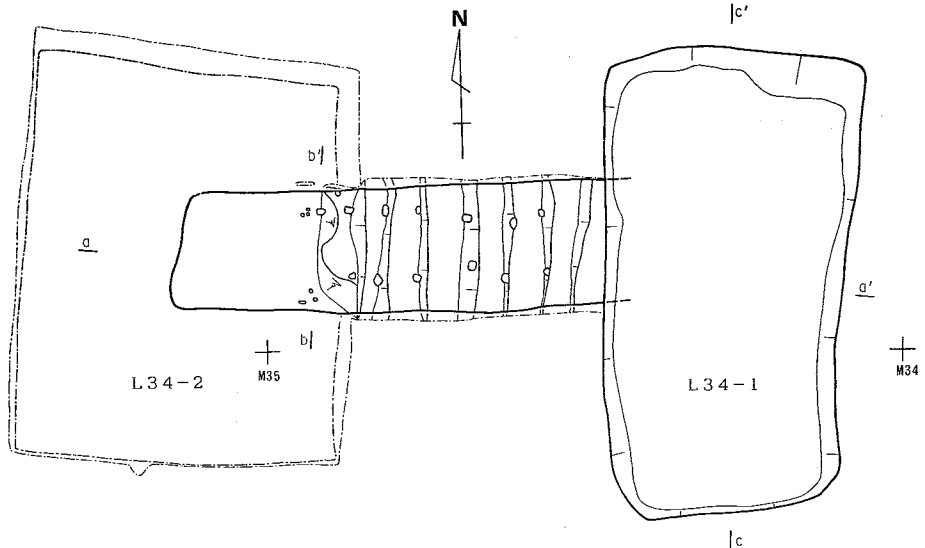
第三章 江戸時代の遺構



- 1: 赤褐色土 (焼土・炭化物多量、ローム粒・砂利混じり)
- 2: 黄褐色土 (ロームブロック主体、炭化物混じり)
- 3: 褐色土 (ローム粒・焼土・炭化物混じり)
- 4: 黄褐色土 (ローム粒多量、焼土・炭化物混じり)
- 5: 褐色土 (炭化物多量、焼土少量含む)
- 6: 黄褐色土 (ローム粒多量、焼土混じり)
- 7: 赤褐色土 (焼土・炭化物多量含む)
- 8: 褐色土 (ローム粒・砂利混じり)
- 9: 黄褐色土 (ローム粒主体)

III-072図 K34-1実測図(a-a'・b-b':13.8m, c-c':13.3m)

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構



III-073図 L34-1・2実測図 (土層図の水準:14.5m)

### 第III章 江戸時代の遺構

m付近でようやく遺構の有無を確認することができた。また L・M ラインの中間から南はやはり破壊が深く、全く遺構を確認することができなかった。K34・L34 区付近は破壊が比較的浅くいわば島のような形で遺構が残っていた。L32 区もこの延長であるが、遺構が残っている部分はごくわずかであった。深いところに残っていた遺構を拾い上げる調査であった。しかし、他の地点とほぼ同じ高さで遺構が確認できた L34区にあっては遺構の数は少なく、そもそも遺構の少ないところではないかと考えている。破壊が深くまで入っているため、遺構の確認はとびとびであり、全体的な構造を知ることはできないが、大型の地下式土坑もあり、また部分的な確認に留まるが、建物の基礎であったと考えられる遺構も出現している。遺構はまばらであるとはいえ、居住区として利用されていたことのあった場所であることは確実である。 (藤本 強)

#### 遺構各説

**K34-1** K・L34区にある大型の地下式土坑で、上部はかなり破壊を受けている。上部が破壊されているため、全容はかならずしも明らかではないが、入口は南北1.9m、東西1.4mで、その南に南北2.4m、東西2.3mの地下室がある(III-072図)。底は平らであるが北端がわずかにくぼむ。底から天井まではもっとも高いところで1.7m、底、壁は平坦であるが、天井は南北の方向が中央で高くなっている。地下室と入口の間はやや狭くなっており、底は両者とも同じである。地下室の南壁に上のほうに3、下の南東隅に1、東壁の上方に1、入口の壁に2、底に1の小孔がある。埋土は入口から地下室に流れ込むような堆積をしており、焼土や炭化物を多く含む褐色土からなっている。18世紀前半の陶磁器を初めとする多量の遺物が出土している。地下式土坑が廃棄に際し、火事の後始末に利用されたものであろう。壁などにある小孔のうち南壁の上の3、東壁の上の2は灯火具の置場に関するものかと思われる。 (小川 望)

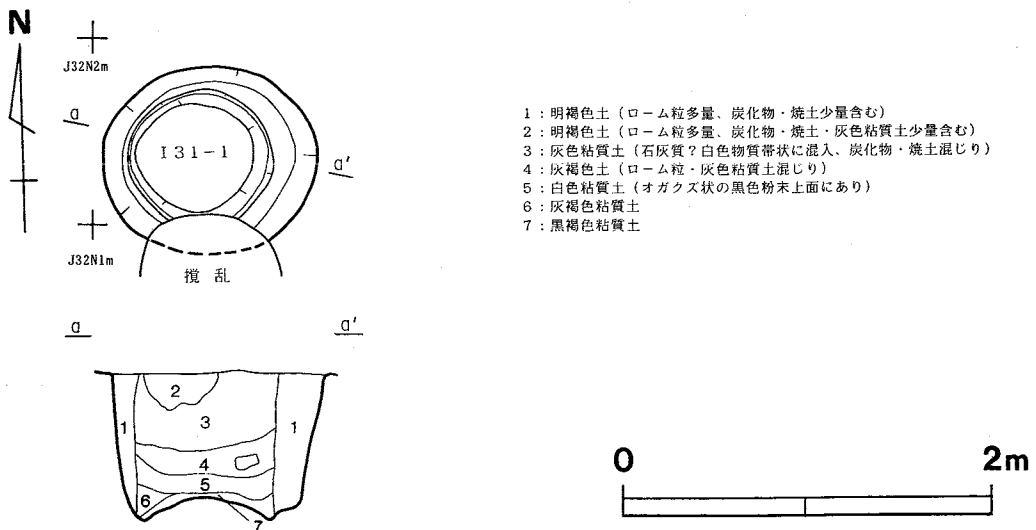
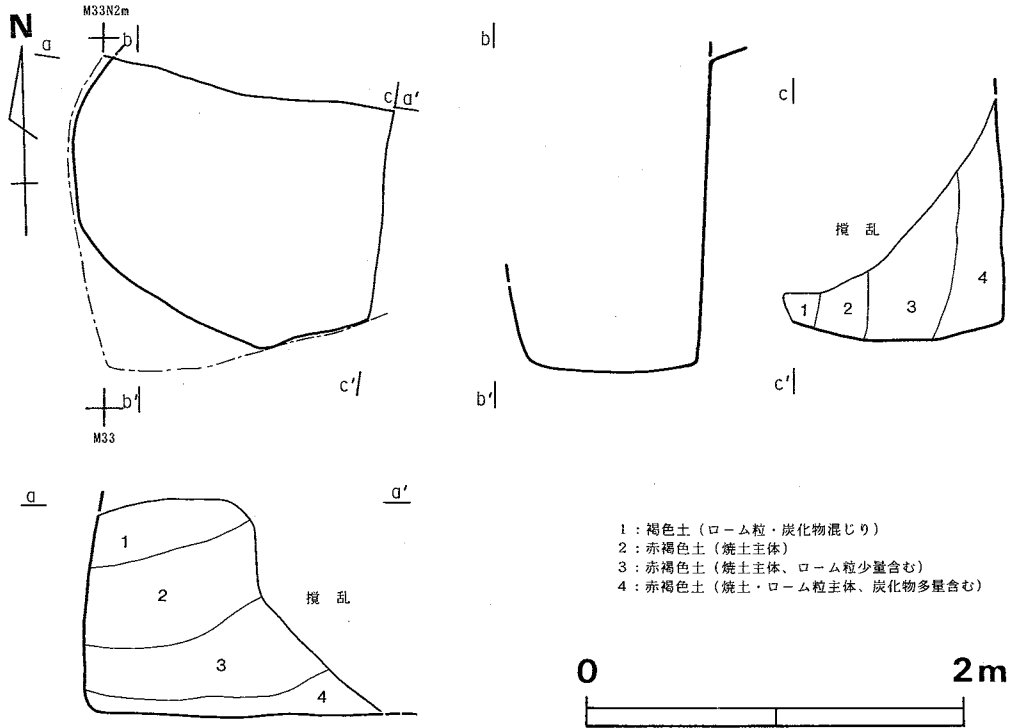
**L34-1** L・M34区にまたがって位置し、L34-2を切っている。南北3.6m、東西1.8m、深さ2mの大型の土坑である(III-073図)。壁はほぼ垂直であり底は平坦である。作りは粗い。埋土は焼土や炭化物・灰の多量に混じる層を含み、褐色土が主体になっている。18世紀前半の磁器・「かわらけ」などの小片が多量に出土している。貝殻・鹿角などの動物遺存体もある。性格は不明であるが、最終的にはゴミ穴として利用されたものであろう。 (宮田安志)

**L34-2** 階段と地下室をもつ地下式土坑である。東はL34-1に切られ、全長はわからないが、現存4.8m。階段一ないし二段分が破壊されているものと考えられる。地下室は東西2.7m、南北3.3mで、天井の高さは1.5mである(III-073図)。階段は八段が確認されており、幅1mほどで、段の高さは30cmほど、幅は25cmくらいである。各段の下に50cmくらいの間隔で一辺5cm強の小孔が2ずつある。土留め用の木材をささえる杭の孔であろう。階段は最後の段が地下室に入っている。入口は調査時には地下室の上部に1.5mほど入っていた。入口がどのようになっていたかは不明である。南壁の天井から20cmほど下に15cm、深さ10cmの半円形のくぼみがある。灯火具用のものだろうか。埋土は焼土を含む赤褐色土が主体で、入口から四周に流れたような堆積を見せている。一拳に投げ込んだのではなくやや時間をかけ埋めたものであろう。遺物は18世紀前半の磁器・「かわらけ」が中心で、かなりの量見られる。最終的には火事の後始末で埋められている。 (宮田安志)

**L32-1** この土坑に関しては既にその概要を報告している(東京大学遺跡調査室病院班・山崎一

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構

雄 1987)。L32区の南西にあり、大部分を近代以降の建物の基礎によって破壊されており、南西隅の四分一以下の部分しか残っていなかった。南壁は現存1.4m、西壁は現存1.6mほどである(III-074図)。北と東の壁がないので全体は不明だが、それぞれの壁がやや膨らむ一辺3m前後の方形の室部と思われる。底はロームであり平坦である。壁はやや膨らみながら垂直に立ち上がる。天井は底の

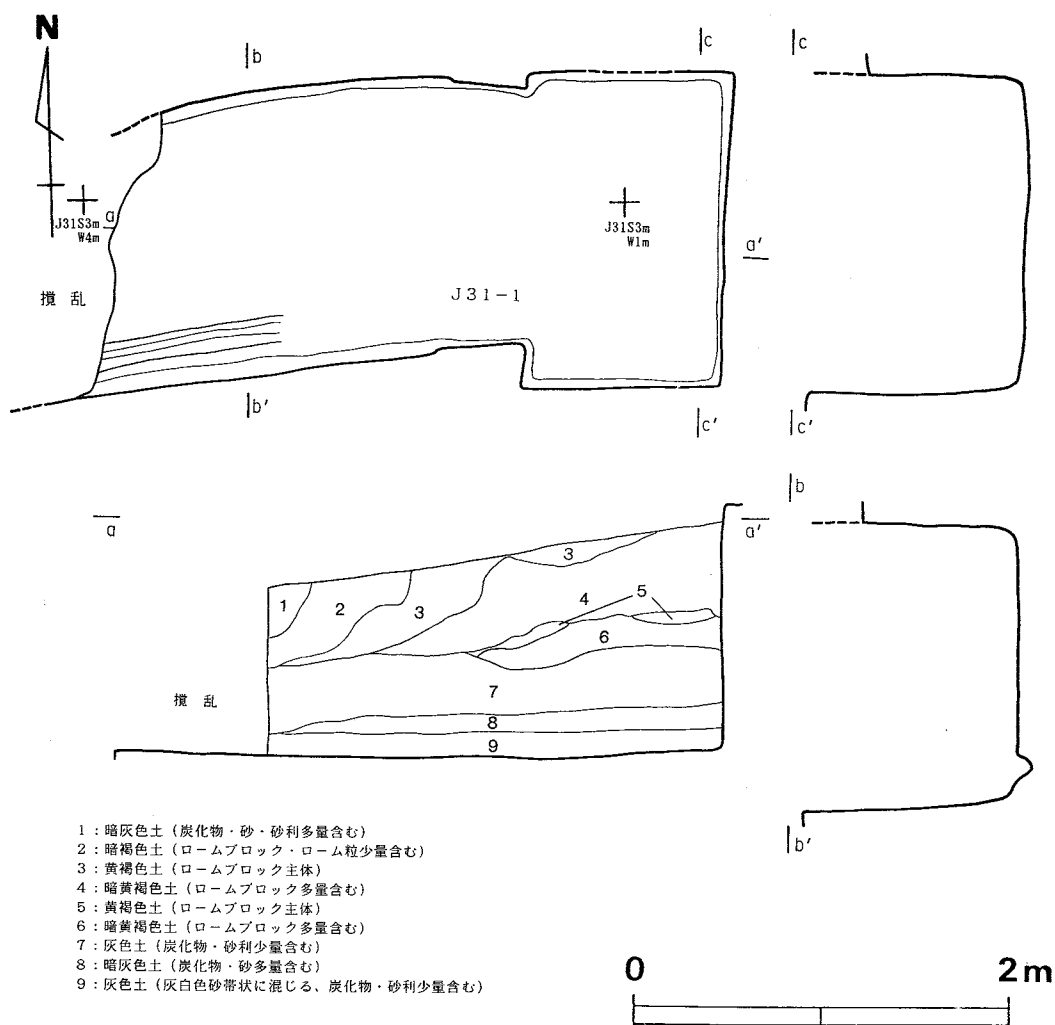




### 第三章 江戸時代の遺構

上0.9m~1mと低く、ドーム状にあがる。壁・天井とも平滑な仕上げである。入口は遺存しないが、筒状であったと思われる。その他付属施設は不明である。埋土は色調が若干異なるが焼土が主体で中央が高くなる堆積を示す。この遺構の場合、土よりも遺物が圧倒的に多く、遺物の間に土が少しあるといってもよい。遺物は2・3層に集中していた。ほとんどが火災によって小片となった17世紀代の磁器片で、その他の遺物は少数である。この土坑は17世紀に作られた可能性の高い袋状を呈する地下式土坑であるが、人為的にしかも短時間に埋められたと考えられる。堆積状況から火災で破壊された地下式土坑に火災の後始末の磁器片を主にした残土を一括して投棄したものであろう。火災としては天和二(1682)年12月28日の火災の可能性が高い。(宮田安志)

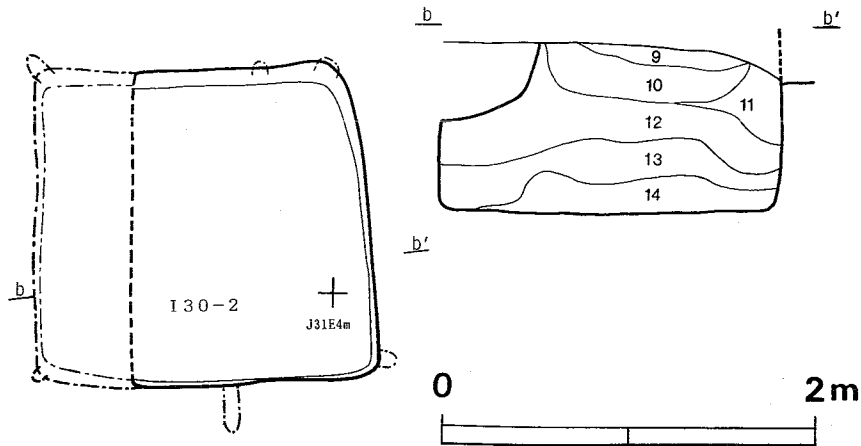
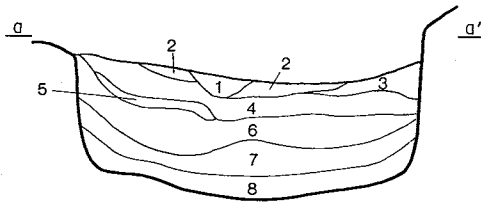
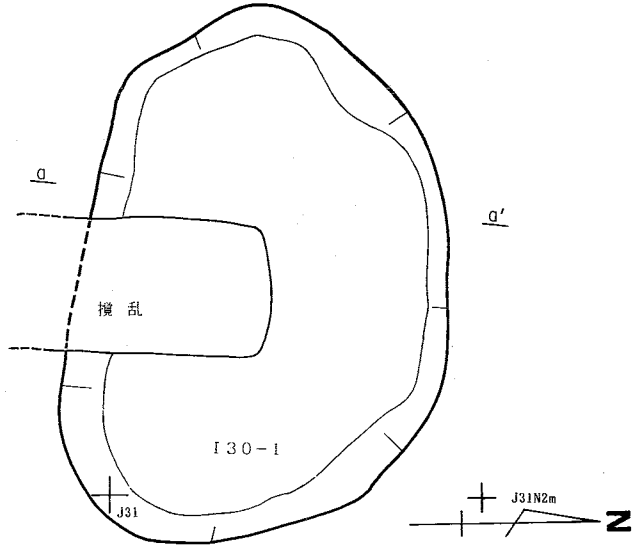
I31-1 I31区にある上部を破壊されている遺構である。南側は建物の基礎によってなくなっている。東西1.2m、南北1mの掘り方のなかに径75cmの桶が埋め込まれている(III-075図)。確認された深さは80cmほどである。桶と掘り方の間にはロームを多量に含む明褐色土が詰められている。



III-076図 J31-1実測図(土層図の水準:13.1m)

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構

- 1: 黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒主体、炭化物・焼土少量含む)
- 2: 灰白色粘質土 (ローム粒・炭化物・砂利混じり)
- 3: 暗褐色土 (ローム粒・砂利・砂多量含む)
- 4: 暗灰色粘質土 (炭化物・貝殻・砂利帯状に混じる)
- 5: 暗灰褐色土 (粘質土主体、ローム粒・炭化物混じり)
- 6: 暗灰色粘質土 (炭化物・砂利多量含む)
- 7: 暗黄灰色土 (灰色粘質土主体、ロームブロック・ローム粒・炭化物・砂利混じり)
- 8: 暗灰色粘質土
- 9: 茶褐色土 (ローム粒・焼土・炭化物混じり)
- 10: 灰色土 (ローム粒・焼土・炭化物少量含む)
- 11: 灰褐色砂質土 (砂利多量、炭化物少量含む)
- 12: 灰色土 (ローム粒多量、焼土・炭化物少量含む)
- 13: 暗灰色土 (ローム粒・炭化物少量含む)
- 14: 茶褐色土 (ローム粒多量、炭化物少量含む)



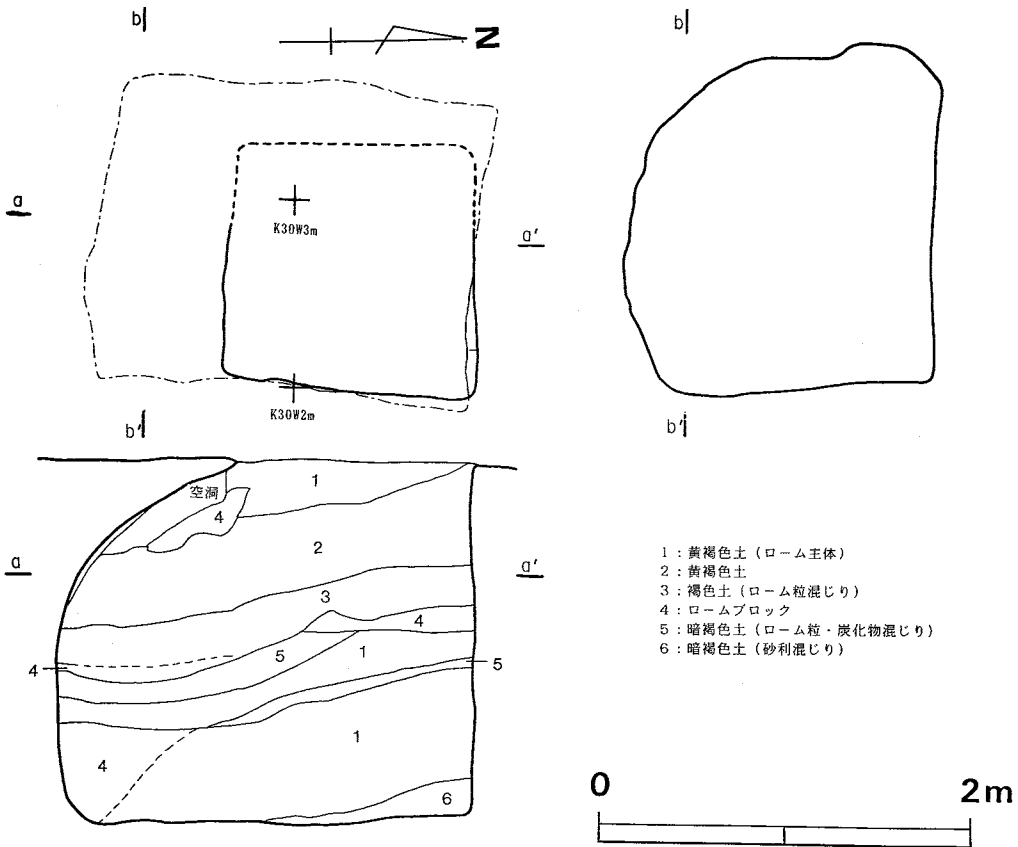
III-077図 I 30-1・2実測図 (土層図の水準:12.7m)

### 第三章 江戸時代の遺構

埋土は灰～白色粘質土が主であり、層と層の間には薄い茶褐色土が見られた。最下部の黒褐色粘質土は上部から有機質の成分がしみだし変質したように見受けられた。17世紀後半の陶磁器など若干の遺物がある。形と埋土から厠の下穴と考えるのが妥当であろう。(松下理恵)

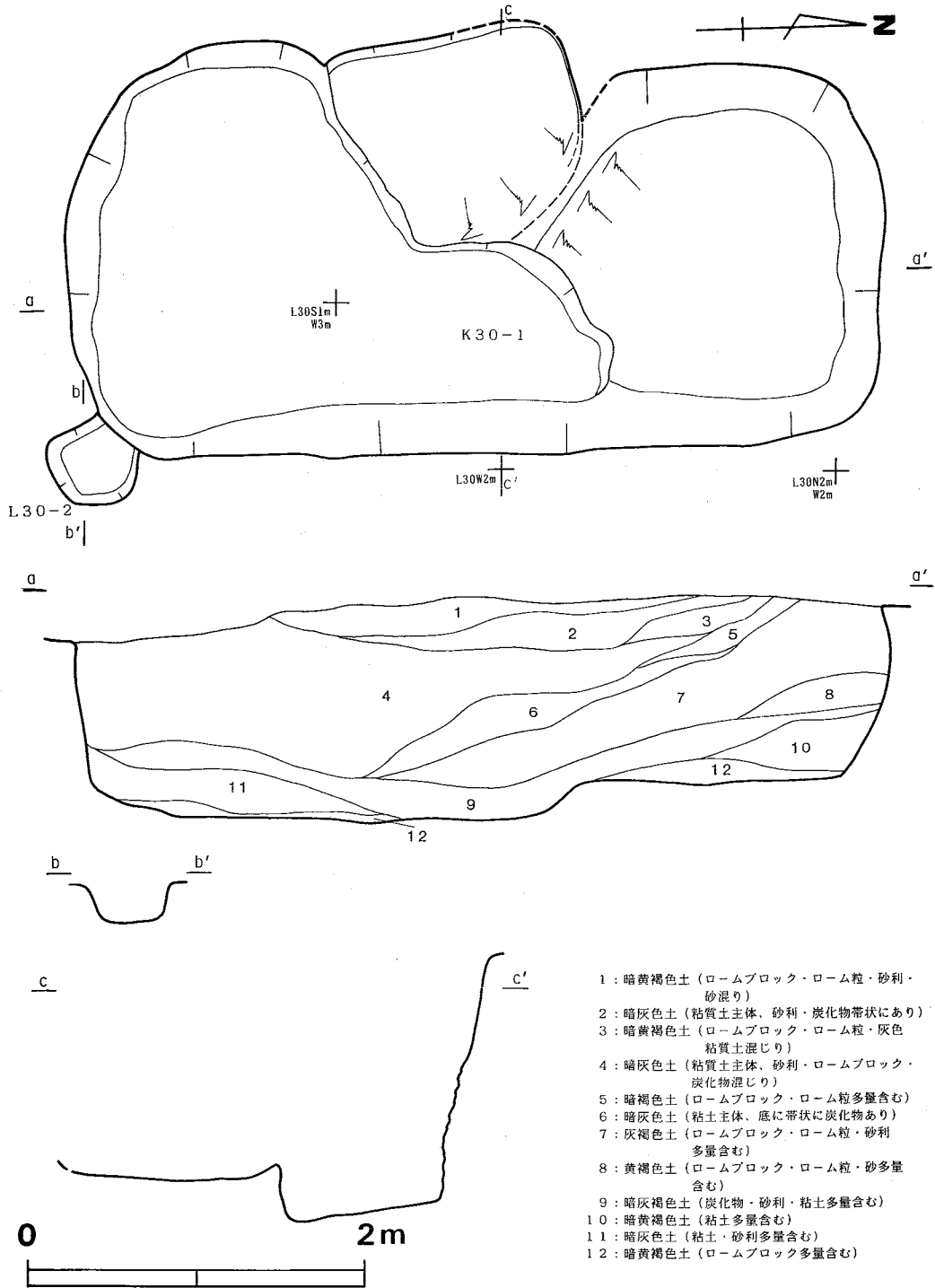
**J31-1** J31区にあるわずかに破壊を免れた特殊な土坑である。上部はかなり壊されたものであろう。南北1.7m, 東西1.1mの長方形の部分とその西にある南北1.5m, 東西の残っている部分2.5mの二つの部分からなっている(III-076図)。深さは深いところで1.4mほどである。西の部分には南壁際に幅20cm, 深さ10cmほどの溝がある。底は平らで、壁は垂直である。埋土は下の水平に堆積する炭化物を含む灰色の土を主にするものとその上の西下りのロームを主にする褐色土からなっている。遺物は上半部を中心にして、「かわらけ」・陶磁器などが出土している。時期は17世紀の中ごろ以降の遺物が主体であるところからおおよその時期を知ることができるが、性格は明らかではない。地下式土坑に類する「あなぐら」状の遺構の上半がなくなったものと考えられる。(小川 望)

**I30-1** I30区の西端にあり、遺構の大部分は I31区にある大型の土坑である。周辺は建物の基礎が深くまで入っていて破壊されている。この遺構も中央は底まで破壊されているし、上部はかなりなくなっているものと考えられる。東西2.9m, 南北2mの不整な楕円形であり、深さは0.9mほどである(III-077図)。底の中央はくぼんでおり、壁は垂直に近い。底、壁ともに凹凸が激しい。埋土は



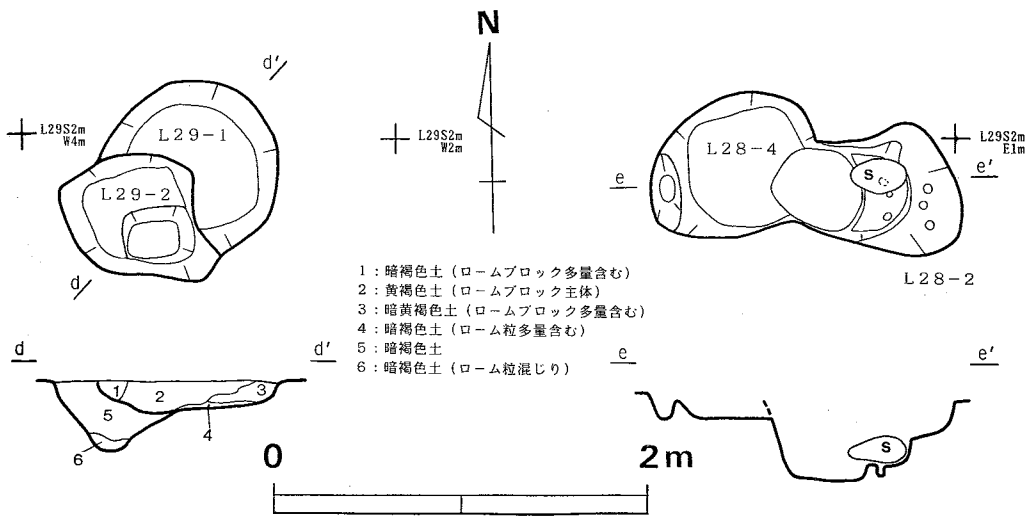
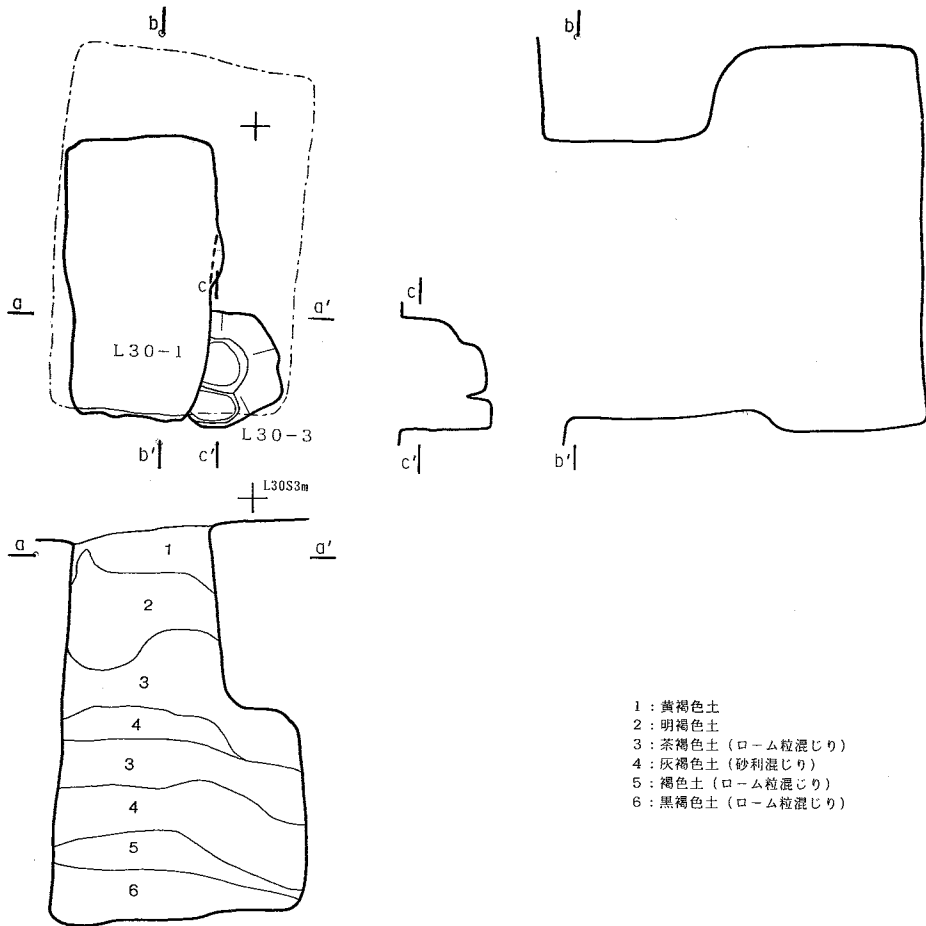
III-078図 J30-1実測図 (土層図の水準:13.0m)

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構



III-079図 K30-1, L30-2実測図 (土層図の水準:13.4m)

第三章 江戸時代の遺構



III-080図 L28-2・L29-1・L29-2・L30-1・3実測図 (土層図の水準:13.0m, d-d'・e-e':13.6m)

#### 4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構

ローム混じりの暗灰褐色土を主にし、遺物は17世紀後半を中心にするものが主体である。遺構の性格は明らかではないが、最終的にゴミ穴として利用されたとも思われる。(小川 望)

I30-2 I・J30区にある地下式土坑である。上部は破壊されていると思われる。底は1.5m~1.7mの方形であり、入口は破壊されているため形、規模は明らかではないが、確認できているところでは、1.2mの幅である(III-077図)。天井は底から60cmほどで低い。四隅と東西の辺のなかほどに斜めに入る杭穴が6ある。深さは東西辺のものが30cmほど、他は10cmほどで、東西辺のものは底から50cmほど上、四隅のものは30~35cmほど上にある。埋土は入口の下が盛り上がる形の堆積をみせている。ロームを含むことの多い灰褐色の土が主である。遺物はない。(松下理恵)

J30-1 Kラインのやや南は大型の建物の基礎が深く入っていた。それに破壊されて辛うじて残っていた地下式土坑である。K・J30区にまたがっている。入口は西側がはっきりしないが、壁の状況から1.3mの方形であったものと推測できる。底は南と西に大きく広がり、南北2.1m、東西1.6m強ある(III-078図)。深さは現存1.9mでしかないが、上部は深くまで近代の建物による破壊が及んでおり本来の深さは不明である。埋土はロームが主体となる黄褐色土がほとんどである。入口から南に向かって低くなるような堆積をしている。壁・底・天井とも仕上げはきわめて悪く、実際に使用したのか疑いたくなるほどである。遺物は18世紀前半のものであるが少ない。(藤本 強)

K30-1 K・L30区にある大型の土坑である(III-079図)。南東にあるL30-2を切っている。ここでも建物の基礎は深く入っている。南北4.9m、東西2.5mの楕円形もしくは隅丸の長方形で、深さは1.6mほどが確認できる。底は大きく三つの面からなり、北が高く、南および中央の西にある面は一段低い。壁はほぼ垂直で一つの遺構と考えられる。壁と底は凹凸がひどく、工具の跡かと思われるものが各所にある。埋土は上からローム混じりの暗黄褐色土、粘質土を含む暗灰褐色土、底のすぐ上に暗黄褐色土となる。遺物は17世紀末から18世紀初頭とされる陶磁器が多量にある。そのほかの遺物は少ない。ゴミ穴として最終的に利用されたのであろう。(小川 望)

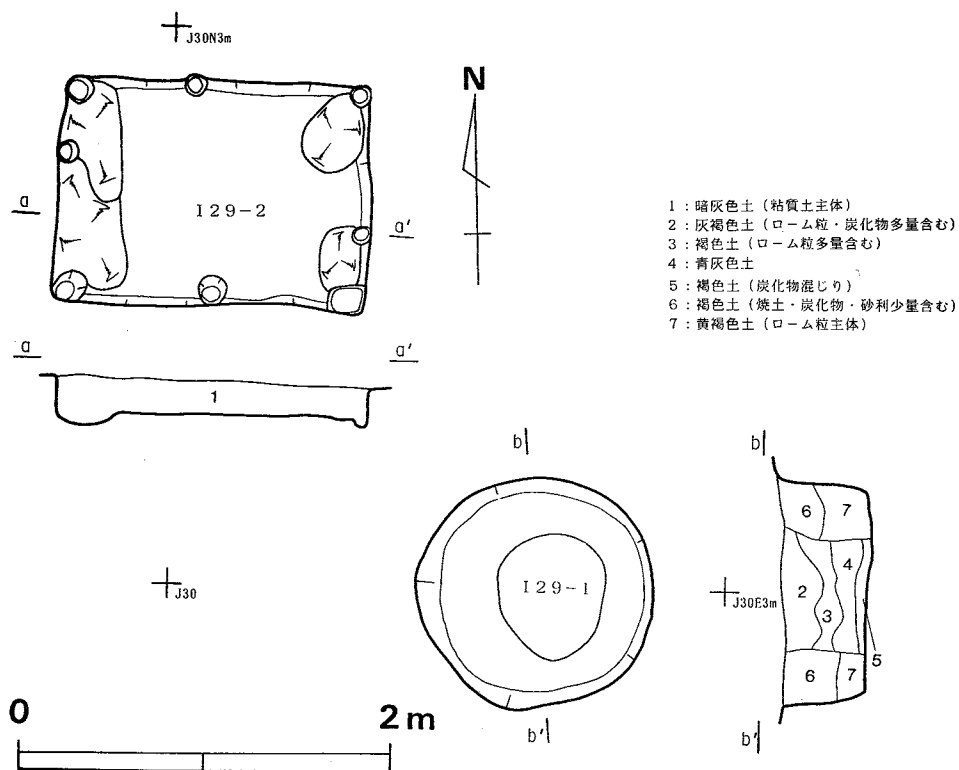
L30-1 ここも近代の建物などによる破壊が深くまで入っていて、安定した遺構の確認面は、標高13.0m近くになってようやく現われる。入口は1.5m×0.8mの長方形であり、東と北に底でかなり広がる。底は2.0m×1.3mほどである(III-080図)。埋土はローム混じりの明~黒褐色土である。入口から隅にむかって低くなる堆積をしているが、厚さはほぼ一定しており、意図的に埋めたことが推定できる。L30-3を切っている。17世紀後半の遺物が若干量ある。(藤本 強)

L30-2・3 2はK30-1の、3はL30-1の南東の隅にあり、それぞれに切られる小さな土坑である(III-079・080図)。埋土はローム混じりの黒色土か黒褐色土である。遺物はない。(松下理恵)

I29-1 I・J29区の境界にある土坑である。径1.2m強の円形であり、その中央に径0.6mの木質のものを置いていたものと考えられる(III-081図)。掘り方と木質があったと思われる間には上部に砂利などを含む褐色土、下部にローム主体の詰め土をしている。内部の埋土は上部はローム混じりの褐色土が主体であるが、下部は粘性の強い青灰色土である。この土は厠としている遺構に特有の土であり、本土坑も厠の下穴と思われる。遺物はわずかである。(宮田安志)

I29-2 I29-30区にある東西1.7m、南北1.2mの土坑である(III-081図)。上部は大きく破壊されている。深さは20cmしか残っていなかった。底の東西の壁際には5cmほどの掘り込みがあり、四

第III章 江戸時代の遺構



III-081図 I29-1・2実測図 (土層図の水準:12.5m)

隅とその中間に 8の杭穴がある。径10~15cm, 深さ10~15cmである。埋土は粘質土主体の暗灰褐色土である。遺物はない。杭穴は壁の板貼りを支えるためのものであろう。(小川 望)

I29-3 H29-4のなかにある(III-051図)。0.7mの掘り方のなかには径0.6mの桶を入れている。桶と掘り方の間は狭いが、ここにはロームを多量に含む茶褐色土が詰められている。桶の内部には灰~灰褐色土がある。桶は図の 5層の下までであり、7・8層は北側が深くなっているところのみあるものである。この遺構の下部の構造なのか、より古い別の遺構のものなのかははっきりと確認することができなかった。別の遺構だとすると H29-4に続き、I29-3より古いことになるが、H29-4の北側にあるくぼみとの関連が問題になろう。埋土は上部と異なり、ロームを含む茶褐色土である。遺物はない。少なくとも上部は形と埋土から厠の下穴とすることができよう。(松下理恵)

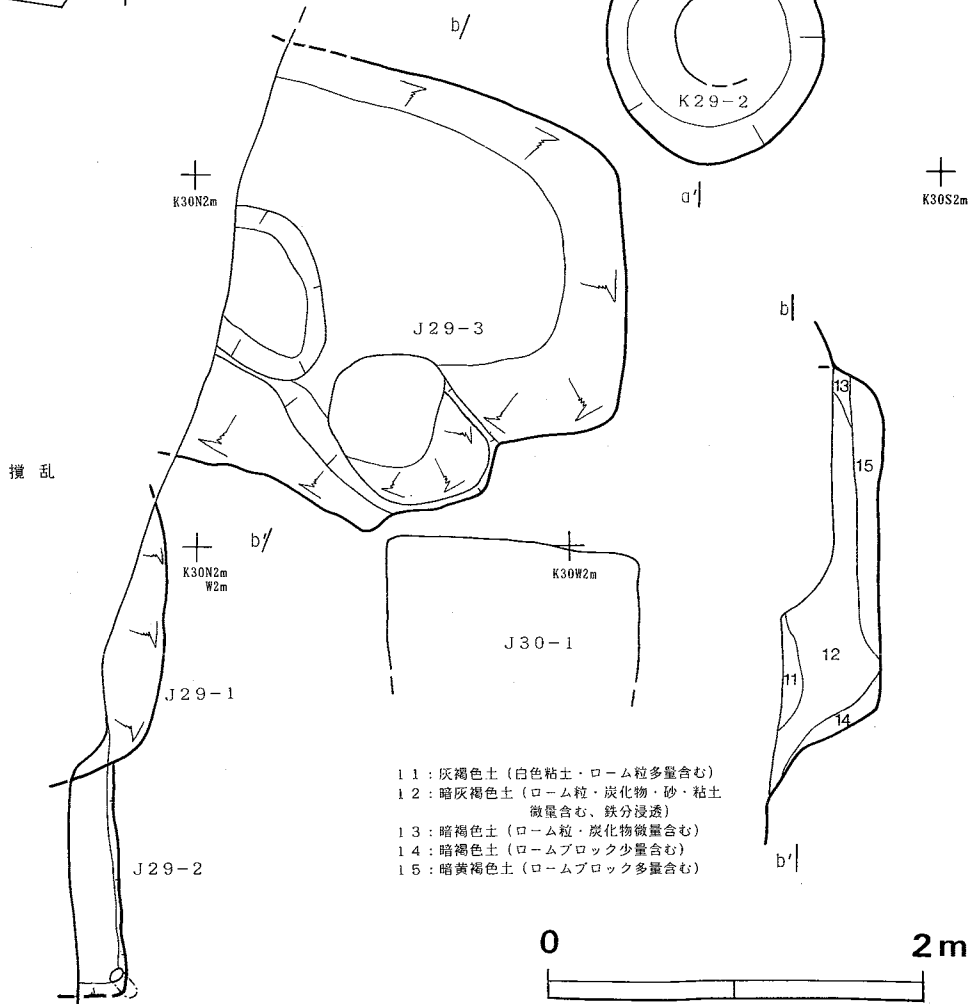
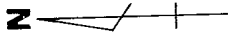
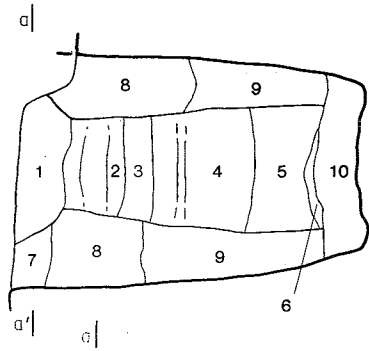
J29-1・2・3 J29・30区にある土坑であるが、北側と上部を大きく破壊され、3はかなりの部分が残っているが、1・2はわずかに土坑の南端があるだけで、ほとんど内容は不明である(III-082図)。深さは 1が50cm,2が60cm,3が50cmである。埋土はいずれも暗灰褐色ないしは暗褐色土であり、焼土・砂利などを含んでいる。3も凹凸のひどい土坑で、大きさはかなりのものであるが、性格は不明である。3から17世紀中頃の若干の遺物があるが、他はほとんどみられない。(小川 望)

K29-1 この地点も破壊は深部にまで入っていて、漸移層になって安定した面が得られる。この遺構は漸移層の上面の清掃中に確認されたものである。当初は K27-1・L27-1のような建築に係る遺構かと考えたが、最上面にある砂利とロームの混じった層は十分に固められておらず、深くなっ

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27 区の遺構

- 1: 褐色土 (ローム粒・灰・焼土微量含む)
- 2: 暗褐色土 (ローム粒・砂少量含む)
- 3: 褐色土 (炭化物微量含む)
- 4: 褐色土 (ローム粒・焼土・炭化物微量含む)
- 5: 褐色土 (ローム粒・炭化物・焼土混じり)

- 6: 暗褐色土 (灰白色物質粒混じり)
- 7: 暗褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 8: 暗黄褐色土 (ロームブロック主体)
- 9: 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 10: 黄褐色土 (ロームブロック主体)

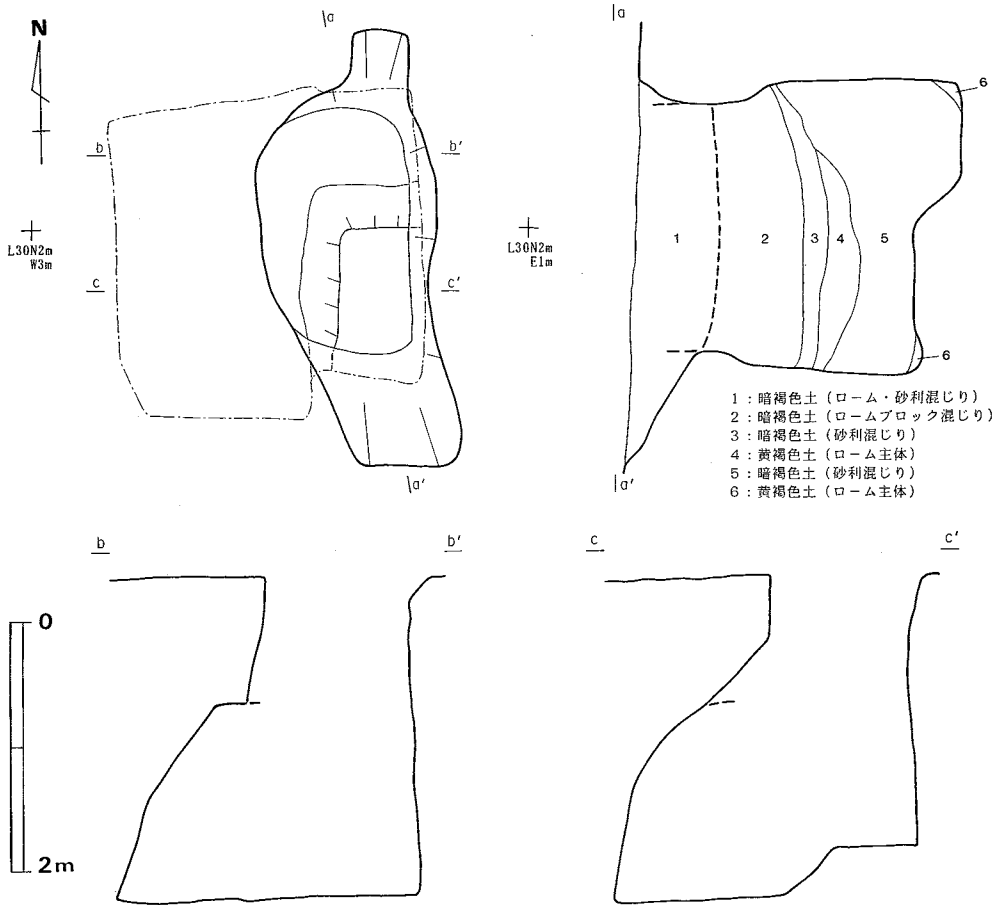


- 11: 灰褐色土 (白色粘土・ローム粒多量含む)
- 12: 暗灰褐色土 (ローム粒・炭化物・砂・粘土微量含む、鉄分浸透)
- 13: 暗褐色土 (ローム粒・炭化物微量含む)
- 14: 暗褐色土 (ロームブロック少量含む)
- 15: 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含む)

III-082図 J29-1~3, K29-2実測図 (土層図の水準:13.5m)



### 第III章 江戸時代の遺構

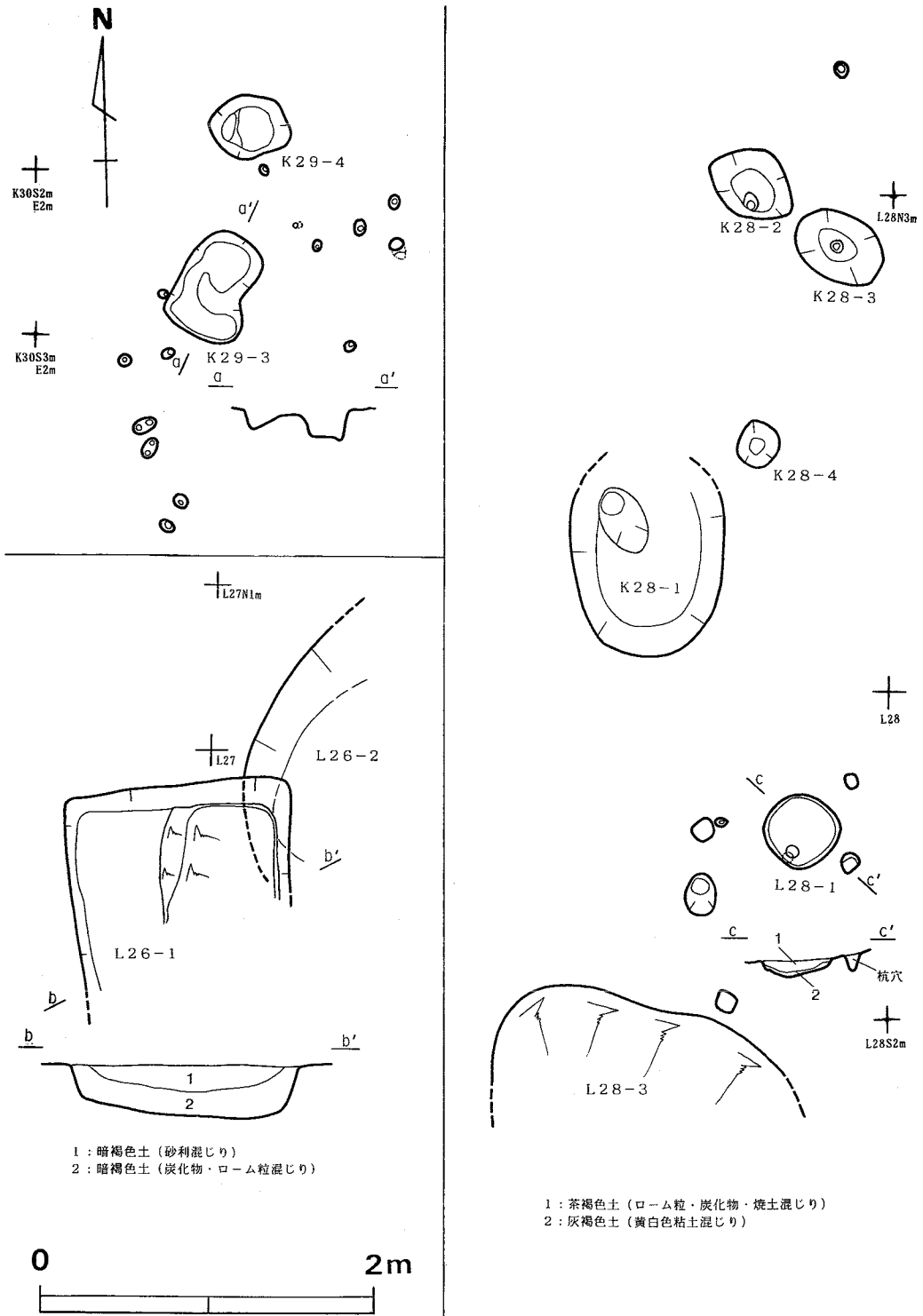


III-083図 K29-1実測図 (土層図の水準:13.8m)

ていった。その下にロームブロックを混じた暗褐色土が現われ、ロームがオーバーハングする状況が出現し、地下式土坑であることが明らかになった。現存する入口は南北2.0m、東西1.2mの隅丸方形もしくは楕円形となっている。本来はより小さい長方形であったものであろうが、壁面の状況から考えると本来の規模からそう大きく隔たっているものでもないようである。底は西に大きく広がり、東西2.4m、南北2.6mになる(III-083図)。このうち天井があるのは東西1.7m、南北2.3mの部分であり、西壁は緩やかな裾広がりになっている。底には、入口の南よりに1.2m×0.7m、高さ0.4mの段がある。この段の裾は垂直ではなく、裾広がりである。天井はかなり崩落している。埋土は中央が低いいわゆるレンズ状の堆積をしている。どのような状況でこうした堆積をするのかは不明である。深さは確認面から2.6mである。全体の印象として、作りは粗雑であり完成されたものとは考え難いものがある。当初発見した砂利混じりの埋土を別の遺構とすることも考えたが、西の線は入口と完全に一致し、他の部分も入口とスムーズにつながる。自然にあるいは意図的に入口の周辺を崩落させ、そこに砂利を詰めたのではないであろうか。遺物は17世紀後半から18世紀前半にかけてのものであり、かなりの量みられる。

(藤本 強)

4 I 31~27, J 31~27, K 34~27, L 34~27 区の遺構



III-084図 K28-1~4, K29-3-4, L26-1-2, L28-1-3 実測図 (a-a':13.4m, b-b':13.5m, c-c':13.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

**K29-2** K29区に位置する。上部は破壊されているものと考えられる。上が1.4m, 下が0.9mの円形の掘り方のなかに、上が50cm, 下が65cmの径の桶を埋め込んでいる(III-082図)。掘り方の底には黄褐色土を20cmの厚さで敷き、その上に桶を置いている。掘り方と桶の間にはロームを多く含む暗黄褐色土を詰めている。桶の内部は褐色土が主になっているが、底近くには灰白色のものが入った暗褐色土がある。遺物はほとんどない。形と埋土から厠の下穴と考えられる。(松下理恵)

**K29-3・4** K29区にある不整形の小土坑である(III-084図)。暗褐色土を埋土にしている。周辺には多数の径5cm, 深さ15cm内外の杭穴がある。相互の位置と埋土から考えると植栽に関する土坑と支えの杭穴の可能性が強い。遺物はない。(萩尾昌枝)

**L29-1・2** L29区にあり、切りあい関係のある土坑と考えたが、同一の遺構である可能性もある(III-080図)。埋土は礎石などの掘り方にみられるものと類似する。東にあるL28-2・4も類似した遺構であり、相互の距離は3.8mある。礎石に関するものであった可能性がある。(萩尾昌枝)

**I28-1・2・3** I28区にある小土坑である(III-070図)。いわゆる漸移層の上面で発見している。ローム混じりの黄～暗褐色土を埋土にしている。遺物はない。確認面からみて江戸時代のなかでは比較的古いものではあろうが、時期・性格ともに不明である。(小川 望)

**K28-1・2・3・4, L28-1** K・L28区にある小土坑である(III-084図)。上部を破壊されていて、内容はよくわからない。K28-1・2・3, L28-1には内部に杭穴がある。周辺にもかなりの数の杭穴がある。K28-1にはわずかの遺物がある。L28-1の底には灰褐色土があり、厠の下穴の可能性はあるが、他のものの性格は不明である。あるいは杭穴と関連させて植栽に関するものかとも考えられるが、はっきりしない。(松下理恵)

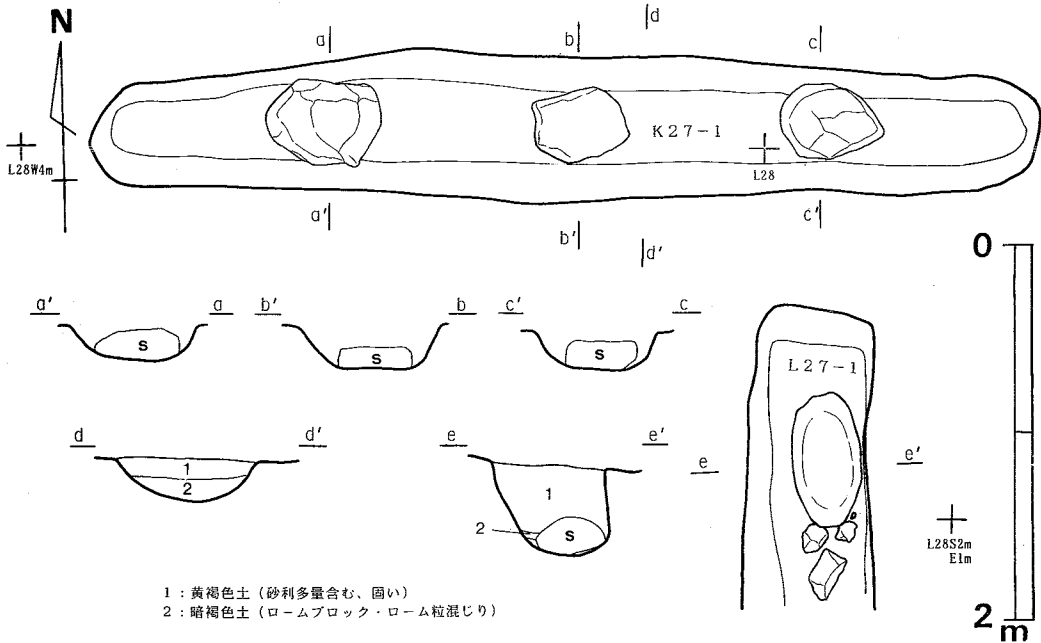
**L28-2・4** L28・29区にある切りあい関係のある土坑かと思われたが、同一の遺構である可能性がある(III-080図)。埋土は砂利・ロームを含む暗褐色土で、礎石に関すると思われる土坑によくあるものである。西にあるL29-1・2と類似しており、相互の距離は3.8mで、六尺三寸間の二間である。他にこれらに関連すると思われる遺構はないが礎石に関係した遺構であろう。(萩尾昌枝)

**L28-3** L28区にある上部をほとんど破壊された土坑である(III-084図)。大型の土坑であるが深さは30cmほどであり、埋土は茶褐色土である。遺物はない。性格は不明。(松下理恵)

**I27-1・2・3** I27区にある径30～40cm内外、深さ10cmほどの土坑である(III-070図)。黄～褐色土を埋土にしており、遺物はない。いわゆる漸移層で発見しているので、比較的古い遺構であろうが、詳細は不明である。(小川 望)

**K27-1・L27-1** 両者は組になって建築の基礎を構成していたものと思われる。L27-1の南側は建物の基礎で非常に深くまで破壊されており、その長さは確認できない。この付近はかなり深くまで破壊が及んでおり、両者の上部がどのようなものであったのかは不明である。安定した面になって初めて現われた遺構であり、下は自然堆積になっている。K27-1は東西に、L27-1は南北に長軸をもつ長方形の土坑である(III-085図)。K27-1は長さが5.1m, 幅0.6m～0.8m内外の規模をもち、深さは現存0.2m強である。深さには若干の変異があるが、上面の高さは標高13.6mとほぼ一定している。3個の50～60cm, 厚さ15cm前後の平石が置かれている。これらは1.35mはなれてあり、西端と東端のものとの中心距離は2.7mである。江戸間の一間半にあたろう。L27-1は幅0.7m弱、深さ

5 D 26・E 26・E 25・F 26・F 25・G 26・G 25 区の遺構



0.5m と深い、上面は13.6m と K27-1と一致している。0.7m×0.4m の、厚さ0.2m の円礫と小型の礫が底近くに入っている。この円礫と K27-1 の東端の平石との中心距離は1.8m であり、江戸間の一間にあたる。K27-1 と L27-1 はほぼ直角であり、埋土も同一である。埋土は石のなかほどまでの下部はロームを含む暗褐色土であり、このロームは細かい粒にさかれてよく混ぜられ突き固められている。上部は径1cm 前後の小砂利を主体にし、それに黄褐色土を混じたもので、非常に固く叩き締められている。遺物はなく。こうした構造、また石の間隔、両者が直角であることから考えると建物の基礎の根固め用の構造物と思われる。ただこの周辺は深くまで破壊が達しており、対応するものは完全になくなってしまっていて確認できなかったのは残念である。(藤本 強)

5 D26・E26・E25・F26・F25・G26・G25区の遺構

概況

本来の地形が急に東に向かって傾斜し始める部分である。F ラインの北1m より南には破壊されていないところでは下の砂利面と呼ぶ面がある。北には5号組石が東西に走り、下の砂利面の北の境になっている。この北には南北方向の4・13号組石があり、ある時期の地境になっていた可能性が高い。天和三年以降の大聖寺藩と富山藩の地境はこのあたりで、北方向に曲がるのが記録により確かめられている。天和三年以降の絵図による曲がりとは今回の調査で確認できている地境とはかならずしもピッタリと一致していない。一つにはこの曲がりとは時期によって動いていた可能性が記録によっても読み取れるし、地境になっていた可能性のある遺構も複数あり、若干東西に動いているように思われる。ここに両者が一致しない主な原因があろうと考えられる。下の砂利面の上には東にある6号組石の南北部分が作られた時に厚い盛土がなされ、この上に硬化面が構築され、若干の

### 第三章 江戸時代の遺構

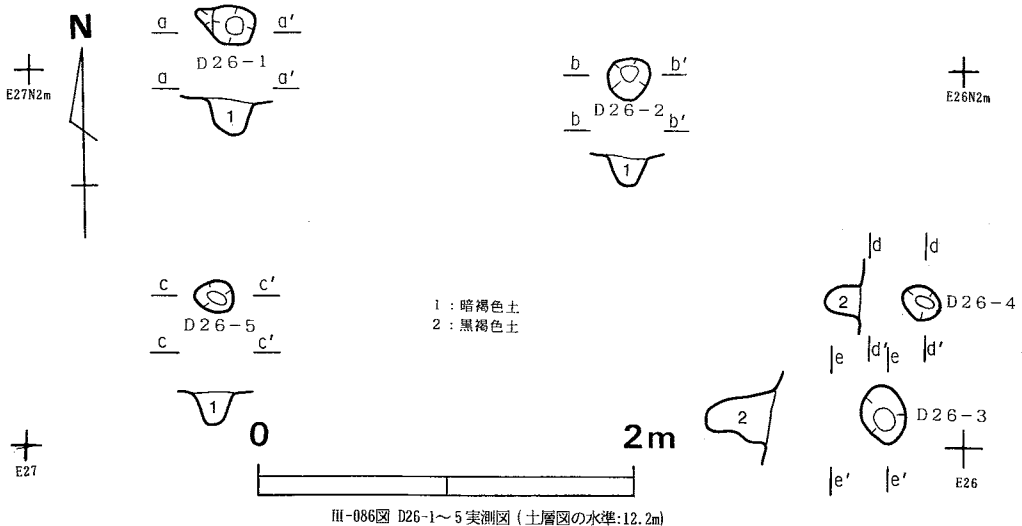
遺構が作られるが数は少ない。この部分の変遷については、6号組石の項で詳しく述べている。

破壊はかなり深いところまで及んでおり、上部はほとんどなくなっていると考えられる。下の砂利面の下と砂利面には遺構はほとんどなく、広いオープン・スペースとして利用されていたことを示している。盛土がなされたあとは排水溝と思われる E25-3などによって示されるように建物が建てられたのであろうが、確実に建物の基礎と出来る遺構はない。F25-2, F26-3・4, 3号杭穴列などなんらかの建物のあとを示すのではないかと思われる遺構もあるが、方向・距離に問題がある。天和三年以前でもそれ以降でも、常に「御殿空間」の中心であったと考えられる場所であるが、遺構・遺物の数は少ない。

この地点に多数ある遺構は杭穴・小土坑・溝状の遺構などで、大規模な遺構は稀である。遺物の数も限られており、18世紀前半までの資料が若干出土しているに過ぎない。『大聖寺藩史』所収の文化年間とされる絵図において、「御殿空間」の中心であったことを確かめることができる。しかし、19世紀以降の遺構・遺物はほとんど見られない。この時期の資料は上部が破壊されたときに散失してしまったのであろうか。確認のしようがない。江戸時代の初期にはオープン・スペースとして利用され、遺構としては確認されていないが、その後は居住部分として使われた地点ということができよう。土地利用の変化の一端を示していよう。(藤本 強)

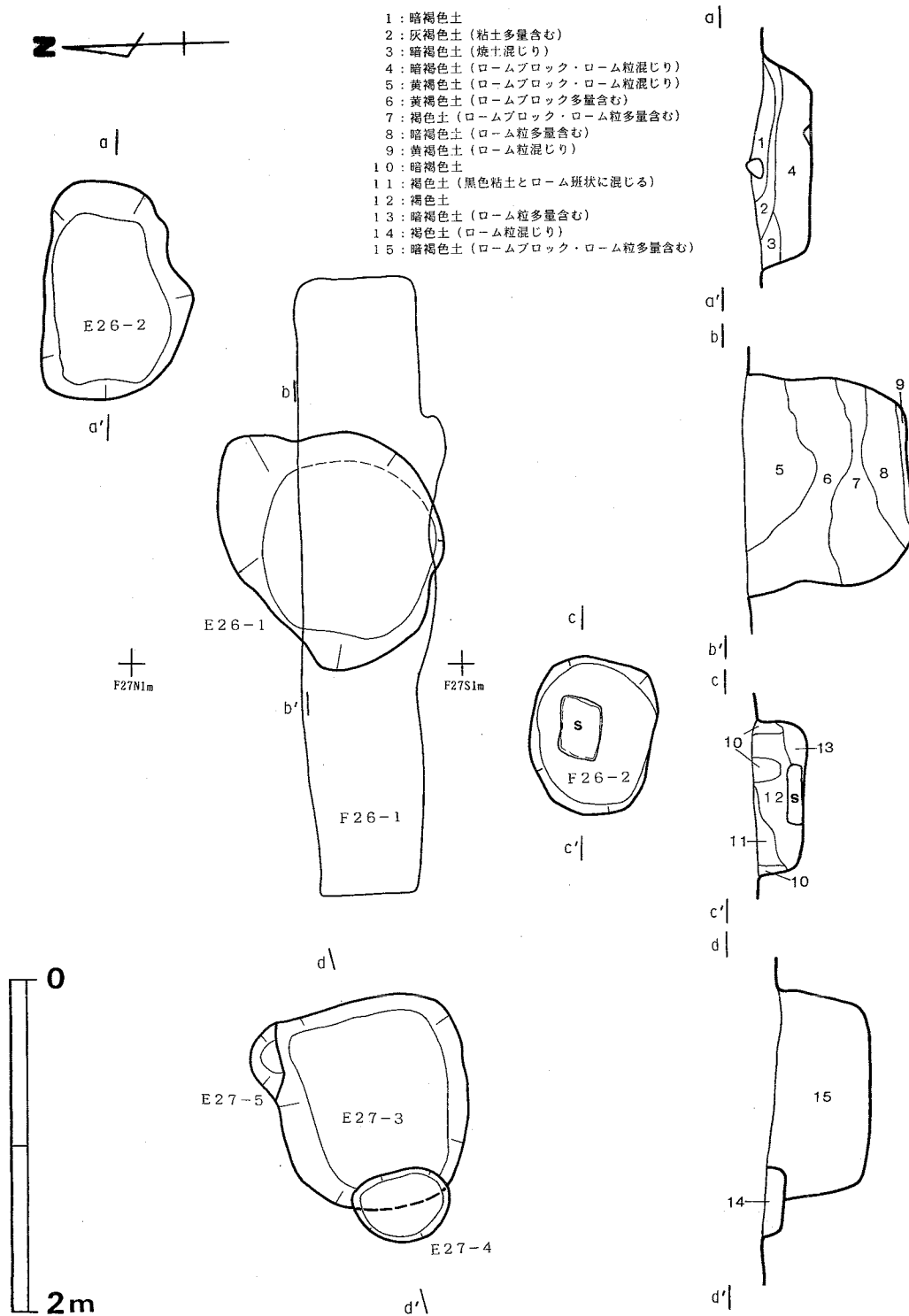
#### 遺構各説

**D26-1・2・3・4・5** D26区にある径20cm 前後、深さ20cm 内外の杭穴である(III-086図)。自然堆積の上面で確認されたものである。相互の方向・距離に規則性はない。埋土は暗～黒褐色土である。遺物の項にある D26-1出土遺物は 1周辺出土であり、17世紀前半のものである。杭穴の年代は明らかではないが、このあたりの年代ではないかと思われる。性格は不明である。(佐々木彰)



**E26-1** E・F26区にあり, F26-1に切られている土坑である。いわゆる斑状の土の上面で確認している。長軸1.6m, 短軸1.2mの楕円形で、深さは1mである(III-087図)。埋土はローム混じりの黄褐色土を主にしており、一気に埋め戻されたものと考えられる。時期・性格は不明。(成瀬晃司)

5 D 26・E 26・E 25・F 26・F 25・G 26・G 25 区の遺構

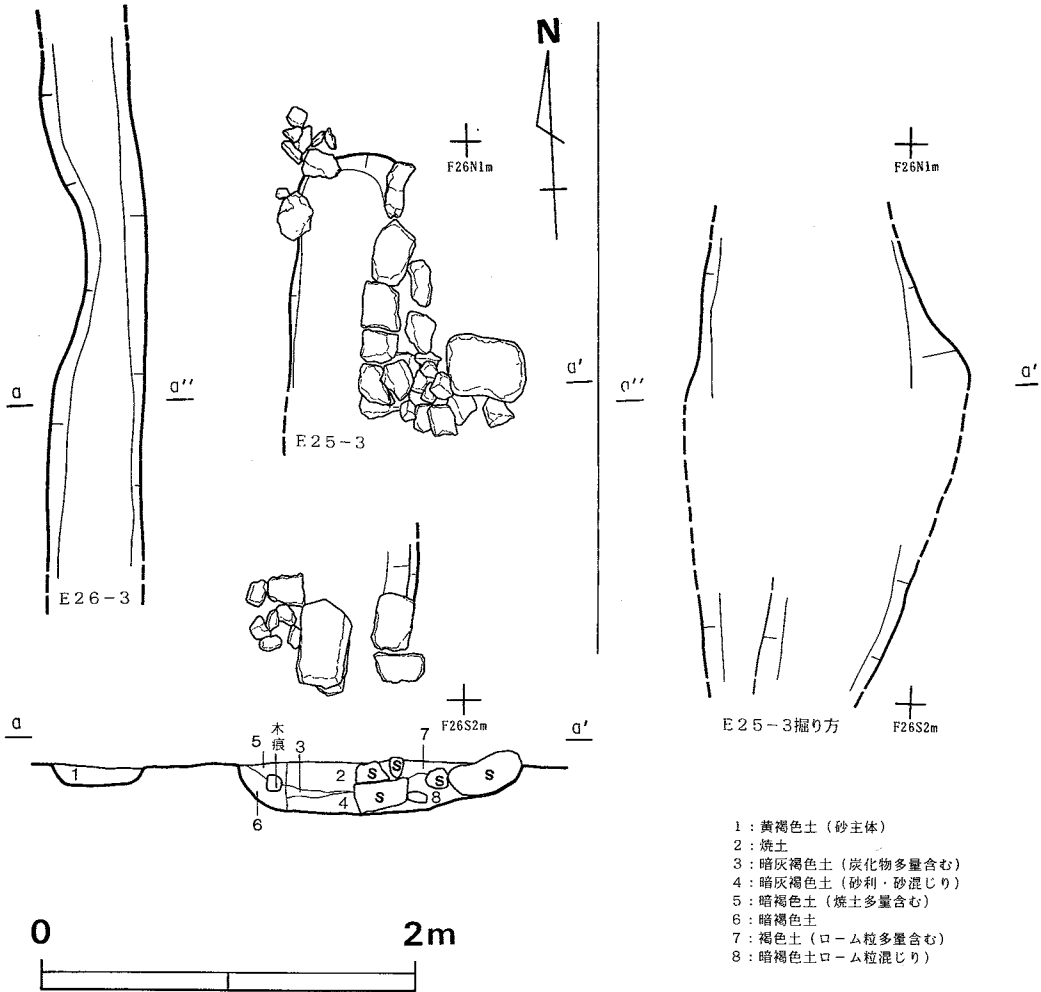


III-087図 E26-1-2, E27-3~5, F26-2 実測図 (土層図の水準: 13.8m)

第三章 江戸時代の遺構

E26-2 E26区にある楕円形の土坑である。長軸1.3m, 短軸0.9m, 深さ40cmで, 埋土は暗褐色土を主にするものである (III-087図)。陶磁器などの若干の遺物が出土している。 (堀内秀樹)

E26-3 E・F26区にある溝状遺構であるが, 南北両端を土管に壊されていて, 全容は明らかではない。幅は約50cm, 深さ10cmのものである (III-088図)。底は中央がもっとも低く, 排水施設とは考えにくい。埋土は砂混じりの黄褐色土である。地境に関係するものであろうか。 (成瀬晃司)



III-088図 E25-3, E26-3実測図 (土層図の水準:13.8m)

F26-1 F26・27区にかけてあった土坑である。長辺3.7m, 短辺0.7m, 深さ40cmの長方形をして (III-089図)。底には南北壁沿いに径10cm弱, 深さ50~60cmの杭穴がそれぞれ9ある。北・東・西の壁には木質の残りが見られ, 壁には板をあてていたことが推測できる。これらの板を留める杭の穴であろう。東と西の底は深くなっているが, ここには砂利が敷かれている。底にも板があったものと思われるが, 確認できていない。埋土は上に焼土のみからなる層があり, この下に褐色土を主体にするものが入る。17世紀後半を中心とする陶磁器などの遺物若干が出土している。文銭が10

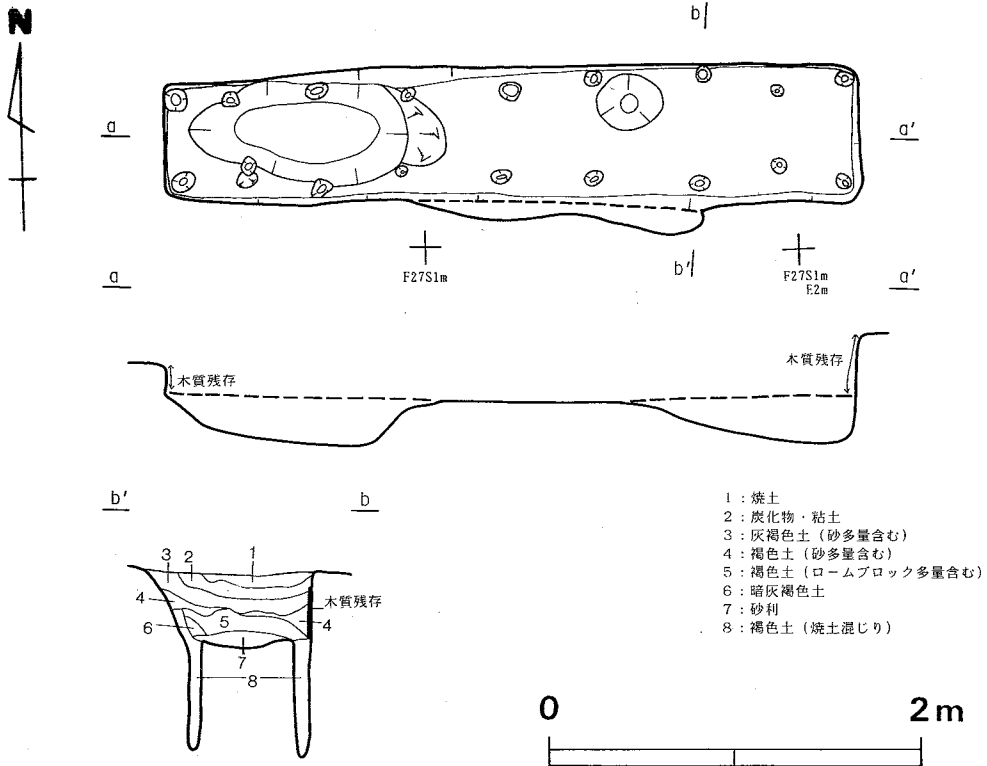
5 D 26・E 26・E 25・F 26・F 25・G 26・G 25 区の遺構

枚とまとまって出土している点が注目される。性格はわからない。

(藤本 強)

**F26-2** F26区西端にある礎石の入った土坑である (III-087図)。長軸1m弱、深さ30cm強の楕円形であり、底に接して平石がある。石の上に杭 (柱) 跡かと思われる形の暗褐色土の堆積がある。埋土は暗~褐色土を主にする。関連するものは発見できなかった。遺物はない。

(堀内秀樹)



III-089図 F26-1実測図 (土層図の水準:14.0m)

**F26-3・4** F26区にある切り石である。両者の中心間の距離は1.9mで、六尺三寸間の一間にあたらう (III-090図)。他に関連するものはみられない。相互の方向は真東西である。ある時期の建物の痕跡と考えられる。ほぼ同方向をもっている F25-2とは比高差が50cmほどある。

(成瀬晃司)

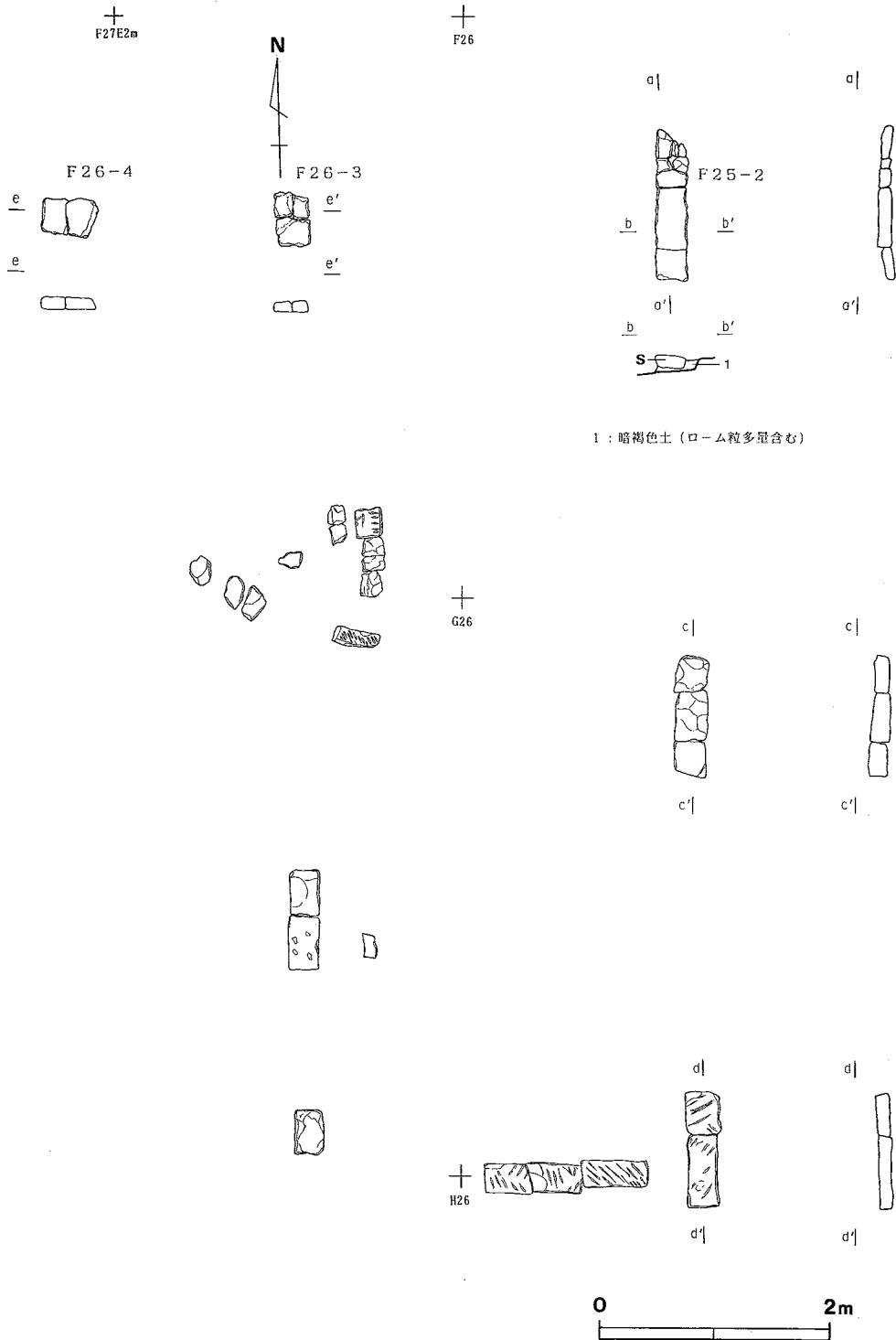
**F26-5** F26区にある石の入った土坑である (III-095図)。埋土はローム混じりの暗褐色土である。建物の礎石かと思われ、G26-10が関連するかと思うが確証はない。

(小川 望)

**G26-1・2** G26区にある切りあい関係のある類似した土坑である。1が 2を切り新しい。どちらも東西2m弱、南北1m前後の土坑であり、深さは1mほどである (III-091図)。1は北の壁の下側が張り出し底のほうが広がっている。埋土はどちらも底に暗灰褐色土が薄く入り、その上に 1は赤褐色土・暗灰褐色土などが、2はロームの多く混じる暗灰~暗黄褐色土がある。1からは18世紀前半の陶磁器などの遺物がかなりの量出土している。2にもほぼ同じ時期までの遺物少量がある。地下式土坑と同様な機能が考えられるが、台所の床下などにある収納庫のような性格のものであった可能性もある。両者は位置が若干違うだけで、類似した規模・形態であるので、同一の機能をもったものが



第III章 江戸時代の遺構



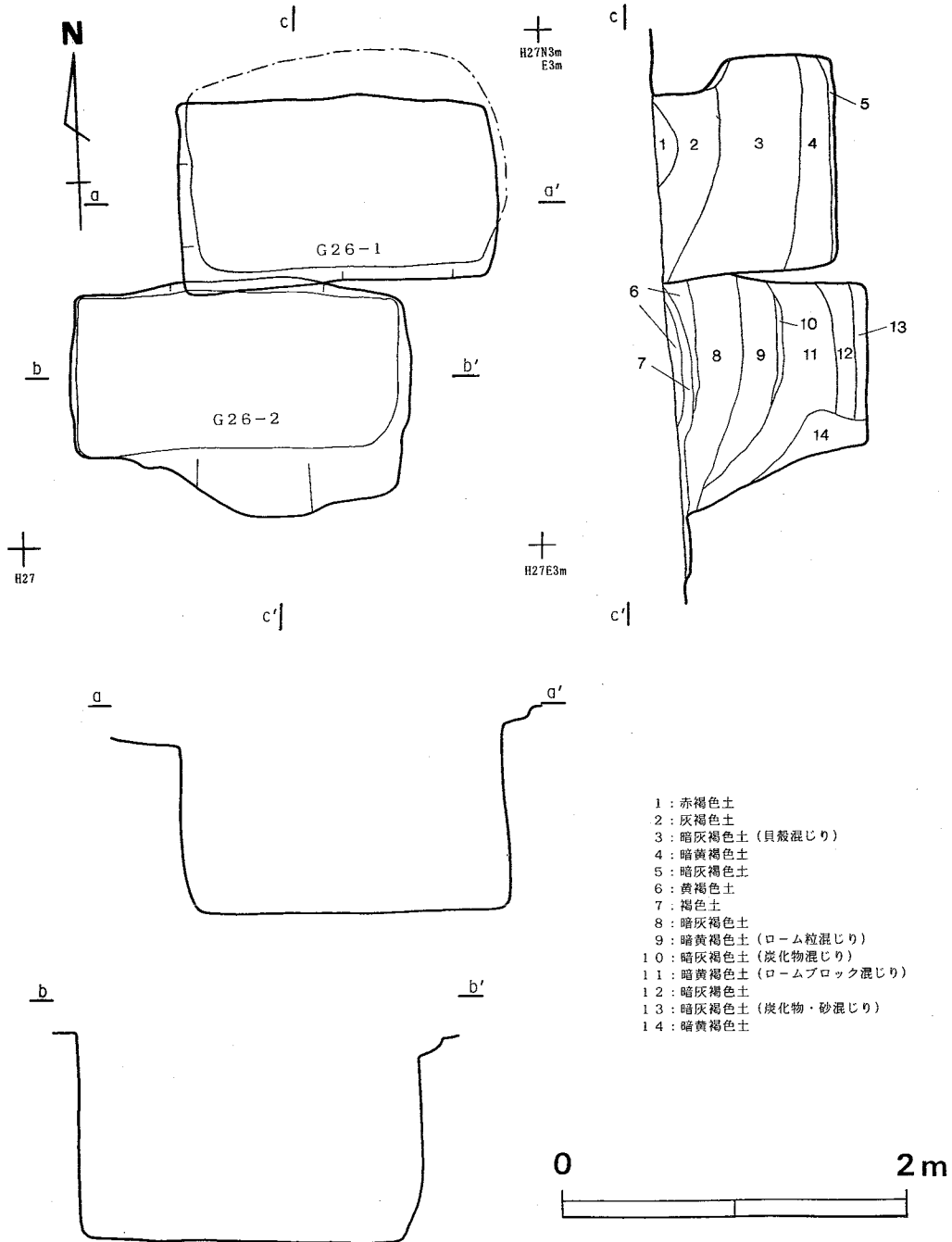
III-090図 F25-2, F26-3・4実測図 (土層図の水準:14.0m, e-e':13.6m)

5 D 26・E 26・E 25・F 26・F 25・G 26・G 25 区の遺構

作りかえられたのであろう。

(小川 望)

G26-3 G26区にある湾曲している溝状の遺構である(III-095図)。一部しか確認できていないの  
ではっきりしたことはわからない。G26-4を切っている。遺物はなく、性格不明。(小川 望)



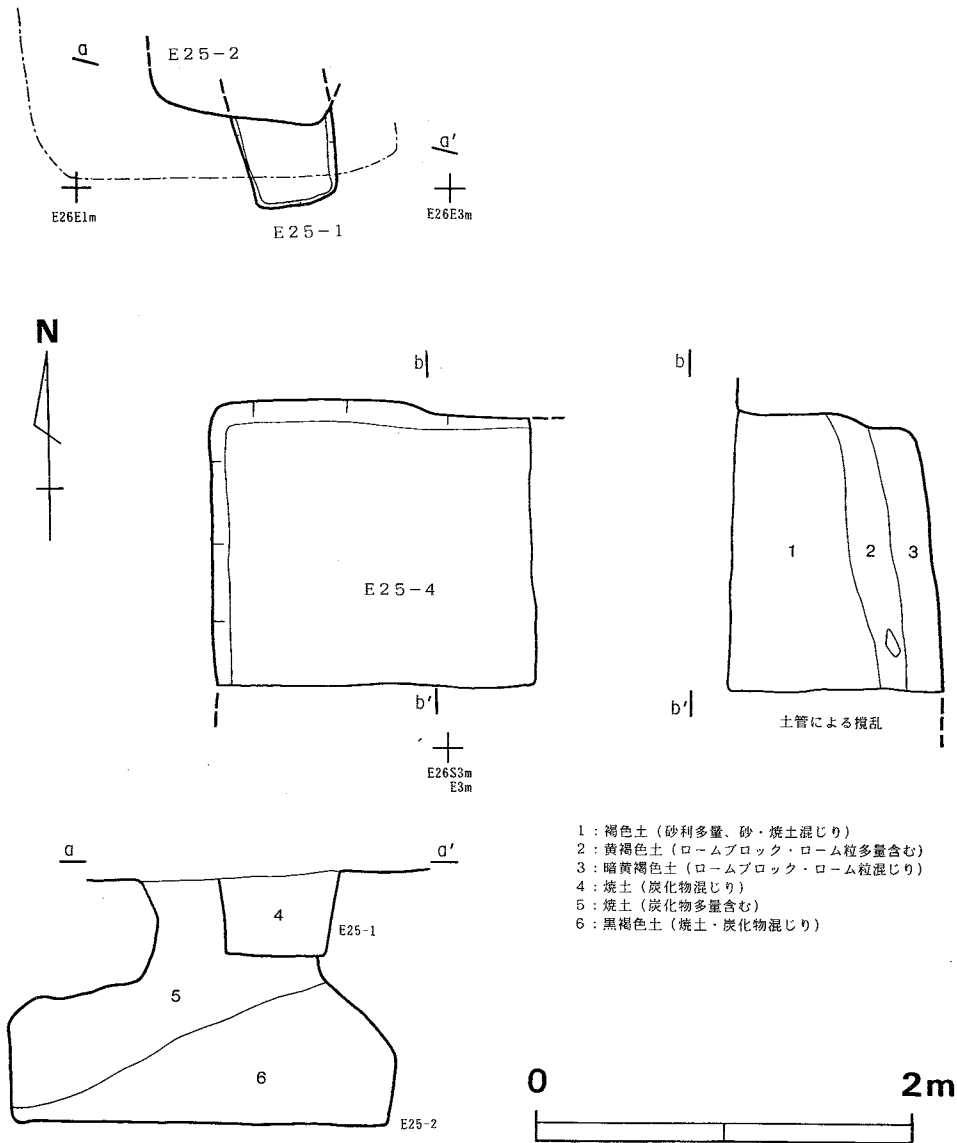
III-091図 G26-1・2実測図 (土層図の水準:13.2m, c-c':13.8m)

第三章 江戸時代の遺構

G26-4・5・6・7・8・9・10 G26区にある小土坑である(III-095図)。埋土はローム混じりの暗褐色土のものがほとんどである。10は F26-5と類似した土坑であり、南北の方向に3.8m 離れている。建物の基礎であった可能性もあるが、他に関連すると思われるものはない。(小川 望)

G26-11 G26区にある幅の狭い溝状の遺構であるが(III-095図)、両端を破壊されていて全体は不明である。埋土はローム混じりの暗褐色土。遺物もなく、性格はわからない。(小川 望)

G26-12・13・14・15・16・17・18・19 G26区にある小土坑もしくは杭穴である(III-095図)。埋土はローム混じりの暗褐色土。F25-5の周辺には杭穴が多数見られる。これらよりも規模は若干大きい



5 D 26・E 26・E 25・F 26・F 25・G 26・G 25 区の遺構

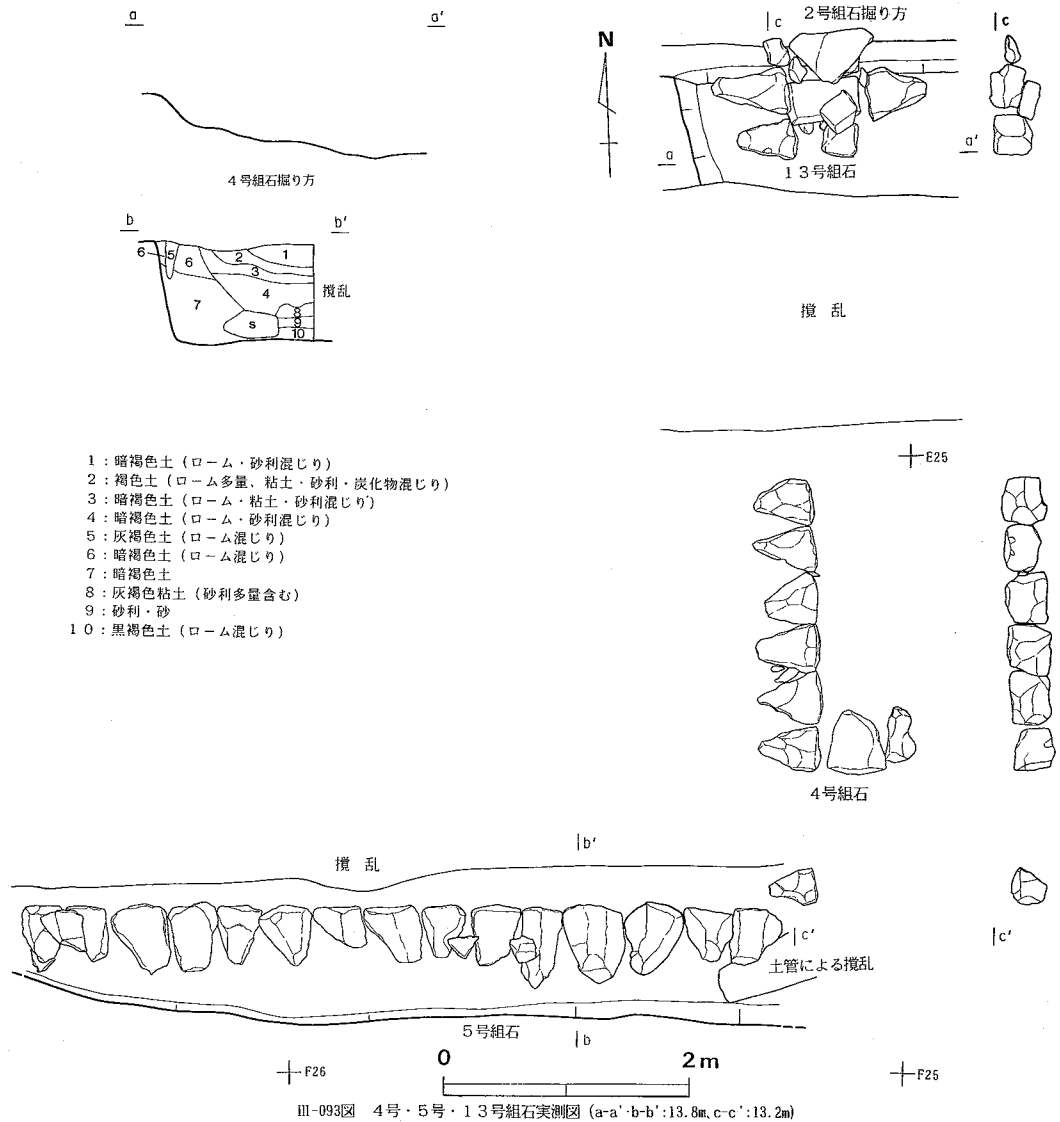
時期・性格は不明である。

(小川 望)

E25-1・2 D25区にある切りあい関係のある遺構である(III-092図)。1が新しい。どちらも北側を大きく破壊されている。1は長方形の土坑と思われるがはっきりしない。埋土は炭化物の入った焼土である。2は入口をほぼ中央にもつ地下式土坑である。一辺2mの方形かとも思うが明らかではない。底から天井までは70cmと低い。埋土は下半に焼土混じりの黒褐色土, その上に炭化物の入った焼土がある。陶磁器の小片が少量出土している。

(小川 望)

E25-3 E・F25・26区にある切り石と丸太で囲まれた特殊な遺構である。南北方向は両端を土管で破壊され明らかではない。掘り方の幅は一定せずもっとも広いところでは1.5mを越える(III-088



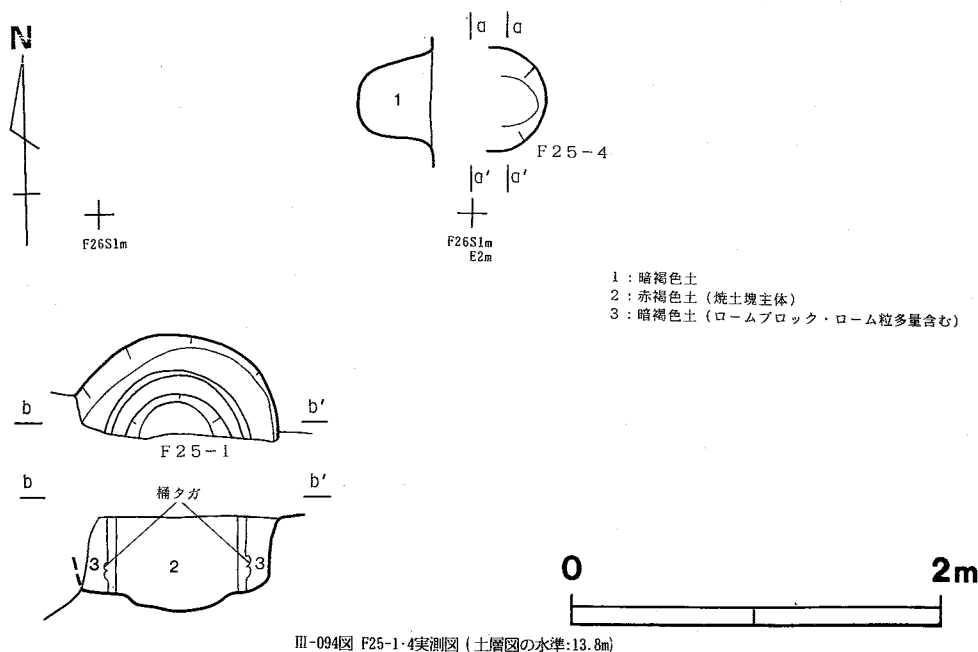
### 第三章 江戸時代の遺構

図)。このなかに切り石と西側には丸太を置き、底には板材が敷かれていたものと考えられる。埋土は焼土、暗灰褐色土が主であり、石を留めるのにはローム混じりの暗褐色土が使われている。この遺構をどのように考えるかであるが、溝の一部とするか特殊な土坑とするかである。どちらかといえば溝と考えたほうが考えやすい。底には他の溝でよく見られる砂・砂利混じりの暗灰褐色土がある。西壁が丸太を使っているという特殊な作りではあるが、通常見られる石組の溝と大きな差はない。溝とすると F25-2との関連を注目する必要があるだろう。この建物からの排水施設と考えるのが妥当かもしれない。F26-3・4との関連は比高差がありすぎ問題がある。(成瀬晃司)

E25-4 E25区にある東と南を大きく破壊された土坑である(III-092図)。方形であろうがはっきりしない。深さは1.2mほどが確認できている。ロームなどを含む黄～褐色土を埋土にしている。17世紀後半の陶磁器の小片などが若干出土している。性格は不明である。(小川 望)

4・13号組石 D・E25区に南北方向に並ぶ組石の溝である。北側に13号組石、南側に4号組石があり、両者は一連の遺構であったものと考えられる(III-093図)。2号組石は調査区の東端で南に曲がっているが、位置や層位関係から考え、4・13号組石は2号組石が調査された時の形になる前の南への曲がりの部分と考えられる。13号組石は2号組石の南側の側面の石の直下で確認された(III-184図)。2号組石の下には叩き締められた砂利があり、この砂利を取り除いたところで発見された。13号組石には通常の埋土はなく、砂利が組石を覆っていた。東西に走る土管の溝による破壊のため、切り石6のみしか確認できていないが、2号組石と同様に側面の石は四角錘であり、底の石は長方形である。石の形と大きさからみると、2号組石の西の部分と共通しており、底の幅は60cmとわずかに狭くなっている。基礎により破壊された部分を挟んで、南の延長上に4号組石がある。埋土などに大きな違いもあるが、方向とレベルからみて、13号組石と一連の遺構と推定している。4号組石は西の側面の石のみしか残っておらず、東側と底の石は破壊されていた。側面の石は四角錘に加工されており、他の部分も13号組石と同じような形をしていたものであろう。7しか石は確認されていない。埋土は黒褐色土を主にしたもので、南側に堆積していた。13号組石の内部にもこのような堆積をしていたのであろうが、2号組石の改築にさいして取り除かれ、砂利が入れられたものであろう。組石の下は固く叩き締められており、この点は13号組石と同様であった。間には破壊された部分があり、明確ではないが、4号組石の南端にあたる石が5号組石の溝にあたる部分から発見されているので4号組石のほうが新しいと思われる。ただし、両者が繋っていた可能性も捨て切れない。時期については4号組石からは数点の磁器の破片などが出土しているのみで、13号組石からは全く出土していないので明らかではない。既に触れているように、13号組石が2号組石の下から発見され、かつては南への曲がりの部分であったことを考えると2号組石が構築されて間もない頃のものであった可能性もある。4・13号組石は5号組石と繋っていた可能性もあり、6号組石南北部分にも繋っていたことも考えられる。6号組石南北部分は17世紀の間に廃絶されたものと考えられるので、4・13号組石もこの頃廃絶していることも考えられる。すなわち、2・4・13号組石とも曲がりの部分が6号組石南北部分(抜き取り溝)付近にあり、この部分には段差があったことが確認されているので、それに関連して構築されたものと考えられ、東側に盛土が進み平準化が進むにつれ、それにともない組石も改築する必要が生じたのであろう。(佐々木彰)

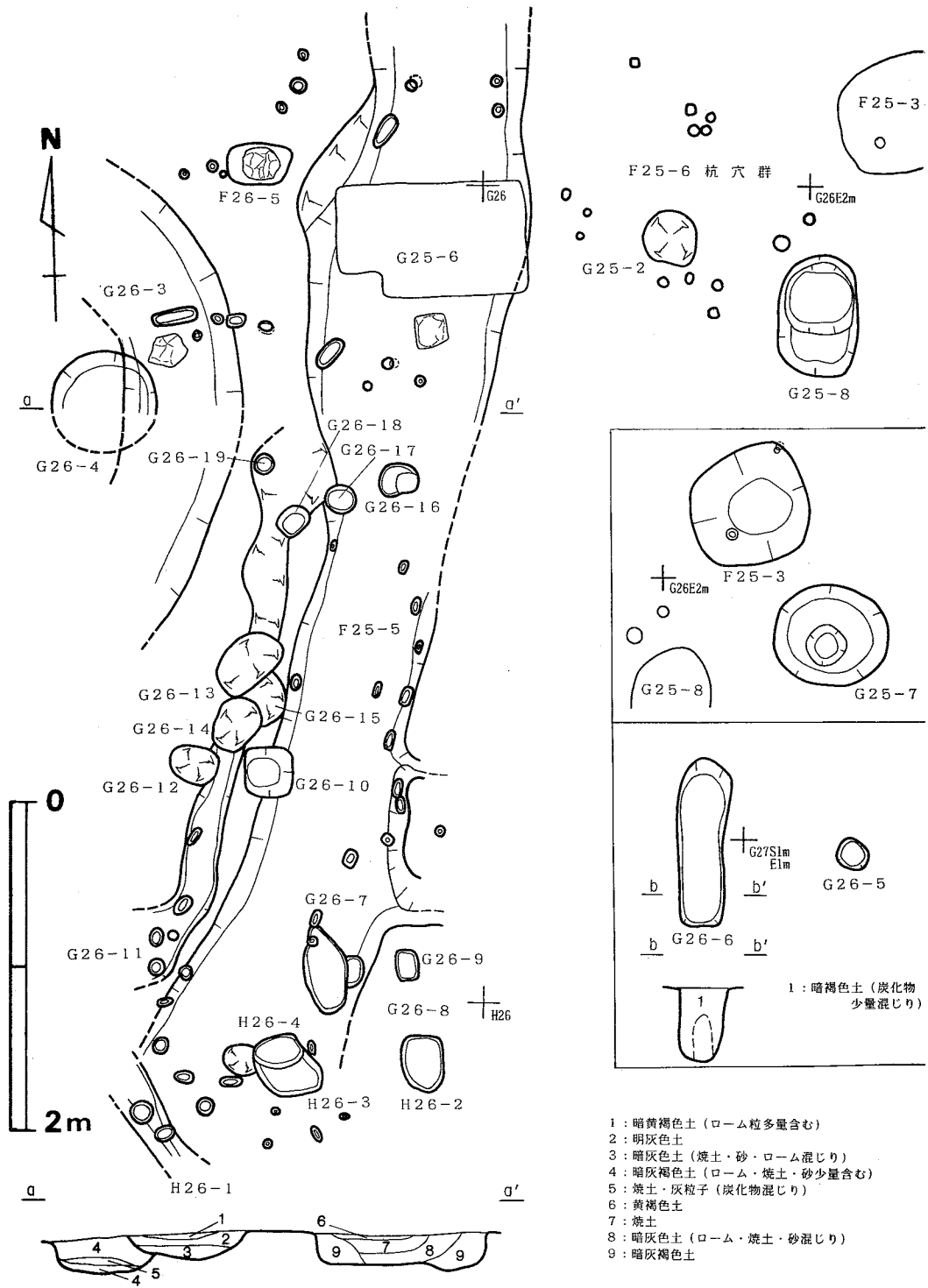
**5号組石** E25・26区に位置し、掘り込みをもつ石組の溝である(III-093図)。北・東・西を土管溝で破壊されていて、南側のみしか残っておらず、全容を窺えない。4号組石、E25-3と重なっており、4号組石より古く、E25-3より新しい。残存する長さは6.1m、掘り方まで含めた幅は1.2m、深さ0.8mあり、そこに側面の石と思われる切り石が15個配置されている。切り石はやや小型の四角錐が多いが、同様の切り石を用いて構築されている2・12号組石と比較すると面取り、整形などが粗雑である。組石は西より東にむかって傾斜しており、水路としての機能が推測できる。石は側面の石のみで、掘り込んだ溝に一段側面の石として切り石を配し、後込めををしている。後込めは6・12号組石などと異なり、石を利用せずに、土もしくはロームで固められている。側面の石の前、溝の底と考えられる部分には小碎石からなる砂利が敷かれている。埋土は暗褐色土を主にするもので、ローム混じりの灰~暗褐色土で硬く後込めはなされている。溝の底には粘性の強いシルト状の灰褐色土が砂利と混じって堆積しており、溝の底に溜った残土と推定される。この遺構は遺存状態が悪く明確な性格については言及できないが、6・10号組石、IV区1・3号溝と同様にFラインの北に東西に延びる屋敷の境の一部であると同時に排水路としての機能も合わせもっていたものと考えてよいであろう。埋土および後込めから17世紀中葉と考えられる少量の陶磁器の小片などが発見されている。(堀内秀樹)



III-094図 F25-1・4実測図(土層図の水準:13.8m)

**F25-1** F25・26区にあり、南半を土管によって破壊されている土坑である。径1.2mの円形の掘り方とそのなかにある径0.8mの桶からなる遺構である(III-094図)。底は中央がややくぼむ。桶は底から45cmほどが確認できており、2本のタガの痕跡が確認できた。桶と掘り方の間にはローム混じりの暗褐色土が詰められており、桶内は焼土塊が主の赤褐色土が入っていた。形からみて、厠の下穴であることは確実である。(成瀬晃司)

第三章 江戸時代の遺構



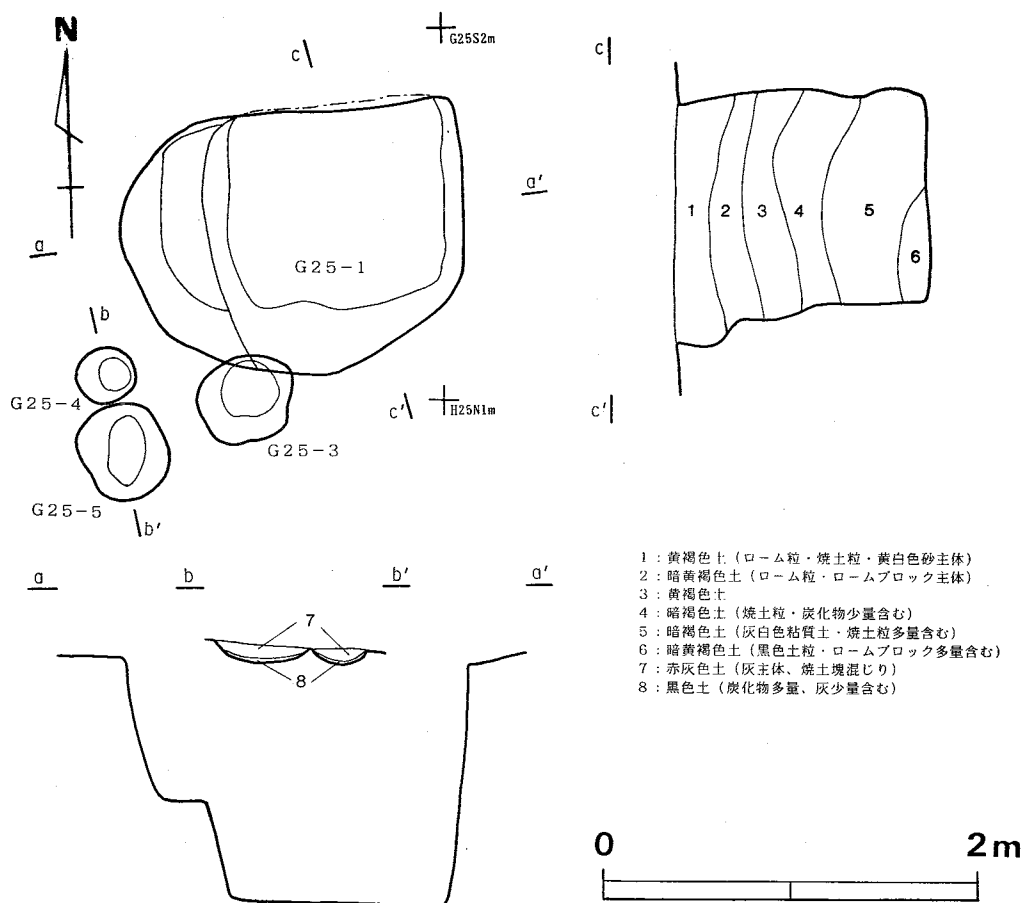
III-095図 F25-3-5-6, F26-5, G25-2-7-8, G26-3-19, H26-1-4 実測図 (土層図の水準: 13.9m)

- 1: 暗褐色土 (ローム粒多量含む)
- 2: 明灰色土
- 3: 暗灰色土 (焼土・砂・ローム混じり)
- 4: 暗褐色土 (ローム・焼土・砂少量含む)
- 5: 焼土・灰粒子 (炭化物混じり)
- 6: 黄褐色土
- 7: 焼土
- 8: 暗灰色土 (ローム・焼土・砂混じり)
- 9: 暗褐色土

5 D 26・E 26・E 25・F 26・F 25・G 26・G 25 区の遺構

**F25-2** G26ポイントを中心に、6号組石南北部分の西の一段高い硬化面上にある平石群である(III-090図)。6号組石南北部分と面的に関連する遺構であろう。平石は短辺が25cm, 長辺は40~60cm, 厚さ10~15cmの直方体である。上は平らに加工されているが, 下は粗い調整のみである。上面は13.8~9mでほぼ一定している。破壊を受けていると思われるが, 図のような形で残っている。石はわずかにその下を掘りくぼめたところに置かれていて, 隙間にはローム混じりの暗褐色土が詰められている。方位はほぼ真東西南北であるが, 東西方向の距離は3.4mであり, 一定の尺度とは対応していない。南北方向もはっきりした尺度との対応はみられない。またこれに連なる遺構は確認できていない。何らかの建物の基礎であろうが, 尺度は不整である。あるいは門のようなものと考えるのがよいのかもしれないが, 明確ではない。ほぼ30cm下にやはり尺度・方向が不整な3号杭穴列が, さらにその10cm下に F26-3・4がある。これらの遺構も周辺に関連があると思われる遺構が確認されていない。大規模な建物を想定するよりは門のようなものが一定の地区内に繰り返し建てられたと考えるのがより妥当であろう。(小川 望)

**F25-3・4** F25区にある小土坑である(III-094・095図)。埋土は暗褐色土であり, 深さは3が10



III-096図 G25-1・3~5実測図 (土層図の水準:14.0m)



第III章 江戸時代の遺構

cm, 4か\*40cmである。遺物はなく、時期・性格は不明である。 (小川 望)

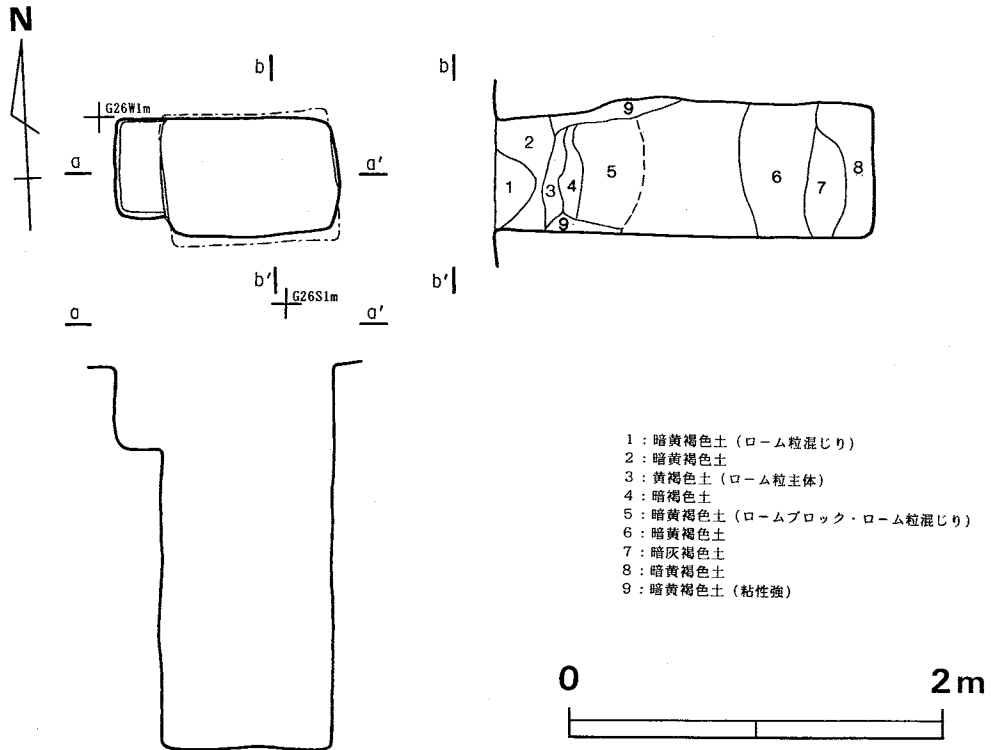
F25-5 中心をG・H26区にもつ溝状の遺構である(III-095図)。周辺の遺構のなかでは一番古く多くの遺構に切られている。幅1m, 深さ20cmであり, 壁沿いに楕円形の多くの杭穴がある。走向は真南北よりかなり東に振れている。暗灰褐色土・暗灰色土が埋土の主体であり, 上に焼土もある。水の流れた痕もないので, 地境の溝かとも思うが, 真南北から振れているのは問題である。遺物はなく, 時期は不明である。 (小川 望)

F25-6 G26ポイントの周辺にある径5~10cm, 深さ20~25cmの16の杭穴である(III-095図)。埋土は暗灰褐色土, 相互になんらの規則性もなく, 植栽の支柱の穴かと思われる。 (小川 望)

G25-1 G25区に中心のある土坑である(III-096図)。底は東西1.1m強, 南北1.1m, 深さ1.3mの不整な長方形の土坑で西壁には段がある。埋土はローム・焼土の多く混じる暗~黄褐色土である。17世紀後半の遺物が少量出土している。地下式土坑同様の機能をもっていたものを人為的に埋め戻したものであろう。 (小川 望)

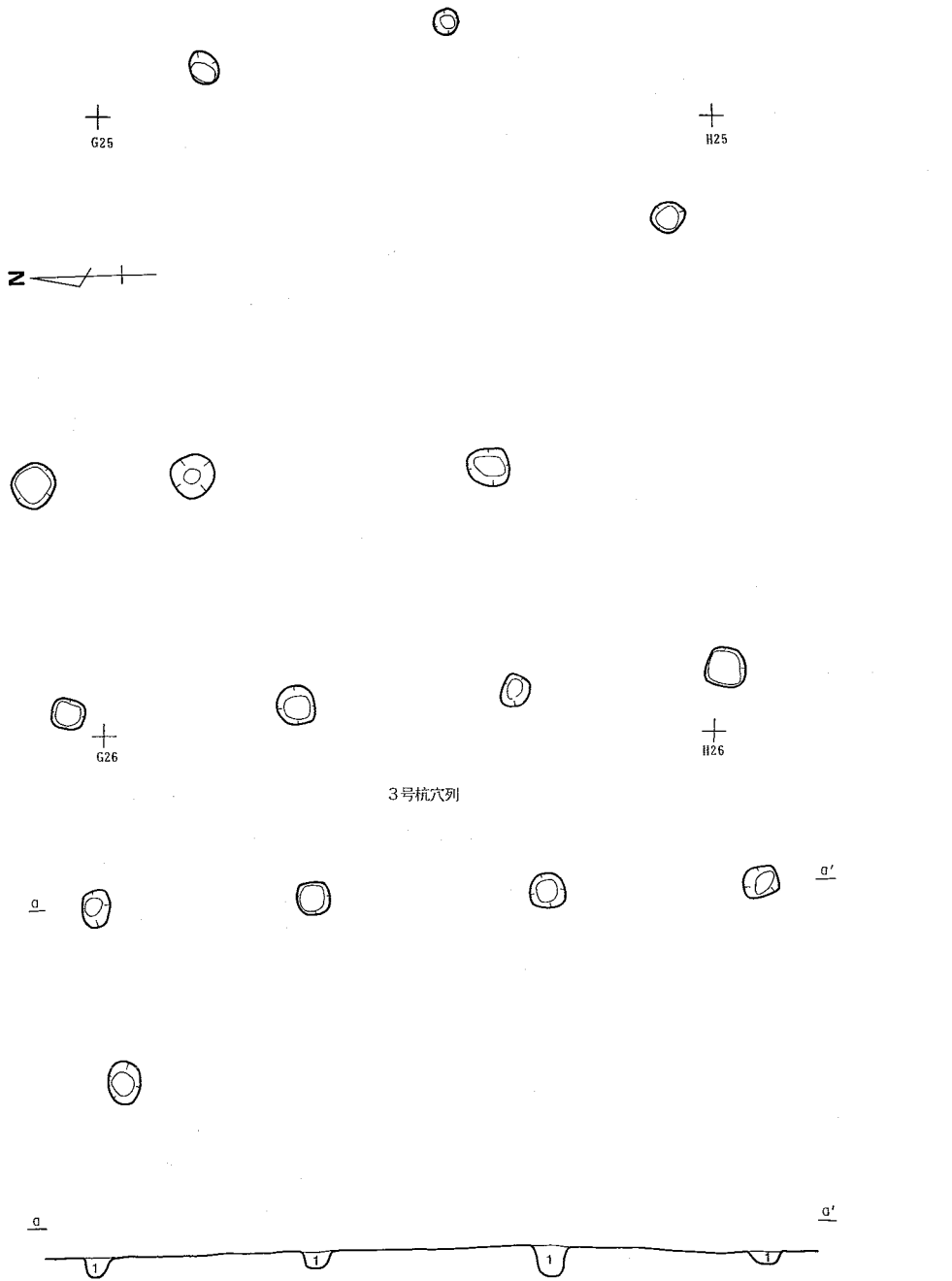
G25-2・3・4・5 G25区にある小土坑である(III-095・096図)。不整の円形で深さは10~20cmである。いずれも灰もしくは焼土を埋土にしている。時期・性格は不明である。 (小川 望)

G25-6 G25区に中心のある底が東西0.9m, 南北0.7m, 深さ2mの長方形の土坑である(III-097図)。西に深さ45cmの張り出し部がつく。埋土は暗~黄褐色土が主で, 17世紀後半と考えられる遺物は少量である。地下式土坑に類似した機能をもっていたものと推測される。 (小川 望)

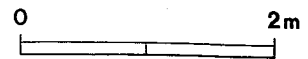


III-097図 G25-6実測図 (土層図の水準:14.0m)

5 D 26・E 26・E 25・F 26・F 25・G 26・G 25 区の遺構



1: 暗褐色土 (ロームブロック混じり)



III-098図 3号杭穴列実測図 (a-a':13.7m)

### 第III章 江戸時代の遺構

G25-7・8 G25区にある土坑である(III-095図)。7は円形の、8は楕円の土坑である。7のなかには深さ7cmのくぼみがある。8の床は北側が15cmほど深くなっている。埋土はどちらも暗褐色土である。遺物はなく、時期・性格は不明である。(小川 望)

3号杭穴列 G25・26区に一辺30cm、深さ20cmほどの杭穴が一見建物の基礎をなすように15ほどみられる(III-098図)。相互の方向はかならずしも一致しておらず、距離もかなりバラつく。埋土はローム混じりの暗褐色土であり、同一時期に同一の目的で作られた可能性は高いが、建物の基礎には方向・距離が微妙に違っておりなりえない。南北に並ぶ4本ずつの西側の2列はもっとも西のものがそれぞれ1.9mの間隔、次のものが1.85・1.85・1.9mと距離の上ではまずまずであるが、列相互の方向は違っており、南北と東西の角度は直角ではない。他のものはよりバラつきが大きい。なんらかの杭の列であったと考えるのが妥当であろう。約30cm上にF25-2という石列があり、約10cm下にF26-3・4という石がある。これらはほぼ真東西南北の方向にあるが、相互の距離はかならずしも尺度に対応しているものでもない。石列と杭穴という違いはあるが、似たような場所にある類似の機能をもっていたと推定される遺構だけに注目する必要がある。いずれも距離・方向に難点があり建物の基礎とするには問題がある。しかしながら、類似の場所に繰り返しこうしたものが出現するには意味がある。門のような機能をもっていたものを推測するのも一つの考え方であろうが、全くの推量であり、確証は何もない。(藤本 強)

#### 6 H26・I26・I25・J26・J25・K26・K25・L26・L25区の遺構

##### 概況

この地区は破壊が深いところまで及んでいることもあってか、遺構の数は比較的少ない。小さな遺構が多く、目につくのは江戸時代初頭の池くらいである。あとはより北の部分に連なる溝状の遺構と小土坑もしくは杭穴が目につく程度で、大規模な遺構はほとんどない。破壊が深くまで及んでいることが遺構の数が少ない主な原因であろうが、そもそも遺構の少なかった地区であろう。破壊されていないところでは下の砂利面が全面にみられる。下の砂利面には全く遺構はない。舗床面として用いられていたからであろう。その下に若干の遺構があるが、生活に直接関係すると思われる遺構はほとんどない。むしろ池を含めて庭もしくは屋敷の前面の空間として利用されていたことを思わせるものである。こうしたことが遺構を少なくさせているのであろう。したがって遺物の量も少ない。(藤本 強)

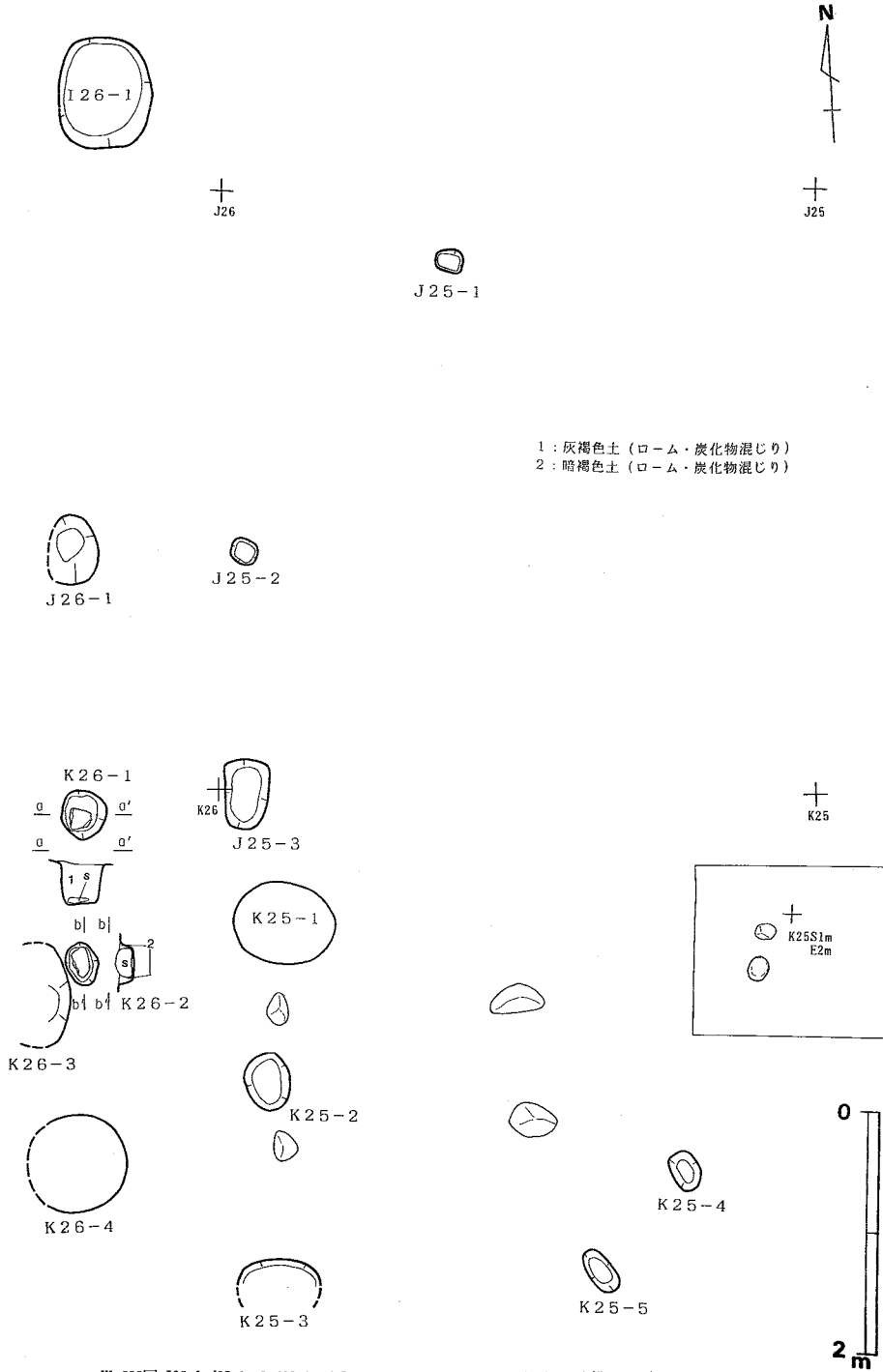
##### 遺構各説

H26-1 H26区にある溝状の遺構である。両端を破壊され、全容はわからないが、幅20cm、深さ10cmほどの西北から東南に走る溝であろうと思われる(III-095図)。遺物はない。(小川 望)

H26-2・3・4 H26区にある小土坑である(III-095図)。深さは2・3が20cm、4が5cmである。埋土はいずれもローム混じりの暗褐色土である。遺物はなく、性格は不明。(小川 望)

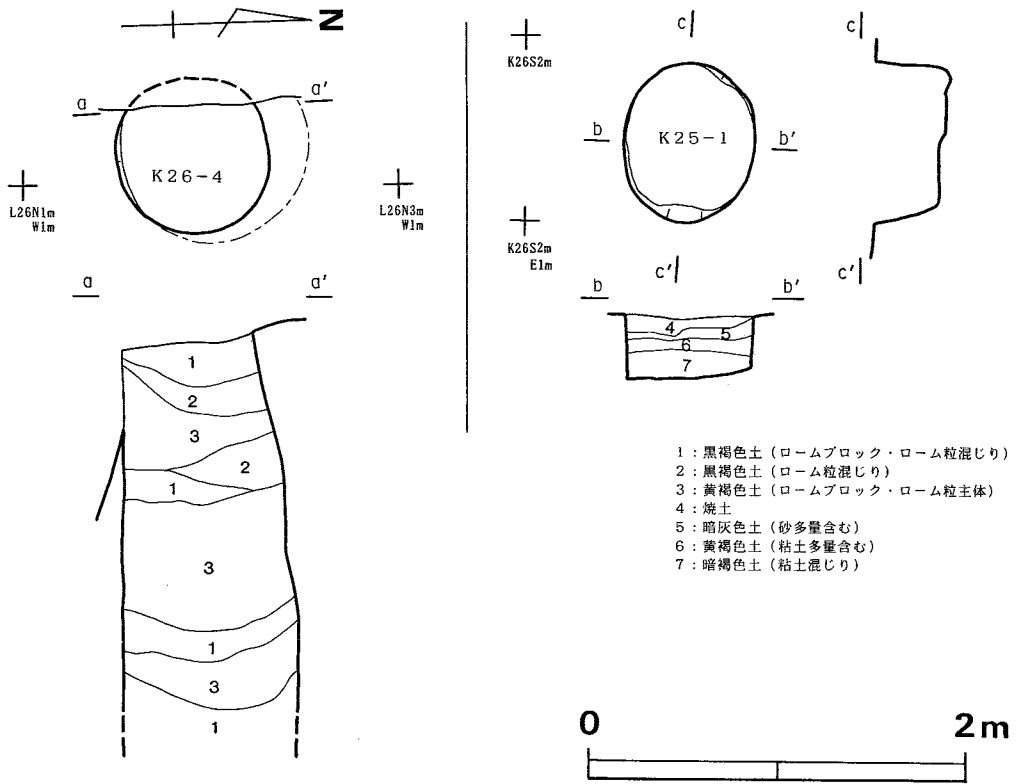
I26-1, J26-1, K26-1・2・3 26ラインの西1m内外のところにある土坑である(III-099図)。I-26-1とK26-3がややずれるが、あとの3土坑はほぼ真南北の一直線上にある。相互の距離は2.2mと1.3mと不定である。K26-1・2にはなかに石があるがその入り方は大きく異なる。埋土は両者ほぼ同じで

6 H 26・I 26・I 25・J 26・J 25・K 26・K 25・L 26・L 25 区の遺構

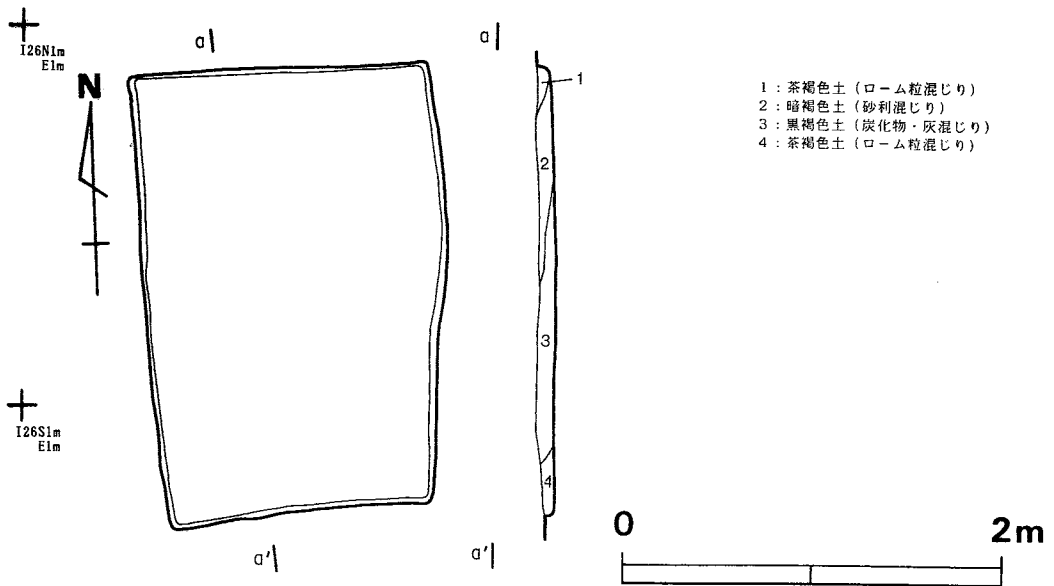


III-099図 I26-1, J25-1~3, J26-1, K25-1~5, K26-1~4 実測図 (土層図の水準: 11.6m)

第III章 江戸時代の遺構

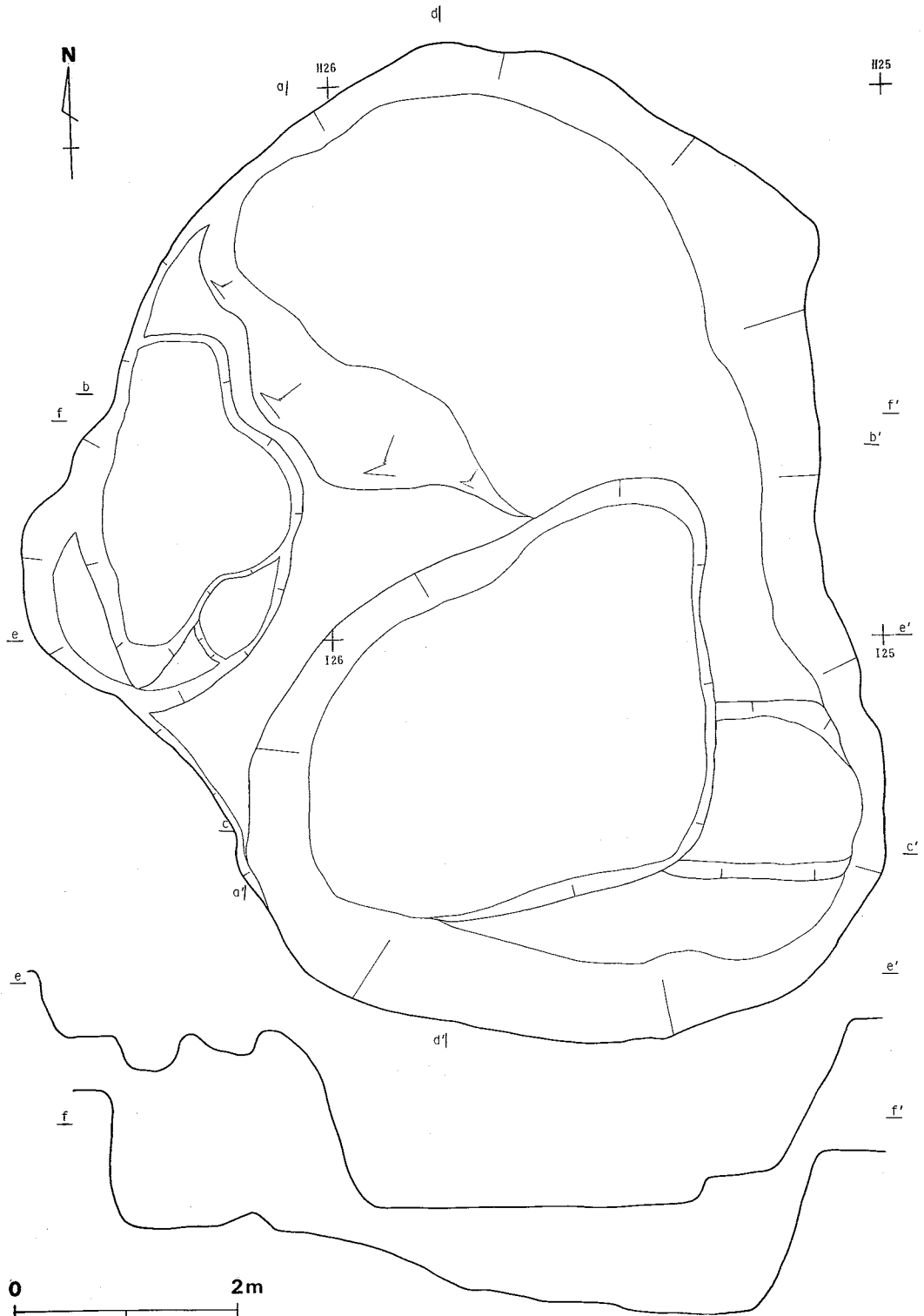


III-100図 K25-1, K26-4実測図 (土層図の水準:13.5m, a-a':11.4m)



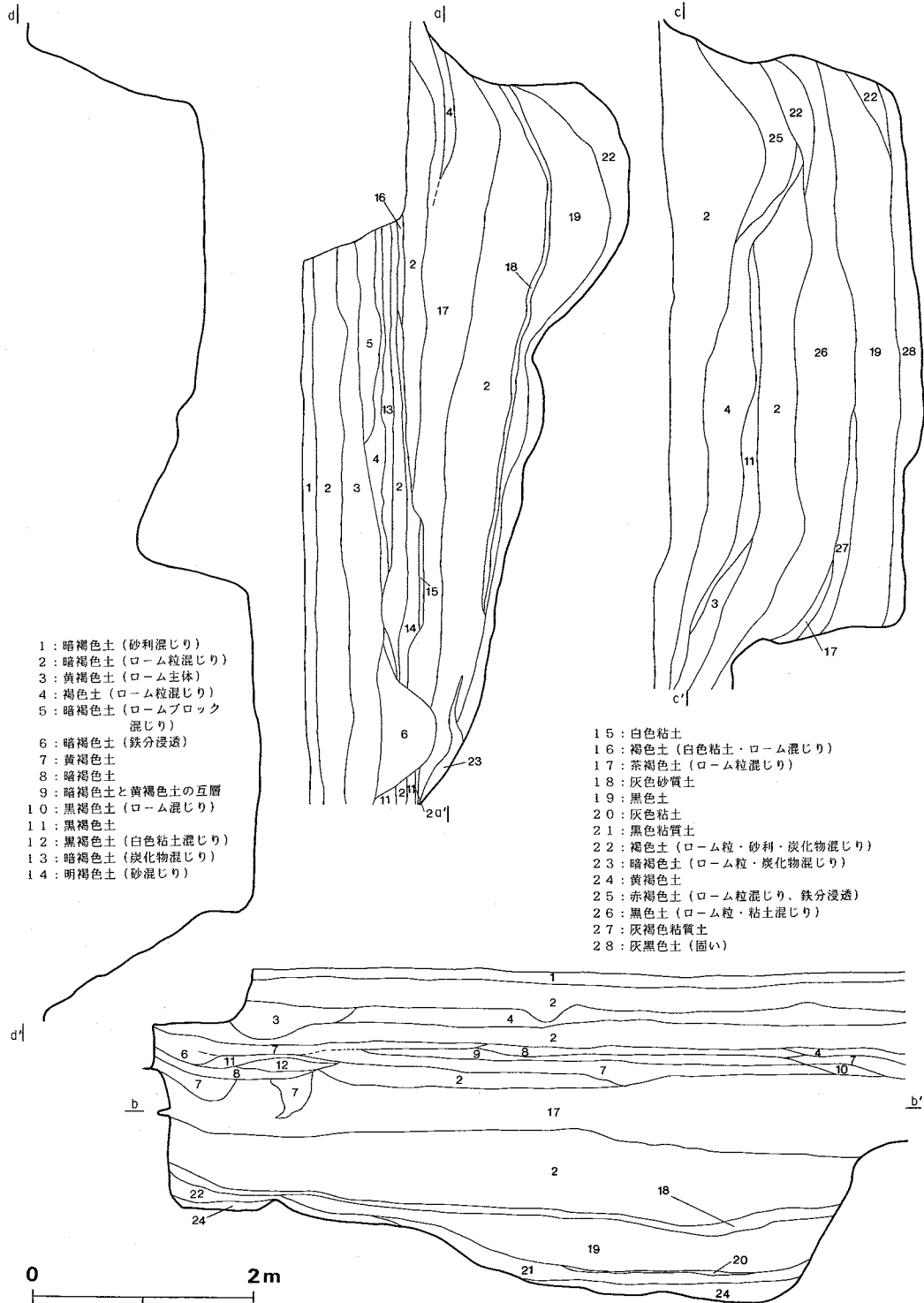
III-101図 I25-1実測図 (a-a':12.5m)

6 H 26・I 26・I 25・J 26・J 25・K 26・K 25・L 26・L 25 区の遺構



III-102図 池実測図 (土層図の水準:11.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構



III-103図 池実測図 (土層図の水準: 11.0m)

ローム・炭化物混じりの灰～暗褐色土であるが、形は異なる。他の埋土はローム混じりの黒褐色土である。K26-1・2は杭穴、他は植栽に関係するものであろうか。遺物はない。(宮田安志)

**K26-4** K26区にある井戸である。いわゆる下の砂利面の下で自然堆積の面近くになって発見されている。径0.8mで、下になるにつれ若干大きくなり径1mほどになる(III-100図)。付属する設備は確認できず、作りも粗雑である。遺物はみられないが、層位的に見て江戸時代初頭の遺構であることは確実である。(宮田安志)

**L26-1・2** L27ポイント周辺の切りあいのある土坑であるが、両者とも大きく破壊を受けている。1が2を切っている。1は長方形の、深さ30cmほどが確認できる土坑で、2は円形もしくは楕円形の土坑で、深さ50cmを確認している(III-084図)。遺物は少量で、時期・性格は不明。(小川 望)

**I25-1** H・I25区にまたがる土坑である。上部は破壊され、底だけが残っている。南北2.3m、東西1.6mの長方形である(III-101図)。埋土の堆積は不自然で、地下式土坑の底の堆積と類似している。地下式土坑の底であった可能性もある。(宮田安志)

**池** H25・26・I25・26区のほとんどの部分を占める池がある。少なくとも北と西では自然堆積の層から切り込んでいるので、江戸時代の遺構のなかではもっとも古い遺構の一つである。85年11月に残土の整理のため重機を入れていた。この重機により近代の建物の基礎があったところの層位を確かめるために掘り下げたところへドロ状の土のなかに木製品の入ったものが出現した。調査は山場にかかっているところであり、そのうえにきわめて深いところからの木製品の出土である。

井戸と何かの切りあい、自然の沢の水路に木製品が堆積しているなど種々のことが考えられたが掘り進むと四周に立ち上がりが見われ、結局一つの遺構であることが明らかになってきた。しかも底、立ち上がりともに不整形な形をしていて、池と考えるのが妥当であろうということになった。池ということがわかって、底には多数の木製品と「かわらけ」があり、調査は慎重に進めざるをえない。調査員は手一杯、そこで施設部と病院から人を出してもらい、その人々に掘ってもらうことにした。12月初めから2週間、施設部と病院の人々の手によって、調査がなされた。その後、2週間新たに発見された平安時代の井戸の調査にも施設部と病院の人々の手を借りた。

埋土は場所によって、若干の違いがあるが、最下層は非常に固く、粘性の強い灰黒色土がある。これには鉄分がかなり浸透しており、鉄分が凝縮している部分はたいへんに固くなっている。この上にロームを混ぜる黄褐色土が壁の近くにある。これにも鉄分の凝縮があちらこちらにある。池の西側、ここが主要な「かわらけ」の包含層になる。この上は厚いへドロ状の黒色土になる。木製品の多くはここから出土している。この上にはかならずしも全面にあるわけではないが、灰色～灰茶色の砂質土の薄層がかなりの部分にある。これはある時期の表面ではないかと考えられる。ここまですべてが自然に堆積したものであり、ここから上は人工的に埋められた土であろう。かなり斉一的な土が水平な堆積をしている。いずれもロームを混ぜた暗褐色土・茶褐色土などがほぼ水平に堆積しこの上は0.9mの厚さをもつ人工的な堆積がくる。数cm～20cmの厚さの種々の土をつぎつぎに重ねて、その上に非常に固い砂利混じりの層がある。これはいわゆる下の砂利面であり、調査区東側に12号組石までの間に広くみられる層である。池が放棄されしばらくはそのままになっていたが、その後おそらく下の砂利面を作る際に埋め戻され、水平にされ、その上に下の砂利面を構成す



### 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

る種々の土が積み重ねられたのであろう。

南北最大長9.0m、東西最大長7.3mの不整隅丸多角形を呈している(Ⅲ-102・103図)。底はいくつかのいわば池盆をもっており、その間には尾根状の高まりがある。池盆は大きくみれば三か所ある。南のものももっとも深く、確認面から2.4mある。北のものは若干浅く、確認面から1.9m、西のもののもっとも浅くまた大きさも小さい。深さは1.2mほどである。底および立ち上がり面は鉄分の付着で非常に固くなっている。西の池盆はさほど湿ってはいなかったが、南と北の池盆はたいへんよく湿っていて、へドロ状になっていたので木製品の保存が良かったのであろう(写真4)。

遺物の出土状況は木製品と土製品では大きな差がある。「かわらけ」を主体にする土製品は焼塩壺をふくめ、西の池盆に折り重なって発見され、北・南の池盆では西の端から0.5mまでの間の木製品の下に出土している。池の西側のごく限られた部分から出土している。

一方、木製品は西の池盆にもみられるが、その数はわずかで、主体は南・北の池盆である。出土位置は底からやや上である。底から10~20cmの間にはほとんど出土がなく、その上の部分から出土する。箆のような長い物は深いほうにむかって傾斜して出土する傾向があった。ちょうど池の面に漂っていたものが池の水が引くにつれ、あるいは水を含んでしだいに重くなり、漂いながら底に沈んでいったと考えるのが妥当な出土状況である。土製品のように一か所に折り重なるというよりは南・北の池盆を中心にして、ほぼ均一に散乱しているという状況にあった。印象としては箆のようなものが比較的下に、折敷の平な板が上という傾向が認められたが、あくまでも傾向的なものである。こうした状況から考えると、池の西側から池にむかって、土製品・木製品など種々のものを投げ込んだが、「かわらけ」を初めとする土製品はその重量のためすぐに沈んで、投げ込まれた元の位置を保っているのたいし、木製品はその軽さの故に池の面をしばらく漂ってから沈んだために、池全体に散乱したことが考えられる。

木製品のなかには寛永六年(1629)の紀年銘のあるものが3点ある(藤本・宮崎・萩尾1987)。ここから出土した白木の箆・折敷・木札を中心にする木製品、「かわらけ」を主体にする土製品は一括して廃棄された可能性が高い。しかもきわめて儀礼的性格の強い宴会の後始末に関係して一括廃棄されたものであろう。単に紀年銘があるだけでなく、それが寛永六年三月であるので、翌四月に行なわれた将軍家の『御成』に関係した可能性もある。種々の意味において重要な位置を占める出土品である。『大聖寺藩史』によると大聖寺藩の初代の藩主利治がここに屋敷を定めたのは寛永四年(1627年)のことであり、諸侯になるのは寛永十六年(1639年)のことである。層位的にみても江戸時代最古の遺構の一つであり、よく符号している。種々の意味で江戸時代の初頭を考える際には欠かすことのできない遺構になろう。(藤本 強)

J25-1・2・3 J25区の西よりにある小土坑である(Ⅲ-099図)。深く破壊されており、掘り込み面はわからない。埋土はローム混じりの黒褐色土で、遺物はない。性格は不明。(藤本 強)

K25-1 K25区の西北端に近いところで発見された遺構である。この付近は深いところまで近代の建物の基礎が入っているところで、江戸時代の遺構の発見は少ない。しかし、遺構の少なさはこれだけの理由によるものではない。もし多数あればその底の部分だけでももっと発見されるはずである。そもそも遺構の少ない地点であったものと考えられる。この遺構もボツンとある遺構である。

## 7 E24~22, F24~22, G24~22, H24~22, I24~22, J24~22, K24~22, L23・22 区の遺構

東西0.85m,南北0.7mの楕円形の土坑である(III-100図)。深さは現存部分で0.4mほどである。埋土は下部に黄~暗褐色の粘質土があり、上部は暗褐色砂質土になり、最上部に焼土がある。遺物はほとんどない。厠の下穴としているものに規模・構造は一致する。埋土が若干異なるので疑問があるが、厠の下穴とするのが妥当であろう。(藤本 強)

**K25-2・3・4・5** K25区にある小土坑である(III-099図)。上部は破壊がひどく、掘り込み面は不明である。ローム混じりの黒褐色土を埋土にしている。J25-1・2・3 とともにいずれも浅く、石の抜き穴かとも思うが、明らかではない。(藤本 強)

## 7 E24~22, F24~22, G24~22, H24~22, I24~22, J24~22, K24~22, L23・22 区の遺構 概況

6号組石南北部分と12号組石に挟まれた部分である。上下の砂利面が見られるところであり、遺構は少ない部分である。しかも生活に直接関係すると思われる遺構はほとんどない。井戸がややあるだけである。この地点に井戸がかなりあるのは、沢の上部にあたっていることと無関係ではない。水の得やすい沢の上に井戸が掘られることは考えられることであろう。このほかは J・K・L にやや大型の遺構があるのが目につくが、井戸とこれらを含め自然堆積の面になってから確認される遺構が多いのもこの地点の特長といえよう。上部がかなり破壊されていたこと、上・下の砂利面に象徴されるようになり長い間オープンスペースとして利用されていたことが主な理由になろう。まず井戸のある庭のような形で使われ、ついで上・下の砂利面の時期には、屋敷の前の広いオープンスペースもしくは道として利用される。上の砂利面は天和三年の屋敷地の改変以前に、證人屋敷と大聖寺藩の上屋敷の間にあったとされる幅八間の道であった可能性が強い。19世紀前半には絵図によると「御殿空間」に使われていた可能性が強いが、この時期の遺構・遺物は近代以降に破壊されてしまったのであろうか、なにも残っていない。

6・12号組石以外にも、その上に作られた組石があるが、基本的な性格は受け継いでいるものであり、またこれらの地境の前身になると考えられる溝も確認されている。天和三年の藩の間における土地の大規模な改変があっても、江戸時代の初頭に決まったであろう屋敷の地割は大きく変わることなく受け継がれていたものと考えられる。この種の遺構の年代は土坑に比べ、把握が困難であり、詳しいことを明らかにし得ないが、組石とそれに関連して作られた面については6号組石の項で述べている。(藤本 強)

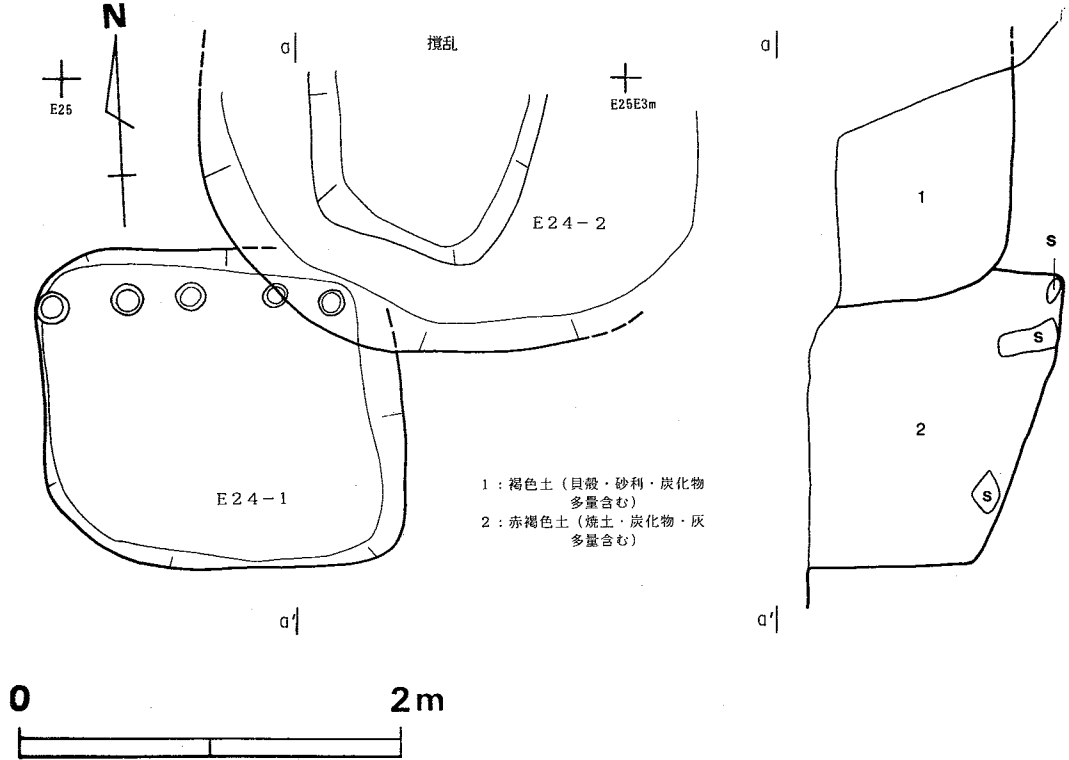
### 遺構各説

**E24-1・2** E24・25区に位置する土坑である(III-104図)。2が1の北東の隅を切っており、2は北側を大きく破壊されている。上部は両者ともかなり削平されている。1は底で一辺1.6mの隅丸の方形で、壁はわずかに開き気味であり、深さは1.3mほどが確認されている。底は北に向かって深くなっており、その差は40cmほどある。北の壁沿いには径15cm、深さ20~30cmほどの杭穴が5ある。杭穴があるのはこの部分のみであり、あるいは底が傾斜することと関連するかとも思われるが、詳細は不明である。底、壁とも丁寧に仕上げられている。2は残っている部分から判断するかぎりでは、底の径が2.5mほどの不整な楕円形であろうと思われる。深さは90cmほどが確認できている。底の

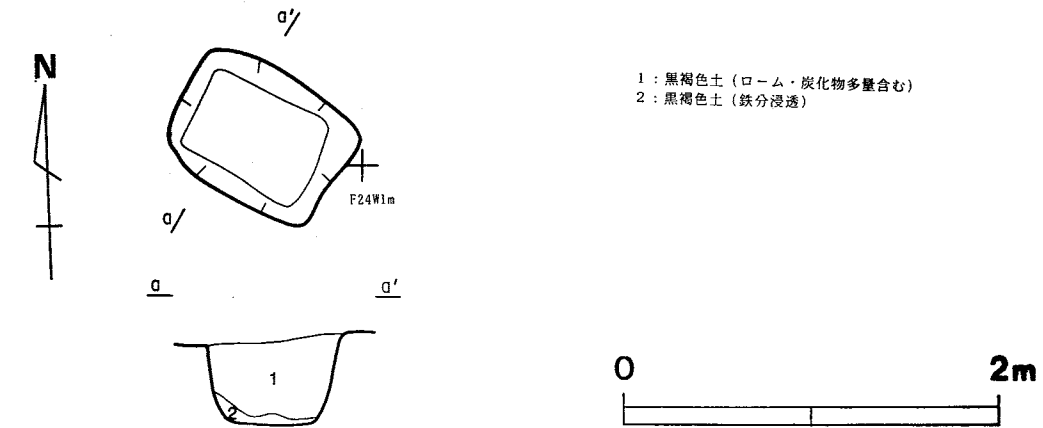
### 第三章 江戸時代の遺構

中央部はさらに10cmほどくぼんでおり、全体に丸みを帯びてはいるが二段になっている。埋土は1が焼土などを多量に含む赤褐色土であり、18世紀前半のかなりの量の陶磁器などを中心にする遺物を含んでいる。火事の後始末に最終的に利用されたことは明らかであるが、本来なにを目的にして構築されたのかはわからない。2は貝殻・砂利・炭化物を多量に含む褐色土で、最後にはゴミ穴に利用されたのであろうが、人工遺物はほとんど出土していない。  
(松下理恵)

E24-4 E・F24区にある自然堆積の面で確認された長方形の土坑である(III-105図)。埋土は黒



III-104図 E24-1・2実測図(土層図の水準:14.0m)



III-105図 E24-4実測図(a-a':11.4m)

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23・22 区の遺構

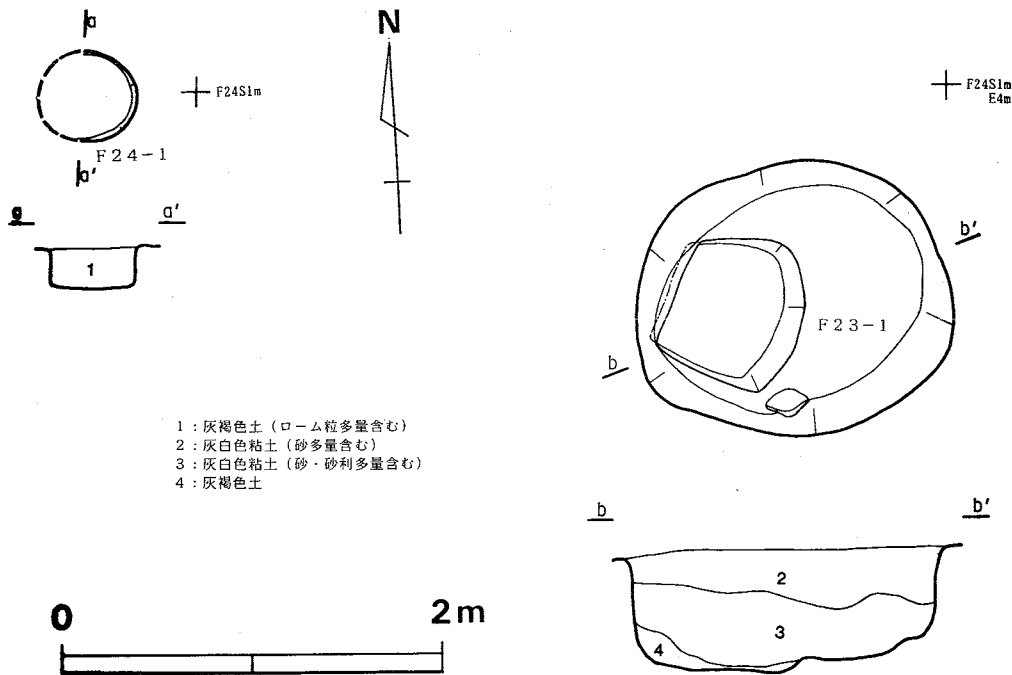
褐色土であり、下部には鉄分の浸透がみられる。遺物はなく、時期・性格は不明。(佐々木彰)

F24-1 F24区にある径45cm、深さ20cm強の円形の小土坑である(III-106図)。埋土は粘性のあるロームの多量に入る灰褐色土である。壁の一部に竹の痕跡が明瞭に認められた。タガのあとであろうか。遺物はない。厠の下穴の可能性もあるが、はっきりしない。(堀内秀樹)

3号組石 E・F・G24区にある南北方向の石組の溝である(III-107図)。近代以降の土を取るとすぐに出現した遺構であり、一部を確認しているに過ぎない。E24区のなかにある部分とF・G24区にある部分とでは形が大きく異なり、また水準にも40cmをこえる差があり、平面的には連がるようにみえるが、別の遺構と考えるべきであろう。北側は4・13号組石と同様に地境の溝と考えるべきであろうし、南の部分は大聖寺藩の生活排水に関係するものと考えるのが妥当であろう。北の部分は2号組石などと同じ石の組み方をしてのいたし、南の部分は切り石の平石を積み上げる構造である。北の部分には底の石はなくなっているが、南の部分の溝の底には切り石の底石がある。両者とも方向は真南北である。南の部分の埋土は焼土・炭化物を含む灰褐色土で、北側の埋土は焼土・炭化物を多く含む赤褐色土である。幅はどちらも40cm内外である。北側の部分から17世紀末の陶磁器など若干の遺物が出土している。(萩尾昌枝)

G24-1 G24区に主要部分がある素掘りの井戸である。自然堆積の面で確認している。径1.5mの不整な円形であり、下にいくにつれ広がる傾向がある(III-108図)。埋土は暗黄褐色土を主にするものである。遺物はない。層位的にみて江戸時代初頭に近い時期のものであろう。(小川 望)

G24-2 G24・25区にある小土坑である(III-109図)。埋土は砂利・砂混じりの暗褐色土である。遺物はなく、層位的に江戸時代初頭の遺構と考えられるが性格は不明。(小川 望)

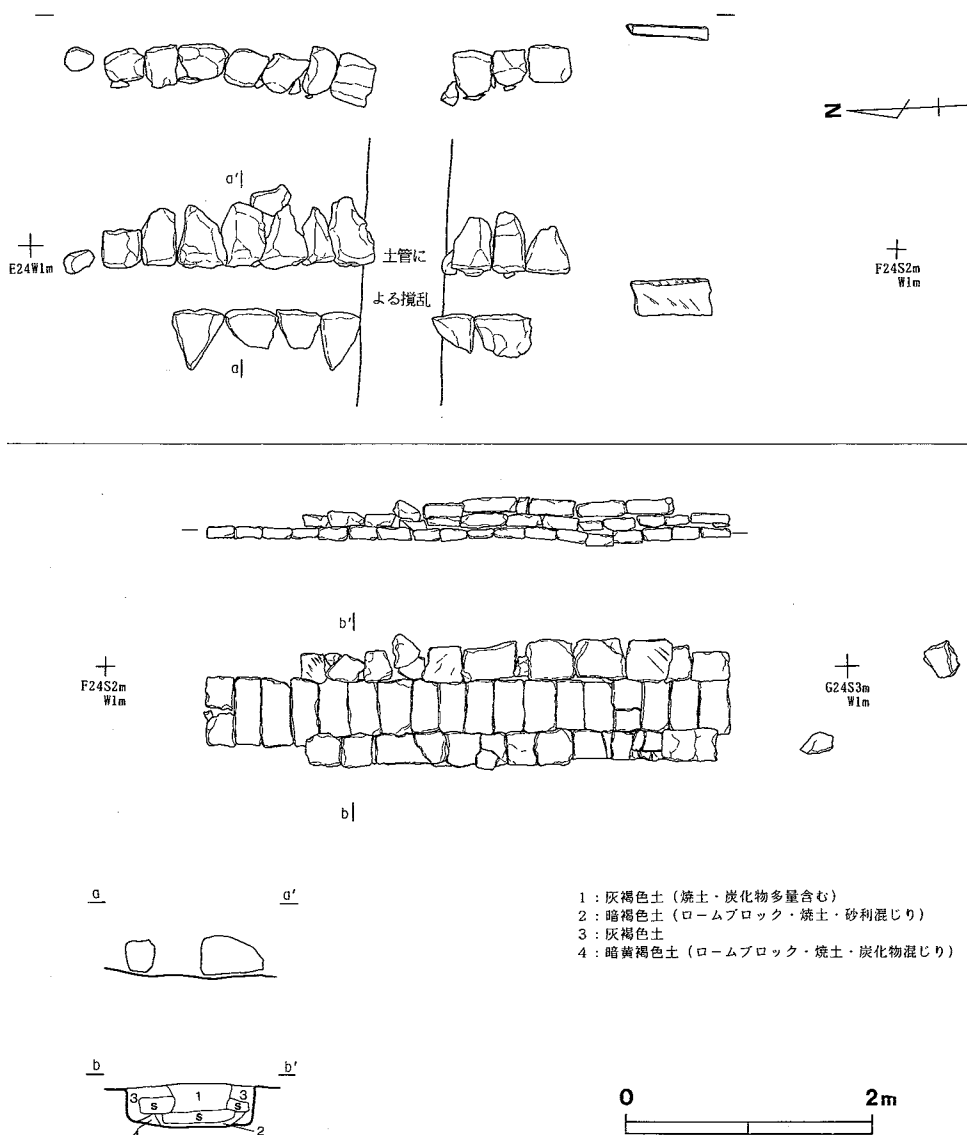


III-106図 F23-1, 24-1実測図 (a-a':14.1m, b-b':13.8m)

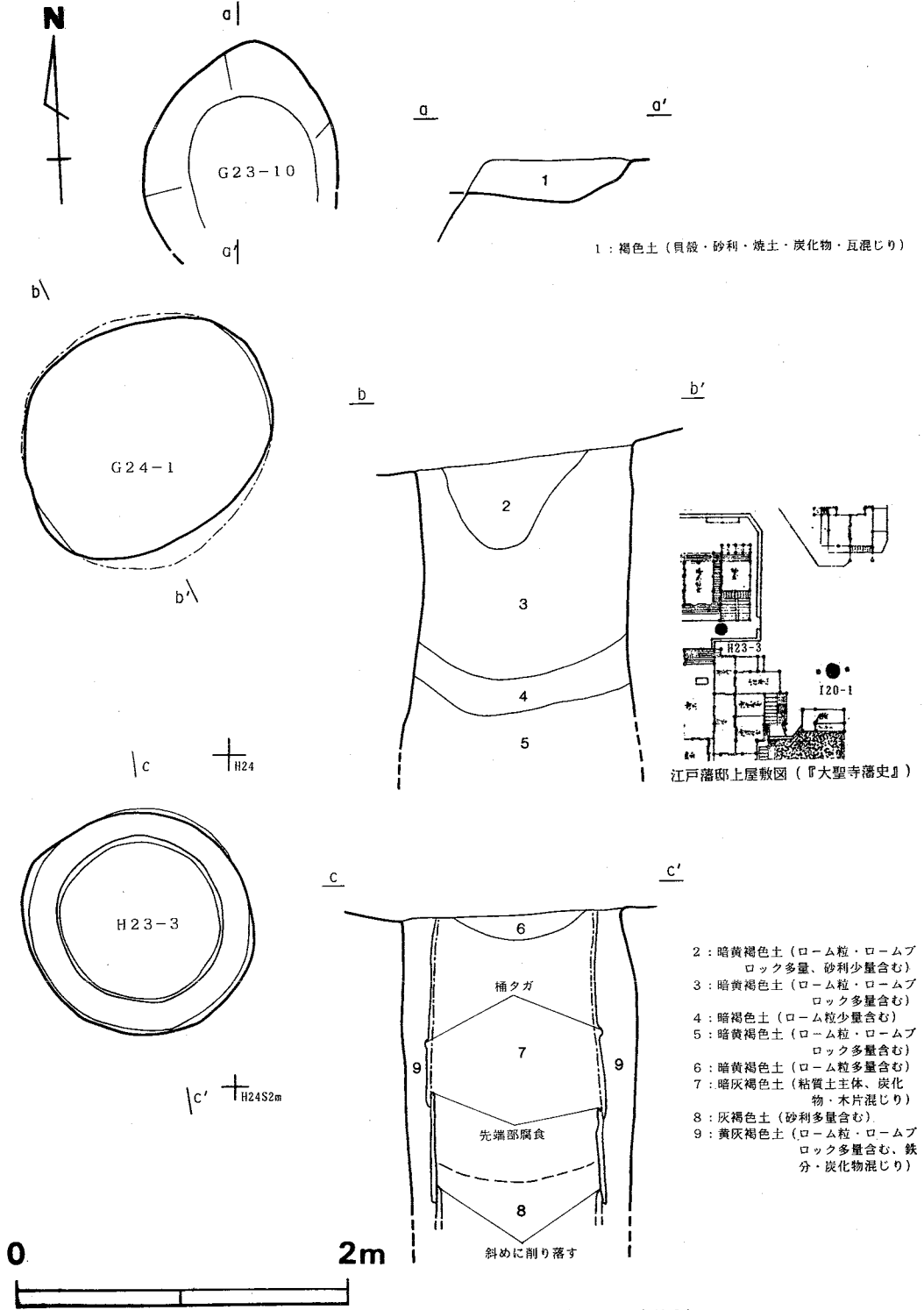
### 第三章 江戸時代の遺構

G24-4 G24・25区に主要部分のある溝状の遺構である。南北方向の溝が東西方向に曲がっている。自然面で確認されている。幅は50~80cm、深さは30cmほどで、凹凸がある(III-109図)。溝のなかに杭穴がみられる。埋土は暗褐色土である。層位的に古いことは確実であるが、性格ははっきりしない。地境の溝かとも思うが、明らかではない。(小川 望)

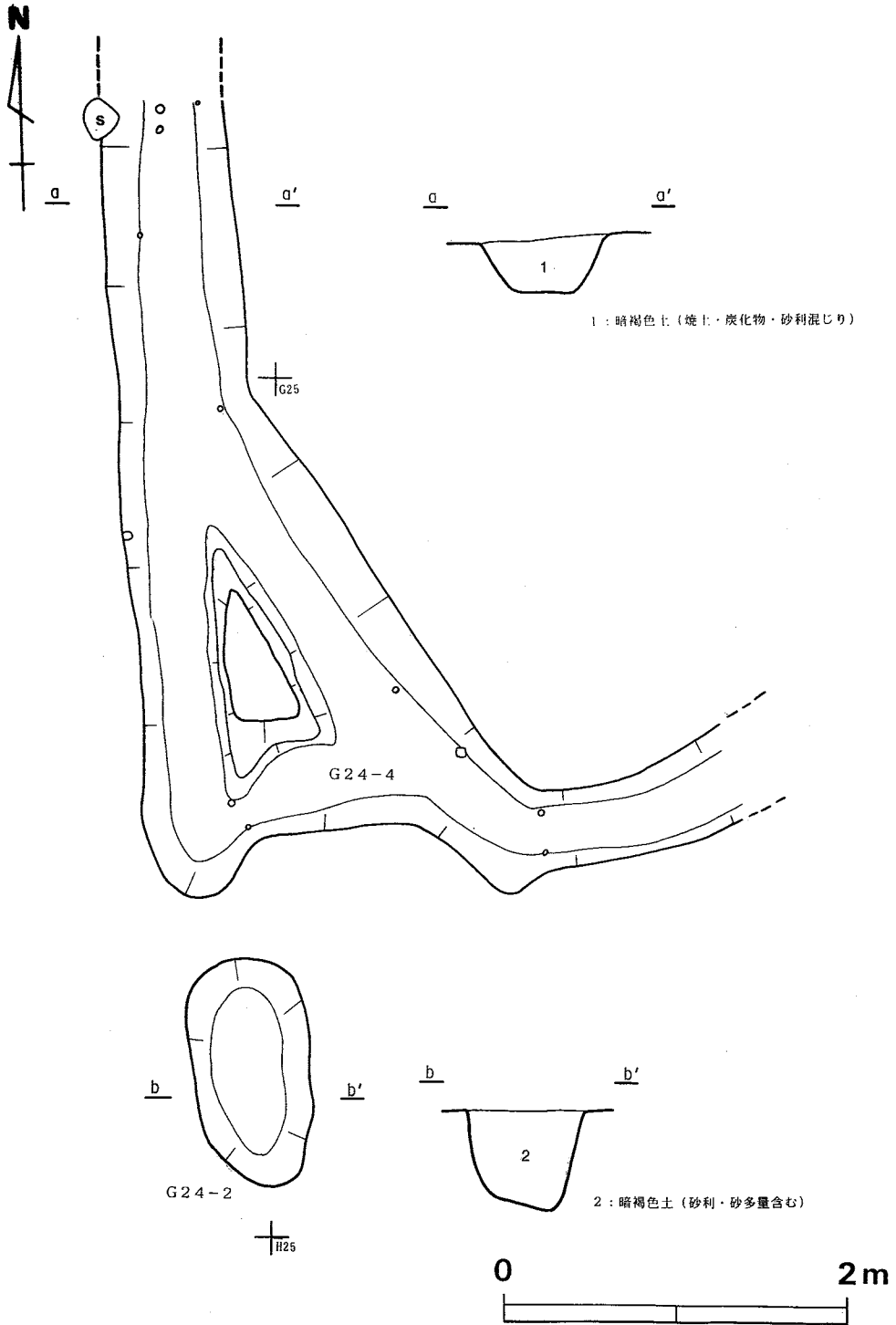
IV区6号溝 25ラインの東2mほどのところを真南北にGラインからLラインまで走る2本の溝である。東側の溝が古く下の砂利面と同じ時期に使用され、西側の溝が新しく下の砂利面を切って作られている。西側の溝と上の砂利面との関係は上の砂利面がはっきりとした形でここまで延び



7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23~22 区の遺構

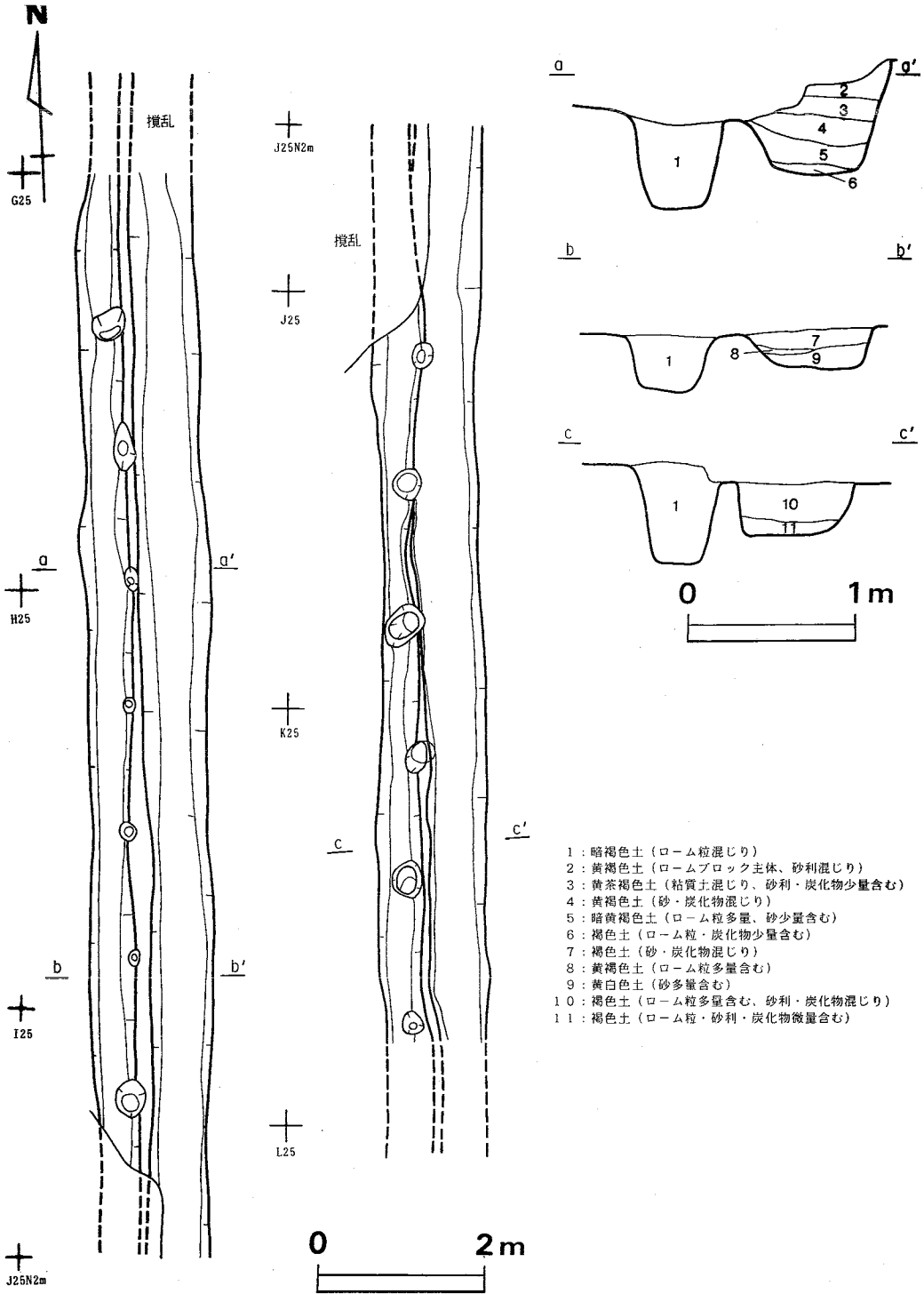


第三章 江戸時代の遺構



III-109図 G24-2・4実測図 (土層図の水準:11.8m)

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23~22 区の遺構



- 1 : 暗褐色土 (ローム粒混じり)
- 2 : 黄褐色土 (ロームブロック主体、砂利混じり)
- 3 : 黄茶褐色土 (粘質土混じり、砂利・炭化物少量含む)
- 4 : 黄褐色土 (砂・炭化物混じり)
- 5 : 暗黄褐色土 (ローム粒多量、砂少量含む)
- 6 : 褐色土 (ローム粒・炭化物少量含む)
- 7 : 褐色土 (砂・炭化物混じり)
- 8 : 黄褐色土 (ローム粒多量含む)
- 9 : 黄白色土 (砂多量含む)
- 10 : 褐色土 (ローム粒多量含む、砂利・炭化物混じり)
- 11 : 褐色土 (ローム粒・砂利・炭化物微量含む)

III-110図 IV区6号溝実測図 (土層図の水準:12.4m)



### 第III章 江戸時代の遺構

ていないので明らかではないが、一つの可能性として、同時期に使用されたことも考えられる。もう一つの可能性は、上の砂利面とこの上に構築される6号組石が同時に使われていたとするものである。状況証拠からは後者の可能性が強いが、確定的に決めることのできるものはない。北は排水管の掘り方にあたりわからなくなり、南はLラインの北1m以南にある破壊によってわからなくなる。東の溝の幅は60cm強、西の溝の幅は50cm強であり(III-110図)、深さは西に位置するものが深く、底の標高は11.6~11.7mで北に深くなる。東の溝の底は標高11.8~11.9mでこれも北に向かい深くなる。西側の溝の東よりに1.6mくらいの間隔で、径15~30cm、深さ15~40cmの杭穴が13ある。西側の溝の底で発見したもので、西側の溝より古い可能性が強い。おそらく東側の溝の時期の地境の堀用の杭の穴であろう。溝の埋土は西側がローム混じりの暗褐色土、東はローム・砂利混じりの褐色土が主体になっている。埋め戻しの際に使った土の差によるものであろう。遺物はほとんどない。

この下には部分的ではあるが、ほぼ同じ方向に走るIV区8・9号溝があり、さらに北側だけではあるが、6号組石がこの上に構築される。「延宝図」にある地境が長期にわたり地境の線であったことを示していよう。同時代にあった可能性のある12号組石、木樋との距離は木樋の中心と西の溝の中心が15.7m、東の溝の中心では15.1m、杭列の東端との間は15.4mであり、12号組石の西側の石の前面との間はそれぞれ、14.7、14.1、14.4mになる。江戸間で八間は14.5m強、六尺三寸間で八間は15.3m弱である。ほぼ八間であったのではないかと考えられる。この尺度の違いと考えられる差は、時期の違いと符合するのかもしれない。尺度の基準としてもっとも可能性のある木樋の中心と杭列の間が六尺三寸間で八間、組石の西側の面と新しい西側の溝の東端との間が江戸間で八間である。上の砂利面は道であった可能性が高いので、それぞれの時期の道幅ということになろう。いずれにせよ一時期は大聖寺藩の上屋敷の東端であった可能性のある溝である。(藤本 強)

**H24-1** H24区の自然堆積の上面で発見された土坑である。付近には遺構はない。径ほぼ1mの円形の土坑であり、深さも確認したところから1mである(III-111図)。底は地表下6.8mになる。埋土はロームと焼土の混じる黒褐色土である。遺物はない。用途・性格は不明である。(藤本 強)

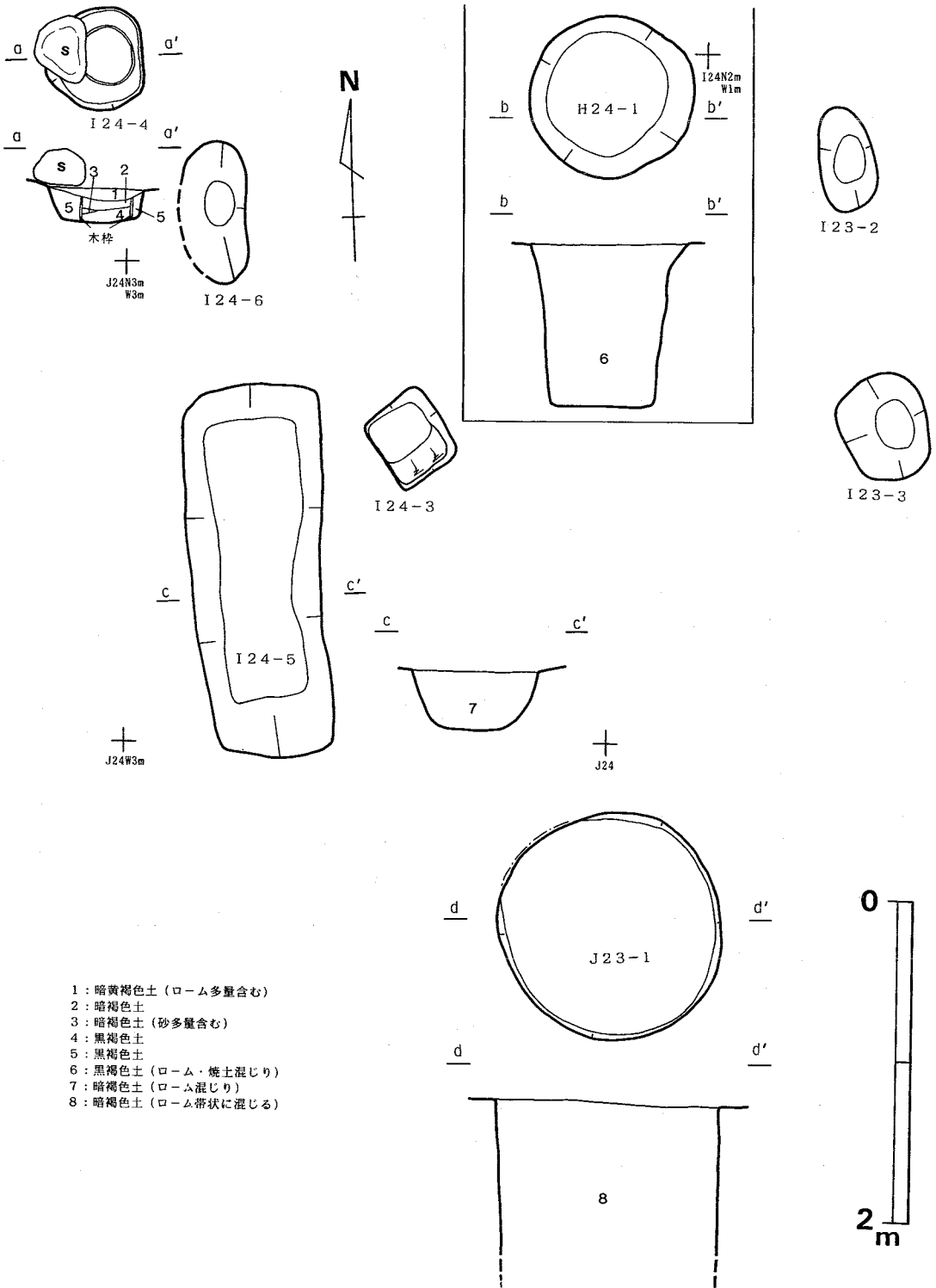
**I24-1-2** J・K24区にある円形の土坑である。自然堆積の面で確認している。IV区8・9号溝より古く、類似するJ24-1・2・3と同様の性格をもっていたものであろう。埋土は暗褐色土を主にする。深さは1が60cm、2が70cmである(III-112図)。植栽に関係するものかとも思われるが、確証はない。遺物はなく、時期は江戸時代初頭に近い頃かと思われる。(小川 望)

**I24-3-4** I24区にある土坑である(III-111図)。どちらも自然堆積の面で確認している。3は方形で、深さ10cm、埋土は暗黄褐色土で、遺物はない。4は円形の掘り方のなかに径30cm強の円形の木樁を埋め込んでいる。厠の下穴かと思うが埋土が違うし、大きさも小さい。遺物はない。時期は江戸時代初頭に近い頃かと思われるが、性格ははっきりしない。(小川 望)

**I24-5-6** I24区に南北に並ぶ土坑であるが(III-111図)、形は異なる。6は6号組石の下に位置する。埋土はローム混じりの暗褐色土である。遺物はない。(宮田安志)

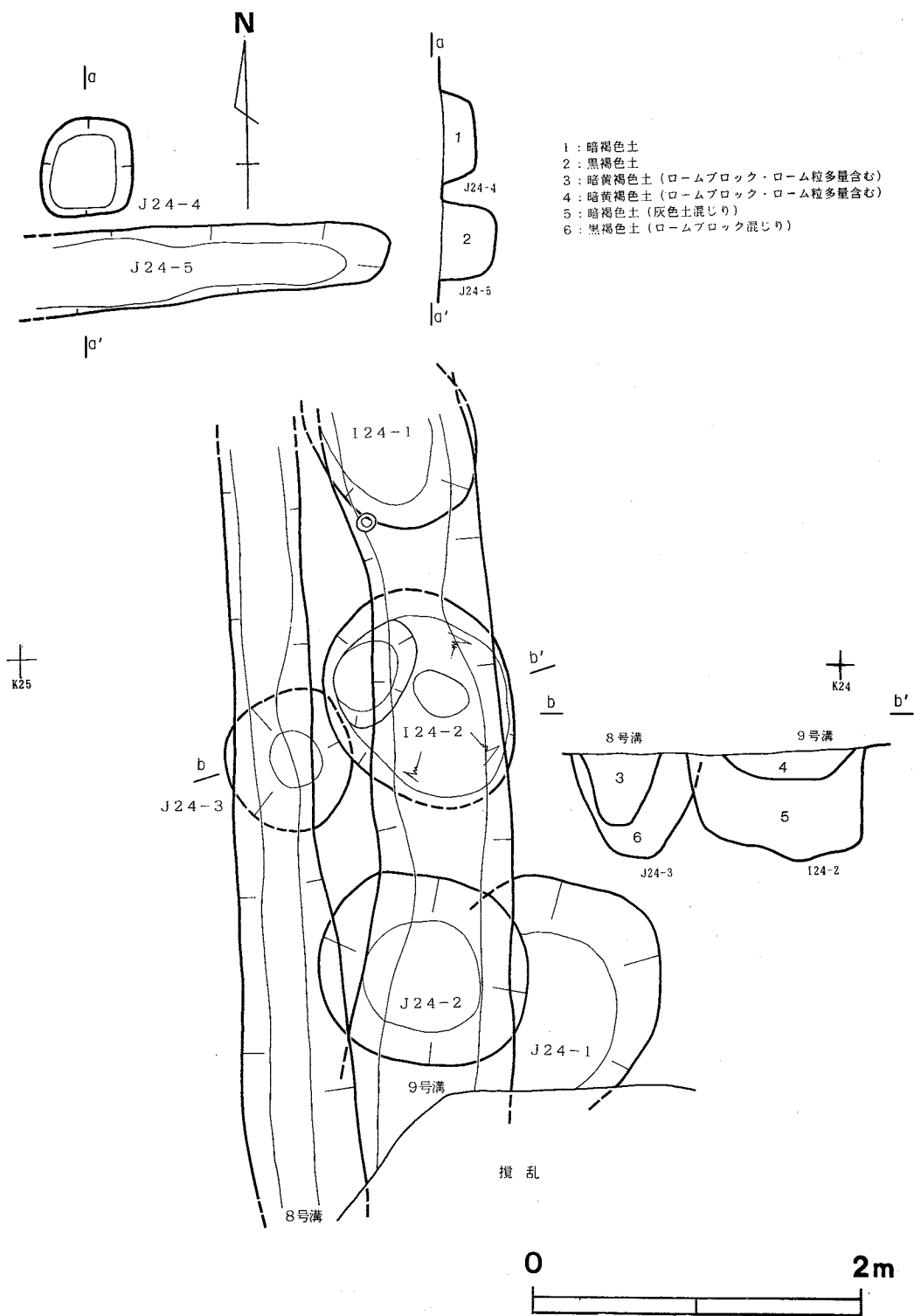
**J24-1-2-3** K24区の自然堆積の面で確認された円形の土坑である(III-112図)。IV区8・9号溝より古い。1・2は暗褐色土を埋土にし、深さは1が30cm、2が40cmである。3の埋土はローム混じりの黒褐色土で、深さは70cmと深い。遺物はなく、植栽に関係するものかと思うが確証はない。I24-1・

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23・22 区の遺構



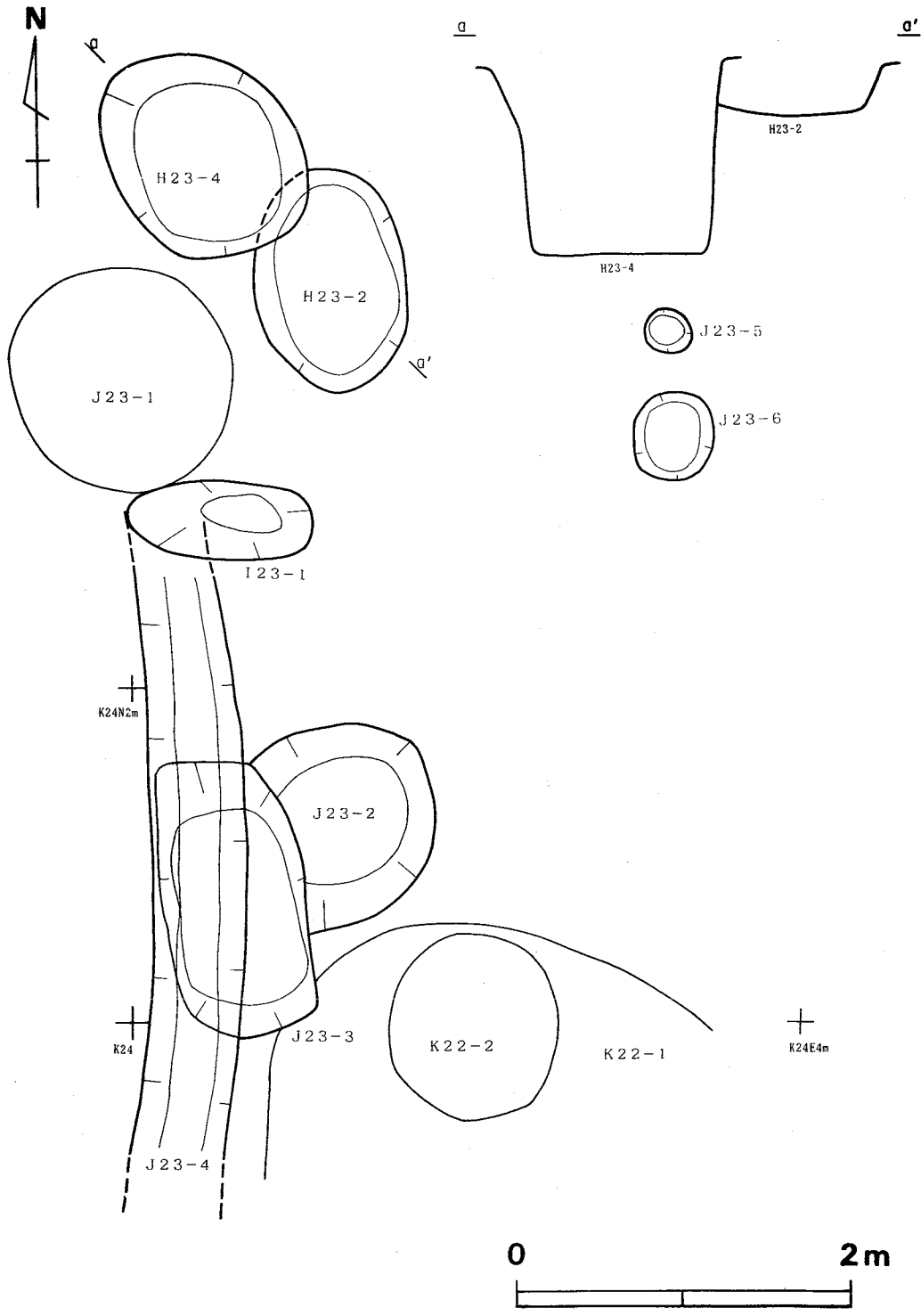
III-111図 H24-1, I23-2・3, I24-3~6, J23-1 実測図 (a-a':11.3m, b-b':10.4m, c-c':11.0m, d-d':12.2m)

第三章 江戸時代の遺構



III-112図 I24-1・2、J24-1~5、IV区8号・9号溝実測図 (土層図の水準:11.2m)

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23・22 区の遺構



III-113図 H23-2・4, I23-1, J23-2~6 実測図 (a-a':1:1.2m)

第三章 江戸時代の遺構

2と類似した遺構である。

(小川 望)

J24-4・5 J24区にある遺構で,4は方形の土坑,5は溝状の遺構である(III-112図)。4は暗褐色土,5は黒褐色土を埋土にしている。時期・性格は不明である。

(小川 望)

IV区 8・9号溝 J・K24区にある溝であるが,どちらも両端は破壊されている。切りあい関係があり8号溝が新しい。どちらもI24-1・2, J24-1・2・3を切っている。確認されたのは自然堆積の面であり層位的にみて江戸時代初頭に近い頃の溝であろう。8号溝は幅50~70cmで,深さは40cmで,V字形に近い断面形をしており,9号溝は幅80cm~1m,深さ20cm弱で,断面形はU字形である(III-112図)。埋土は8号が暗褐色土,9号が暗黄褐色土である。方向はほぼ真南北である。遺物はどちらも無い。この上にはIV区6号溝があり,この地点は長期にわたって屋敷のなかの地境になっていた可能性が高い。この付近の地割の尺度についてはIV区6号溝の項で述べている。

(小川 望)

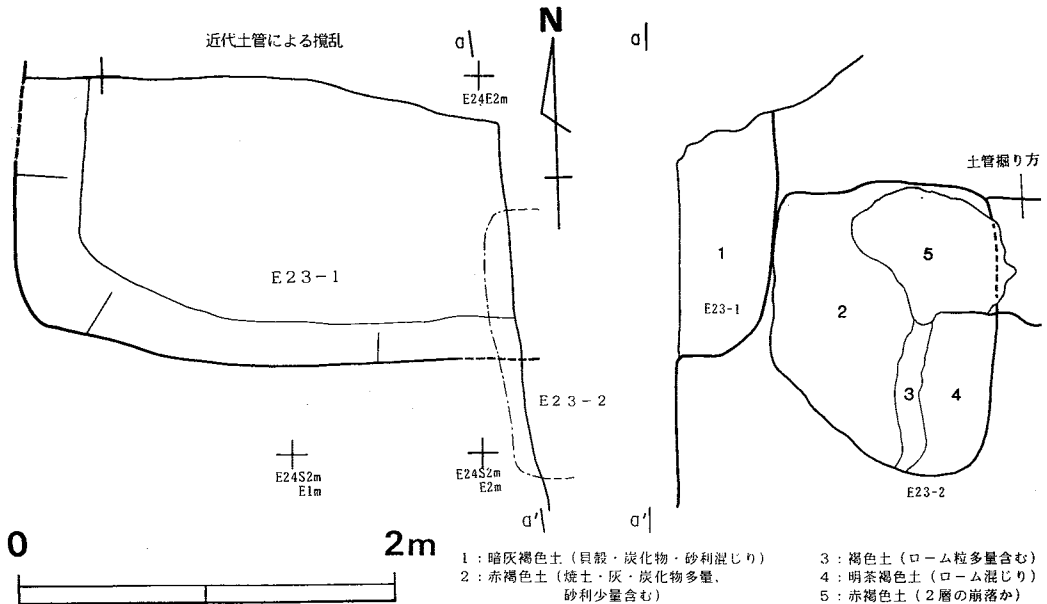
E23-1・2 E23・24区にある大きく破壊されている土坑である(III-114図)。1は南西の部分,2は西の端をわずかに残すのみである。両者は切りあっていた可能性が高いが,2はおそらく地下式土坑であり,その天井の上に1があるため,今回の調査では新旧関係を明らかにすることはできなかった。残っている部分から見ると,1は方形のかなり大型の土坑であり,2は地下式土坑であったものと考えられる。1は粗雑な仕上げで,2は丁寧に仕上げられている。1の埋土は貝殻・砂利・炭化物を多量に含む暗灰褐色土で,2は焼土・灰などを多量に含む赤褐色土が主になっている。1には18世紀後半の陶磁器などを主にする若干の遺物があるが,2にはほとんど遺物はない。

(松下理恵)

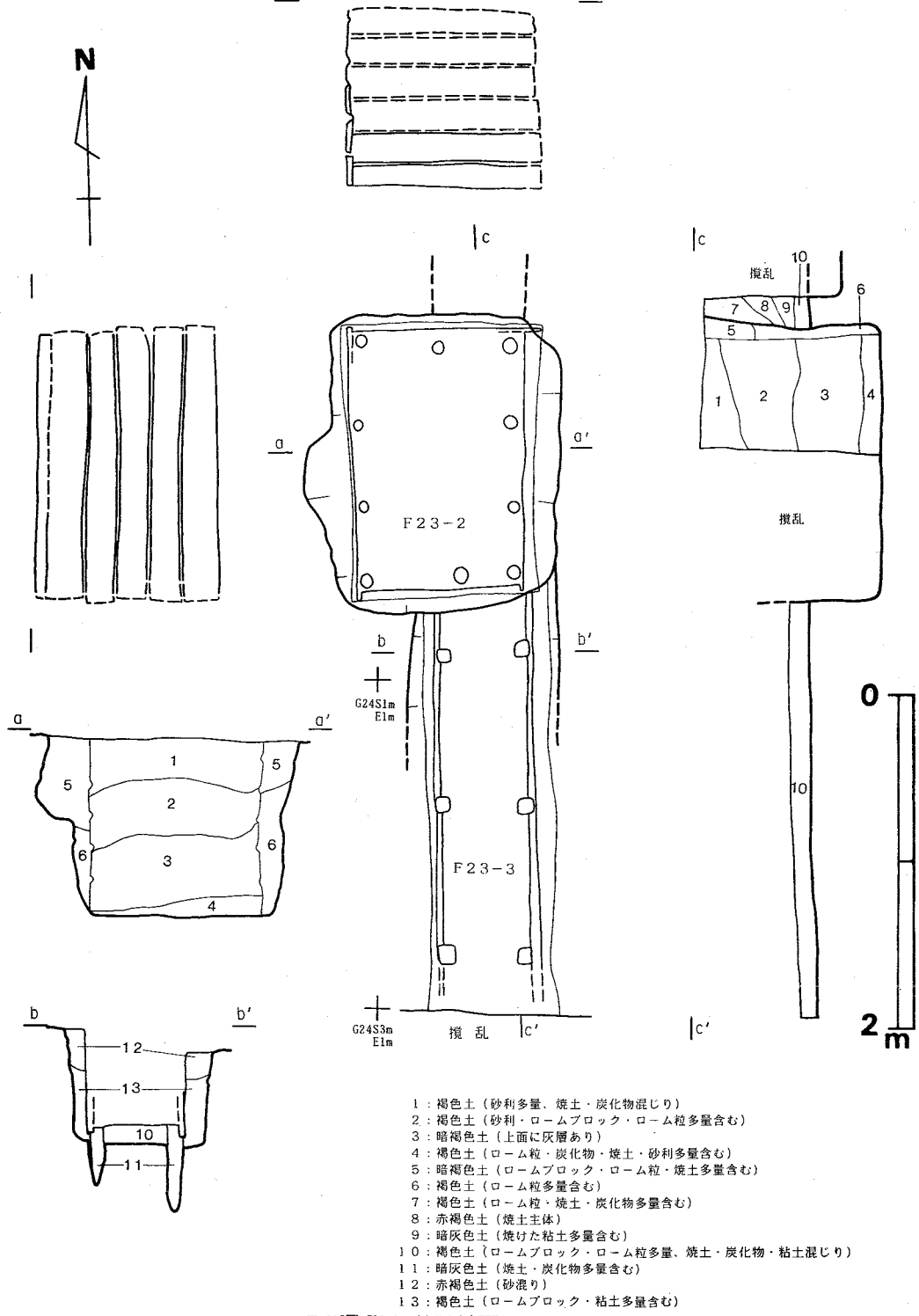
F23-1 F23区にある東西1.7m,南北1.5m,深さ70cmの楕円形の土坑である(III-106図)。西側の底に浅い落ち込みがある。埋土は灰白色の粘土であり,やや特殊な埋土である。17世紀後半から18世紀前半の陶磁器を主にし,少量の遺物の出土がある。性格は不明である。

(堀内秀樹)

F23-2・3 F23区にある切りあいのある土留め用の板壁のある土坑である(III-115図)。2が3を



III-114図 E23-1・2実測図(a-a':14.3m)



III-115図 F23-2・3実測図 (立面図の水準:14.4m)

### 第三章 江戸時代の遺構

切っており両者ともに大きく破壊されている。2はまず粗く掘られ、板で内貼りをし、板を木の杭で留めて、板と掘り方の間にロームを主にする褐色土を詰めている。板で囲まれている部分は南北1.5m、東西1m、深さ1mほどで、板の幅は20cmほどで、5～6枚が確認できる。杭はほぼ40cmの間隔で10本ある。杭穴の深さは40～60cmあり、十分深くまで打ち込まれている。板貼りの内側は丁寧に仕上げられており、底も平らである。3は2と同じ様にまず土を掘った後、板貼りをした遺構だが、2ほどには残っていない。幅50cm、長さは4m以上あることは確実であるが、全容は不明である。杭は90cm間隔で見られる。深さは40～50cmある。2の杭は丸く、3の杭は角材であったものと考えられる。3の底にはロームを主体にする土が厚さ10cmほど盛られ、固く叩き締められている。2の埋土は焼土・砂利を含む褐色土を主にする土が水平に堆積しており、意図的に埋め戻されたことを示しており、19世紀の前半から幕末にかけての瓦や陶磁器を主にする遺物がかなり大量に出土している。そのなかで、灰釉の徳利が固まって出土しているのが目に付いた。3は埋土がほとんどなく、遺物も認められなかった。2と3は切りあい関係のある土坑であるが、両者とも板貼りという特殊な構造をもっており、遺構の東の端が両者一致しているので、なんらかの有機的な連関をもっていたと考えるのが妥当であろう。それがどのようなものであったのかは両者の性格と深く関わることである。それを明らかにする積極的な証拠は見いだし得なかった。(松下理恵)

G23-1・2・3・4・5・6・7・8・9, H23-1 G・H23区の小土坑と杭穴である(III-121図)。5はやや大きな土坑の一部であるが、他はいずれも小さな土坑と杭穴である。暗褐色土もしくは灰褐色土を埋土にしているものが多い。遺物はほとんど出土していない。時期・性格は不明。(堀内秀樹)

G23-10 G23・24区にある上部を破壊された土坑である(III-108図)。内部には19世紀代の瓦・陶磁器の小片がかなり含まれていた。ゴミ穴かと思われる。(松下理恵)

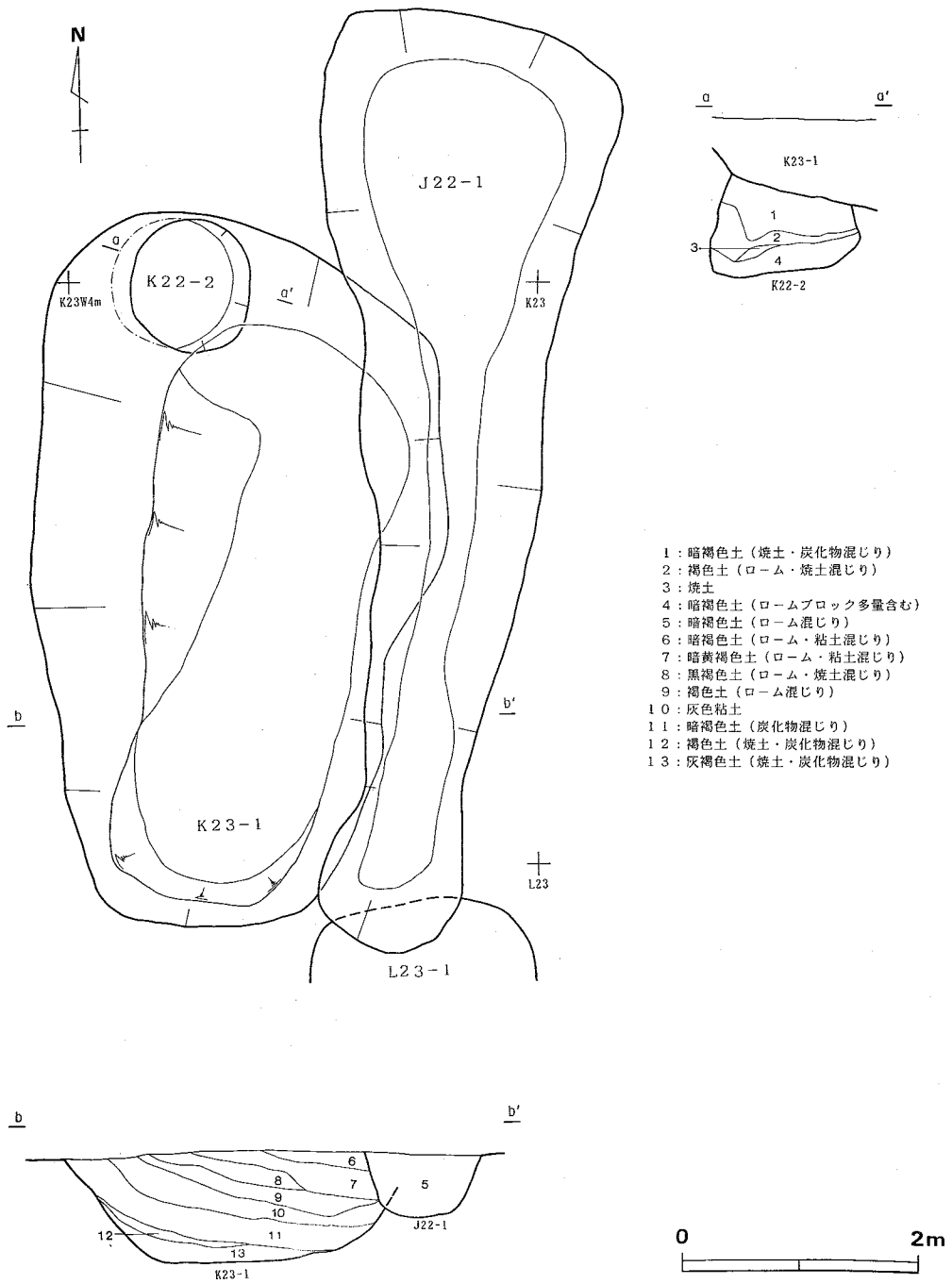
H23-2・4 J24ポイントの周辺にある自然堆積の面で確認した土坑である(III-113図)。切りあい関係があり、4が新しい。どちらも楕円形で、深さは2が30cm、4が1.1mである。埋土は2が暗褐色土、4が黒褐色土である。少量の遺物が出土している。性格は不明である。(小川 望)

H23-3 H24区に主要部のある井戸である。上部は大きく破壊されていて自然堆積の上面で初めて確認されたが、より上部に掘り込み面はあったものと考えられる。径1.4mの掘り方のなかに、井戸側として径1mの桶を入れている(III-108図)。桶は三段が見られた。一番上のものにはタガのあとが残っている。桶は下のものがなかに入るがその先端部は斜めにそぎおとされている。桶と掘り方の間にはローム混じりの黄灰褐色土が詰められている。桶のなかの埋土は暗～灰褐色土が入っている。19世紀初めから中葉にかけての各種の遺物がかなり多量に出土している。この井戸は『大聖寺藩史』所収の文化年間の絵図にある「女中居住部分」の前にある井戸である可能性がきわめて強い(III-108図参照)。(小川 望)

I23-1・2・3 I・J23区にある小土坑である(III-111・113図)。自然堆積の面で確認されている。1は深さ55cmと深いが、2・3は10cm内外の深さである。いずれも暗褐色土を埋土にしている。遺物はなく、性格は不明である。(小川 望)

J23-1 J23・24区にある井戸である。径1.5mほどの円形であり、何の施設の痕跡も発見していない(III-111図)。確認したのは上の砂利面であるが、この部分は破壊が深くまで及んでいたため、

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23~22 区の遺構



III-116図 J22-1, K22-2, K23-1実測図 (土層図の水準: 11.2m)



### 第三章 江戸時代の遺構

より上から掘られていた可能性が強い。埋土は上部に人頭大の石があり、ロームと暗褐色土が10cmほどの厚さで帯状に交互に堆積している。遺物はない。素掘りの井戸である。(宮田安志)

J23-2・3 J23区にある自然堆積の面で確認された、切りあい関係のある土坑である。3が新しい。3は4に切られている(III-113図)。深さは2が20cm, 3が50cmで、埋土は暗褐色土である。どちらにも遺物はない。性格は不明である。(宮田安志)

J23-4 J23区にある溝状の遺構である(III-113図)。自然堆積の面で確認された。ほぼ南北に若干湾曲している。幅は50cmで、深さ30cmである。両端は破壊されている。8号溝との中心間の距離は3.8mで六尺三寸間の二間にあたる。遺物は陶磁器を中心に若干のものが出土している。屋敷内の地境の溝であった可能性がある。(宮田安志)

J23-5・6 どちらも小型の土坑である(III-113図)。自然堆積の面で確認している。埋土はローム混じりの黒褐色土である。植栽に関係したものであろう。(宮田安志)

K23-1 K23区に主要部分がある南北6m, 東西2.8m, 深さ0.9mの小判形の土坑である(III-116図)。K22-2を切り、J22-1に切られている。上部は削平されているので明らかでないが、江戸時代初頭の遺構であることは間違いない。埋土は上部はローム混じり、下部は焼土・炭化物混じりの暗～灰褐色土が主体である。底近くに少量の植物の腐食したものが、鉄分の浸透もあるので少なくとも一時的には水に漬かっていたのであろう。17世紀後半の火を受けた陶磁器を中心にした遺物が若干ある。(宮田安志)

L23-1・L22-1 この付近のLラインより1m南には深い攪乱が入っており、その深さは地表から5mをこえるものであった。その下で発見したのがこれらの遺構である(III-117図)。L22-1は東西2.5m, 南北2.0mの不整な方形をしていて深さは現存0.9mである。調査が梅雨時になったため湧水に悩ませられた。埋土の主体は水性の堆積物と考えられる。遺物はほとんどない。L23-1はL22-1・J22-1に切られている。東西2.1m, 深さ0.95mの隅丸方形の土坑である。南北は現存2.4mで本来は3mをこえていたと思われる。ローム・砂利・炭化物混じりの暗褐色土を埋土にしている。遺物は17世紀前半の陶磁器などが少量出土している。両者ともに上には厚い江戸時代の盛土がある。層位的にみて江戸時代初めの遺構と考えることができる。性格は両者ともにわからない。なお、L23-1の東にこれに切られた立ち上がりかと思われるものがあったが、十分に追跡できなかった。ローム混じりの暗褐色土を埋土にしている。(藤本 強)

E22-1 E22区にある比較的大型ではあるが、不整な形の土坑である(III-118図)。底、壁ともに凹凸が激しく、埋土は焼土・炭化物・貝殻混じりの褐色土である。18世紀中葉から後半の各種の遺物が多量に出土している。形態・埋土からゴミ穴であったものと考えられる。(小川 望)

F22-1 F22区にあり、F21-1に切られた底に石の入った杭穴である(III-119図)。時期・性格は不明である。(小川 望)

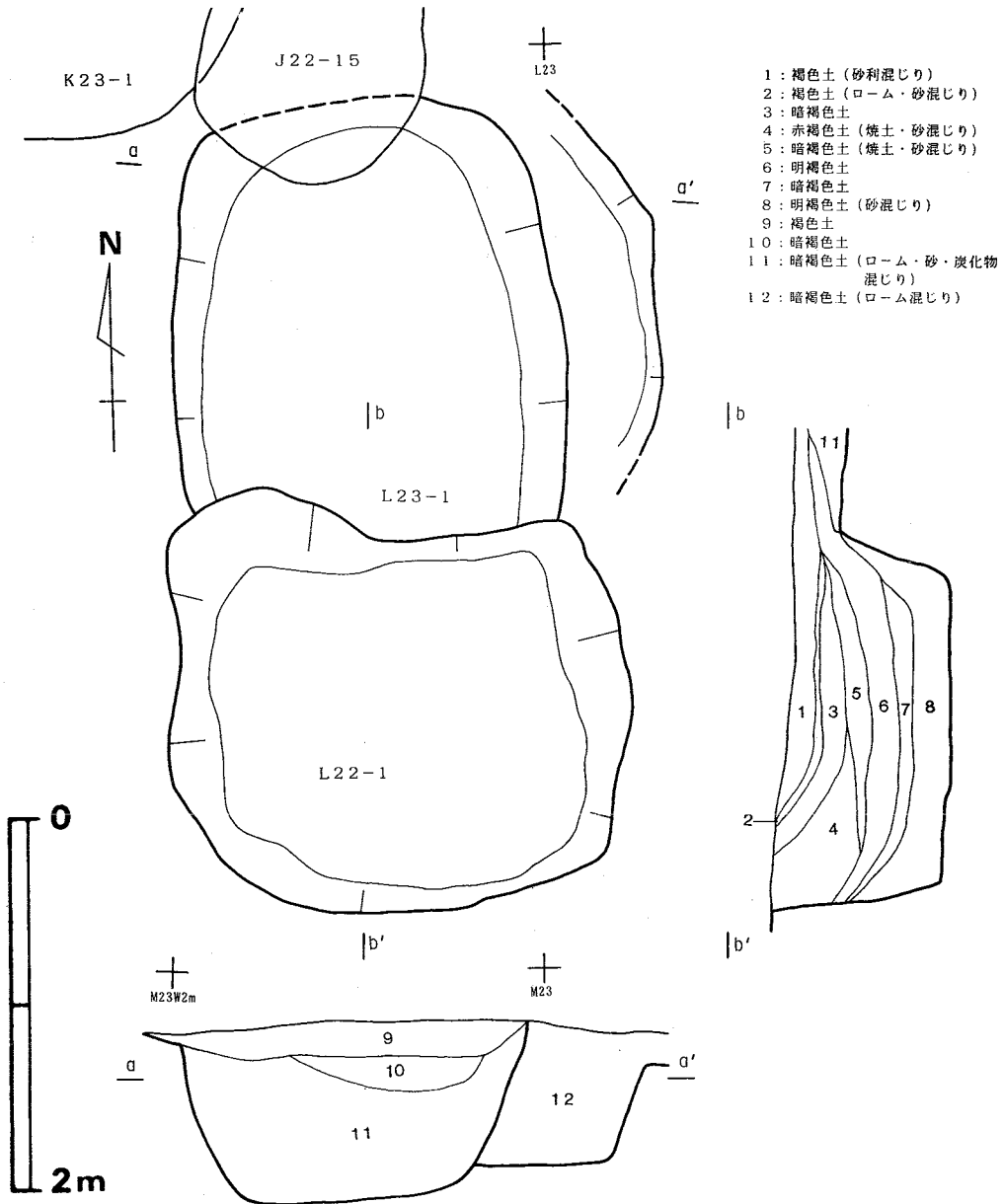
F22-2 F22区にある溝状の遺構である。細長い階段状の遺構であるが、きわめて不整な作りである(III-119図)。中と外に杭穴が一つずつあるが、付属するものかどうか不明である。暗黄褐色土を埋土にしている。若干の遺物が出土している。性格は不明である。(萩尾昌枝)

F22-6・7・8・9・10・11・12 F22区南西にある土坑群である(III-119図)。南北に長軸をもつ長方形

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23・22 区の遺構

の7と11と12を含む長方形の掘り込みがほぼ並行してあり、西の7のなかに径0.6mほどの円形の9と10があり、東はやはり円形の11と12がある。7の東北と東南の隅に径20cmくらいの6と8がある。相互に切りあい関係はあるが、位置関係からみてほぼ同時に作られたとみるほうが妥当であろう。7は9・10の掘り方であった可能性が強い。一連の厠の下穴とその付属施設であった可能性もあるが、他のそれと考えているものとは埋土が異なり、確証はない。遺物はほとんどない。(藤本 強)

G22-1・2・3・5・8・9・10・11・12 G22・23区の境界にある土坑と杭穴である。1 は 2・3を切っており新しい。5は 3 を切っている。3がもっとも古い。1は上部で、東西1.3m, 南北0.8m, 底で東西1.3



III-117図 L22-1, L23-1実測図 (土層図の水準:11.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

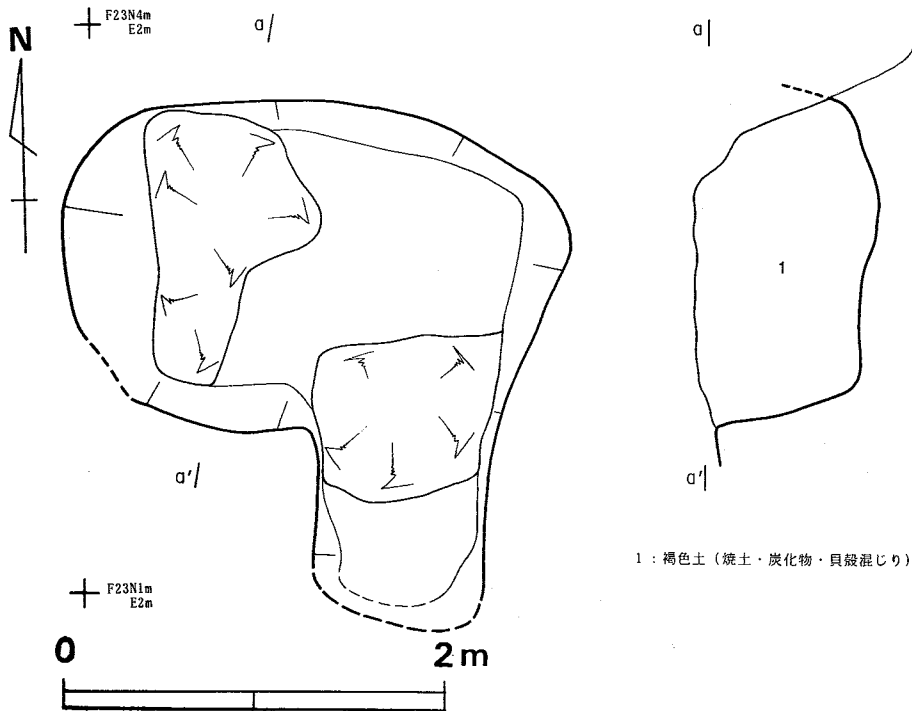
m, 南北1mの長方形であり、深さは2.4mと深い(III-120図)。袋状を呈す土坑である。2・5は径0.4m, 深さ30cmほどの円形の土坑である(III-121図)。2のなかには壊れた円礫が入っていた。3は西側を1によって切られているが、全形を知ることにはできる(III-120図)。東西1.9m, 南北1.7m, 深さ1mの長方形の土坑である。1の埋土は焼土・炭化物を含む黄～赤褐色土で、上部に18世紀前半の磁器を中心とする遺物がある。3の埋土はロームの混じる黄～茶色土であり、下部から若干の遺物が出土している。2の埋土は砂利・炭化物の入る茶褐色土、5の埋土は炭化物混じりの黒褐色土である。8・9・12は周辺の杭穴であり、10と11は小土坑である(III-121図)。(宮田安志)

G22-4・6・7・13・14・15・16・17 円形の土坑である。4は径1.2m, 深さ0.6m, 6は径1.7m, 深さ0.5mである(III-122図)。4の壁は垂直に近いが、6の壁は緩やかに立ち上がる。6の埋土は焼土・炭化物の混じる黄～褐色土を主にし、4の埋土はローム混じりの黄～灰褐色土である。遺物は少ない。なお、両者の間にG22-7・13・14・15・16・17の杭穴と考えられるもの6がある。埋土は暗褐色土のものが多いが深さ、大きさともにまちまちであり、一時期のものとはできない(III-122図)。(宮田安志)

H22-1・2・3 H22区にある小土坑である(III-121図)。1・3は方形, 2は円形である。20～30cmの深さがあり、暗～灰褐色土の埋土であり、1には少量の遺物がある。性格は不明。(堀内秀樹)

J22-1 23ラインのやや西, J～Lにまたがる長大な土坑である。南北8.2m, 東西は北で2.1m, 南で0.8mである(III-116図)。不整な形をしており, K23-1, L23-1を切っている。ローム混じりの暗褐色土を埋土にしている。遺物はないが、層位的にみて江戸時代初頭の遺構である。(宮田安志)

J22-2 J22区の自然推積の上面で発見された遺構である。K22-3により切られている。東西1m

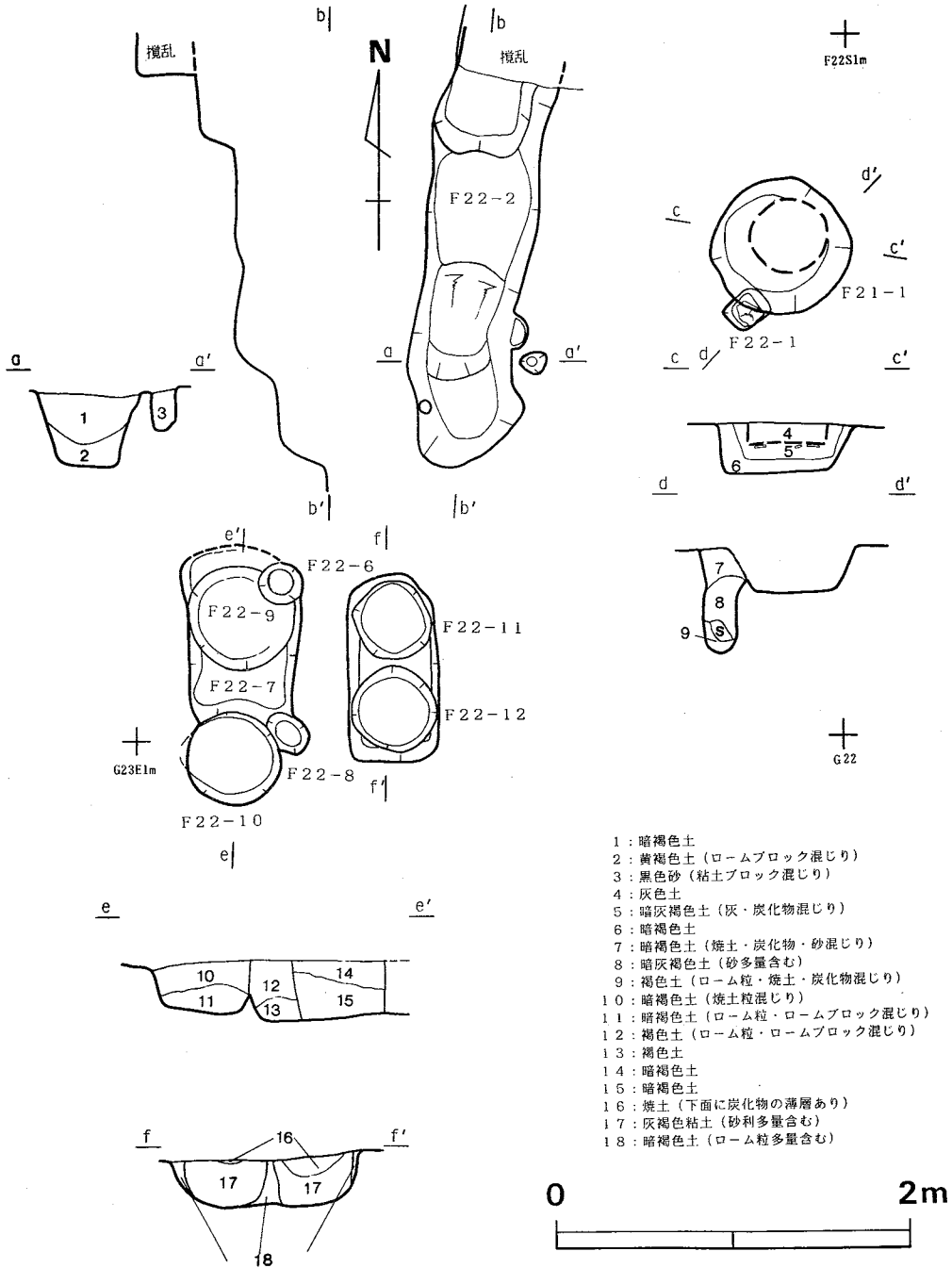


III-118図 E22-1実測図(a-a':14.0m)

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23~22 区の遺構

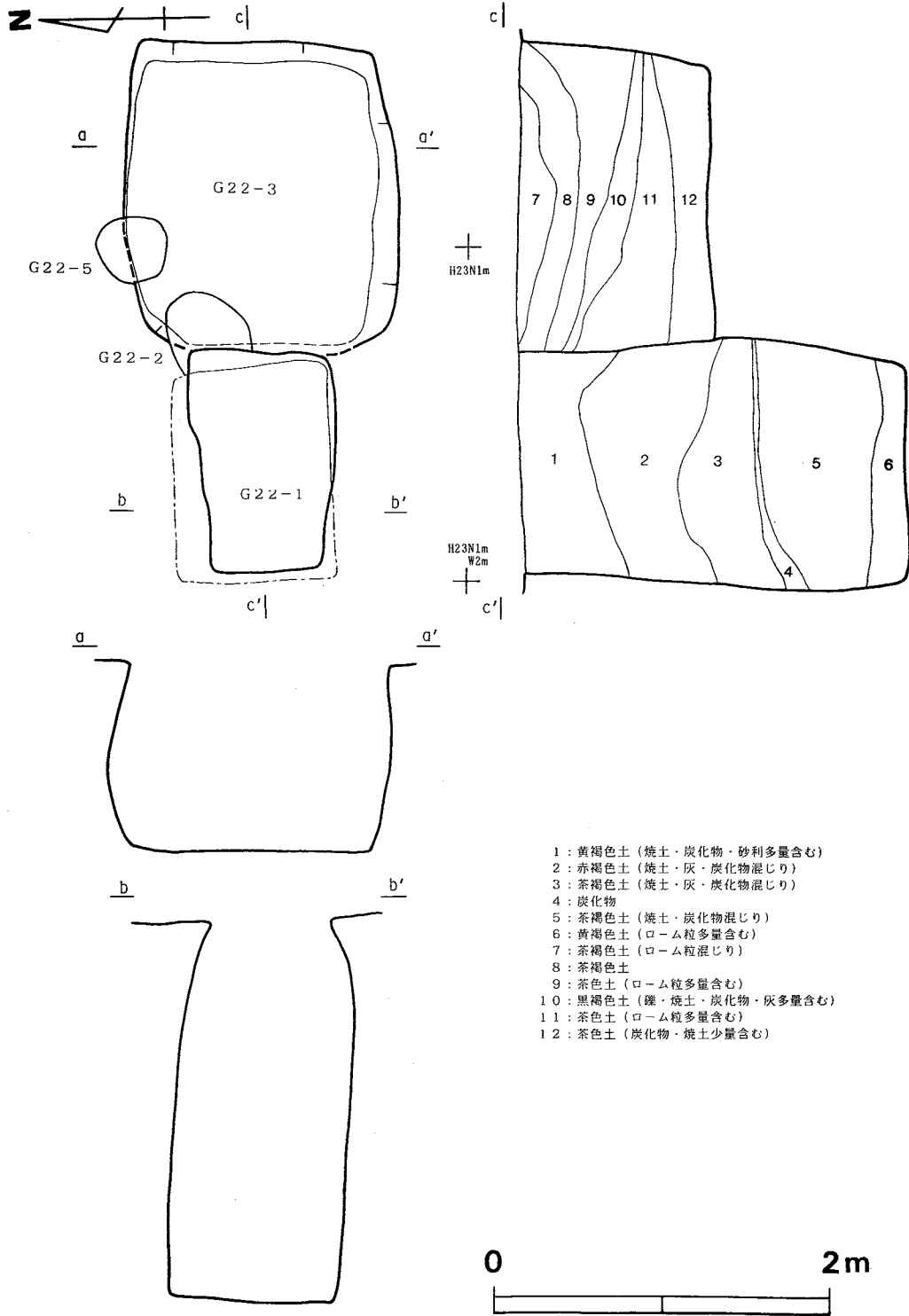
弱, 深さ85cmで, 不整な形をしている(III-123図)。なかに杭穴がある。埋土は暗~黒褐色土であり遺物はない。性格は不明。  
(成瀬晃司)

K22-1 K22・23区に位置する地下式土坑である(III-124図)。西側の半分は破壊され, 底付近が



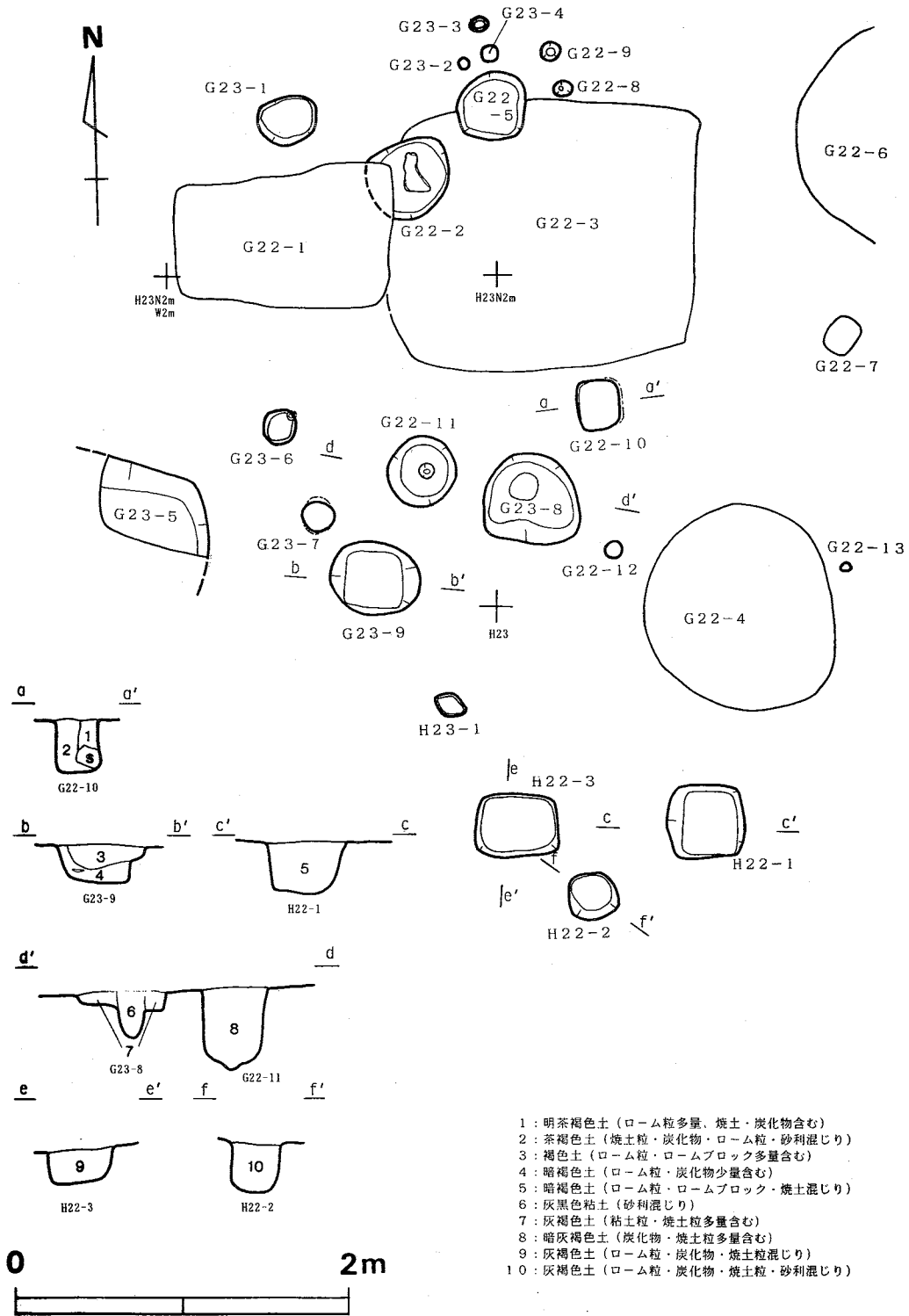
III-119図 F21-1, F22-1・2・6~12実測図(土層図の水準:14.5m)

第三章 江戸時代の遺構



III-120図 G22-1・3実測図 (土層図の水準:14.4m)

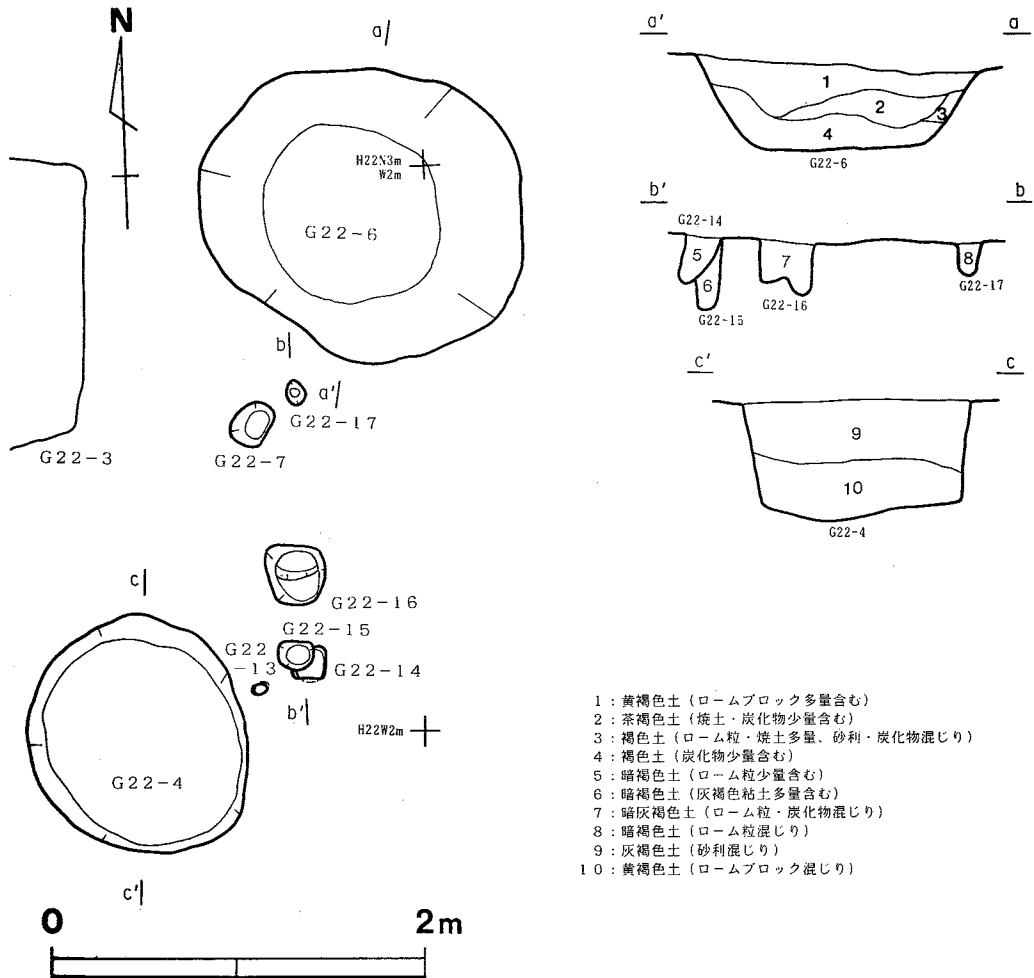
7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23・22 区の遺構



III-121 図 G22-2・5・8~12, G23-1~9, H22-1~3, H23-1 実測図 (土層図の水準: 14.3m)

### 第三章 江戸時代の遺構

わずかに残っているだけであった。平面形は長方形であり、規模は東西4.7m、南北2.3mである。隅は西側ではほぼ直角で壁もほぼ垂直に立ち上がっているが、東側は隅丸で壁も緩やかに立ち上がる。壁の最大の高さは1.5m強であり、底は下の砂利面を利用しているが、東側には壁にそってコの字形のテラスをもっている。テラスの面は上の砂利面を利用し、底との段差は35cmほどである。コの字形テラスに囲まれた底の東側の四隅には、杭穴と考えられる径10cmほどの浅い小穴があり、相互の距離は東西1.4m弱、南北1.0mである。埋土は底から80cmまではローム混じりの褐色土と焼土を主体とする暗赤褐色土が交互に二回堆積し、その上には南方向からの暗褐色土の流入がみられる。底のすぐ上の南北の壁際には一辺が20cmの断面が方形の土層があるが、これは柔らかく木材(角材)を設置した痕跡である。これはテラスの西で確認され、南壁では3.0m弱であり、北壁側では東に掘り込みがあって3.2m強になる。本土坑は土の天井のない地下式土坑と考えられる。このタイプは I20-3にみられるように屋根を構築して半地下式土坑として利用されたものと思われる。ただし、この土坑の場合には I20-3にあった柱穴はない。想像の域を出ないが、底に設置した角材を基礎の横



- 1 : 黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 2 : 茶褐色土 (焼土・炭化物少量含む)
- 3 : 褐色土 (ローム粒・焼土多量、砂利・炭化物混じり)
- 4 : 褐色土 (炭化物少量含む)
- 5 : 暗褐色土 (ローム粒少量含む)
- 6 : 暗褐色土 (灰褐色粘土多量含む)
- 7 : 暗灰褐色土 (ローム粒・炭化物混じり)
- 8 : 暗褐色土 (ローム粒混じり)
- 9 : 灰褐色土 (砂利混じり)
- 10 : 黄褐色土 (ロームブロック混じり)

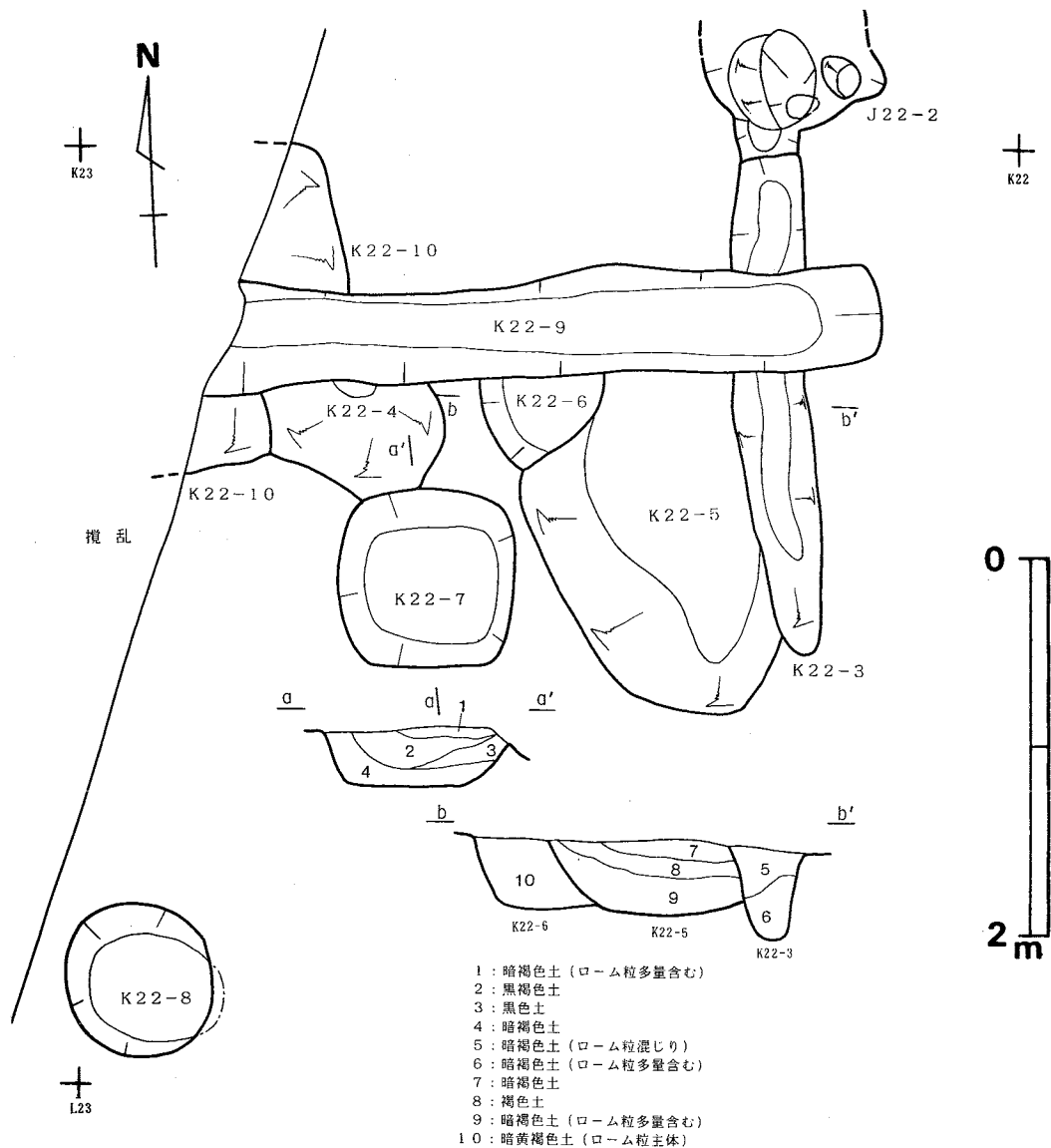
III-122図 G22-4・6・7・13~17実測図 (土層図の水準:14.4m)

7 E 24~22, F 24~22, G 24~22, H 24~22, I 24~22, J 24~22, K 24~22, L 23・22 区の遺構

木にしその上に主な柱を建て上屋を構築したのではないかと考える。東側の杭穴はその径から主柱ではなく入口の施設に係るものと思われる。遺物はほとんど検出されなかった。(成瀬晃司)

K22-2 K・J23区の境界に位置する(III-116図)。径1.1mの円形で、上部はK23-1により壊されている。下膨れの袋状の土坑である。焼土の混じる暗褐色土を主体にしている。埋土中に焼土の塊がある。この下から17世紀前半の「かわらけ」を主体にした遺物が出土している。(宮田安志)

K22-3・9 K22区にある溝状の遺構である。自然堆積の上面で発見されている。3は南北方向のものであり、9は東西方向である。9が3を切っている。付近には自然堆積の上面で発見された数多くの土坑があるが、9がもっとも新しく、3がこれに次ぐ。3は幅0.4m、9は幅0.5mで、深さ両者とも50cm

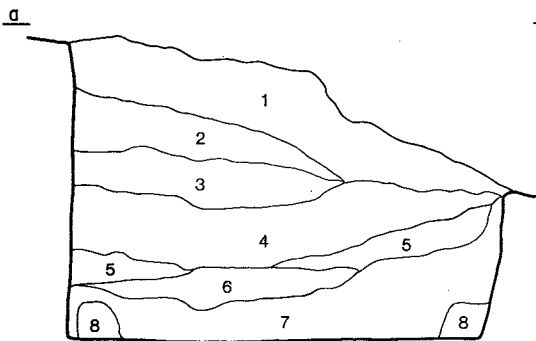
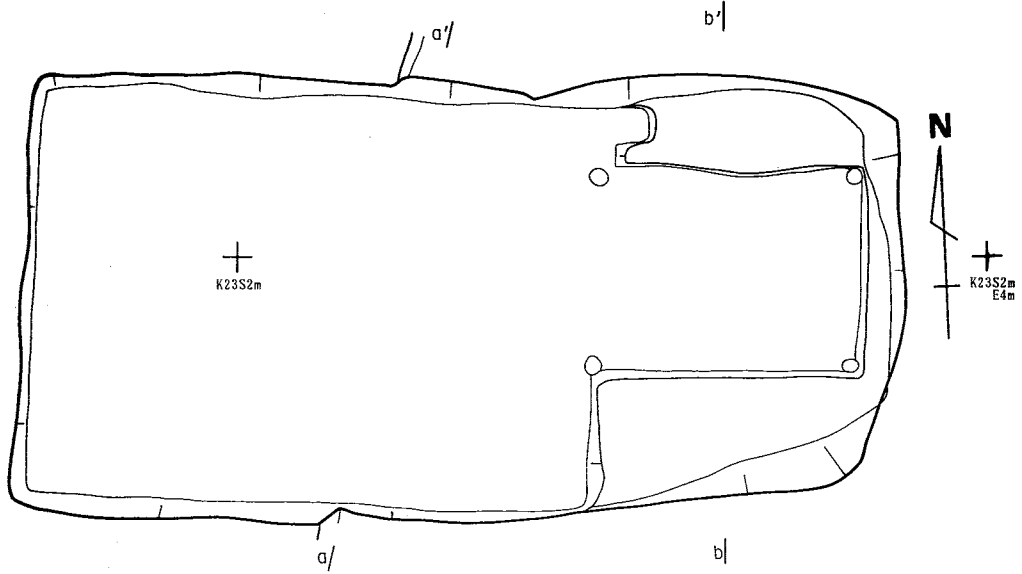


III-123図 J22-2, K22-3~10実測図 (土層図の水準: 11.2m)

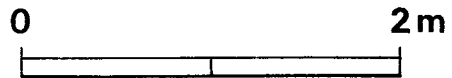
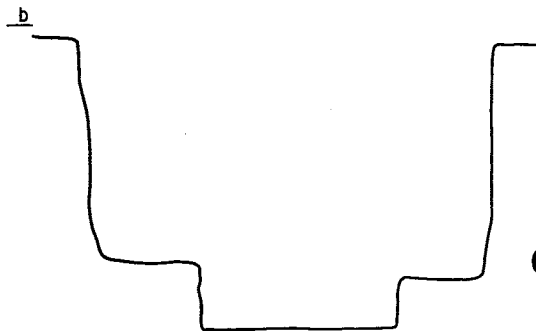


### 第三章 江戸時代の遺構

内外である(III-123図)。3はローム混じりの暗褐色土を,9はローム混じりの黒褐色土を埋土している。3の方向は真南北から若干振れるが,9の方向はほぼ真東西である。遺物はない。底に水の痕跡もなく,また両端が止まっているので,建築の基礎に関する遺構かとも考えられるが,周辺に関



- 1: 暗褐色土 (焼土粒多量含む)
- 2: 暗褐色土 (焼土・砂利混じり)
- 3: 暗褐色土 (砂利多量含む、焼土粒混じり)
- 4: 暗赤褐色土 (焼土粒主体、砂利少量あり)
- 5: 褐色土 (ローム粒混じり)
- 6: 暗赤褐色土 (焼土粒主体、焼土ブロック多)
- 7: 褐色土 (ローム粒極多)
- 8: 褐色土



III-124図 K22-1実測図 (土層図の水準:13.8m)

## 8 E21~19, F21~19, G21~19, H21~19, I21~19, J21~19, K21~19区の遺構

連する遺構もなく確証はない。

(成瀬晃司)

**K22-4・5・6・7・8・10** K22区にある土坑である。いずれも自然堆積の上面で発見している。8はやや離れて独立しているが、他は相互に切りあい関係をもつ。4は10を切り 7・9に切られている。5は6を切り、3・9に切られている。4は径1m、深さ50cmの不整な円形、5は現存2m弱、深さ40cmの不整な楕円形、6は円形であろうが、深さ40cmほどである。7は一辺1m弱、深さ30cmの方形、8は径0.8m、深さ1m強の円形、10は規模不明である(III-123図)。埋土は8を除きロームを含むことの多い暗褐色土である。8は灰褐色土を埋土にしており特殊である。5に少量の陶磁器の小片があるのみである。8は形・埋土からみて厠の下穴の可能性が強いが、他の土坑の性格は不明である。(成瀬晃司)

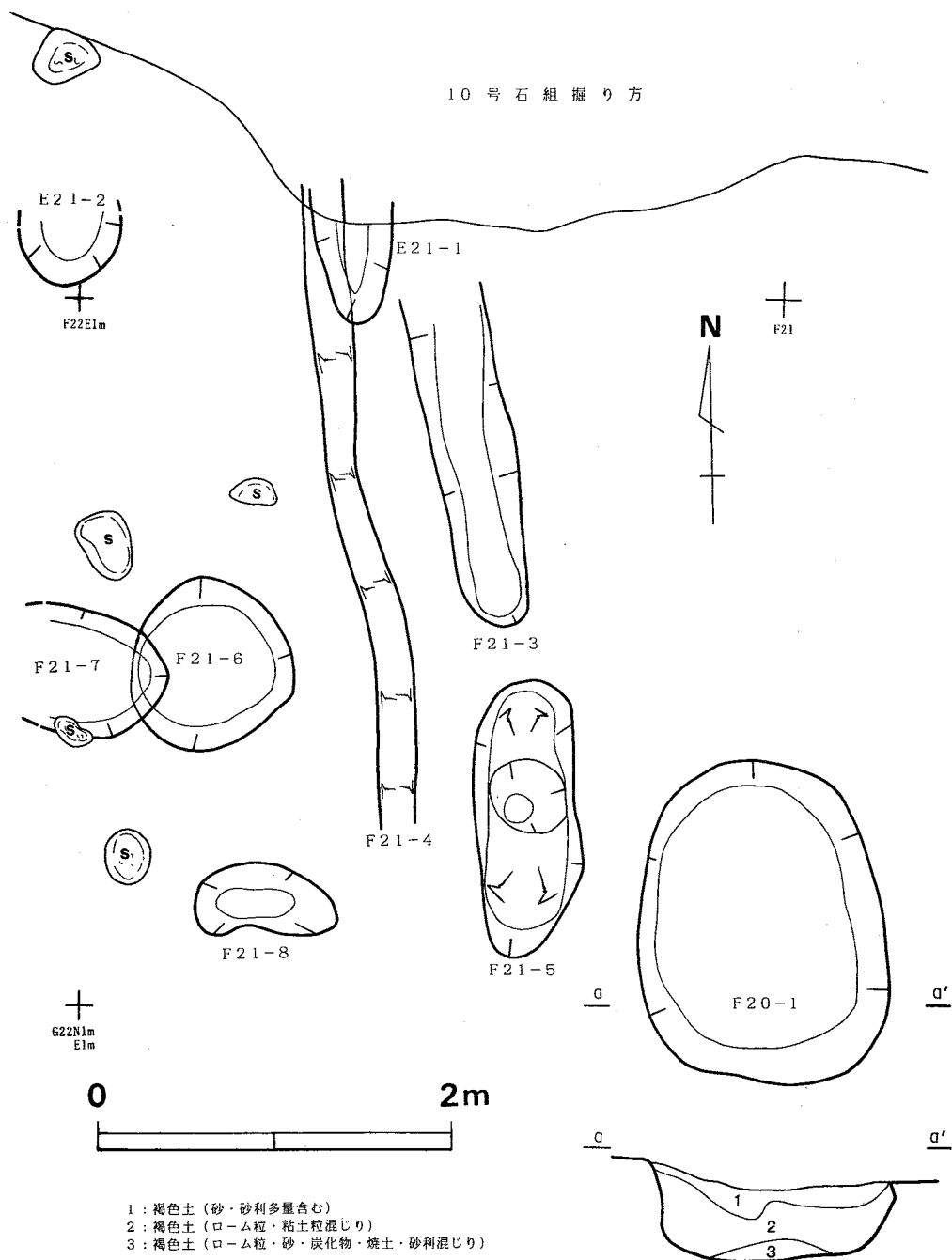
## 8 E21~19, F21~19, G21~19, H21~19, I21~19, J21~19, K21~19区の遺構 概況

本地区の特長は22ラインにそって南北にある12号組石を境にして、その東と西では様相が一変することである。ここでは12号組石の東を見ることになる。この地点は破壊はかなり深くまで入ってはいたが、それほど深くもなく、かなり高い位置から遺構を確認できるところもあった。南側のLラインの南は西側と同様破壊が地表下5m以下にまで及んでおり、遺構は全く確認することができなかった。表土の下には中央診療棟地点には珍しい19世紀代の遺物を含むゴミ穴を目的にした土坑がある。井戸もH・I・Jといった沢の中心の上にあたる場所に発見されている。性格不明の土坑も数多い。生活がなされていたところであったことを示している。この状況は江戸時代の盛土の下の下になっても変りはない。ここにも上・下の砂利面ほどははっきりしたものではないが、K面とL面としたものがある。K面は上の砂利面とともに12号組石の廃絶と同じ時期に廃絶されたと考えられるもので、この面には1・2号石列がある。K面はその上に焼土がかなりある面で、おそらく火事によって廃絶したものであろう。12号組石のなかにはK面の上面にある焼土が流れ込んでいた。この火災は天和二年(1682)の火災の可能性がもっとも高い。出土した遺物も17世紀後半のものでこの推測を裏付けている。12号組石は天和二年の火事まで、大聖寺藩の上屋敷の東にあった證人屋敷の西の境界の溝であったと考えられる。天和三年以降、證人屋敷の土地は大聖寺藩の上屋敷に併合されるので、この境界は不要になる。これらから考えると12号組石および1・2号石列は天和二年の火事によって廃絶されたと考えるのが妥当であろう。中央診療棟地点では珍しく礎石が残っていた遺構である。K面の下にはL面がある。12号組石の下にある木樋、下の砂利面と同時期のものである。この面には3・4号石列がある。これも證人屋敷の建物の礎石と思われるが、はっきりしない。K・L両面を通して生活の場であったことは確実である。自然堆積の上面からも数多くの遺構が発見されている。井戸などを主にするもので、これに各種の土坑がある。北側には12号組石に繋っていたものと考えられる10号組石がある。10号組石も12号組石と同時に廃絶したものと考えられる。10・12号組石の上には、6・7・8・11号組石が作られている。10号組石は證人屋敷の北端を画していた溝であり、天和三年以降、大聖寺藩の上屋敷の北端を示すこれらの組石になろう。江戸時代の初めから生活に直接関係した地点として機能していたものと推測される。これらの各組石とそれぞれの生活面の関係および年代観については6号組石の項でか

### 第三章 江戸時代の遺構

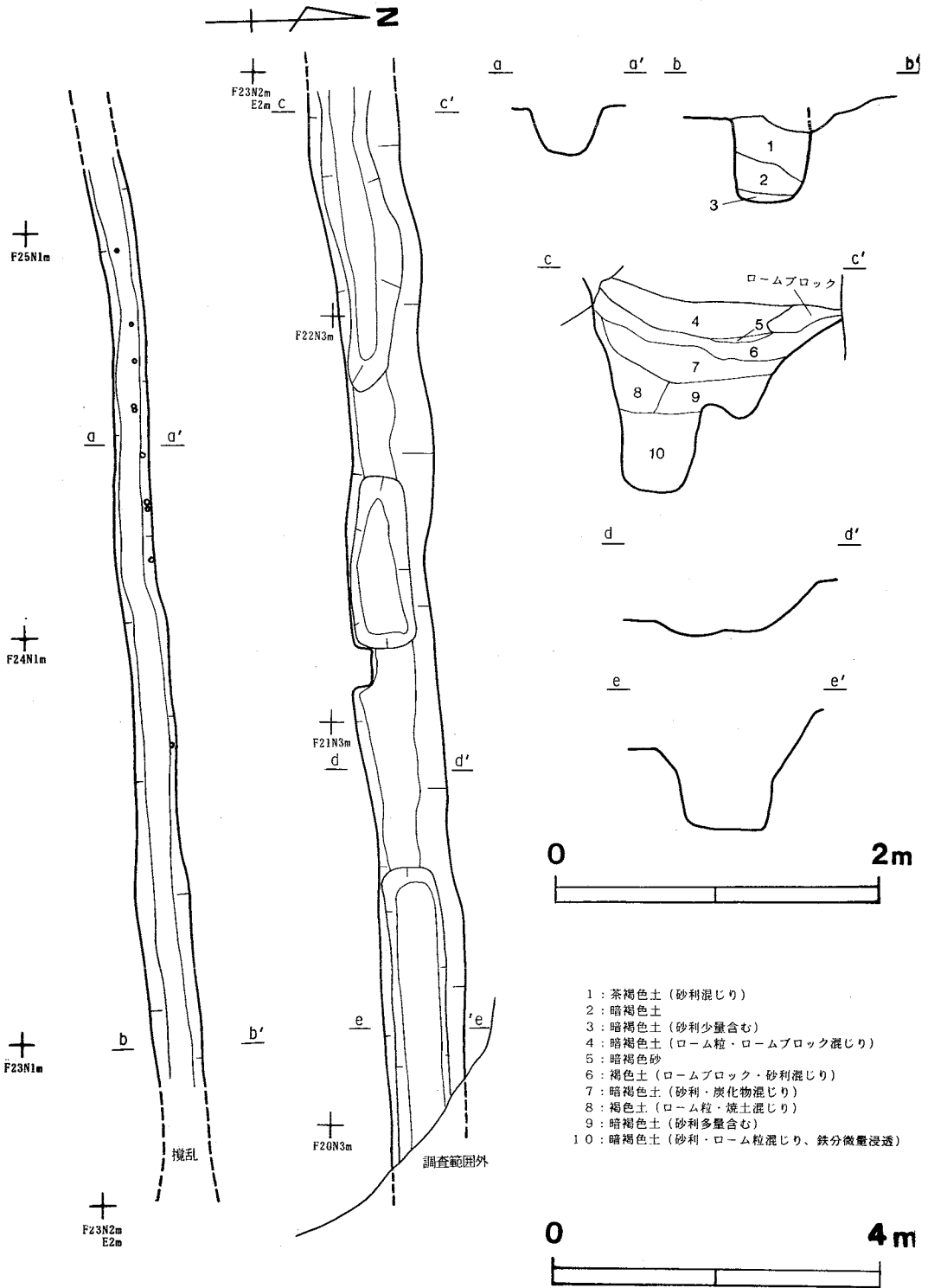
なり詳しく述べている。参照されたい。この地点は天和三年の前後で、證人屋敷から大聖寺藩の上屋敷にと、性格も所属も大きく変わるところである。 (藤本 強)

#### 遺構各説



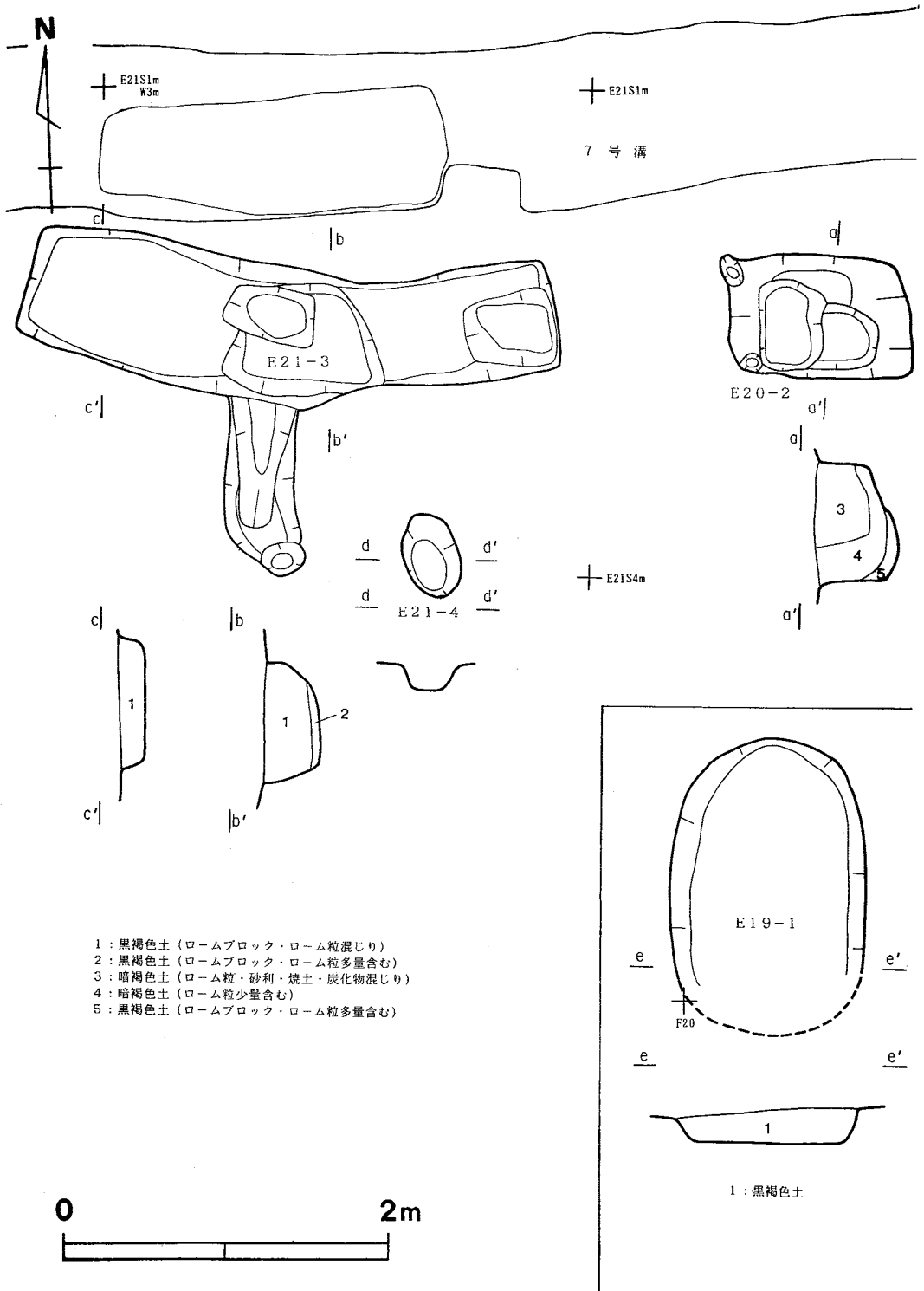
III-125図 E21-1-2、F20-1、F21-1-3~8 実測図 (a-a':11.5m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構



III-126図 IV区7号溝実測図 (土層図の水準 11.5m, c-c':12.0m)

第三章 江戸時代の遺構



III-127図 E19-1, E20-2, E21-3, 4実測図 (土層図の水準: 11.3m)

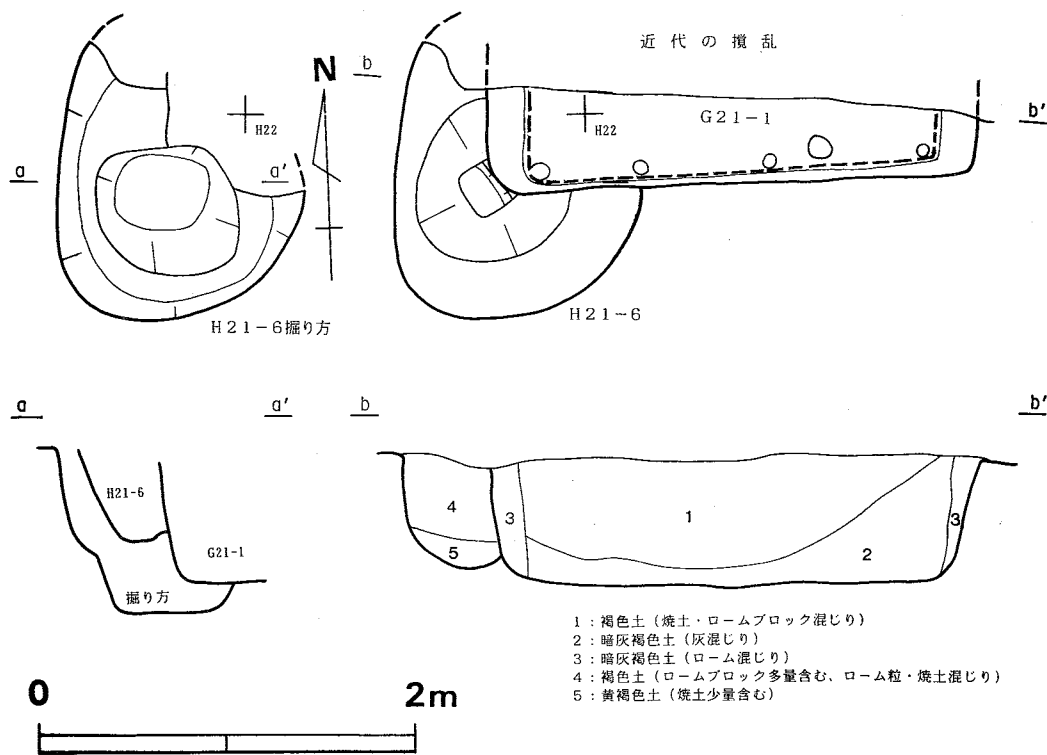
8 E21~19, F21~19, G21~19, H21~19, I21~19, J21~19, K21~19 区の遺構

**E21-1・2** E・F21区にある小土坑である(III-125図)。1は溝状の遺構の一部である可能性もある。深さは1が30cm弱,2が15cmである。埋土はローム混じりの黒褐色土である。遺物はなく,時期は江戸時代の盛土の一番下で発見されているので江戸時代の初頭に近い時期であろうが,性格は不明である。  
(萩尾昌枝)

**IV区7号溝** Fライン北3mほどのところをほぼ東西に走る溝である(III-126図)。20ラインの東から25ラインの西に至る長大な溝である。自然堆積の面で確認している。幅は東側が太く1m,西側は50cmほどである。深さにもかなりの差があり,底にも深い部分があるなど,水が流れた溝とは考えにくい。埋土は暗~褐色土が主である。若干の遺物が出土している。途中は確認できていないが西の延長上にはIV区1号溝がある。10号組石のやや北をほぼ平行して走っており,位置からみて江戸時代初頭に近い時期の屋敷の境界をなす溝であった可能性が強い。形もV区1・2号溝と類似しており,2・10号組石による境界以前の屋敷の境であった可能性が高い。  
(小川 望)

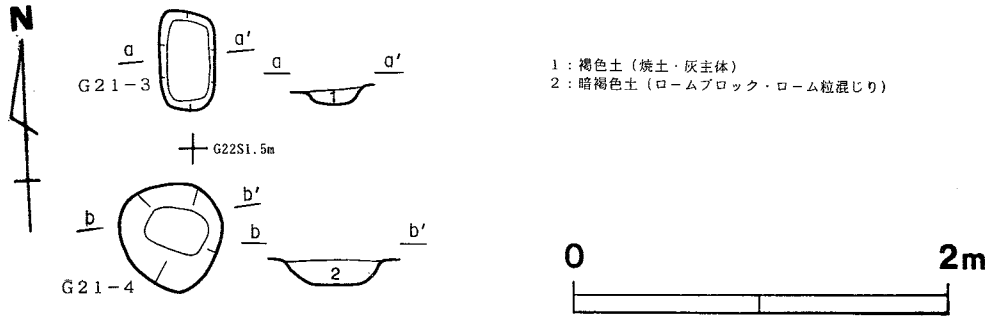
**F21-1** F22区にある土坑である。径80cmの掘り方のなかに径45cmの桶を入れている(III-119図)。桶の底の下には瓦の破片が敷き込まれ,暗灰褐色土が詰められている。その下には暗褐色土がある。桶の内部には純粋な灰色土が入っている。18世紀後半から19世紀にかけての若干の遺物が出土している。形・埋土の状況から厠の下穴であることは確実と考えられる。  
(小川 望)

**F21-3・4・5・6・7・8** F21区に中心がある各種の遺構である。3・4は溝状の遺構,他は土坑である(III-125図)。いずれも江戸時代の盛土の一番下の面で確認されている。埋土はすべてローム混じり

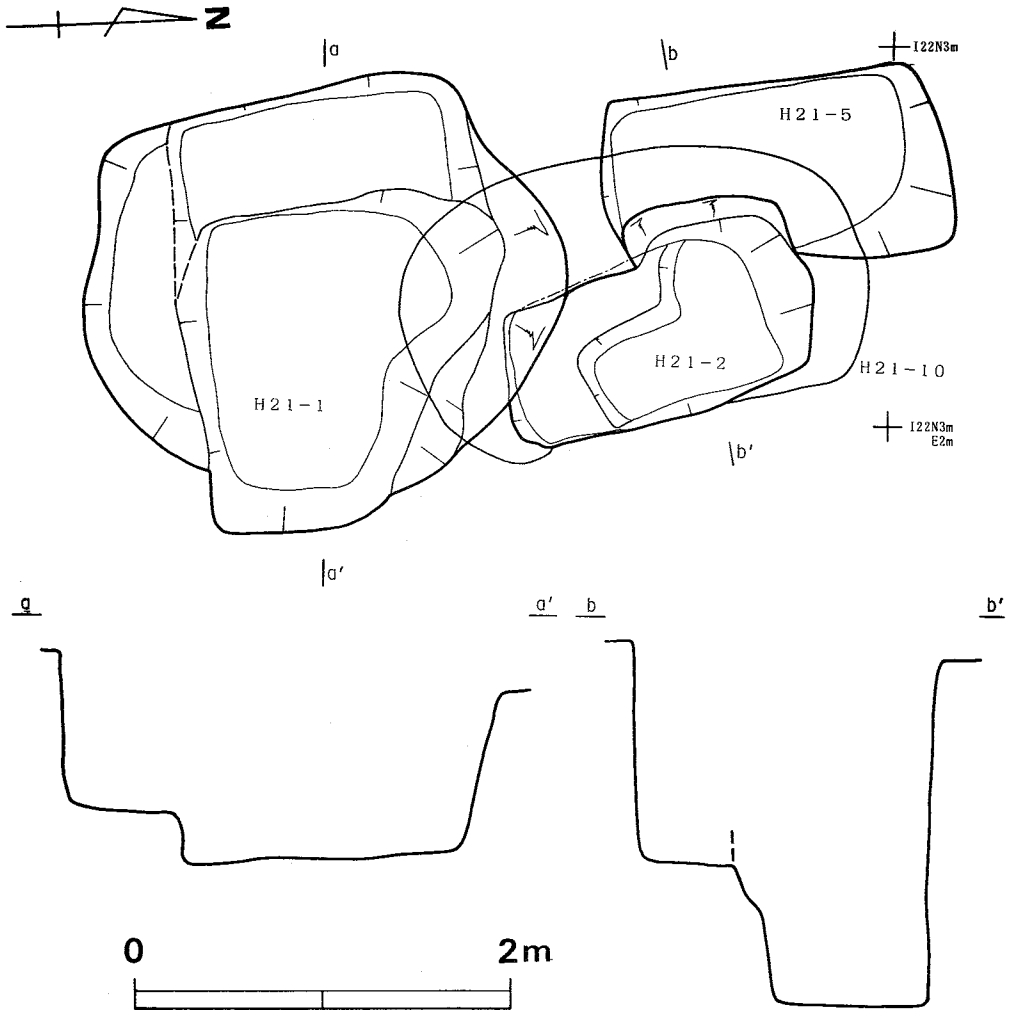


III-128図 G21-1, H21-6実測図(土層図の水準:14.0m)

第三章 江戸時代の遺構



III-129図 G21-3・4実測図 (土層図の水準:11.2m)

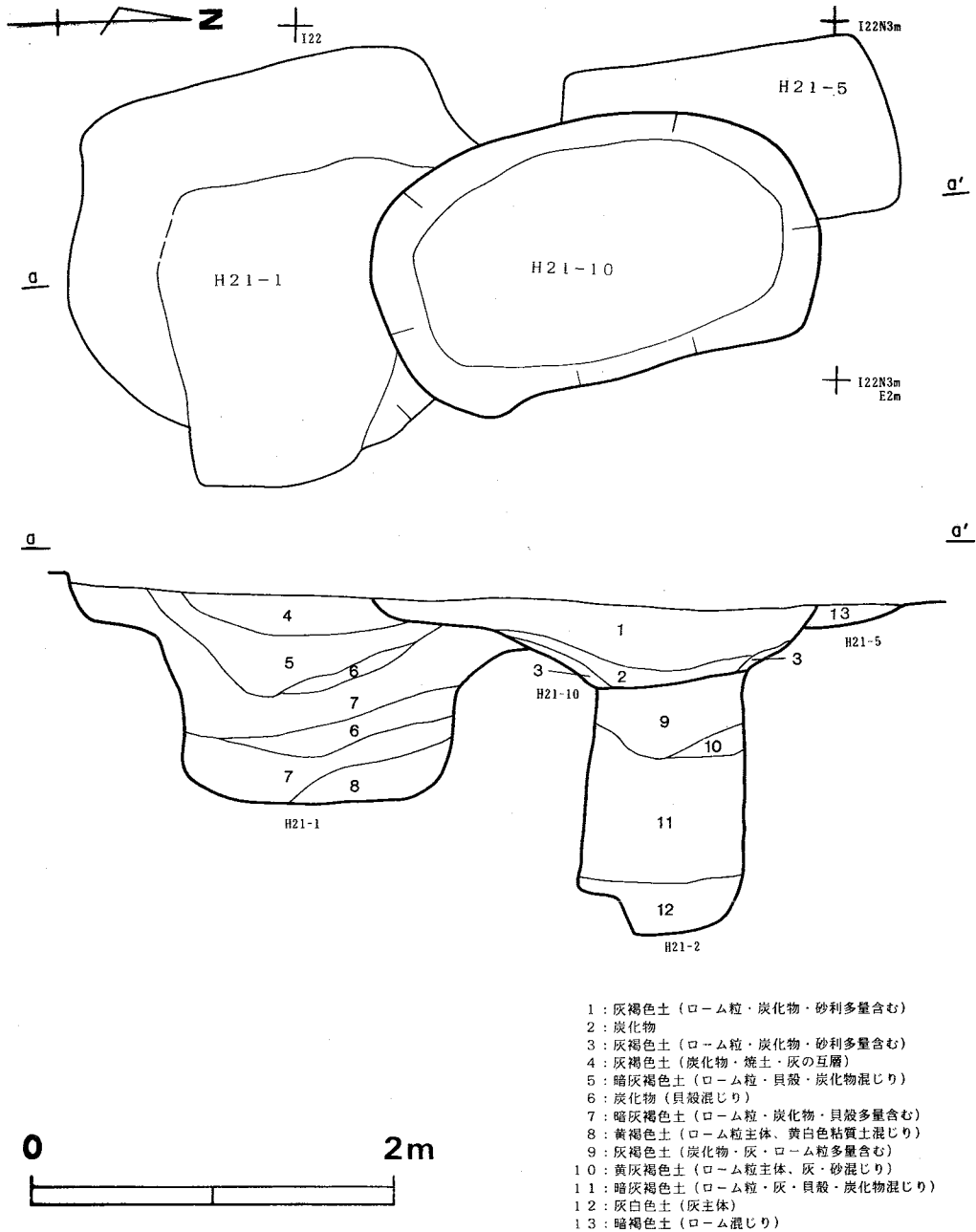


III-130図 H21-1・2・5実測図 (土層図の水準:14.3m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

の黒褐色土である。深さは 3・5が30cm 前後であるが、他は10cm 内外で浅い。遺物はなく、性格は不明である。  
(萩尾昌枝)

G21-1 H22ポイント周辺にある土坑であるが、大部分を建物の基礎により破壊されている。掘



III-131図 H21-10実測図(a-a':14.5m)



### 第三章 江戸時代の遺構

り方は東西2.6m、深さ70cmあり、そのなかに板の囲いをしていたものである(III-128図)。南の壁際にはほぼ等間隔で板を留めていたであろう4本の丸い杭穴がある。これらは径10cm内外で、深さは50~80cmある。板は残っていないが、その痕跡が囲いと掘り方の間に詰められた土に見られる。詰め土はローム混じりの暗灰褐色土で、埋土は上が褐色土、下が灰混じりの暗灰褐色土である。陶磁器などの少量の遺物がある。性格は不明である。(成瀬晃司)

G21-2 G21区にある小土坑である。一辺30~40cmの方形で、深さ10cm強の土坑であり(III-149図)、埋土はローム混じりの暗褐色土である。遺物はなく、時期・性格は不明。(成瀬晃司)

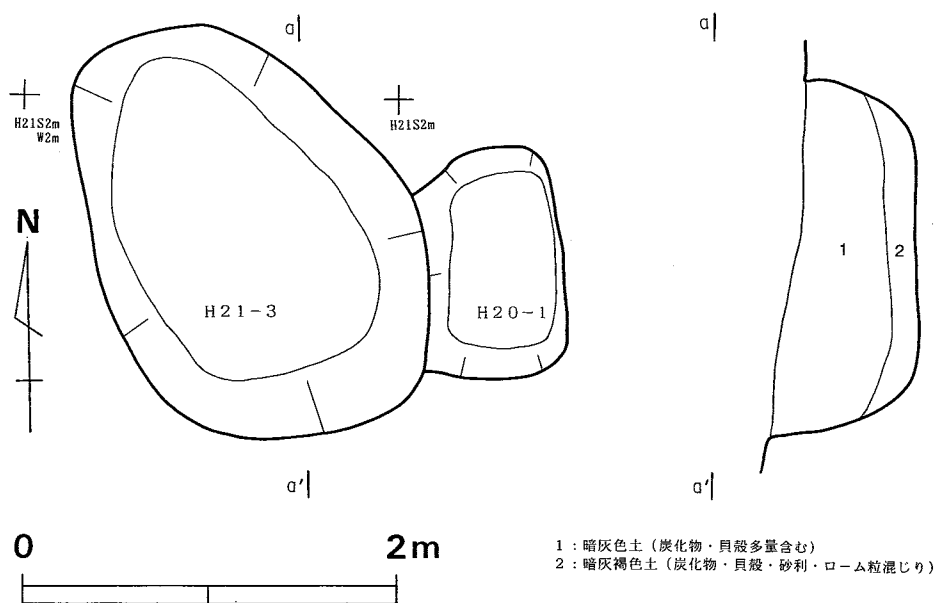
G21-3・4 G21・22区の境界にある小土坑である(III-129図)。0.5mほどであり、3は長方形、4は不整な円形である。深さは0.1mと浅い。自然堆積の面で確認された。遺物はない。(宮田安志)

H21-1・2 H21区に主要部のある切りあい関係のある土坑である(III-130図)。1が新しい。両者ともH21-10に切られる。1は不整な形をしたもので、底、壁とも凹凸がひどい。2はやはり不整な形をしているが、深さはかなり深い。埋土は灰褐色土を主にするもので、どちらも18~19世紀の交を主にしたきわめて多量の遺物をもっている。ゴミ穴と考えることができよう。(小川 望)

H21-3 H21区に主要部がある土坑である(III-132図)。楕円形の土坑で、底、壁ともに凹凸が激しい。埋土は炭化物・貝殻を多量に含む灰褐色土が主になっていて、18~19世紀の交を主にした多量の各種の遺物がある。周辺の土坑とともにゴミ穴と考えることができよう。(小川 望)

H21-5 H21区にあり、H21-2に切られた南北1.8m強、東西1m、深さ1.2m弱の方形の土坑である(III-130図)。ローム混じりの暗褐色土を埋土にし、18世紀末から19世紀にかけての陶磁器など少量の遺物をもつ。性格は不明である。(成瀬晃司)

H21-6 H22ポイント周辺にある土坑でG21-1に切られている。不整な円形であり、掘り方は東



III-132図 H20-1, H21-3実測図(a-a':14.3m)

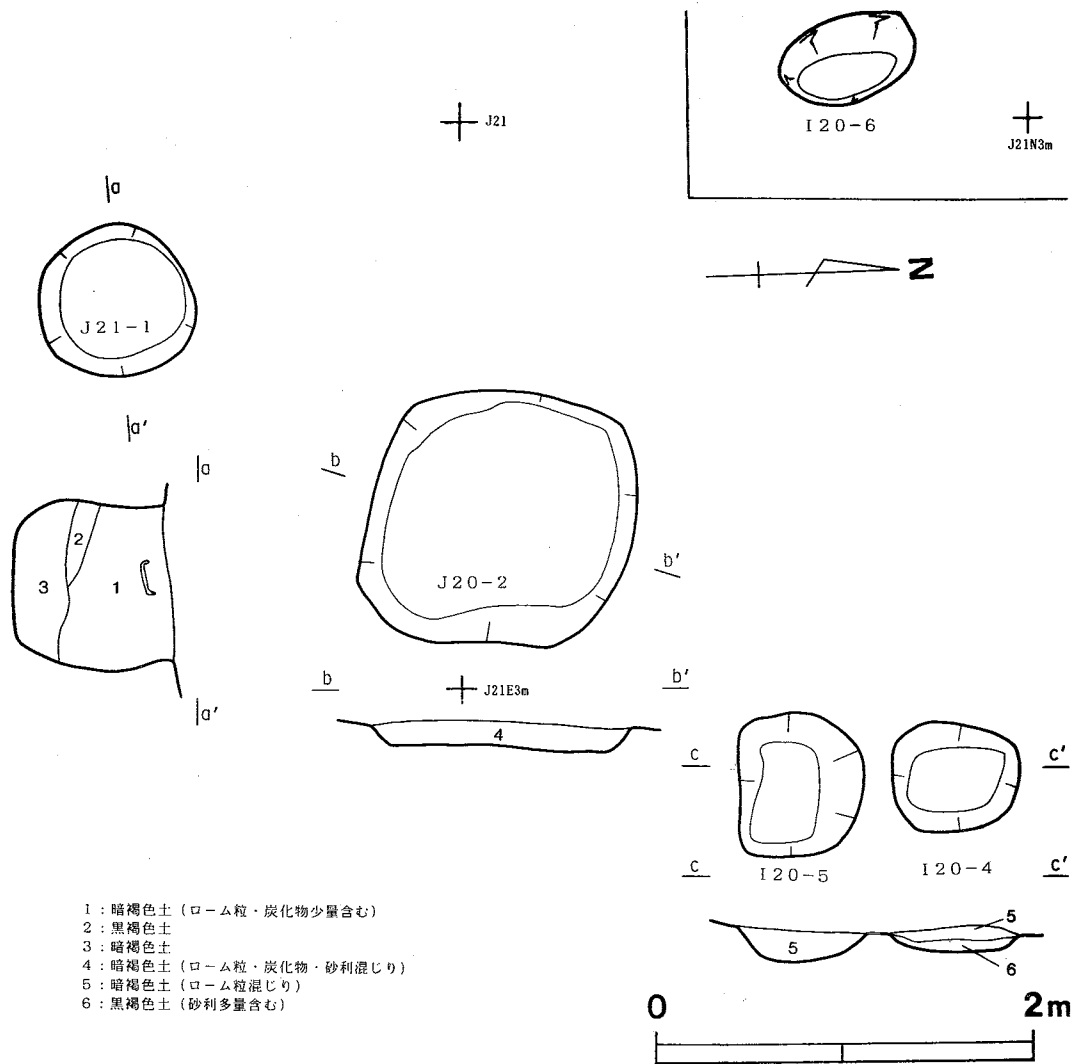
8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

西1.3m, 深さ0.9m あるが, そのなかに径0.9m 弱, 深さ50cm の穴が作られている(III-128図)。埋土は焼土混じりの黄~褐色土である。少量の遺物があるが, 性格は不明である。(成瀬晃司)

**H21-8** G・H21区にある井戸である。上部は破壊を受け, 部分的にしか確認することができなかったが, 下ではその内容をつかむことができた。径1.1m の掘り方のなかに径90cm の桶を入れ, 井戸側に行っている(III-153図)。掘り方と井戸側の間にはロームを主にする褐色土を詰めている。内部の埋土はローム混じりの褐色土であり, 18~19世紀の交を主にした遺物を大量に出土している。埋土下部には大量の石を使って井戸を廃棄する際に意図的に埋め戻した痕跡がある。(萩尾昌枝)

**H21-9** H21区にある半分が残っている小土坑である(III-159図)。自然堆積の上面で発見された。埋土はローム混じりの暗褐色土である。遺物はなく, 性格は不明。(成瀬晃司)

**H21-10** H21区にある土坑である(III-131図)。H21-1・2・5を切っている。大ききの割りに浅い



III-133図 I20-4~6, J20-2, J21-1 実測図(土層図の水準:10.8m)

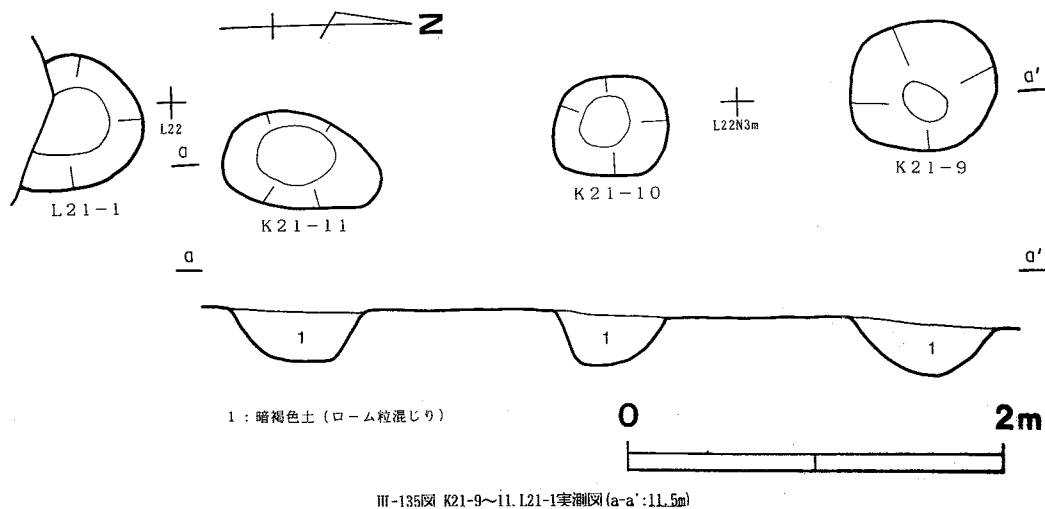
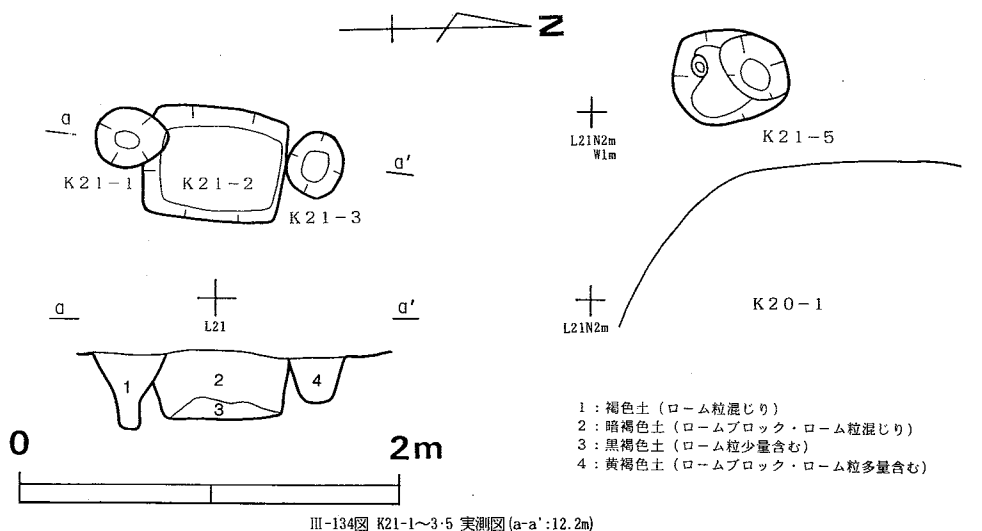
### 第III章 江戸時代の遺構

土坑で、深さ50cmである。灰褐色土を主にする埋土である。かなりの量の遺物が入っており、ゴミ穴を目的にして作られたものと考えられる。この周辺はゴミ穴の多いところで、次々にゴミ穴が繰り返して作られている。主体となっている遺物は18～19世紀の交を主にしたものであり、この頃にゴミ穴がこの地点を中心にして設けられたことが推定できる。(小川 望)

J21-1 J20区にある径0.8m、深さ70cm強の円形の土坑である(III-133図)。壁はなかほどで張り出し、ここでは径0.9mになる。埋土は黒～暗褐色土であり、ほぼ完形の瓦燈が出土していることは注目される。性格は不明である。(堀内秀樹)

J21-2 J21区にある深さ15cmの不整な形の小土坑である(III-162図)。遺物はなく、性格は不明である。(萩尾昌枝)

K21-1・2・3 K・L21区にまたがり南北に連なる小土坑である(III-134図)。1・3は0.3m～0.4m



8 E21~19, F21~19, G21~19, H21~19, I21~19, J21~19, K21~19区の遺構

の径の不整な円形,2は南北の長い長方形である。1が2を切っている。2と3の層位的な関係は不明である。切り込み面は深い。2から少数の遺物が出ている。(宮田安志)

**K21-4** K21区にあり南と西は破壊されている,なかに石のある小土坑である(III-165図)。ローム混じりの暗褐色土を埋土にし,遺物はない。東にある類似のK20-5との距離は1.5mで有機的な連関があったものと思われるが,周辺には関連する遺構も確認できず不明である。(成瀬晃司)

**K21-5** K21区にある小土坑である(III-134図)。深さは20cmほどで,底には一段深い部分があり,北にもっとも深いところがある。遺物はなく,時期・性格は不明である。(成瀬晃司)

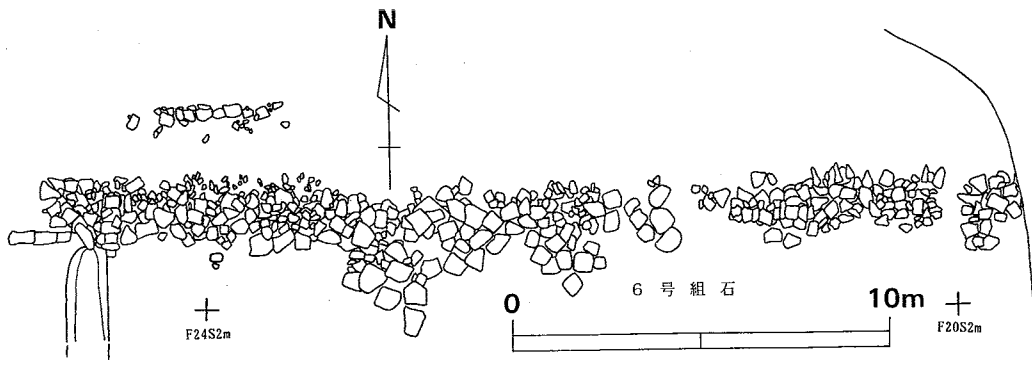
**K21-6** K21区にある自然堆積の上面で発見された南北1.7m,東西1.3mほどの不整な形をした土坑である(III-164図)。深さは30cmほどで,ロームブロックを主体にする黄褐色土が埋土である。遺物はなく,時期・性格はわからない。(成瀬晃司)

**K21-7・8** K21区にある小土坑である(III-162図)。7は円形,8は方形で,深さは7が15cm,8が40cm弱である。埋土は焼土混じりの暗褐色土である。遺物はなく,性格不明。(小川 望)

**K21-9・10・11, L21-1** 22ライン付近のK・L区にかけてほぼ南北に並ぶ土坑である(III-135図)。9・10・11は一直線上に並ぶが,1はずれる。0.6~0.8mほどの径の不整な円形であり,深さも0.2m前後とほぼ一致している。自然堆積の面で確認されている。埋土はローム混じりの暗褐色土である。江戸時代初期の杭穴かと思うがはっきりしない。遺物はない。(宮田安志)

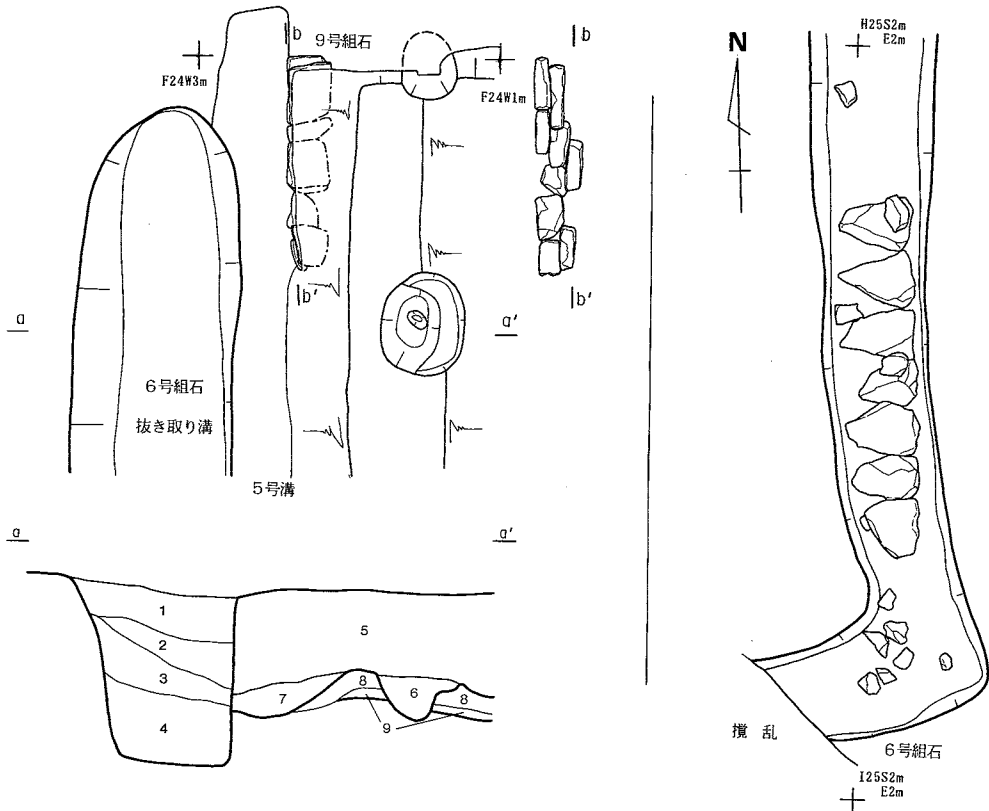
**6号組石** E・F19・20・21・22・23・24, G・H・I24区にある石組の溝である。本遺構は石が遺存する東西方向の組石(以下組石部分と略す)と石が抜かれた南北方向の溝(以下南北部分と略す)とに分けることができる(III-136・137・138・139・143・145図)。組石部分は,天和三年以後の大聖寺藩と富山藩の屋敷境であろうし,南北部分は,天和三年以前の大聖寺藩の屋敷の東端であったものと考えられる。近代以降の破壊や石の再利用のための抜き取りなどによって,遺存の状態は良くない。しかし,一部遺存している石の構築順序,土層の堆積状態より,組石のみならず,屋敷の土地利用の変遷,すなわち構築されている面およびその上に建てられた建造物の構築の様子を窺える点で重要な組石であるといえる。

組石部分は上の砂利面より切り込まれ,比較的状态の良い東西の端において,その石の積み方を知ることができる。組石は大きく三段に分けられる。中・下段では前面に中型の四角錐の切り石を

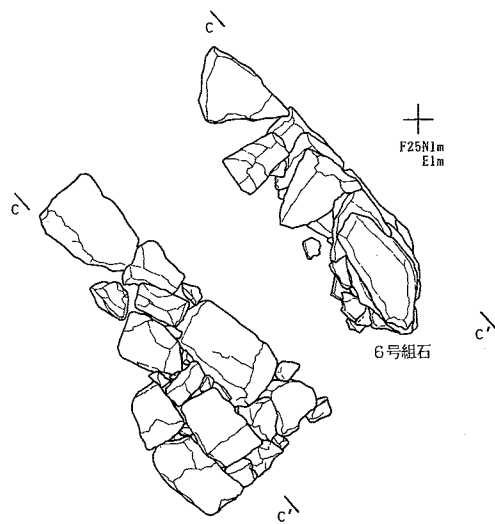


III-136図 6号組石実測図

第III章 江戸時代の遺構



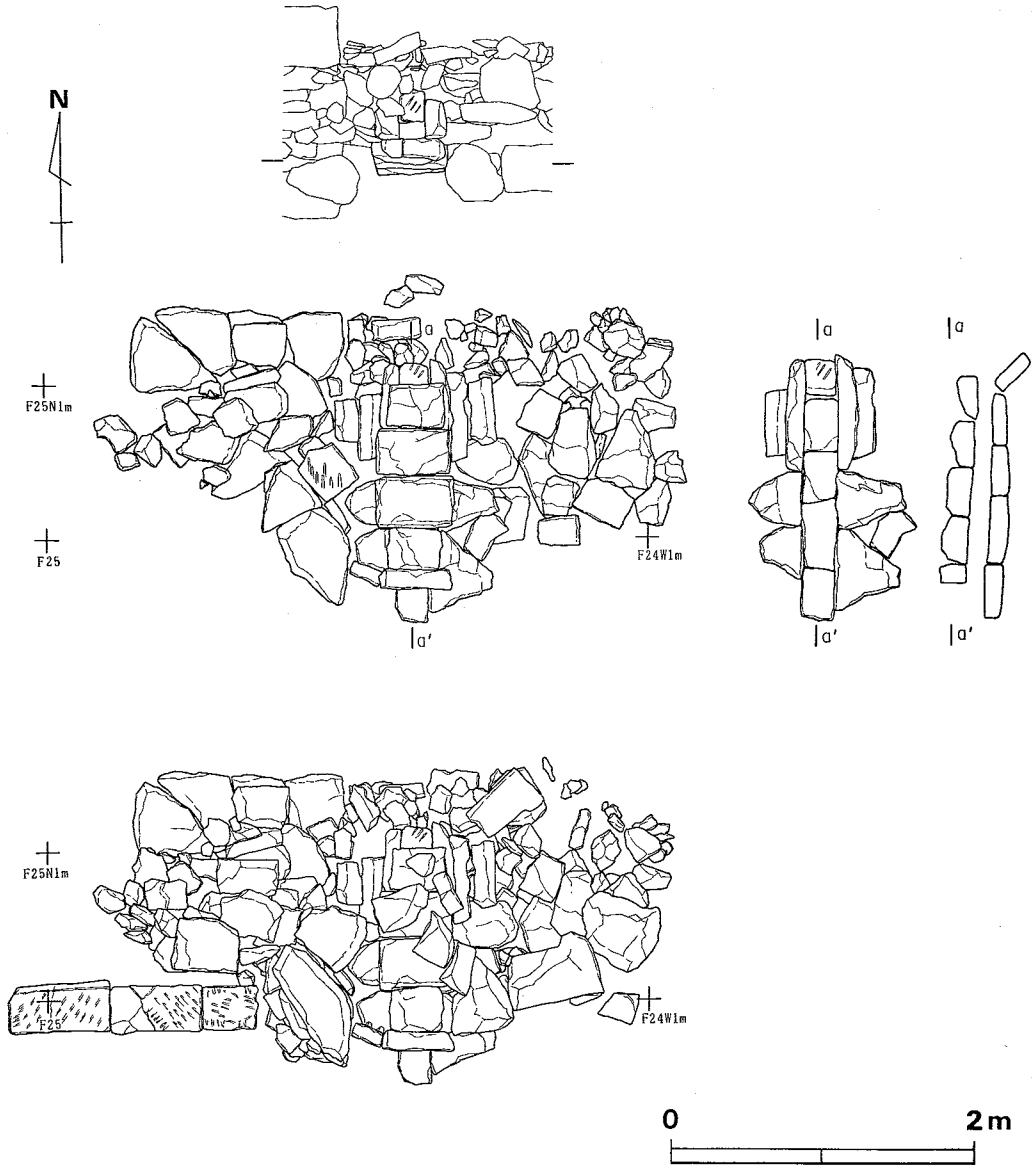
- 1: 褐色土 (ロームブロック混じり)
- 2: 褐色土 (ローム粒混じり)
- 3: 黒色土 (ロームブロック混じり)
- 4: 暗褐色土 (ローム粒・砂利混じり)
- 5: 褐色土 (ロームブロック・ローム粒混じり)
- 6: 暗褐色土 (焼土多量、ローム粒少量含む)
- 7: 暗褐色土 (ローム粒多量含む)
- 8: 暗灰褐色土 (砂利・砂混じり)
- 9: 黄褐色砂・ロームブロック・砂利



III-137図 6号・9号組石、IV区5号溝実測図 (a-a':14.0m, b-b'・c-c':13.0m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

用いて方形または長方形の面を正面として、隙間を細身の切り石で充填しつつ、数段積み、後込めに大型の自然石や切り石を詰めて構築している。上段では比較的小型の切り石を用い、土とともに固めて構築している。組石部分の規模は長さ26.4m、幅1.7m、深さは掘り方の底から下段までが約60cm、中段までが1.4m、上段までが1.6mである。東側では12号組石との合流点以東に10号組石が認められているが、10号組石は本来その西側にも続いていた可能性もあるが、その部分には道があったと推定されるので、確認できたあたりで終わっていたものと考えられる。組石部分の西端の南北部分との接点のもっとも北にある石と10号組石の南側の側面の石の北面は一直線上にあり、

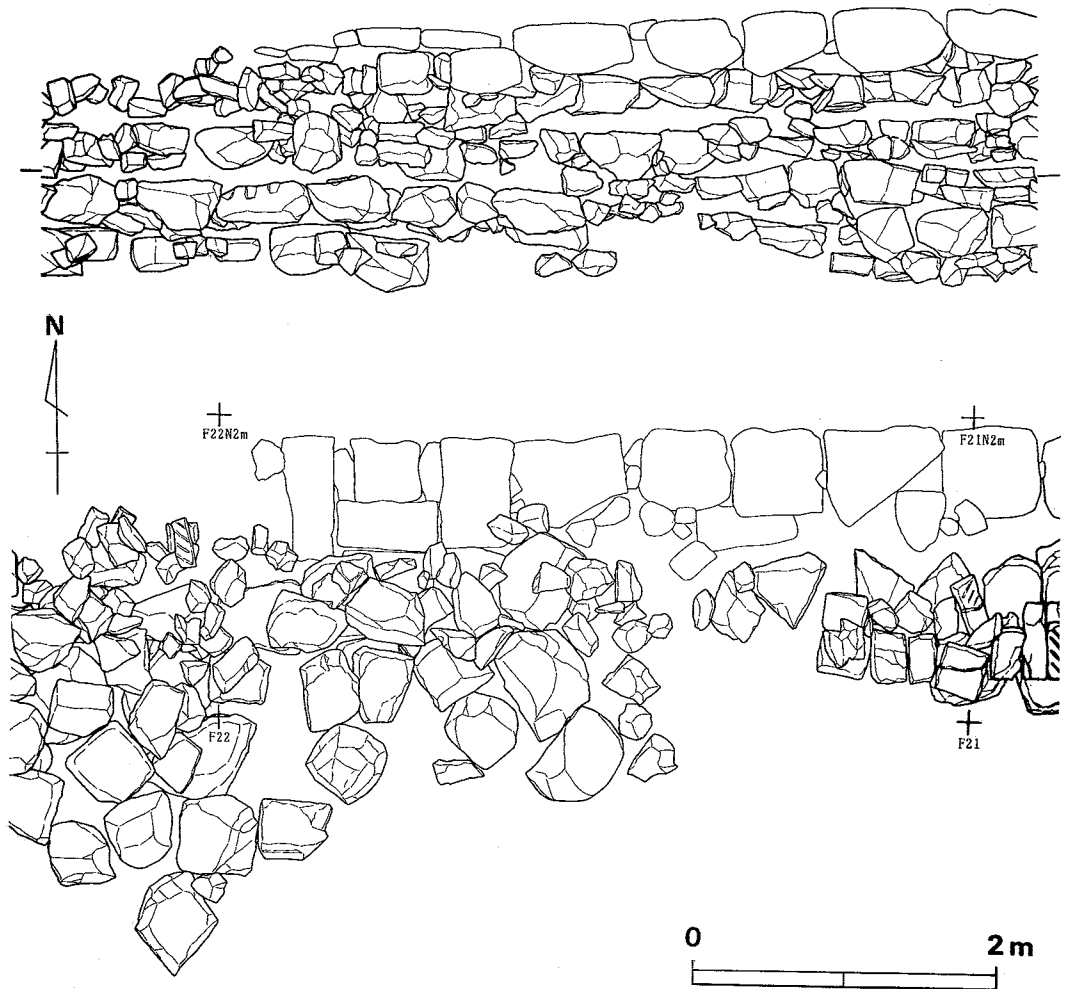


III-138図 6号組石排水口部分実測図（立面図の水準:13.5m）

### 第三章 江戸時代の遺構

この線が時期を越えて意味があったものと考えられる(III-138図西北端,143図左上)。西の端では前述した接点のもっとも北の石列とその南にある西北-東南方向の石積み(III-137図右下,138図)とは時期的な差がある。すなわち南北部分西側にある F25-2 の礎石などを乗せる一段高い部分が構築された後に南北部分と上の砂利面が構築されている。南北部分の溝の東と西では堆積状態が全く異なり、時期的な差があることを示している。また下段の石の上には6号組石に流下する水路と考えられる石の蓋付の石組が構築されており(III-138図中),6号組石の中段の時期に伴うと推定される。北端の6号組石に排水する部分は残っていないが、凝灰岩の板状の切り石を底に置き、側面に四角錘や平たい切り石を隙間なく並べ、この上に蓋石を乗せている。その構造より暗渠であった可能性も考えられよう。

南北部分(III-137図上,143図)は石積みの残る北端部と南にある石の抜き取られた溝とに大別できる。この積み石は天和三年以前の大聖寺藩の上屋敷の東の端として、石垣状の構造をしていたも



III-139図 6号組石実測図(立面図の水準:13.0m)

のと思われ、組石部分とは性格を異にしている。溝の断面はU字状をしており、長さ16m、幅1.1m、深さ1.2mである。溝の北側には抜き取られていない組石が四段、2mにわたって北西—東南の方向に曲がって残っている(III-137図右下)。南端には一部石が残っており、ほぼ直角に西へ曲がる(III-137図右上)。

### 6号組石の持つ意味

本屋敷は本郷台地から不忍池へと傾斜する緩斜面に位置するため、17世紀代より東側に盛土を行ない、より広い平面を確保するように努めていたものと考えられる。天和三年以降の富山藩との境界である2・6号組石の位置は組石構築以前よりIV区3・6号溝などの溝が走り、屋敷成立当初から種々の境界としての機能をもっていたと推測される。それ以後、明治に至って両藩の屋敷の境としての機能が終了するまで不変であったと考えられる。6号組石の周辺のIV区3・5・6号溝、10・12号組石および付近の屋敷内の構築面の変遷は土の堆積状態、組石の構築順序からおおよそ五期に区分することができる。年代順にその概略を示すと以下のようになる。

1) 下の砂利面(I-3・5図)が面として利用されていた段階がもっとも古い。下の砂利面は2号組石の南に、東は12号組石まで西は27ライン付近までの区域の沢の上に広がる非常に硬く突き固められている面で、玉砂利を多量に含む黒褐色土とローム主体の黄褐色土とを交互につき固め、5~10cmの厚さで構築されている。面より切り込まれた遺構は少なく、IV区1・6号溝はこの区域の境界として確認されているに過ぎない。この境界の位置はこれ以降も素掘りの溝が組石へと変化しているだけで、大枠としては変化していない。ここは天和三年以前の大聖寺藩の上屋敷の東端で、長期にわたって、地境としての意味をもっていたと考えられる。12号組石の東はL面が同時期に存在していたものと考えられ、12号組石も組石はまだ構築されておらず、組石の下にある木樋が機能していたものと思われる。L面は12号組石の東の2~3mは砂利面があるが、その東は比較的柔らかい灰褐色土になる。3・4号石列、K20-1などの礎石や井戸が存在し、生活面として機能していたと推測できる。下の砂利面の上、K20-1からはI期(17世紀前半から中葉)の遺物が出土していることから、その頃には機能していたものと推測できる。

2) 南北部分の西にF25-2、G27-1・2などの遺構を乗せる一段高い面が作られ、抜き取り溝には石垣状の組石が存在している段階。組石は前述のように、法をつけた一部(III-137図右下)のみしか残存していないが、溝以西に盛土がされ、面が作られ、井戸・地下式土坑・土坑・礎石などが検出されていることから(F25-2、G27-1・2)、生活面として利用されていたと考えられる。北端は土の堆積状態からIV区3号溝に続くものと考えられる。その東と北では前代に引き続き下の砂利面、12号組石の下の木樋、L面が利用されていたと考える。G27-1・2からはII期(17世紀後半)の遺物群が出土している。

3) 上の砂利面、10号組石、12号組石、K面が構築された段階(III-143図)である。上の砂利面は12号組石、6号組石の組石部分、南北部分との間にある、玉砂利や砂を多量に含むものを叩き締めた面で、10~20cmの厚さで作られている。この面は證人屋敷と大聖寺藩の上屋敷との間にあった八間幅の道であった可能性が強い。この面より切り込まれた遺構は1・2号杭穴列のみである。K面は10号組石と12号組石との間に広がる面で、1・2号石列、G20-4などの土坑や礎石が検出



### 第三章 江戸時代の遺構

されている。12号組石は木樋の上に溝状の組石が構築されており、6・10号組石とともに屋敷内外の区画の溝がこの段階で完成されたと考えられる。6号組石の南北部分の西は以前のままで変わっていない。上の砂利面の上面および12号組石、G20-4からは前段階と同様II期（17世紀後半）の遺物群が出土している。これは前段階が短期間であったか、あるいは単なる工事の順序の差ではないのかもしれない。また遺物はそのほとんどが火を受けており、火災によって廃棄された痕跡と推定される。前段階より利用されていた一段高い面から切り込まれているF26-1出土の遺物と天和二年の火災の際の一括廃棄と推定されるL32-1の遺物が遺構間で接合しており、同じ火災で廃棄されたと推測される。また、この段階で利用されていた面の上には広範囲に焼土が認められたことを考えあわせると、この火災の被害が大きかったことが容易に想像できるであろう。この段階を最後にして、12号組石の地境がなくなることは天和二年の火災を期にして、東にあった証人屋敷が大聖寺藩の上屋敷に併合されるという記録と符合するものであろう。

4) 6号組石が中段まで構築された段階で、12号組石の上には新たに盛土がなされ、南北部分の西と東との段差がなくなり、一つの面として機能し始めた。組石部分の西端で排水口と思われる組石が機能していた時期と、排水口の石が南北部分の石とともに抜き取られて廃絶された時期とに分けられる。伴う面は後世に破壊されたためか確認できなかったが、E22-1、G20-2、I20-3などの遺構が伴うと考えられる。V～VI（18世紀前半から後半）の年代かと思われる。

5) 6号組石は上段まで構築され、A面と呼ぶ江戸時代の盛土の最上面が伴う。遺構としてはH21-1・2・3、3号組石南部分、7号組石が伴うと考えられる。面として把握することが困難であったため、前段階との区別は明確ではないが、VII～VIII期（18世紀後半以降幕末まで）の遺物群が検出されていることから幕末までの生活面であったと考えられる。

以上6・10・12号組石の変遷およびそれらに伴うと思われる生活面や遺構を概観したが、ここでわかることはこれらの遺構や生活面は火災などで被災すると盛土をして、新たな面を構築し従来の面は再利用されていないことである。  
(堀内秀樹)

**7号組石** F21区に中心のある石組の溝である。近代以降の土の直下で発見されているため、大きく破壊されている。この部分のみしか確認することができなかった。次に述べる8号組石の上であり、周辺の遺構のなかではもっとも新しい。幅は50cmほどで深さは30cmである(III-140図)。溝のなかには暗黄～暗褐色土が入っている。方向はほぼ南北であり、8号組石、12号組石とほぼ同じ位置にあるので、地境の溝と考えるのが妥当であろう。  
(萩尾昌枝)

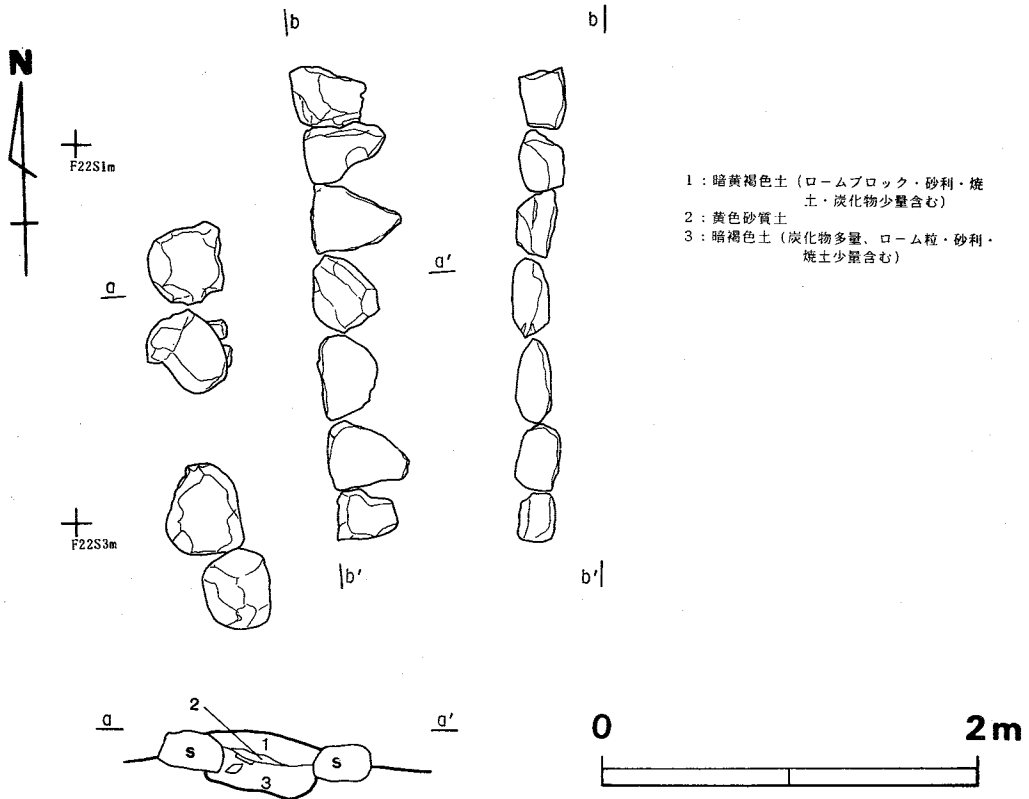
**8号組石** E・F・G=21・22区にある石組の溝である。やはり大きく破壊されている。遺構の遺存状態はきわめて悪い。幅50cmほどの溝であったものと考えられるが(III-141図)、確証はない。掘り方は幅1.5m強あり、埋土は褐色土を主にするものである。破壊がひどいためはっきりしないが、6号組石の最上部につながっていたものであろうと思われる。地境と考えるのがよからう。G22ポイントの東北にF21-2と呼ばれる杭穴がある。本遺構とは直接に関係はない。  
(萩尾昌枝)

**9号組石** この組石はF24区にあるが、6号組石の南側、6号組石抜き取り溝（調査の都合上このように命名されているが、実際には単純に6号組石とは同一視することができないため、以後南北部分と呼ぶ）の東側に位置している。すぐ西にはIV区5号溝がある。まずこれらの関係を整理

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

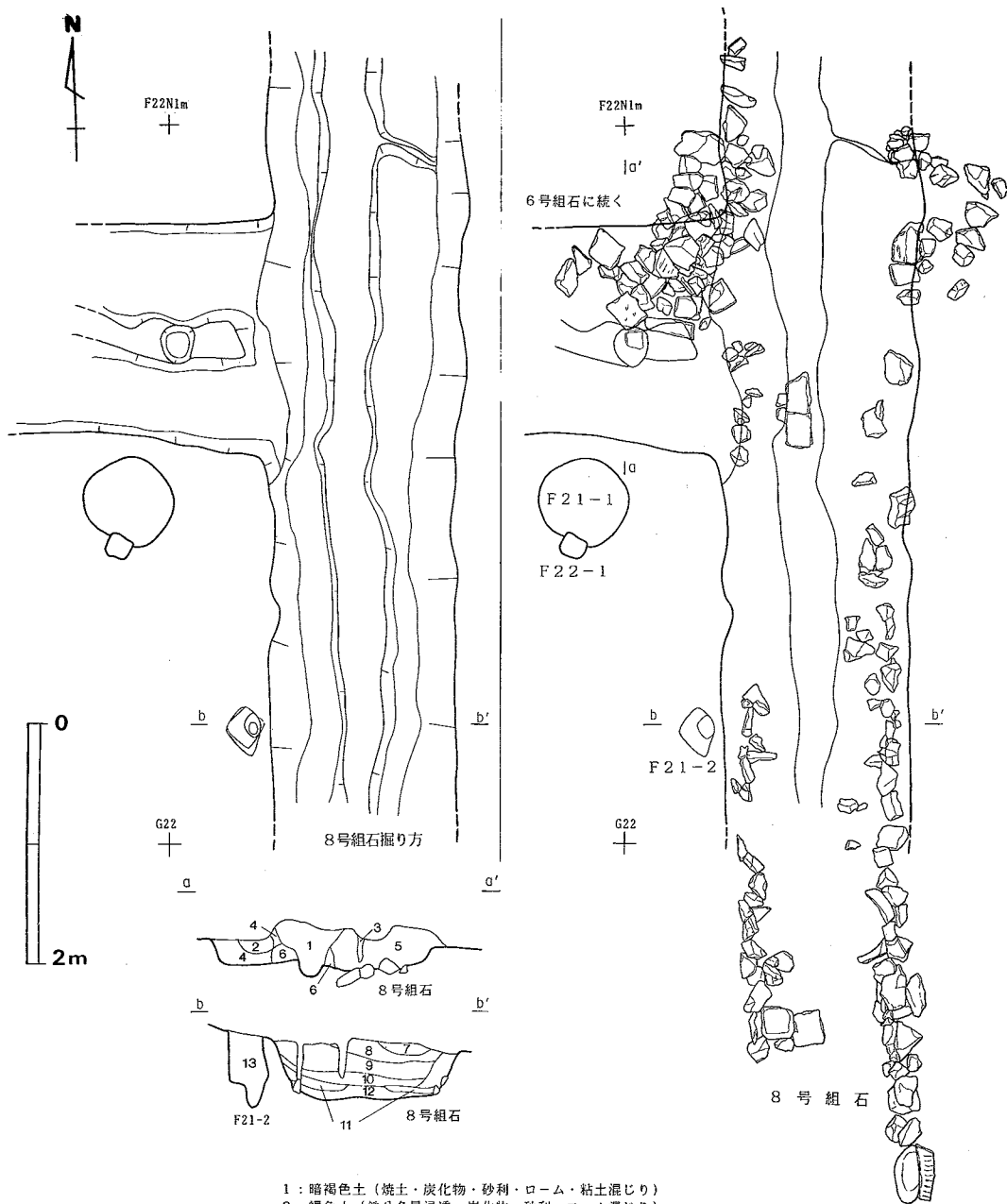
しておく必要があるので、III-137図により、これらの関係を見ておくことにする。6号組石と南北部分との関係であるが、まず南北部分が構築される。南北部分は天和三年までの大聖寺藩上屋敷の東の端になるもので、最低四段の組石が確認されている。その後1・2号杭穴列、12号組石などを載せる8層の上の面が構築される。さらに東側には盛土がなされ、12号組石などは埋没してしまうが、この時、それまで道路であった5号組石と10号組石を結ぶラインを北端として6号組石が構築された。そして東側の盛土がさらに進み、南北部分の組石が完全に埋没した後に、石の再利用などのために石を掘り起こし抜き取っている。以上のような経過を辿ったものと考えている。

さて9号組石だが、南北部分に接し、6号組石の後込めにも接している。東側の側面の石は三段積みになっている。これらには掘り方はなく、土層の断面をみると側面の石は8層によって固定され、それが8層の上面にある上砂利面によって覆われていることが読み取れる。すなわち、本遺構が機能しているときは側面の石は1号杭穴列を伴う盛土の芯として活用されていたものである。したがって本遺構は、上砂利面に伴う12号組石、1・2号杭穴列と共存していたものと考えられる。また上砂利面の残存状況から見ると側面の石が抜き取られた可能性はなく、溝の北部を補強するために一部分に設けられたものと考えられる。それに対し西側は6号組石抜き取り穴のため詳細は不明であるが、抜き取り穴北側に接する南北部分の角はちょうどこの位置に対応することおよび



III-140図 7号組石実測図 (立面図の水準:14.4m)

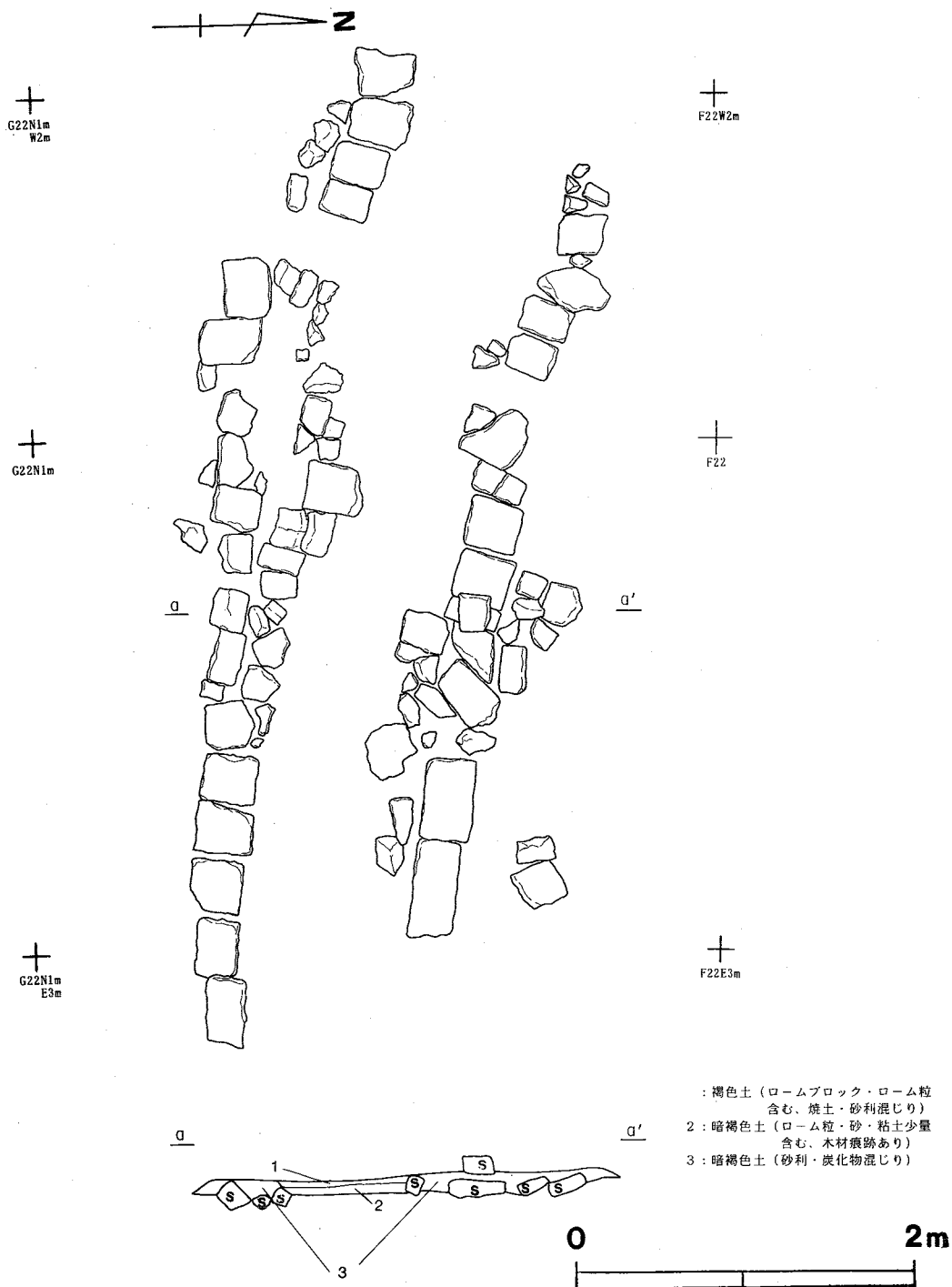
### 第三章 江戸時代の遺構



- 1 : 暗褐色土 (焼土・炭化物・砂利・ローム・粘土混じり)
- 2 : 褐色土 (鉄分多量浸透、炭化物・砂利・ローム混じり)
- 3 : 暗赤褐色土 (鉄分多量浸透)
- 4 : 暗褐色土 (炭化物多量、ローム粒混じり)
- 5 : 暗黄褐色土 (ロームブロック主体)
- 6 : 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 7 : 暗黄褐色土 (ロームブロック多量、炭化物・焼土混じり)
- 8 : 褐色土 (ロームブロック・炭化物・焼土・砂利混じり)
- 9 : 褐色土 (炭化物・焼土・砂利・ローム混じり、鉄分浸透)
- 10 : 褐色土 (炭化物・焼土・ロームブロック混じり)
- 11 : 褐色土 (ロームブロック・粘土ブロック・砂利混じり)
- 12 : 暗黄褐色土 (ローム粒多量、焼土・炭化物微量含む)
- 13 : 褐色土 (砂利混じり)

III-141図 8号組石実測図 (土層図の水準:14.6m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構



III-142図 11号組石実測図 (a-a':13.2m)

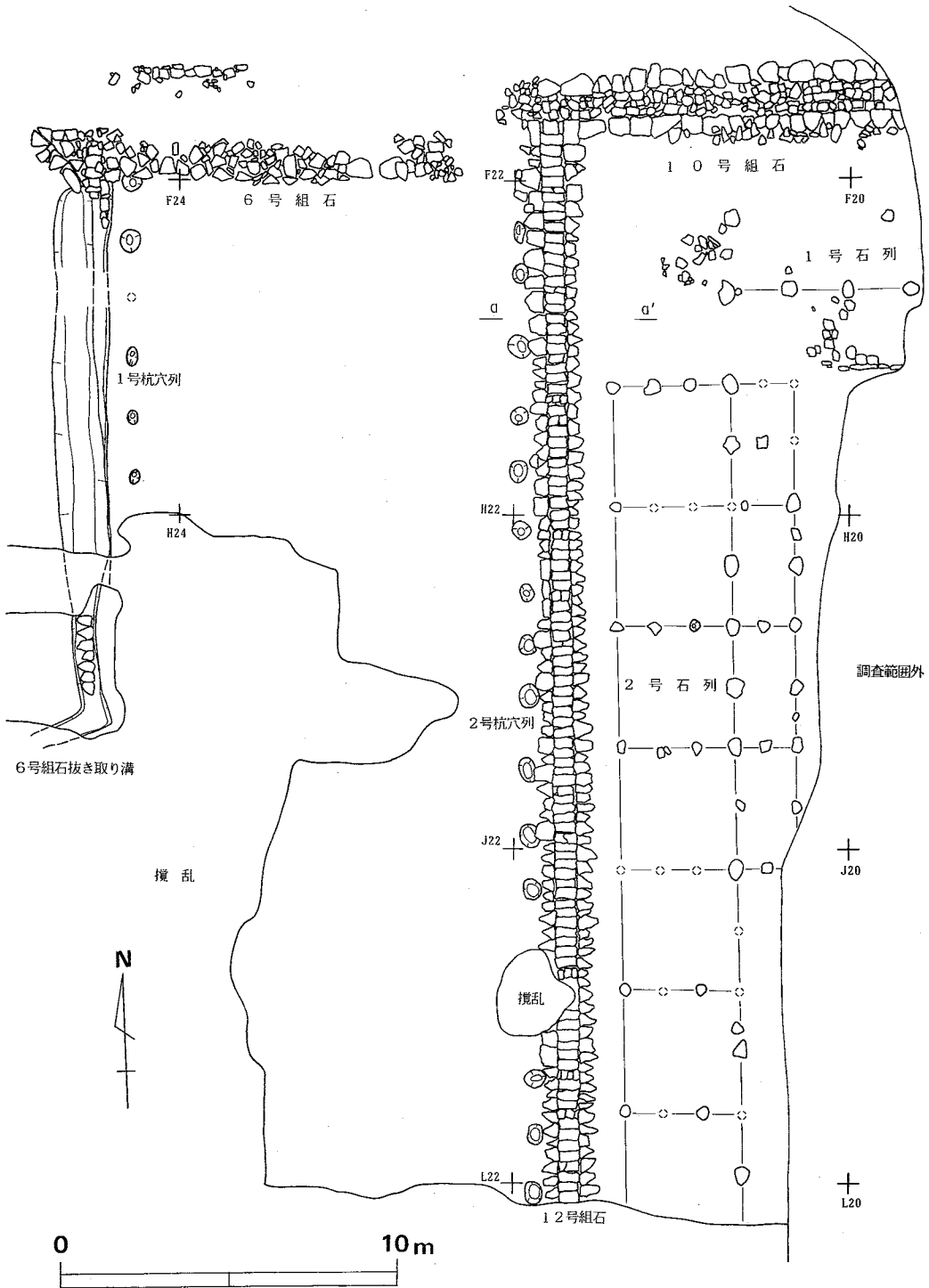
### 第三章 江戸時代の遺構

南北部分がこの時期に機能していたことから、西側の側面の石は南北部分を共用していたと考えるのが妥当である。そして、9号組石、6号組石南北部分に挟まれ、かつ南北部分にそってIV区5号溝が南に延びている。すなわち、9号組石はそれ自体が単独に機能していたものではなく、IV区5号溝に付随する構築物として捉えられるべきものである。(成瀬晃司)

**10号組石** Eライン南2mほどのところを調査区の東端から22ラインまで、真東西に走る石組の溝である(III-143・145・147図、写真6)。確認しているだけで11.5mの長さがあり、側面の石の間はほぼ1mある。直接12号組石と関連するやや複雑な遺構である。また4・13号組石などを介して2号組石もしくはその前身と繋っていた可能性もある。10号組石は12号組石に繋ることから周辺の組石のなかでは最も古い時期に作られた組石であることは疑いない。地境として機能したほかに、12号組石などとともに排水溝としての機能も果たしていたと考えられるものである。10号組石は2号組石とほぼ同じ構築方法によっているが、細部で差もある。東側の南側面の石は四角錘に作られた小型の切り石も用いているが、2号組石の東の部分で見られたようにあまり加工されていない大型の石もしくは他から転用されたと考えられる石を用いてほとんどの部分が構築されていた。ここにも刻印のある石が3個ほど確認されている。2号組石とは別種の刻印であった(III-147図)。側面の石は北側が一段、南側がほぼ二段確認できている。二段確認できたところは小型の切り石が使われている東の部分のみである。小型の切り石を使用しているため、二段重ねたのであろうが、周辺に比べるとしっかりした構築であった。12号組石とも共通する部分である。底は2号組石とはかなり違い、細かく砕かれた板状の石で作られており、図にもあるようにあたかも砕いた石を無造作に投げ捨てたかのようであった。2・12号組石では、板状の切り石を側面の石の間を繋ぐように整然と並べており、大きな違いがある。10号組石の底に使われている石材は、2・12号組石の石材と同一であり、10号組石でも構築当初は板状の石を整然と並べていた可能性もあるが、側面の石をそのままにして底の石だけを打ち壊す理由も見当たらないので、構築当初からこのような状態であったことも考えられる。底のレベルは西端で12m、東端で11.8mであり、比高差は20cmになる。距離が短いのではっきりしないが、2号組石と同じような落差である。しかしながら10号組石の西の端からほぼ13mしか離れていない2号組石の東の端の底のレベルは13.2mであり、この間には1m以上の比高差があることになる。当時は盛土がどんどんなされていたものであろうから、2号と10号組石の段差はこのような状況を反映しているものと考えるか、あるいは調査で確認された2号組石と10号組石の間に時間差を考えるかであろう。後者の立場によれば、調査で発見された2号組石に続くより東にあったかと考えられる溝は完全に破壊されてしまったとせざるをえない。こうしたものに関連するであろう段差は6号組石周辺でも明らかにされている。

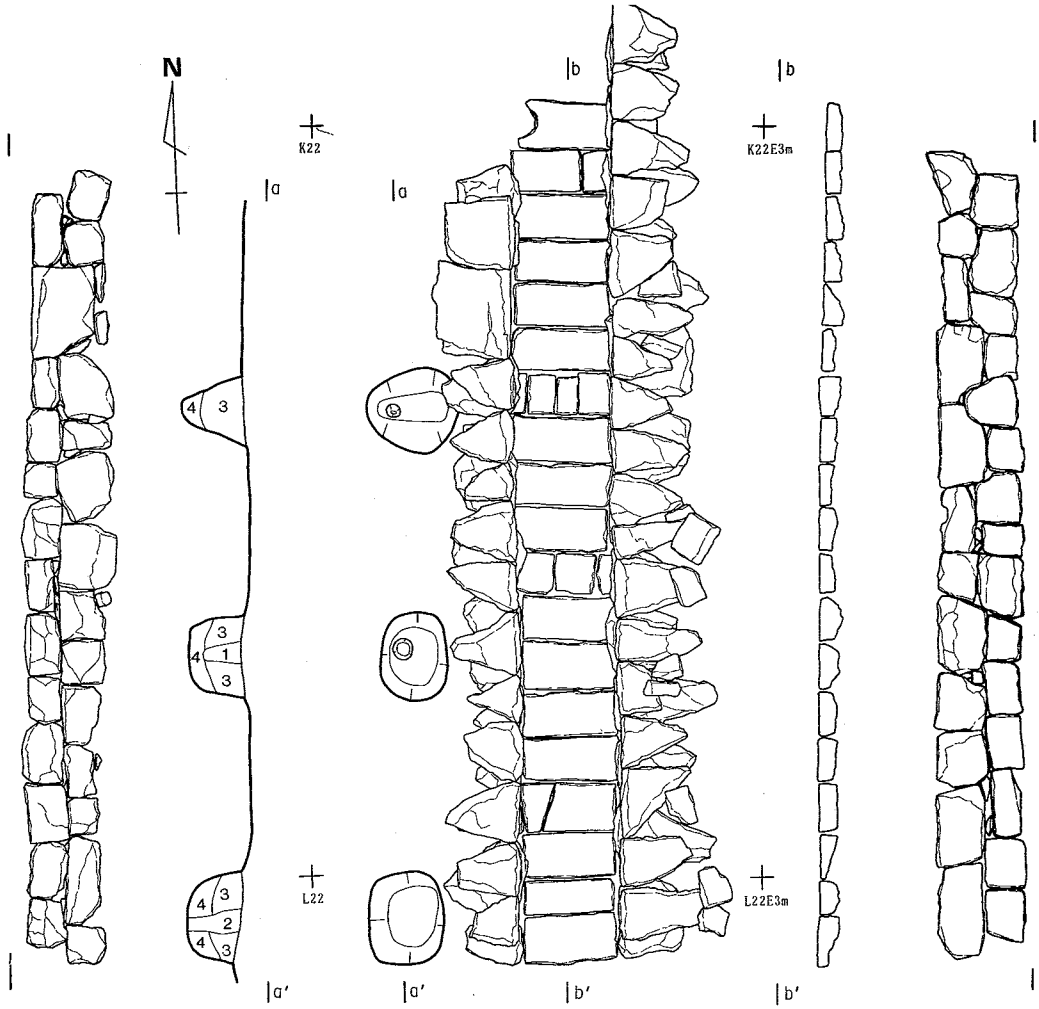
埋土は基本的には2号組石と共通している。埋土内から黒褐色土と粘土層が確認できたのもその一つである。互層にはなっていないが、黒褐色土と粘土層があり、黒褐色土が大半を占めている。一気に埋められた可能性が強い。黒褐色土の下には砂利層があり、その下には酸化鉄を含み、グライ化し青白色を帯びたロームを含んだ黒褐色土がある。溝の掘り方の両側にはやはりロームを含んだ黒褐色土がある。こうした様相は2号組石と同様である。側面の石の裏にある黒褐色土はその下にある黒褐色土と同様なものであり、このなかには大小の礫・瓦片も数多く入っている硬い土であっ

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構



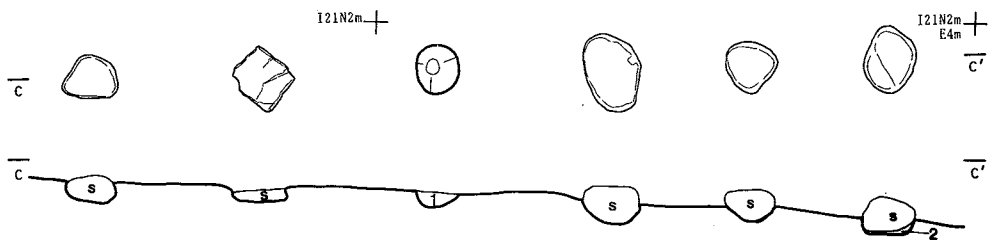
III-143図 1号・2号石列、6号・10号・12号組石、1号・2号杭穴列実測図

第三章 江戸時代の遺構

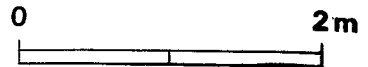


1: 暗褐色土 (ローム粒少量含む)  
2: 暗褐色土

3: 褐色土 (砂・砂利・黄褐色粘質土混じり)  
4: 暗褐色土 (砂利・砂混じり)

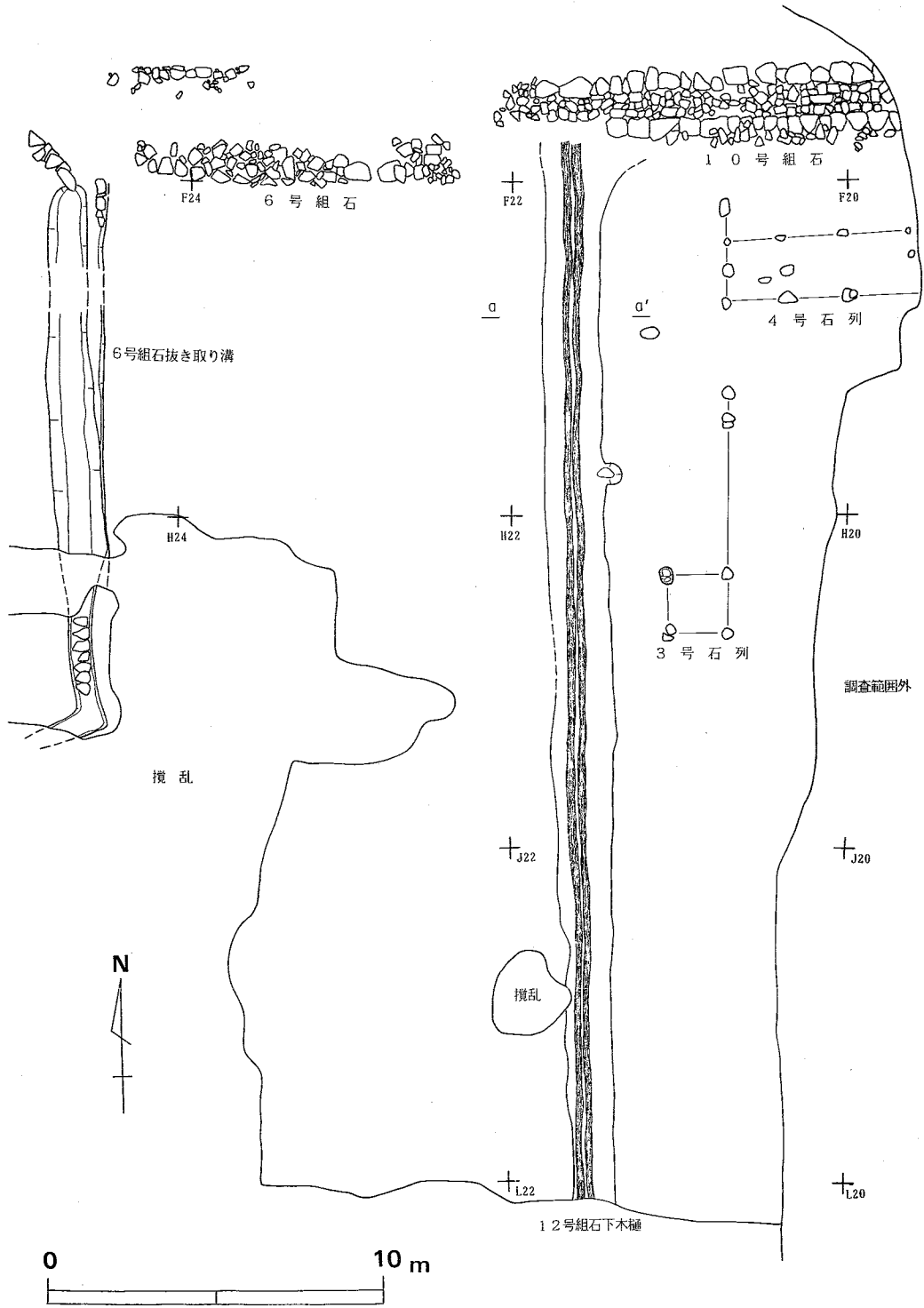


1: 暗褐色土 (炭土粒多量含む、礎石の抜き取り穴か?)  
2: 砂利 (固く詰められている)



III-144図 12号組石・2号杭穴列(上)、2号石列(下) 実測図 (立面図の水準: 12.5m)

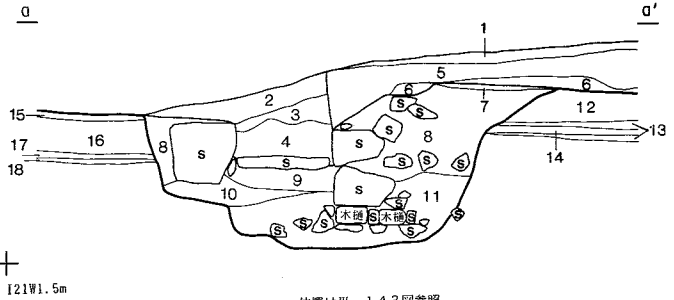
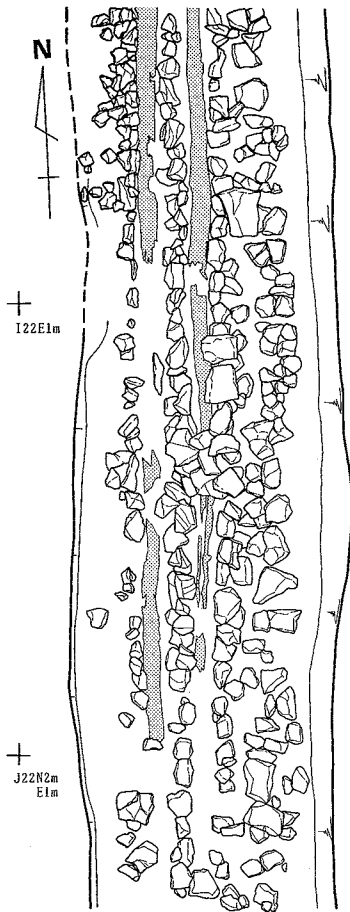
8 E21~19, F21~19, G21~19, H21~19, I21~19, J21~19, K21~19 区の遺構



III-145図 3号・4号石列、6号・10号組石、12号組石下木樁実測図



第三章 江戸時代の遺構



- 1 : 暗灰褐色土 (砂利・焼土・炭化物多量含む)
- 2 : 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む)
- 3 : 暗褐色土 (ロームブロック混じり)
- 4 : 暗褐色土 (焼土混じり)
- 5 : 黄褐色土 (ローム主体、灰白色粘土混じり)
- 6 : 焼土・炭化物
- 7 : 黄褐色土 (ローム主体)
- 8 : 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量、砂・砂利含む)
- 9 : 黄褐色土 (ローム主体、固い)
- 10 : 褐色土 (砂多量含む)
- 11 : 暗褐色土 (炭化物多量含む、ローム混じり、底に鉄分浸透)
- 12 : 褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含む、砂利・粘土・焼土・炭化物混じり)
- 13 : 黄褐色土 (ローム主体、固い)
- 14 : 黄白色砂 (固い)
- 15 : 砂利 (固い)
- 16 : 褐色土 (ロームブロック多量含む、砂利混じり)
- 17 : 砂利 (ローム粒混じり、固い)
- 18 : 砂利 (きわめて固い)

|b +  
H21S1m



+  
|b' I21N1m

|c +  
H21S1m  
E2m



|c'

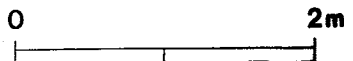


|b'



|c'

1 : 暗褐色土 (ローム粒混じり)



III-146図 12号組石下木榑 (上)、3号石列 (下) 実測図 (a-a':13.0m, b-b'・c-c':12.3m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

た。裏込め用に使われたものである。遺物は瓦片を除くと極端に少なく、わずかな陶磁器片などが発見されているに過ぎない。17世紀代を中心にした遺物が大半を占めている。そのなかで、天秤に用いられたと考えられる分銅の出土が注目される。瓦片はかなりの数の出土であるが、多量の礫とともに黒褐色土の下部からの出土であり、いずれも細片であり、礫とともに埋め戻しの際、集中的に投げ捨てられた可能性が強い。この組石からは17世紀代のしかも後半を中心にした遺物が確認されており、構築時に繋っていたと考えられる12号組石は天和二年の火災に際しての廃絶が考えられるので、10号組石としての機能を失ったのもこの時であろう。その後、10号組石の上には6号組石が構築され、しかもこれはかなり高い位置にまで石が積み上げられており、底は明らかではないが、2号組石を含め大幅な改築がなされた可能性が強い。6号組石は10号組石の上に作られているのであり、6号組石は10号組石と同じ地境としての機能を果たした同一の意味をもつ遺構ということができそうである。周辺の盛土が進み、10号組石は用をなさなくなり、新たに6号組石を構築せざるをえなくなったものと推測される。10号組石・6号組石と続く一連の遺構が最終的に廃絶されたのは2号組石と同じ19世紀半ば過ぎであると考えている。(佐々木彰)

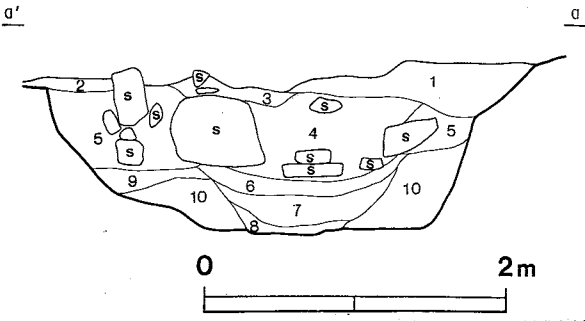
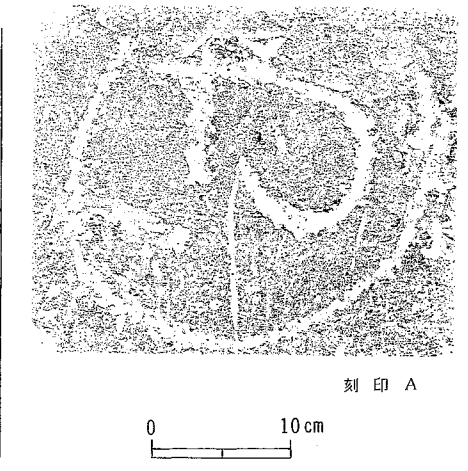
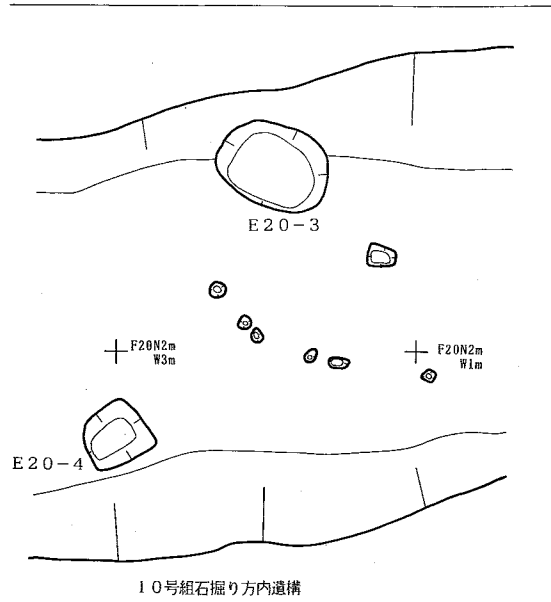
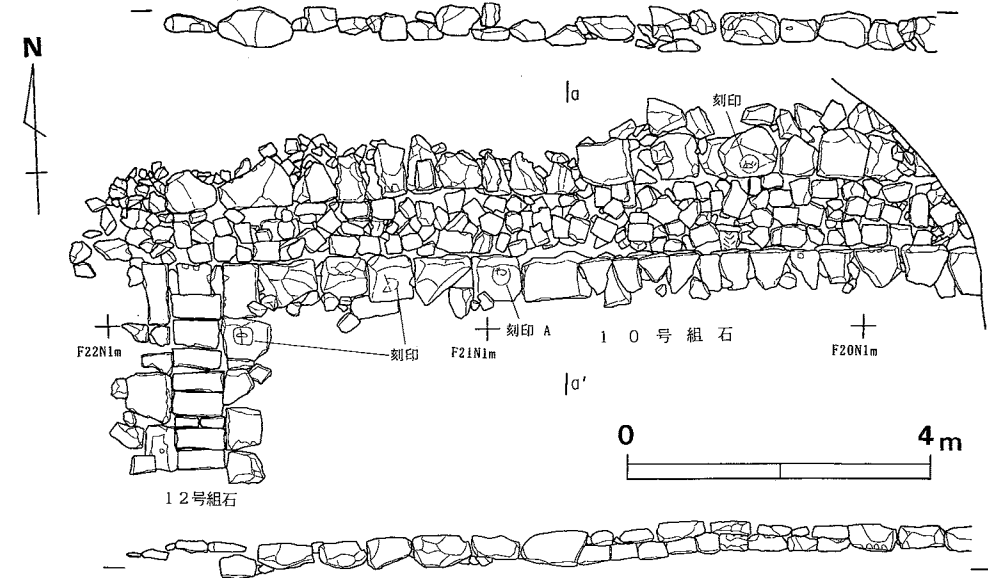
**11号組石** F21・22区に位置する石敷きの道状の遺構である(III-142図)。遺存状態は悪く、全体で6mほどしか残っておらず、東・西側にも11号組石と関連すると考えられる遺構・施設は検出されなかった。構築面はF20・21・22区付近の6号組石南側に12号組石を覆って作られたK面のやや上にある硬化面である。組石は凝灰岩質の平たい切り石を約1m間隔でほぼ平行に二列配したものである。石列の間にはローム混じりの暗褐色土が突き固められており、その上から石列をも覆ってロームによる道路が構築されている。方向は真東西より10度南に振れており、やや曲がっている。規模は東西5.9m、南北1.6m、石列の幅は1mである。土層は3層が確認できるが、それぞれの層はきわめてよく締っており、石は表面に露出していたのではなく、道路の芯の石として使用されていたものと考えられる。遺物は突き固められている土のなかから17世紀末から18世紀前半にかけての陶磁器、火鉢が数点出土している。(堀内秀樹)

**12号組石** E・F・G・H・I・J・K・L21区に位置する真南北方向の石組の溝である。大きく組石とその下にある木樋とに分けられ、それぞれ伴う面が異なり、時期を異にして構築・使用されたものと考えられる(III-143・144上・145・146上図、写真5、6)。南側は近代以降の東京大学医学部附属病院の基礎によって破壊され、北側は10号組石と繋っている。溝の南北の比高の差から北に流れた水は10号組石に至り、東に方向を転じ、不忍池方面に排水されていたものと考えられる。

木樋は12号組石の石組遺構の下に二本平行して走るものである。木は腐食が進んでおり、遺存状態は不良である。やや小型の凝灰岩製の切り石を石敷きとしてその上に20cm×20cmの箱状に組んだ木樋が二列、20~30cm間隔で平行に置かれ、周囲を石で補強している状態で検出された(III-146図上)。掘り方は全長32m、幅は組石遺構により拡張されているが、1.2~1.8m、深さ70cm~1mである。底には十数の杭穴が確認されており、杭などで補強されていたと考えられる。木樋は堆積状態より下の砂利面およびL面と同時に機能していたことが推定される(詳細は6号組石の項参照)。

組石は木樋の掘り方をやや西に拡張して上の砂利面より切り込んで構築されている石組の溝である(III-144図上)。切り石の面取り、側面の石の積み方、中央底の敷き石などが非常に丁寧で、敷き

第三章 江戸時代の遺構



- 1: 黒褐色土 (砂利多量、ローム・焼土・炭化物混じり)
- 2: 焼土
- 3: 褐色粘土 (砂利多量含む)
- 4: 黒褐色土 (焼土・炭化物混じり)
- 5: 黒褐色土 (ローム粒微量含む)
- 6: 砂利
- 7: 黒褐色土 (ローム・炭化物混じり、鉄分浸透)
- 8: 黒褐色土 (ローム・炭化物混じり、鉄分浸透強)
- 9: 黒褐色土 (ローム・焼土・炭化物微量含む)
- 10: 黒褐色土 (ローム粒微量含む)

III-147図 10号・12号組石、E20-3・4 実測図 (立面図の水準:12.4m、a-a':12.8m)

## 8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

石や側面の石の隙間は小型の切り石、砂利、砂で埋められ、漏水を防いでいる。中央底の敷き石は基本的には長さ60cm、幅30cm、厚さ10~20cmの上面が平滑にされた長方形の切り石を用い、隙間なく並べている。側面の石は二段に交互に積まれ、前面が丁寧に揃えられており、また後には小型の切り石で間を埋め、土で固定している。掘り方の規模は全長32m、幅1.4m~1.8m、深さは70cm~1mである。組石は土層の堆積状態より、上の砂利面、K面と同時期に機能していたと推定される。12号組石が検出された22ライン付近では、沢が東西に走っているため面は盛土されて構築されている。12号組石、下の砂利面、上の砂利面、K面、L面などは後世の盛土による土圧のため、沢の中央部にあたるHライン付近がもっとも低いが、使用時には南から北にむかって緩やかな傾斜があったものと考えられる。12号組石も南から10号組石に水が流れていたものと思われる。また12号組石の位置には下の砂利面・L面が使用されていた時期にも木樋が構築され、木樋の東には礎石が存在したことが確認されている。組石になった後も溝の東西で面の利用のされ方には相違がみられることなどより12号組石は境界の機能ももっていたと考えられる。上の砂利面、組石と同時に利用していたK面は礎石と思われる石が広範囲にわたって分布しており、さらに面の上には焼土が大量の炭化物と混じって認められ(III-146図6層)、建造物の広範囲な被災が想定される。12号組石からは上の砂利面、K面から切り込まれているG20-4と同様に第四章でII期(17世紀後半)とする遺物群が発見されている。記録に残る火災のなかでは、天和二年(1682)の火災の可能性が高いと考えられる。もしそうだとすると、この火災を境にして、東の部分の土地の帰属は変わっている。この火災以前は東の部分には証人屋敷があったことになっており、火災以降東の部分は大聖寺藩の上屋敷に併合される。12号組石の位置にこの火災のあと明確に地境とできる遺構は確認できていない。むしろ一連の屋敷としての土地利用があったと考えたほうが良いあり方を示すようになる。とすると12号組石は天和二年の火災以前の道路と証人屋敷の地境の機能ももっていた可能性がきわめて高い。今回の調査の重要な成果の一つである。(堀内秀樹)

**1号杭穴列** F・G24区のIV区5号溝の東側にあり、それと平行する杭穴列である(III-143図)。南端は破壊されていて、上の砂利面がなくなっているため不明である。楕円形をなす杭穴が南北に5、上部が削平され痕跡程度になっているもの1を加えると計6のものが並んでいる。相互の間隔はほぼ等しく、1.75mほどで一問とするには若干短い。確認面は上の砂利面であり、この砂利面を掘って作られている。確認面での杭穴の規模は長径38~70cm、短径30~55cm、深さ16~48cmと様々であるが、各杭穴はいずれも底に直径約20cmの小ピットをもっている。土層の観察によって小ピット上に直径約20cmの杭痕が確認されている。本遺構は周囲に対応するものが検出されなかったこと、礎石を有していないことなどを考えると板塀の杭穴であったと思われる。杭痕が確認されなかったピットの埋土には焼土の粒、焼土塊が大量に含まれており、遺構の廃絶が火災を原因にしたものと考えられる。この遺構は上砂利面に構築された遺構の一つである。東側に平行してある2号杭穴列は規模・形態ともに同じもので本遺構と対になるものであろう。その間是一面の砂利硬化面で、他の遺構の存在もなく、道路として利用されていたと考えられる。(成瀬晃司)

**2号杭穴列** F・G21・22区、H・I・J・K・L21区に位置する杭穴群である(III-143・144図上)。上の砂利面から切り込まれ、12号組石の西側にそって計15の杭穴が真南北に一列に並んでいる。平面形

### 第三章 江戸時代の遺構

は円もしくは南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、各穴は径10cmほどの杭痕と考えられる小ピットを伴う。規模は東西30～60cm、南北50～80cm、深さ15～60cmであり、1.5～2mの間隔で構築されている。底、壁の様子、埋土などは各杭穴によって異なり、それほど画一的ではない。6号組石南北部分の東側にそって並ぶ1号杭穴列は形態、構造、規模、配列が同じで、同時期に2号杭穴列とともに機能していたと考えられる。板塀状の施設の杭穴である可能性が考えられる。遺物は出土していない。(堀内秀樹)

**1号石列** F19・20区にある1.8m間隔で並ぶ4個の石である(III-143図、写真5)。方向は真東西であり、もっとも西の石は2号石列の東から3番目の石列の延長上にある。K面上にあり、2号石列と同じ面にある。2号石列のもっとも北の石との距離は2.7mであり、これとも有機的な関連があった可能性がある。また周辺には数多くの石が同じ面の上にあるが、これらは雑然と置かれている感じで、距離も方向も不定である。4号石列は1号石列の真下にあり、建物が建て替えられたことを示している。1号石列も2号石列と同様江戸間で配されているように考えられる。また2号石列と同じように1・2号杭穴列、12号組石と同時期に廃絶されたものと考えられる。(藤本 強)

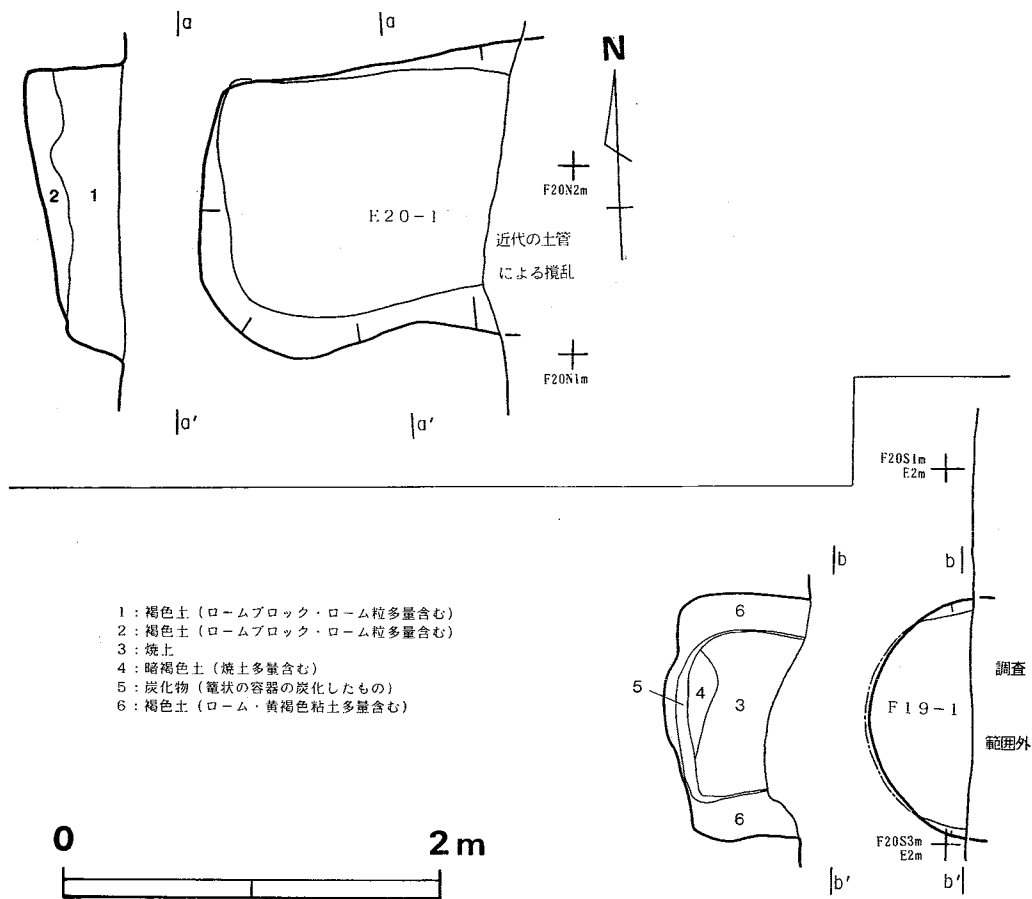
**2号石列** G・H・I・J・K・L20・21区にある礎石列で、12号組石の東側にそれに平行して構築されている(III-143・144図、写真5)。全体像は東と南が調査区の外に及んでいるため捉えきれないが、以下のことは把握できる。本遺構は少なくとも南北に延びる東西六列の石列からなっており、東から1・3番目の石列は1.8m(江戸間一間)の間隔で、ともに30cm大の扁平な円礫で構築され、各礫は南北に1.8m(江戸間一間)間隔で並ぶ。3～6番目の石列は3.6m(江戸間二間)を三等分して配され、そのうち4～6番目は20cm大の扁平な礫などを用い、南北3.6m(江戸間二間)間隔をもって配されている。また2番目の石も1・3番目の中央に20cm大の扁平な礫などが3.6m(江戸間二間)間隔で配されている。この礫の大きさおよび配置の相違より、東西に二つのエリアを想定することができる。一つは30cm大の礫が1.8m間隔で並ぶ東側の石列、もう一つは20cm大のものが3.6m間隔で並ぶ西側のものである。石の大きさから東側には西側より太い柱が建っていたことが推測され、かつそれが1.8m間隔で配されていることより西側よりはかなり荷重の大きな上屋構造が推測される。絵図より類推すると本遺構は長屋に当てはまるものと考えられ、西側の小さな礎石列は塀、東側の大きな礎石列は母屋に該当するものと思われる。よって、間口二間の長屋が少なくとも七軒連っていたものと考えられる。また、これらの礎石は掘り込みをもたず、礎石を配置してから砂利面(K面)を盛ることによって固定されたものである。したがって、その上限は12号組石、1・2号杭穴列などの遺構群と同時期である。3列目の石列は、3号石列東辺および4号石列西辺とはほぼ重なり、盛土による造成が行なわれたにもかかわらず、屋敷内の土地利用に大きな変化がなかったことを窺わせる。天和二年の火事による廃絶の可能性が高く、この推定が当たっているとこの遺構は証人屋敷に関係する遺構ということになる。(成瀬晃司)

**3号石列** 本遺構は2号石列の真下に位置している。残存状態はきわめて悪く、礎石5点、抜き取り穴1か所を確認したに過ぎない(III-145・146図)。そのうち北側の2点はG20区に位置しほぼ南北に並びその間隔は0.95m(六尺三寸間半間)である。その南の延長線上に4.7m(六尺三寸間二間半)の間隔を置いて礎石があり、それを北東の角にして1.9m(六尺三寸間一間)四方の礎石列が確

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

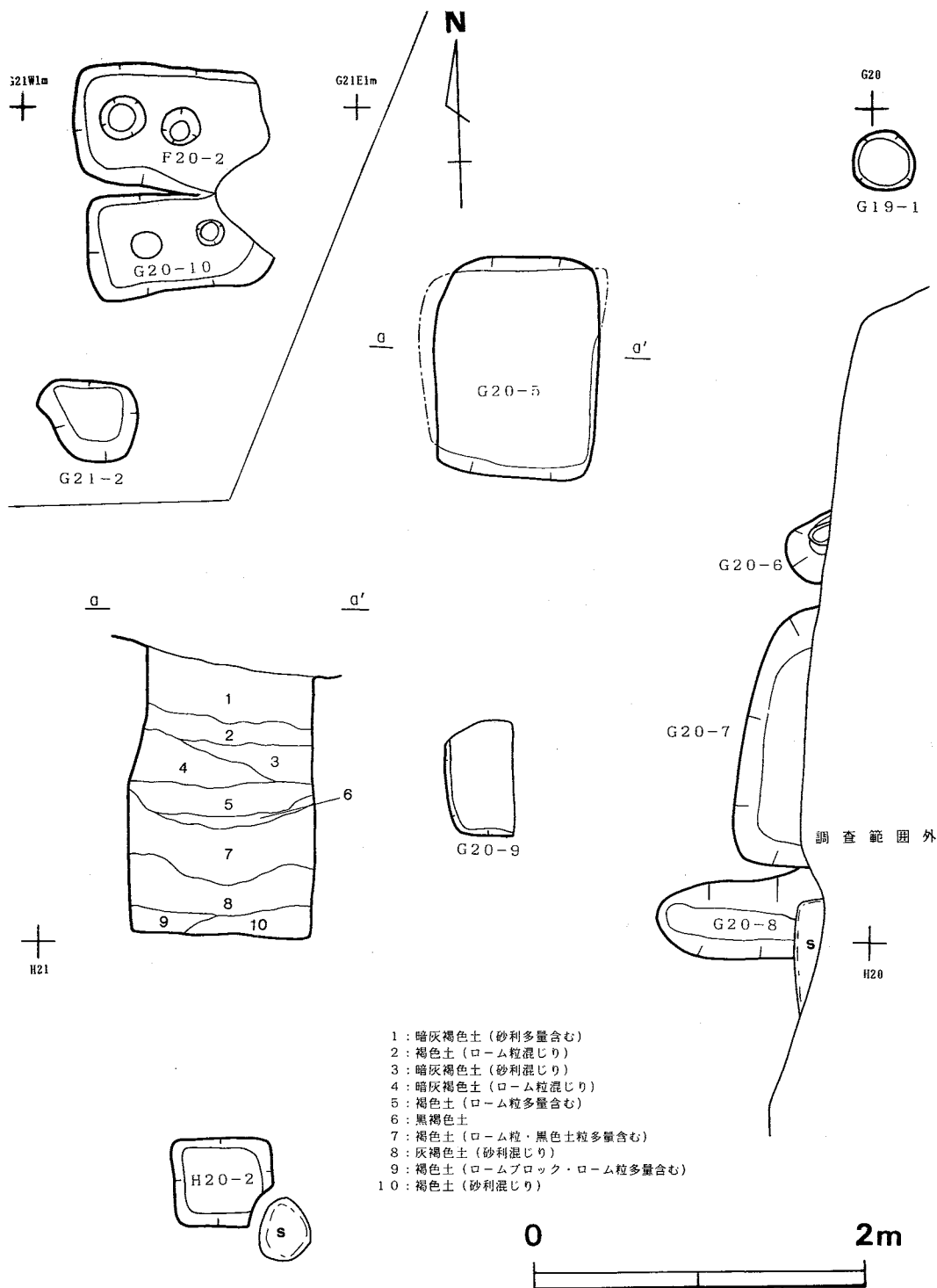
認されている。両礎石群が共存するものかどうか判断し難いが、この北側にある4号石列の西の辺も同一の軸線上にあり、一連の遺構として捉えることが可能である。3・4号石列はL面の上にある。  
(成瀬晃司)

**4号石列** F19・20区にある礎石列と考えられる石および石の抜き穴である(III-145・152図)。3号石列と同じL面上にあり、3号石列の東の列の延長上に4号石列の西の線がある。4号石列は、1.9m間隔で真東西に並ぶ4個ずつの石および石の抜き穴からなる二列の石列とそれらのもっとも西の端の石を繋ぎ、0.95m間隔で配される南北方向の4個の石および石の抜き穴からなる列とがある。残存状態はきわめて悪く、どのような建物があったのか不明であるが、建物があったことは確実である。3号石列と一連の建物であった可能性もあるが明らかではない。1号石列の直下にあるが、使用されている尺度は異なっているようである。L面上の3・4号石列は六尺三寸間と考えられ、K面上の1・2号石列は江戸間を基準にした建物であったものと推測される。1・2号石列が考えられているように天和二年の火災によって廃絶されたことが確実ならば、3・4号石列はそれよりも前に構築されたことは層位的に確実である。17世紀のなかば頃には江戸間による建築がなされていたことを示すものとできよう。今後の一つの重要な課題になろう。  
(藤本 強)



III-148図 E20-1, F19-1実測図 (a-a':13.0m, b-b':13.7m)

第三章 江戸時代の遺構



III-149図 F20-2, G19-1, G20-5~10, G21-2, H20-2実測図 (a-a':12.7m)

8 E21~19, F21~19, G21~19, H21~19, I21~19, J21~19, K21~19 区の遺構

**E20-1** E20区にある東を破壊された南北1.5mほど深さ50cmの方形の土坑である(III-148図)。ロームを多量に含む褐色土を埋土にしている。少量の遺物がある。性格は不明。(堀内秀樹)

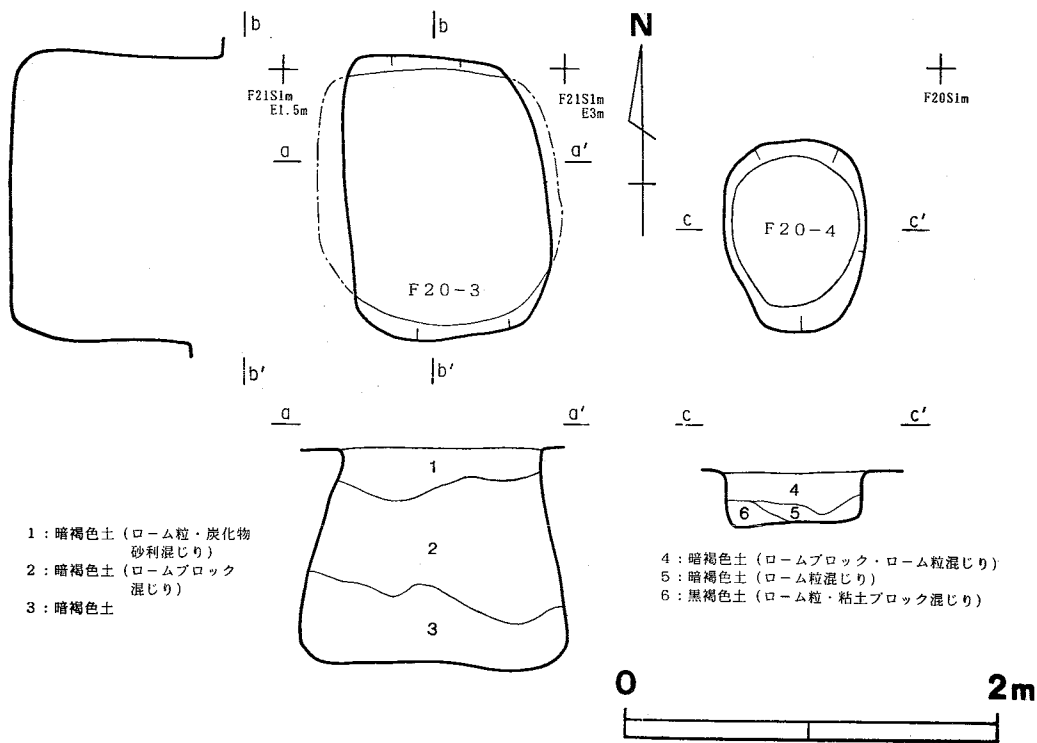
**E20-2** E20区にある長方形の小土坑である(III-127図)。底には浅い掘り込みが3あり、西の隅にはそれぞれ杭穴がある。E21-3とは東西に並ぶが、関連は不明である。埋土は暗~黒褐色土でローム混じりである。遺物はなく、時期・性格ともに不明。(佐々木彰)

**E20-3・4** E20区の10号組石の掘り方のなかにある小土坑である(III-147図)。時期・性格は不明。周辺に7の杭穴がある。(佐々木彰)

**F20-1** F20・21区にある土坑である(III-125図)。南北1.8m, 東西1.4mの楕円形で、深さは55cmである。埋土は砂利と粘土の混じる褐色土で、遺物はない。層位的にみて江戸時代初頭の遺構であろうが、性格は不明。(萩尾昌枝)

**F20-2, G20-10** G21ポイント周辺にある南北に隣あってある類似の遺構である(III-149図)。方形の掘り込みのなかに浅い穴が隣あって2ずつ見られる。穴の径は2のなかのものが25cm, 10のものは15cmで、穴の間の距離は35cmと38cmである。埋土はどちらも焼土・炭化物を含む暗灰褐色土である。目的は不明であるが、有機的な関連をもっていたことは確実である。(成瀬晃司)

**F20-3・4** F20区にあり、江戸時代の盛土の下部で確認された土坑である(III-150図)。3は不整な長方形, 4は楕円形の小土坑であるが、3は底が広がっており、断面は袋状になっている。どちらも暗褐色土を主にする埋土であり、遺物はなく、時期・性格は不明である。(佐々木彰)

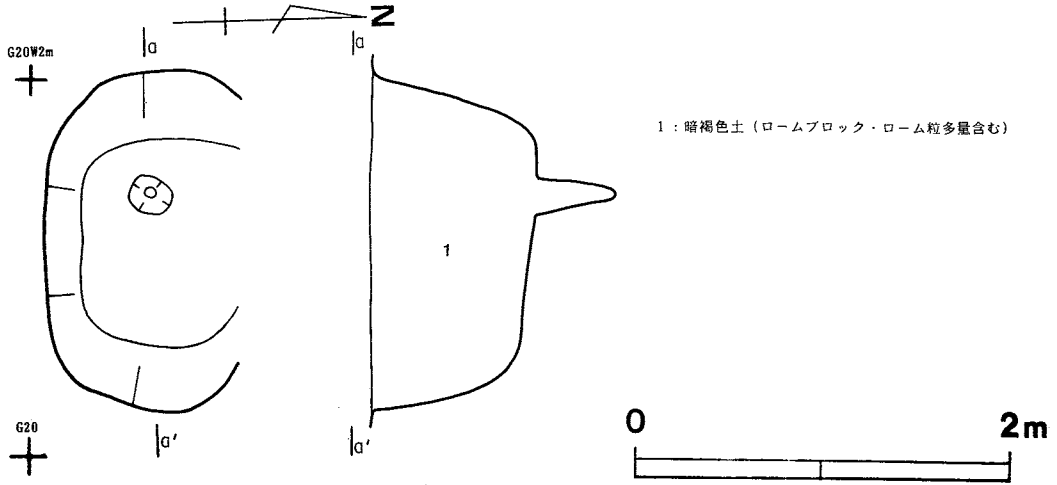




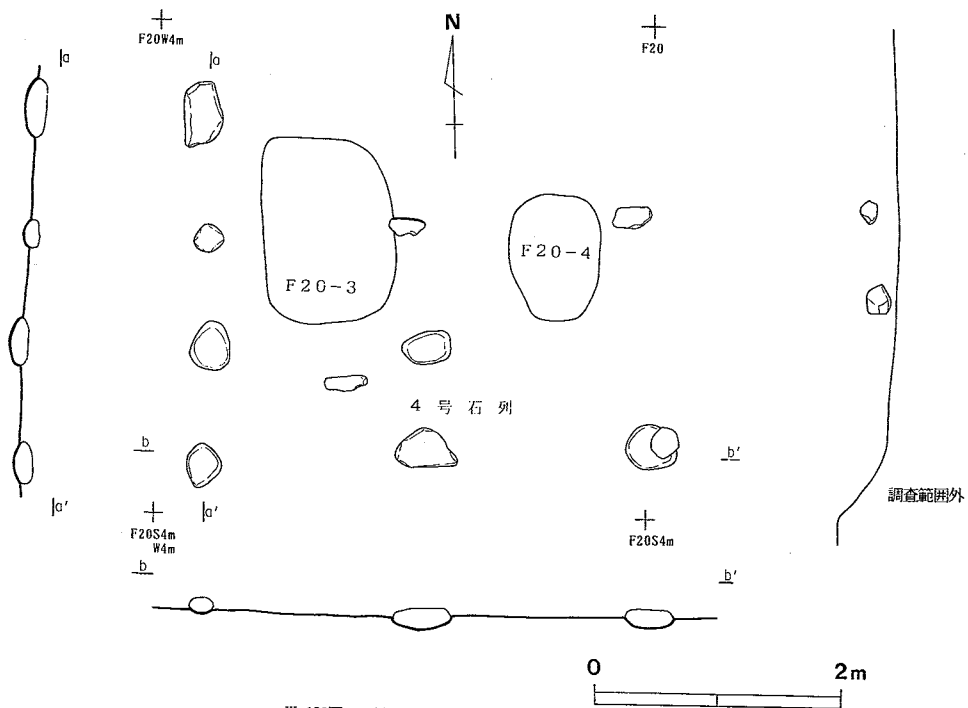
第三章 江戸時代の遺構

F20-5 東西1.8m, 深さ0.9mの土坑である。北側が明らかではないが, 長方形もしくは楕円形の土坑であろう(III-151図)。埋土はローム混じりの暗褐色土。中に径20cm, 深さ40cmの先の尖った杭穴がある。破壊されているためどこから切られていたのか不明。遺物は少ない。(宮田安志)

G20-2 G・H20区にまたがりみられ, 東側は破壊を受けている。平面形は東西3.5m, 南北3mの不整な長方形である(III-153図)。切り込み面はこの付近で確認されている江戸時代の一番新しい面で, 深さは約2mある。壁, 底とも掘り方は粗く凹凸が目立つ。埋土は砂利・焼土・貝殻を含む暗褐色

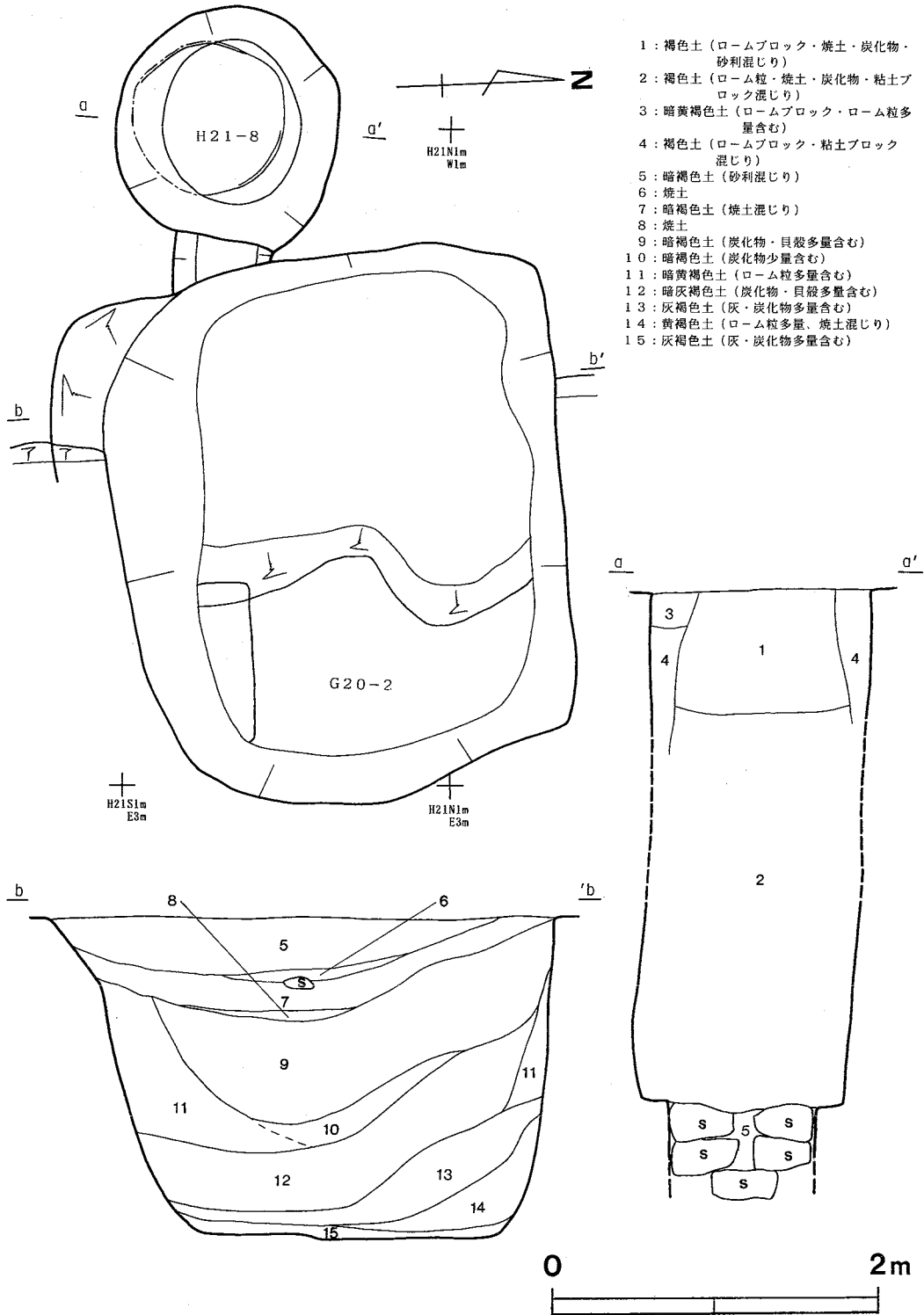


III-151図 F20-5実測図(a-a':12.5m)



III-152図 4号石列実測図(立面図の水準:12.2m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構



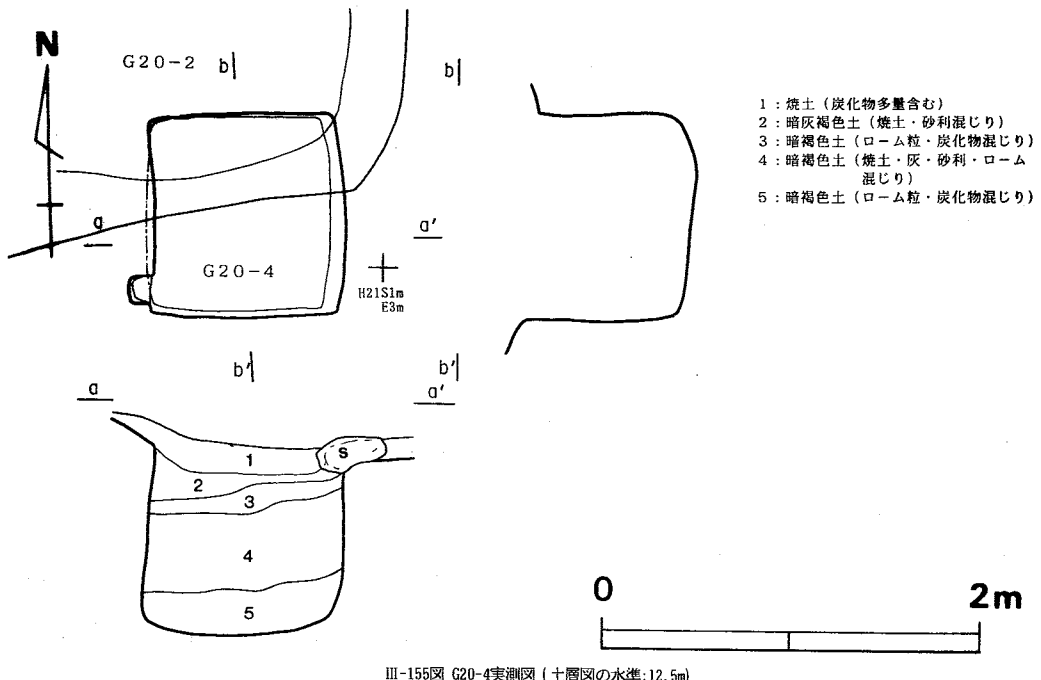
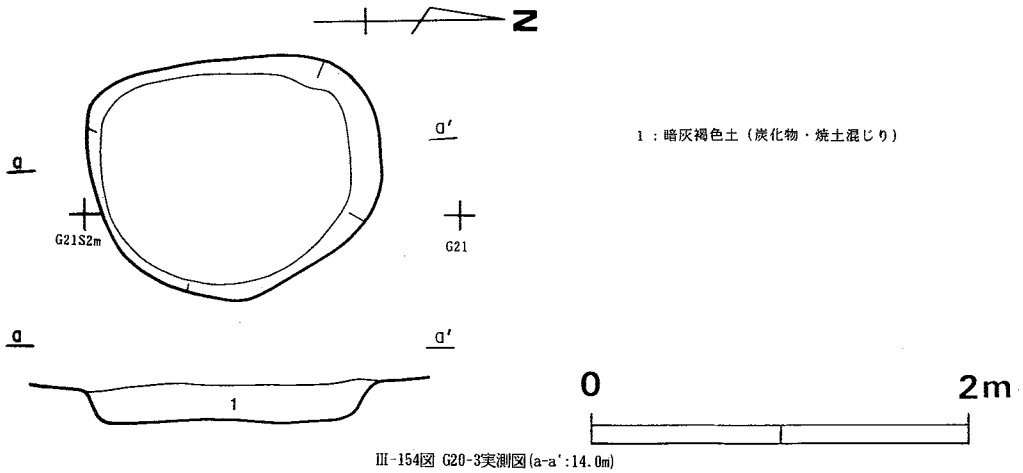
III-153図 G20-2, H21-8実測図 (土層図の水準:14.0m)

第三章 江戸時代の遺構

色土からなる上層と炭化物・ローム・灰混じりの暗・灰・黄褐色土からなる下層に、大別することができる。遺物は18世紀前半のものを中心にしてかなりの量が出土しているが、陶磁器は比較的少なく、「かわらけ」などの土製品が主体である。ゴミ穴かと思われるが確証はない。(宮田安志)

**G20-3** G20・21区にある南北1.5m、東西1.3mの楕円形で、深さ20cmの土坑である(III-154図)。炭化物を含む暗灰褐色土が埋土で、18世紀後半から19世紀初頭の徳利を主とする遺物がみられる。性格は不明。(成瀬晃司)

**G20-4** H20区に大部分が入っている。G20-2の下で確認されている。周辺に広くある盛土に覆われている。一辺1mの正方形であり、深さは0.9mである(III-155図)。底にはやや丸みがあるが、



8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

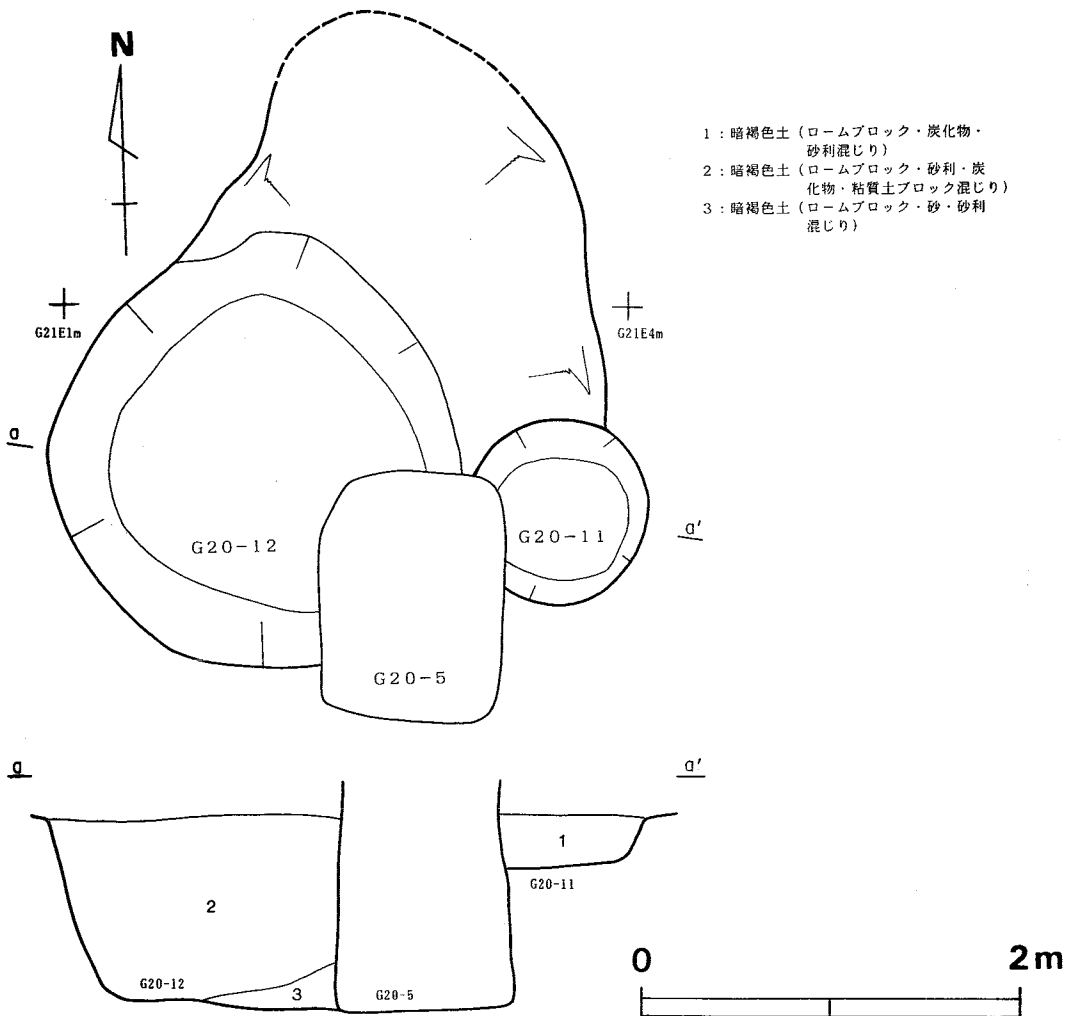
壁は平滑である。南西の隅上部に張り出し部がある。埋土は焼土・炭化物混じりの暗褐色土が主体である。17世紀後半の遺物は上の層から出土している。上部は削平をうけている。(宮田安志)

**G20-5** G20区にある南北1.3m, 東西1m, 深さ1.7mの長方形の土坑である(III-149図)。暗灰褐色土と褐色土を主にした埋土であり, 若干の遺物が出土している。性格は不明。(成瀬晃司)

**G20-6・7・8・9** 調査区の東端にある種々の土坑である(III-149図)。深さは6が18cm, 7が40cm, 8が25cm, 9が12cmである。埋土はいずれも粘性の強い暗灰褐色土である。7から17世紀代の少量の遺物が出土しているのみである。ほかは詳しい時期・性格はわからない。(成瀬晃司)

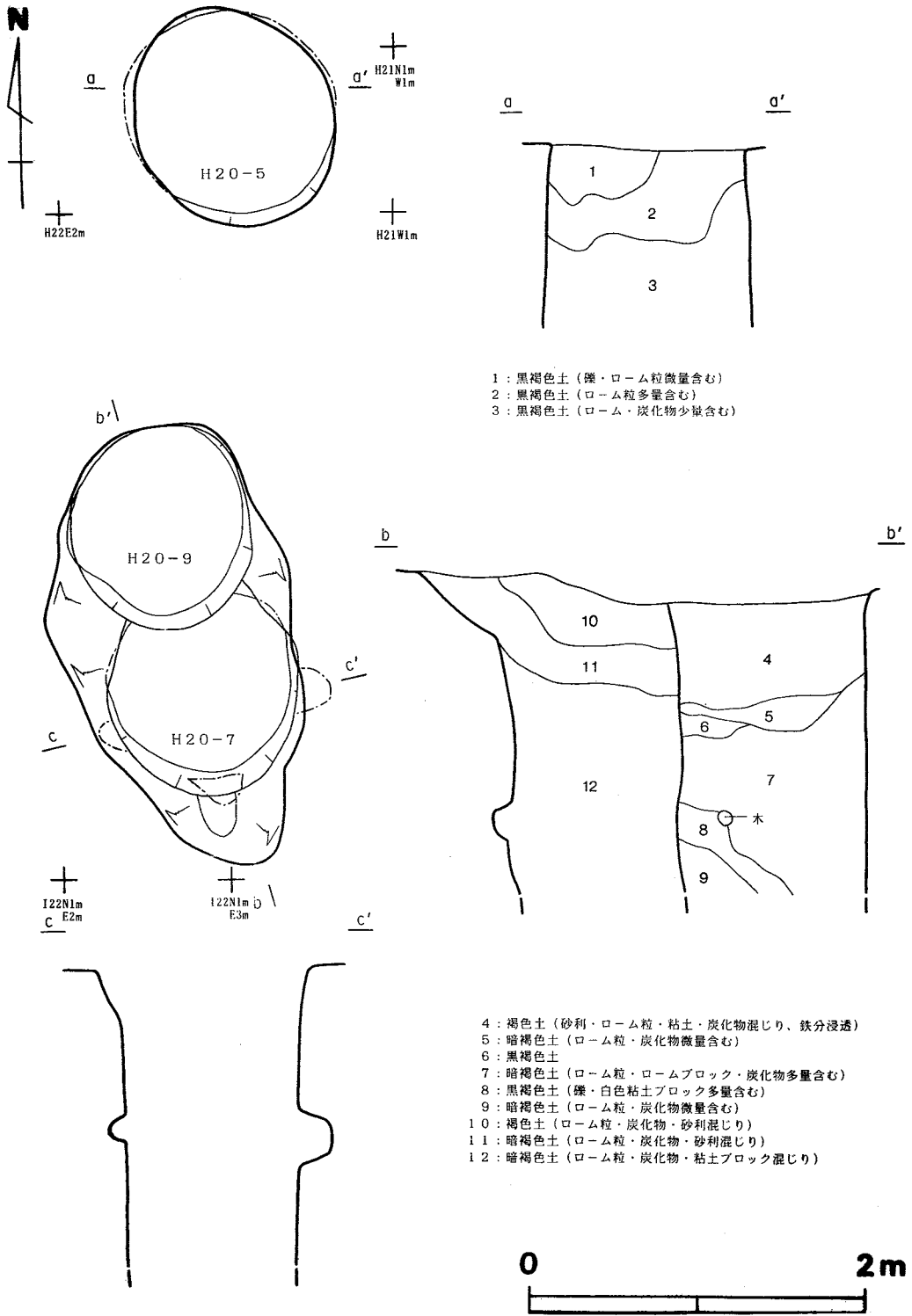
**G20-11・12** G20-5に切られている。11が12を切っている。11は径1mの円形, 深さ0.3m, 12は径2mの円形に東北部に浅い張り出し部が付き, 深さ0.9m(III-156図)。上部は破壊され, 掘り込み面は不明。埋土は両者ともローム混じりの暗褐色土である。遺物はなく性格は不明。(宮田安志)

**H20-1** H20区にあり, H21-3に切られている南北1.2m, 東西0.8m, 深さ65cmの土坑である(III-



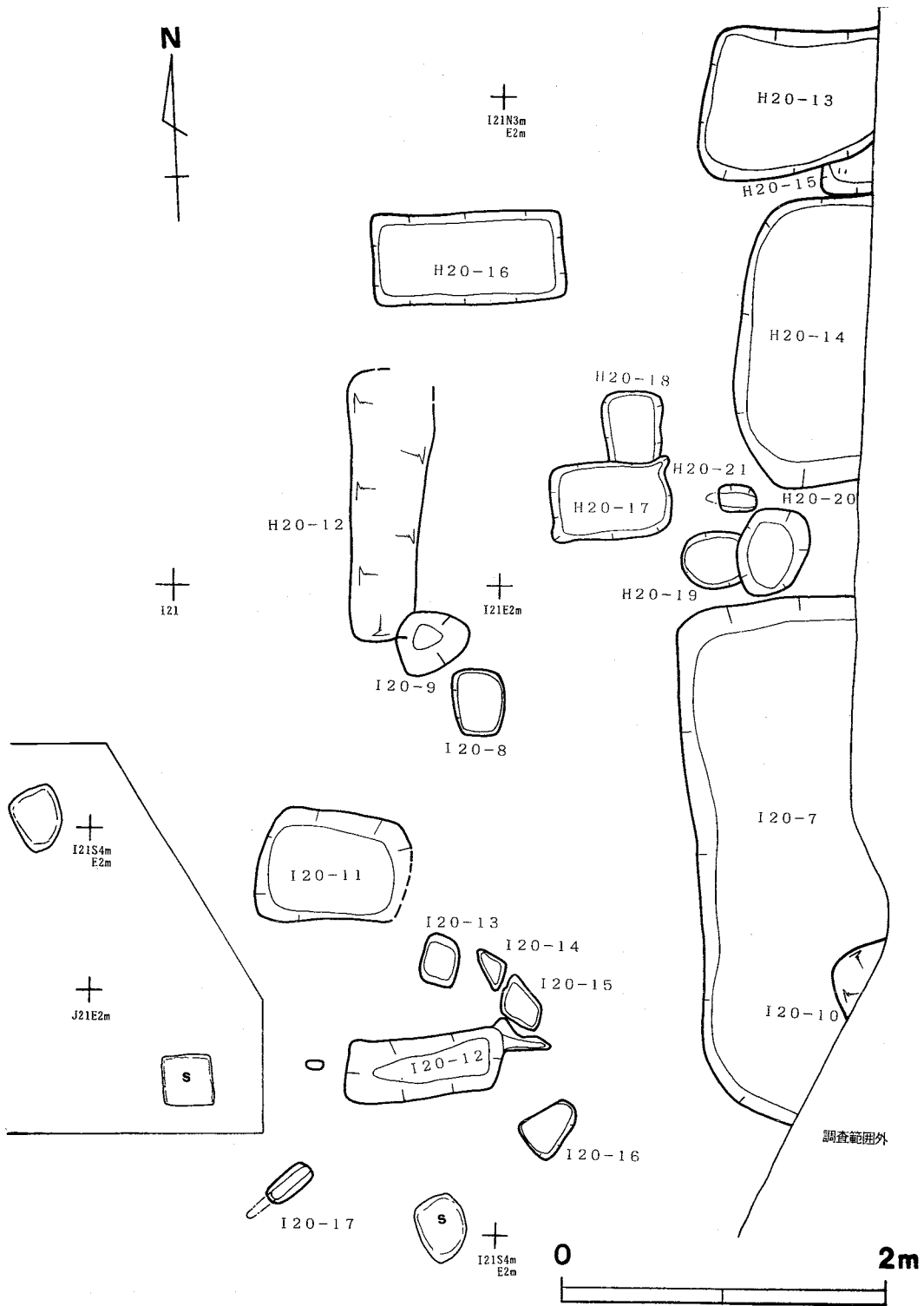
III-156図 G20-5・11・12実測図(a-a':12.0m)

第三章 江戸時代の遺構



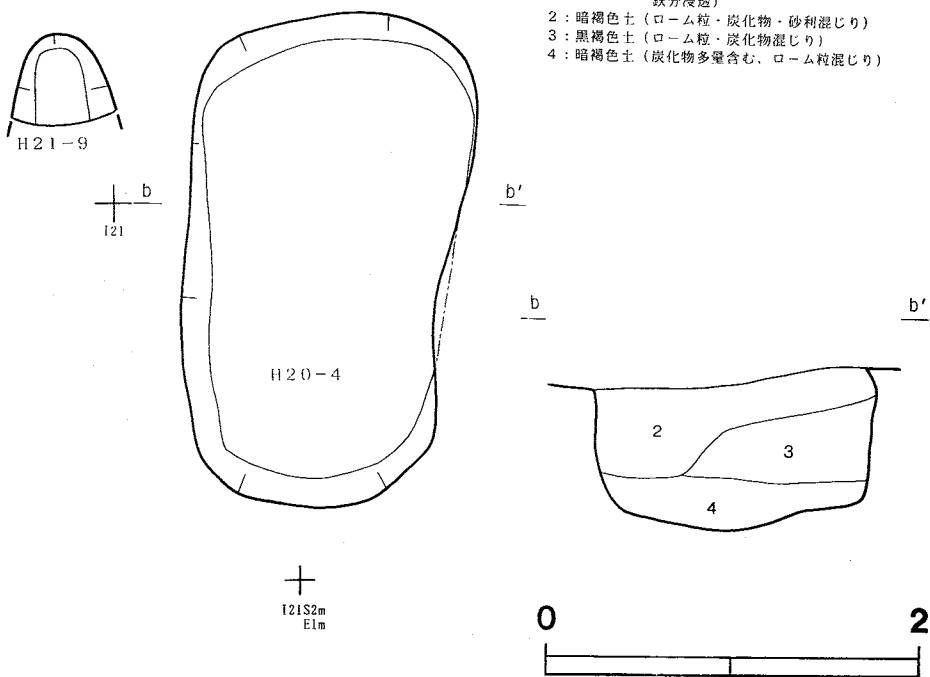
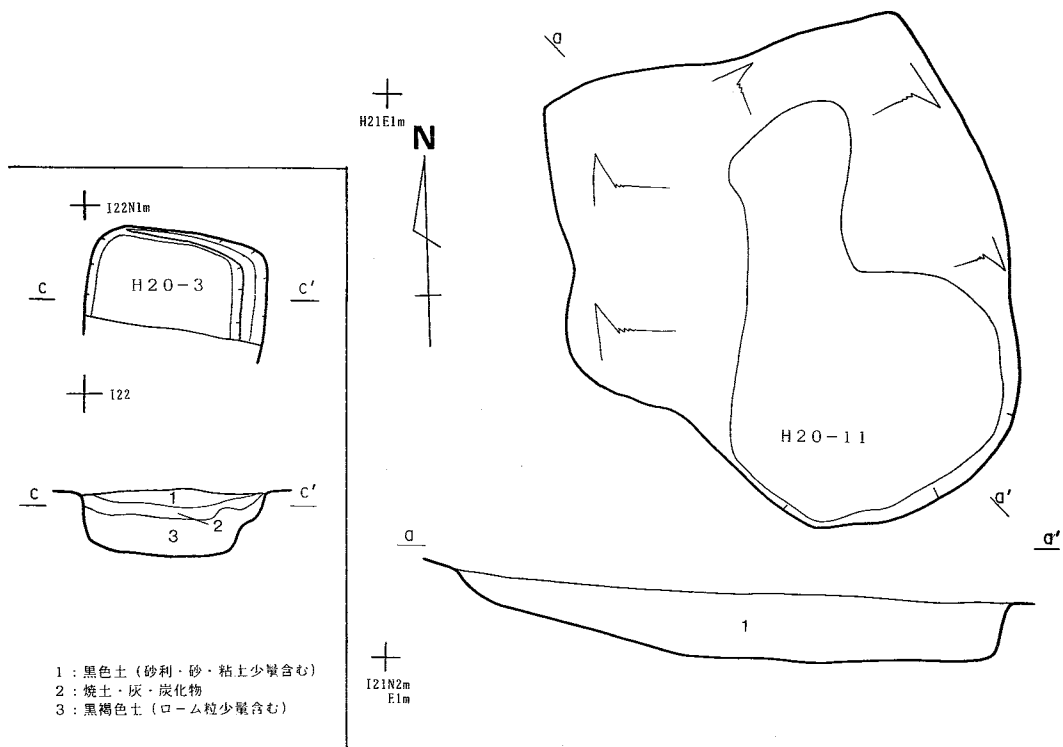
III-157図 H20-5・7・9実測図 (土層図の水準:10.7m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構



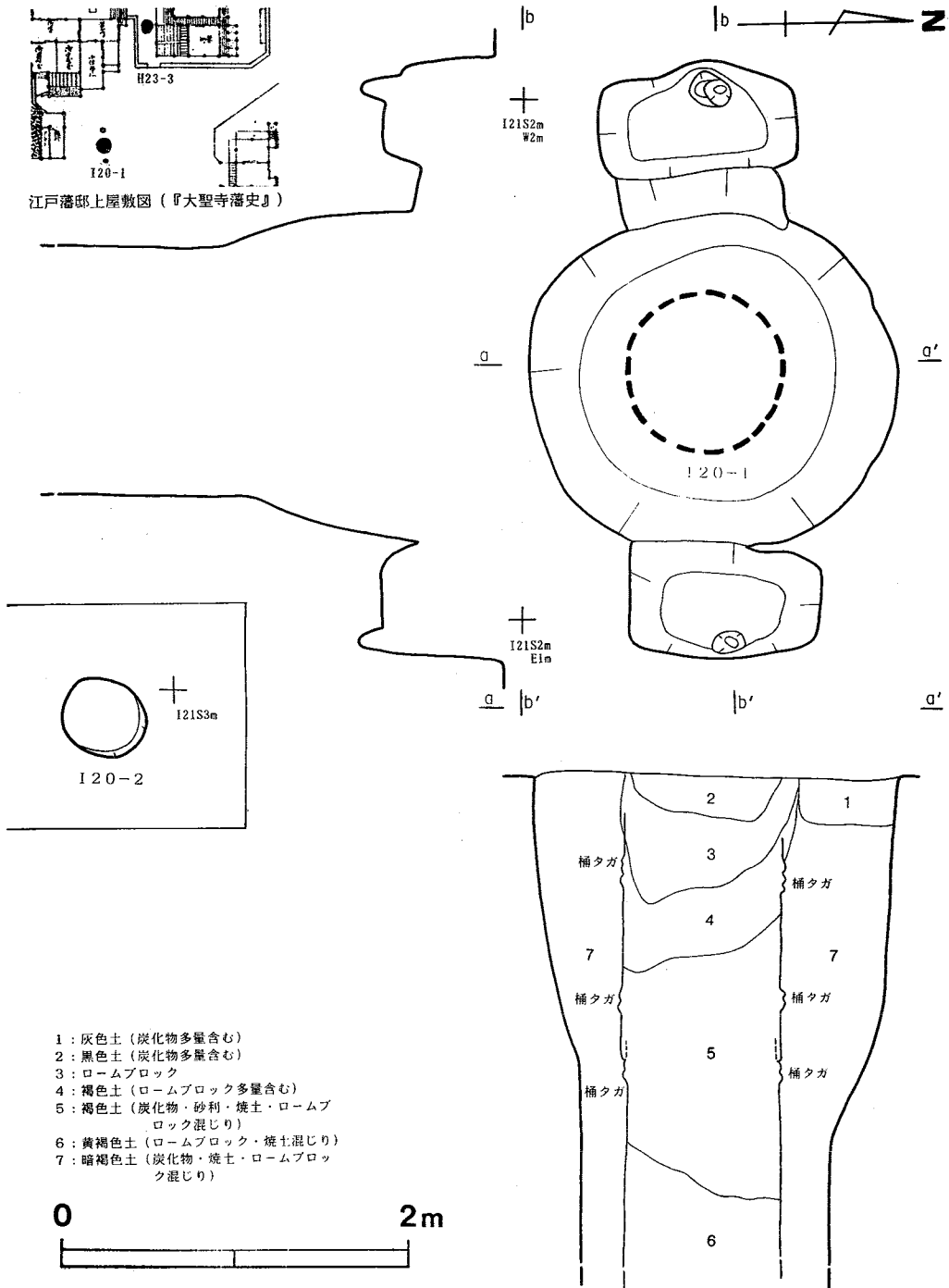
III-158 図 H20-12~21, I20-7~17 実測図

第三章 江戸時代の遺構



III-159図 H20-3・4・11, H21-9実測図 (a-a': 10.7m, b-b'・c-c': 11.1m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構





### 第三章 江戸時代の遺構

-132図)。有機質を多く含む暗灰褐色土が埋土であり、19世紀の若干の遺物がある。(成瀬晃司)

H20-2 H20区にあり、南東隅を礎石によって切られている小土坑である(III-149図)。褐色土を埋土に持ち、18世紀前半の少量の遺物がある。性格はわからない。(成瀬晃司)

H20-3・4 3はH21区,4はH・I20区に位置し、自然堆積の面で確認された土坑である(III-159図)。3は長方形,4は楕円形であり、黒～暗褐色土の埋土をもっている。3からはごく少量の,4からは17世紀代の陶磁器などが若干量出土している。性格は不明である。(佐々木彰)

H20-5・7・9 G・H21区にあり自然堆積の面で確認された径1m強の素掘りの井戸である(III-157図)。7と9は井戸同士ではきわめて稀な切りあいがあり,9が新しい。この部分は埋まっている沢の上であり、井戸が集中することになったのであろう。付属施設はいずれからも発見していない。7には手掛かりであったと思われるくぼみが3確認できている。埋土は黒～暗褐色土が主であり、ローム・砂利・炭化物などが入っている。17世紀後半の「かわらけ」などの遺物が出土している。層位的な観察と一致している。(佐々木彰)

H20-11 G・H20区にある自然堆積の面で確認された土坑である(III-159図)。不整な形をしており、2.5m前後の規模をもっているが、深さは30cm強と浅い。埋土はローム・焼土などが混じる暗褐色土であり、鉄分の浸透もある。遺物は17世紀代の「かわらけ」などが少量出土している。鉄分の浸透があるところをみると水に関係した遺構とも考えられるが、詳細は不明。(佐々木彰)

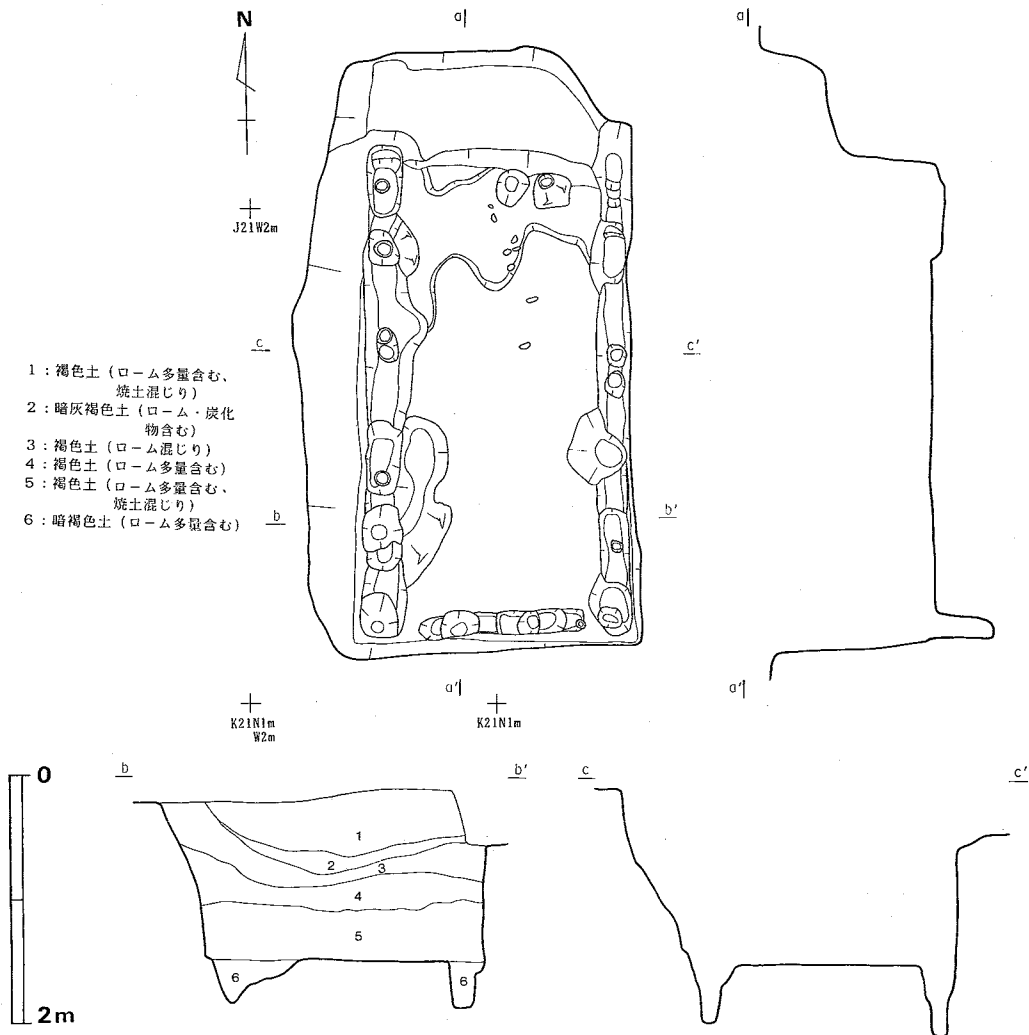
H20-12・13・14・15・16・17・18・19・20・21, I20-7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17 H・I20区にまたがり自然堆積面のやや上で発見された土坑である(III-158図)。大小様々であり、形状も区々であるが深さは10～30cmで15cm内外のものが多く、埋土も共通している。H20-13・14・15, I20-7は粘土混じりの黒褐色土であり、少量の陶磁器、瓦片を含んでいる。他は周辺一帯に見られる砂利混じりの茶褐色土である。いずれもこの一帯を整地する際に埋められたことを示していよう。時期は層位的にみて江戸時代初頭のものと考えられるが、性格は不明である。(宮田安志)

I20-1 I20・21区に位置する両側に付属施設のある井戸である(III-160図)。確認したのは江戸時代の盛土の上から二番目の面で、井戸本体の平面形は円形であり、径は2.1m強である。断面形はロート状を呈し、確認面から1.6m～2m下で円筒に変わり、径1.4mになる。井戸の東西両側に長方形の土坑が隣接している。規模は東西65cm、南北1.2m弱、深さ65cmである。この施設の外側の壁際にはそれぞれ径15cm、深さ15cmほどの杭穴があり、この底は硬くなっており、杭穴の上には杭痕もあることより両杭穴は井戸に伴う上屋の杭穴と考えられる。なお杭穴間は3.2m弱ある。土層の観察より井戸側の痕跡が確認された。井戸側は径90cm(三尺)、長さ1.5m(五尺)、板の厚さ3cm(一寸)であり、右捻りで一条5cm幅の朱彩をほどこされたタガが上端に三条、下端に二条締められていた。掘り方と井戸側の間の詰め土はローム・炭化物・焼土を含む暗褐色土であり、井戸側のなかにはロームブロックを主体にする土で短期間に埋められている。井戸側のなかから17世紀後半と19世紀前半の陶磁器が混在して出土しているが、この遺構の構築面から考えて前者は伝世もしくは混入したものである。また、『大聖寺藩史』所収の文化年間とされる絵図にある、東西方向に付属施設のある井戸に比定できるものと考えられる。この井戸とH23-3の井戸との位置関係も一致しており、確実性は高い。「御殿空間」の東北にある長屋に関係する井戸であろう。(成瀬晃司)

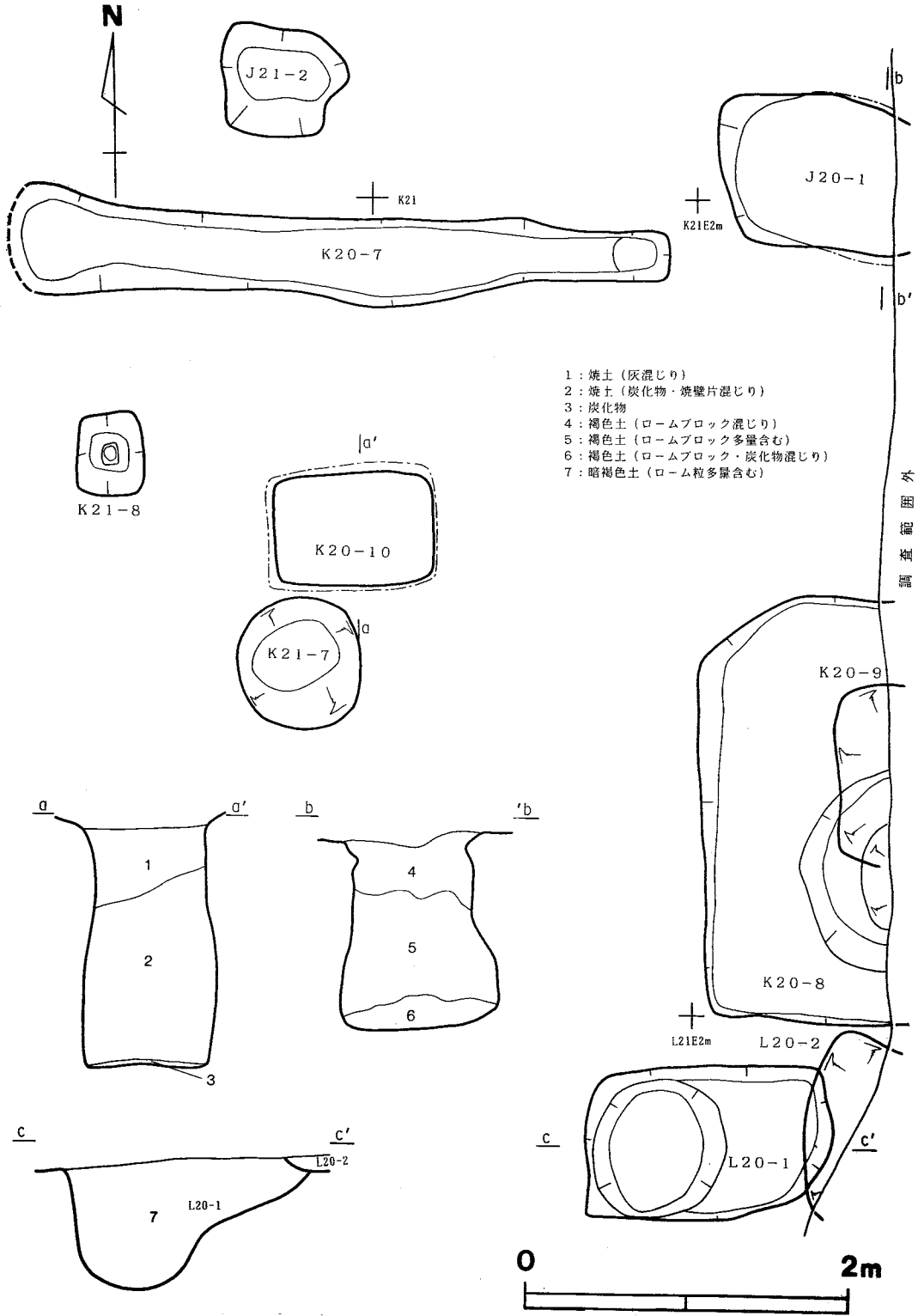
8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

I20-2 I20・21区にある径45cm、深さ5cmの小土坑である(III-160図)。上部をほとんど破壊されており、詳細は不明である。(成瀬晃司)

I20-3 I・J20・21区に検出された地下式土坑である(III-161図)。遺存状態は良好で、平面形は長方形である。東・南壁は垂直であるが、西の壁はやや緩やかに、北の壁は一段のテラスをもっている。規模は南北4.4m弱、東西2.7m強で、深さは1.3mである。底は平坦で硬くなっており、北壁を除く三壁にはそれぞれ杭穴をもつ壁溝があり、それに囲まれた部分は江戸間の二間×一間である。溝のなかの杭穴は東西に各7、南に2あり、溝の底からの深さは40~50cm、杭穴間は約60cm(二尺)であるが、東・西壁の南から四本目と五本目は隣接している。北の壁際には壁溝はないが、中央やや東よりに杭穴が二本隣接して、その周囲からは不規則な配列をする8の杭痕が検出された。また北壁には底の上約80cmに奥行約60cmのテラスがあるなど他の壁とは異なった特長のあることを考

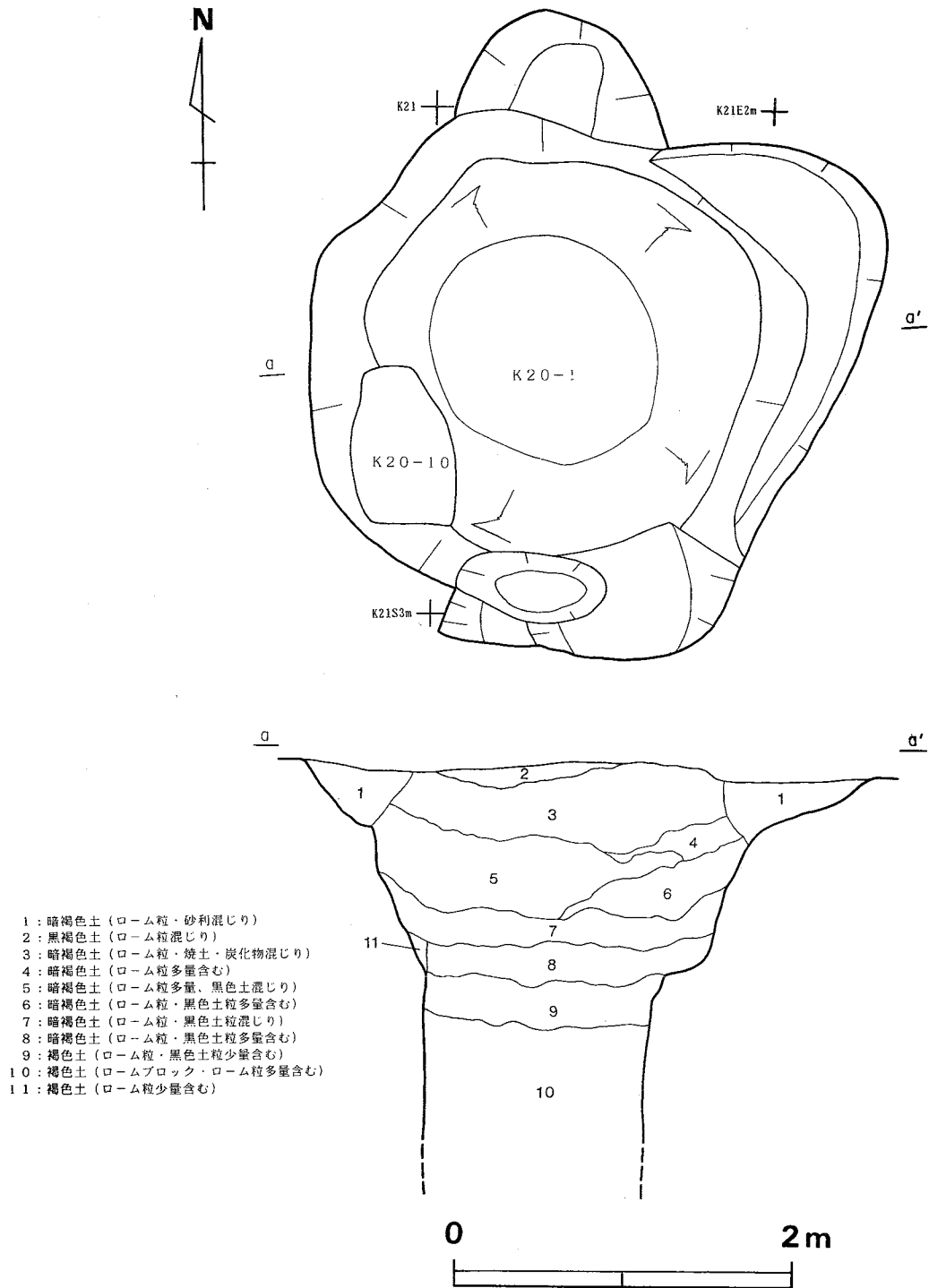


第三章 江戸時代の遺構



III-162図 J20-1, J21-2, K20-7~10, K21-7・8, L20-1・2実測図 (土層図の水準:12.5m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構



### 第III章 江戸時代の遺構

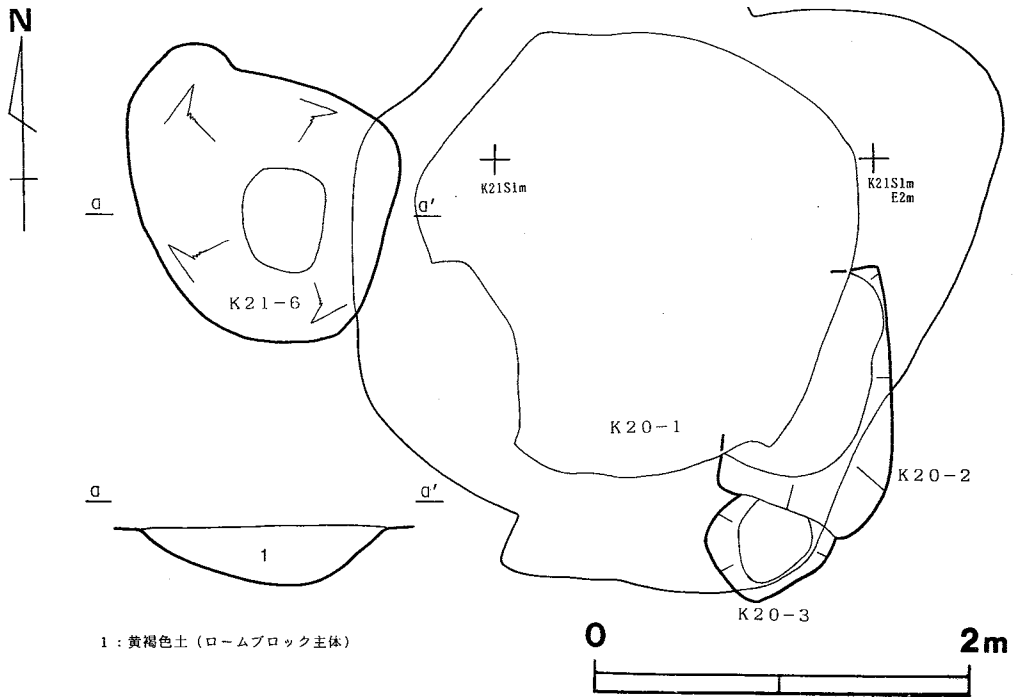
えると北壁に入口があった可能性が高い。壁と杭の間には丸竹を横積みにして壁を作り出している痕跡が一部に見られた。板材による壁は他の遺構にも何例か検出されているが、竹材を用いた壁は他に例を見ない。埋土は北から南に向かって流入している。ロームを多量に含む褐色土で半分ほど埋め戻された後、炭化材などを混じえた暗灰褐色土(2層)が堆積し、それを覆ってロームを多量に含む褐色土が堆積している。暗灰褐色土のなかには18世紀前半を中心とする遺物が含まれているが、中には火熱を受けているものもあり、火災によるゴミの廃棄層と考えられる。(成瀬晃司)

**I20-4・5・6** I20・21区の自然堆積の上面で発見した小土坑である(III-133図)。深さ10~20cmで埋土はローム混じりの暗褐色土であり、遺物はない。時期・性格はわからない。(成瀬晃司)

**J20-1** J・K20区にある土坑である(III-162図)。断面が袋状の形の1m内外の土坑である。ローム混じりの褐色土が埋土であり、少量の遺物がある。(萩尾昌枝)

**J20-2** I・J20区にまたがる隅丸方形の土坑である。一辺1.5m、深さは確認したところから15cmほどである(III-133図)。自然堆積の面で確認した。遺物は少量である。(宮田安志)

**K20-1** K21区に中心のある井戸である(III-163図)。確認されたのはL面である。遺存状態はほぼ良好であるが、南西の一部をK20-10に切られている。平面形は確認面で、一辺2.9mの隅丸方形である。断面形は「朝顔形」をしており、確認面の下1.2mより緩やかに外反している。その下の壁は垂直であり、平面形は1.3m×1.5m弱の楕円形を呈する。井戸側は埋土の観察より下の掘り方とほぼ同一のものと思われるが、その痕跡は8・11層の境に現われているに過ぎない。井戸の南北の壁から楕円形の穴が確認された。杭痕などは認められなかったが、上屋施設の杭穴と考えられる。



III-164図 K20-1~3, K21-6実測図(a-a':11.4m)

8 E 21~19, F 21~19, G 21~19, H 21~19, I 21~19, J 21~19, K 21~19 区の遺構

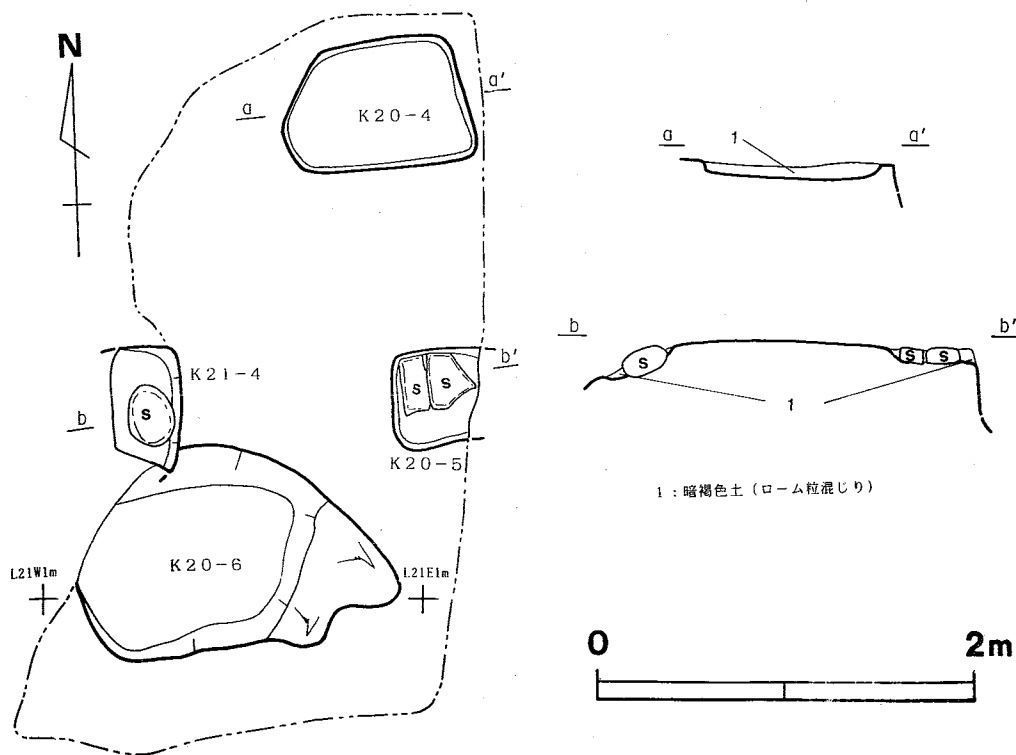
穴の中心を結ぶ線はほぼ真南北である。埋土はほぼ水平な堆積をしており、確認した面では遺構の壁際にドーナツ状に巡る暗褐色土(1層)があるが、掘り方の壁際を固めるために詰めたものと考えられる。遺物は1層と井戸側のなかから17世紀後半の陶磁器が少量出土している。出土した寛永通宝は古寛永4,文銭5のみであることが注目される。(成瀬晃司)

**K20-2・3** K20-1の南東にある土坑で,K20-1に切られている。3は2にも切られている。どちらも隅丸方形であったと思われる(III-164図)。深さは2が50cm,3は10cmである。自然堆積の上面で確認している。埋土は2がローム混じりの暗褐色土,3がほとんどロームからなる。2に陶磁器が少量ある。性格はわからない。(成瀬晃司)

**K20-4・5・6** K20・21区にある土坑である(III-165図)。4は長辺1m弱の隅丸方形で深さ10cm弱,5はなかに石のある土坑で,西に1.5mの距離で類似のK21-4があるが,他に周辺に関連のあると考えられる遺構はない。6は東西1.7m,南北1.1m,深さ30cmの不整な形の土坑である。いずれもローム混じりの暗褐色土の埋土である。遺物はない。性格は不明。(成瀬晃司)

**K20-7・8・9** K20・21区にある遺構である。7は東西に長い溝状の遺構で,8・9は切りあい関係のある土坑である(III-162図)。8が新しい。7の深さは50cm,8は30cm,9は25cmである。7の埋土は暗褐色土,8は炭化物を含む焼土,9は暗灰褐色土である。遺物はなく,時期・性格は不明。(小川 望)

**K20-10** K20区の西側にあり,K21区にかかる。東西1m,南北0.7mの上部,底は南北1.1m,東西0.8mと上部より若干大きい(III-162図)。掘り込み面は2号石列設置面と考えられる。埋土は



III-165図 K20-4~6, K21-4 実測図 (土層図の水準: 14.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

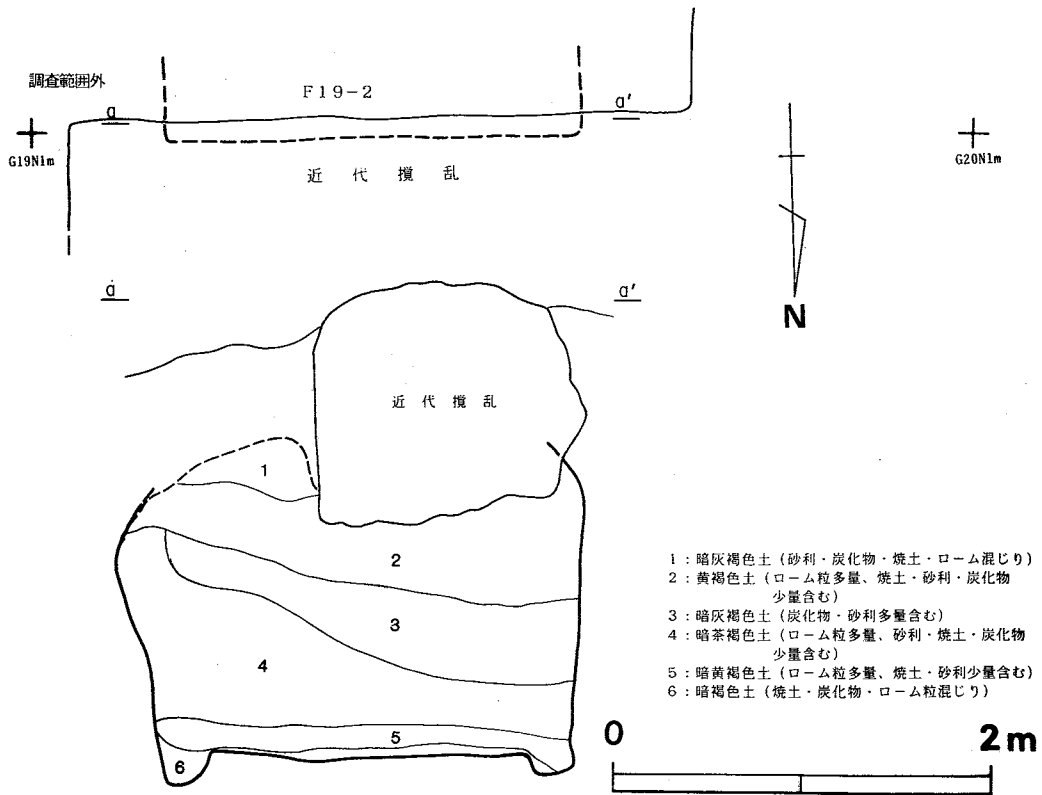
焼土で灰・炭化物が混じる。底に炭化物の薄層がある。小片の陶磁器などが出土している。火事の後始末の投棄が主になった埋土であろう。底直上から「寛永通宝」が出土している。（宮田安志）

**L20-1-2** L20区にある切りあい関係のある土坑である(III-162図)。2が新しい。1は不整な長方形で、深さは75cmある。暗褐色土を埋土にしており、遺物はない。2は灰褐色土を含む暗褐色土を埋土にしている。確認された深さは10cmである。（小川 望）

**E19-1** F20ポイントの東北にある自然堆積の面で確認した土坑である(III-127図)。長軸1.8mの楕円形で深さは20cmである。黒褐色土を埋土にし、遺物はなく、性格は不明。（佐々木彰）

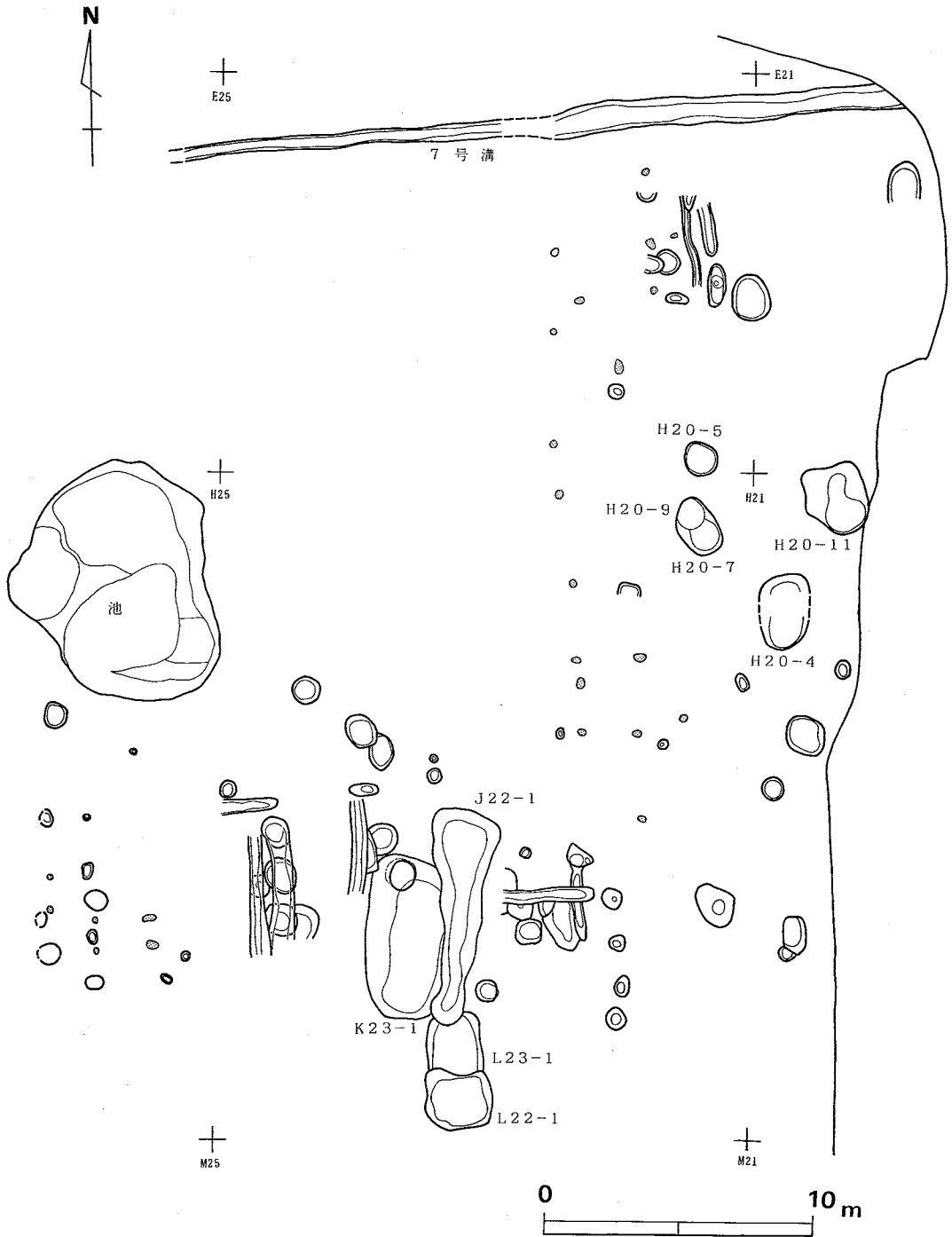
**F19-1** 調査区の東端 F19区にある円形の土坑で、径1.3m、深さ80cmである(III-148図)。内部に籠状のものの炭化したものがあり、その内外で埋土は大きく異なる。外側は粘土を含む褐色土でしっかりと籠状のものを固めているが、中は焼けた漆喰や土壁を含む焼土が主である。ほかに遺物はなく、性格と時期はわからない。（堀内秀樹）

**F19-2** F19区の南端、大部分はG19区に入る遺構である。今回の本来の調査区からは外れ、工事用の取り付け道路を作る際に近代の建物の基礎の下に辛うじて残っているのが発見されたものである(III-166図)。地下式土坑の一部であろうが、全容は不明である。埋土は焼土・砂利などを含む暗灰褐色土が主になっている。下の層は水平な堆積をしているが、大部分の層は東から西に流れ込むような堆積である。入口の位置と関係しているのであろう。遺物は少量あるのみである。中央の



III-166図 F19-2実測図(a-a':14.6m)

8 E21~19, F21~19, G21~19, H21~19, I21~19, J21~19, K21~19 区の遺構



III-167図 D~M=20~26区の江戸時代初頭の遺構見取り図



### 第三章 江戸時代の遺構

東よりに入口のある地下式土坑と考えられるが詳細は不明である。

(松下理恵)

G19-1 G19・20区にある径35cmの浅い円形の小土坑である(III-149図)。上部はほとんど削平されていて詳細は不明。

(成瀬晃司)

#### 江戸時代初頭の東よりの地点

なお、D～M=20～26区にみられる江戸時代の初頭と考えられる自然堆積の上面に現われた遺構は、III-167図に示す通りであるが、1・2・3・4号石列を除き、このところに大規模な建物があった痕跡はない。これらはいずれも建物というよりは庭園などに関係するのではないかと思われるものが主であるようである。建物の基礎の可能性のあるのはJ25・K25・K24区の自然堆積の上面に現われた石と石の抜き穴であるが、これとても間隔、方向性など問題が多く、建物の存在を積極的に主張できるものではない。これにあたるのではないかと考えられるのは6個の石とピットが7である。石は最大のもので45×25cmであり、小さなものは径20cmほどである。自然堆積面を若干掘って、そこに石を入れている。K25区の中央にある4個の石は上面が標高11.4m前後と近く、方向もほぼ一致しているが、相互の間隔はマチマチである。H24区のもものは石の上面の標高は11.3m前後でまずまずであるが、相互の間隔は0.3mしかない。石の抜き穴かと考えられるものはいずれも0.1mほどの深さで埋土はローム混じりの黒色土である。これらにも建物があったとする積極的な証拠はない。石も石の抜き穴も何らかの建物を想定するには証拠が余りにも貧弱である。むしろ庭園の敷き石を考えるのが妥当かもしれない。ここで注目すべきは22ラインの西約2mのところをほぼ南北に走る杭列である。これはほぼ12号組石の下にあたっており、相互の方向にブレはあるものの地境の跡を示すものとして注目する必要があるだろう。12号組石によって示されるであろう証人屋敷の地境が江戸時代の初頭にまで遡ることを示していよう。この杭列を境にして東西で、遺構のあり方に差が見られるのもこのことを示していよう。西側では居住に関係すると考えられる遺構はほとんど発見されておらず、むしろ庭園・道路などオープンな空間が想定できるのにたいし、東側には沢の上部を中心にして、多くの井戸が発見されている。生活空間があったことを示しているともできよう。それと東西に伸びるIV区7号溝である。これも10号組石に近い位置にあり、この地境が江戸時代の初頭にまで、遡って確かめられることを示していよう。V区1・2号溝のもつ意味と同じものである。このように前田家関係の屋敷がこの地に置かれるようになった時から、その後の時代に受け継がれる江戸時代を通しての基本的な地割りは出来上がっていたものと考えることができよう。天和三年の屋敷地の改変に見られるような変化が認められるものの、基本的なものが17世紀の前半のうちに成立していたことは確実であろう。

(藤本 強)

## 9 B28, B25, C34～24 区の遺構

### 概況

本地点は2号組石、V区1・2号溝の北にあたり、比較的遺構のまばらなところである。近代以降の土である表土を取り除くと、ほぼ純粋なロームからなる黄褐色土の盛土がある。この下は西ではいきなりロームになる部分もある。盛土をする時に自然堆積の面を削ってから盛ったものと考えられる。東側ではしだいに盛土が厚くなるが、近代以降の破壊も深くなり、はっきりと盛土の面を

## 9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構

確認できなくなる。遺構のほとんどはこの盛土を切って作られているものと思われるが、上部の破壊がひどいため、わからないものも数多い。自然堆積の面は東に徐々に高度を下げていくが、他の地点にみられるような沢による影響はほとんど受けていない。

遺構は比較的大型のものが多く、小遺構が錯綜することはなかった。一つには近代以降の破壊が深くまで及んでいたことが一因であろうが、そもそも小遺構が少なかったものと考えられる。小規模な地下式土坑もしくはそれに類する長方形の土坑が中心である。既に色々のところで触れているが、2号組石、V区1・2号溝は長期にわたる地境の存在を示す遺構であると考えられ、それは天和三年以降の大聖寺藩と富山藩の地境である。したがって、本地点の遺構は全て富山藩の屋敷にかかわる遺構ということになる。2号組石を境にして、盛土がガラリと変わるのもこうした事情を反映していよう。遺構が地下式土坑もしくはそれに類するものであることは、居住部分と密接な関係にあったことを示していよう。上部が大きく破壊されているので、直接それを示す礎石などは全く発見されていないし富山藩の屋敷の絵図面もまだ発見されていないので、多くの部分がわからない。ただ「延宝図」によると、V区1号溝は富山藩の南と西の端になっていたことは明らかであり、V区1号溝の北への曲がり角は富山藩の上屋敷の南西端になる。また、「天保図」に見られる富山藩と加賀藩の境界もズバリこの位置にあたり、V区1号溝の位置が長期にわたる地境であったことを示している。さらに、天和三年までの富山藩の上屋敷の正門は、道路であった上の砂利面の北端にあったものと推測される。今回の調査地点の遺構は規模などからみて「詰人空間」のものと思われる。門の西にあった「詰人空間」の遺構を調査した可能性が高い。

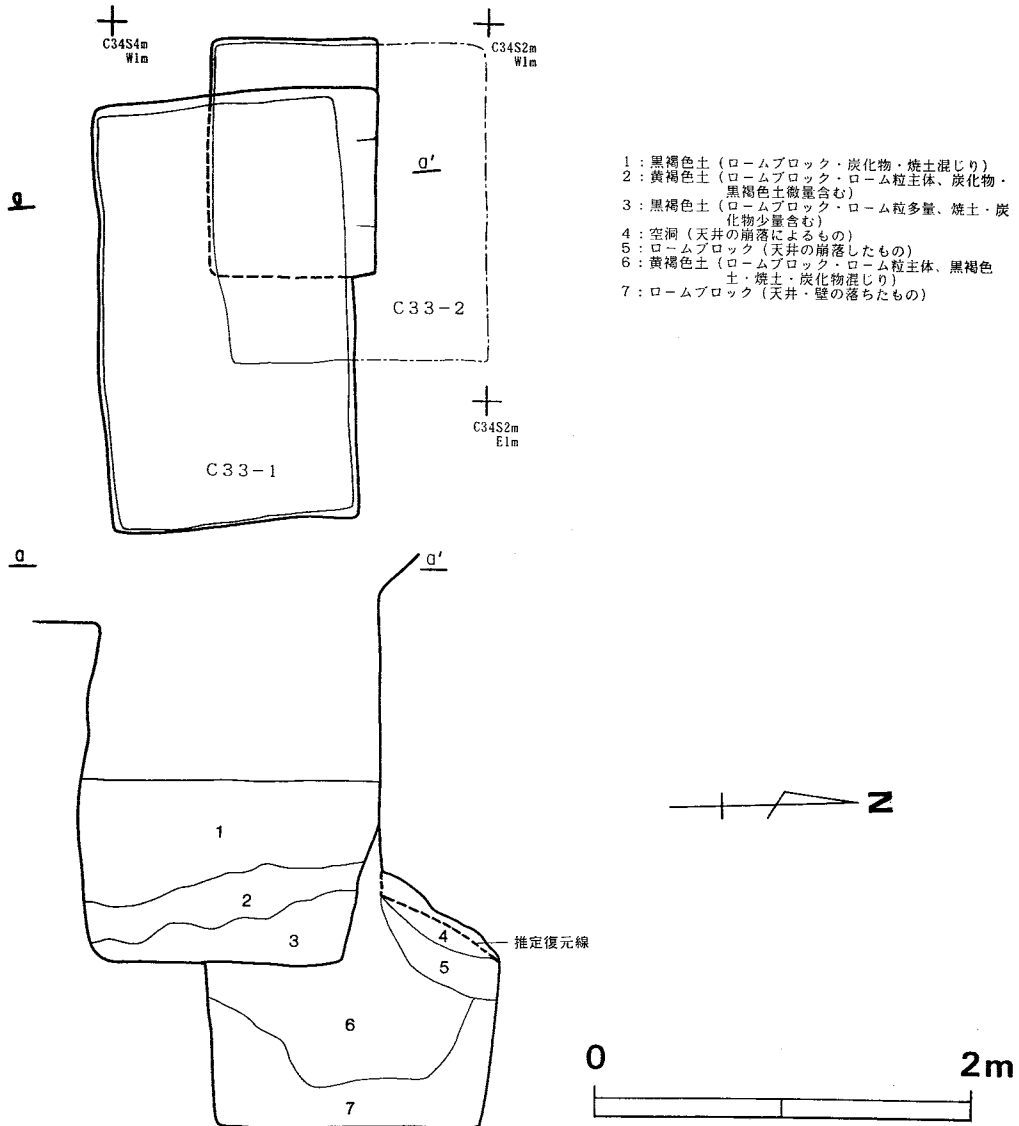
遺物の時期を見ると、すぐ南にある大聖寺藩の場合と異なり、時期により量の差はあるものの17世紀代から幕末に至る遺物がとぎれることなく出土している。ここにも当初からゴミ穴を目的にした遺構は存在していないようであり、日常的な廃棄の場ではなかったものと推測することができよう。屋敷内の改変にともなって、それまでにあった土坑を埋め戻す形で廃棄が行なわれたものと考えることができよう。遺構の密度、遺構の規模などから考えると、屋敷の「御殿部分」ではなかったものと推測できる。大聖寺藩の上屋敷の例からすると、「御殿部分」にはより大規模な遺構が存在している。今後富山藩の屋敷の調査が進めばある程度までは解明することができようが、現状はごく小部分が調査されたにすぎない。(藤本 強)

### 遺構各説

C33-1・2 C33・34区にある切りあい関係のある土坑である(III-168図)。1が新しく両者とも盛土を切って作られていると考えられる。1は東西2.3m、南北1.3m、深さ2mの長方形であり、壁は垂直であるが粗雑な作りである。西北の隅は2の入口を再利用したもので北に張り出している。埋土は破壊の影響で上部がなく、黒一黄一黒褐色土であり、いずれもロームを多量に含んでいる。遺物は少量であり、瓦・陶磁器などの小片のみである。18世紀後半と考えられるものが多い。2は地下式土坑であるが、入口は東西1.3m、南北0.9mで、底は北と東に広がり、東西1.7m、南北1.5mになる。縦方向の工具痕が生々しく壁にある。天井は崩落しており、空洞や崩落したと思われる土もある。埋土はいずれもロームブロックを主体にしたものであり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物はなく、明確な時期の判定はできないが、1より古いことは確実である。(佐々木彰)

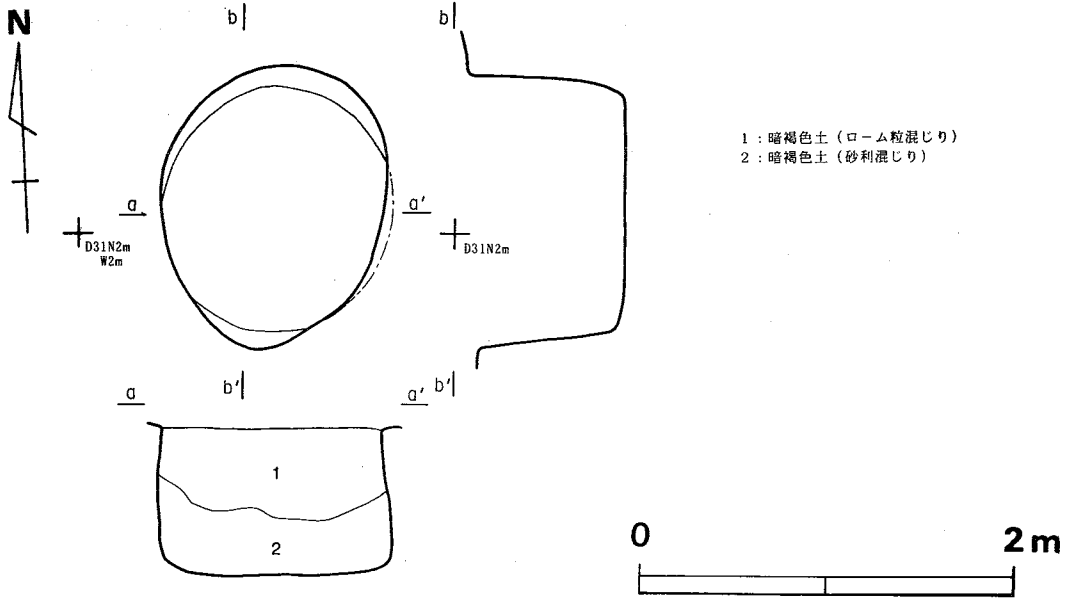
### 第三章 江戸時代の遺構

C31-1・2 C31区に中心のある1は円形の、2は不整な長方形の土坑である(III-169・170図)。2は地下式土坑であった可能性もあるがはっきりしない。1は南北1.5m、東西1.2m、深さ0.8mで底は平である。埋土は暗褐色土であるが上はローム下は砂利が入っている。19世紀前半の陶磁器などが完形に近い形でかなり出土している。2は東西2.4m、南北1.5m、深さ1.8mあり、底の北側が張り出している。底は平であるが、中央に深さ20cmの掘り込みがある。堆積の状況からみると、この掘り込みは遺構が廃棄される時には既に埋められていたものと思われる。埋土は黒～黒褐色土が主であり、焼土・ロームを含んでいる。掘り込みのなかの上部はほぼ純粋なロームで、それより上の層と明確に区別できる。これは人為的に貼ったものとも考えられる。遺物は底のすぐ上の層から主として出

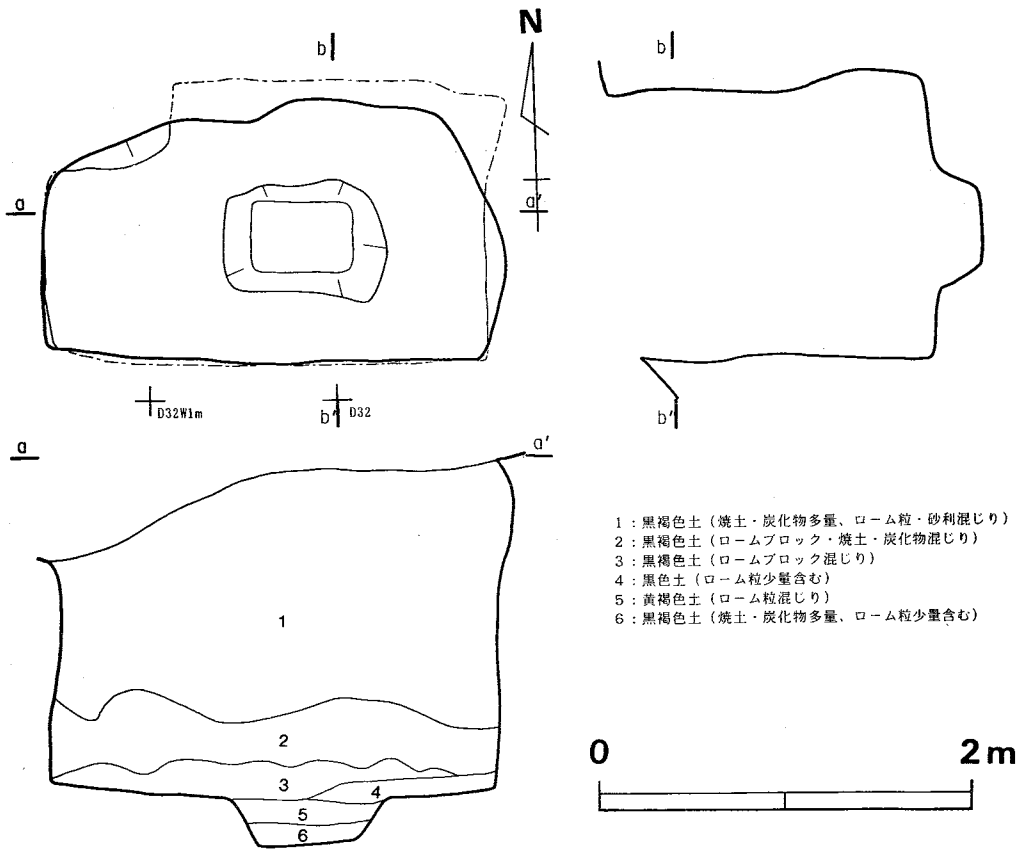


III-168図 C33-1・2実測図 (a-a':14.7m)

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構

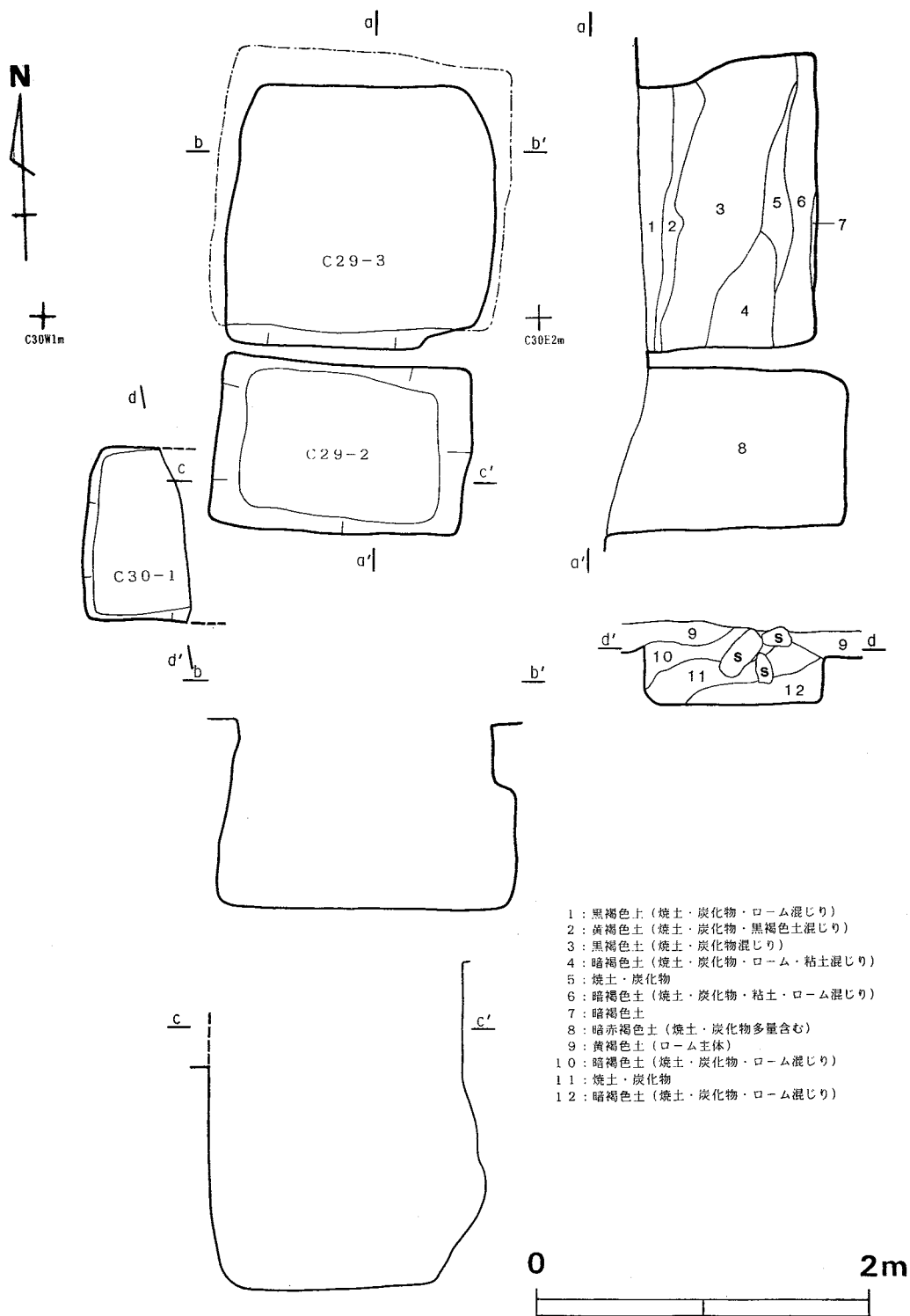


III-169図 C31-1実測図 (土層図の水準:14.5m)



III-170図 C31-2実測図 (土層図の水準:14.0m)

第三章 江戸時代の遺構



- 1: 黒褐色土 (焼土・炭化物・ローム混じり)
- 2: 黄褐色土 (焼土・炭化物・黒褐色土混じり)
- 3: 黒褐色土 (焼土・炭化物混じり)
- 4: 暗褐色土 (焼土・炭化物・ローム・粘土混じり)
- 5: 焼土・炭化物
- 6: 暗褐色土 (焼土・炭化物・粘土・ローム混じり)
- 7: 暗褐色土
- 8: 暗赤褐色土 (焼土・炭化物多量含む)
- 9: 黄褐色土 (ローム主体)
- 10: 暗褐色土 (焼土・炭化物・ローム混じり)
- 11: 焼土・炭化物
- 12: 暗褐色土 (焼土・炭化物・ローム混じり)

III-171図 C29-2-3、C30-1実測図 (土層図の水準:14.4m、d-d':14.7m)

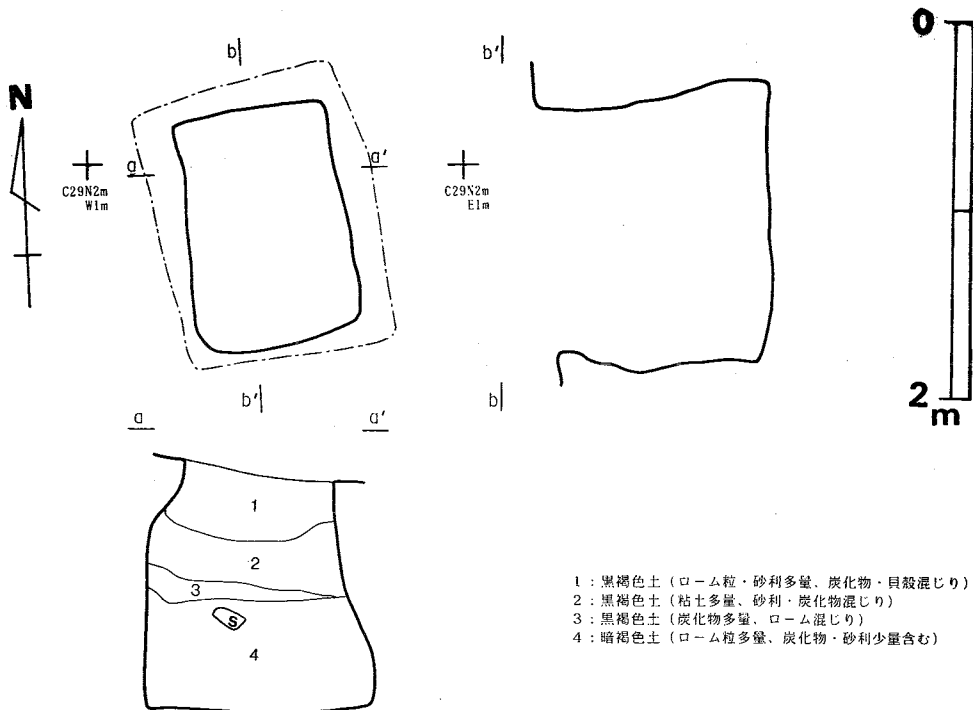
9 B28, B25, C34~24 区の遺構

土していて、18世紀初頭のもものが主体の小片である。性格は両者とも不明である。(佐々木彰)

**C30-1** C30区にある東側を破壊されている土坑である(III-171図)。上部も大きく破壊されていてC29-2との関係も明らかではない。深さは40cmほど、暗褐色土を埋土の主体にするが、焼土・炭化物のみからなる層が間にある。この層には繊維状の炭化物が無数にあったが、その性質は不明である。陶磁器は少量である。石臼片が出土し注目される。性格は不明。(佐々木彰)

**C29-2・3** C29-2はC29区にあるが、C29-3はその大部分がB29区にある。2号組石の北に広がる黄褐色の盛土を切っている。両者の層位的な新旧関係はつかめなかった。両者はほぼ南北に並んでいる。C29-2は東西1.55m、南北1mの長方形で、底は東西1.2m、南北0.85mである(III-171図)。深さは確認したところから1.5mである。東壁の中央が若干広くなっている。埋土は焼土・炭化物を含む黒褐色土である。遺物は少量である。C29-3は底で東西1.8m、南北1.7mの長方形をしている(III-171図)。上面は1.5mくらいの方形であったものと思われるが、壊れているので明らかではない。東壁には若干ではあるが、土の天井がある。埋土は焼土・炭化物・ロームを含む暗～黒褐色土が主で北に流れた状態で堆積している。遺物は少ない。(藤本 強)

**B28-1** B28区の南西よりにあり、B29区にかかっている土坑である。入口より底が大きく、入口は東西0.8m、南北1.3m、底は東西1.1m、南北1.5mの長方形である(III-172図)。底は平坦、壁はすぼまりながら立ち上がる袋状をなす。埋土はローム・炭化物・砂利を含む暗～黒褐色土である。水平に堆積しているの、人為的に埋められたのであろう。銭が50出土しているほかは、遺物は多

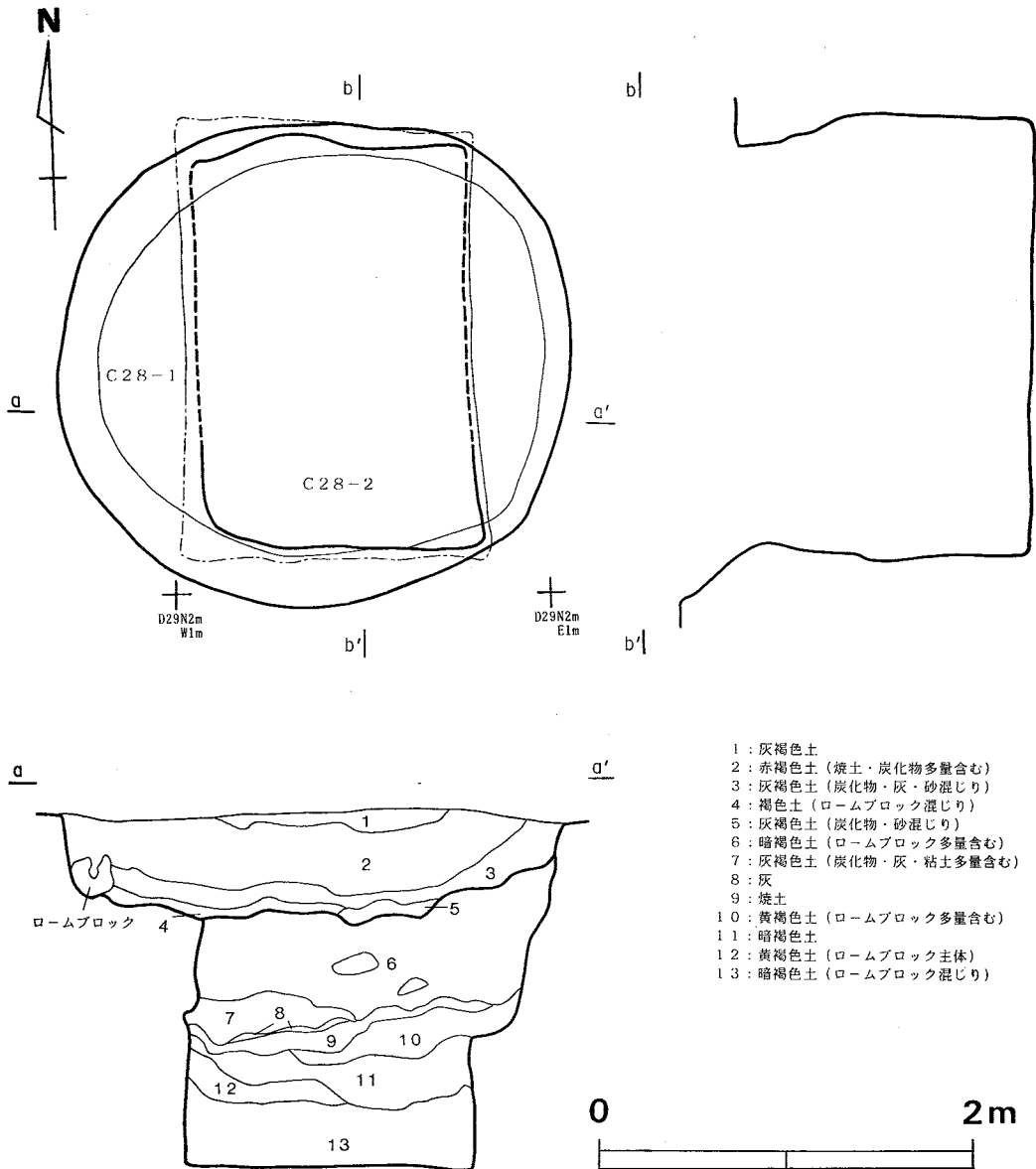


III-172図 B28-1実測図(土層図の水準:13.2m)

### 第三章 江戸時代の遺構

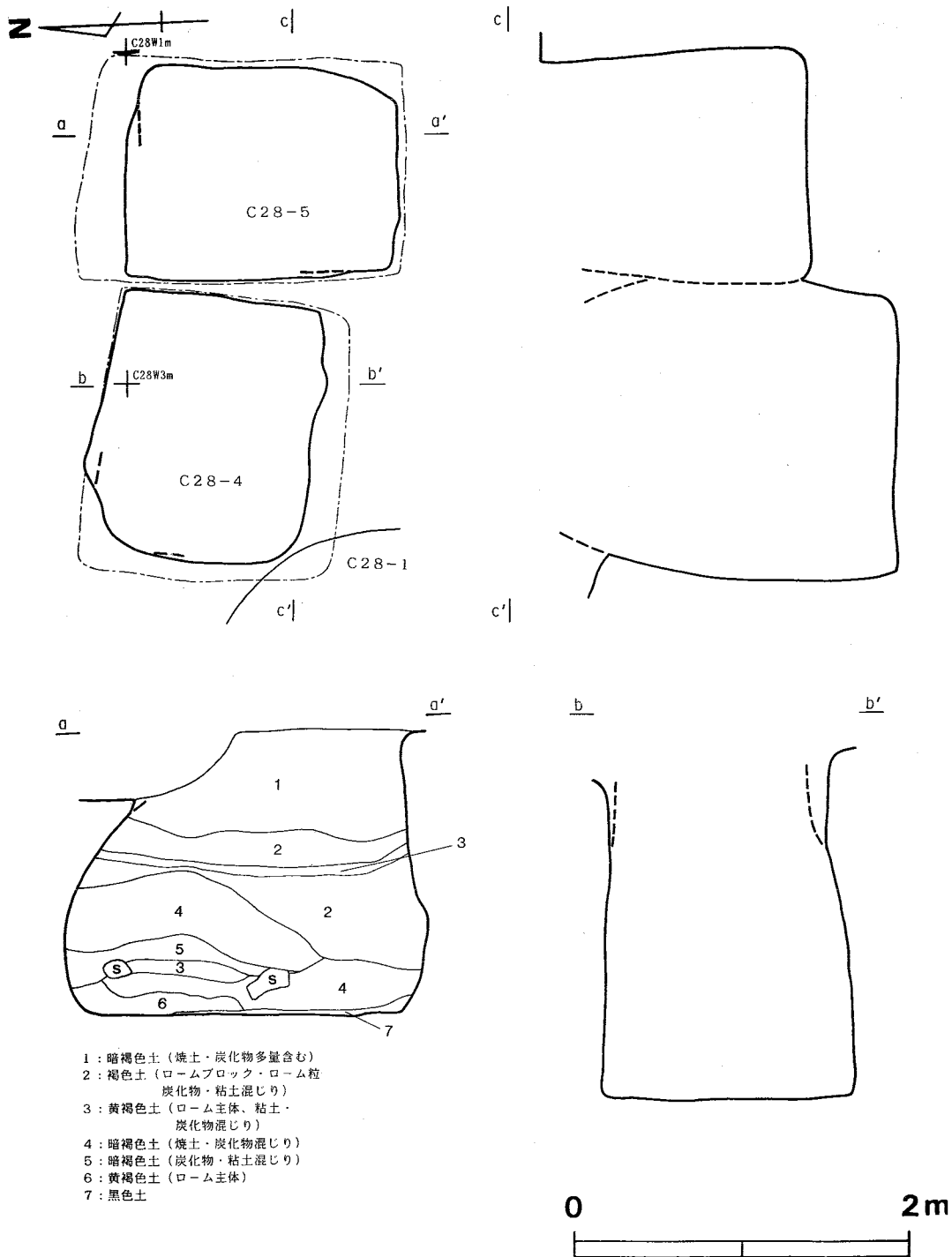
くないが、上部から主として出土する。上部は大きく壊されていて、どの面から切られているのか不明である。  
(宮田安志)

**C28-1・2** C28・29区の境界付近にある切りあった土坑である。1が上部にあり新しい。1は径2.7m 深さ0.5m ほどの円形の土坑で、ロームを主体にした黄褐色土の盛土を切って作られている (III-173図)。焼土・炭化物などの混じる赤～灰褐色土を埋土にしている。2は大部分1の下にあるが、南北2.2m、東西1.4m、深さ1.9mの底が若干広い長方形の土坑である (III-173図)。東西の壁は若干崩れているようである。ロームの混じる暗～黄褐色土が埋土の主体であるが、焼土・灰の純粋な層



III-173図 C28-1・2実測図 (土層図の水準:14.8m)

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構



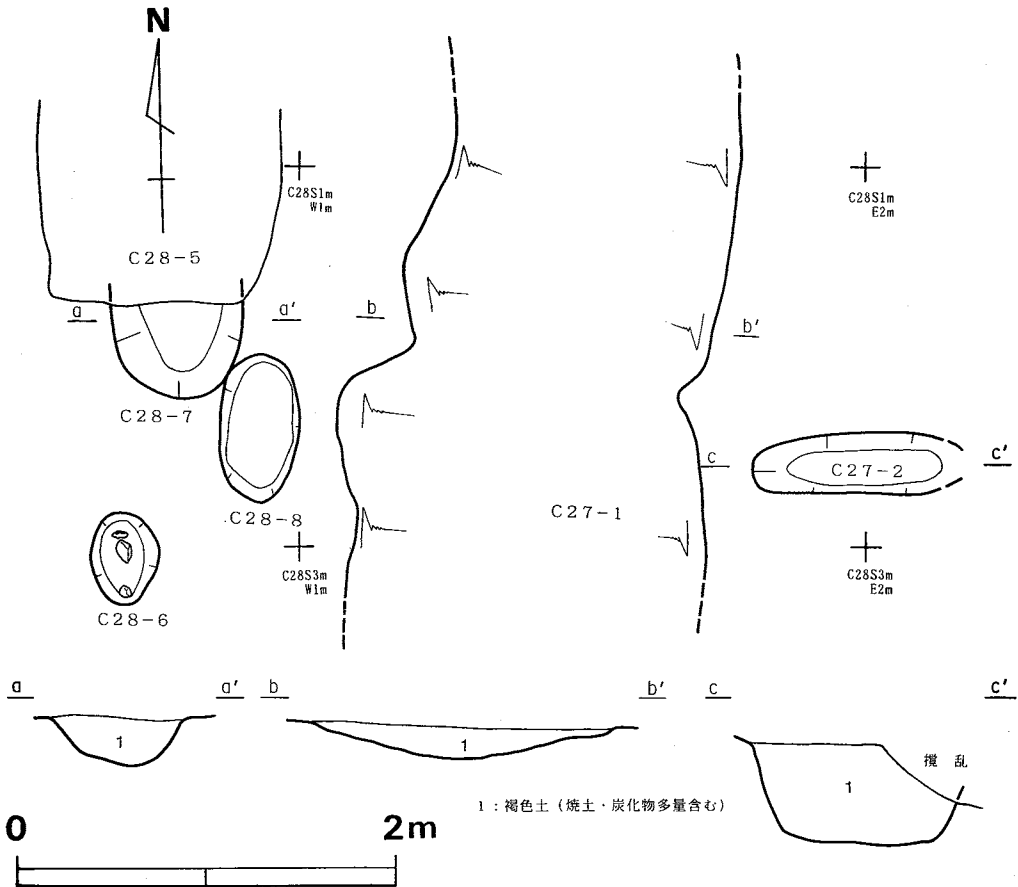
III-174図 C28-4・5実測図 (土層図の水準:15.0m)



### 第三章 江戸時代の遺構

が中ほどにある。やはり黄褐色土の盛土を切っている。遺物は 1に17世紀後半から18世紀初頭の陶磁器などの遺物があるが、2は少量である。 (藤本 強)

**C28-4・5** C28区の北端にある土坑である。C28-1・2とともにほぼ東西に並んでいる。C28-4がC28-1を切り、さらに C28-5が C28-4を切っている。C28-5がもっとも新しい。全例2号組石の北にある黄褐色の盛土を切って作られている。上部は近・現代の建物により壊されている。C28-4は底部では東西1.7m、南北1.5mの隅丸方形をしている。上部はよくわからないが東西1.5m、南北1.2mより小さかったものと考えられる(III-174図)。深さは確認したところから2.2mある。底から0.5m上がったところをもっとも広い。埋土はローム・焼土を含む暗褐色土が主体となっており、少なくとも上部は水平堆積をみせている。遺物は17世紀後半から18世紀前半にかけてのものが若干ある。C28-5は C28-4の東にあり、南北に長く、底で南北2.0m、東西1.35mの長方形をしている。上部は攪乱のため明らかではないが、南北1.5m、東西1.25mより小さかったものと考えられる(III-174図)。入口は南に偏っていたものであろう。底から0.5m~0.6m上がったところをもっとも広く南北の断面形は袋状をしている。埋土はローム・焼土などを含んだ暗褐色土であり、水平堆積をしている。人為的に投げ込まれたものと考えられる。埋土下部はロームを含む黄褐色~暗褐色土が中心であり、



III-175図 C27-1・2, C28-6~8 実測図 (土層図の水準:14.5m)

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構

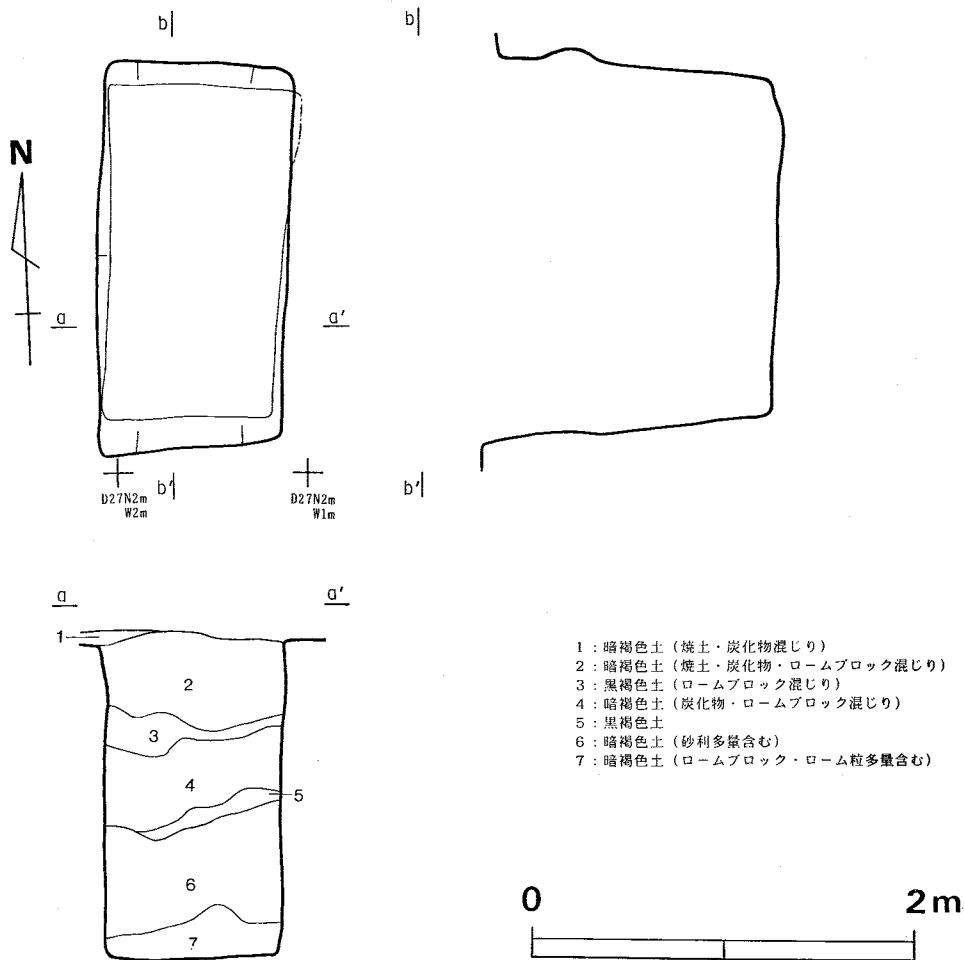
中央部の高い火山状の堆積をしている。入口から投げ込んだのであろう。最下部には黒色土の薄層がある。遺物の出土は 4 とほぼ同じ時期のものが少量である。(藤本 強)

C28-6・7・8 いずれも黄褐色土の盛土の上面にある楕円形の小型の土坑であり、鍋底状の断面をしている(III-175図)。深さも18・25・10cmと浅い。上部は削られているので、本来の大きさは若干大きかったであろう。埋土は焼土・炭化物混じりの褐色土である。(宮田安志)

C27-1 C27・28区にかけてある浅い溝状の遺構である。南北方向のものであるが、南も北も破壊されている。幅1.5m前後、現存の長さ2.6mである(III-175図)。焼土・炭化物混じりの褐色土が埋土である。陶磁器などの若干の遺物がある。(宮田安志)

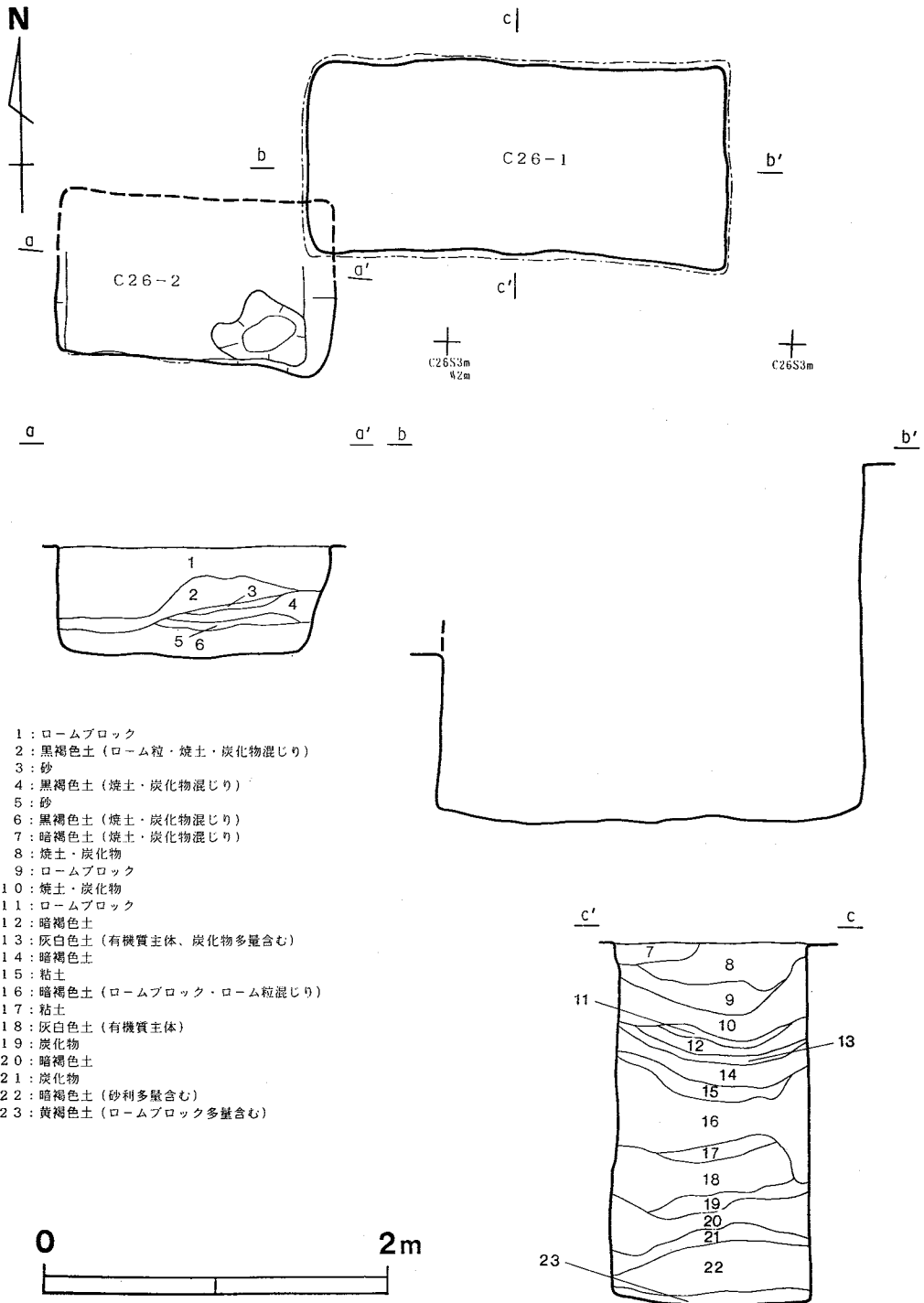
C27-2 C27区中央にある東西に長い土坑である(III-175図)。深さは確認面から0.6m弱で、埋土は焼土・炭化物を含む褐色土である。少量の陶磁器などの遺物が出土している。(宮田安志)

C27-3 C27区にある南北2m、東西1m、深さ1.7mの長方形の土坑である(III-176図)。平坦な底とほぼ垂直な壁があり、上部は大きく破壊されているため、掘り込み面は不明である。埋土は暗



III-176図 C27-3実測図(土層図の水準:14.0m)

第三章 江戸時代の遺構



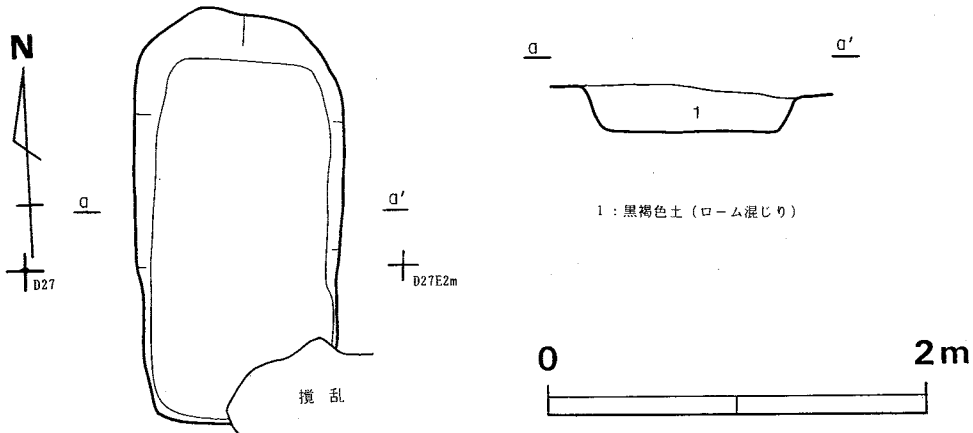
III-177図 C26-1・2実測図 (土層図の水準:14.0m)

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構

～黒褐色土であり、上部は焼土を、下部は砂利・ロームを多量に含んでいる。遺物は下部を中心に  
して瓦と「かわらけ」が少量出土している。埋土の状況から、19世紀に廃棄されたものと考えられ  
るがはっきりしない。C26-1と類似の土坑である。(佐々木彰)

**C27-5** IV区2号溝のC27区にある部分を切っている土坑である。一辺0.6mの隅丸方形であり  
鍋底状の断面をしている(III-062図)。埋土は灰色土とロームを含む暗褐色土である。遺物はほとん  
どない。深さは0.45mであり、IV区2号溝の底から0.1mほど下に底がある。(藤本 強)

**C26-1・2** C26区にある切りあい関係のある土坑である(III-177図)。1が新しいものと考えられ  
るが、破壊のため確実ではない。2の上部は大きくなくなっている。1は東西2.4m、南北1.1m、深さ  
2.1mの長方形の土坑であり底が若干大きくなっている。埋土は焼土・炭化物、ローム、暗褐色土、  
灰白色土、粘土などが堆積しており、特異な堆積であると同時に、人為的な埋め戻しがあったこと  
を推測させる。埋土のなかにはムシロもしくは量の炭化したものが入っている。19世紀の陶磁器を  
中心にしてかなりの量の遺物が出土している。銭・釘の良好な資料も出土している。2は東西1.6m、  
南北推定1m、深さ0.6mの長方形であるが、北側は破壊が深くまで及んでいるため確実ではない。  
砂と黒褐色土の互層が埋土になっている。遺物の出土はなく、時期・性格は不明。(佐々木彰)



III-178図 C26-3実測図(土層図の水準:12.7m)

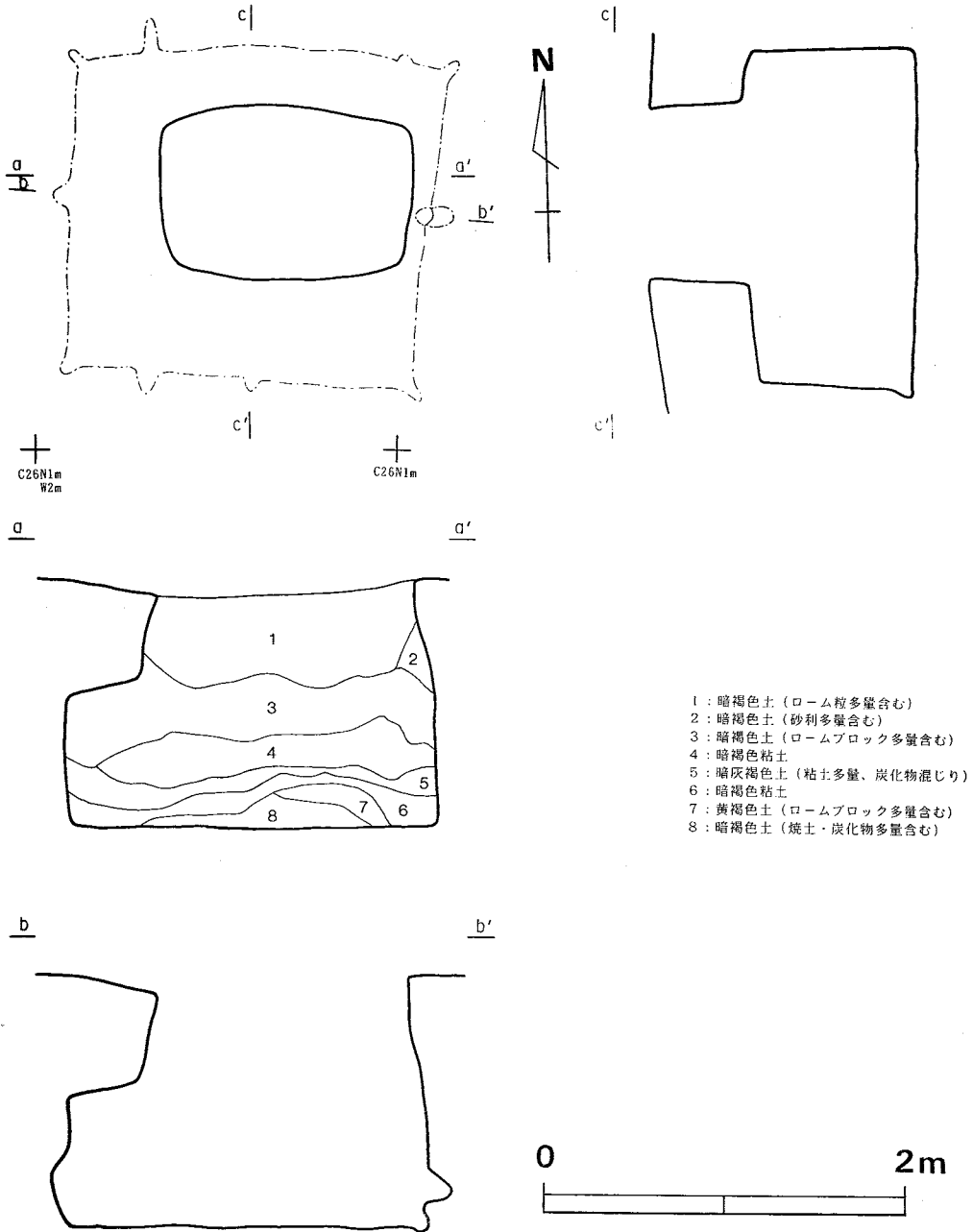
**C26-3** C・D26区にある長方形の土坑であるが上部は完全に破壊されている(III-178図)。1号  
溝に切られている。南北2m、東西1mの長方形で、深さは30cmに過ぎない。埋土は黒褐色土であり、  
遺物はない。埋土からみて近世以前の遺構である可能性が高いが、確実ではない。(佐々木彰)

**B25-1** 南側は大きく破壊を受けているので、上部の詳細は不明であるが、入口と土の天井のあ  
る地下式土坑である。入口は東西に長く1.4m、南北は0.9mの隅丸方形であったものと考えられる  
(III-179図)。底は東西2.0m、南北1.8mの方形であり、北壁が北に張り出す。入口は中央より東に  
よった位置にある。深さは現存1.4mほどである。天井の高さは壁際で0.9m、入口に近いところでは  
1mと低い。壁の仕上げは丁寧である。底は平坦で、東西の壁のほぼ中央に径10cmの杭穴がある。  
四周には板をはめ込んだような掘り込みがある。壁は板張りであった可能性がある。底の各隅と南  
北の壁際に斜めに入る杭穴がある。これらは南北ではほぼ対応するが、目的は不明である。埋土はロー

第三章 江戸時代の遺構

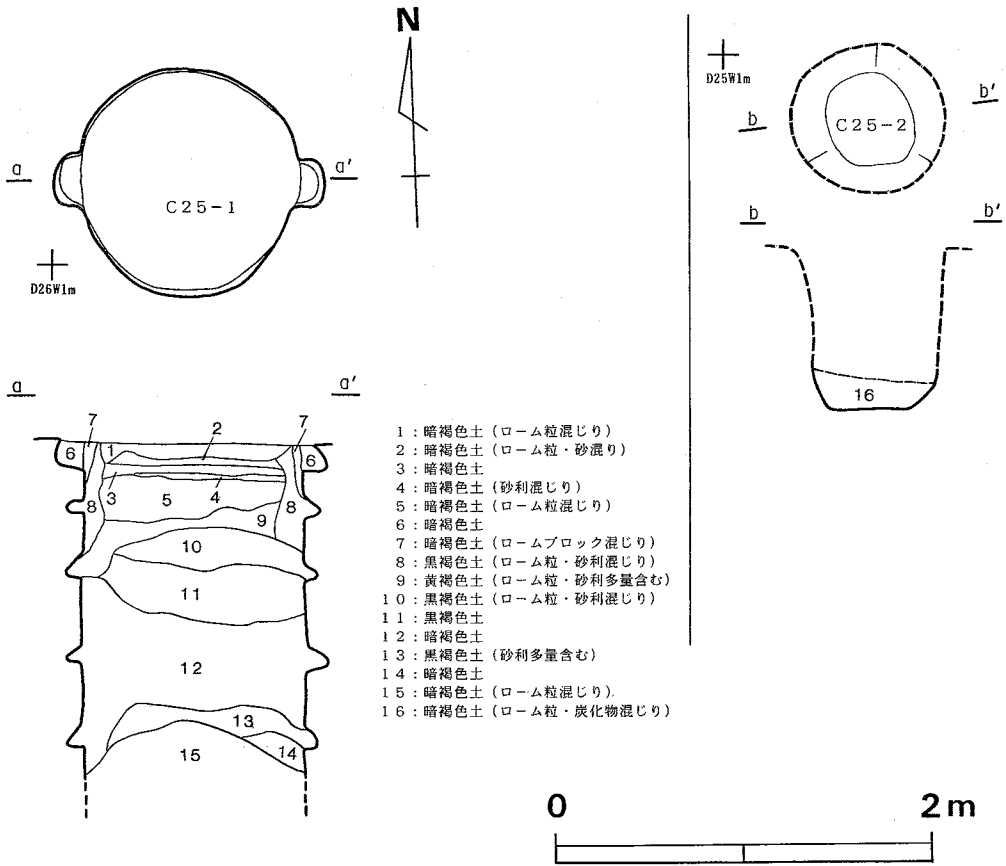
ムを含む暗～黄褐色土がほぼ水平に堆積している。遺物は中層以下に多く、18世紀前半の陶器が主体である。「かわらけ」もかなりある。ほかに金属製品・硯などの石製品もある。 (宮田安志)

C25-1 C25区の南西にあり大部分はD26区にある。径1.2mの円形の井戸である (III-180図)。

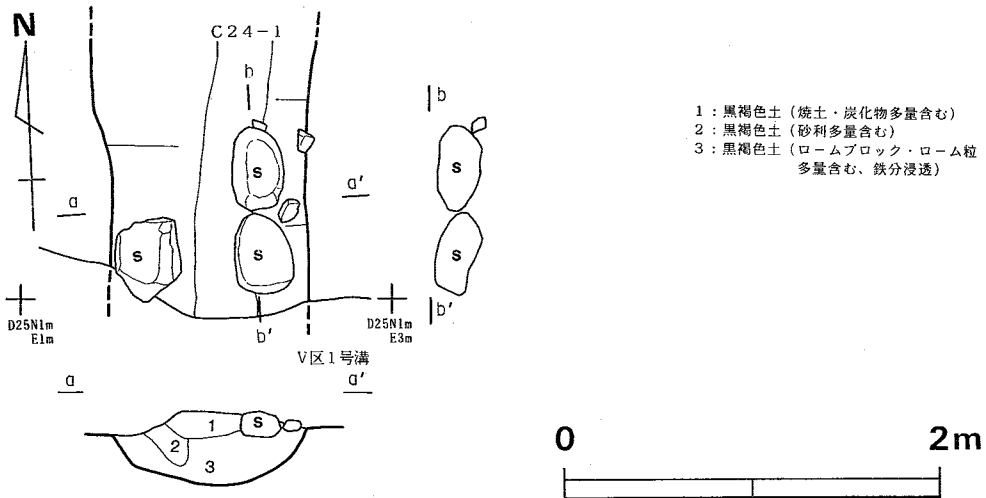


III-179図 B25-1実測図 (土層図の水準:13.2m)

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構



III-180図 C25-1・2実測図 (a-a':12.8m, b-b':13.0m)



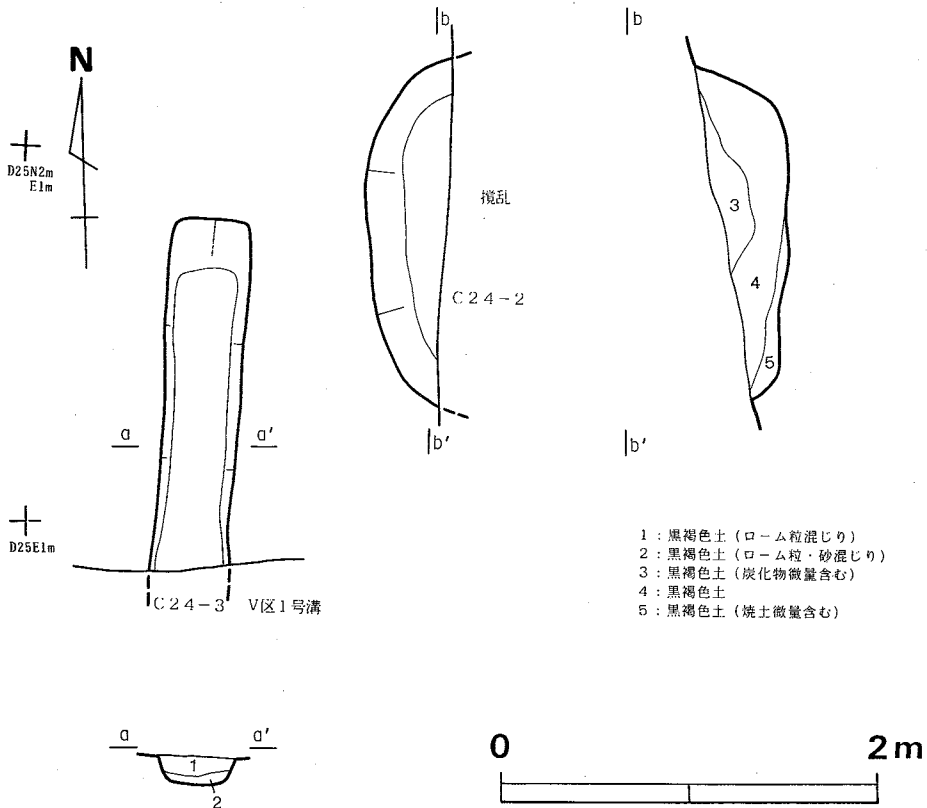
III-181図 C24-1実測図 (立面図の水準:14.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

上部は1号溝に切られはっきりしないが、東西に何らかの付属施設があったものと考えられる。張り出し部がある。この井戸で特筆すべきことは深さ10cmほどの掘り込みを東西の対応する位置に検出したことである。40~50cmの間隔で東西に見られるもので、井戸掘りもしくは改修の際の手掛かりであろう。井戸枠は明確なものは見出せなかった。土層図上部の垂直に伸びる堆積は井戸枠の痕跡を示しているのかもしれない。もしそうだとすると、上部にのみ井戸枠があったことになる。埋土はロームを含むことの多い暗褐色土が主体であるが、上部の層はよく叩きしめられている。埋める際の整地と関係するのであろうか。遺物は少ない。(宮田安志)

**C25-2** C・D25区にある2号組石とV区1号溝との間の時期の土坑である(III-180図)。底しか確認することができなかったが、1号溝のなかに掘られたものであることは確実で、2号組石に伴う遺構である可能性もある。埋土は暗褐色土であり、遺物はない。(佐々木彰)

**C24-1** C24区にある溝状の遺構であるが(III-181図)、両端を破壊されていて一部分が確認されているに過ぎない。2号組石との関係は明らかではないが、同時に使われていた可能性がある。石組の溝であるが、残りはきわめて悪く、自然石をそのまま用いるという構築法が2号組石と大きく異なることが指摘できるくらいである。埋土は黒褐色土からなるが、水の流れていたことを示すであろう酸化鉄も埋土の下の方にはあり、溝が排水路であったことを示している。遺物は数点の陶磁器片があったにすぎない。富山藩側からの排水路は確認できていないだけに興味ある遺構であるが



III-182図 C24-2・3実測図 (土層図の水準:13.0m)

破壊がひどく、ごく小部分の確認に終わっているのは残念である。(佐々木彰)

C24-2 上部および東側を破壊された土坑である(III-182図)。規模・形状ともに不明。埋土は黒褐色土を主体にしている。遺物はなく、性格も不明である。(宮田安志)

C24-3 V区1・2号溝に切られた溝状の遺構である(III-182図)。幅は0.4m、10~15cmの深さである。埋土はローム混じりの黒褐色土である。V区1・2号溝の南側では確認できていない。そもそもここで止まっていて、溝に入るものであった可能性もある。(宮田安志)

2号組石 2号組石はほぼDラインに沿って、24~34区まで50mの長さにわたり確認されている石組の溝である(III-183・184・185・186図)。天和三年(1683)以降の大聖寺藩の上屋敷と富山藩の屋敷の地境であったと考えられる。途中かなりの部分が破壊されなくなっているが、この間には石組の溝があったことは確実である。さらに西に伸びていた可能性が強い。東側は調査した地点のなかでは確認できなかったが、南に直角に曲がっていたものと推測している。真東西に走っていた石組の溝の南側の側石はD25ポイント東1.4m、南0.8mのところ南に向かって直角に曲がっている(III-185図C)。この解釈にあたっては、時間的な変化を考慮に入れる必要があろう。北側の側石は調査した範囲のなかでは曲がっていない。この周辺の遺構は火事・再開発などによりかなりの部分が改変を受けていることが明らかになっているが、こうしたなかにあつて、2号組石は壊れ難くしかも除去しにくかったためか、そのまま放置されたく比較的残りの良い状態で確認された。したがって、表土を除去した段階で2号組石の大部分は露出する結果となった。これにともない調査も組石の清掃と組石内の埋土の除去という形で西から東へ進めることになった。

2号組石は長大な遺構であり、部分によって石の組み方に違いがある。西側には組石全体のなかでもっとも残りの良い部分があり(III-183図左)、大型の切石が三段になって隙間なく積み上げられたところもある。この部分では高さ1mに達していた(III-185図A)。用いられていた切石は四角錐を意識した形の整ったものであり、東側のものとは様相を異にする。残っている部分および切石の形が一定であつて積み易くなっていることから判断して、西側の組石はかなりの高さをもっていたと考えられる。側石の間の距離は0.7mであり、この一定の幅で東へと続いている。側石の間には長方形の板状の切石も横に並べられた状態で確認されている。ところどころにしか残っていないが、組石全体を通じて敷き詰められていたと推定され、2号組石の底になっていたものであろう。石には生々しい工具の痕もあり、なかには矢羽状の模様のあるものもみられる。底の切石は最下段の側石の下面よりやや上で発見されており、わずかに傾斜を持ちながら東へと続く。

組石の中間部分、D31~D28周辺では、南側の側石はおおむね三段であるが、平均で0.5m前後の高さしかない(III-183図右)。側石は南側でよく残っているが、扁平な方形の小型の石を一~二段敷きその上に西側より大きい四角錐に加工された切石が積まれている。積み方は乱雑で大きな隙間がところどころにみられた。この積み方から判断して、切石を高く積み上げたとは考えられず、それ以上積み上げたとしてもせいぜい一~二段程度であつたと思われる。北側では下段の小型の切石もなく、側石は一段のみの確認であつた。後代かなりの切石が除去されたのであろう。この部分でも底の板状の切石がところどころに確認されている。東側の部分、D28~D25周辺は基本的には中間部分と同様である(III-184図左)。北側では部分的に二段の側石があるところもあるが、一段しか確認



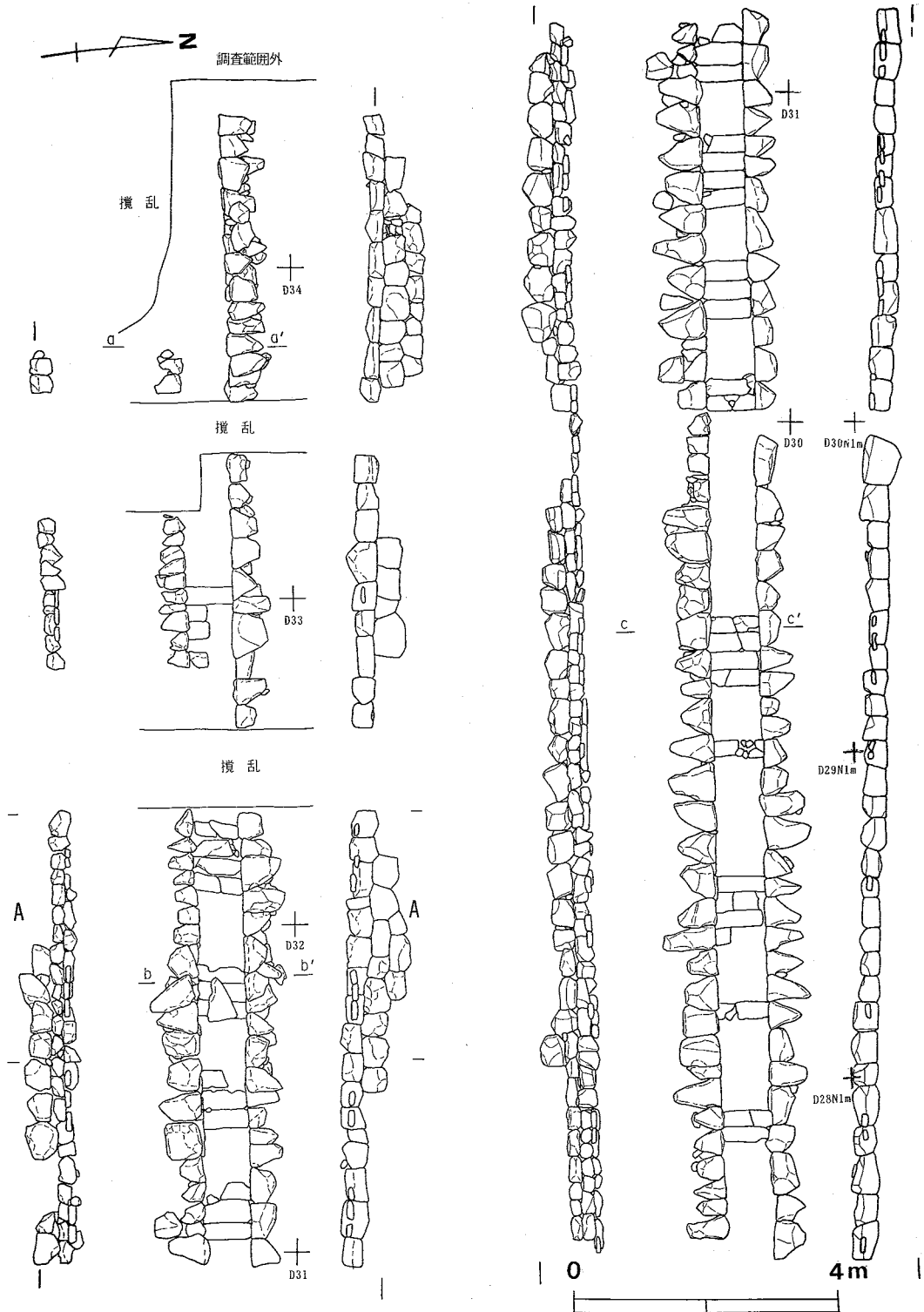
### 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

できないところが大部分である。南側は比較的よく残っている。やはり扁平の方形の小型の石を一～二段敷き詰め、その上に大型の石をのせている。大型の石は四角錐に加工されたものではなく、タガネの痕跡がはっきり残っている石材もあり、切り出した石をそのまま用いたか、あるいは他に使われていた石を転用して用いたかしたようである。たとえばⅢ-186図 B の下端の石には円形の穴があることから、礎石を転用したものと考えられるし、他にも刻印を施すが、大型でしかもあまり加工されていない石もみられる。礎石と同様どこからかもってこられて転用されたものであろう。刻印にはⅢ-187図に示してあるようにさまざまなものがあるがどれも意味不明の記号である。なお御殿下記念館建設地点でもⅢ-187図 A・B と同種の刻印のある石が発見されている。

既に若干触れたが、東側の部分では重要な点がある(Ⅲ-185図 C)。調査区の東端のところでは組石は直角に南に曲がる。北側はこの曲がりの部分は調査区の外になるため確認できていないが、南側の石で確かめられた。しかし、2号組石のすぐ南側をほぼ平行して走る溝状の基礎による破壊のためごくわずかの部分の確認に留まっている。石組は破壊の南へ続くものと思われたが、溝のようなV字形の掘り込みが発見されただけで、組石は確認できなかった。4・13号組石の存在、絵図面などにより、この周辺に南北方向の溝があったことは確実であろう。石組の溝はしばらく南へ向かった後、再び東に向かうものと思われる。事実そこには6・10号組石が位置している。この曲がりの部分の南側の側石はわずかの確認に留まったが、しっかりした構築である。西側の部分と同様に四角錐に面取りされた切石を隙間なく横積みしていた。なんらかの理由でこの部分の強度を増す必要があり、このような作りになっていたのかもしれない。北側の側石は確かめようもないがこのようになっていたものと推測される。西から東へほぼ0.7mの幅で続いていた側石の間は曲がりに近づくと幅0.5mとなりやや狭くなる傾向をもちそうである。この部分を過ぎ、南北方向の部分になると溝の幅は大きくなるものと考えられる。北側の側石は曲がりの部分を過ぎても東に伸びているからである。時期による変化も考慮すべきであろう。

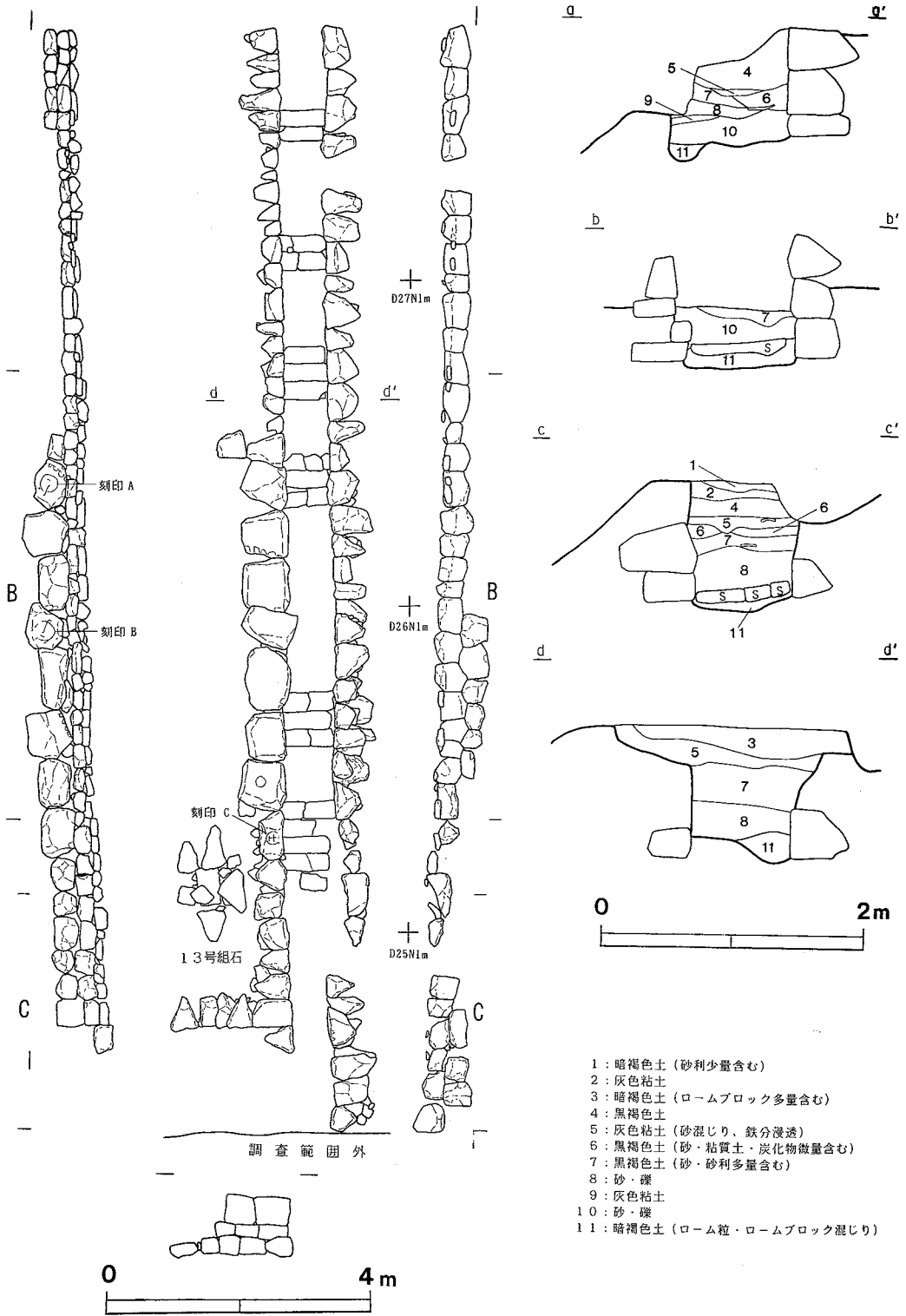
2号組石が東に傾斜していることは既に述べたが、底の石を基準に考えると傾斜の角度はほぼ二度である。このような緩い角度ではあるが、長大な遺構のため結局は1mの落差をもつことになる。この落差は東に傾く地形に起因するが、落差と曲がりの部分のしっかりした作り、さらに埋土の状況を考えあわせると、2号組石は単なる地境だけでなく、排水溝として機能していたことも指摘できよう。排水を意識しないまでも、少なくともある期間、水が溜っていた形跡は確認できている。もう一つ発掘中に気のついた重要な点は側石の構築が部分ごとに違うことである。たとえば組石の東の部分では転用した石を乱雑に積み上げていたが、西側では四角錐に面取りされたきり石を隙間なく積み上げており、丁寧な作りになっている。東の部分の南側の側石は小型の扁平な方形の石を一～二段敷き詰めその上に切石を置いていたが、こうした構造は北側の側石では見られなかったこともあわせて注目されよう。2号組石は13号組石などの存在により、何回も手を加えられていることは確実であるが、何回かの改変を受けているのでこのようになったのか、当初からこのように異なった構造をもつものであり、他の理由によって、たとえば地形・藩の財政事情などによって、このようになったのかはわからないが、少なくとも部分部分によって組石の構築法がかなり異なっていた点は指摘できよう。

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構



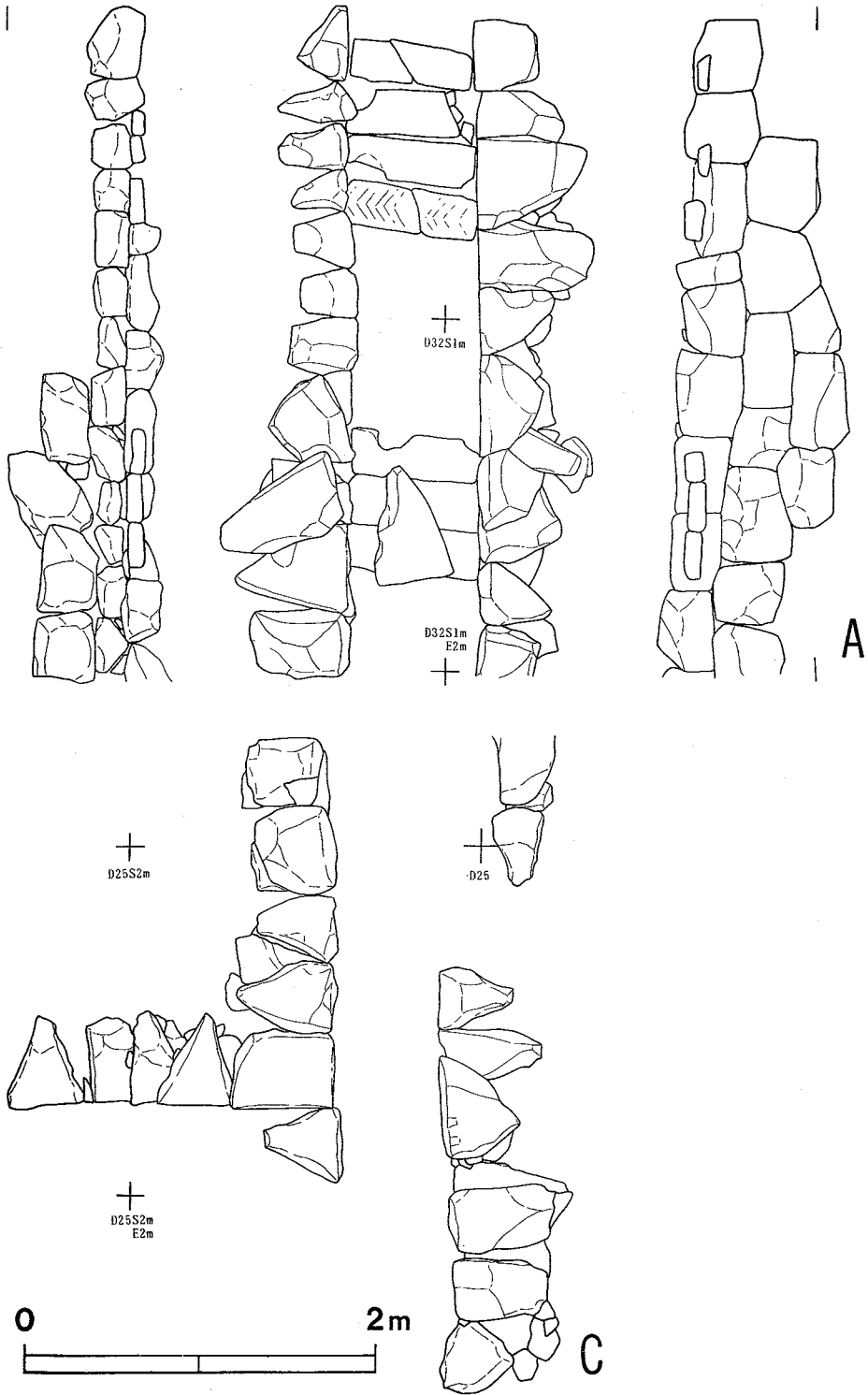
III-183図 2号組石表測図 (立面図の水準:14.5m)

第三章 江戸時代の遺構



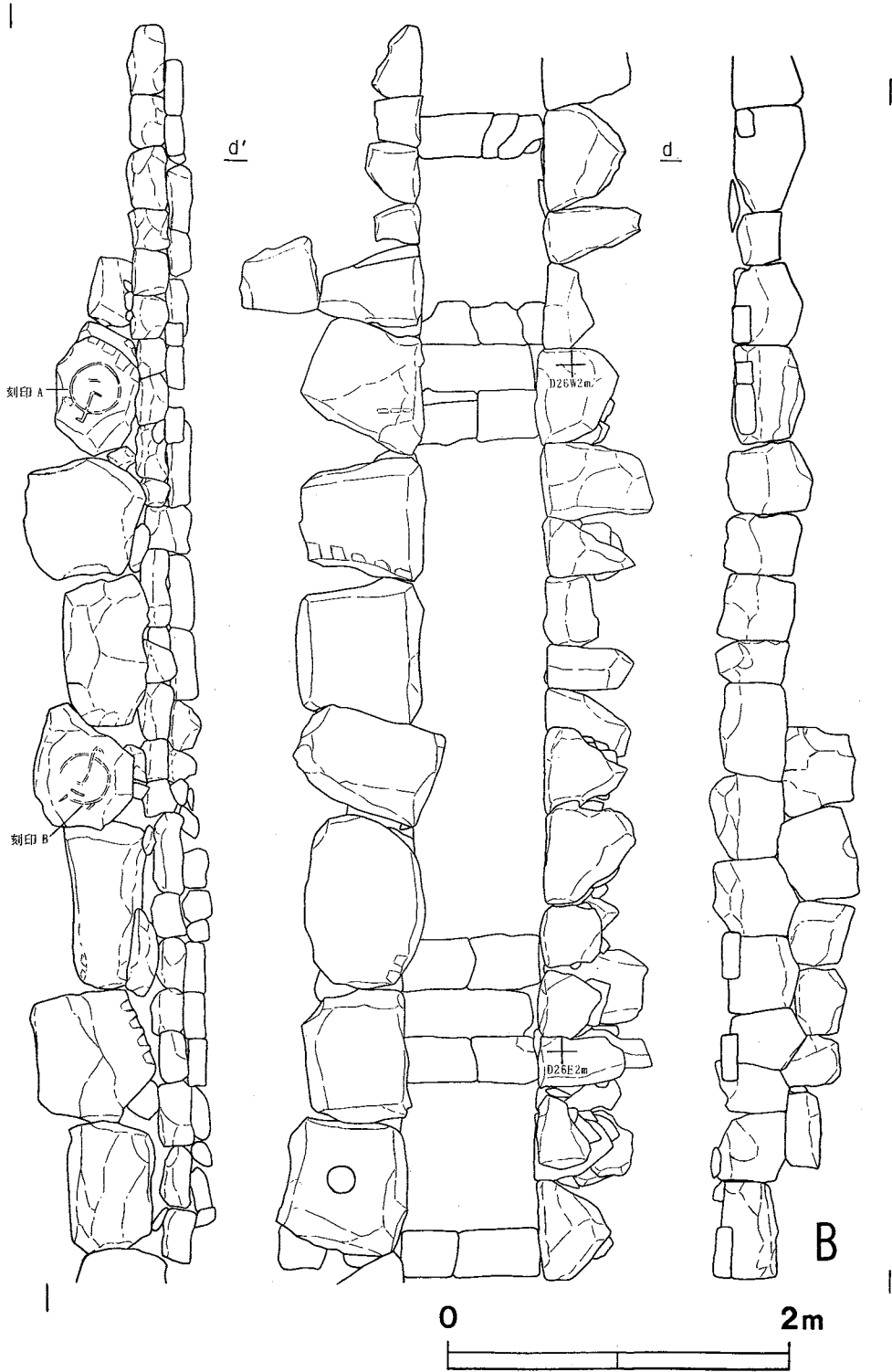
III-184図 2号組石実測図 (立面図の水準:14.2m, a-a'~d-d':15.0m)

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構



III-185図 2号組石部分図 (立面図の水準: 14.8m)

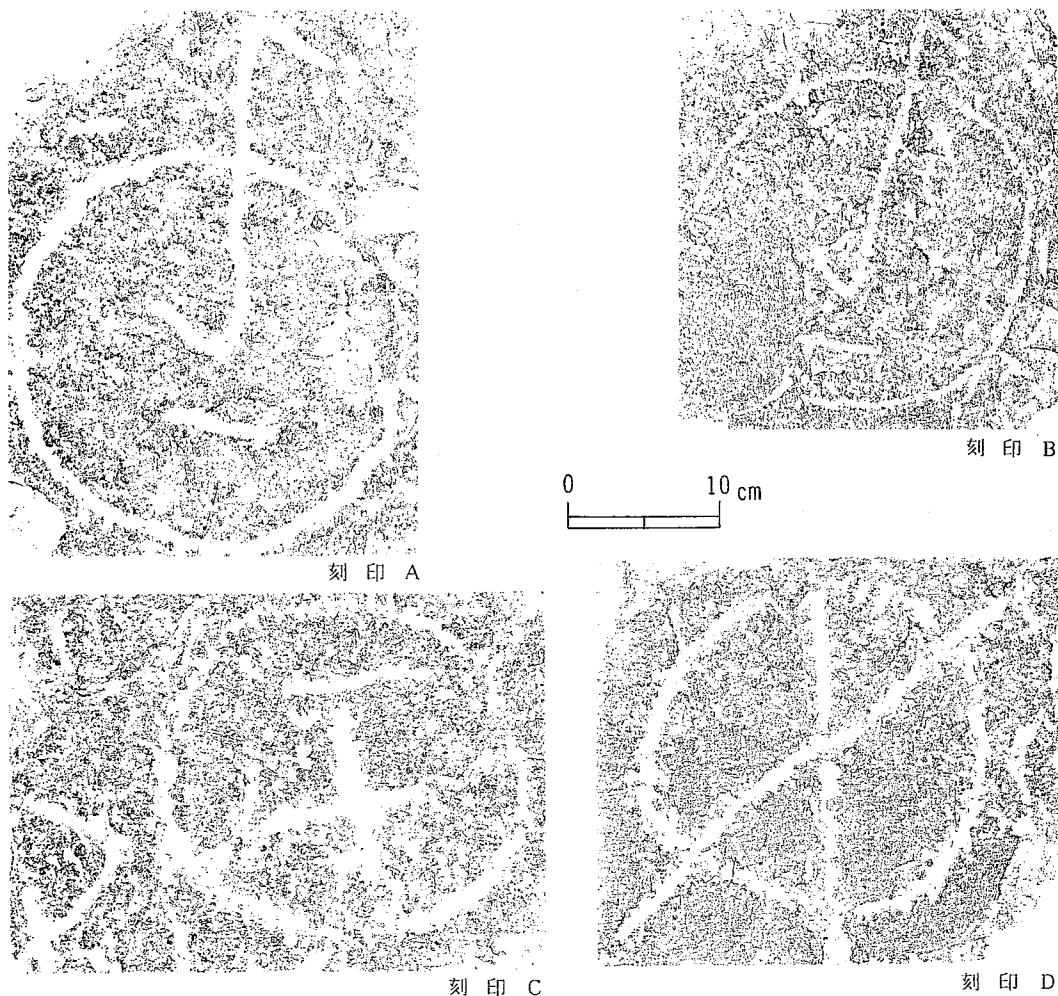
第三章 江戸時代の遺構



III-186図 2号組石部分図 (立面図の水準:14.4m)

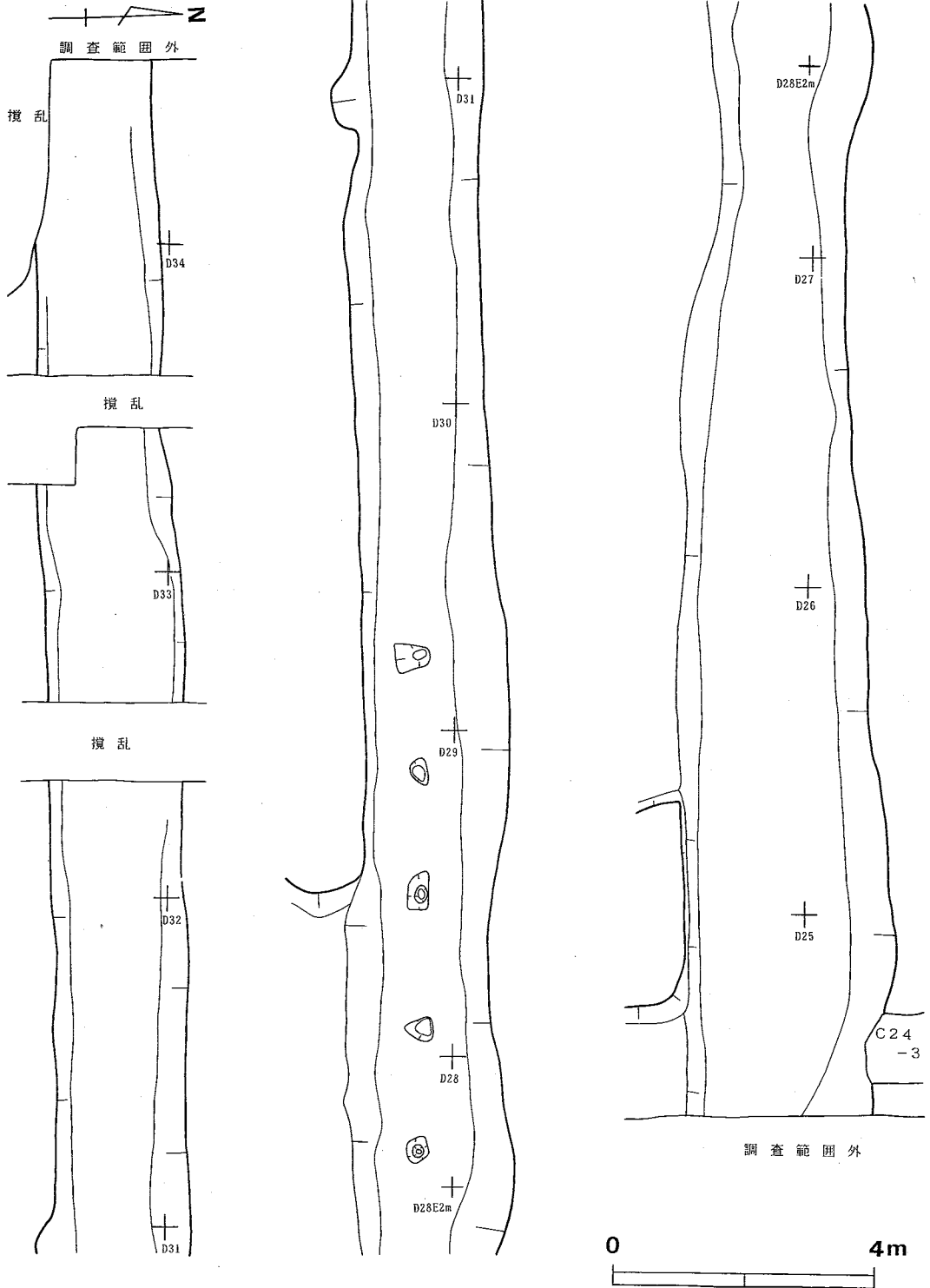
9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構

III-184図に示すように組石内の埋土は基本的に二層である。上層は黒・暗褐色土と灰色粘土の互層であり、下層は砂・礫からなる層である。上層の灰色粘土(2・5・9)は一つしかないところもあったが、二ないし三層あるところもあり、互層の対をなす黒褐色土(4・6・7)と暗褐色土(1・3)は炭化物・焼土・ロームなども含まれるが、砂・礫を多く含むものであり、粘性はほとんどない。これらは遺構が長大であるため、場所によって混入物などにかかなりの違いがあったが、灰色粘土との互層という基本的な性格は同一である。下層(8・9)は砂・礫を主体にするものであり、焼土・炭化物・ロームもかなり混じる。調査当時でも水分を相当に含んでおり、酸化鉄もみられた。出土した遺物にも酸化鉄の付着がある。鉄釘と見紛うばかりのところもある。砂・礫は底の切石と接している。組石の調査終了後、切石を除去し、溝の下の調査をしたが、堆積状況は溝のなかとかなり異なっていた。ここに見られたのは暗褐色土を含むロームからなる非常に緻密で堅い土であり(II), 切石との間にわずかに砂・礫があることもあった。11層のなかには長年浸透した水分のためか、グライ化し



III-187図 2号組石刻印

第三章 江戸時代の遺構



III-188図 2号組石堀り方実測図

青白色を帯びたところや酸化鉄も帯状にみられた。ところによってはこれがなく、8・10層がそのまま底の下まで続く地点、この層にかわって埋め込まれたと考えられる焼土の塊もところどころに確認されている。かなりの部分が削られ明確ではなかったが、組石のうしろにはロームと小礫からなる土が詰められていた。組石を安定させるための詰め石とともに主として北側に見られる。溝のなかの上部の黒・暗褐色土と灰色粘土の互層は遺物の出土状況からも明らかに意図的に埋め戻された土と考えられる。互層にするように埋め戻されたかどうかは不明であるが、このような堆積状況と周辺に灰色粘土がないことから、少なくとも自然に堆積したものではないことは明らかである。下部の砂・礫からなる層は明らかに自然に堆積したものであり、組石の底のかなりの部分を覆っている。長期間放置されていたものであろう。2号組石は廃棄される前の段階から放置され、後に述べるように19世紀のある時点で一気に人為的に埋め戻されたものと考えられる。

組石の調査終了後、すべての組石を除去し、その下を調査したところ、組石の下は11層である暗褐色土および砂利を主にした層をはさんで強く叩き締めていたことが明らかになった(III-188図)。この面はわずかに内側がくぼんでおり、組石と平行するように溝状になっていた。組石を構築するために設けられたものであろう。組石の底を溝の中央に配し、側石の後を溝の壁に立て掛けるような配置である。組石の東側は溝の幅が広がり、組石全体が溝の底に位置することになる。溝の外の叩き締められた面は北側では確認できなかったが、南側では破壊されていたところまでほぼ60cmの幅で確認できている。「延宝図」にある道路の舗床面であろうか。西側では溝の幅は2.1mあり、この幅で中央にまで達している。深さは10~20cmである。叩き締められた面の規模などには変化はなかったが、中央には底に杭穴群(?)が発見されている。5あり、一列に並んでいた。杭穴の埋土は砂利・炭化物を主にしており、浅く10~20cmに過ぎない。形もさまざまであり、意識的に掘ったものとは考えにくい。おそらく杭などを打ち込んだあとであろう。組石と関連するのであろう。東になると溝の幅は広がる傾向があり、東端で3.2mになる。深さは変わらない。東の端には組石の曲がりの部分があるが、ここと13号組石と関連すると思われる叩き締め面が溝の南側で確認されている。この叩き締め面はわずかの高まりをもち高まりの東には2号組石の側石が並び、高まりの部分からは13号組石が発見された。すなわち2号組石の側石の直下で発見された組石である。

この遺構の埋土のなかからは大量の遺物が出土している。陶磁器類、土師質の土器類の出土はもっとも多く、底部片だけでも2800点以上にのぼっている。瓦片の出土も膨大である。このほかさまざまな生活に密着した遺物が出土しているのがこの遺構の特色である。泥面子などの玩具類、調度品の飾金具、キセルなどの金属製品、硯・砥石などの石製品、ガラス製品、自然遺物などである。そのほとんどは19世紀に入ってからのものであると思われるが、陶磁器類を見ると各時期にわたっているため、時期を特定するのは困難である。膨大な量と種類が豊富なため、同一器種の変異の分析には貴重な資料となる。灯火具が好例である。D29~31区にかけて特に出土量が多く、土の量よりも多いように感じるほどであった。5~10mはなれて出土した遺物がしばしば接合する例があること、完形品や大型の破片は少なく、小破片が多いことがこの遺物の出土状況の特色といえよう。接合する資料も層位的な脈絡はなく、整合的な堆積ではなかったことを示している。発見された陶磁器は18世紀末から19世紀のものが多かったが、17~18世紀代の遺物もかなりある。17~18世紀代の遺物は西



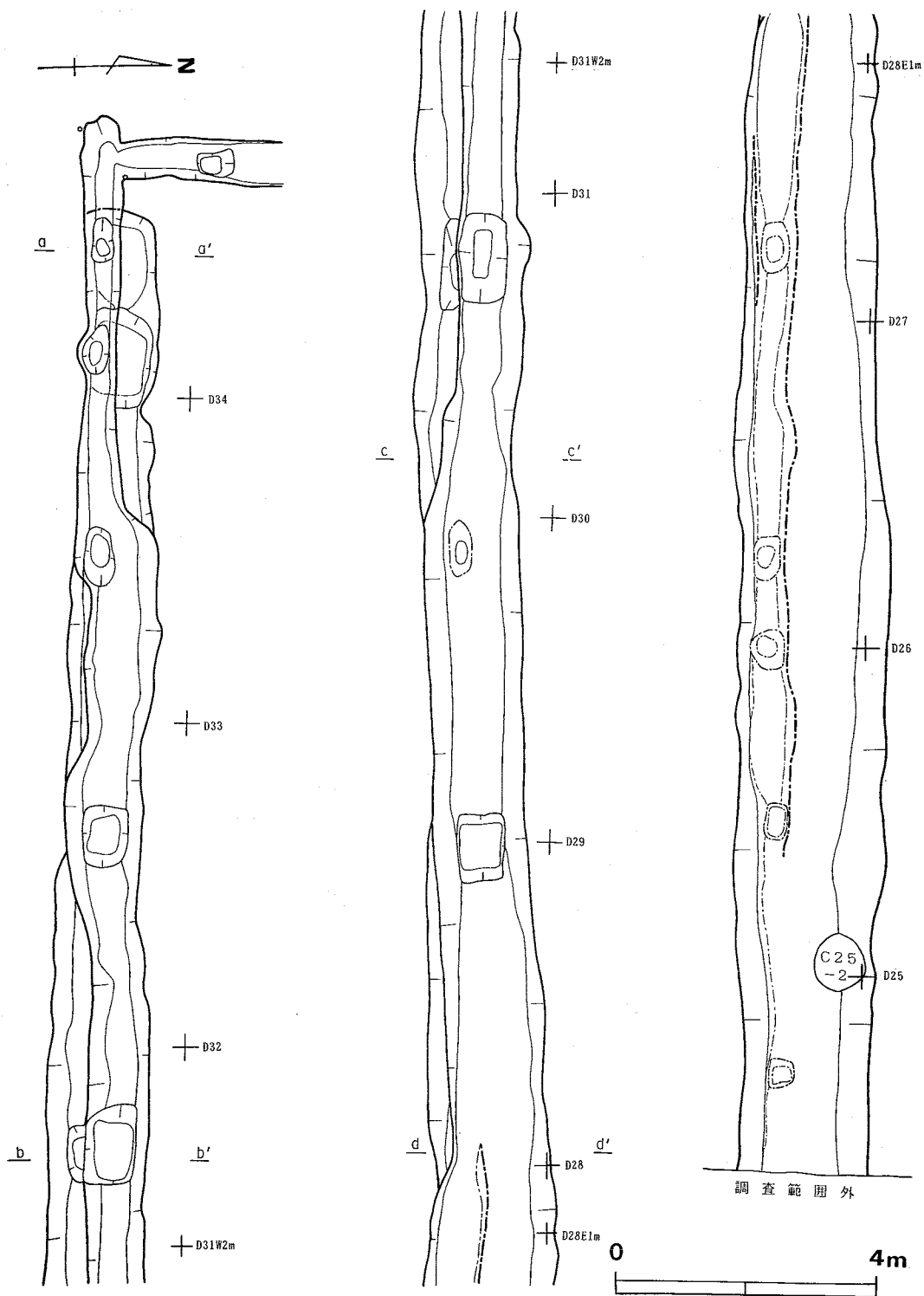
### 第III章 江戸時代の遺構

側に多く、東になるにつれ18世紀末～19世紀の遺物が大半を占めるようになる。こうした現象は土砂とともに一括廃棄されたことから生じたものであろう。土砂のなかには当時ゴミとして廃棄されたものも相当量混じっており、その結果さきに述べたようにさまざまな遺物が発見されることになったのであろう。

2号組石は18世紀末～19世紀の遺物を多く出土している。したがってこの遺構の廃棄の年代は19世紀のどこかの時期に求められようが、この時期に関連する遺構は2号組石の周辺にはほとんど確認されていない。2号組石の残存状況からみて、当時の地表も現在に近い高さがあった可能性がある。周囲の改変の際、2号組石は周辺の土を削り埋め戻したことが考えられる。この際18世紀末～19世紀の遺構の大部分が破壊されたものと考えられる。組石の西側には17～18世紀代の遺物も出土しているが、これらの遺物もこのような過程で埋土のなかに入ったものと考えられる。この時点で当時のさまざまな生活用品もゴミとして廃棄されたものであろう。ところで、『加賀藩史料』には大聖寺藩上屋敷は加賀藩上屋敷とともに明治元年に焼失したことが記載されている。この火災の後始末と直接関係するようなものは出土していないが、出土遺物から判断してこれに近い時期に廃棄されたことが考えられる。2号組石は19世紀の中頃に廃棄されたのであろうが、構築時期が問題になる。『大聖寺藩史』（1938 大聖寺藩史編纂会）に掲載されている文化年間の絵図によると2号組石と思われる溝が描かれており、この時期には確実に存在したのであろうが、遺物・層位からの検討では、その上限を明らかにすることはできなかった。大聖寺藩上屋敷の地境に関しては、本章第一節と第三節の設備管理棟建設地点の道路の項で触れている。それによると、2号組石の南側の側石の北端が天和三年以降の大聖寺藩の上屋敷の北の境界になっている。（佐々木彰）

**V区1・2号溝** V区1・2号溝は2号組石構築以前に、それと同様に屋敷の地境となっていたと考えられる溝である。2号組石直下の遺構であり、2号組石と同じ位置にしかも同じ方向で設けられていた(III-189・190図)。この溝は埋土、底の状況から判断して新旧二つの溝からなっており古い溝である2号溝は17世紀前半にまで遡る可能性をもっている。2号溝はそのほとんどの部分を1号溝によって壊されており、部分的に追跡することができただけで、全容をつかむことはできなかった。2号溝はD34ポイントの西2.8m、南1mに始まり、真東に伸び、調査区の東端に達し、さらに東に向かう溝である。1号溝と比べると幅の狭い溝であったと推測している。2号溝の西端の幅は1m程度と思われ、東になるにつれわずかに広がるようでありD31周辺で、1.5m前後となる。2号組石の構築面からの深さはあまり変わらず0.9m前後でありU字形の断面をもつようである。埋土はロームを含む黒褐色土であるが、ところによってはロームを多量に含むところもあった。興味深いのは底に浅い掘り込みのあることで、2号溝に確実にともなうことが明らかな掘り込みは西側で3例確認している。配置には規則性はなく、掘り込みのもっとも深い部分でも20cm内外の深さしかない。D30～29周辺では1号溝とほとんど重なり、規模・形ともにわからなくなる。わずかに残った部分で(III-190図 d-d')みるかぎり、底の幅は狭くなりそのまま東にいくものと推測される。このあたりでも底に掘り込みが2例確認されているがやはり浅かった。D28周辺より東では、2号溝は1号溝より深くなり、底の状態は比較的よく確認することができた。ここでは幅の狭いV字形(?)の底であり、やはり底に深さ20cmほどの掘り込みが5例あった。底の幅は50cm内外であり、1号溝

9 B 28, B 25, C 34~24 区の遺構

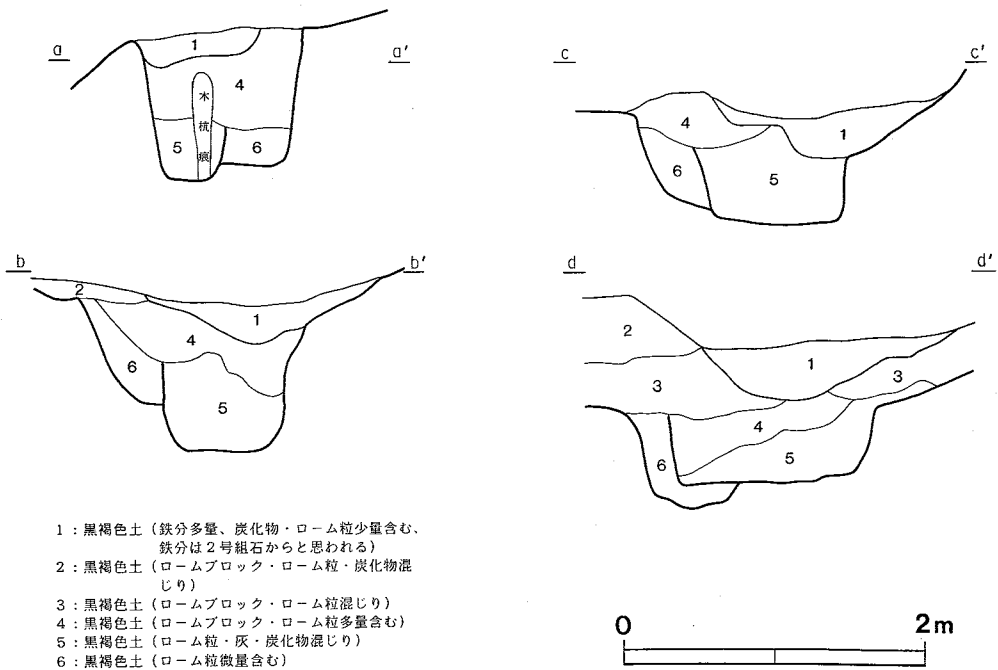


HI-189図 V区1 (新)・2 (旧)号溝実測図

### 第三章 江戸時代の遺構

の底から20cmほど下に2号溝の底が発見されている。1号溝と比べると底の幅は極端に狭くなり、上面もあまり広くはなかったのではないかと推定している。この付近の溝の埋土はロームを全く含んでおらず、自然堆積の層とほとんど区別がつかないほどになっている。

1号溝は2号溝にくらべて比較の様相が明らかである。規模に違いはあるが、2号溝とほとんど同じ形態である。西端では両者に違いがある。1号溝は2号溝よりも明らかに西に向かって延びている点である。さらに注目すべきことは溝はD34より西に3.6mほど延びた後、北に向かって直角に曲がることである。北へはさらに延びることは確実であるが、その先は破壊されていて明らかではない。この部分は他の部分にくらべて幅が狭い。上面は0.6m、底は0.4mの幅しかなく、深さは2号組石の構築面から約1mである。このように部分的に2号溝との違いも認められたが、これら以外、1号溝は基本的には2号溝と同じである。底の掘り込みも6例ある。2号溝のそれに比べ、明瞭でかつ深くなり、30cmに達するところもあった。北へ曲がる部分周辺にはこのような掘り込みが3例確認されている。1号溝は東になるにつれその幅を増すようである。D32周辺では上面1m、底0.6mであるが、D30付近では上面が1.5m、底が0.8mになる。深さにはそれほどの変化はなく1m前後であったが、上面および底の幅がわずかに増すようである。D31・D29の近くに掘り込みがある。底の幅が増すにつれ掘り込みも大きくなり、深さも増すようである。D31近くでは深さ50cmにも達している。1号溝は東になるにつれさらに規模が大きくなる。上の幅は2.3m、底は確実なところで、1.6mもある。深さは東端にいくにつれ徐々に浅くなる傾向をもっている。D32周辺までは2号組石の構築面から1mの深さであったものが、D25の周辺では0.6mになる。2号組石東端の曲がりの部分に相当したところかもしれない。1号溝の埋土は黒褐色土を基調にするものである(III-190図5)。



### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

溝が長大であるにもかかわらず、埋土にはそれほどの違いは認められなかった。この層はローム・炭化物をわずかに含みやや固い層である。この層の下底のすぐ上にはローム主体の埋土がある部分もあった。III-190図の1～3層は2号組石に関連するものと思われる。多少の違いはあるがローム混じりの黒褐色土である。4層はロームを斑点状に含む黒褐色土で、周辺の盛土とよく似ている。1号溝のなかになんかなり堆積しているが、成因は1～3層と類似している。2号溝と同様周辺の盛土と類似した土である。1号溝の埋土からは時期不明の陶磁器の小片を得たのみで、2号溝からは遺物は全く出土していない。

既に触れていることであるが、1・2号溝は屋敷の地境としての性格があるが、2号組石構築以前の様相を知る上で貴重な資料を提供している。調査の結果、2号組石構築以前のこの部分にはおそらく板塀(?)が巡っていたものと考えられたからである。これらの溝は“溝”として機能したわけではなく、板塀などを構築する際の支柱などを埋設した跡と考えられるのである。その理由の一つに1号溝の土層の断面(III-190図 a-a')に木杭跡が確認されたことをあげることができよう。既に述べている溝の底の掘り込みで確認したもので、掘り込みのそれぞれにこのような木杭が立てられていたのであろう。1・2号溝とも掘ったすぐ後に埋め戻されたようで、これも理由の一つである。埋土が周辺の盛土によく似ていることから埋め戻しによる土と考えたのである。しかも2号組石と異なり、二つの溝の底には水が流れたもしくは溜っていた形跡はなく、さらに出土遺物がほとんどなかったことから、先の推定をしたのである。この後、2号組石構築に際してこれらの板塀は取り除かれ、1～4層の土を埋めたものであろう。板塀は1・2号溝の存在が示すように、少なくとも二度建てられていると思われる。1・2号溝に直接関係する『大聖寺藩史』(1938 大聖寺藩史編纂会)の記載はないが、1号溝西端の北への曲がりに関連すると思われる箇所は「延宝図」でも「天保図」でも富山藩の屋敷の南西端になる。地境の位置として長期にわたり重要な意味をもっていたのであろう。V区1・2号溝のもつ意味に付いては本章の第一節で述べている。前にも触れているように、2号溝は上屋敷がこの地に建てられた頃すなわち17世紀前半までさかのぼる可能性がある。(佐々木彰)

## 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

### 1 調査の経過

設備管理棟建設地点は南に給水設備棟地点があり、北に中央診療棟地点があるという両者の中間に位置している。北半分ほどは大学構内の道路であったところであり、ここには大学の排水本管などが埋められており、これらに繋る排水管など多くの光熱水道関係の配管・共同溝などがあり、道路の敷地であるが故の破壊が著しかった。南半には好仁会の食堂などの建物があり、この基礎が深くまで入っていて破壊が深くまで及んでいる箇所がかなりあった。地表面の標高は16.1～16.2mほどで、中央診療棟地点より若干高めである。

本地点の調査も中央診療棟・給水設備棟の建設工事との兼ね合いで実施しなければならず、調査

### 第三章 江戸時代の遺構

以外にも気の使うことの多い調査であった。というのは設備管理棟建設地には数多くの光熱水道関係の共同溝・配管があり、まずその移設が必要であり、第五節で述べる共同溝・排水管のための竖坑の調査をしなければならないこと、第四節で述べる給水設備棟の建設工事は設備管理棟建設地を通らないと実施できないこと、中央診療棟地点への大型の資材の搬入に道路が使える状態にあることなどの諸条件があり、そうしたなかで調査の実施の日時も決まってくるようになった。

1985年の秋に予備調査を行ない、破壊がかなり著しいが、遺構は残っていることを確認した。その後、ここに建設される建物は地下がかなり深く、また調査も深い場所まで行なう可能性があるので、調査区の四周にまず鉄筋コンクリートによる側壁を作り、そのあとで調査を実施することにした。本調査は中央診療棟地点の調査が終了した直後の1986年2月から5月にかけて実施した。この間には、給水設備棟の建設工事が実施されており、西側の36ライン東2mから西の部分を調査することにした。その後、給水設備棟の工事の完了をまって、東側の36ライン東2mの東の部分の調査をした。一方建設工事は調査の終了した西側では開始され、調査と工事が同居している時期があった。

調査範囲は南北52.5m、東西28mで、面積は1470㎡である。Xラインのやや北に排水本管の掘り方、38ラインに沿って排水管があり、この部分は地表下4m以下まで破壊が及んでおり、遺構は全く残っていなかった。これはきわめて大規模な破壊であるが、このほか随所に破壊があり、遺構が壊されていた。そのなかでも調査区の東端はやはり表土下4m近くまで破壊されていた。また調査区の南東の隅は沢にむかって低くなっていたが、ここも破壊が深くまで入っていて事実上調査は不可能であった。

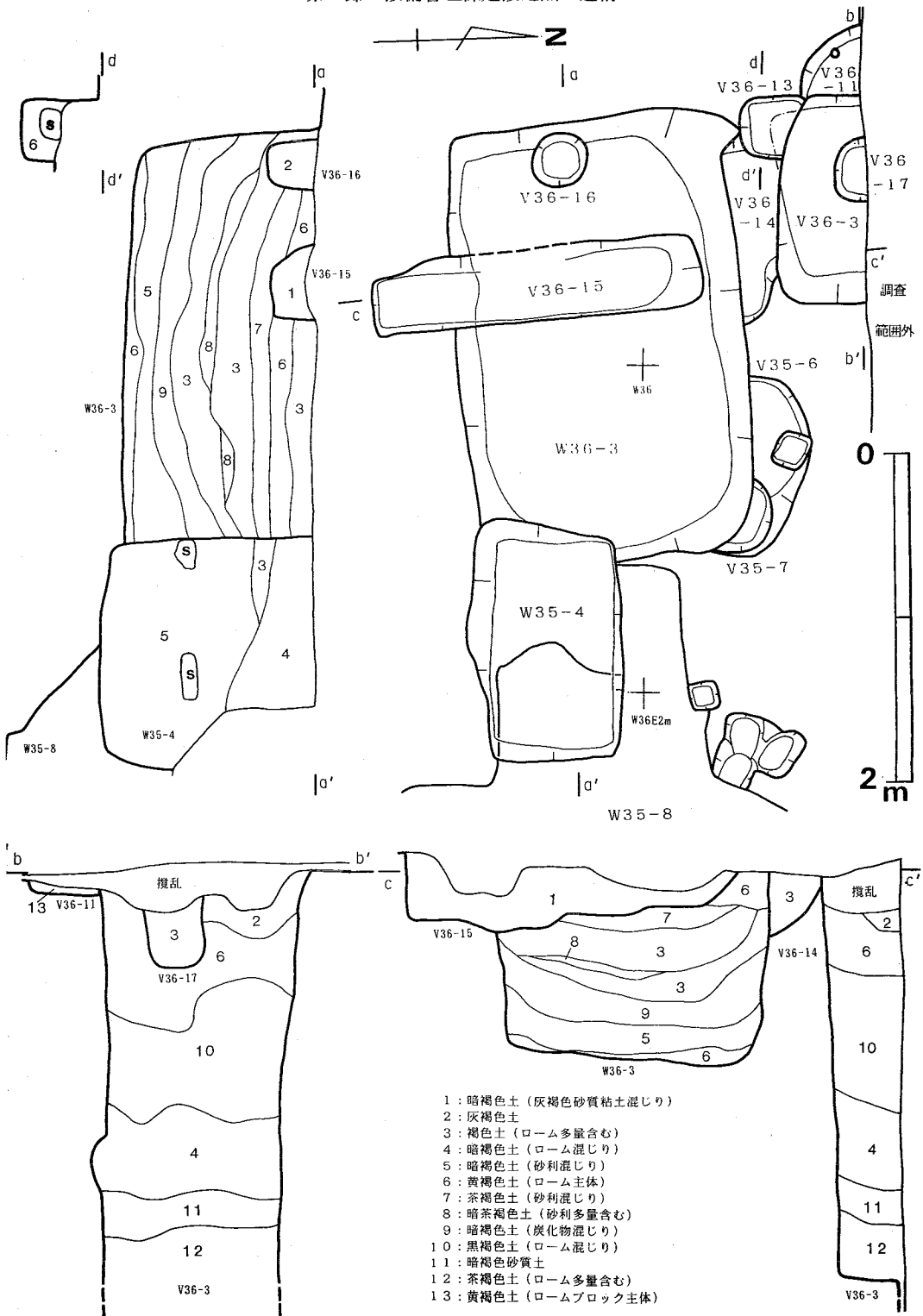
## 2 調査の概要

設備管理棟の軸線は中央診療棟と同じであり、同一のグリッドによって調査することが望ましかったので、同一のグリッドを採用した(付図2)。5mグリッドであり、南北方向にV,W,X,Y,Z, AA,AB,AC,AD,AE,AF,AG, 東西方向に33,34,35,36,37,38,39のグリッドが調査区に入ることになる。

本地点の基本的な層位は中央診療棟地点の西側の層位と同一である。1m内外の厚さの近代以降の煉瓦やコンクリートの破片の混じる表土があり、その下は江戸時代の盛土があるのであるが、多くの場所ではいきなりロームが出現する。江戸時代の盛土はAAラインの北では場所によってかなり違いがあるが、ACラインの南ではほぼ均一なロームのみからなる盛土になる。屋敷の違いが盛土の差になって現われているのである。つまりAAライン以北は大聖寺藩の上屋敷であるし、ACライン以南は越後高田の榊原家の中屋敷であったからである。この下は自然堆積の層になる筈であるが、いきなりロームになる場所がほとんどで、盛土をする前に削っていたのではないかと考えられる。調査区の東南の隅では中央診療棟地点や給水設備棟地点に見られるような沢に特有な堆積をしていたものと考えられるが、東南の隅は破壊が深くまで及んでいたために明らかではない。

遺構の数は中央診療棟地点に比べると少ない。遺構の種類も屋敷によって差がある。遺構がたいへんに多く、複雑な切りあい関係を示す地点があるが、これを除くと比較的数は少ない。遺構のあり方、種類、量も屋敷によって差がある。屋敷内における土地利用の差によるものであろう。AAライン以北では、礎石・地下式土坑・井戸・地割を示しているであろう溝・ゴミ穴など生活に関連す

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-201図 V35-6・7、V36-3・11・13~17、W35-4、W36-3実測図 (土層図の水準:14.7m)

### 第三章 江戸時代の遺構

る遺構が多い。これらの遺構は X37-3, Y37-2, Z37-4 と南北に続く溝状の遺構の東で顕著である。ここは大聖寺藩の上屋敷の絵図面によると裏門の東にある「詰人空間」であったところである。ある意味では絵図面と一致しているとみてよからう。X37-3, Y37-2, Z37-4 の西にはごく少数の遺構があるに過ぎない。この部分は破壊が深くまで及んでいるところで、遺構の多くは破壊されてしまった可能性もあるが、ロームの面が高いところで残っていた部分でも遺構の数は少ないので、そもそも遺構の数は少なかったものと考えられる。というのは一連の溝状の遺構の西は大聖寺藩の上屋敷の裏門があったところと推定される地点であり、広い通路部分があったと思われるところで、元来遺構の少なかったところであったと思われる。AAラインとACラインの間は無縁坂に続く道とそれに関連する塀や溝のあるところで、これら以外の遺構は全くない。生活の匂の全くない地点である。

ACラインの南は異常なまでに遺構が集中する AE35・36 区を除き遺構はまばらである。小規模な地下式土坑もしくはそれに類似した性格をもった土坑・井戸などがある。やはり生活に直接関連した部分である。ゴミ穴もかなり見られる。それぞれの遺構の規模などから屋敷の主要部である「御殿空間」ではなかったことが推測される。大聖寺藩の上屋敷の地割などに関しては、第一節および第五節の調査の概要で触れている。ここで注目すべきものは2号杭穴列と1号礎石列の尺度である。これらはいずれも1.9mが一間の尺度を示しており、注目すべき遺構である。

遺物は19世紀以降のものが多いが、17世紀、18世紀のものもあり、長期間にわたる遺物が見られる。上屋敷の成立の当初から幕末まで生活をする部分として、使われ続けたことを示していよう。面積は狭いが、種々の注目すべき問題点を提出している地点である。特に小部分の発見に留まってはいるが、地割の基礎として、道が発見できた意義は大きい。(藤本 強)

### 3 遺構各説

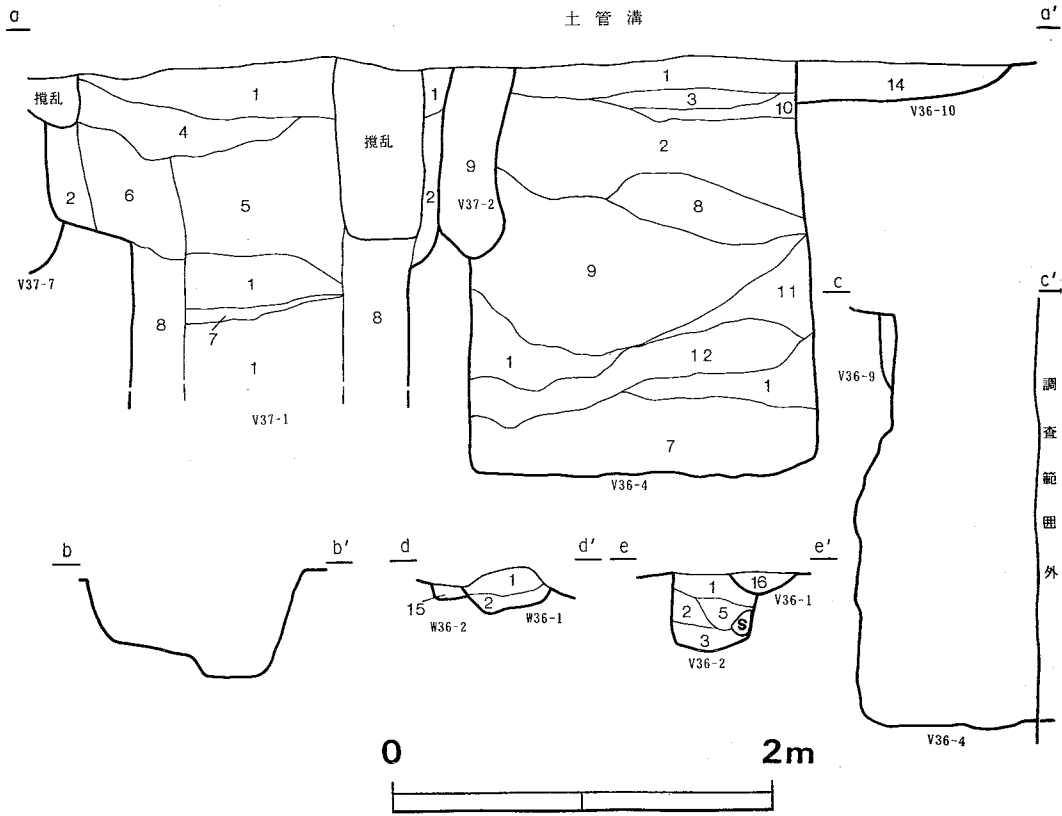
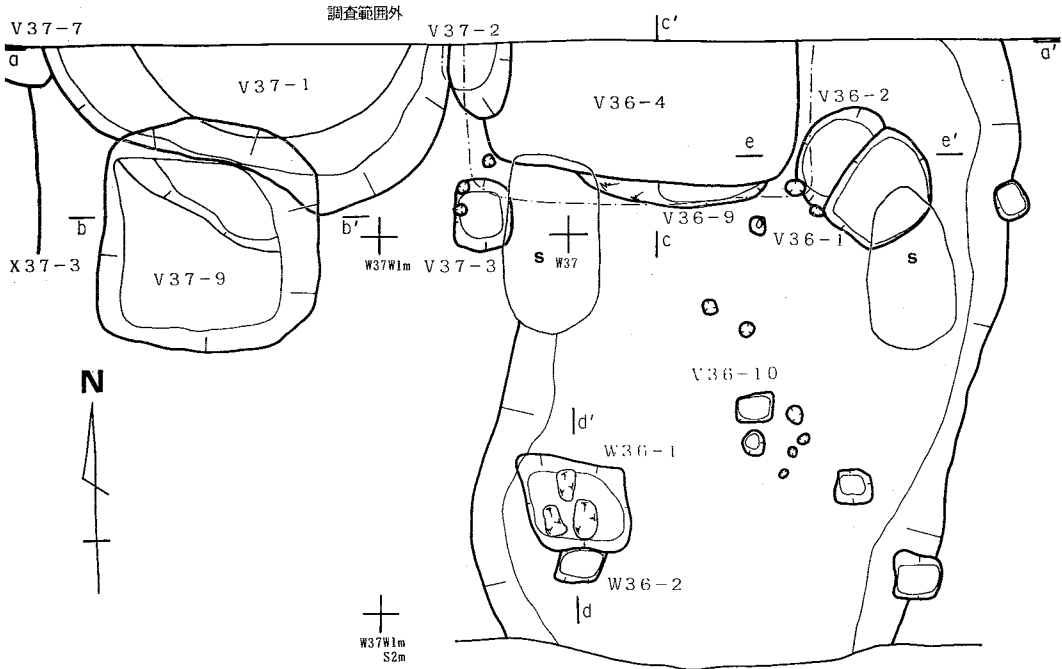
V35-6・7 V35区にあり, W36-3により切られている土坑である(III-201図)。どちらも30cmほどの深さで、暗褐色土を埋土にしている。遺物はない。このほか V35区には W35-8の周辺などに8の杭穴もしくは小土坑がある。大きなものでも30cmまでの規模で、深さは30cm内外のものが多い。ほとんど遺物もなく、時期・性格は不明である。(堀内秀樹)

V36-1・2 V36区にある切りあい関係のある小土坑である(III-202図)。1が新しい。1の上に2号礎石列の石が乗る。どちらもV36-10のなかに作られていて、埋土は暗褐色土を主にするものである。遺物はなく、時期・性格はわからない。(成瀬晃司)

V36-3・17 3はV36区にあり、調査区の外に広がる遺構である(III-201図)。方形であり、確認されているところで2.5mの深さがあり、調査区の外ではさらに深くなる。なかにある小土坑である17を除き周辺の遺構の全てを切っている。埋土は茶～黒褐色土である。井戸かとも思われたが、はっきりしない。少量の陶磁器などの遺物がある。(堀内秀樹)

V36-4・9・10 V36・37区にある切りあい関係のある遺構である(III-202図)。4が新しく、10が古い。4は東西1.6m強、深さ2.2mの長方形と思われる土坑で、地下式土坑であった可能性もある。9はほとんどを4に切られ、わずかに残っている土坑で、10は大型であるが、深さは20cmと浅い。10のなかを中心にして、杭穴もしくは小土坑が数多くある。埋土は4が暗～褐色土で、9は暗褐色土、

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-202図 V36-1・2・4・9・10、V37-1～3・9、W36-1・2 実測図 (土層図の水準:14.8m)



### 第三章 江戸時代の遺構

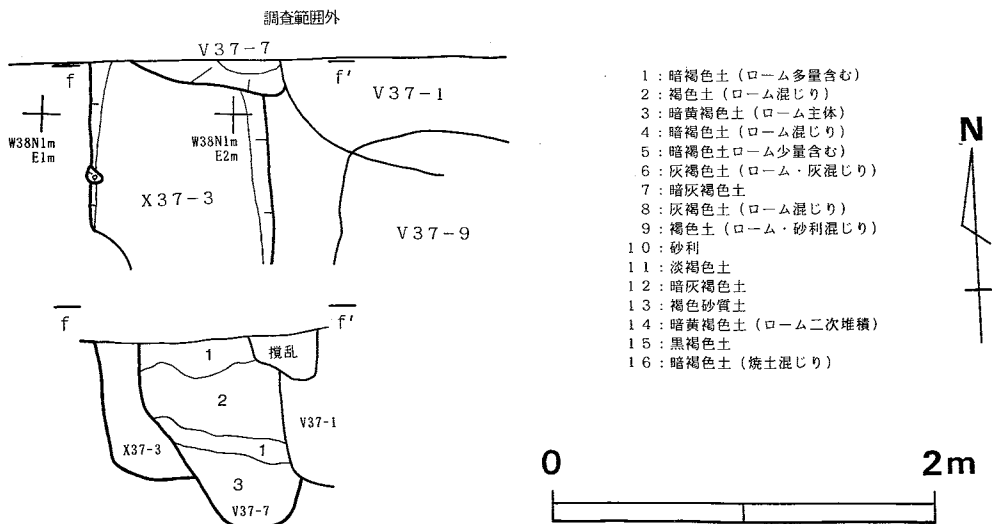
10は暗黄褐色土で一気に埋め戻された様相を呈している。4には若干の遺物がある。(成瀬晃司)

V36-11・13・14・15・16 V・W36区にある土坑である(III-201図)。11・13・14はV36-3・W36-3に切られわずかに残っている土坑であり、15・16はW36-3を切っている土坑である。11は深さ15cm、他は40~50cmの深さである。埋土は黄~暗褐色土で、遺物はない。(堀内秀樹)

V37-1・2・3・7・9 V・W37区にある遺構である(III-202・203図)。1・2・7は調査区の外にかなりの部分が出ている。1は1.5mの径の掘り方をもち、このなかに0.9mの井戸側を入れた井戸である。最上部1mほどは周辺を掘り広げている。井戸側は腐食し、みられないが、土の違いで確認できている。井戸側と掘り方の間には下にローム混じりの灰褐色土が上に褐色土が詰められている。内部にはロームを含む暗褐色土が主にある。2は1を切る土坑で、3はその南にある小土坑である。3の周辺に3杭穴が7の南西にも杭穴がある。7は1に切られており、大部分は調査区の外にある、褐色土を主にする埋土をもつ土坑である。9は上に2号礎石列を構成するであろう石があった土坑である。一辺1.2m内外の深さ60cmほどの土坑で、ローム混じりの暗褐色土を埋土にしている。いずれからも遺物はない。1を除き、性格は不明である。(成瀬晃司)

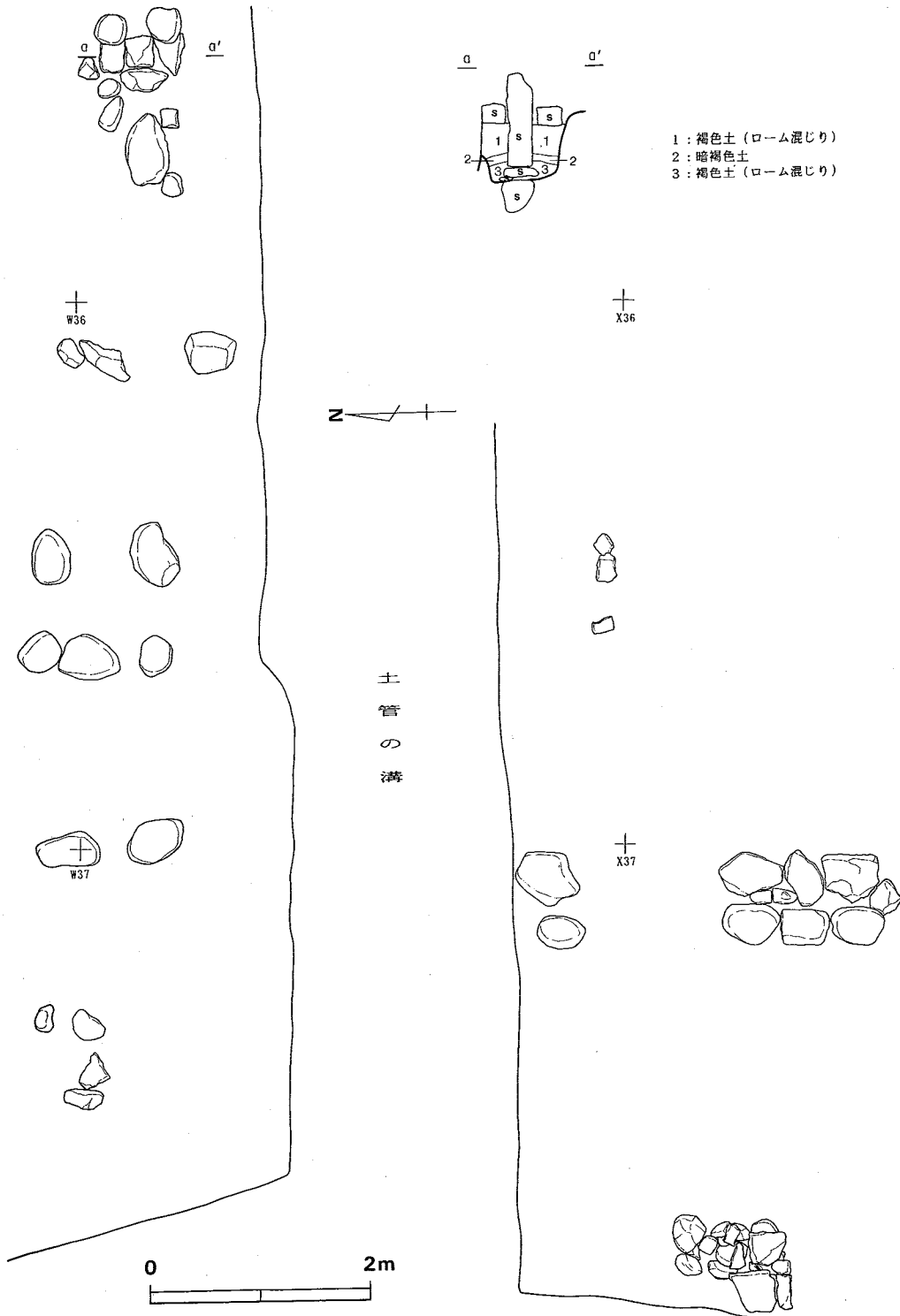
2号礎石列 V-X=35~37区にかけてある2~数個の石の集まりである(III-204図)。全部で9箇所あるが、形も石の数も様々であり、また相互の間の距離にも斉一性がない。それぞれの石はかつて礎石に使われたのであろうが、現在見られる形はこれらの石が礎石に使用されていた時の位置を現わしているとは考えにくい。さりとてまるでバラバラかといえ、ある方向性をもっているとも考えられる。特に東北の端のものは立面図にも見られるように意味のあるような石の積み方がなされている。数時期にわたる礎石もしくは根石が一部だけ残っているものと礎石もしくは根石を片付けたものが混在していると考えるのが妥当のように思われる。(堀内秀樹)

W33-1 W33区の西南にある地下式土坑である。東はコンクリートの壁になっており、北は本郷キャンパスの主要な排水本管によって大きく壊されている。全容は不明であるが大型の地下式土



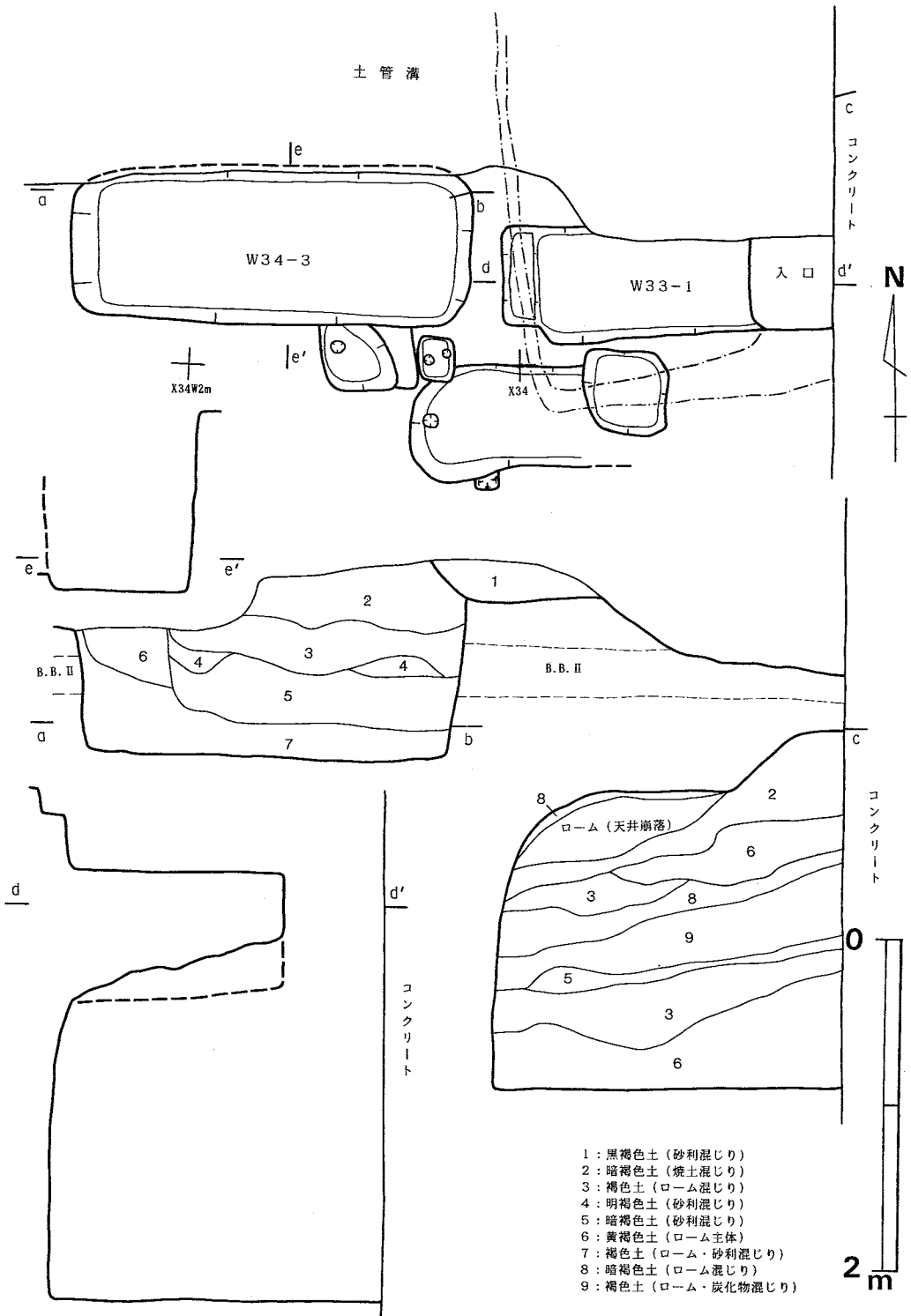
III-203図 V37-7実測図(土層図の水準:14.8m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



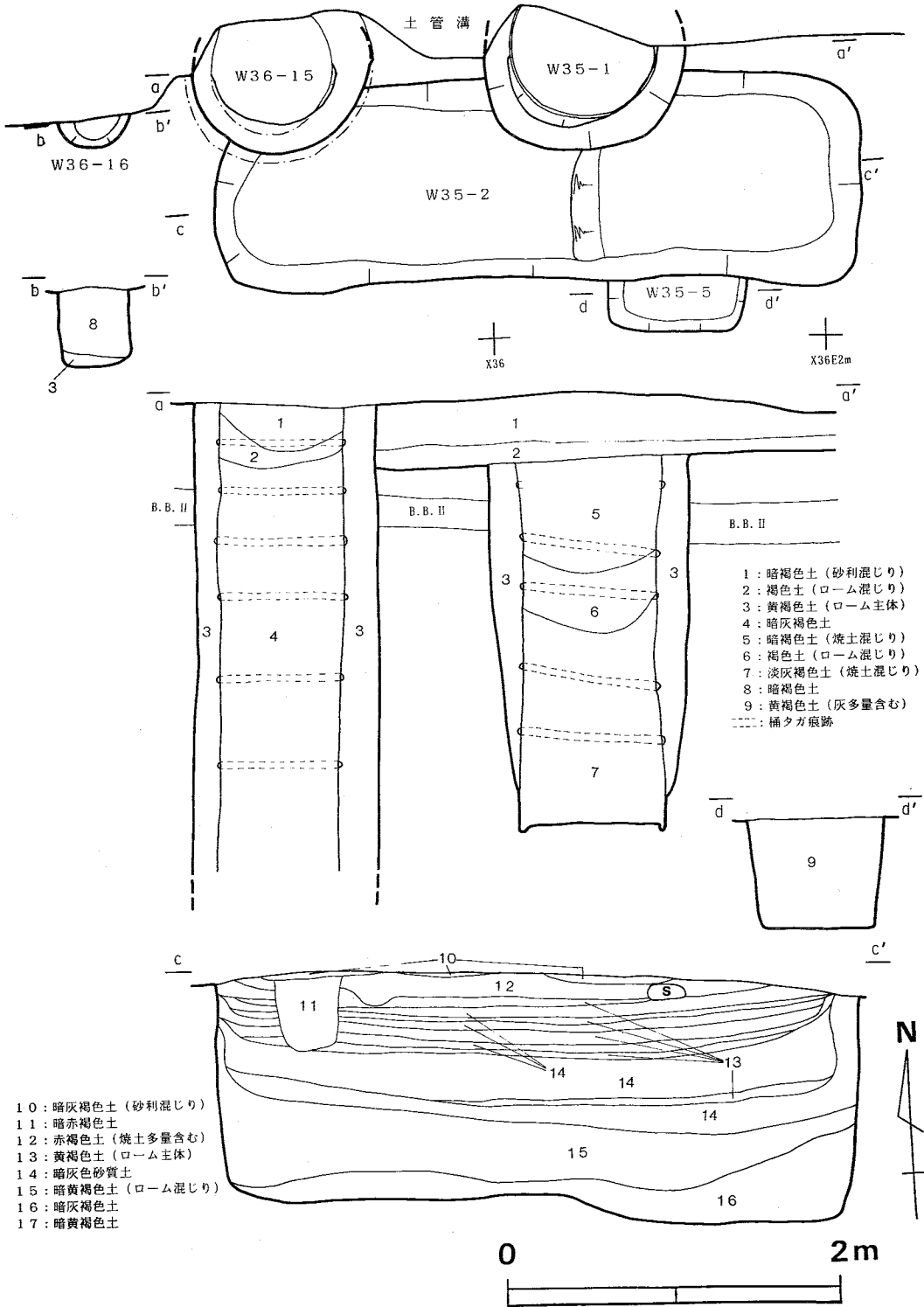
III-204図 V~X-35~37区の石列 (立面図の水準: 15.2m)

第三章 江戸時代の遺構



III-205図 W33-1, W34-3実測図 (土層図の水準: 14.5m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



### 第三章 江戸時代の遺構

坑であったことは確実である。上部の破壊はひどいが下部は排水管の掘り方が小さくなっているで、かなりの部分を追跡することができた。現存東西2.1m、南北2.3mであるが(III-205図)、より大きかったことは確かである。天井も1.8mの高さがあり高い。開口部は幅0.7m内外であり、ここには一段の階段がある。これを降りて開口部になる。開口部は壊れていて形ははっきりしないが、長方形であろう。底は北に高く、南に低い。東西はほぼ水平である。埋土は黄～暗褐色土が主体となっている。遺物はかなりの量出土している。

この地下式土坑の西南には大小5の土坑がある。いずれも若干焼土を混じえた褐色土～暗褐色土を埋土にしたもので、30～40cmの深さをもっている。なかには径10cm弱、深さ10～15cmの杭穴をもつものもある。遺物はほとんどなく、配置も規則的ではない。(藤本 強)

**W34-3** W34区の南にある東西2.4m、南北1.0m、深さ1.1mの長方形の土坑である(III-205図)。北側は排水管の掘り方によって壊されている。埋土は砂利を含むことの多い暗～黄褐色土である。遺物は少ない。性格は不明である。(藤本 強)

**W35-1** W35区にある井戸である(III-206図)。掘り方は径1.2m、そのなかに径0.9mの桶を入れ井戸側にしてある。浅い井戸であり、深さは確認面から2.2mである。W35-2を切っていて、層的に西にあるW36-15より古いことは確実である。タガが良く残っており、少なくとも5本はまわっている。掘り方と桶の間にはローム主体の黄褐色土が詰められている。桶のなかの埋土は褐色土が主になるもので、若干量の遺物がこのなかから出土している。(松下理恵)

**W35-2** W35・36区にある土坑である(III-206図)。東西3.9m、南北1.2m、深さ1.6mの細長い隅丸の長方形である。W35-5を切り、W35-1、W36-15に切られている。埋土は自然堆積かと思われる中央のくぼんだものであるが、上部は黄褐色土と砂質土の互層であり、下部は暗黄～暗灰褐色土である。最上部には焼土があり、ここから18世紀前半の陶磁器の小片が少量出土している。当初からゴミ穴を目的にしたものではなく、貯蔵などの目的で作ったものであろう。詳細は不明。(小川 望)

**W35-4** W35区にあり、W35-8、W36-3を切っていて、上に2号礎石列の東北の端のものがある土坑である(III-201図)。南北1m、東西1.5mの長方形で、深さ1.3mである。ロームもしくは砂利の入った暗褐色土を主な埋土にしており、遺物はない。性格は不明である。(堀内秀樹)

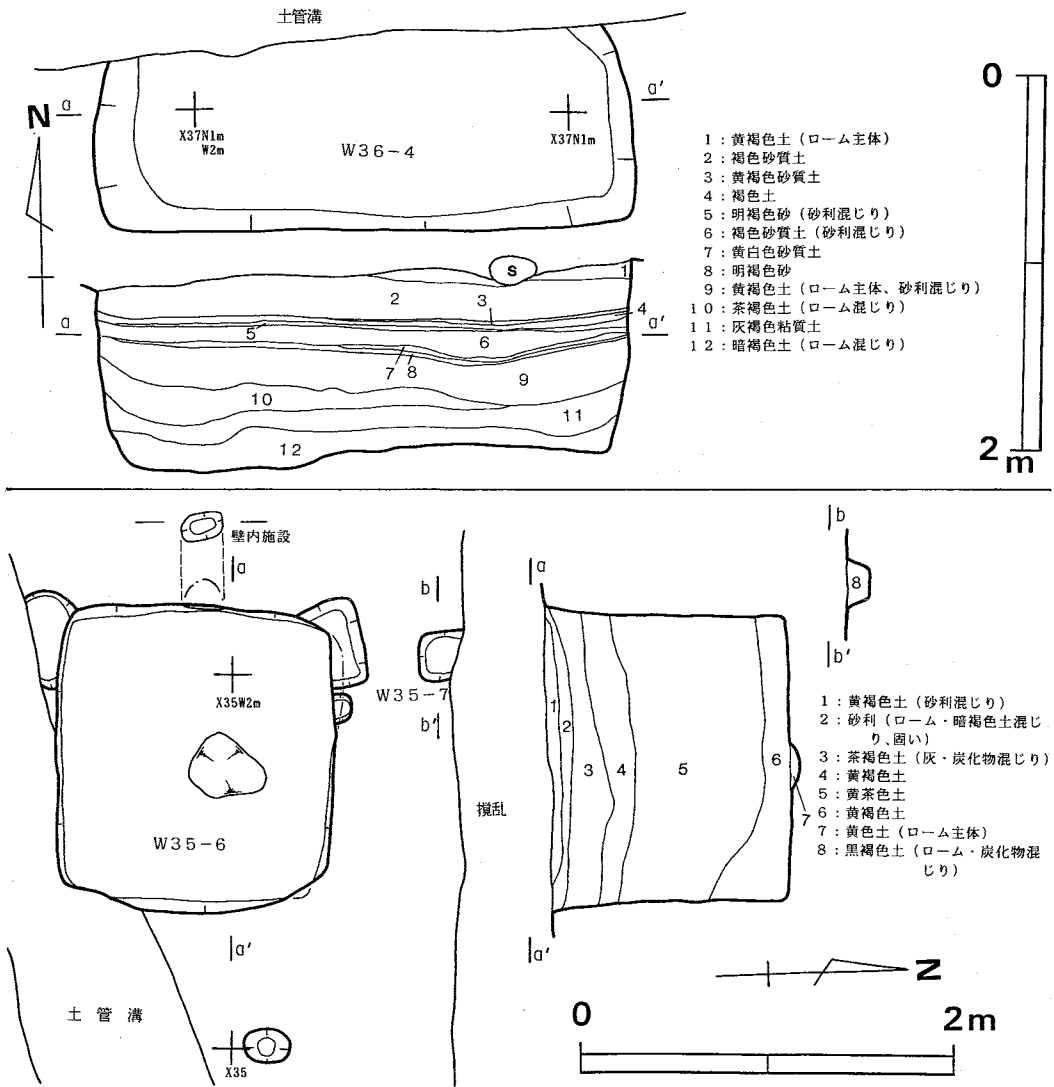
**W35-5** W35区にあり、W35-2に切られわずかに残っている方形の土坑である(III-206図)。深さは50cm、埋土は灰を含む黄褐色土である。遺物はなく、時期・性格は不明。(小川 望)

**W35-6・7** どちらも上部を壊されていて、掘り込み面は不明である。6はW35・X35区にまたがる一辺1.5mほどのほぼ正方形の土坑である(III-207図)。底に40cmほどの浅い掘り込みがある。一部土管によって破壊されている。深さは1.2m～1.3m、埋土は水平に堆積しており、上部はよく固められた黄褐色土で、下部は焼土・炭化物などを含む黄褐色土である。整地の際埋められたのであろう。壁と底は平滑に仕上げられている。西壁に幅20cm、奥行15cmの小孔がある。磁器、瓦など少量が出土している。地下式土坑の室部であった可能性もあるがはっきりしない。なお、西北の角、西南の角にこれに切られた浅い小型の土坑3がある。時期・性格は不明である。7は6の北にある一辺30cmほどの小土坑である。炭化物混じりの黒褐色土が埋土である。遺物はない。(宮田安志)

**W35-8・9** W35ポイント付近にある土坑である(III-208図)。8は階段付きの地下式土坑であり

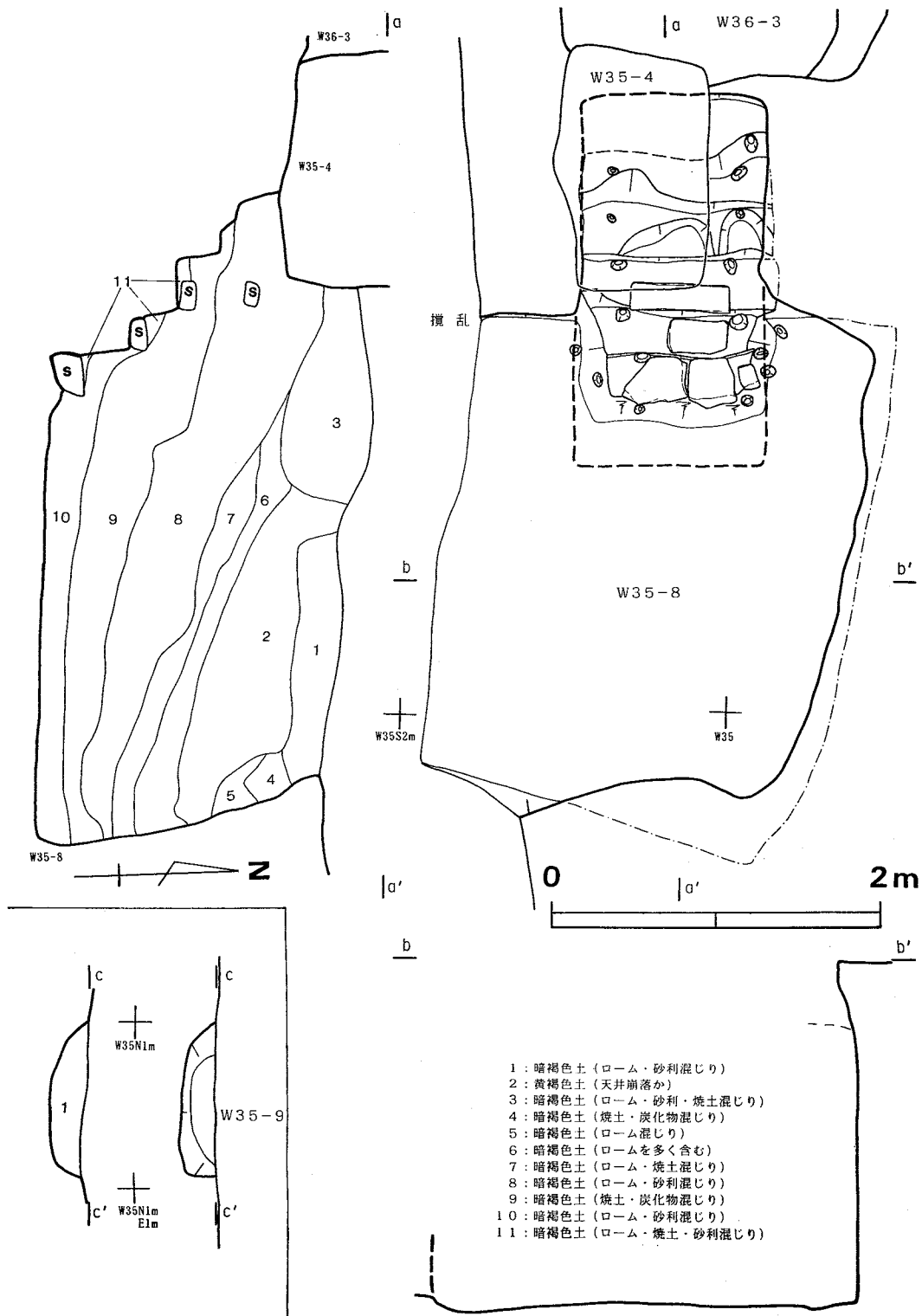
第三節 設備管理棟建設地点の遺構

9は小土坑である。8は天井は完全に崩落しているが、階段と地下室をもつ地下式土坑であることは確実である。南側は土管によって破壊され、階段はW35-4により切られているが、壊された部分はわずかであろう。階段は幅1.1mで、六段が確認されている。踏段は幅30cmほどで、高さは25~30cmであり、下の三段には踏石であろうと考えられる平石がある。それぞれの段には径5cmほどの杭穴があり、板で土を留めていたものと考えられる。下の二段は地下室のなかに入っている。入口ははっきりはしないが、階段よりやや大きめであり、東西2.3m、南北1.1mほどであったものと推定される。地下室は不整な方形であり、東西3.3m、南北現存2.6mである。天井は底から1.8mほどであったものと推定される。埋土はローム混じりの暗褐色土が主であり、入口から周辺に流れ込むような堆積をしている。人為的に埋め戻したものであろう。遺物はほとんどみられない。中央診療



III-207図 W35-6-7、W36-4実測図 (土層図の水準:14.8m、壁内施設:14.5m)

第三章 江戸時代の遺構



III-208図 W35-8・9実測図 (土層図の水準:14.0m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

棟地点のものに比べると規模も作りもかなり劣る。9は大部分が調査区の外にあるので全容は不明である。遺物はなく、時期・性格ともにわからない。(佐々木彰)

W36-1・2 W36・37区にあり、V36-10の上にある小土坑である(III-202図)。1の北側に2号礎石が載っている。底にはかなりの凹凸があり、植栽に関係するものかと思われる。1の埋土はローム混じりの暗～褐色土、2はロームを含む黒褐色土である。遺物はない。(成瀬晃司)

W36-3 W36ポイントを中心にする大型の土坑である(III-201図)。北側の土坑を切り、W35-4、V36-15・16に切られている。東西2.7m、南北1.8m、深さ1.3mで、茶～黄褐色土の水平に堆積する埋土をもっている。埋土の上のほうから陶磁器、「かわらけ」などが出土している。(堀内秀樹)

W36-4 W37区に主要部のある土坑である(III-207図)。東西2.8m、南北推定1.2m、深さ1mの不整な長方形である。埋土は水平な堆積をしており、各種の土がある。遺物は下部から若干量が出土している。時期・性格ははっきりしない。(松下理恵)

W36-15 W36区にある井戸である(III-206図)。径1.1mの掘り方のなかに径75cmの桶を入れ、井戸側にしている。掘り方と井戸側の間にはローム主体の黄褐色土が詰められている。タガが6本確認されている。桶の内部には暗灰褐色土がある。遺物はほとんどない。時期は明確ではないが、層位的にみてW35-1より新しい。W35-2も切っている。(松下理恵)

W36-16 W36区にある小土坑である(III-206図)。深さ50cm、暗褐色土が主の埋土であり、ごく少量の遺物がある。時期・性格は不明。(小川 望)

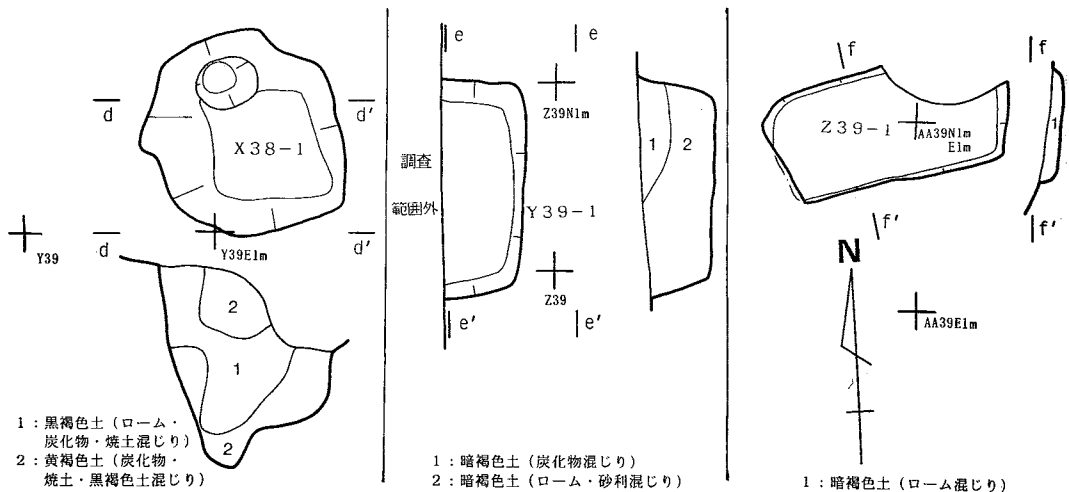
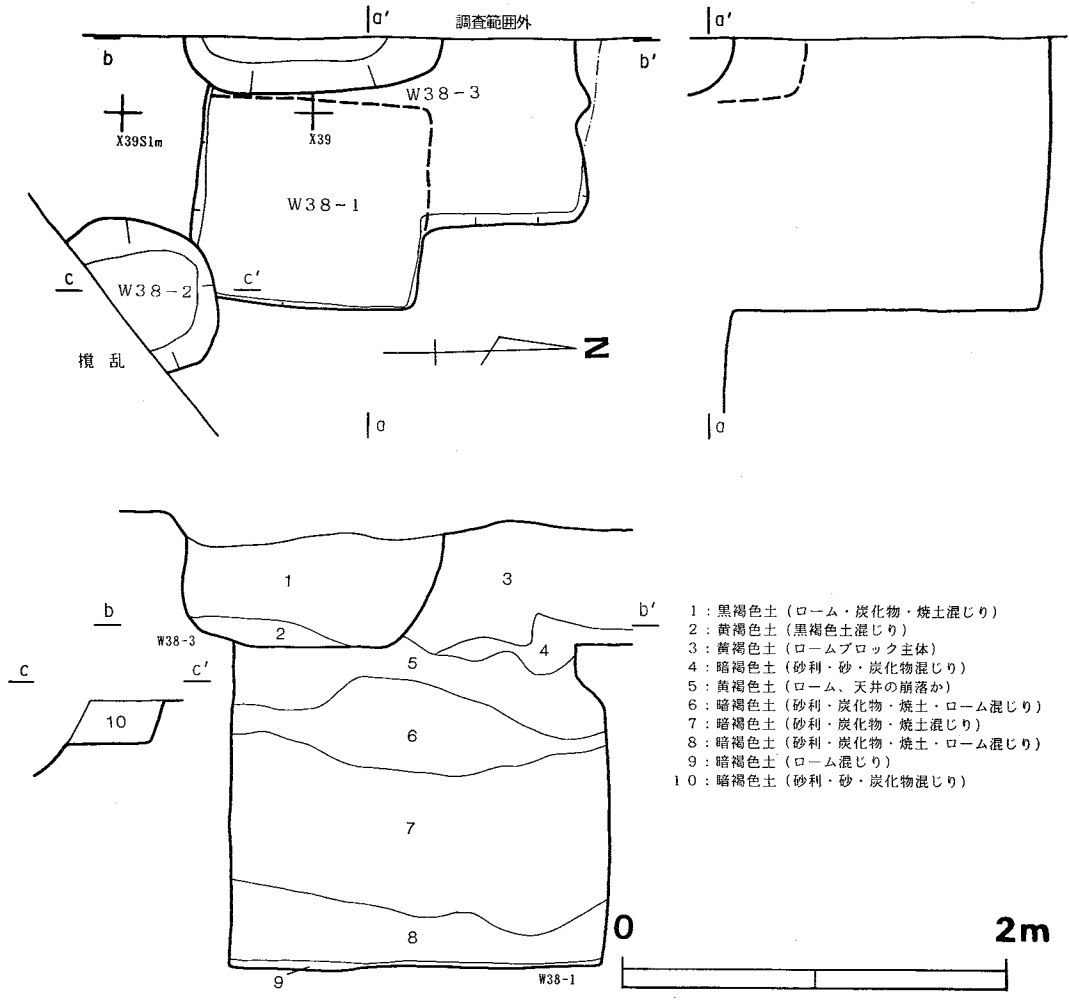
W38-1・2・3 X39ポイント付近にある切りあい関係のある土坑である(III-209図)。1を2・3が切っている。調査区の西端にあり、全容がわかる遺構はない。1は天井部ははっきりしないが、地下式土坑であったものと考えられる土坑である。東西1.1m、南北1.2mほどの入口を東南の隅にもち、北と西に地下室が延びている。地下室の南北方向の長さは2.1mほどで、東西は調査区の外に西側が出ているためわからない。天井は底から1.3m～1.5mであったものと推測される。埋土はローム・砂利・炭化物などを含む暗褐色土が主体である。18世紀前半を中心にする陶磁器など若干の出土がある。2は円形の深さ20cmほどの土坑であり、3はおそらく長方形の深さ60cmほどの土坑である。遺物はなく時期・性格ともに不明である。(佐々木彰)

X33-2 X33・34区にまたがる径45cm、深さ15cmほどの小土坑である(III-212図)。埋土は灰～黄褐色土である。1号礎石を切っているものと思われる。少量の遺物がある。埋土からみて礎石に関係するものかとも考えられるが、対応するものはない。(佐々木彰)

X34-1 Y35ポイントの周辺にある階段付き地下式土坑である(III-210図)。Y34-4・5に南側を破壊されている。上部は近代以降の破壊により完全になくなっている。地下室と階段からなるが、入口の大きさなどは不明である。地下室は一辺3mほどの正方形であるが、かなり不整な形をしている。北側には壁龕状に北に張り出す部分がある。壁龕状の部分は東西1.5mほどで、上下は天井に緩やかにつながるためはっきりはしないが、1m弱である。奥行は20cmで、底の上80cmあがったところからはじまっている。この部分は調整が比較的良くなされているのにたいし、壁から天井にかけては工具の痕かと思われる凹凸が多数ある。底は平坦で、壁はやや内傾する。天井は残っているところはほとんどないが壁にある痕跡から考えると、底から1.8mほどであったものと思われる。

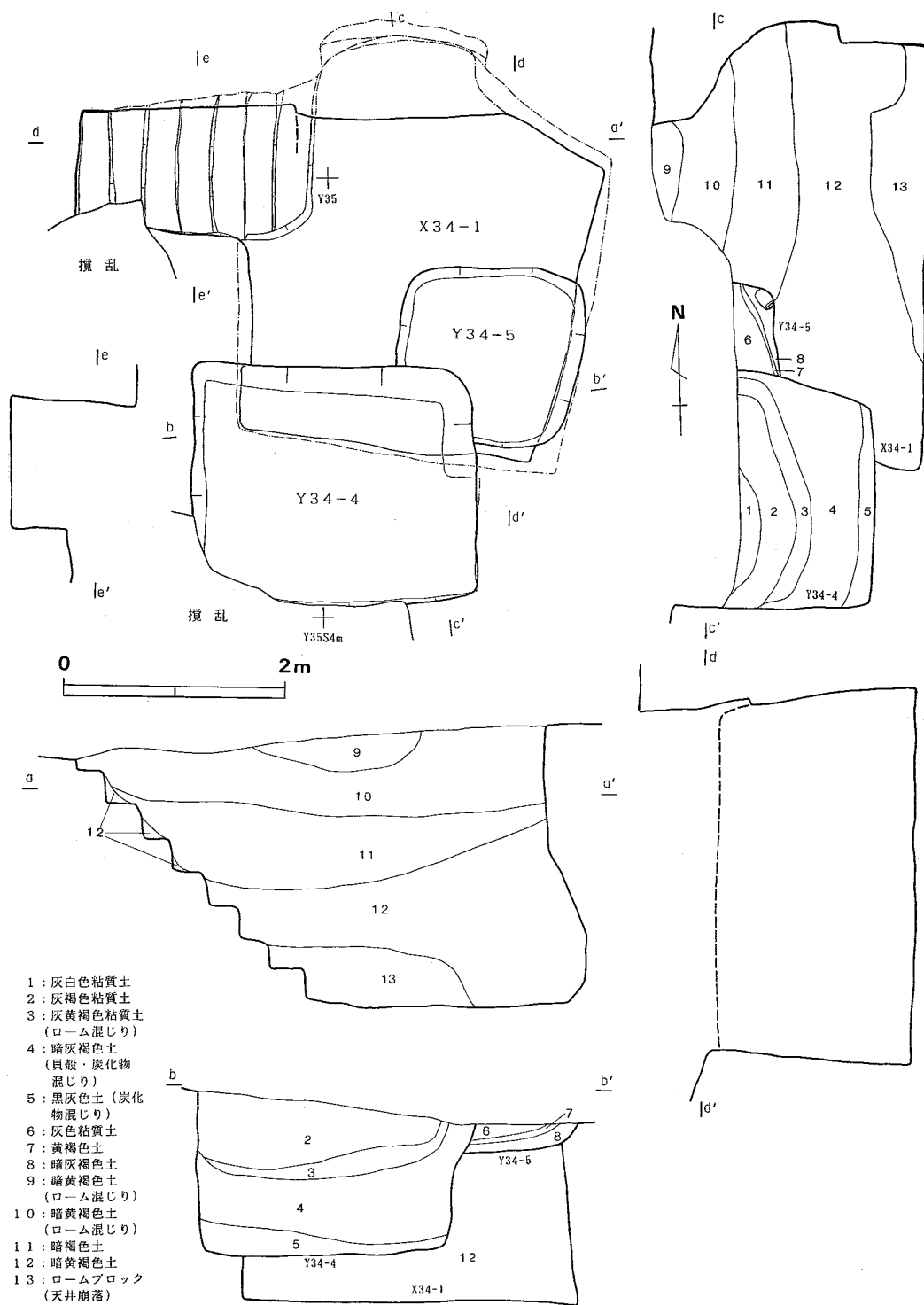


第三章 江戸時代の遺構



III-209図 W38-1・2・3, X38-1, Y39-1, Z39-1実測図 (土層図の水準: 14.2m, d-d'-e-e'-f-f': 14.8m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



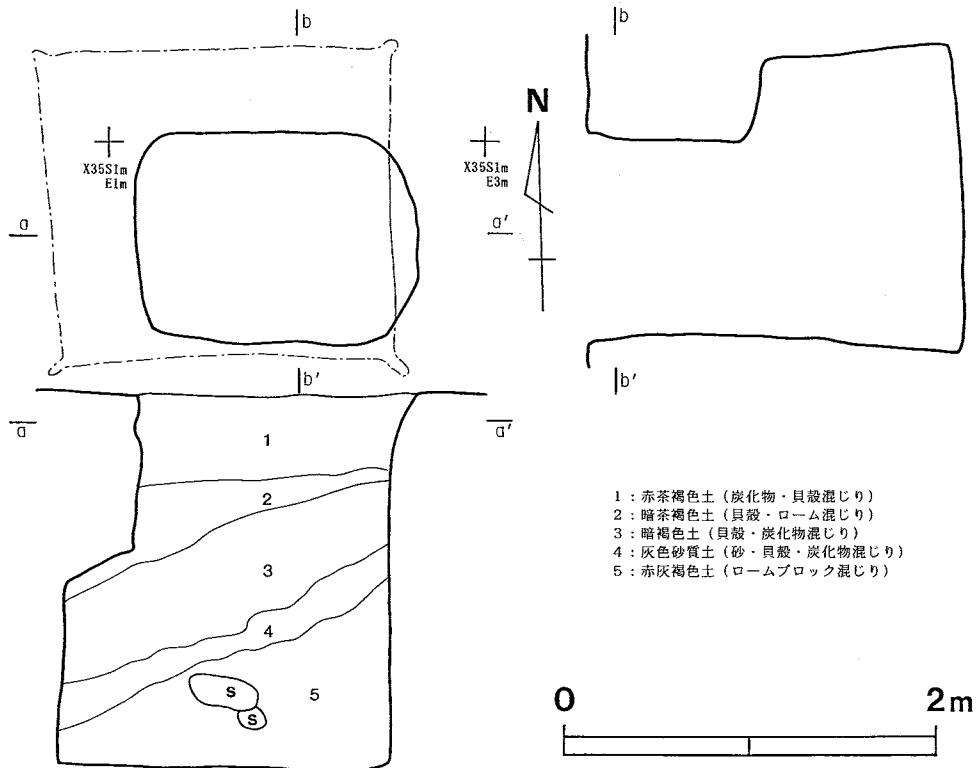
III-210図 X34-1、Y34-4・5実測図 (土層図の水準:14.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

階段は幅1.3mで、現存するのは七段、2.2mである。本来はあと三段程度あったものと思われる。左右の壁はやや内傾する。入口ははっきりしないが、東西2m以上、南北1.1mほどであったと思われる。各段のけあげは25~30cm、踏み幅は20~25cm、踏み板にあたる部分は平らでけこみはほぼ垂直である。下から一・二段目は室内にあり、角は丸く調整されている。杭穴などはない。

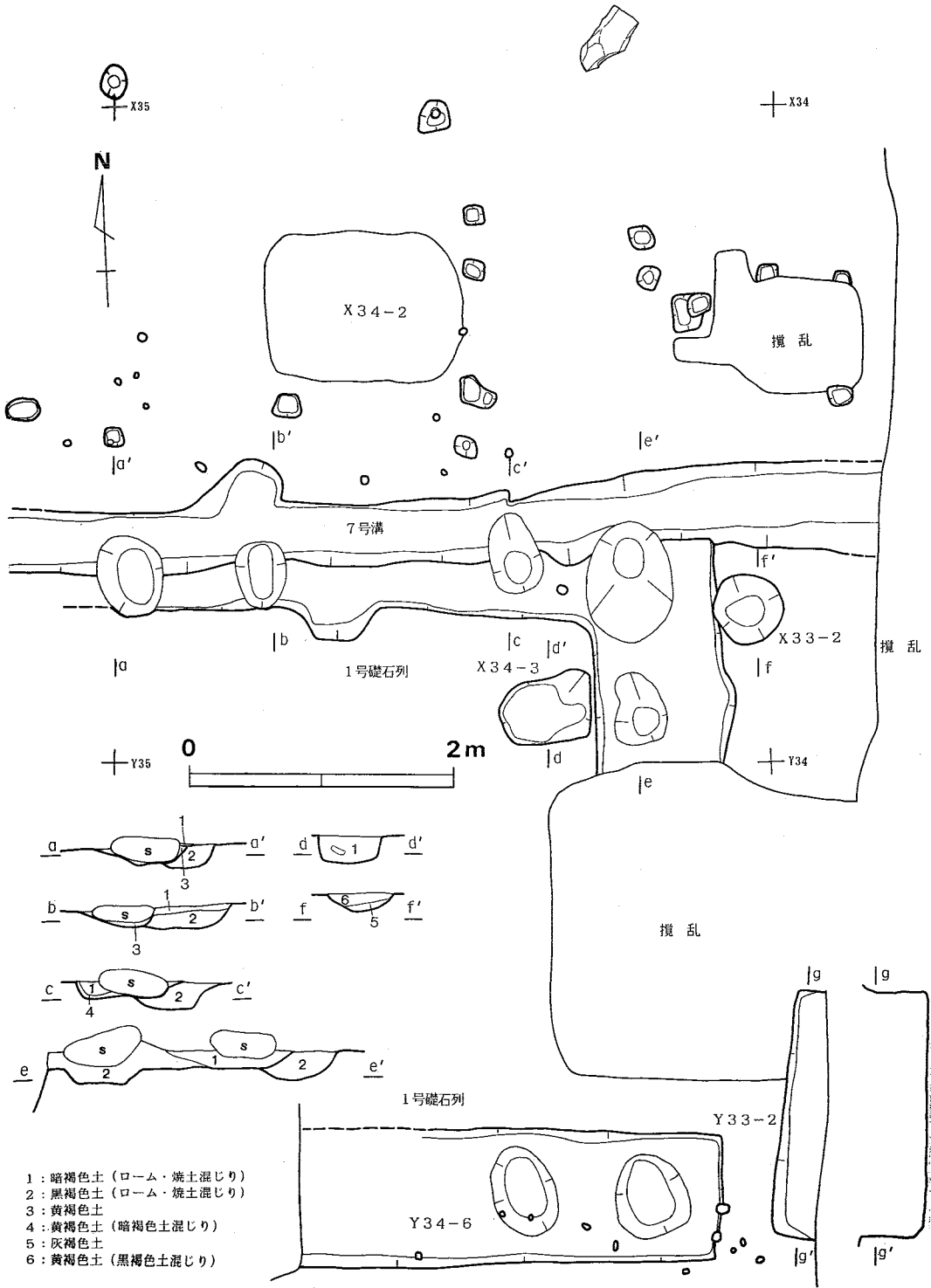
埋土は地下室の底に天井や壁が崩落したものに由来すると思われるかなり大きな塊のロームブロックが入り、その上にロームを多量に含む暗褐色土・暗黄褐色土がほぼ水平に堆積している。遺物は埋土の下半を中心に17世紀後半から18世紀前半の陶磁器・土師質の土器がごくわずか発見されている。この遺構は階段付き地下式土坑であるが、埋土やその堆積のあり方、遺物の量の少なさなどから、天井などの崩落により廃棄されゴミ穴などに転用されることもなくすぐに人為的に埋め戻されたものと考えられる。北と西にも W35-8・Y36-1 とした階段付き地下式土坑がある。いずれも西から東にむかって階段を降りるといった形態・規模・遺物の時期や量に共通する点が多い。一連のものとするのが妥当であろう。(小川 望)

X34-2 X34区にある地下式土坑である(III-211図)。比較的良好な状態で残っている。入口は東西1.5m、南北1.1mの南北の縁が胴の張る長方形で、底は北と西に50cm内外広がる。底は東西1.9m南北1.7mになる。底の四隅が飛び出す。底から天井までは1.1mと低い。埋土は炭化物・貝殻などの混じる赤~茶褐色土を主にする。入口から隅にむかって傾斜した堆積をしている。若干量の遺



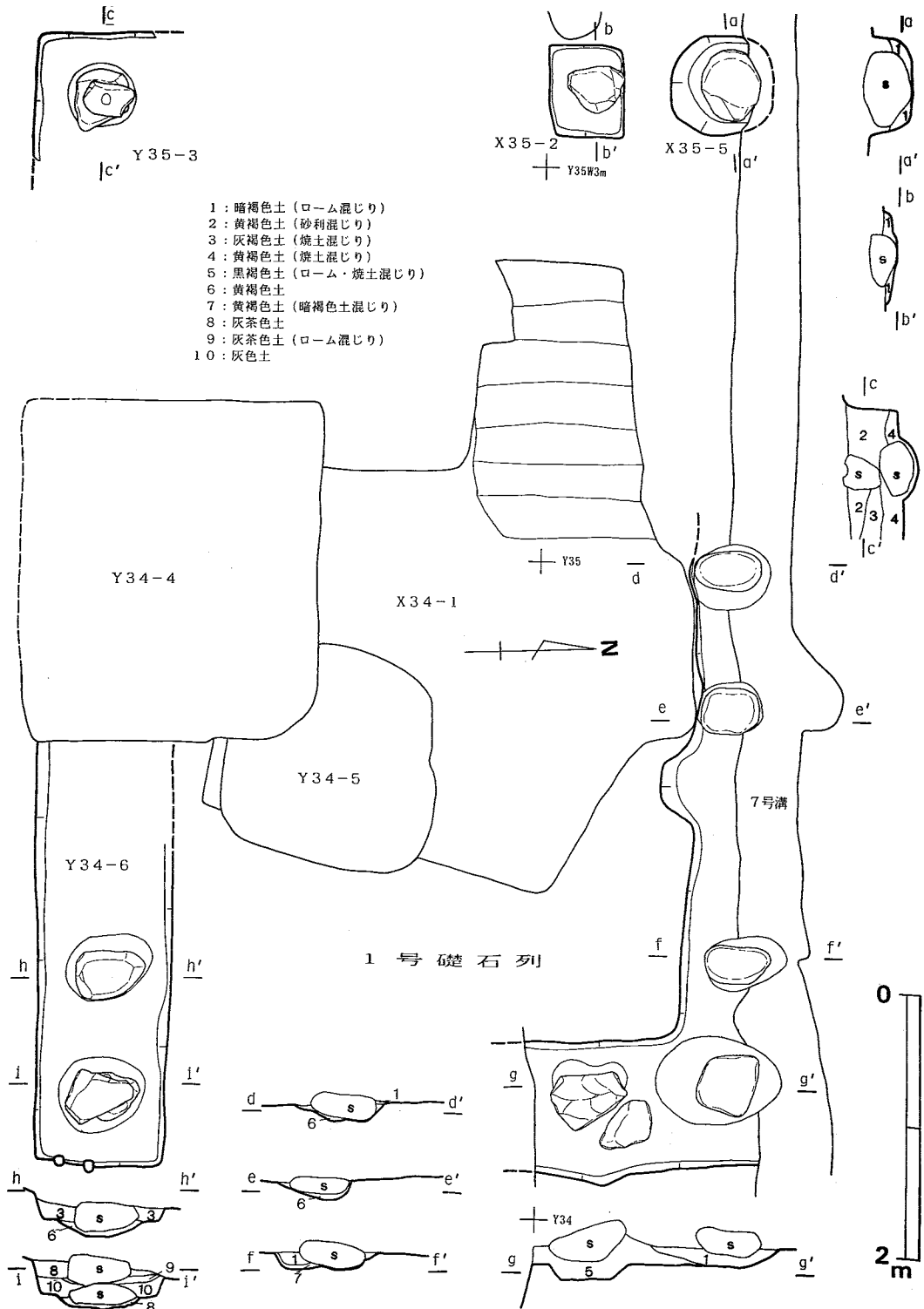
III-211図 X34-2実測図(土層図の水準:14.5m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-212図 X33-2, X34-3, Y33-2, Y34-6, 1号礎石列実測図 (土層図の水準: 14.5m, g-g': 12.6m)

第三章 江戸時代の遺構



III-213図 1号礎石列実測図 (土層図の水準: 14.5m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

物が出土している。廃棄に際し、ゴミ穴として利用したのであろう。類似する小規模な地下式土坑が X35-9・X36-2・X37-2 とあるが、これらの埋土は焼土が大量に入っているのにたいし、この土坑には見られない。廃棄の時期の差によるものであろうか。なお、周辺には数多くの一辺20cm前後の方形の杭穴、径5cm前後の円形の杭穴があるが、相互の距離・方向に規則性はなく、7号溝との関連もあり方形のものは地境に関連するかとも思うが、はっきりした性格はわからない。(宮田安志)

**X34-3** X34区にある70×50cm深さ20cmの土坑である(III-212図)。埋土は暗褐色土であり遺物はない。1号礎石列の周辺にあるので関連する可能性もあるがはっきりしない。(佐々木彰)

**1号礎石列** X34-35, Y34-35区にある現存10の礎石からなる礎石列である。当初これはY34ポイント西北にある5個の礎石に関して考えていたが、その後X35-2・X35-5・Y34-6・Y35-3もほぼ同一構造をしており、ほぼ同じ水準にもあり、かつ正東西南北の方向にあることから同一の礎石列であるという結論に達した。東西方向の礎石の中心と中心はいずれも7.6mであり、南北方向は4.65mである(III-213図)。これは六尺三寸間の四間と二間半にあたろう。この部分は近代以降の建設によって大きく破壊を受けており、またX34-1・Y34-5・Y34-4によりわからなくなっている。Y35-3とX35-2およびY34-6との間、Y34-6の北は近代以降の建物の基礎により、大きく変形されている部分である。7号溝より新しいことは層位的に見て確実である。またY34-4よりは古いことも確実である。X34-1・Y35-4との関係は不明である。X34-1・Y35-4は地下式土坑であり、X34-1の天井部は完全に崩落していた。したがって、天井の上に礎石があったならば、崩落時に天井とともに落ちたことも十分に考えられるからである。北側の列の東から三つめと四つ目の石とX34-1との平面的な微妙な関係を見ると同時存在していた可能性もあるように思われるが、この形態の地下式土坑は18世紀になり出現するもので、六尺三寸間の建築とは年代が違いすぎる。北側の列の場合、X35-5の東にもう一つ礎石があった可能性もあるが、破壊が深くまで及んでいてははっきりしない。まずロームを掘り、溝状もしくは土坑状のものを作り、底に黄～暗褐色土を主にする土を詰め、石を置く構造になっている。それぞれ若干の差がある。礎石の上面の水準はY34-6の西側のものを除き、14.6～14.7mとほぼ揃っている。北側のものは石が一段であるのに対し南側のものは二段であったものと思われる。Y34-6西側の石はこれが一段しか発見されていない。そのような関係で低いのであろう。この上にさらに石が置かれ、礎石になったものと考えられるが上部は完全に破壊されている。はっきりした形で把握できた礎石列である。掘り方の図はIII-212図に一部を示す。(藤本 強)

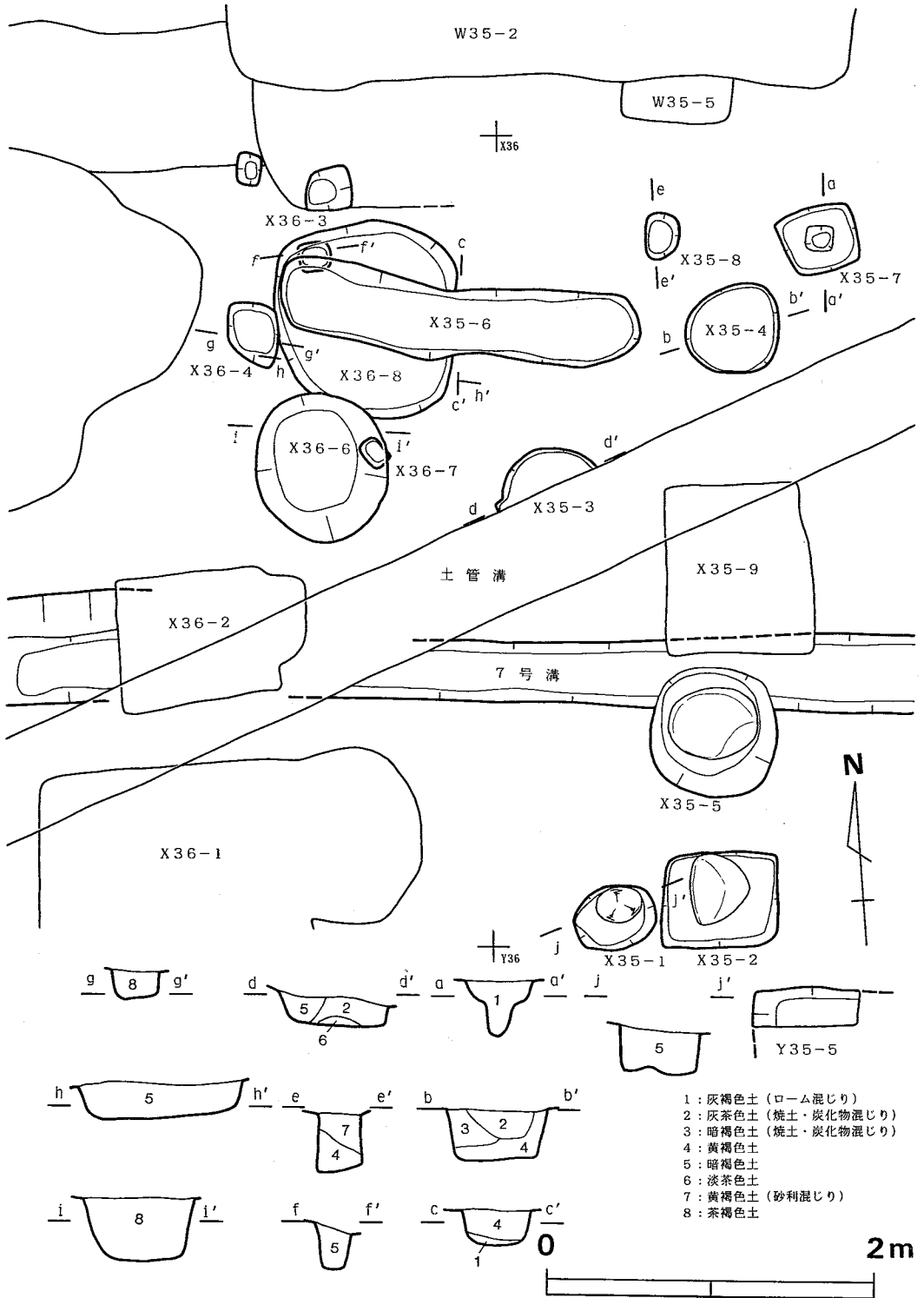
**X35-1** X35区の南西隅近く、1号礎石列の西にある0.5m、深さ30cmの小土坑である(III-214図)。1号礎石列に伴うものかとも思うが埋土は暗褐色土で異なる。遺物はない。(宮田安志)

#### **X35-2・5** 1号礎石列に記述

**X35-3** X35区の西端にある径70cmの土坑である(III-214図)。上部は削平され、南は土管によって破壊されている。東西に小さな張り出し部をもつ。埋土は灰～淡茶色土であり、枠のなかに入ったようにもみえる堆積をしている。遺物はなく厠の下穴であった可能性がある。(宮田安志)

**X35-4・6・7・8, X36-3・4・6・7・8** X35・36区にある大小様々、形も種々の土坑である(III-214図)。ローム面で確認されたものである。上部は削られている。深さは15～40cm、埋土は灰～暗褐色土のものが多い。X35-4のほかは遺物は見られず、時期・性格ともに不明である。(宮田安志)

第三章 江戸時代の遺構

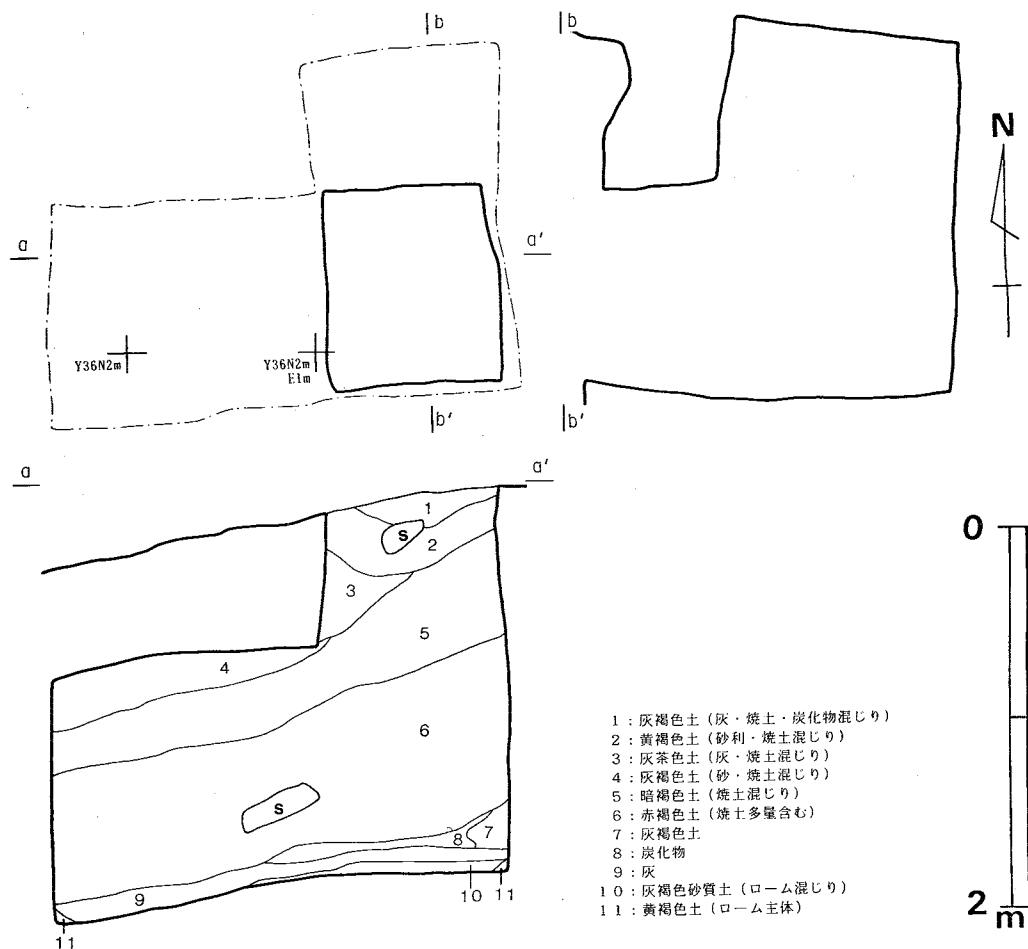


III-214図 X35-1~8、X36-3・4・6~8、Y35-5 実測図 (土層図の水準:14.8m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

X35-9 X36-2, X37-2とともに7号溝を切って作られている地下式土坑である。一辺1mほどの長方形の入口をもちその下から北と西に広がるL字形の平面形をもっている。東西の最大長2.4m, 南北の最大長1.9mである(III-215図)。底は西にやや低くなるが, 南北は平坦である。天井は底から1.2mほどである。入口近くの東壁に確認面から15cmほど下に径15cm, 奥行10cmの小孔がある。埋土は焼土を含むものが主体であり, ほとんど焼土からなる厚い堆積もある。焼土のなかには人頭大の石もかなり入っている。遺物は若干が焼土の下層から出土している。7号溝を切っているX36-2にも厚い焼土の堆積が見られ, 堆積の状況も片流れを呈している。X37-2にも焼土を含む堆積がある。底の形は異なるが, ほぼ同じ規模・形状の入口がある。少なくともX36-2は同時に廃棄された可能性がある。X37-2もその可能性が高い。東西に並ぶ地下式土坑群であろう。(宮田安志)

X36-1 土管の埋設による破壊を上部は大きく受けている。一辺1.7mのほぼ正方形の土坑である。東北隅に入口であったと思われる0.7m×1mの張り出し部がある(III-216図)。四周に大型の, 中間に小型の杭穴がある。壁に板を張るためのものであろう。入口部かと思われるところにも同様



III-215図 X35-9実測図 (土層図の水準:14.5m)

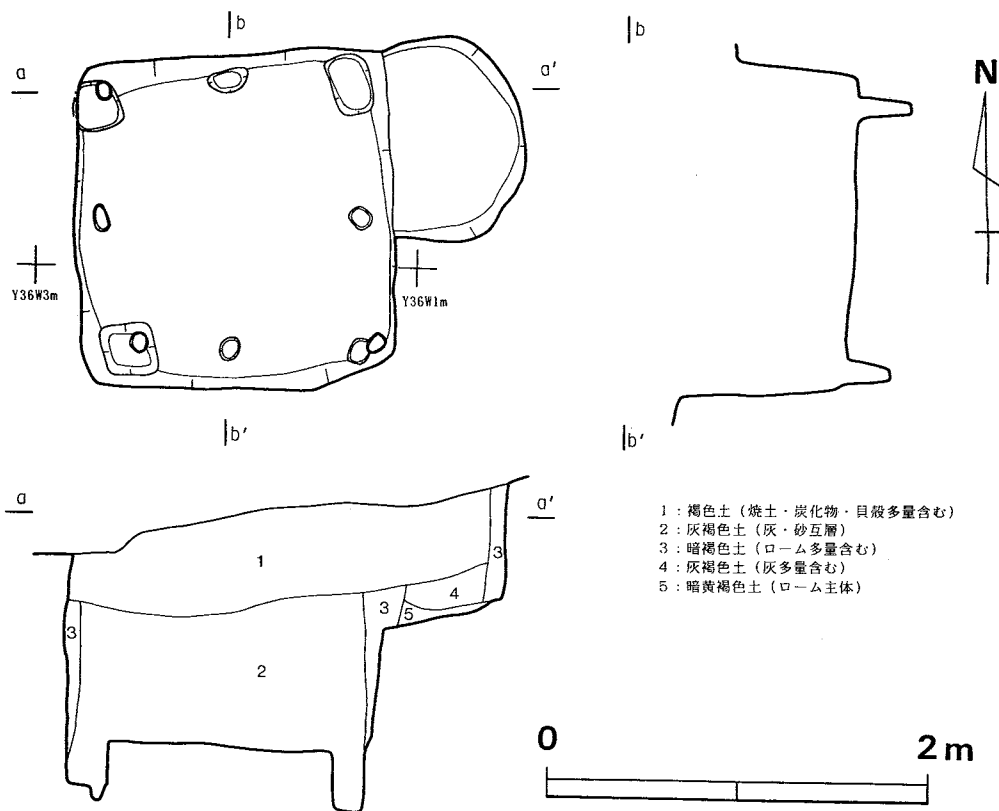


### 第三章 江戸時代の遺構

の垂直な堆積があるので、ここにも板張りがあった可能性がある。埋土は上部が焼土・炭化物・貝殻をかなり含む褐色土、下部は灰と砂からなっている。遺物は下部に見られ、陶器を中心にしまとまる個体が多い。地下式土坑であった可能性が高いが、天井はない。(宮田安志)

**X36-2** X・Y36区にあり、7号溝を切っている地下式土坑である(III-217図)。入口は東西1m、南北0.8m、底は不整な形をしているが、2.1m内外の方形である。底の南西の隅に入口がある。天井は底から0.9mほどで低い。埋土は X35-9と同様焼土を含むものが主になっている。既に触れているように、X35-9と X37-2と同時に廃棄された可能性が強い。遺物は陶磁器などが若干量出土している。X35-9、X37-2とともに東西に列を作る地下式土坑群であったものであろう。(藤本 強)

**X36-5・9、X37-11** 5は X36・37区に位置する東西に長い不整形を呈する土坑である。東西6.2m、南北2.3m、深さ1mであり、壁底ともに凹凸が激しい(III-218・219図)。X37-3を切り、X37-5に切られている。上部に2号礎石列が作られている。5は AE37-8を思わせるもので、形はきわめて不整であり、何かを構築するという目的のものではなかったかと思われる。土取りというような類の痕跡と考えるのが妥当であろう。埋土は下部に貝層と呼んでもよいような貝殻の多い部分があり、上部は灰・貝殻・焼土・炭化物などを含む層がある。遺物の量は多いので、最終的にはゴミ穴として利用されたのであろうが、当初の目的は不明である。周辺には X36-9、X37-11を含む多数の小土



III-216図 X36-1実測図 (土層図の水準:14.8m)

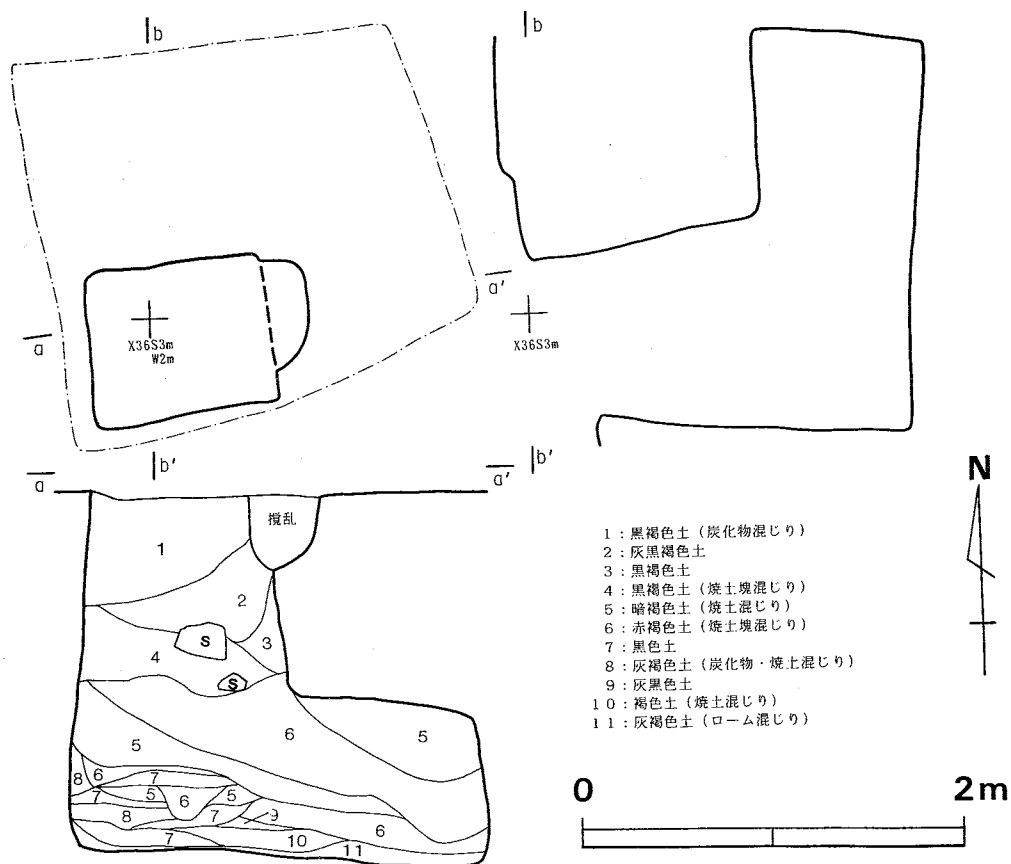
### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

坑がある。長方形のものが多く、規則的な配列はもっていない。また、東北の隅には5が切っている溝状の遺構があるが、きわめて浅いもので、すぐに東をW35-2とその南にある浅い土坑によって切れ、わからなくなる。(宮田安志)

**X37-1・9** X37区南端にある0.4m前後の小土坑である(III-227図)。Y37区にある小土坑と一連のものであろう。埋土は茶褐色土を主にしている。9には底のやや上に平石があるが、礎石の根石とも考え難い小さなものであり、埋めている土も石を固めている礎石などに通常あるものとは異なっている。規則的な配列は全くない。遺物は1に少量ある。(宮田安志)

**X37-2** X37区にあり、7号溝を切っている地下式土坑である。X36-5とは平面的に重なりあっているが、直接の切りあいはない。入口は東西0.9m、南北0.7mの長方形で、底は南北1.8m、北壁1.9m、南壁1.3mの台形である(III-220図)。入口は東南の隅にある。天井は底から1.2mほどである。埋土は焼土や灰を混じえる黄・灰・褐色土で、遺物は陶磁器などが若干出土している。前にも述べているように、X35-9、X36-2と同時に廃棄された可能性が高い。これらと東西に列をなす地下式土坑であったのであろう。(藤本 強)

**X37-3** 37ラインの西3mほどのところを真南北に走る溝である(III-221図)。7号溝を切り、



III-217図 X36-2実測図(土層図の水準:14.8m)

### 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

X36-5, X37-4・5・8, V37-7に切られている。幅0.9m, 深さは深いところで0.9mある。底は平坦であるが、ところどころに浅い落ち込みがある。埋土は暗黄褐色土を主にするものである。遺物はない。南にある Y37-2・Z37-4は真南北の一直線上にあり一連の遺構かと思われる。さらに共同溝の建設地にある V37-1とも一直線上にあり、ここで東に曲がって V33-3・V31-7に連なっていた可能性がある。もしこの推定があたっているとすると大聖寺藩の上屋敷の裏門の東にある建物群を取り囲む塀のための溝と考えることができる。これらについては第五節で触れている。(小川 望)

**X37-4・5** X37-3の上にある土坑である(Ⅲ-218・219図)。どちらも不整な方形であり、深さは4が60, 5が30cmである。埋土は暗黄～暗灰褐色土を主にしている。18世紀後半以降の遺物が若干量出土している。性格は不明である。(小川 望)

**X37-6** X37区にあり、西側を土管により破壊されている地下式土坑である(Ⅲ-220図)。入口は一辺1.2mほどであったものと思われる。底は北にむかって広がる。破壊がひどく全形は窺いえない。埋土は焼土を混じえることのある灰褐色土が主である。入口近くに切石が埋土中に置かれている。18世紀後半を中心にする陶磁器などが少々出土している。X35-4・X36-2・X37-2の7号溝を切り、埋土に焼土をもつ地下式土坑と一連のものである可能性が高い。(小川 望)

**X37-7・8・10** X37区にある小土坑である(Ⅲ-218図)。7は7号溝の, 8はX37-3の上にある。深さは7・8が30cm, 10が10cm弱である。埋土は暗～黄褐色土である。性格は不明。(小川 望)

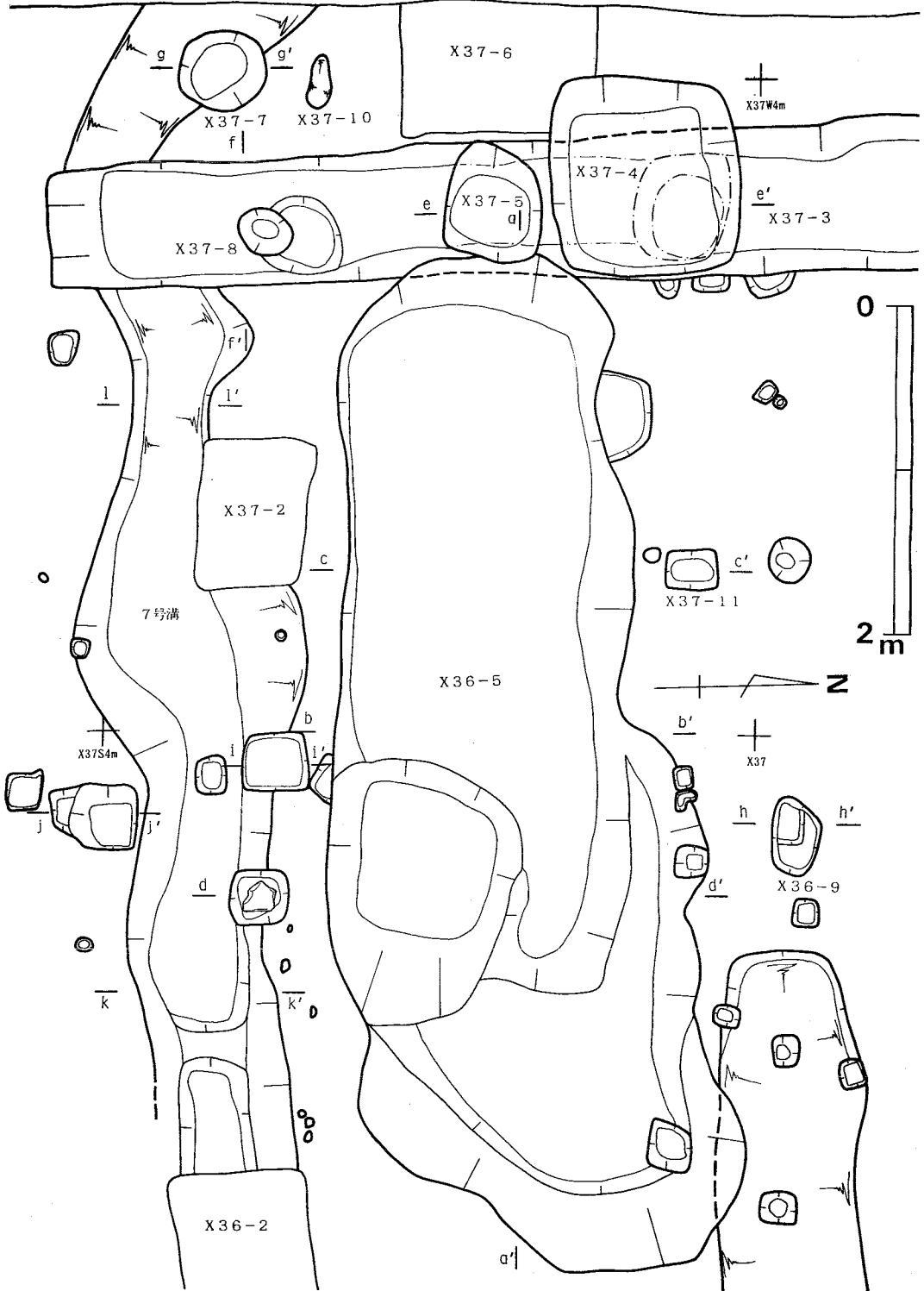
**7号溝** Yラインの北2m弱のところをほぼ東西に走る溝である(Ⅲ-221図)。東端は破壊されていて不明であるが、少なくとも調査区一杯はあったものと考えられる。さらに東に延びていた可能性が強い。西の端も土管の溝に入りわからなくなる。調査区の西端はかなり上まで破壊されないうちに残っていた部分に延長はいき、そこには確認されていないので、そこまでのどこかで曲がるなり、終るなりしていたのであろう。この部分は門の北側の部分であった可能性があるので地境の溝は延びていなかった可能性が強い。36ラインまでは幅0.5m前後で、底の標高も14.4mほどでほぼ一定していて、直線性も真東西で保たれているが、X36-2に切られるあたりから若干の振れが生じ始め、幅もやや太くなるとともに一定でなくなる。埋土は砂利を混じえる黄褐色土が主である。勾配が一定しないこと、埋土に水のあったことを示すと考えられる鉄分の浸透が全く見られないことから水の流れる溝であったか疑問がある。地境の塀のようなものの構築に用いられたと考えると杭穴がない。目的ははっきりはしないが、何らかの地境を示すものであろう。この溝は付近の遺構のなかではもっとも古いものである。1号礎石列は溝の上に作られているし、東西に並んでいたであろう地下式土坑 X35-4・X36-2・X37-2, 南北の地境の溝ではないかと思われる X37-3, X36-2と X37-2の間にある小土坑はいずれも7号溝を切って作られている。大聖寺藩の屋敷のなかに真南北・真東西の方向が採用された最初の頃のものかと思われる。(藤本 強)

**X38-1** X38区にある小土坑である(Ⅲ-209図)。方形であると思われるが、不整な形をしている。18世紀代の陶磁器などの遺物が少量ある。時期・性格は不明。(佐々木彰)

**Y33-1・2・3** 調査区の東の端にある遺構である。1は東が完全に破壊されており、天井のある部分だけが発見された(Ⅲ-222・223図)。地下式土坑であるが、入口は全くなくなっており、どのような形のものであったか不明である。残っていたのは東西1.5m, 南北1.4mの部分であり、南北方向

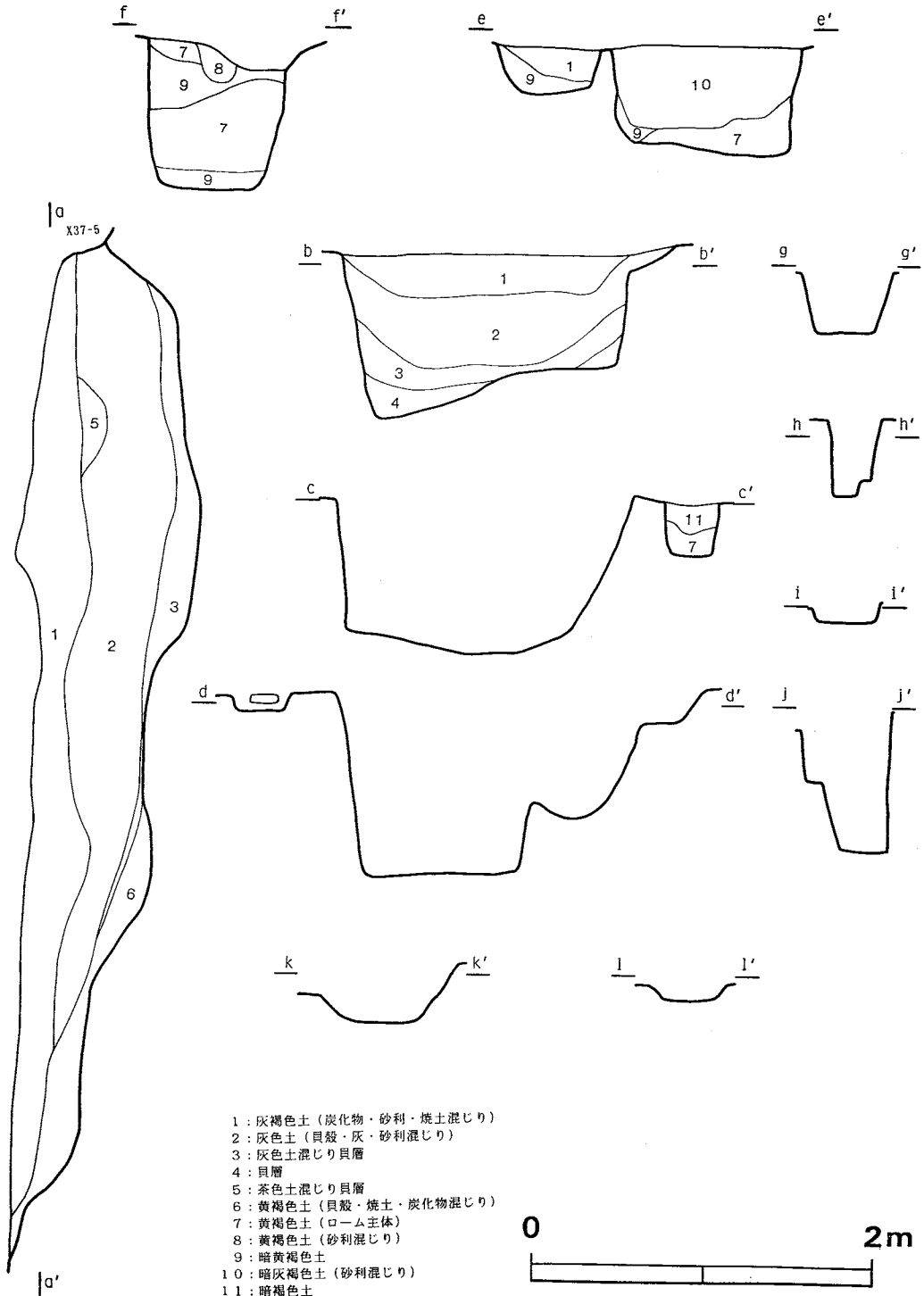
第三節 設備管理棟建設地点の遺構

土管溝

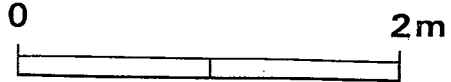


III-218図 X36-5・9、X37-3~5・7・8・10・11 実測図

第三章 江戸時代の遺構

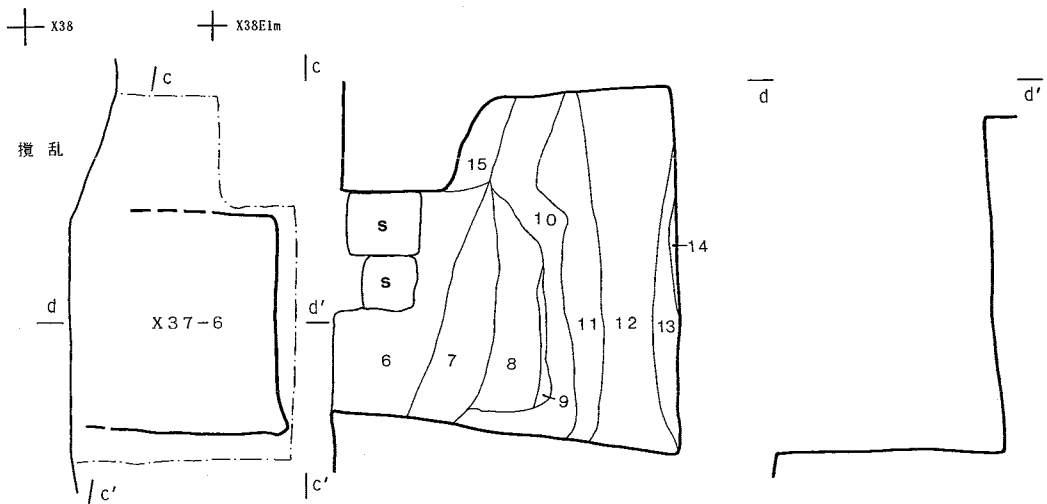
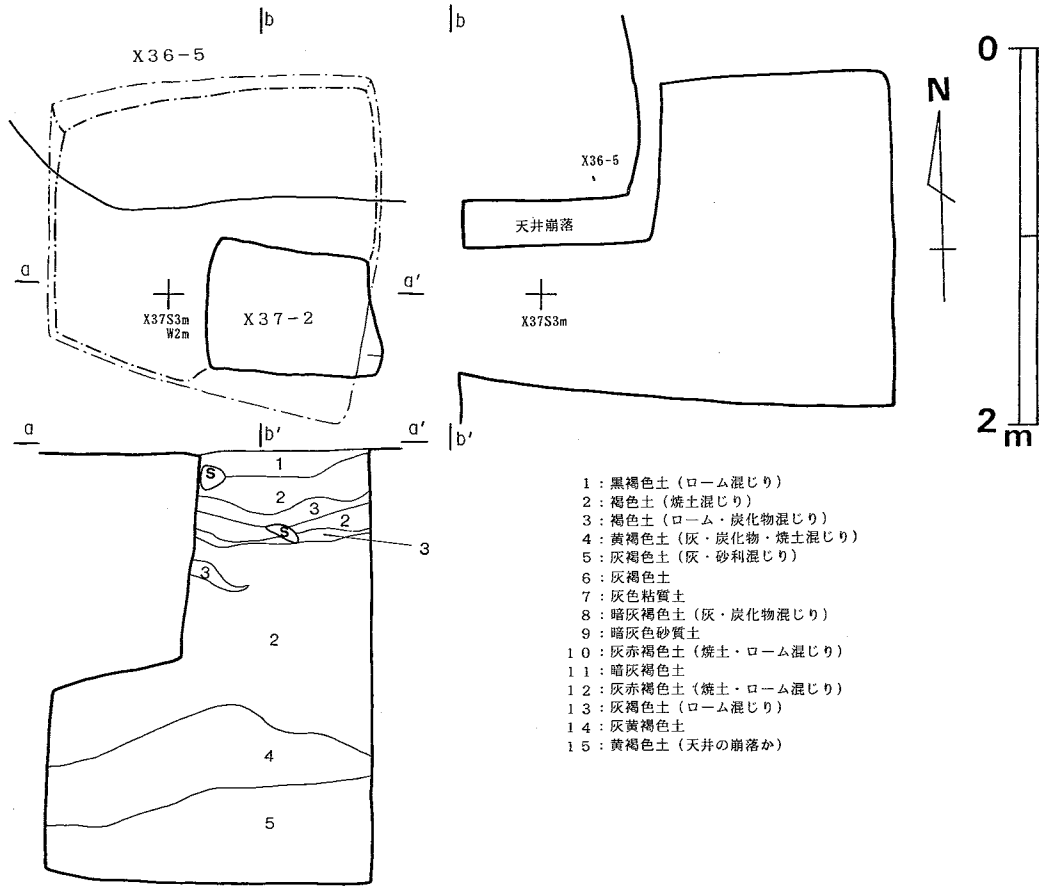


- 1 : 灰褐色土 (炭化物・砂利・焼土混じり)
- 2 : 灰色土 (貝殻・灰・砂利混じり)
- 3 : 灰色土混じり貝層
- 4 : 貝層
- 5 : 茶色土混じり貝層
- 6 : 黄褐色土 (貝殻・焼土・炭化物混じり)
- 7 : 黄褐色土 (ローム主体)
- 8 : 黄褐色土 (砂利混じり)
- 9 : 暗黄褐色土
- 10 : 暗灰褐色土 (砂利混じり)
- 11 : 暗褐色土



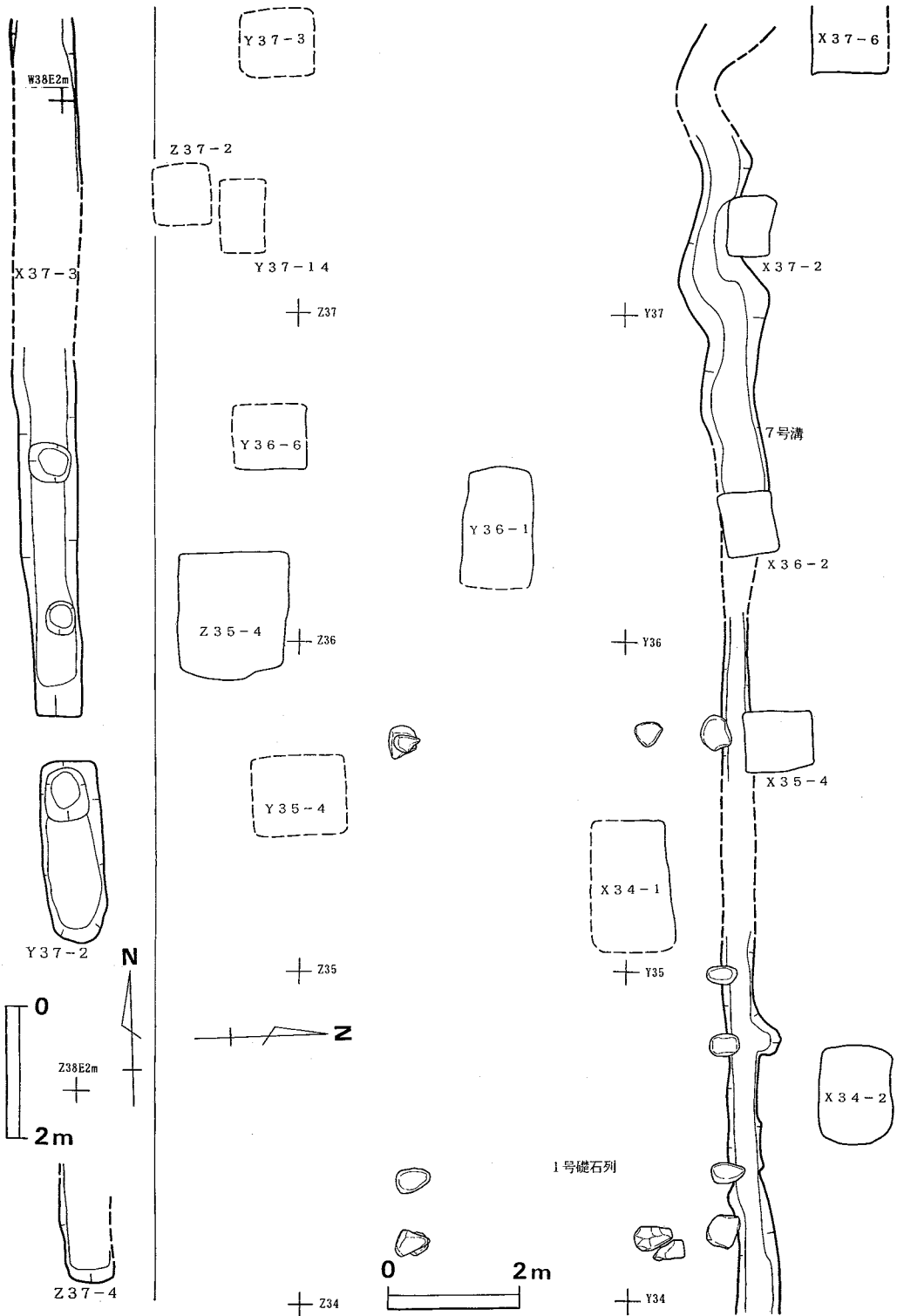
III-219図 X36-5・9、X37-3~5・7・8・10・11 立面図 (立面図の水準:14.8m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



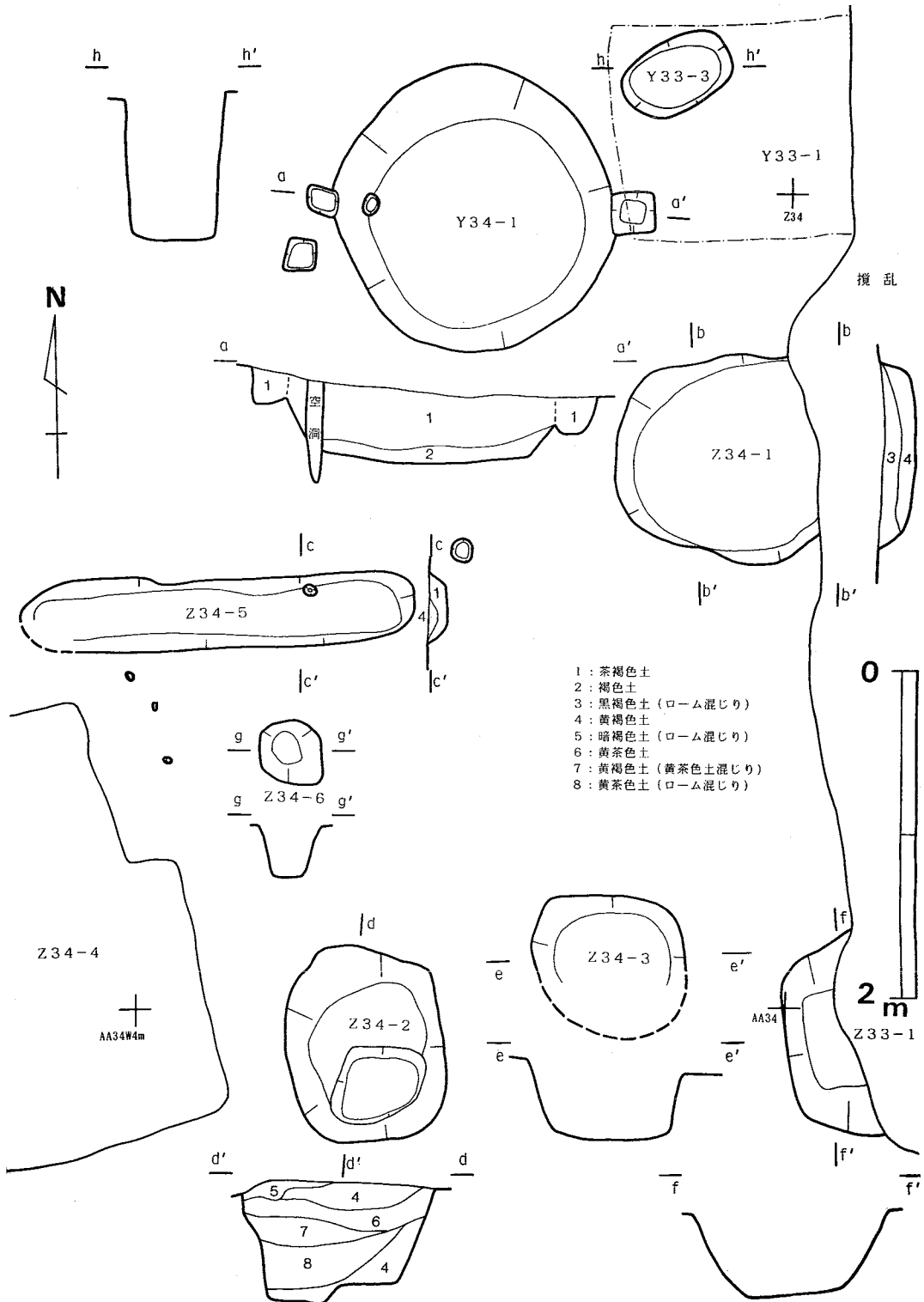
III-220図 X37-2・6実測図 (土層図の水準:14.8m)

第III章 江戸時代の遺構



III-221図 X37-3、Y37-2、Z37-4、7号溝実測図

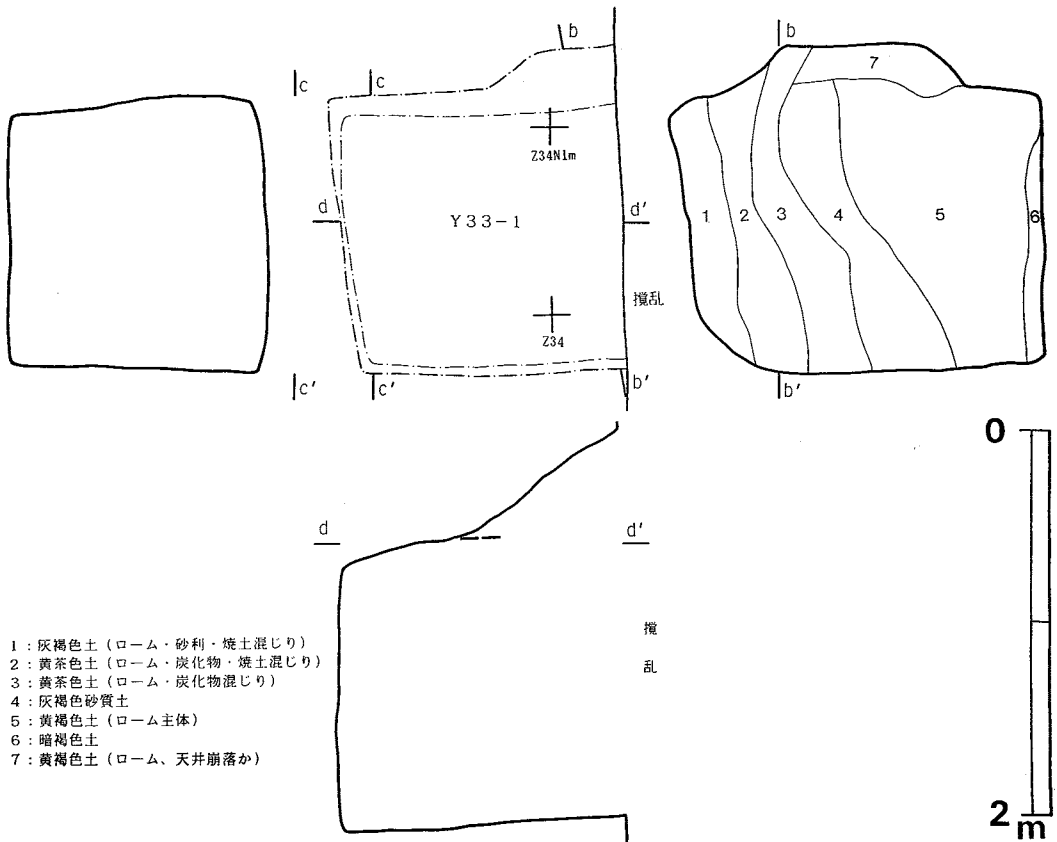
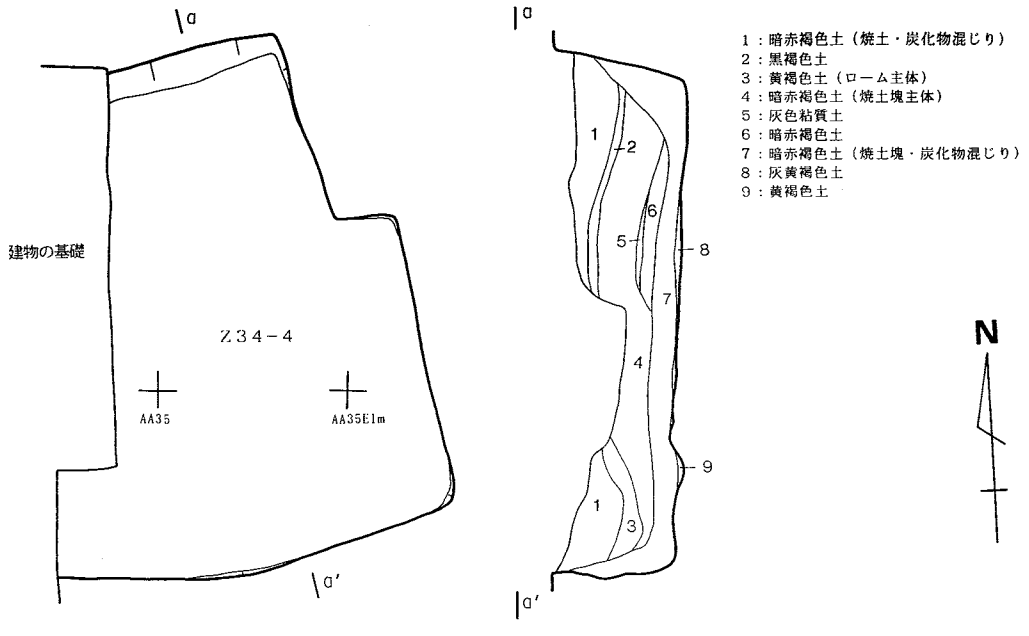
第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-222図 Y33-3, Y34-1, Z33-1, Z34-1~3-5-6 実測図 (土層図の水準:14.8m)

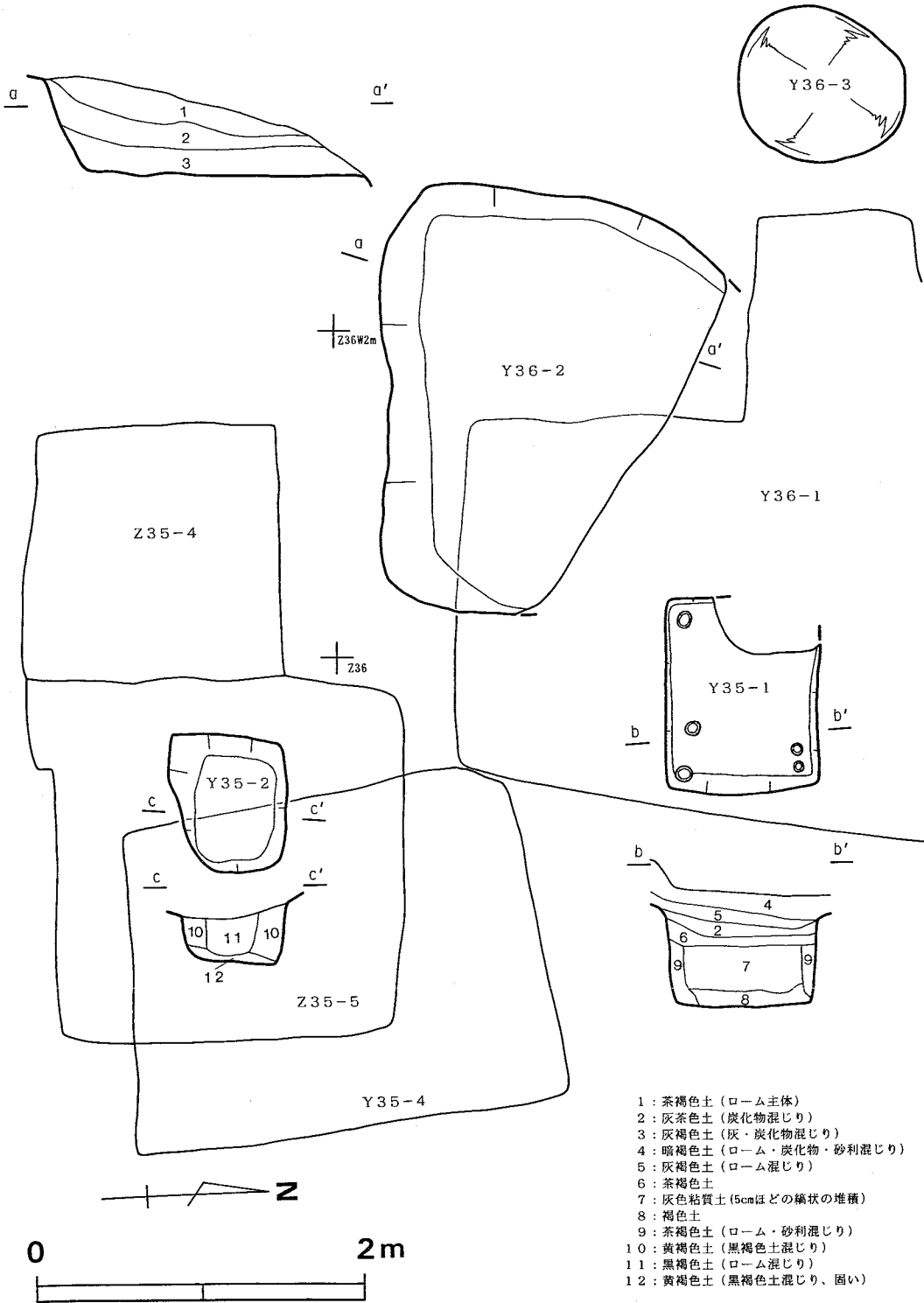


### 第三章 江戸時代の遺構



III-223図 Y33-1, Z34-4実測図 (土層図の水準:13.5m, a-a':14.0m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-224図 Y35-1・2、Y36-2・3実測図 (土層図の水準:14.6m)

### 第三章 江戸時代の遺構

はほぼこの大きさであろうが、東西方向の大きさは不明である。天井の高さは本来1.4mほどであったと考えられるが、崩落もあり確実ではない。調査は破壊された東部から行なったが、調査中天井が崩落した。埋土は南西方向に下がる堆積しており、天井もしくは壁の崩落と考えられるロームを主体にしたものである。陶磁器などの遺物は若干出土している。2は全部といっても言いすぎではないほどに破壊されている(III-212図)。深いところに辛うじて破壊を免れた痕跡が残っている。南北1.9mの長方形であったであろう底のみが地表下4m前後のところに見られた。地下式土坑の底であろう。3は1の上にある小土坑である(III-222図)。調査中に底が1の天井とともに崩落してしまい、底などは明らかではない。痕跡から底の深さを推定しているが、確実ではない。(宮田安志)

Y34-1 Y34区の南よりにあり半分がZ34区に入る径1.7m、深さ0.4mの円形の土坑である(III-222図)。東西に一つずつ一辺20cm前後の方形のおそらくこの土坑と一連のものかと思われる杭穴がある。杭穴を含め埋土は茶褐色土が主で、底近くには粘性のある褐色土が見られる。遺物は少なく瓦の小片のみである。厠の下穴かとも思われるがはっきりしない。なお、土坑のなかには明らかに土坑より後の時期の杭穴が、南西側に方形の杭穴がある。土坑との関連はない。(宮田安志)

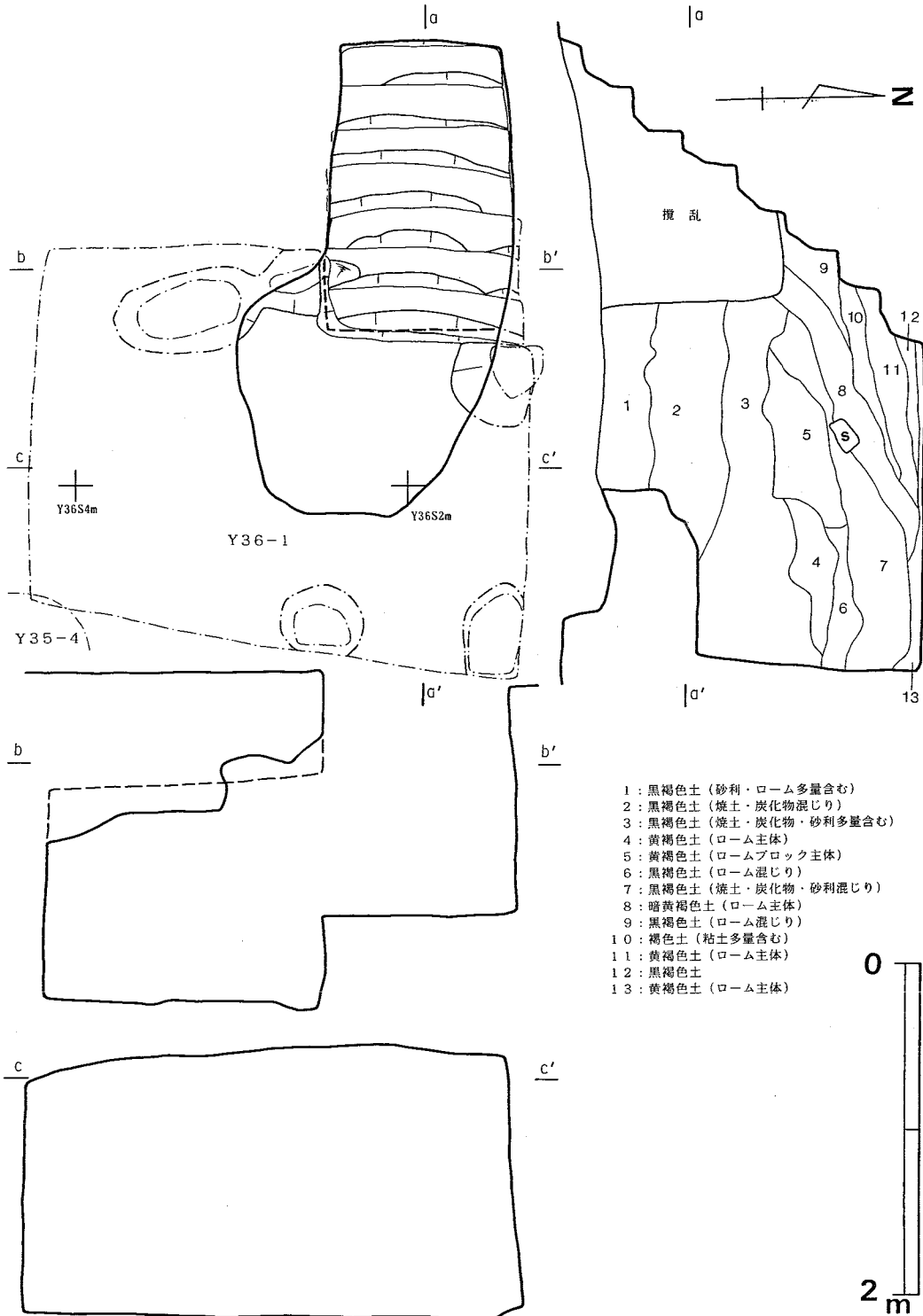
Y34-4・5 X34-1の上にある切りあい関係のある土坑である(III-210図)。4が新しい。1号礎石列も切っていよう。両者とも方形であるが、4は大きく深い。両者とも暗灰褐色土を主にする埋土である。18世紀中頃以降の遺物が出土しているが、4からは多量の遺物が得られている。5はゴミ穴を目的としたものであろうが、4は貯蔵などの目的で作られたものが後にゴミ穴に転用されたものと思われる。(小川 望)

#### Y34-6 1号礎石列に記述

Y35-1・2 1はY36-1の、2はZ35-5・Y35-4の上部にある。2はZ35-5より新しいが、1とY36-1との間の新旧関係は1がY36-1の天井の上にあるために明らかではない。1は上部をかなり削られ北西隅は完全になくなっている。1.2mと0.9mの長方形であり、深さは60cmある(III-224図)。底には径10cm深さ20cmほどの杭穴5が四周を中心にみられる。周囲に板などを張るときの押えの杭穴であろう。埋土は灰～暗褐色土が上部にあるが2・4・5・6層は廃棄後の堆積と考えられる。7～9層は使用時の堆積と考えられ、7層は5cmほどの縞状になった灰色粘質土である。その下に褐色土が底に接してあり四周にローム・砂利混じりの茶褐色土がある。板張りの裏ごめであろうか。遺物は廃棄後に堆積したと考えられる層のみから出土しているが量は少ない。埋土の状況から厠の下穴と考えるのが妥当であろう。2は0.8m×0.6mの長方形の土坑で、深さは40cmほどである(III-224図)。南東隅が破壊されている。埋土は二重構造になっており、なかに黒褐色土、外周と底に比較的固い黄褐色土がある。なかは30cmほどであるので、礎石のための穴であった可能性もあるが、周囲に関連する土坑は確認できていない。遺物はきわめて少ない。(宮田安志)

Y35-4 Y35・Z35区にある地下式土坑であるが、上部をZ35-5と近代以降の建築の基礎によって大きく破壊され上部の構造は痕跡的に確認できただけである。入口はその一点が確認できているだけでおそらく方形のものであったことを推測するのみである。その位置から考えると1m前後の大きさであったと考えるのが妥当であろう。Y36-1とも隅同士で切りあい関係があり、Y36-1が新しい。2.6mと2mの長方形の底であり、天井の高さは、1.7mもしくは1m強であったものと推測し

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-225図 Y36-1実測図 (土層図の水準:13.5m)

### 第Ⅲ章 江戸時代の遺構

ている(Ⅲ-228図)。天井は崩落が激しく、崩落しているロームをどのように考えるかで差がでる。1m強が可能性が高いのではないかと考えている。埋土は焼土・炭化物・砂利を含む黒褐色土が下部に、ローム主体の黄褐色土が上部にある。遺物は下部に多く、瓦の小片が主であり、陶磁器・焼塩壺なども出土している。この地点で数多く発見されている地下式土坑の標準的なものである。

(宮田安志)

Y35-5 大部分を破壊されて旧状を留めない(Ⅲ-214図)。北西角のごく一部が確認できただけである。深さは底の標高が14.2mであるので、かなり深く地下式土坑であった可能性もあるが、明らかではない。ロームブロック混じりの暗褐色土を埋土にしている。遺物はない。(宮田安志)

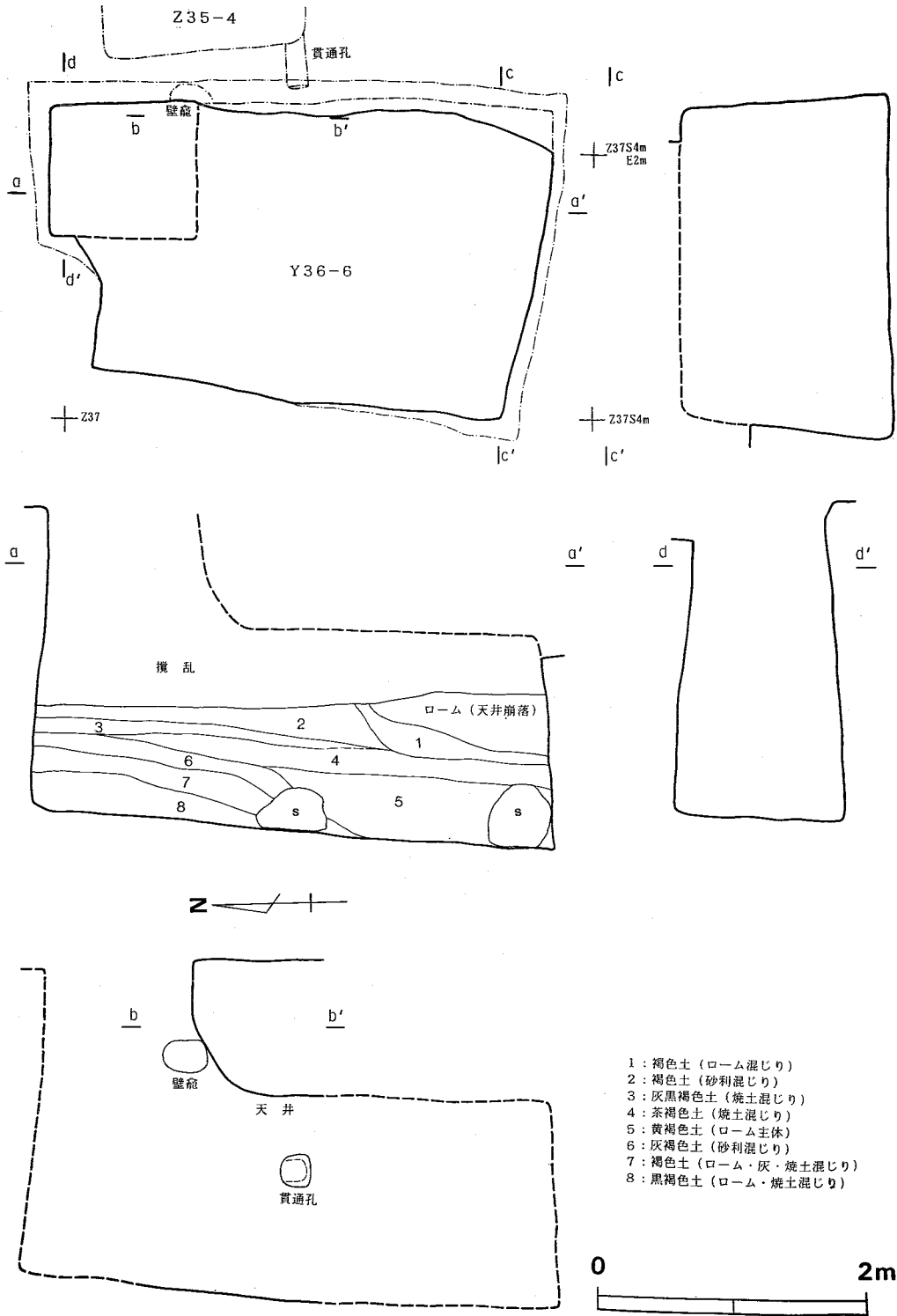
Y36-1 Y35・36区にある地下式土坑である(Ⅲ-225図)。上部は大きく壊れている。上にはY35-1とY36-2があるが、天井の上にあるので、新旧関係は不明である。階段と地下室からなる。階段は幅1m内外で七段が確認されている。踏段の幅は25cm内外、高さは30cm前後である。踏段の角はかなり壊れている。階段部の土を留めるためのものであろう杭穴はここでは発見されていない。階段の角が他のものに比べより壊れているのは、こうしたことと関係があるのであろう。入口は東西1.8m、南北1m内外であったものと推定されるが明らかではない。地下室は東西2.6m、南北3mの不整な方形である。天井はかなり崩落しているが、底から1.6mほどであったものと推測される。南東の隅でY35-4と切りあっている。地下室の部屋同士という稀な切りあいである。Y36-1が新しい。底にはかなり凹凸がある。埋土はロームの混じることの多い黒～黄褐色土が主で、下は入口から流れ込んだような状況であり、上部は水平な堆積をしている。18世紀前半の陶磁器などの若干の遺物が出土している。X34-1と類似した遺構である。本地点の大聖寺藩上屋敷の敷地内には三例の階段つきの地下式土坑があるが、いずれも類似した規模であり、また入口を西に向けている。W35-8には遺物はないが、X34-1とここには18世紀前半までの遺物がある。類似の時期のものであろう。中央診療棟地点のものに比べると、規模と作りに格段の差が見られる。本地点のものは平面的な大きさはほぼ類似するが、深さにおいてはかなり浅く、特に作りでは大きな差がある。地下室の作りも粗雑であり、平面形も不整である。中央診療棟地点のものは上屋敷の中心地のものであり、本地点のものは中心を外れたところのものだからであろう。(佐々木彰)

Y36-2・3 Y36区にある鍋底状の土坑である。2は不整形であり、長軸は2.6m、深さ60cmで、北半は破壊されている(Ⅲ-224図)。炭化物混じりの灰褐色土を埋土としている。遺物は陶器を主にしてかなりの数ある。3は径1mのきわめて浅い土坑で、黒褐色土を埋土にしている。性格は両者とも不明である。(宮田安志)

Y36-4・5 Y36区北端に近い位置にある小土坑である(Ⅲ-227図)。ロームを主体にする黄褐色土が埋土になっている。遺物は5に少量ある。時期・性格ともに不明である。(宮田安志)

Y36-6 Y36区の南端に一部が掛かり、大部分はZ36区にある地下式土坑である。37ラインには、南北に並ぶ好仁会食堂の基礎があり、これによって西側は大きく壊されている。また上部は東北端を除きほとんど壊されていた。天井の残っていたのは東側のごくわずかの部分である。南北4m弱、東西2.6mの台形の平面型をもち、西北部が若干くびれている(Ⅲ-226図)。開口部は1.0m×1.1mの長方形であったものと考えられる。開口部は東北部にあり、この部分だけ飛び出しているよ

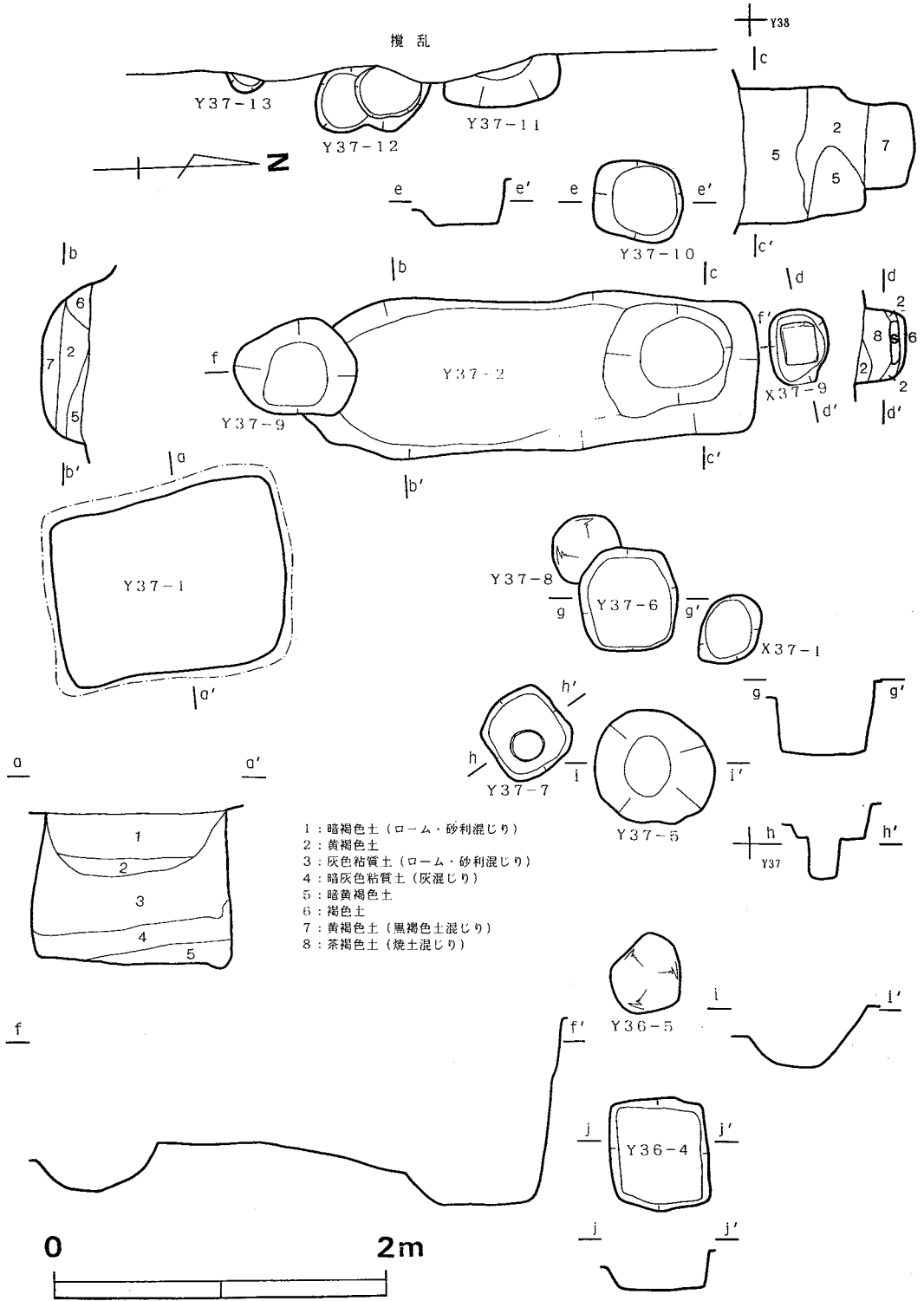
第三節 設備管理棟建設地点の遺構



- 1: 褐色土 (ローム混じり)
- 2: 褐色土 (砂利混じり)
- 3: 灰黒褐色土 (焼土混じり)
- 4: 茶褐色土 (焼土混じり)
- 5: 黄褐色土 (ローム主体)
- 6: 灰褐色土 (砂利混じり)
- 7: 褐色土 (ローム・灰・焼土混じり)
- 8: 黒褐色土 (ローム・焼土混じり)

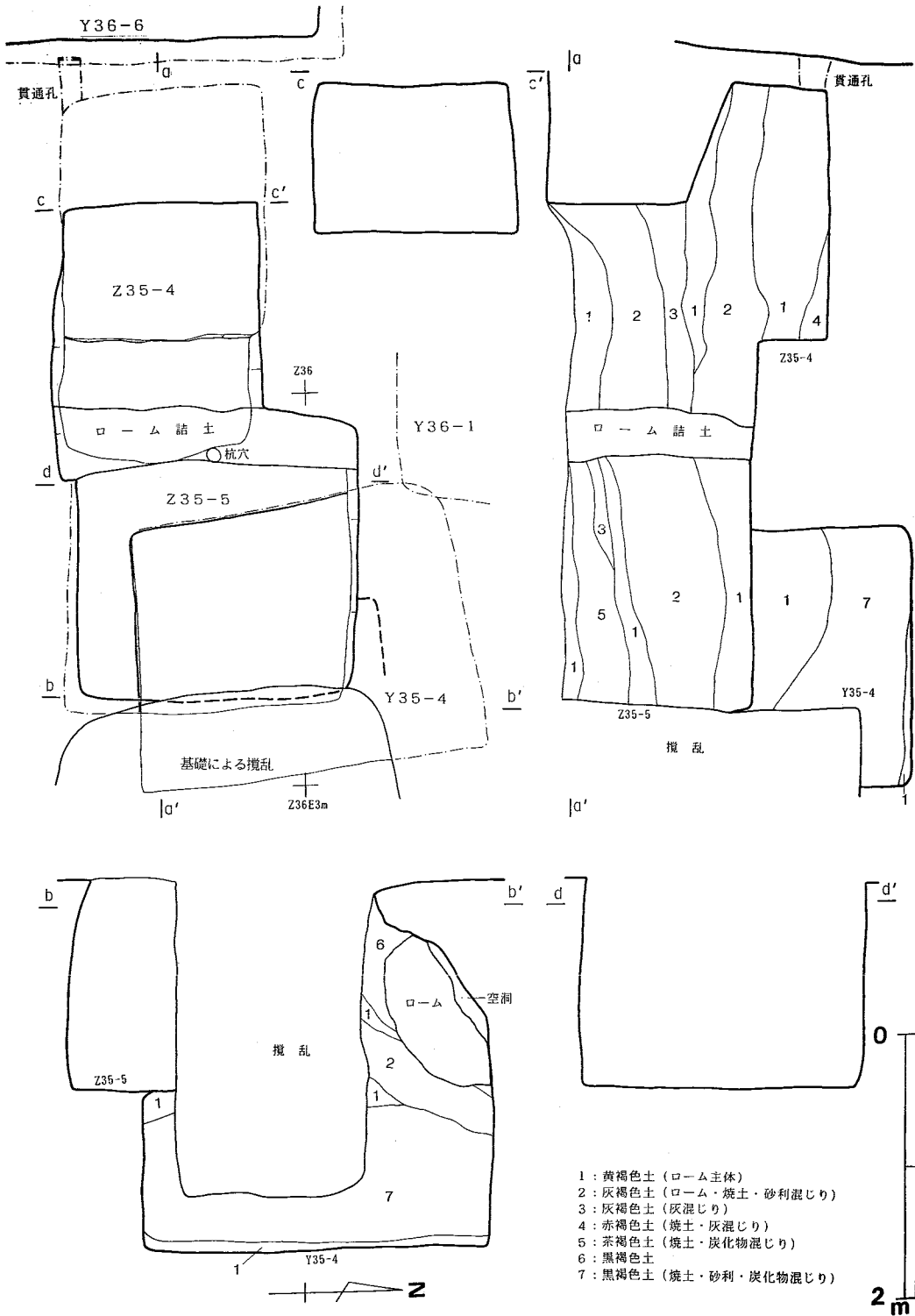
III-226図 Y36-6実測図 (土層図の水準:14.0m)

第三章 江戸時代の遺構



III-227図 X37-1・9、Y36-4・5、Y37-1・2・5~13実測図 (土層図の水準:14.5m, a-a'・b-b'・h-h':14.0m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-228図 Y35-4、Z35-4・5実測図 (土層図の水準:14.8m, c-c':14.0m)



### 第三章 江戸時代の遺構

うな印象を受ける。天井の高さは残っているところから推測すると1.6mほどであったようで、かなりの高さをもっている。底は南に低く北に高い。その差は0.3mほどである。入口の東南隅近く、幅0.35m、高さ0.25m、奥行0.15mほどの壁龕がある。ここに詰まっていたのはロームを主体にする黄褐色土である。形もよく整えられておらず、掘りっぱなしという印象である。煤などの付着物はない。この地下式土坑でもっとも興味深いのは、東隣にある Z35-4地下式土坑との間に一辺20cmほどの略方形の貫通孔があることである。これも掘りっぱなしであり、両者を隔てている0.3mほどの壁を掘り抜いている。孔は Y36-6側で大きく、Z35-4側で小さい。Z35-4では、底の南西端に孔が開いている。これらから Y36-6から孔は開けられたと考えるのが妥当であろう。この貫通孔がいかなる目的で開けられたのは明らかにし得ないが、少なくとも Y36-6と Z35-4の地下式土坑の存在と両者の正確な位置関係を知っている人間の手によって開けられたことはたしかであろう。このことは両地下式土坑がある時間共存して利用されていたことも示していよう。

埋土はかなり大型の石が入っており、天井崩落土も南側にかなりみられる。かなり埋まった後に天井が崩落している。埋土下部は入口側が高く、南側が低い堆積をしているが、上部は水平な堆積になっている。遺物はあまり多くない。Zライン周辺で東西に並ぶ地下式土坑群の一つとなろう。そのなかでは大型のものである。 (藤本 強)

Y37-1 Y37区にある方形の土坑である(III-227図)。1.5×1.2mの長方形であり、壁は内傾している。深さは1m、埋土は暗～黄褐色土である。18世紀前半の陶磁器などが若干出土している。性格は不明である。 (小川 望)

Y37-2 Y37区にある溝状の遺構である(III-221・227図)。Y37-9に切られている。幅1m、深さ1mで北端に落ち込みがある。埋土は黄褐色土と暗黄褐色土からなる。18世紀前半の陶磁器などが出土している。X37-3・Z37-4と同一直線上にあり、有機的な関連をもった遺構であろうと考えられる。そのもつ意味については X37-3の項を参照のこと。 (小川 望)

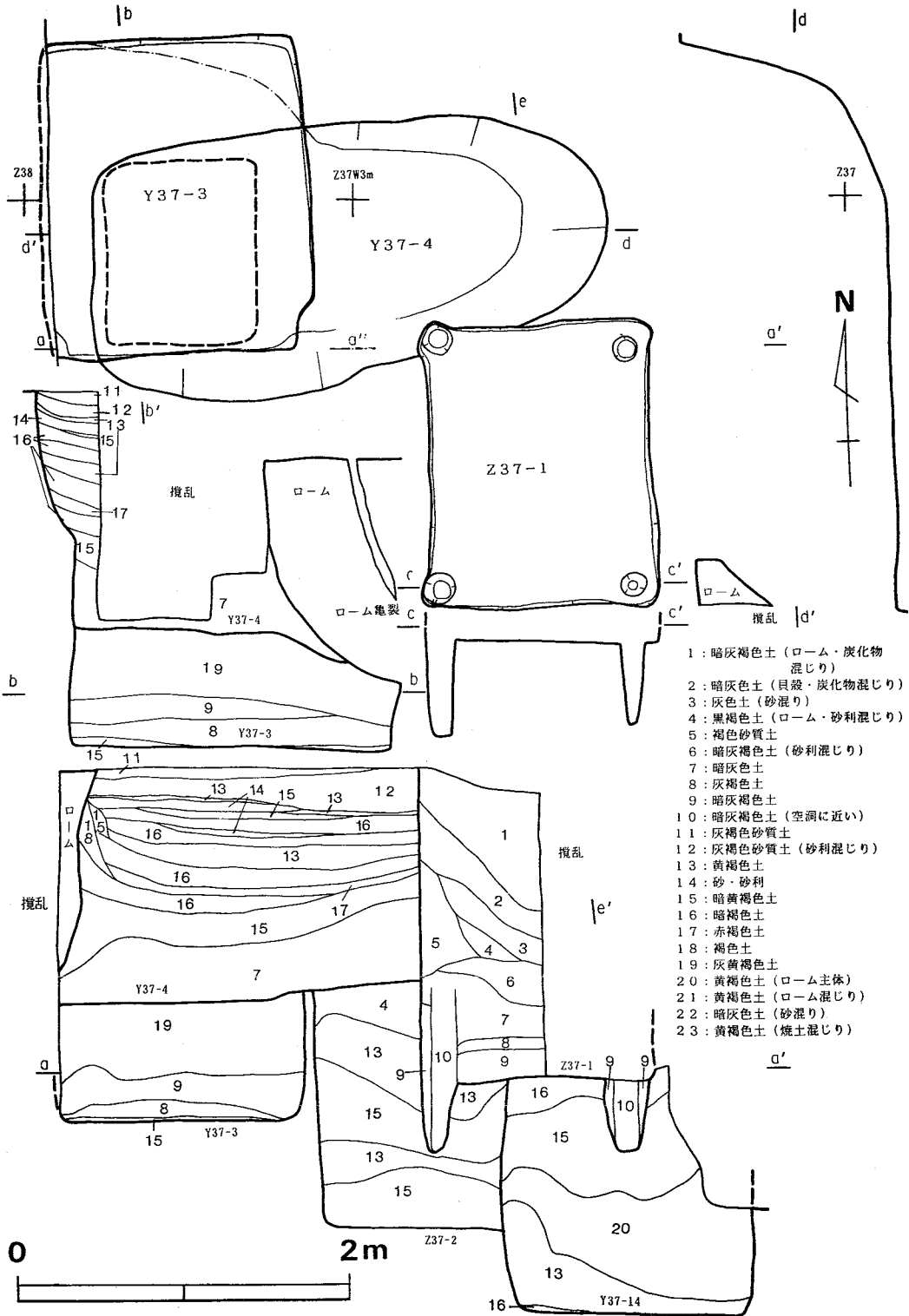
Y37-3・4・14, Z37-1・2・3・4 Y・Z37区にある複雑な切りあい関係のある土坑群である(III-229・230図)。西側は南北方向に走る土管の掘り方によって破壊されている。この破壊された部分を取り除く過程で確認されたが、そこから東にむかって調査を進めたが、次々に新しい遺構が出現し、調査は困難であった。III-229・230図 a-a'・b-b'・e-e'の位置で断面を見つ、平面的に調査を進めた結果下記のような形で新旧関係を把握することができた。

(旧) Z37-3 →→→ Z37-2 →→→ Y37-14 →→→ Y37-4 →→→ Z37-1 (新)  
Z37-4 ↗ Y37-3 ↗

Y37-3 は底で南北2m弱、東西1.7m弱の長方形で、はっきり確認できなかったが、底の南よりに南北1.1m、東西0.9mの入口をもっていた地下式土坑と推定される(III-229図)。天井は残っているところで、1m以下であるが、若干落ちていることも考えられるので明らかではない。埋土は灰褐色ないし灰黄褐色土を主にするもので水平に近い堆積をしている。遺物は底に近いところから18世紀代の陶磁器などが少量出土している。地下式土坑として作られ、埋め戻され、そのあとに Y37-4 がゴミ穴として作られたものと推測される。

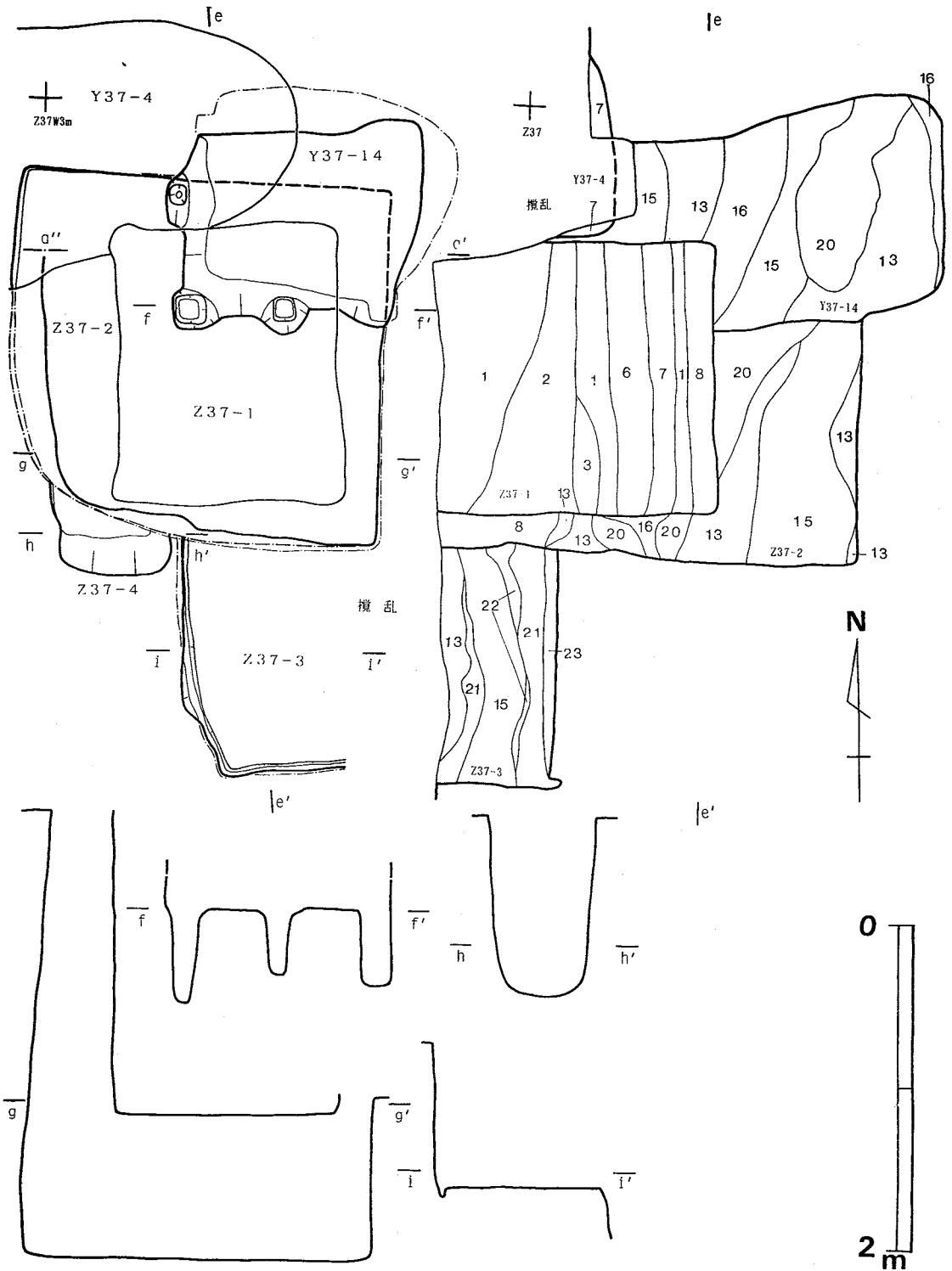
Y37-4 は Y37-3の上に作られた不整な土坑である(III-229図)。東西3.2m、南北1.6mの楕円形

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-229図 Y37-3・4, Z37-1実測図 (土層図の水準:13.0m, d-d':14.0m)

第三章 江戸時代の遺構



III-230図 Y37-2~4・14実測図 (土層図の水準:13.0m, f-f':12.0m, h-h':14.0m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

であり、その埋土は Y37-3の埋まりきらずにあった空洞部に流れ込んでいるようである。埋土は灰～暗褐色土を主体にしたものであり、18世紀後半から幕末にかけての陶磁器などがかなりの量出土している。これを切って Z37-1が作られる。

Y37-14は東西1.8m、南北1.5mの不整な長方形の土坑であり、地下式土坑であったのであろうが、上部が破壊されているため明らかではない(III-230図)。底もかなりの凹凸がある。南と西の壁は Z37-2の埋土のなかにあるので、その崩落を防止するために板を張っていたものと考えられる。そのための杭穴が南と西の底に見られる。杭穴は一辺20cm、深さは50cm内外であり、かなり大型のものである。埋土は暗～黄褐色土であるが、黄褐色土が主体である。遺物は陶器の破片 1のみである。

Z37-1 はここで見る土坑のなかでもっとも新しい土坑であり、完全に他の遺構の埋土のなかに作られている。南北1.7m、東西1.5m弱の長方形であり、垂直な壁をもっている(III-229図)。四周の底および壁には径20cmの杭もしくは柱があったことはその痕跡から確実である。これらは木質こそ残っていないがほぼ空洞であり、わずかに暗灰褐色土があったのみである。埋土のなかに作られ、弱い壁を支えるために板を張ったのであろう。その板を押える杭もしくは柱であろう。底の下40～50cmに達している。埋土は暗灰褐色土などである。遺物として、18世紀末から幕末にかけての陶磁器などが比較的多量に出土している。地下式土坑同様の機能をもった土坑であろう。きわめて作りにくいところにこのような土坑を作るのは屋敷内の土地利用の慣習によるのであろうか。

Z37-2 はその上部のほとんどを周辺の遺構により壊されている。地下式土坑であったのであろうが、入口は不明である。底は一辺2.3mほどで、南西の隅は丸くなっている(III-230図)。壁は北と東は垂直、西と南は内傾している。埋土は暗～黄褐色土を主にしている。遺物はない。

Z37-3 はそのほとんどの部分を Z37-2などに切られ、また東側は大きく近代以降の基礎によって破壊され、わずかに残る土坑であると思われる(III-230図)。底には瓦が敷き詰められていた。底の壁際に浅く、狭い溝が巡っている。埋土は暗黄褐色土と黄褐色土である。18世紀代の陶磁器の小片が少量ある。性格は不明である。

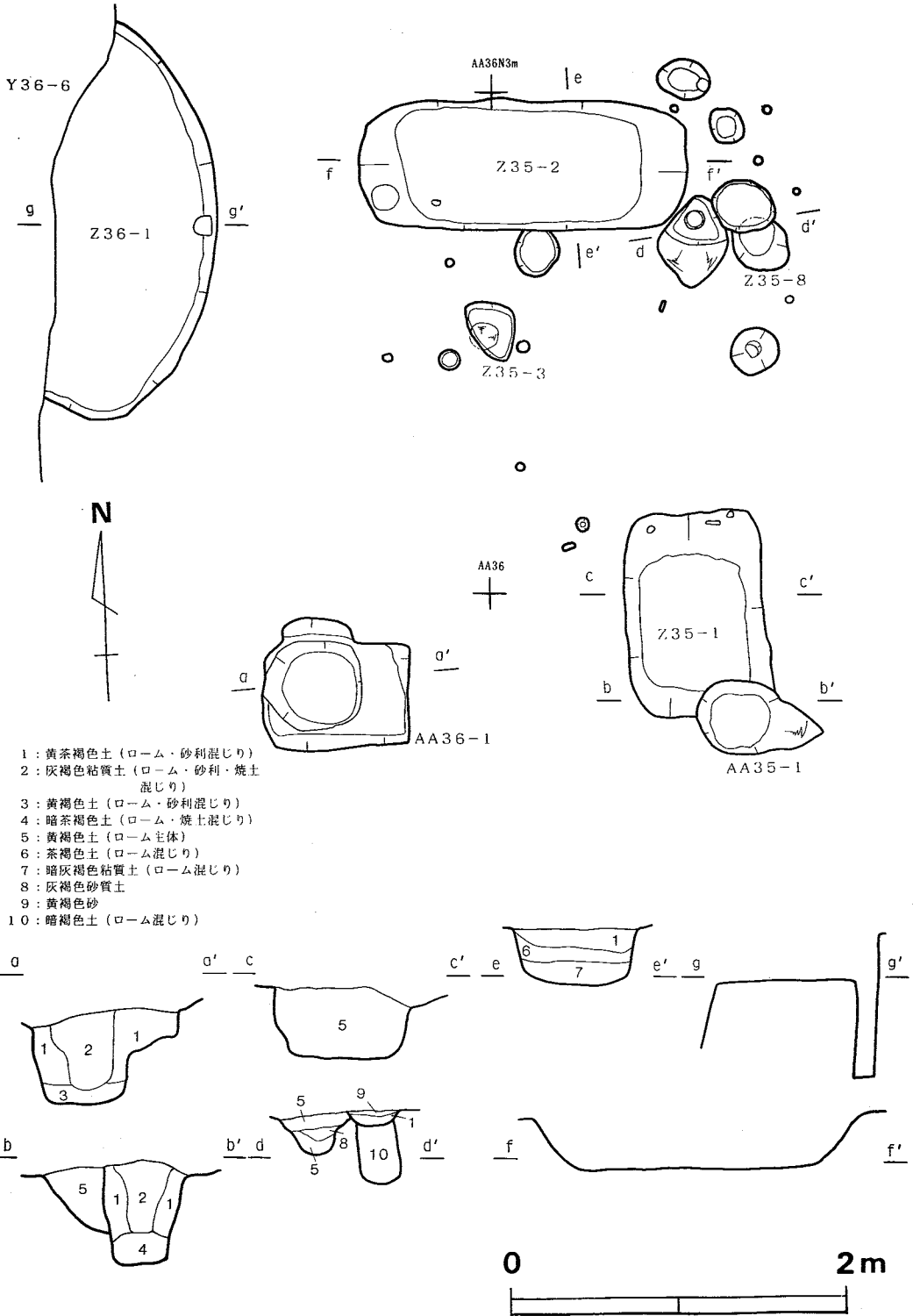
Z37-4 は Z37-2などに切られてわずかに残る溝である(III-230図)。深さは1mほど、埋土は黄褐色土である。遺物はない。X37-3、Y37-2さらに V37-1、V33-3、V31-7とともに大聖寺藩の上屋敷の裏門の東にある居住区を画する溝であった可能性が高い。(小川 望)

Y37-5・6・7・8・9・10・11・12・13 Y37区にある小土坑である(III-227図)。深さは20cm内外のものが多い。埋土は 6～10がローム主体の茶～暗褐色土、11～13は黒褐色土である。遺物はいずれもなく、時期・性格ともに不明である。(宮田安志)

Y39-1 調査区西端にある一辺1m強の方形の土坑であろうが(III-209図)、西側は調査区の外にあるので不明。暗褐色土を埋土にしている。時期・性格ともに不明である。(宮田安志)

Z33-1, Z34-1・2・3・5・6 5は長軸を東西にもつ長楕円形の土坑であるが、他はいずれも不整な円形もしくは楕円形の土坑である(III-222図)。ローム混じりの黒～暗褐色土もしくはロームを含む黄褐色土を主とする埋土をもっており、植栽に関係したものであった可能性が強い。この付近は遺構がかなりまばらになっているところでもあり、屋敷の南端にもあたっている。居住区というよりは庭的な利用が中心であったのではないかと思われる。(藤本 強)

第三章 江戸時代の遺構



III-231図 Z35-1~3・8、Z36-1、AA35-1、AA36-1 実測図 (土層図の水準:14.7m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

Z34-4 Z・AA34・35区にある西側を近代以降に破壊され、上部も完全に破壊された土坑である(III-223図)。かなり大型の土坑であるが、全形は不明である。深さは80cmが確認できているが、より深かったことは確実である。焼土を混じえることの多い暗赤褐色土が主の埋土であり、中央が盛り上がった堆積をしている。この堆積の状況から考えると地下式土坑であった可能性が高い。18世紀代の陶磁器を中心にした遺物が若干量ある。(小川 望)

Z35-1・2・3・8 Z35区を中心にする土坑である(III-231図)。1・2は隅丸の方形、3・8は不整な円形である。深さは1・2・8が40cm内外、3が20cmである。埋土は褐色土を中心にした土である。遺物はないかごく少量が出土するかである。なお付近にはかなりの数の大小の杭穴があるが、これらを含め、時期・性格は不明である。(松下理恵)

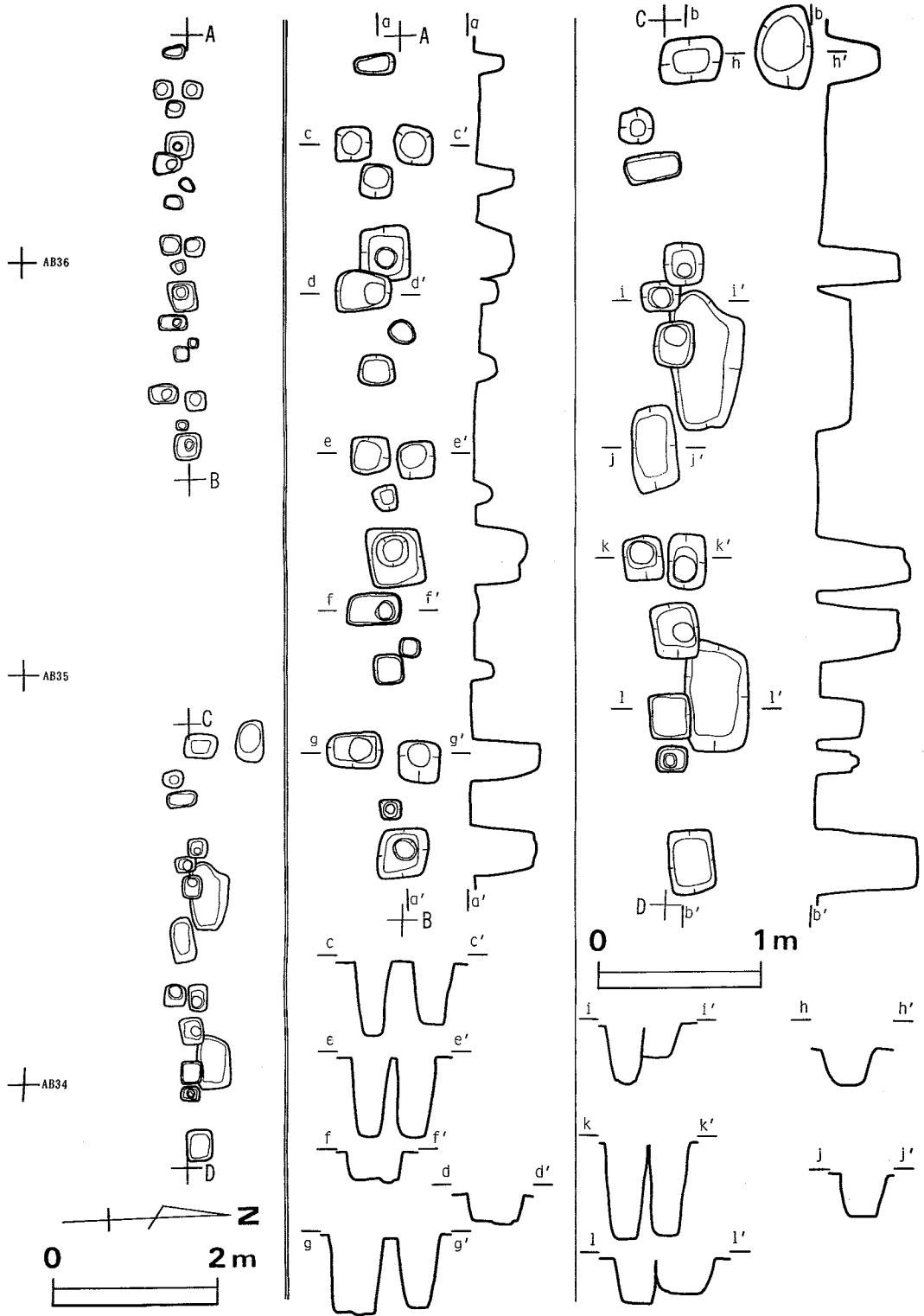
Z35-4・5 Z36ポイントのすぐ南にある切りあいのある土坑である。4が古く、5が新しい。4は2m×1.5mの入口をもっていただけと考えられる地下式土坑であり、底は二段になっている(III-228図)。全長3m、幅は1.5mで、西側の1.9mの底が50cmほど低くなって天井が一番高いところで1.1m、西壁のところでは0.7mしかなく低い。東側はZ35-5により壊されているが、ここにはZ35-5の壁になったものと考えられるロームの詰め土がある。底は4のほうがわずかに低く、4の底の線を確認することができた。底、壁とも丁寧に仕上げられ、工具の跡は見られない。西南の隅の底にY36-6の壁に抜ける径20cmの小孔がある。形からみて、Y36-6から開けたものと考えられるが、少なくとも地下における両者の関係を知っていた者がいたことを示すとともに二つの地下式土坑が同時に存在し、使用されていたことを示すものであろう。種々のことが考えられるが、興味深いことである。埋土はローム主体の黄褐色土と焼土・砂利・ローム混じりの灰褐色土が互層になっており、最下部に焼土混じりの赤褐色土がある。4からは若干の遺物が出土している。5は4およびY35-4を切って、作られている。上部にはY35-2がある。2.2mの正方形に近い土坑として掘られているが、西側にはZ35-4の埋土が崩れてこないようにロームの詰め土があり、使用されていたのは東西1.8mである(III-228図)。大型の土坑ではあるが、土の天井はない。ロームの詰め土の下に径10cm、深さ20cmの杭穴がある。位置はほぼ中央である。さらに埋土とロームの詰め土の間には、板の痕跡を確認している。この付近から釘もかなりの数出土しており、板壁が使用されていたものと推測できる。杭は板壁を留めるためのものであろう。東・南・北壁が板張りであったかどうかは不明である。埋土はローム主体の黄褐色土・焼土・炭化物などを含む灰～茶褐色土が互層になっており、5からは多量の遺物が埋土下部から出土している。(宮田安志)

Z36-1 Z36区にある西側を破壊された土坑である(III-231図)。深さは30cm弱、埋土は黄褐色土で東の壁際に深さ60cm近い杭穴がある。遺物はわずかで、時期・性格は不明。(松下理恵)

Z39-1 Z39区にある小さな土坑である(III-209図)。東西の長い長方形であるが、軸線は真東西ではない。埋土は暗褐色土である。遺物は少量である。時期・性格は不明。(佐々木彰)

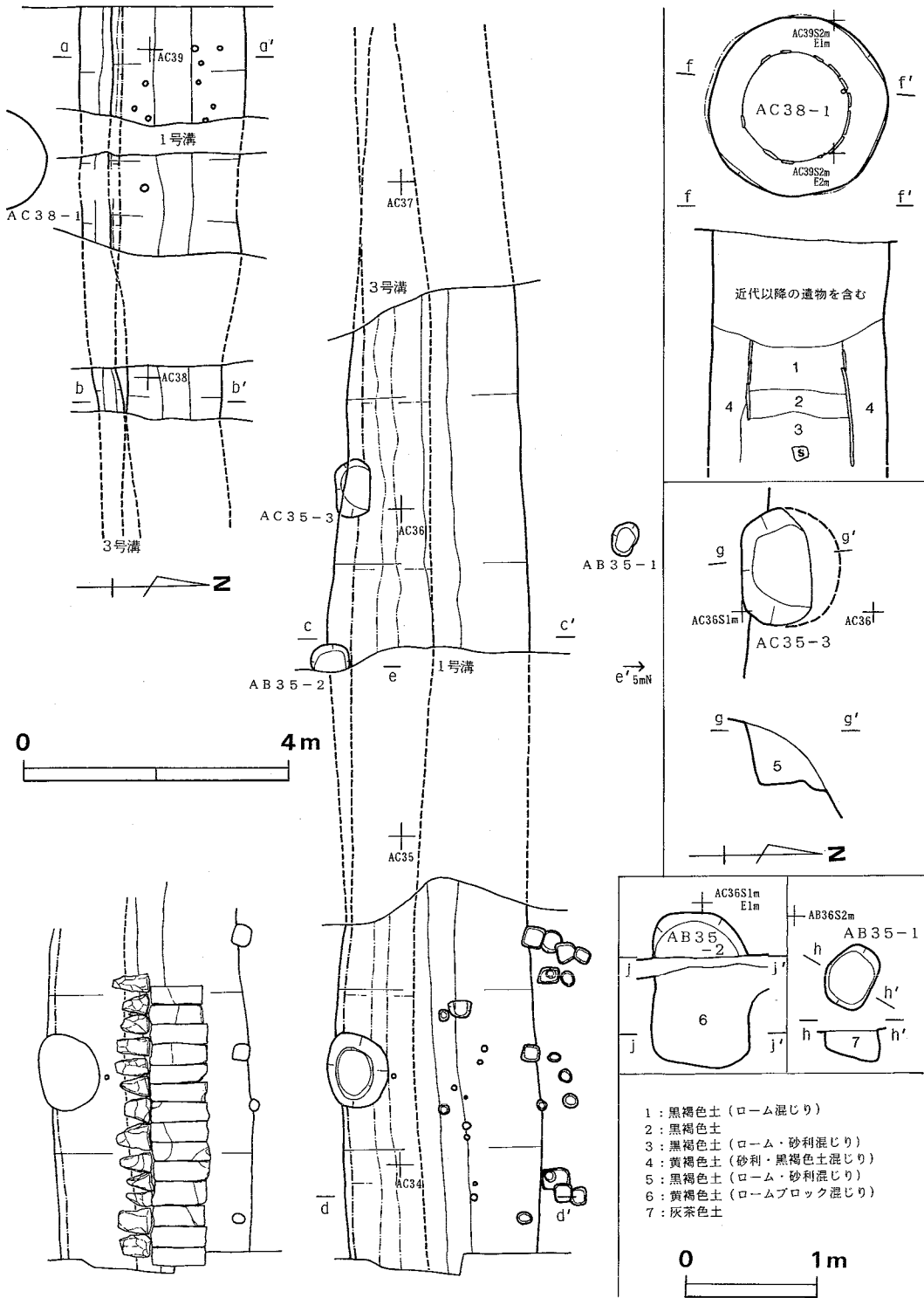
AA35-1, AA36-1 AA35・36区にある土坑である(III-231図)。両者は共通点が多い。中央に灰褐色粘質土があり、その周囲に黄茶褐色土があり、底は別の土が入っている。杭穴であろう。両者の距離は2.7mで、一間半であるが真南北からずれているし、周辺に関連すると思われる遺構もない。AA36-1にのみ少量の遺物がある。性格は不明である。周辺に杭穴がある。(松下理恵)

第三章 江戸時代の遺構



III-232図 2号杭穴列実測図 (土層図の水準:15.0m)

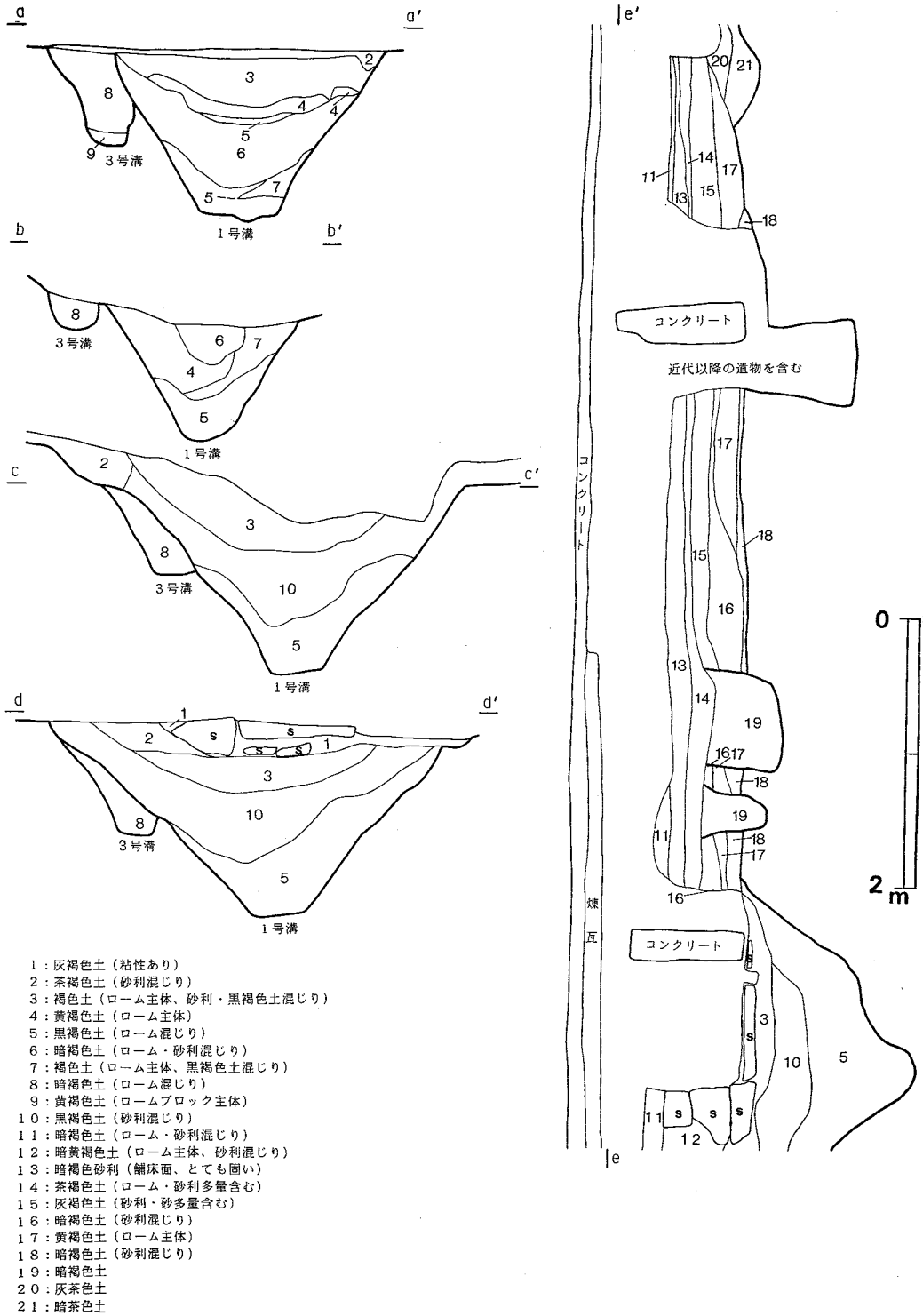
第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-233図 1号溝、3号溝、AB35-1・2、AC35-3、AC38-1 実測図 (土層図の水準:15.0m, j-j':14.0m)



第三章 江戸時代の遺構



III-234図 1号溝、3号溝、道路土層図 (土層図の水準:15.0m, e-e':16.0m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

2号杭穴列 ABラインの北2mほどのところの33~36区にある杭穴群である(III-232図)。途中BC間は土管の掘り方により破壊されている。東端は調査区の外に出るし、西はやはり土管の掘り方で破壊されている。方向は真東西であり、本来は西にも東にも延び、大聖寺藩の上屋敷の南端にあっていたものと考えられる。杭穴には各種のものがあるが、III-232図AB間のものは対応関係がはっきりとつかめるのにはたいし、CD間のものは明確につかめるのは一組である。AB間のものは七組の対応関係のあるものを確認することができている。形・深さ・埋土に至るまで一致しており、相互の距離も1.9mと六尺三寸間の一間である。すなわち、1) 拡大図のAの南東にあるもの=d-d'の東50cmのもの=f-f'の東40cmのもの(埋土:茶褐色土と暗灰褐色土)、2) c-c'南側のもの=e-e'南側のもの=g-g'南側のもの(埋土:黄褐色土と灰褐色粘質土)、3) c-c'北側のもの=e-e'北側のもの=g-g'北側のもの(埋土:暗褐色土と灰色粘質土)、4) c-c'東20cmのもの=e-e'東25cmのもの=g-g'東30cmのもの(埋土:茶褐色土と暗灰褐色土)、5) d-d'西20cmのもの=f-f'西30cmのもの=Bの西40cmのもの(埋土:茶褐色土と黄褐色土)、6) d-d'とf-f'にかかるもの(埋土:灰褐色土と茶褐色土と黄褐色土)、7) d-d'東30cmのもの=f-f'東20cmのもの(埋土:茶褐色土)の七組である。AB間の杭穴はすべて対応関係をもつことがこのように確認されている。3)がCD間でも対応関係のあるものであり、i-i'西20cmのもの=k-k'北側のもの=Dの北西のものに連なる。CD間のものでも部分的に対応関係をもつものもあるが、より西のものとの間で明確な対応関係をもつものはない。遺物はまったくない。(松下理恵)

以上のように確認できているだけで七回の杭の構築が明らかになっている。これらがいずれも六尺三寸間であることから、江戸時代のなかでは古い時期のかなり長期間の構築になるものと考えられる。先にも触れているように、この杭穴群は大聖寺藩の上屋敷と無縁坂に続く道との境であったことは確実であろう。後に道の項で触れるが、遅くとも天和二年には、道路の幅は四間になっており、道路と大聖寺藩の上屋敷の境は35~36ライン付近ではAAラインの南1.5mにあったものと考えられる。2号杭穴列の段階では、AAラインの南2.9m~3.2mに境があったことになる。この杭穴列の段階からほぼ一間北に道路が広がったことになろう。本来の地割がどのようであったかははっきりしない。道路幅拡張前の大聖寺藩の上屋敷の南北の距離は江戸間で六十間であった可能性がある。天和二年以前の講安寺の西の端から大聖寺藩の上屋敷の西の端までの距離は、江戸間で百二十間である。江戸間の六十間が基準であったと考えることもできる数字のように思われる。そもそも江戸時代の初頭から、江戸間六十間を基準にして地割がなされていたと考えるのが可能性が高いのかもしれない。(藤本 強)

AB35-1・2 1・3号溝周辺にある小土坑である(III-233図)。2は1号溝を切っている。遺物もなく時期・性格ともに不明である。(宮田安志)

道路 無縁坂に続く道路の痕跡が確認できている。といってもごく一部であり、わずかに幅数十cmでしかない。III-234図e-e'に図示しているものである。この土層図の部分の東西にわずかに40~50cmの幅で確認したもので、他の部分は完全に破壊されている。標高15.55mで上面を確認したものであり、この部分だけ例外的に高い位置で遺構が残されていた。ここでも道路が全体にわたって確認できているわけではない。多くの破壊を受けている部分があり、点々とした形ではあるが、何と

### 第三章 江戸時代の遺構

か痕跡をつかむことができた。まず自然の堆積の上に砂利混じりのロームを置いている(18)。この18層の上面は比較的平らであり、一時期の道路面であった可能性もある。道路構築に際して削った面である可能性もある。この上にローム主体の黄褐色土(17)、砂利混じりの暗褐色土(16)、砂利・砂を含む灰褐色土(15)、ローム・砂利を多量に含む茶褐色土(14)を盛り、その上に厚さ15cm内外の暗褐色の砂利(13)を敷いているものである。この上はごく薄いローム・砂利混じりの暗褐色土があるだけで近代以降の遺物を含む層になる。この砂利はきわめて固く明らかに舗床面であったものと考えられる。北になるにつれ薄くなるが、破壊されているためその北の端は確認できていない。また南はやはり破壊されており明らかではない。ただ、1号溝の上に作られている石敷きの溝と考えられる遺構の北の端が、道路の南端であった可能性が高い。ABラインの南3.8m(eの北1.2m)の位置である。現在道路と考えられる砂利が発見できたのはこの位置から6.8m北までである。現在の無縁坂の道路幅は7m強であり、四間(7.27m)であろうと考えられる。

道路が確認できた位置はちょうど現在の無縁坂からの道路の延長上にあたっている。確認した道路の幅を四間と推測することができよう。道路の北端は、言換えれば大聖寺藩の上屋敷の南端はAAラインの南1.5mになる。これは35ラインと36ラインのほぼ中間における数値である。天和三年以降の大聖寺藩の上屋敷の北端は中央診療棟地点の2号組石と考えられる。2号組石の西の端は34ラインの西2mまでしか確認できていないが、その南側の石列の北端(大聖寺藩の上屋敷の北の端)の延長線は35ラインと36ラインの間ではEラインの北3.1mの位置になる。とすると大聖寺藩の上屋敷の南北方向の長さは114.6mになる。これはグリッドラインの上の数字である。この調査のグリッドは1°50'30"東に振れているので、正南北に距離を補正すると、114.54mになる。「天保図」によると大聖寺藩上屋敷の南北の長さは六三間とされている。六三間は114.53mである。ピタリ一致しているとみてよかろう。この絵図の精度がかなりのものであることを示していよう。また距離は溝の中心ではなく、溝の屋敷側から計測されていたことも知ることができよう。

これまでに述べてきた道路はすぐ上に近代以降の遺物を含む堆積があった。これから考えると明治時代になっても使用されていたことが十分に考えられる。はっきりとはわからないが、ここが大学の用地になる明治40年代まで使われていた可能性もある。

さらに古い時期の道路について考えることのできる若干の資料がある。1号溝と2号杭穴列である。それにIII-234図の18層である。18層が1号溝の上にかかっているため18層と1号溝を同一時期とすることはできないが、18層の北の端と1号溝の北の端の距離は5m弱である。2号杭穴列の南の端と1号溝の北の端との間の距離は4.5mである。2号杭穴列はその位置からみて、大聖寺藩の南の端の塀に利用された杭穴と考えるのが妥当であろう。七度にわたり建てかえられていることもまた確実かと思われる。かなり長い期間大聖寺藩の上屋敷の南の端があったところであろう。1号溝の性格は榊原家の屋敷の北の端と道路の間にあったものと考えるのが妥当であろう。この2号杭穴列と1号溝の間が道路であったものと考えることができよう。とすると4.5mほどであるので二間半になる。無縁坂に通じる道路はその幅を江戸時代の間二間半から四間に拡幅したものとすることができよう。その時には大聖寺藩側が一間、榊原家側に半間の拡幅が行なわれた可能性がある。その時期は17世紀中頃であろう。破壊がひどいので多くの推測をすることになった。(藤本 強)

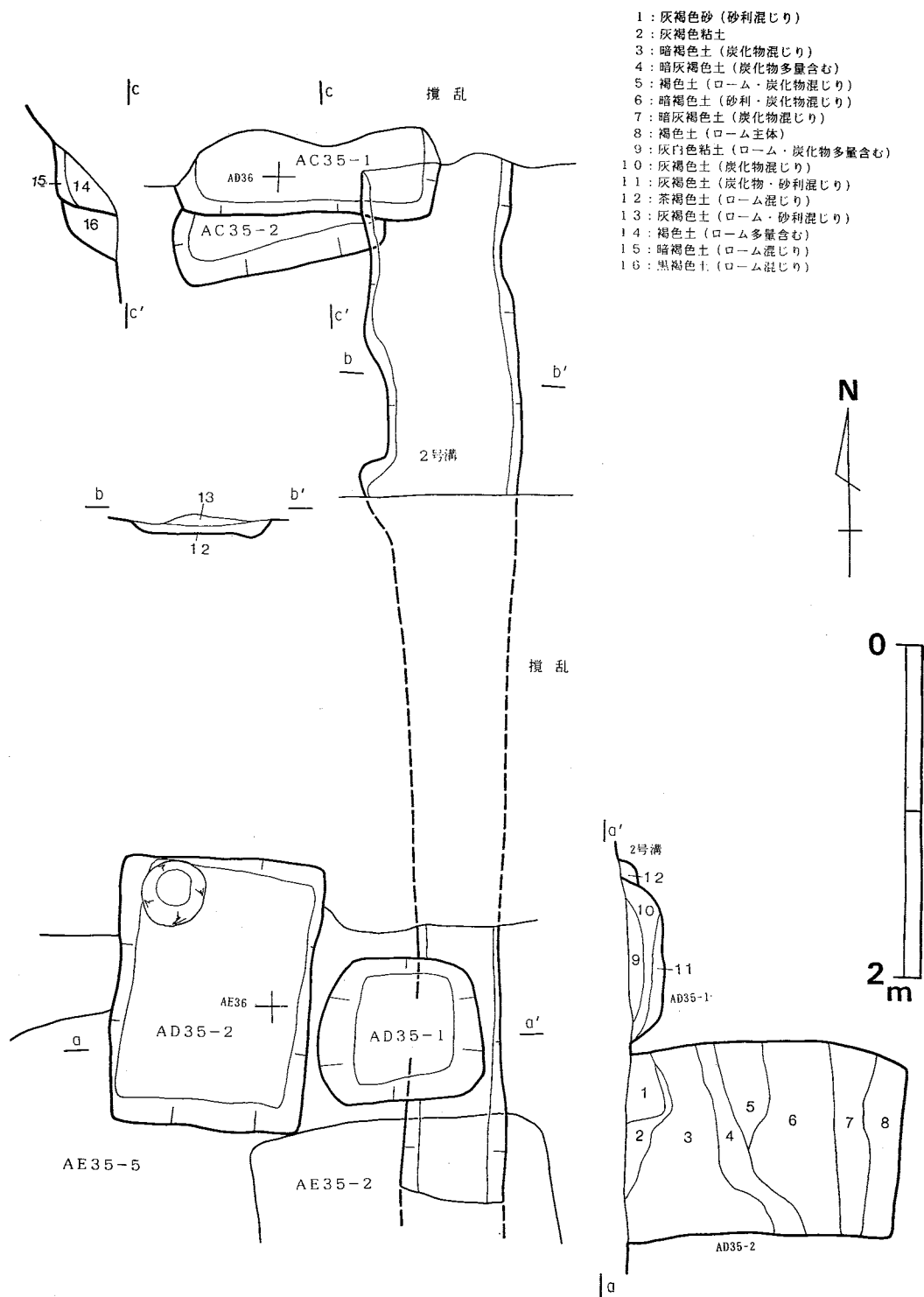
### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

**組石遺構** 1・3号溝の上、AB33・34区にある溝状の遺構である(III-233図)。溝状の掘り方のなかに底になる平石と石垣になる組石がある。西側は近代以降の基礎に破壊され、東側は調査区の外に伸びていたものと考えられる。組石は一辺30~40cmの四角錐形に粗く加工された比較的大きな石の四角形の面を溝の内側にむけて並べたもので、部分的には三段に積まれていたが、ほとんどは一段しか残っていなかった。石垣の北にある溝の底の石は上下二段あり、下の段は東西90cm、南北25cm、厚さ10cmほどの平石を並べたもので、やや粒子の粗い石材が用いられており、表面にはタガネの痕が無数にあるが、上面は下面より平坦である。上の段は下の段の上10cmにあり、間には裏込めの土とは異なる灰褐色土が入っている。上段の石は下段の石とほぼ同じ形、大きさであるが、厚さは20cm前後とやや厚い。長辺は南北方向になり、やや硬質の石である。上面は平坦に加工されている。下面にはタガネの痕が矢羽状にみられ、中央がややくぼんでいる。掘り方はもっとも深いところでは40cmある。石の裏込めは粘性の強い灰褐色土で、18世紀末から幕末までの時期に位置付けられる陶磁器の小片を少量含んでいる。この組石のある位置は無縁坂に続く道と榊原家の屋敷の間にある1・3号溝の上にあたり、これらと同様に屋敷と道路の境界として機能する側溝として作られたものであろう。裏込めの土には近代以降の遺物がないのにたいし、底である平石を覆っている土にはガラス・煉瓦などが含まれており、幕末に作られ、明治時代になっても使用されていたものと考えられる。上下の段は石材の質や加工の仕方にも差があり、時期が異なっていた可能性がある。確認することはできなかったが、北側にも石垣状の組石があった可能性もある。(小川 望)

**1・3号溝** ACラインにそってほぼ真東西に調査区を横切る溝であり(III-233・234図)、両溝には切りあい関係があり、3号溝が古い。近代以降の破壊により寸断されているが、おおよその姿を把握することはできる。周辺には遺構は少なく、わずかにAB35-2、AC35-3およびAC34ポイントの南西にある土坑が1・3号溝を切っているのと、1号溝の上部にその後身であり、既に触れた組石遺構があるだけである。これらの土坑は1号溝の付属施設である可能性が高い。溝の内部にも杭穴かと思われる小孔がかなりあるが、その性格は不明である。溝の北側のAC34ポイント付近には杭穴と思われるものがある。これらは溝と道路を分ける杭であったものと推測される。1号溝は上部の幅3m~2.5mで東になるにつれ幅が広がる傾向がある。底の平なV字形の断面であり、底は50cm内外の幅をしている。底の標高は13.5mを前後するが、東が若干低い傾向があるが、明確なものではなく排水のための溝であったかどうかは疑問である。埋土はロームの混じることの多い黒~褐色土であるが一部砂利混じりの黒褐色土になっているところもある。自然に埋まったようにもみえるが、埋め戻された可能性もある。18世紀後半の陶磁器が若干出土している。

3号溝は1号溝に大半を破壊されているが、若干南に位置しているので、その底に近い部分が残っている。上部がどのくらいの幅をもっていたのかは明らかではない。1m前後であったものと考えられる。底は30cm内外の幅である。残っている断面から推測すると、1号溝よりも切り立った側面をしていたものと考えられる。底の標高は14.1~14.3mほどで、はっきりはしないが東が低い傾向にある。排水の機能があったかどうか疑問である。埋土は大部分がローム混じりの暗褐色土からなっている。埋め戻された可能性が高い。遺物はない。これらの二本の溝がもっていた機能はその位置からみて明らかであろう。無縁坂に続く道路と榊原家の境界を画するものである。1号溝が大規模

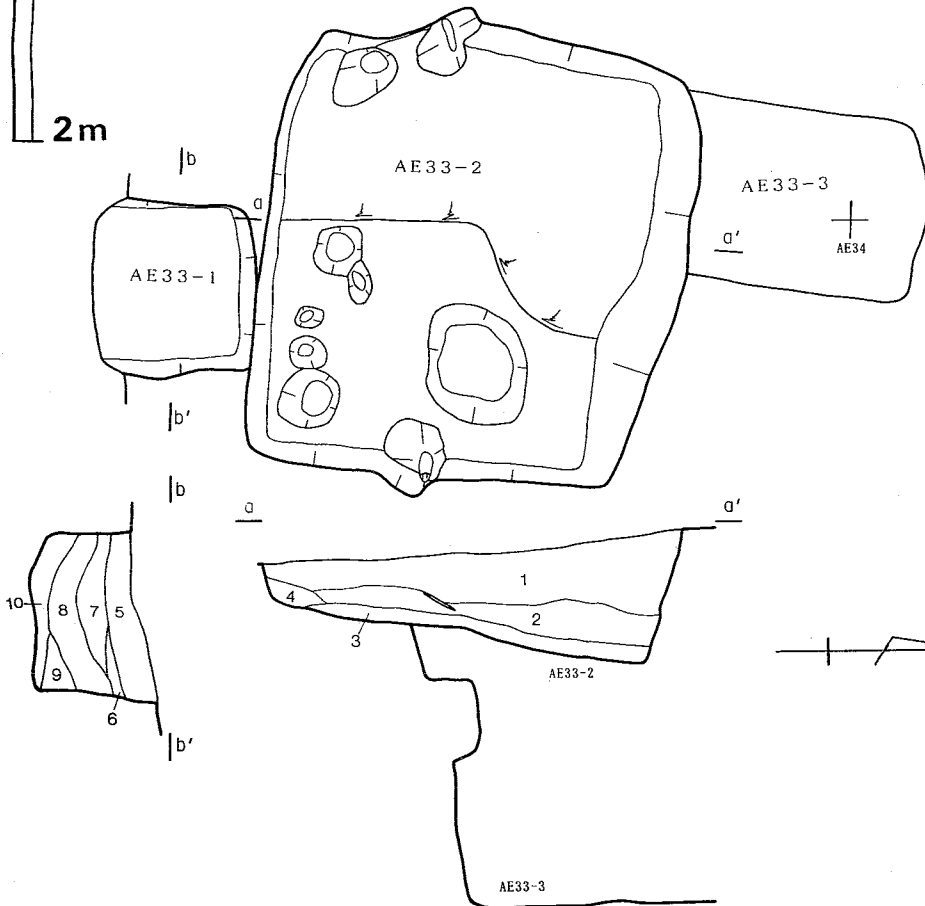
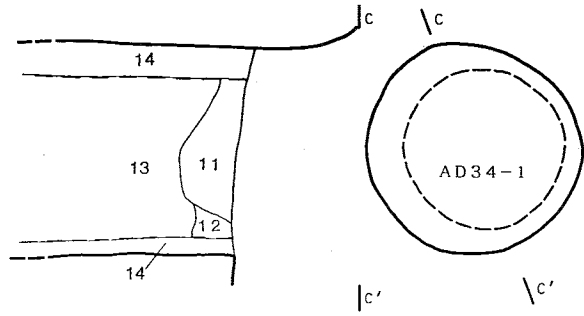
### 第三章 江戸時代の遺構



III-235図 AC35-1・2、AD35-1・2、2号溝実測図 (土層図の水準:15.5m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構

- 1 : 暗褐色土 (ローム・砂利混じり)
- 2 : 暗褐色土 (ローム混じり)
- 3 : 黒褐色土 (ローム混じり)
- 4 : 褐色土 (ローム混じり)
- 5 : 暗灰褐色土 (ローム・炭化物混じり)
- 6 : 褐色土 (ローム多量含む)
- 7 : 褐色土 (ローム・炭化物混じり)
- 8 : 褐色土 (ローム多量含む)
- 9 : 暗灰褐色土 (ローム混じり)
- 10 : 褐色土 (ローム混じり)
- 11 : 暗褐色土 (ローム混じり)
- 12 : 暗灰褐色土 (ローム混じり)
- 13 : 暗灰褐色土 (ローム・砂利多量含む)
- 14 : 暗褐色土 (粘質土・粘土混じり)



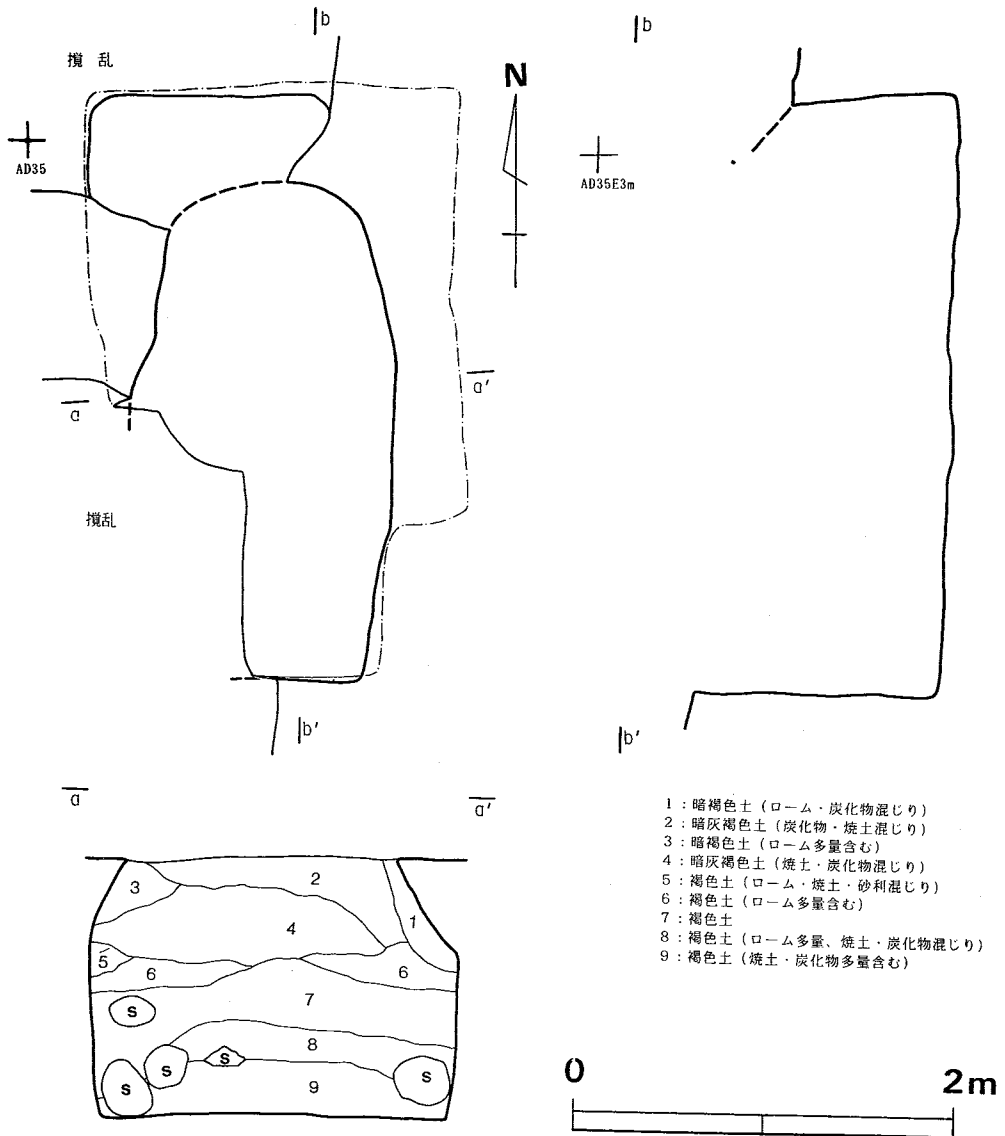
### 第三章 江戸時代の遺構

なのが気になるところであるが、なんの目的でこのような大規模なものであったのかは不明である。

(佐々木彰)

**AC35-1-2** AD36ポイント周辺の切りあいのある土坑である。1が新しく、2号溝は両者を切っ  
ていてもっとも新しい。どちらも長方形であったのであろうが、2は1に切られ、1は土管で破壊さ  
れ、全容はわからない(III-235図)。どちらも35cm内外の深さで、埋土は1がローム混じりの暗~褐  
色土であり、2はやはりロームを含む黒褐色土である。遺物はない。(堀内秀樹)

**AC35-3** AC35・36区にある小土坑である(III-233図)。1号溝を切っている。東西に若干長く、東  
にあるAC34ポイント南西1.5mにある杭穴との距離は9mである。あるいはこの杭穴と一連のもの  
であり榊原の屋敷の北端を画する塀の杭用の穴かとも思われるが、はっきりしない。(佐々木彰)



III-237図 AD34-2実測図 (土層図の水準:15.0m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

AC38-1 AC38区にある井戸である(III-233図)。径1.4mの掘り方のなかに径0.8mの桶を入れ井戸側にしている。井戸側の木部はかなりよく残っている。桶の内部には黒褐色土が入っており、その上には近代以降の遺物を含む土が入っている。最終的な埋め戻しが明治になってからであることを示しているのであろう。井戸側と掘り方の間には砂利などを含む黄褐色土が詰められている。遺物は明治時代のものが主体になっている。(佐々木彰)

2号溝 AC~AE35区にある溝である(III-235図)。AD35-1より古い、他の重複するどの遺構よりも新しい。ほぼ南北の方向であるが、溝の幅は50~90cmと不定である。深さは15cmほどで浅い。底近くに茶褐色土、上に灰褐色土がある。どちらもロームを含んでいる。(堀内秀樹)

AD34-1 AD・AE34区にある井戸である。掘り方は径1.1m、井戸側は径85cmである(III-236図)。上部は破壊されており、どのようなものであったのかわからない。埋土はローム混じりの暗灰褐色土を主にしており、井戸側と掘り方の間には粘土質の暗褐色土が詰められている。双方に煉瓦片が入っている。遺物には明治時代以降のものもある。構築も明治時代以降であろう。(成瀬晃司)

AD34-2 AD34区北西部に位置する地下式土坑である(III-237図)。遺存状態は良くなく天井、西壁、西南の底を破壊されている。底は南に張り出し部をもち羽子板状を呈する。長軸はほぼ南北であり、南北3.2m弱、東西2m弱、地下室の南北の長さは2.3m弱で、深さは1.3mである。張り出し部は確認面まで壁が垂直であり、天井の崩落した痕跡もないので入口であったと考えられる。地下室の天井は崩落が著しく一部しか残存していない。壁は垂直であり、底の上90cmで曲がり天井になる。丁寧な壁の調整が施されており加工痕は残っていない。底は平坦である。埋土は最下層に円礫、焼土塊を多量に含む赤味のある褐色土、それを覆う褐色土、瓦片主体の褐色土、それを覆う褐色土、その上に自然遺物・人工遺物を多量に含む暗灰褐色土が堆積している。天井の直下に暗褐色土が隙間なく堆積しているが、これは他の地下式土坑にも見られるように人為的な堆積と考えられる。遺物は暗灰褐色土のなかから18世紀前半の陶磁器片などが多量に出土している。(成瀬晃司)

AD35-1・2 AD・AE35・36区にある長方形の土坑である(III-235図)。1は2号溝より新しく、2はAE35-5より新しい。1は東西1m、南北85cm、深さ20cmで、2は南北1.6m、東西1.2m、深さ1.7mある。1の埋土は灰褐色土が主であり、2は灰~暗褐色土が多い。1には明治以降の遺物が混じる。2からはかなりの量の遺物が出土している。性格はどちらも不明である。(堀内秀樹)

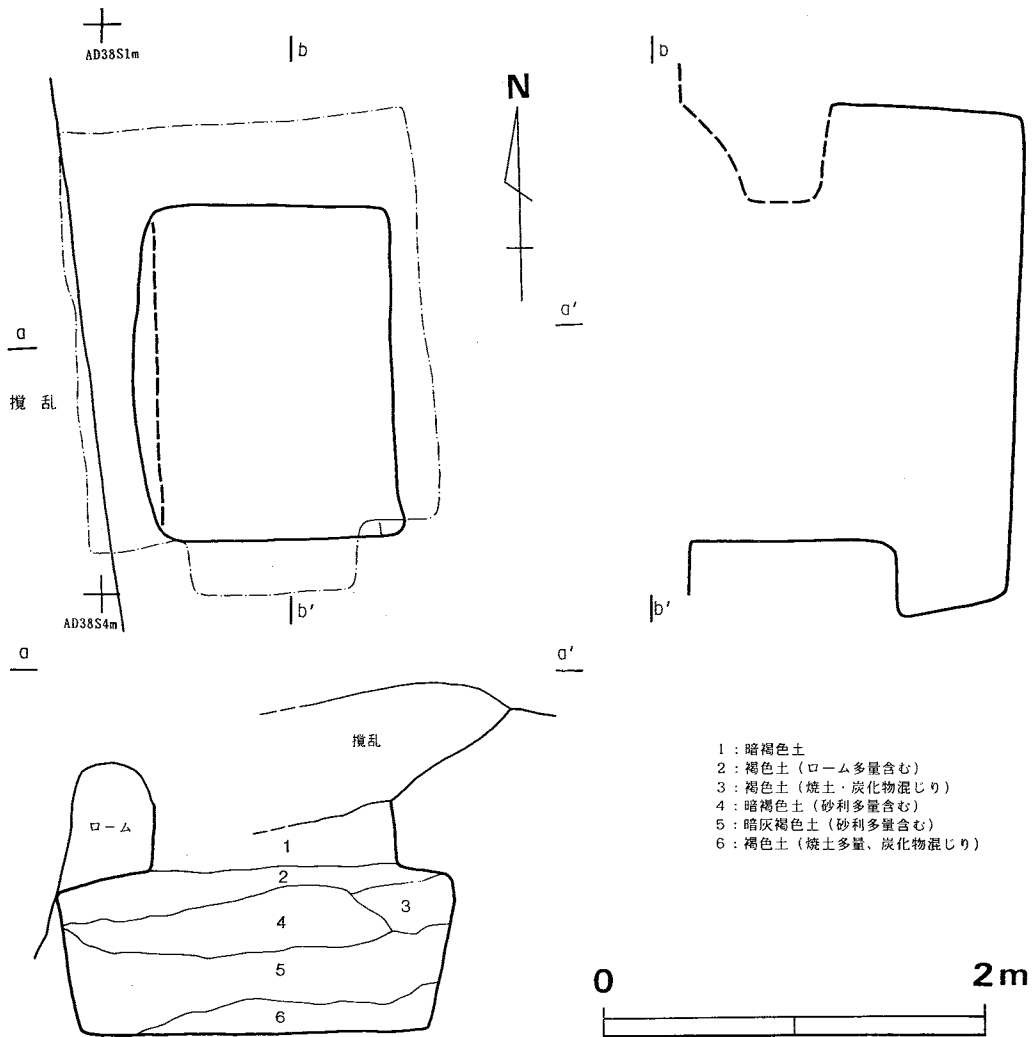
AD37-1 AD37区に位置する地下式土坑である(III-238図)。入口上部は若干破壊されている。入口の平面形は長方形であり、南北1.8m弱、東西1.3m弱である。地下室は南を除く三方向に広がっており、南北2.2m弱、東西1.8m強であるが、南壁には奥行30cm、幅90cm、高さ60cmの張り出し状の付属施設をもつため底の平面形は羽子板状を呈す。底はほぼ平坦だが北にむかって傾斜しており、高低差は10cmある。北壁はほぼ垂直であるが東西の壁はやや開ききみである。壁の高さは80cm~1mある。天井は入口に向かい10cm高くなっている。入口の壁は垂直である。また壁は丁寧に調整されている。埋土は水平に堆積しているが、最下層の6層は焼土・炭化物を多量に含む層で、この土坑が火災の時に廃絶された可能性が考えられる。4・5層は色調に相違があるが両者ともに遺物・小石を多量に混入しており、ほぼ同時期に行なわれた遺物廃棄によって形成されたものであろう。ロームを多量に含む2層がこれを覆っている。1層は17世紀末から18世紀初頭にかけての陶磁器片、瓦



第三章 江戸時代の遺構

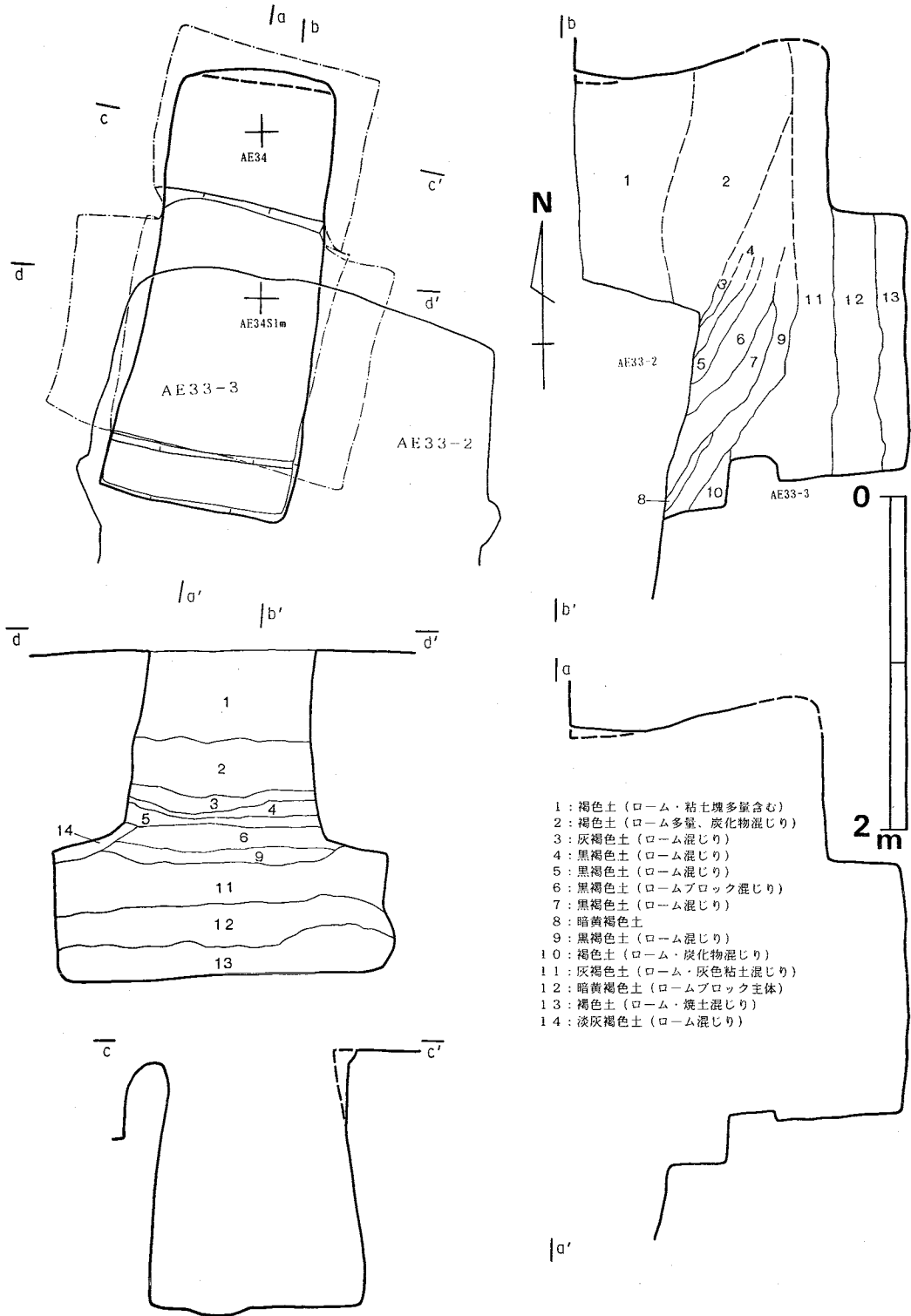
片などを多量に混入しており、二回目の廃棄が行なわれている。以上少なくとも遺構廃絶後に二回の遺物廃棄が行なわれており、ゴミ溜めとして二次利用されていたものと考えられる。(成瀬晃司)

AE33-1・2 AE33・34区にある切りあい関係のある土坑である(III-236図)。1が2を切り、2は次に述べる3を切っている。1は一辺0.9m内外の深さ65cmの土坑であり、底は凹凸があるが、壁は丁寧に調整されている。埋土はローム混じりの暗灰~褐色土である。2は南北2.2m、東西2.4m、深さ70cmの長方形の土坑であり、底は貼り底になっているが、3の上では3の埋土が軟弱でおよそ10cmほど陥没している。底には11の杭穴があるが、2ずつ対になるようである。建て替えのためなのかそもそも対なのかは明らかではない。板材を留めるためのものであろうか。埋土はローム混じりの暗褐色土で黒褐色土の貼り底(III-236図-3)をもっている。両者とも陶磁器などの若干の遺物がある。性格は不明である。(成瀬晃司)



III-236図 AD37-1実測図(土層図の水準:15.2m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-239図 AE33-3実測図 (土層図の水準:14.9m)

### 第三章 江戸時代の遺構

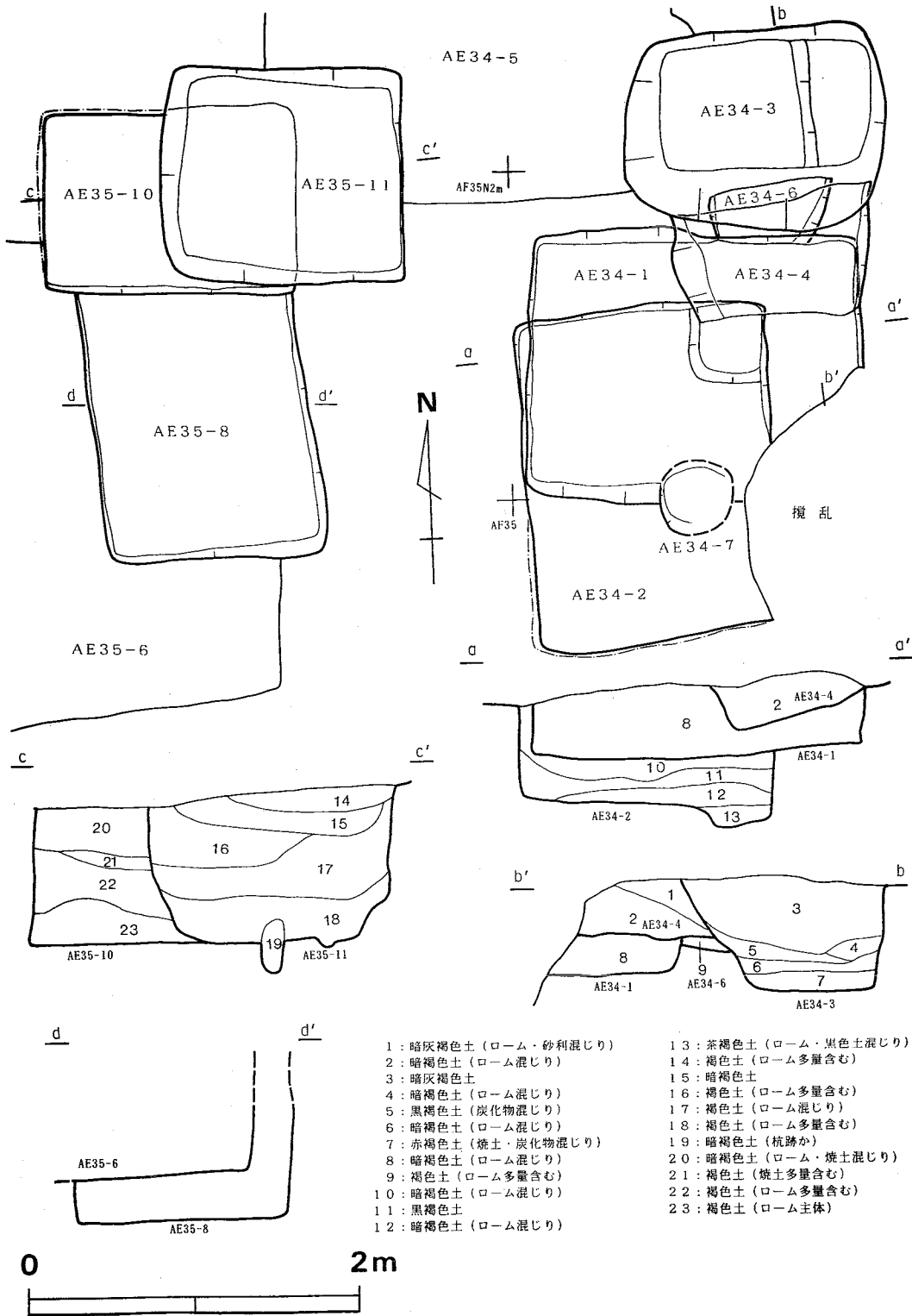
**AE33-3** AE33・34区にある地下式土坑である(III-239図)。南半の上部をAE33-2によって切られている。入口から直接地下室につながる地下式土坑で二つの地下室をもつ。入口の平面形は長方形で、長軸2.6m、短軸1mである。第一の地下室は入口の中央付近にあり、それと直交して東西に延びる長方形であり、東西1.9m弱、南北1.4m弱で、底はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直で、東西の壁と南壁の一部に天井をもつ。入口から天井までの壁はやや内傾しているが、南壁では天井の上に一段テラスがあつてから入口になる。この部分はAE33-2に切られなくなっているため、テラスは階段状に続く可能性もある。第二の地下室は第一の部屋の北側にあり東西1.25m、南北0.9mの長方形で、底は第一の部屋より45cm高く、ほぼ平坦である。壁は内傾しており、断面形は台形である。壁の調整は全体的に丁寧である。埋土は底から天井までロームを混入する土が水平堆積している(11~13)。これらは各層が20cmと厚く一気に埋め戻されたものである。その後南からロームを含む黒褐色土が流入している(3~9)。その上をロームを多量に含む褐色土で一気に埋め戻している(1・2)。図b-b'北半は測量直前に崩壊したため推定線にしている。(成瀬晃司)

**AE34-1・2・3・4・6・7** AE34区の南端から一部AF34区にかかる切りあいのある土坑である(III-240図)。2・6が古く、1がこれらにつき、4・7は1を切り、3は4を切り、もっとも新しい。3は5も切っている。1・2・3は方形であり、7は不整な円形である。4・6はわずかに残っているだけで、全体の形はわからない。1の深さ50cm、2は65cm、3は70cm、4は30cm、6は10cmが残るだけ、7は20cmである。埋土は1が暗褐色土、2が暗~黒褐色土、3が底に焼土混じりの赤褐色土、上には暗灰褐色土があり、4は暗褐色土が主である。6は褐色土、7は暗灰褐色砂質土である。3からかなりの量の、1・2・4から少量の遺物が出土している。性格は不明である。(堀内秀樹)

**AE34-5** AE34・35区にまたがって位置する階段のある半地下式の土坑である(III-241図)。AE34-3、AE35-9・10・11と重複関係があり、AE34-3、AE35-11より古く、AE35-9・10より新しい。平面形はほぼ方形を呈し、北東の隅には四段の階段が底まで80cmの幅で土坑内に張り出して構築されている。各段の両脇には細長い断面が板状の小穴が確認されており、階段補強のための杭が打たれていたと考えられる。底は若干起伏があり、規模30~40cm、深さ30~60cmの方形または円形の穴が壁際を巡っている。南北壁際では75cm、東西壁際では1.2m間隔で計9が検出され、そのうちの3には礎石が確認されている。これらにはいずれも明瞭な杭痕が認められている。土坑の規模は底で東西2.6m、南北2.65m、深さは最大で1.4mある。階段は幅80cm、一段の幅25~30cmの段が四段あり、それぞれの段の高さは、28・25・25・10・8cmである。埋土は東から西へ若干の傾斜がある。2層は焼土を多量に含み火災の際の一括廃棄をも想定させる。本土坑は杭痕のある杭穴の存在、切り込み面状況より底の周囲に巡る杭により上屋が構築されたAE35-6と同様の半地下式土坑であると考えられる。遺物は本土坑の南壁際の焼土混入層(2層)より「享保弍年丁酉(1717)十月十日制」の銘のある瓦燈を検出しているほか埋土中から17世紀末から18世紀前半の陶磁器、瓦、火鉢が出土しており、瓦燈の年代と矛盾していない。(堀内秀樹)

**AE35-1・7** AE35区にある小土坑である(III-242図)。1は南北1.2m、東西0.9m強の方形、7は径0.5m前後の不整な円形である。1はAE36-6より新しく、7はAE35-10より新しい。深さは1が40cm弱、7が30cm弱である。埋土は1が灰褐色の砂と土で、7が暗褐色土と灰褐色土であり、間に炭化物

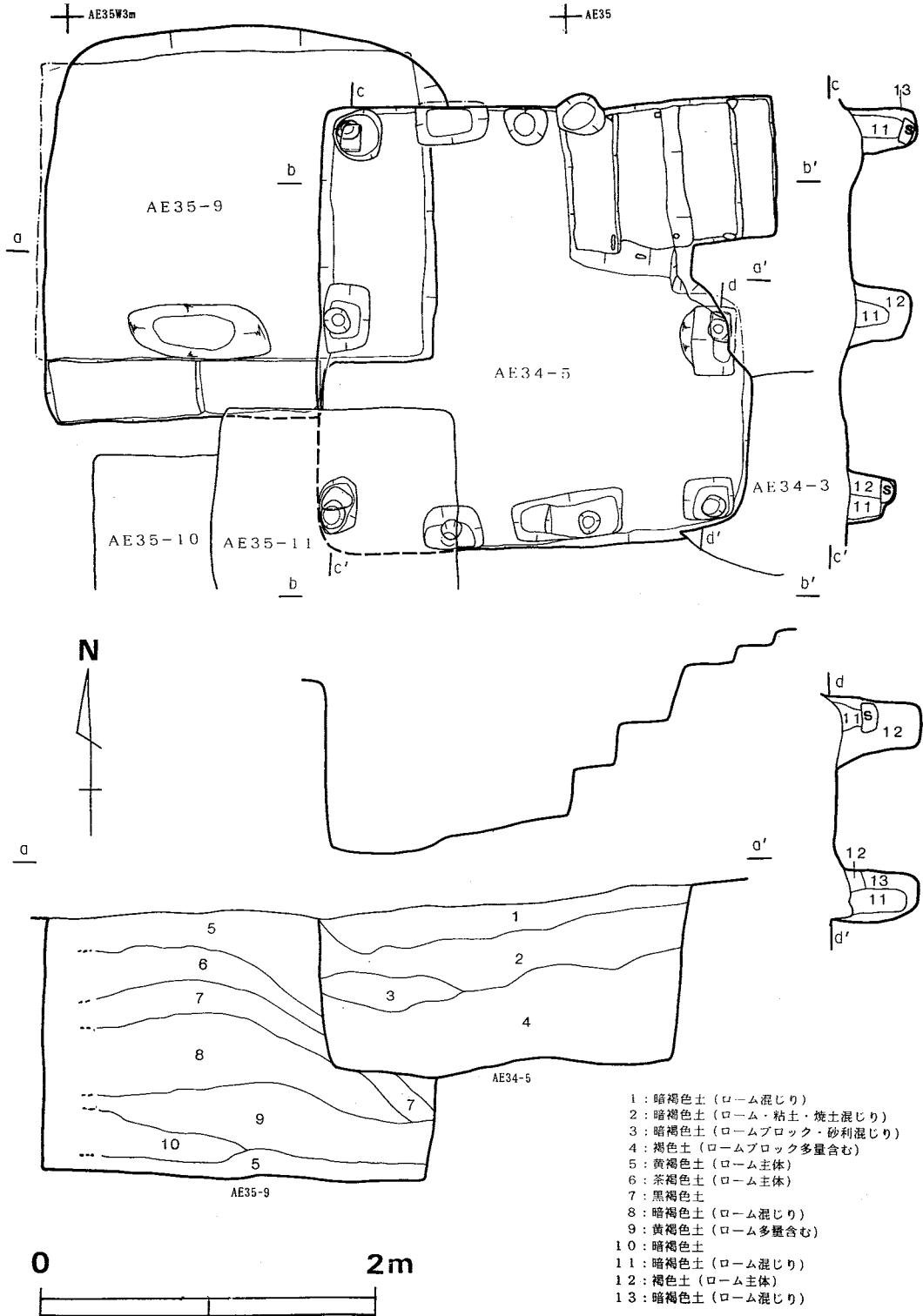
第三節 設備管理棟建設地点の遺構



- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 1: 暗灰褐色土 (ローム・砂利混じり) | 13: 茶褐色土 (ローム・黒色土混じり) |
| 2: 暗褐色土 (ローム混じり)     | 14: 褐色土 (ローム多量含む)     |
| 3: 暗灰褐色土             | 15: 暗褐色土              |
| 4: 暗褐色土 (ローム混じり)     | 16: 褐色土 (ローム多量含む)     |
| 5: 黒褐色土 (炭化物混じり)     | 17: 褐色土 (ローム混じり)      |
| 6: 暗褐色土 (ローム混じり)     | 18: 褐色土 (ローム多量含む)     |
| 7: 赤褐色土 (焼土・炭化物混じり)  | 19: 暗褐色土 (杭跡か)        |
| 8: 暗褐色土 (ローム混じり)     | 20: 暗褐色土 (ローム・焼土混じり)  |
| 9: 褐色土 (ローム多量含む)     | 21: 褐色土 (焼土多量含む)      |
| 10: 暗褐色土 (ローム混じり)    | 22: 褐色土 (ローム多量含む)     |
| 11: 黒褐色土             | 23: 褐色土 (ローム主体)       |
| 12: 暗褐色土 (ローム混じり)    |                       |

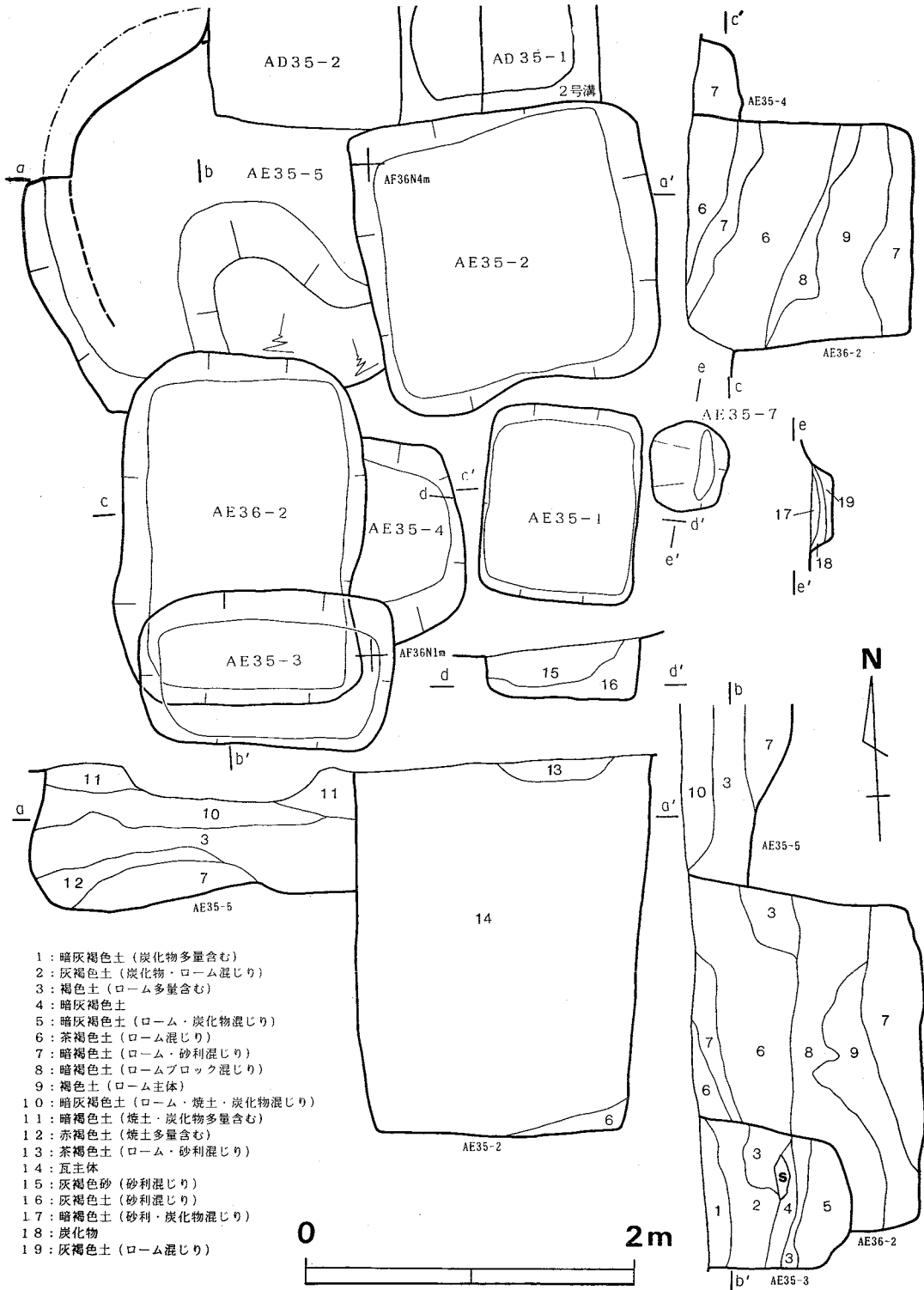
III-240図 AE34-1~4-6-7, E35-8-10-11 実測図 (土層図の水準: 14.8m)

第三章 江戸時代の遺構



III-241図 AE34-5, E35-9 実測図 (a-a'・b-b':15.0m, c-c'・d-d':13.8m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-242図 AE35-1~5・7, AE36-2 実測図 (土層図の水準:15.0m, e-e':15.4m)

### 第三章 江戸時代の遺構

の層がある。遺物は7にはなく、1は少量あるが、近代のものも含んでいる。性格は不明。(堀内秀樹)

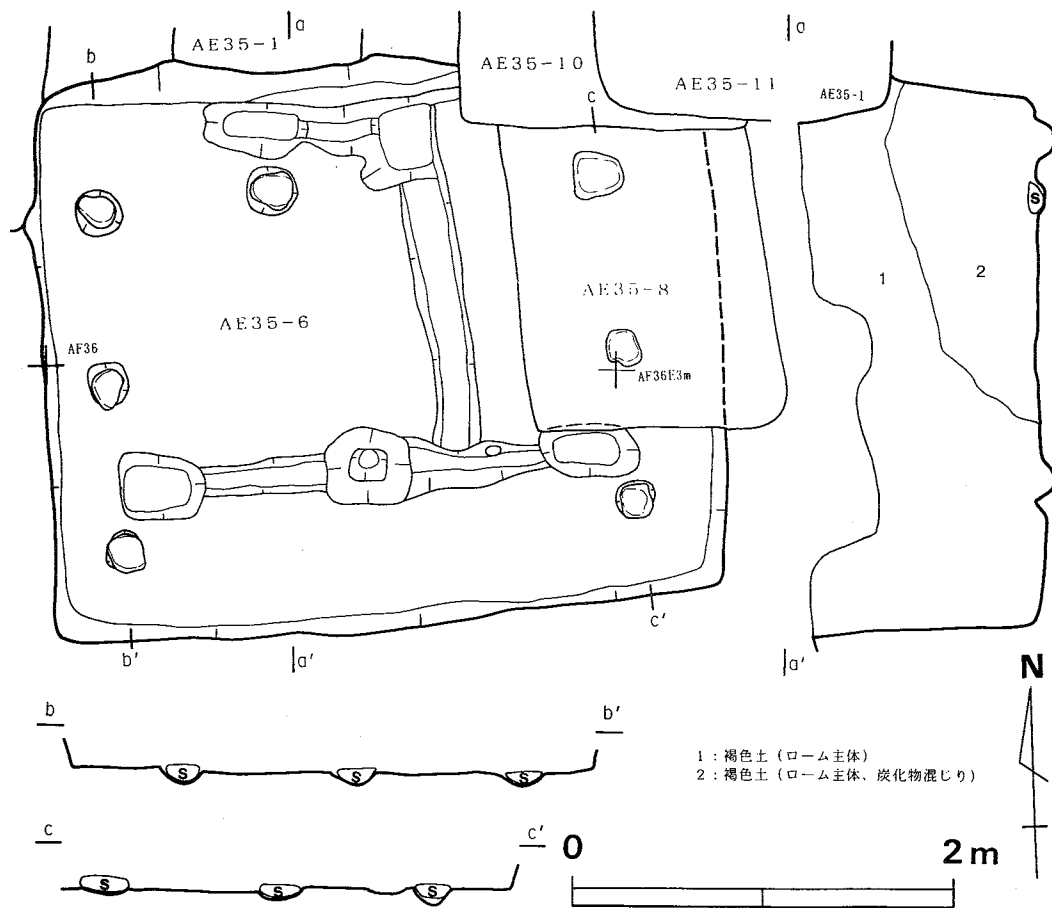
AE35-2 AE35区にある一辺1.8m、深さ2.4mの土坑である(III-242図)。2号溝より古く、AE35-5より新しい。二次火熱を受けた瓦の小片と焼土が土坑を埋めている。性格は不明。(堀内秀樹)

AE35-3 AE35・36区にある東西1.6m弱、南北0.9m強、深さ70cmの土坑である(III-242図)。AE35-4・6、AE36-2・11と重複し、いずれよりも新しい。暗灰褐色土を主にする埋土である。遺物は18世紀末から19世紀初めにかけての陶磁器がかなり多く出土している。性格は不明。(堀内秀樹)

AE35-4 AE35・36区にある土坑であるが切られているため全形は不明(III-242図)。AE35-3、AE36-2より古く、AE35-6より新しい。埋土は暗褐色土。遺物は少量である。(堀内秀樹)

AE35-5 AE35・36区にある不整な形の土坑である(III-242図)。AD35-2、AE35-2、AE36-2と切りあっているが、いずれより古い。埋土は暗褐色土を主にしている。遺物はやや多い。(堀内秀樹)

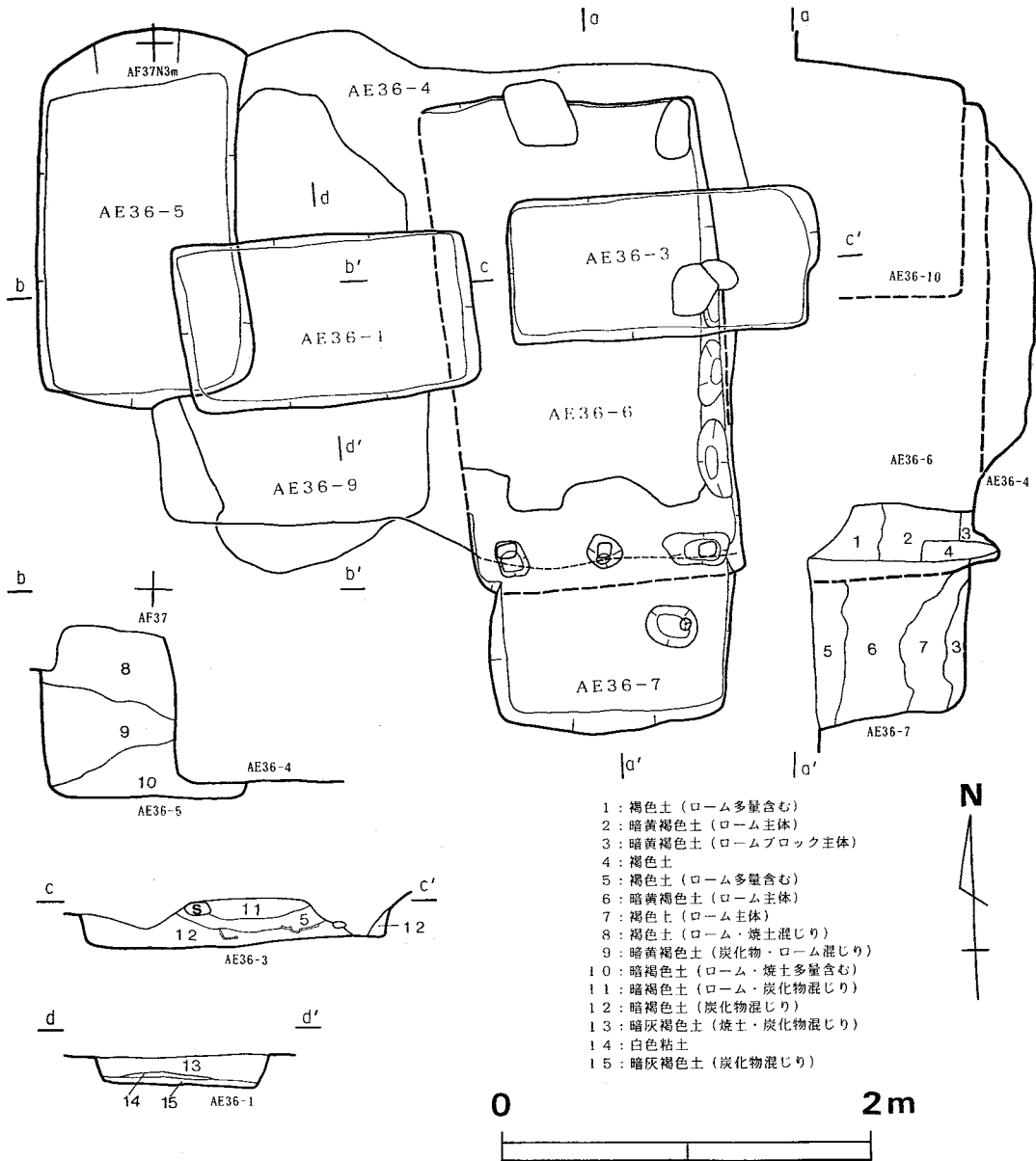
AE35-6 AE35・36区にまたがって位置する東西方向に長軸をもつ土坑である(III-243図)。AE35-1・3・4・8・10、1号杭穴列と重複しており、AE35-1・3・4より古く、AE35-8・10、1号杭穴列よりも新しい。平面形は長方形で、東西3.6m、南北3m、深さ1.2mである。底には礎石であろうと考



III-243図 AE35-6実測図 (a-a':15.3m, b-b'・c-c':14.2m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

えられる径20~30cmほどの平たい自然石がほぼ半間隔で配されており、確認された7個を含めて10個が壁際を一周していたと推定される。また水溜めもしくは間仕切りと思われる溝が、5の小穴を連結するように土坑の中央にT字状に掘られている。壁は比較的平滑で、底よりほぼ垂直に立ち上がる。埋土はロームを主にするもので、一度に埋め戻されている状況を示している。本土坑は礎石と考えられる石が配され、上部の施設の存在を容易に想定させる。このような半地下式の土坑は榊原家の屋敷と推定される区域より若干の構造上の相違があるにせよ AE34-5, AE35-9と比較的密



III-244図 AE36-1・3・5~7実測図 (土層図の水準:15.2m)



### 第三章 江戸時代の遺構

に確認されており、地下式土坑との関係について今後研究を進める必要がある。遺物は埋土中より18世紀前半のものと考えられる陶磁器、瓦などが少量検出されている。(堀内秀樹)

**AE35-8** AE・AF35区に位置する南北方向に長軸のある長方形と推定される土坑である(III-240図)。AE35-6・10に北壁、埋土の大部分を削られ、遺存しているのは南北1.7m、東西1.35m、深さは最大80cm強である。壁と底は平滑で、平な底から壁は垂直に立ち上がる。埋土は褐色土である。遺物は埋土中より数点が発見されているが、小破片のため時期は不明である。(堀内秀樹)

**AE35-9** AE35区にある半地下式土坑である(III-241図)。隣のAE34-5、AE35-11に切られている。平面形は底では東西に長軸のある長方形を呈し、南壁には細長い階段が二段張り出している。確認した面では張り出し部が底からほぼ垂直に立ち上がって方形に近いが、西側で若干オーヴァーハングして丸みを帯び、円形に近づいている。底は東西2.4m、南北1.85m、深さは最大1.8mである。階段は東側が一段低く作られ、東側では東西65cm、南北32cm、西側は東西90cm、南北35cm、底からの高さは85・133cmである。壁は平滑で、板などで補強されていたと考えられる。底の南壁近くの緩い落ち込みは入口として階段状の施設を構築した痕跡であると思われる。本土坑の形、ローム上面においては天井をもっていないことなどから、通常の地下式土坑とは異なり、AE34-5と同様の上部施設を伴う半地下式の構造であったと推定される。埋土は入口と考えられる南壁中央より三方向に傾斜を有し、人為的に短期間に埋め戻されている状態がみてとれる。遺物は小破片が数点埋土中より発見されているのみで、時期は不明である。(堀内秀樹)

**AE35-10** AE35区に位置し、東西に長軸をもつ長方形の土坑である(III-240図)。AE34-5、AE34-6・7・11より古く、AE35-8より新しい。遺存しているのは南北1.1m、東西1.55m、深さ1m弱である。壁と底は平滑に整えられ、平な底と垂直な壁がある。埋土はほぼ水平に堆積している。遺物は小破片が埋土中より数点発見されているのみで時期は不明である。(堀内秀樹)

**AE35-11** AE35区に位置する方形の土坑である(III-240図)。隣のAE34-5、AE35-9・10を切って作られている。東西1.5m、南北1.35m、深さ最大90cmである。壁と底は若干の凹凸をもち、ほぼ垂直な壁である。埋土は人為的な埋め戻しによるものと考えられ、東から西に若干の傾斜がある。遺物は埋土中から18世紀後半の陶磁器などが出土している。(堀内秀樹)

**AE36-1** AE36区にある東西1.6m、南北1m弱、深さ15cmの長方形の土坑である(III-244図)。AE36-4～6・9を切っている。埋土は暗灰褐色土を主にし、若干の遺物も入っている。ゴミ穴として二次的に利用したものであろう。(成瀬晃司)

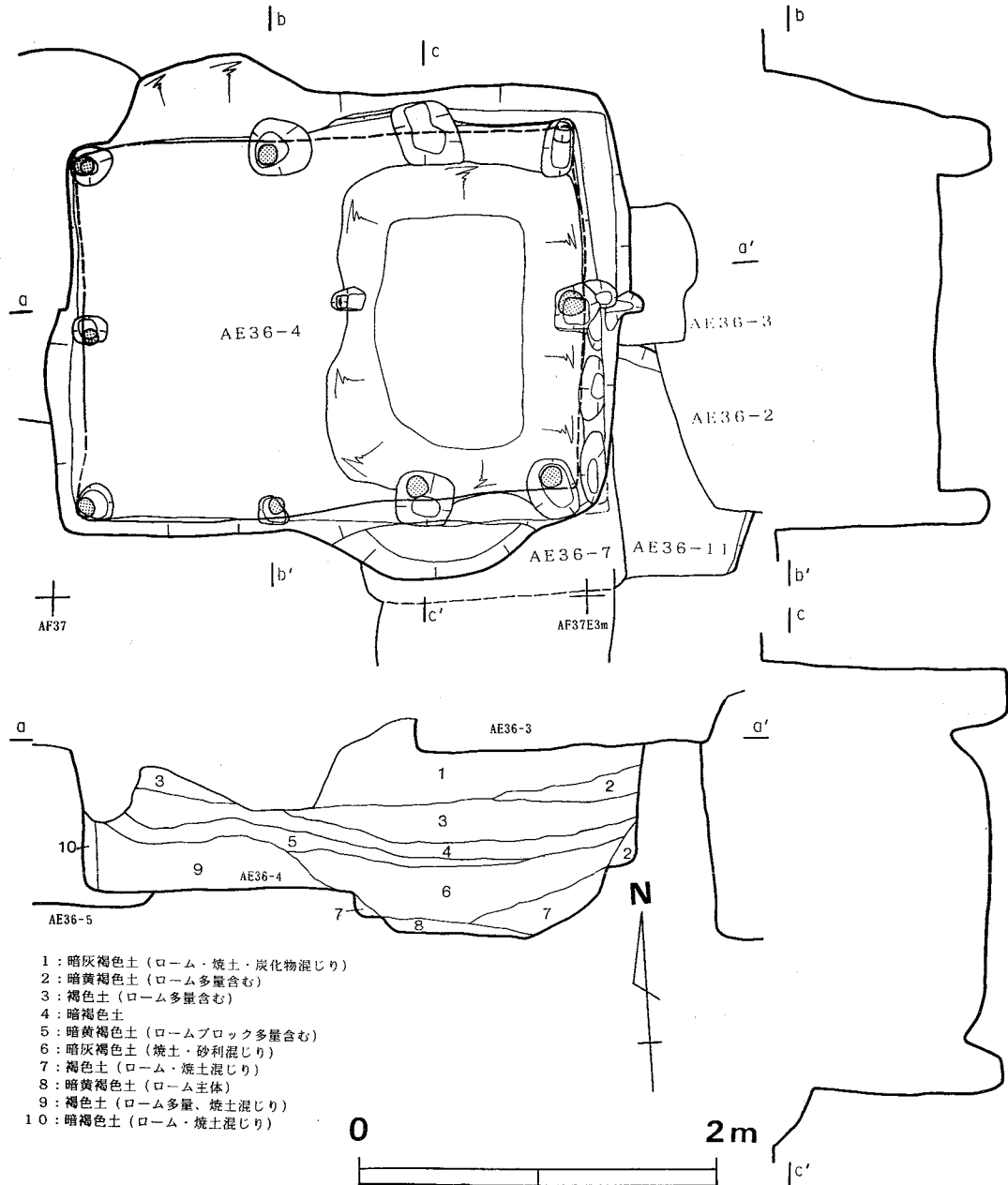
**AE36-2** AE36区にある長方形の土坑である(III-242図)。AE35-3より古く、AE35-4、AE36-3よりも新しい。南北2.2m、東西1.5m、深さ1.5mである。ほぼ垂直な壁であるが、底・壁とも若干の凹凸をもっている。ロームの混じることの多い埋土をもっている。遺物はない。(堀内秀樹)

**AE36-3** AE36区にある土坑である(III-244図)。平面形はやや不整な長方形を呈し、東西1.7m、南北0.8m、深さは30cmである。壁は垂直であり、底は平坦であるがその四分の三はAE36-4の埋土のなかに作られている。埋土の最下層(12)よりイギリス製のウイスキー瓶、バリ製の歯ブラシとともに19世紀後半の陶磁器が多量に出土している。ゴミ溜に使用されたものであろう。(成瀬晃司)

**AE36-4** AE36区にある土坑である(III-245図)。東壁の一部をAE36-3に切られているが良好

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

な遺存状態である。平面形は東西3.3m、南北2.7mの長方形であり、底は平坦であるが、東側に南北1.85m、東西1.45mの長方形の掘り込みがある。底の深さは25cmで壁は緩やかに立ち上がる。貼床は確認されず、埋土中に立ち上がりもないので本遺構に伴うものであろうが、性格は不明である。壁際には南北の壁に各4、東西の壁の中央に各1、合計10の杭穴がある。確認された杭痕より



- 1: 暗灰褐色土 (ローム・焼土・炭化物混じり)
- 2: 暗黄褐色土 (ローム多量含む)
- 3: 褐色土 (ローム多量含む)
- 4: 暗褐色土
- 5: 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含む)
- 6: 暗灰褐色土 (焼土・砂利混じり)
- 7: 褐色土 (ローム・焼土混じり)
- 8: 暗黄褐色土 (ローム主体)
- 9: 褐色土 (ローム多量、焼土混じり)
- 10: 暗褐色土 (ローム・焼土混じり)

III-245図 AE36-4・11実測図 (土層図の水準: 15.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

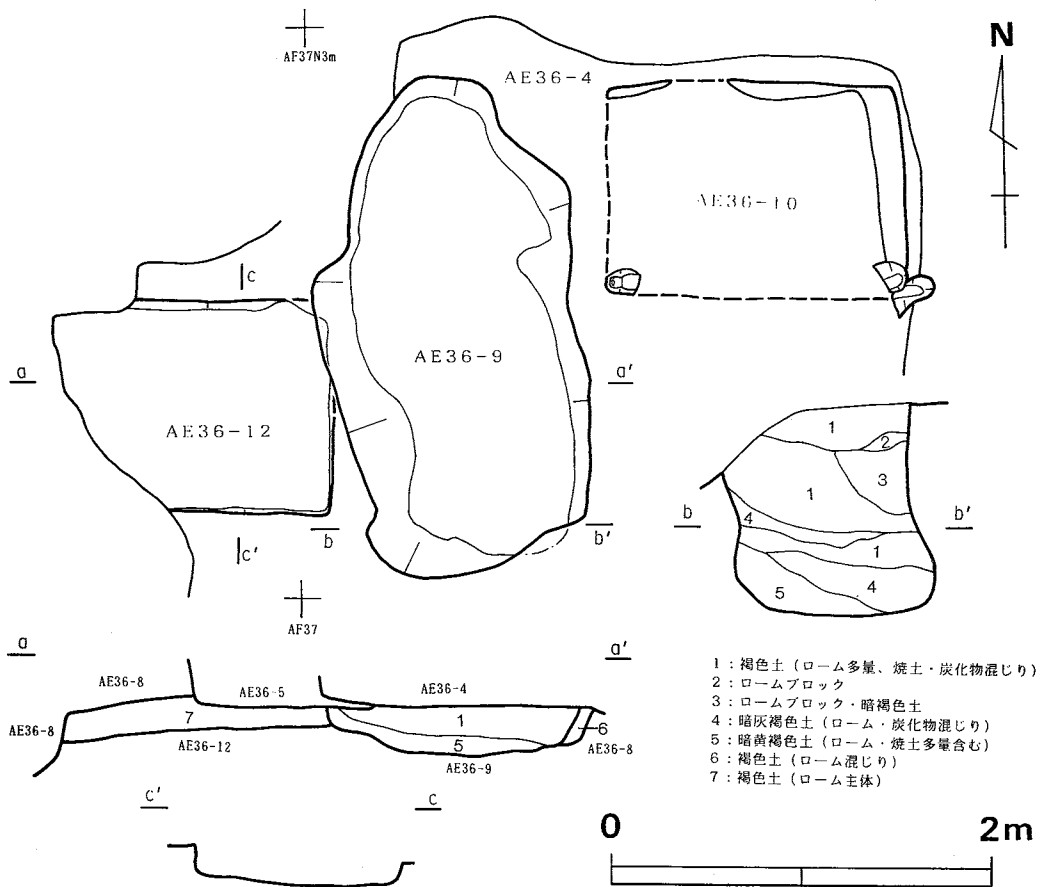
径12cmの丸材が使用されており、間隔は南北で1m、東西は一番西よりは1m、東側の3本は80cmである。底からの深さは平均28cmである。この杭穴と壁との間に幅2から3cmの板材が横積みされていた痕跡が確認された(平面図の破線部分)。埋土は緩やかなレンズ状の堆積を示している。そのなかでも厚い堆積の層には焼土の混入が目立ち、特に6層には瓦片などの人工遺物も含まれている。

(成瀬晃司)

**AE36-5** AE36-37区にある南北2.1m、東西1.2m弱、深さ1mの土坑である(III-244図)。AE36-8・9・12を切り、AE36-1・4に切られている。埋土は暗～暗黄褐色土で、若干の遺物を含んでいる。性格はわからない。

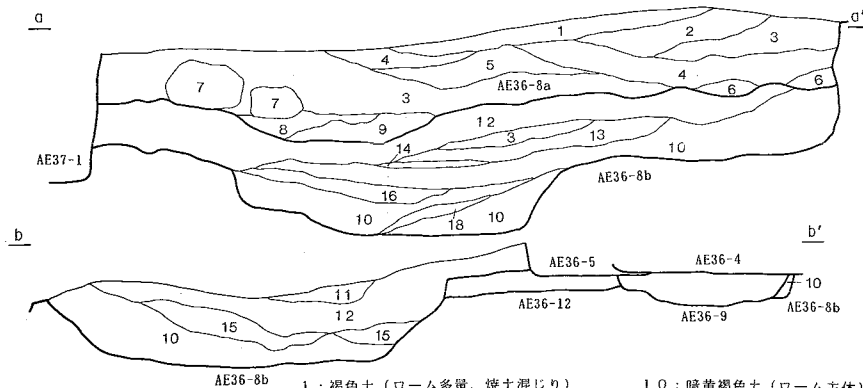
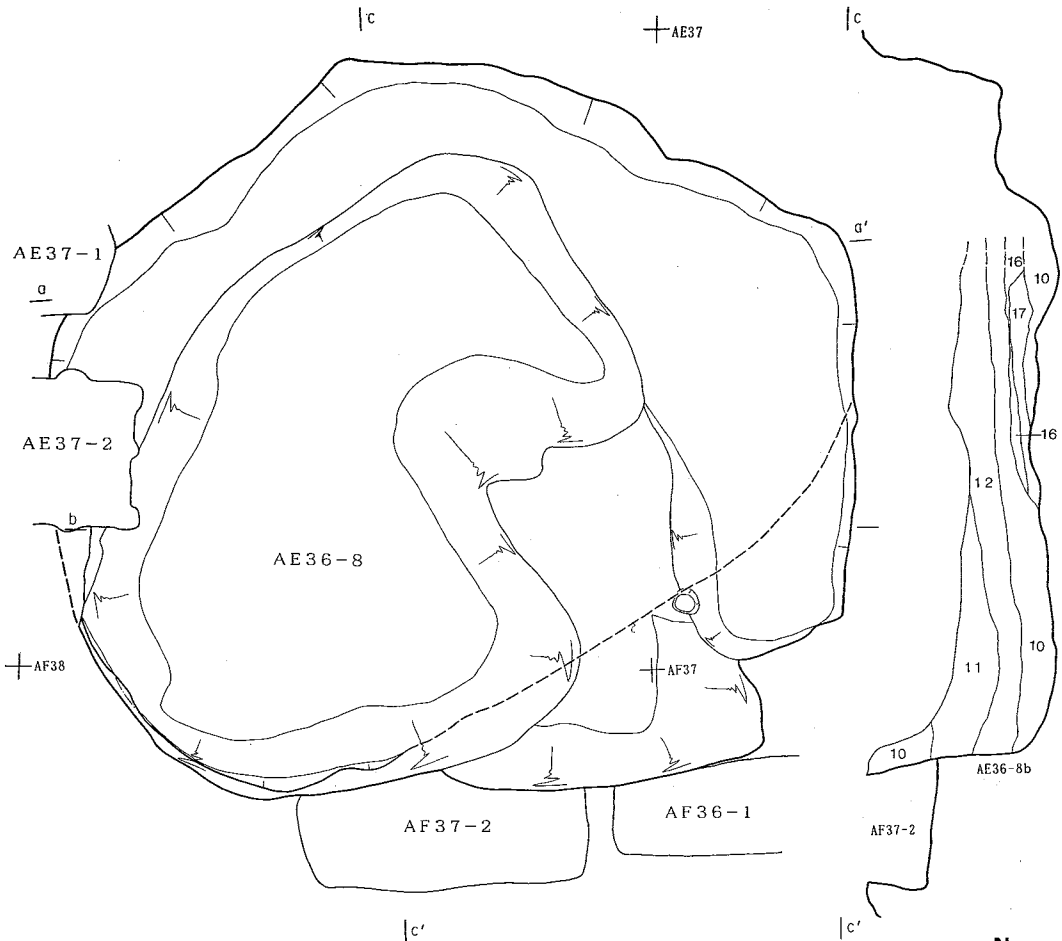
(成瀬晃司)

**AE36-6** AE36区に位置する地下式土坑である(III-244図)。大半をAE36-4に切られ南壁と北壁の一部しか残っていない。南にあるAE36-7を切っている。平面形は南北2.7m、東西1.5m弱の長方形である。壁は垂直であり、90cmが確認されている。底はロームブロックが主の暗黄褐色土で貼床をしている。掘り方はAE36-7の底と同一である。南壁はAE36-7の埋土であるためその崩落を防止するために、一辺10cmの角材を二尺間隔で三本埋め込み板材を横積みしたものである(板材は残



III-246図 AE36-9・10・12実測図(土層図の水準:14.4m)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 : 褐色土 (ローム多量、焼土混じり)    | 10 : 暗黄褐色土 (ローム主体)       |
| 2 : 暗褐色土 (ローム・焼土混じり)     | 11 : 暗灰褐色土 (焼土混じり)       |
| 3 : 暗赤褐色土 (焼土多量含む)       | 12 : 褐色土 (ローム多量含む)       |
| 4 : 暗褐色土 (ローム・焼土・炭化物混じり) | 13 : 褐色土 (ロームブロック主体)     |
| 5 : 褐色土 (ローム・焼土多量含む)     | 14 : 焼土塊・炭化物             |
| 6 : 暗褐色土 (焼土・炭化物混じり)     | 15 : 暗灰褐色土 (ローム・灰色粘土混じり) |
| 7 : ロームブロック              | 16 : 暗褐色土 (ローム・焼土多量含む)   |
| 8 : 暗褐色土 (ローム・炭化物混じり)    | 17 : 褐色土 (ローム・炭化物混じり)    |
| 9 : 暗灰褐色土 (ローム・炭化物混じり)   | 18 : 暗赤褐色土 (焼土主体)        |

### 第三章 江戸時代の遺構

存していない)。角材を埋めた穴のうち東側のものは東西25cm、南北15cmの長方形で、残りは一辺15cmの隅丸方形である。貼床からの深さは25cmである。また東壁には南北35~40cm、東西15cmの長楕円形の穴が3壁にそって並んでいる。掘り方からの深さは20cmある。杭痕は確認されなかったが、板囲いの施設の一部になると考えられる。遺物はない。(成瀬晃司)

AE36-7 AF36区にある土坑である(III-244図)。北側をAE36-6に切られている。東西1.3m強、南北0.8m以上の方形もしくは長方形であろう。壁は垂直で、確認面からの深さは80cmである。底は平坦であり、東壁よりに径6cmの丸い杭痕のある浅い穴がある。杭痕は南東の隅からも発見されたがその性格は不明である。埋土はロームを含むもので南から一気に埋め戻されたものであろう。遺物はない。(成瀬晃司)

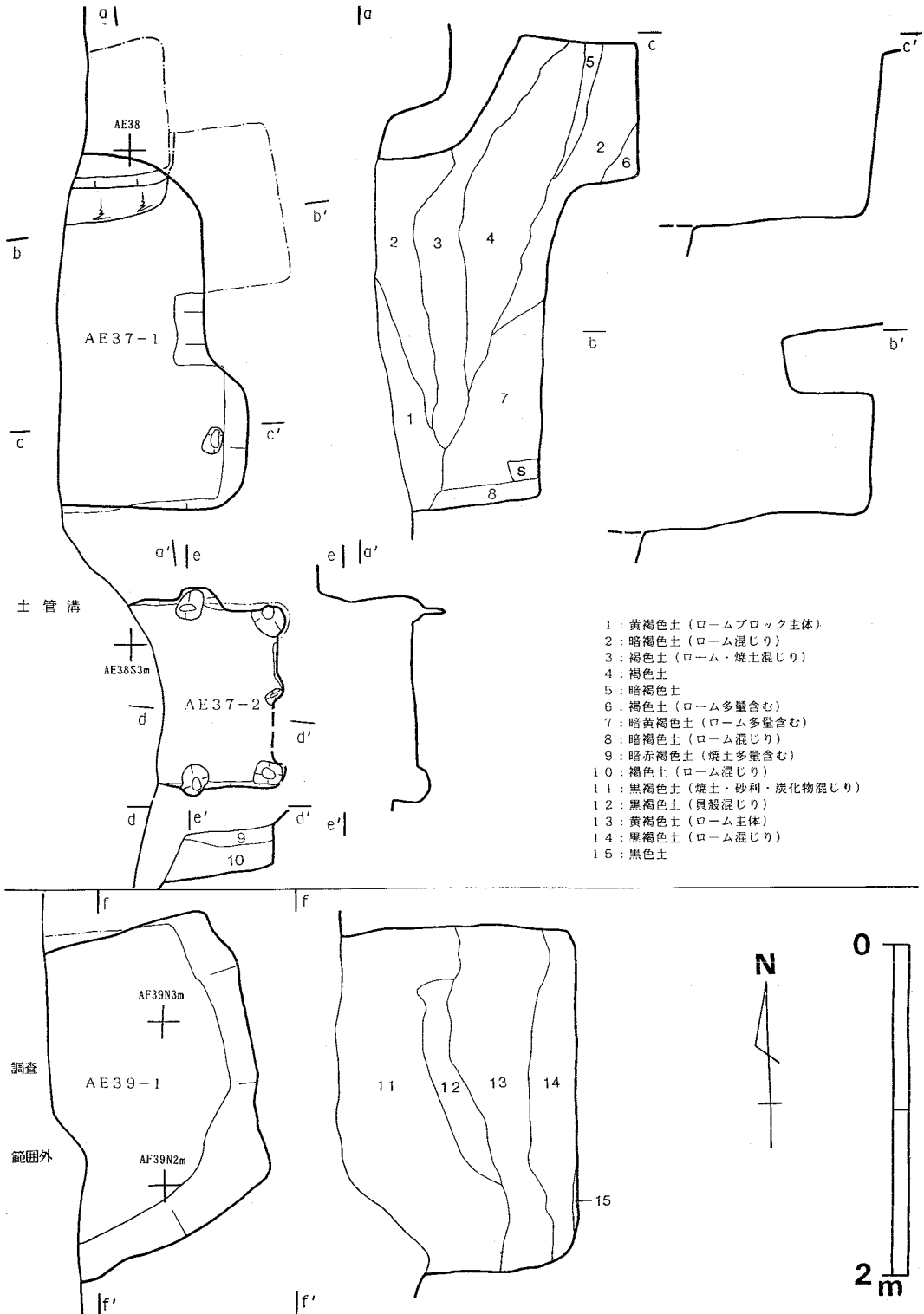
AE36-8 不整な楕円形を呈する大土坑で、AE36-4・5・9、AE37-2に切られ、東南を破壊されているが比較的良好な遺存状態である(III-247図)。壁、底とも凹凸が激しく規格性を持たない。北半には壁にそって「三日月形」のテラスを有す。底は東側に大きなクビレがある楕円形であり、掘り方のままで凹凸が著しい。壁は確認面からテラスまではほぼ垂直であるが、テラスから底までは緩やかである。壁も底同様凹凸が著しい。埋土は大きく2層にとらえられる。上は瓦・焼土・炭化物などを含む暗褐色土・暗赤褐色土が主体であり、下はロームを多量に含む褐色土・暗褐色土が主体を占める。瓦・焼土などの混入より火災の後始末の場として掘られた可能性が高い。遺物は17世紀後半のものが主である。(成瀬晃司)

AE36-9 AE36区にある地下式土坑である。AE36-4・5によって大部分を切られ、南壁以外の壁は底の上20cmしか残っていない(III-246図)。南北に長軸をもつ不整な楕円形で、南北2.7m弱、東西1.4m弱であり、壁は下がややオーヴァーハングしており、断面形は袋状である。埋土の3層はロームブロックである。これはその位置と形状から天井が崩落したものと考えられる。また壁の形、ロームの質から約10cm崩落したもので、東壁は本来直線的に内傾していたものと考えられる。そのほかの埋土は西から東に傾斜して堆積しており、このことから入口が西側にあったことが窺える。遺物はない。(成瀬晃司)

AE36-10 AE36区にある土坑である。この遺構の大部分はAE36-4によって壊されており、わずかに底の一部を残すのみである。南壁側に板囲いの施設の一部と思われる杭穴が東西に一つずつ検出されており、AE36-6を切って構築されたものである(III-246図)。平面形は東西に長軸をもつ長方形で、1.15m×1.5m(推定)である。壁は残っていない。底は一部残存している。先述したように、南側の東西両壁に対峙するコの字形の掘り込みが一对確認された。東側のものは比較的良好な残存状態を示し、幅5cm、奥行15cmの掘り込みが底の下10cmから確認面まで延びている。西側のものも同様な形態であろう。これらは本遺構がAE36-6の北側にそれを切って構築されたため壁の崩落防止のために東西両壁に切り込みを入れ、そこに板材を横積みにしたものと推定される。遺物はみられない。(成瀬晃司)

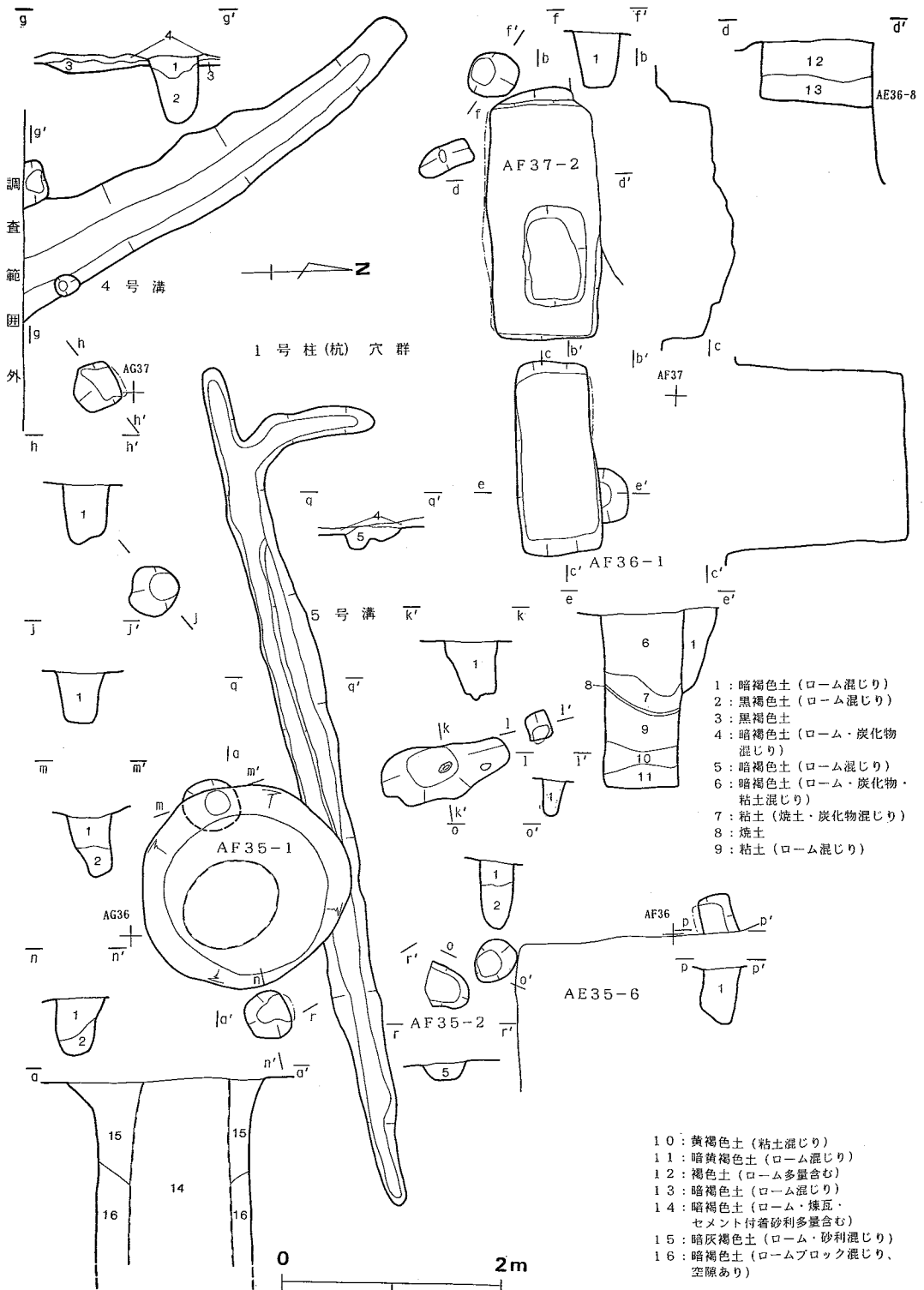
AE36-11 AE36区にある土坑であるが、AE35-3、AE36-2・4・7に切られていて全形は不明である。深さは10cmほどである(III-245図)。埋土は暗褐色土であり、遺物はみられない。時期・性格はわからない。(堀内秀樹)

第三節 設備管理棟建設地点の遺構



III-248図 AE37-1・2, AE39-1実測図 (土層図の水準:14.9m, d-d'-e-e':14.0m)

第三章 江戸時代の遺構



III-249図 AF35-1・2, AF36-1, AF37-2, 4号溝, 5号溝, 1号柱(杭)穴列実測図(土層図の水準: 15.0m)

### 第三節 設備管理棟建設地点の遺構

AE36-12 AE36・37区にある大部分を AE36-8・9に切られた土坑である (III-246図)。全形は不明である。おそらく長方形であったものと考えられ、深さは10cmほどが残っている。埋土は褐色土であり遺物はない。性格はわからない。(成瀬晃司)

AE37-1 AE37・38区にある地下式土坑である (III-248図)。西半は土管の溝で破壊され残っていない。複雑な形態を示す。まず入口は東壁の南側に張り出し部をもつ隅丸方形を呈すると思われ、長軸はほぼ南北を指す。壁はほぼ垂直で、底までは1m弱である。地下室は二室の構成である。一つは東壁の北側に入口の長軸方向と直角につながるもので、奥行60cm弱、幅1m弱のものである。底はほぼ平坦だが入口の下部分よりわずかに高い。壁は奥壁、側壁ともに垂直であり、天井も水平である。奥の壁の高さは75cmほどである。他の一つは北の壁にあり、入口の長軸方向と同一の方向をもつもので、東半分のみが残っている。底は入口の下部分より60cm低く、南北80cmほどである。壁はほぼ垂直で、天井は入口にむけて高くなり、奥の壁とは40cmの高低差がある。入口の張り出し部の東の壁際ほぼ中央に南北17cm、東西10cm、深さ10cmの楕円形の小穴があり、入口施設との関連が考えられる。壁は地下室、入口部ともに丁寧な調整が施されている。埋土は南壁側からの埋め戻しと考えられる3～7層と北側からの埋め戻しと考えられる1・2層に大別される。また8層は壁際にわずかに確認されているのみであるが、板材の痕跡と考えられる。この痕跡から本遺構は板囲いであったものと思われるが、それを思わせる杭穴はなく、手前の切り石で固定されていたと考えられる。18世紀前半の陶磁器などの遺物が若干ある。(成瀬晃司)

AE37-2 AE37・38区にある土坑であるが、西は土管の溝で破壊され、上部はAE36-8により切られている (III-248図)。おそらく長方形であろう。底に径15cmほどの杭穴5がある。隅のものは20cmの深さがあるが他は10cmほどである。壁の板材を押える杭穴であろう。埋土は焼土混じりの暗赤褐色土と褐色土である。17世紀後半から18世紀前半の陶磁器片などの遺物が若干ある。あなぐらに類するものであろう。(成瀬晃司)

AE39-1 AE38・39区にかけてある土坑で、西側は調査区の外にある (III-248図)。南北2m、深さ1.5mほどの長方形であろうと思われる土坑である。全容は不明である。埋土は種々のものの混じる黒褐色土であり、一部黄褐色土がある。18世紀後半から19世紀初頭にかけての遺物がかなり多量に出土している。性格はわからない。(佐々木彰)

AF35-1 AF35・36区にある井戸である (III-249図)。上部では径1.9mあるが、やや下になると1.5mになり、このなかに径90cmの桶が井戸側として入れられていたのであろうが、痕跡をわずかに留めるだけである。5号溝、1号杭穴列を切っている。桶のなかは暗褐色土であり、このなかには煉瓦・コンクリートも混じっていて明治時代以降に埋め戻されたものであることを示している。井戸側と掘り方の間には、上部に暗灰褐色土が、下部にローム混じりの暗褐色土が詰められている。遺物は若干あるが、明治時代以降のものも入っている。(成瀬晃司)

AF35-2 AF35区にある小土坑である (III-249図)。深さは15cm強、埋土は暗褐色土で、遺物はみられない。性格は不明である。(堀内秀樹)

AF36-1 AF36・37区にある東西1.8m、南北0.7m、深さ1.6mの長方形の土坑である (III-249図)。1号杭穴列の一つの杭穴を切っている。埋土は暗褐色土を主体にしているが、粘土や焼土の層



### 第三章 江戸時代の遺構

もあり、下部は黄褐色土を主にしている。17世紀後半代の遺物が若干量出土している。性格は不明である。(佐々木彰)

**AF37-2** AF37区にある東西2.3m、南北1.1m弱、深さ70cmの土坑である(III-249図)。北側をAE36-8に切られている。底は凹凸が激しい。中央やや東よりにある落ち込みも意図的なものではなかった可能性がある。埋土は上に褐色土が、下に暗褐色土がある。どちらもロームを含んでいる。17世紀後半から18世紀前半にかけての陶磁器が若干ある。性格はわからない。(成瀬晃司)

**4号溝** AF・AG37区にある幅60cm内外の溝である(III-249図)。自然堆積の面で確認されている。1号杭穴群の一つにより切られている。北西から南東に向かって走る20cmほどの深さの溝であり、埋土は黒褐色土である。遺物はない。江戸時代初頭以前の遺構であろう。(佐々木彰)

**5号溝** AF35・36・37区にある幅40cm内外の溝である(III-249図)。東北東から西南西に走り、一部これとほぼ直角に出ている部分がある。AF35-1によって切られている。自然堆積の面で発見されている。深さ20cmほどで底は一部二段になっている。埋土はローム混じりの暗褐色土であり、遺物はない。1号杭穴列もほぼ同じ方向であるが、両者の関連は明らかではない。時期・性格は明確ではない。(佐々木彰)

**1号杭穴群** AF・AG35・36・37区にある10の杭穴からなる杭穴群である(III-249図)。径40cm内外、深さ50cmほどの杭穴が長方形にある。埋土はローム混じりの暗褐色土もしくは黒褐色土であり、南側には5本が2m～2.1m間隔に並び、東側には3本が2.1m間隔であり、北側には3本が4m～4.1m間隔で並ぶ。もっとも東の列の西2mほどのところにも1本があり、計10本になる。一見建物が建ちそうな並びであるが、東と南あるいは北の列はかならずしも直角ではないし、間隔もかならずしも一定していない。遺物もなく、時期と性格ははっきりしないが、自然堆積の面で発見しているので、江戸時代初頭を遡るものである可能性もある。5号溝とほぼ同じ方向をもっているが、関連ははっきりしない。(佐々木彰)

## 第四節 給水設備棟建設地点の遺構

### 1 調査の経過

給水設備棟の建設予定地は本郷キャンパスの南東の隅にあたっており、そこへの通路はきわめて狭い。しかもその通路上にあたる設備管理棟の工事が進行中に、その間隙をぬって、調査を実施しその後給水設備棟の建設をするという計画になっており、調査中には排土を外に運び出すこともできないという悪条件下で実施せざるをえなかった。さらに調査開始時には、精神科病棟の菜園が調査地内にあり、“菜園の収穫祭”終了までは菜園部分には手を付けられず、重機による表土の剥取りもできず、コンクリート混じりの表土まで手で掘ることになった。このように直接発掘調査とは関係のないところで種々の負担の多い調査であった。また、中央診療棟建設地点の調査の山場と重なり、給水設備棟の調査にさく人員もなく、筆者一人が調査することになった。

調査地点には、大きな建物はなかったが、キャンパスの隅のため、設備・管理に必要な建物がか

#### 第四節 給水設備棟建設地点の遺構

なりあり、1985年9月に行なった予備調査の結果、地表から1mほどは煉瓦やセメントの混った近代以降の土であることがわかっていたので、重機によってまずこれらを除去することから調査を開始した。先述したように調査地の一部は精神科病棟の“菜園”であったので、これを重機で除去することはできず、後で排土の問題で苦勞することになる。調査は深くなることが予想され、既存の建物とキャンパスを囲む塀の近くを掘ると、調査後は直ちに工事にかかることになっていた。この調査の最大の問題は排土であった。調査開始時の重機による除去と開始後3日間の手掘りによる排土は外部に搬出することができるが、それ以降は設備管理棟の工事のため通路がなくなり、調査終了まで一切の排土の搬出ができないことになっていた。調査区の周囲に土を積み上げるとしてもその面積は狭く限られている。そこで東半分の調査をまず行ない、それを完掘したのち西半分の排土を調査済みの部分に入れることにした。途中排土を塀の外の道から搬出することも検討したが、道幅が狭く重機とトラックを長時間停めておくことは不可能であるので、土を積み上げ踏み固めることでその場をしのいだ。この部分が大学の用地になったのは明治40年代のことであり、江戸時代には越後高田の榊原家の屋敷があったところで、屋敷の中では西北の隅に近いところである。

調査は1985年10・11月に実施している。遺構の数は多くはないが、遺物の量は幕末期に近いころを中心にして多量であった。遺構の深さもかなりあるものがあり、さらに埋まり切っている沢が調査区の北にあり、その底は地表下4.5mにあり、面積は27×12mではあったがかなり手間のかかる調査であった。

(藤本 強)

## 2 調査の概要

給水設備棟の軸線は中央診療棟と同一であり、相互の対比のためにも中央診療棟と同一のグリッドを採用することにした。5mグリッドであり、南北方向にAJ, AK, AL, 東西方向は33, 34, 35, 36, 37, 38のグリッドが調査区に入ることになる(III-251図)。調査区は全面ほぼ平坦であり、地表面は16.1~16.2mの標高をもっている。北と東に向かって若干下がる傾向があるが、はっきりしたものではない。

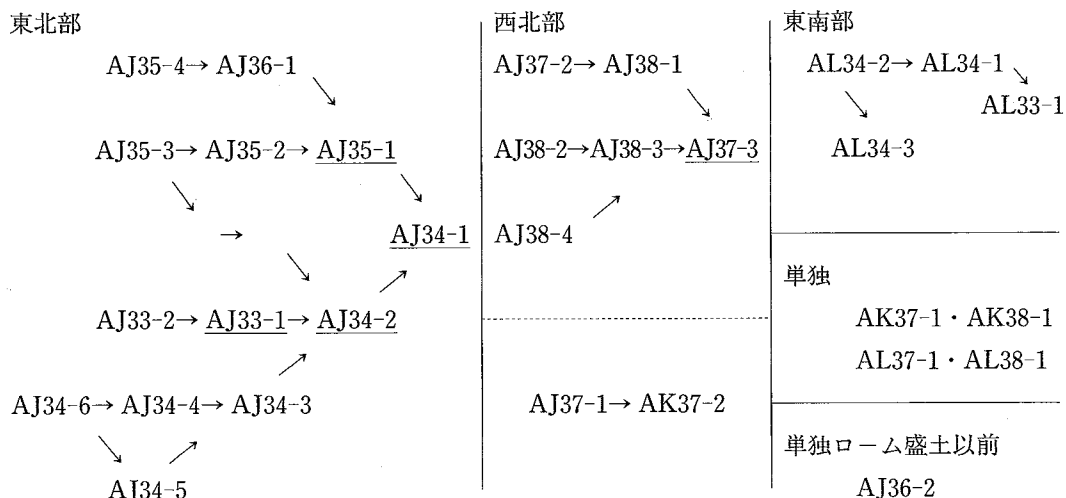
この地点の基本的な層位は以下のとおりである(III-252図)。最上層は1m強の厚さのある煉瓦・セメント混じりの表土である。この下はほぼ純粋のロームからなる盛土がある。これは部分的にかなり厚さが異なる。もっとも厚いのは“菜園”のところであり、ここは上面が標高15.6mほどある。ほかのところでもかつてはこのくらいのところまであったのであろうが、近代の建築その他により上部は削られたのであろう。これは設備管理棟建設予定地点の南部の榊原家の屋敷跡の部分においてもみられるものであり、榊原家の屋敷の西北部には広くあったものであろう。これは完全に均質なロームの盛土であり、ところどころに割れ目・裂け目があるが、自然堆積のロームかと思われるほどである。この地点で発見された30の遺構のうちAJ36-2を除く29の遺構がこの盛土を切って作られている。AJ36-2にはこの盛土が底にまで詰められていた。江戸時代に盛られたものである。

この下は自然堆積になる。自然堆積の最上層は焼土をごくわずかに含む暗褐色土で、その上面は標高14.0~14.5mである。これは中央診療棟地点にもみられる土である。当初この土は人為的な盛

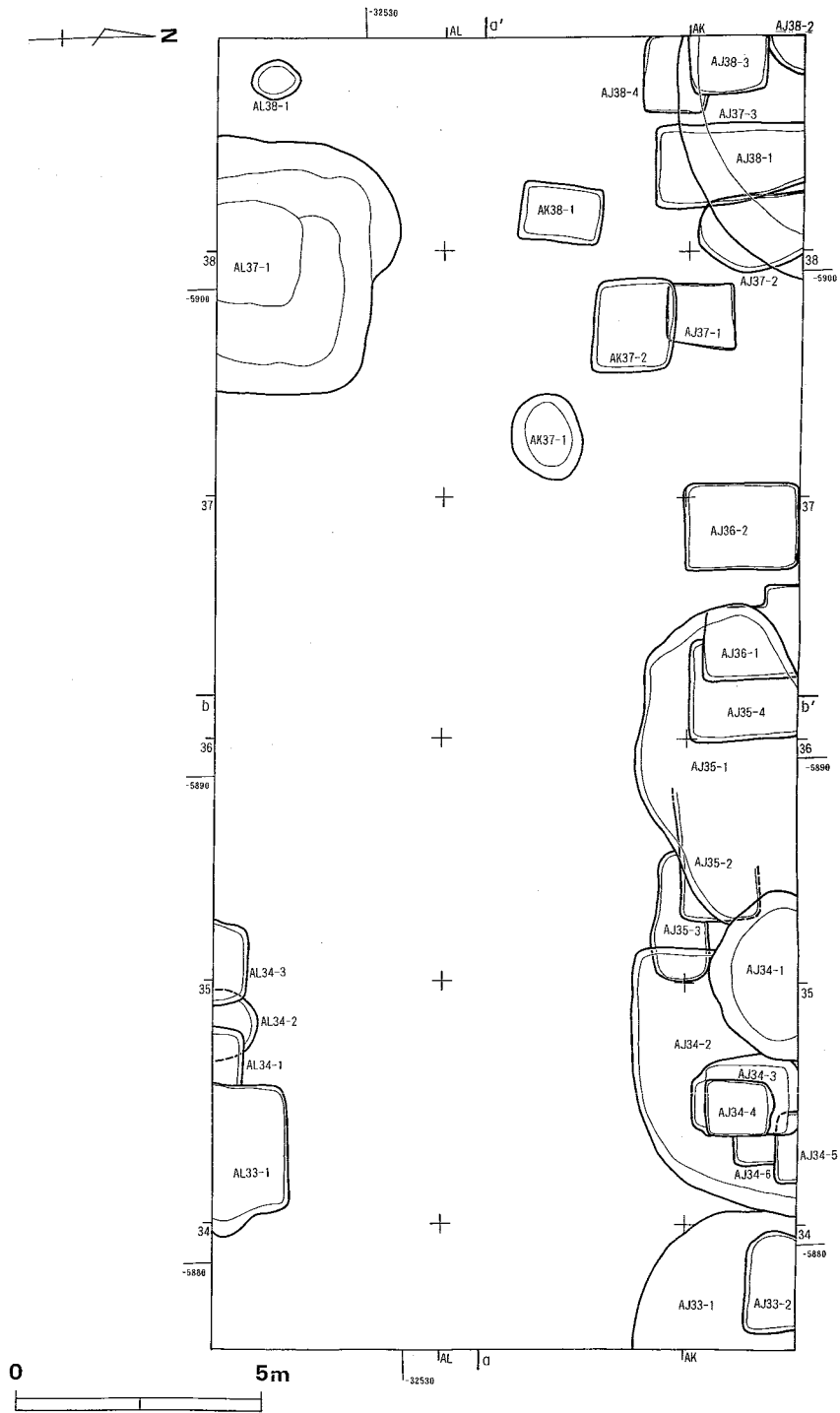
### 第三章 江戸時代の遺構

土かと考えていたが、榊原・前田の両屋敷に広くみられるので、自然堆積と考えるのが妥当であろう。この下には黒褐色土がある。この上部には既に何度か触れたスコリアが含まれている。黒褐色土は調査区の南では薄く、上面が高くなる。これまでは調査区の全面に見られるが、これ以下の層は下にある埋まった沢の部分とそうでない部分では違うようになる。埋まっている沢のなかでは上部は褐色土、下部は暗褐色土があり、その下は沢底に厚い有機質の豊富な黒色土、漸移層、水分の多い粘土化したロームになる。沢の底でもっとも深いところは地表下5.6mになる。沢を埋めている褐色～暗褐色土は沢の中心部で厚く周辺で薄い。厚いところでは1.5mある。同じ沢は中央診療棟建設地点でも発見されており、ここではより厚い堆積をみせている。中央診療棟建設地点ではこの土を切って古墳時代後期の住居址が作られている。沢筋が違うが、御殿下記念館建設地点では同様の堆積を示す沢を埋めている土の上面から縄文時代後期の土器がかなりの量出土している。この土は大洪水などの天変地異によるなどの理由できわめて短時間の間に沢を埋め尽くしたものと考えられる。沢筋は違っても至近の距離にある場所で、まれにみる天然現象で引き起こされ、堆積状況も酷似しているので、同じ時の所産である可能性は高いものとすることができよう。富士の新規テフラの可能性もある。そうするとこの堆積も縄文時代後期以前ということになる。この沢筋に限って言えば古墳時代後期以前に堆積したことになる。この沢の源流は竜岡門から本郷消防署あたりにあったものと思われる。そこから北東に流れ、中央診療棟建設地点で向きを変え東流していたものであろう。沢の外では黒褐色土、漸移層、いわゆるソフト・ローム、ハード・ロームと続く本郷台地の通常の堆積がみられる。これらの堆積は設備管理棟地点、中央診療棟地点に共通するものであり御殿下記念館地点とも類似するものである。

先にも述べたように、この地点では30の遺構が発見されている。AJ36-2を除く29の遺構がロームの盛土を切っている。AJ36-2は他の29の遺構よりは層位的に古いが、これとてもロームの盛土が底に詰まっており、盛土に近い時期の構築である。この地点の中央には遺構は全く認められず、北端と南端、特に北端に多数認められる。そのなかで目に付くのは、AJ33-1、AJ34-1・2、AJ35-1、AJ37-3と続く一連の土坑である。これらはいずれも不整な形をしているもので、それらのなかには陶磁器

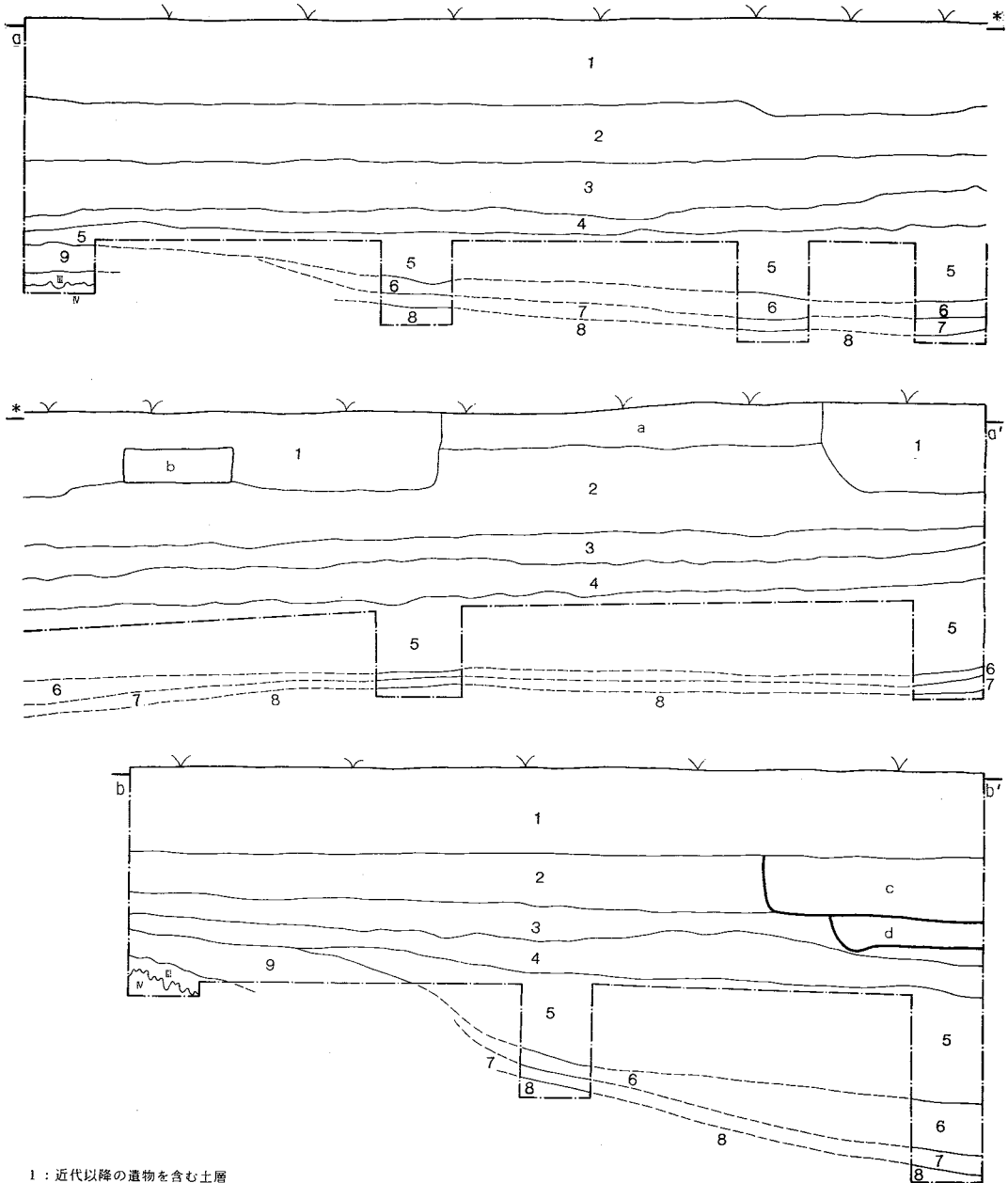


第四節 給水設備棟建設地点の遺構

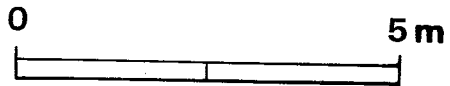


III-251図 給水設備棟建設地点平面図(国土地標系IX系)

### 第三章 江戸時代の遺構

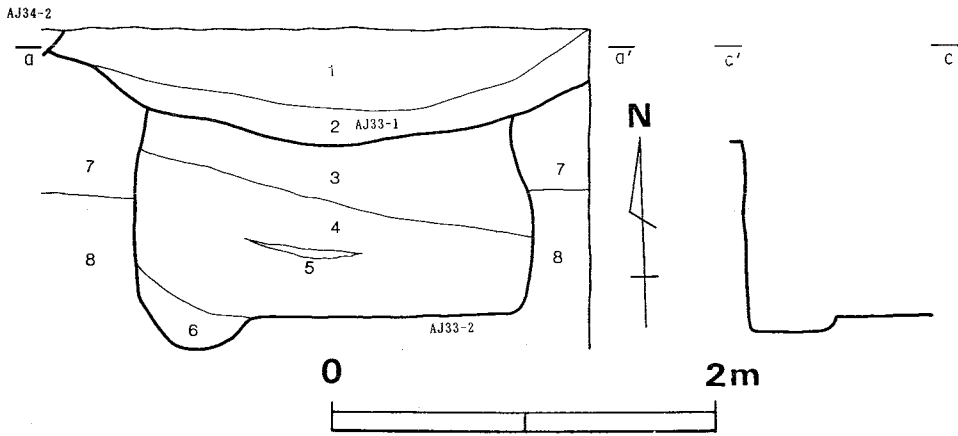
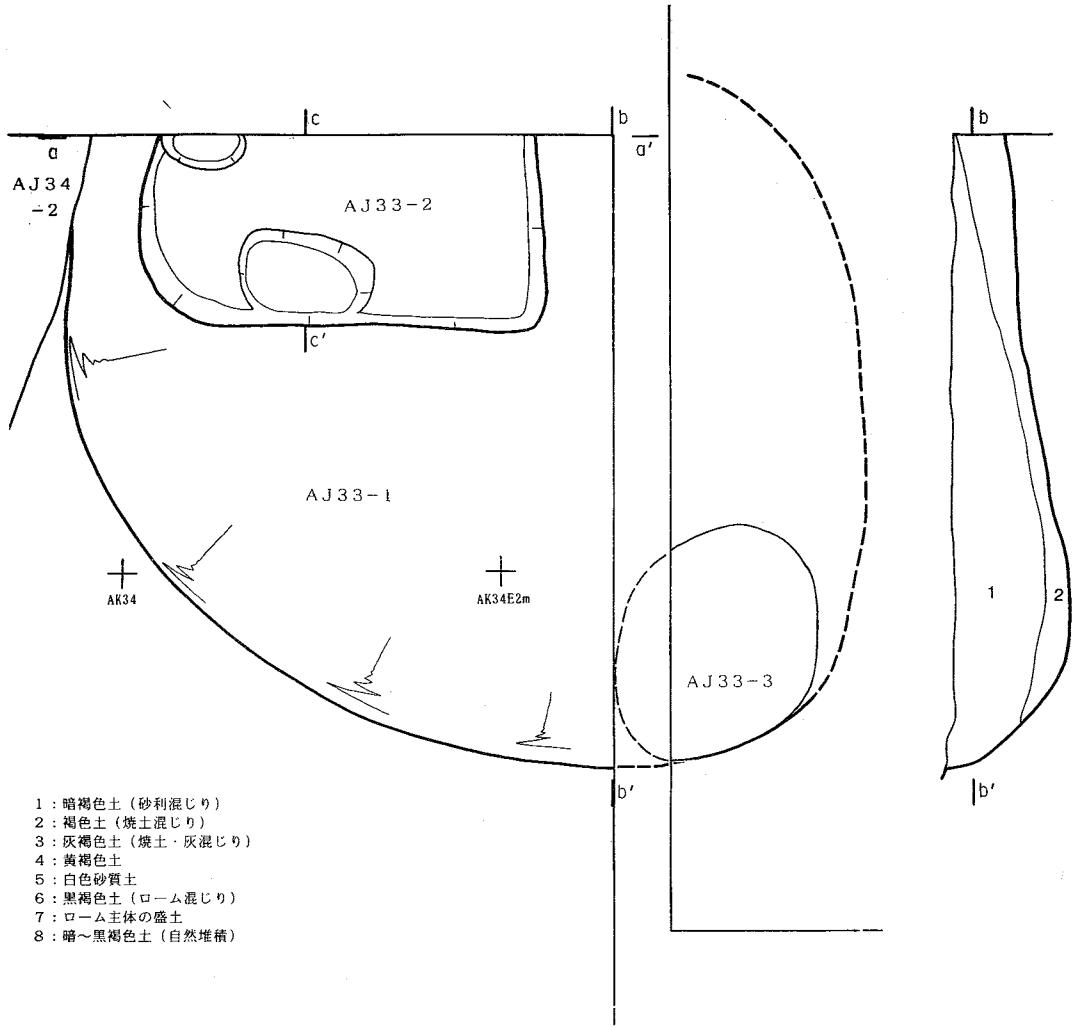


- 1 : 近代以降の遺物を含む土層
- 2 : ロームを主体とする盛土
- 3 : 暗褐色土 (焼土微量含む、自然堆積)
- 4 : 黒褐色土
- 5 : 暗褐色土～褐色土 (二次堆積ローム?含む)
- 6 : 黒色土 (粘性強)
- 7 : 黒色土～粘土化したロームの漸移層
- 8 : 粘土化したローム
- 9 : 黒褐色土～ローム漸移層
- a : 精神科病院菜園耕作土
- b : 大正時代井戸コンクリート基礎
- c : AJ35-1埋土
- d : AJ35-4埋土



III-252図 給水設備棟建設地点基本土層図 (水準:16.0m)

第四節 給水設備棟建設地点の遺構



III-253図 AJ33-1・2実測図 (土層図の水準: 14.7m)

### 第III章 江戸時代の遺構

を初めとする多量の遺物が入っていた。おそらくゴミ穴として掘られ使用されたものであろう。これらに切られる小型の方形のものを主とする土坑が東西に並ぶ。これらの性格は不明である。

南端には東側に 4土坑、西側に 2遺構がある。東の 4土坑の性格は不明であるが、大型の AL37-1 はゴミ穴に利用されている。本来何を目的にしたものであったのかは明らかにできなかった。ゴミ穴としての利用はなんらかの目的をもったものの再利用であろう。西端の AL38-1は埋土、形状、規模から厠の下穴ではないかと思われる。349頁に本地点の遺構の切りあい関係をまとめておく(アンダーラインはゴミ穴を目的にしたもの)。

以上のような状況から考えると、本地点は榊原家の屋敷の中心部からはずれた、いわば屋敷の陰の部分であったと考えることができよう。明確な形で性格が把握できるのはゴミ穴のみであり、それも江戸時代の終末近いものばかりである。ゴミ穴はいずれも切りあい関係の新しいところに出現している。このほかは性格がはっきりした形で把握できる遺構は少ない。遺物は調査区北端のゴミ穴を中心にして多量に出土している。深い平箱にギッシリ詰めて 120以上の遺物である。多くは19世紀になってからの陶磁器であり、江戸時代終末近いものである。(藤本 強)

### 3 遺構各説

AJ33-1 5m×4mの楕円形の鍋底状の窪みである(III-253図)。深さは確認面から0.6mである。埋土は砂利混じりの暗褐色土が上部にあり、ここに多量の遺物が含まれていた。下部には焼土混じりの褐色土がある。東端は共同溝建設地点にあり、北端は調査区の外にある。ゴミ穴である。

AJ33-2 東西2.2m弱、南北は不明の方形の土坑である(III-253図)。深さは確認したところから1mほどである。埋土は上部に焼土・灰を含む灰褐色土があり、下部はロームを主体にする黄褐色土である。黄褐色土中に白色砂質土の薄層がある。堆積はレンズ状のものではなく人為的に埋められた可能性がある。底に杭穴 2がある。深さは20cm弱と10cm弱と浅い。性格は不明である。

AJ34-1 長軸を略東西にもつ、深めの鍋底状の土坑である。長軸は3.5m、深さは確認面から1.3mである(III-254・255図)。貝殻・炭化物を含む暗褐色～褐色土が厚い堆積をみせており、ここに多量の遺物が含まれている。下部には比較的炭化物などの少ない褐色土がある。この付近の土坑のなかでは、もっとも新しい。ゴミ穴と考えられる。

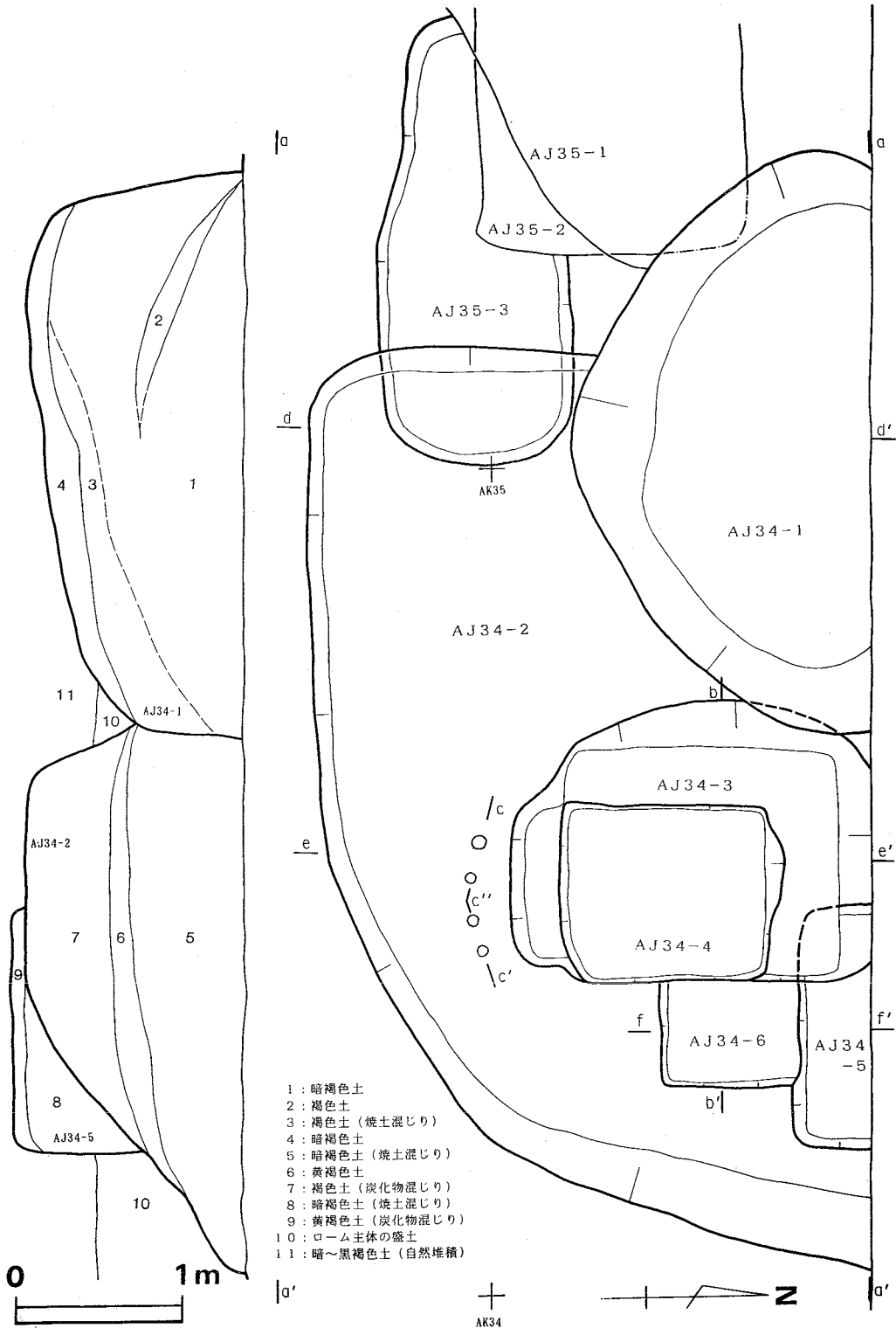
AJ34-2 大型の鍋底状の土坑である。形は不整であり、全体の形状・規模は不明である。調査区内のもっとも長いところで6mをこえているので大型である(III-254・255図)。深さも深いところは1.3mある。埋土は焼土混じりの暗褐色土・黄褐色土・炭化物を含む褐色土となっている。これらからかなり多量の遺物が出土している。不整な形状をしたゴミ穴である。

AJ34-3 南北2.2m、東西1.7mの略長方形の土坑である(III-254図)。南壁の一部が張り出す。西の壁外にある径6cm、深さ20cm以下の4本の杭穴もこれに伴うものであろう。深さは1mほどである。埋土の上部は焼土混じりの褐色土で、下に黄褐色土・褐色土・黒褐色土がある。性格は不明。

AJ34-4 東西1.1m、南北1.3mの方形の土坑である(III-254図)。北壁に崩れた部分があるが、壁は垂直で、埋土は焼土を含む暗褐色土である。上部をAJ34-3に切られている。性格は不明。

AJ34-5・6 どちらも周囲の土坑に切られ、わずかに残っている方形の土坑である(III-254図)。

第四節 給水設備棟建設地点の遺構





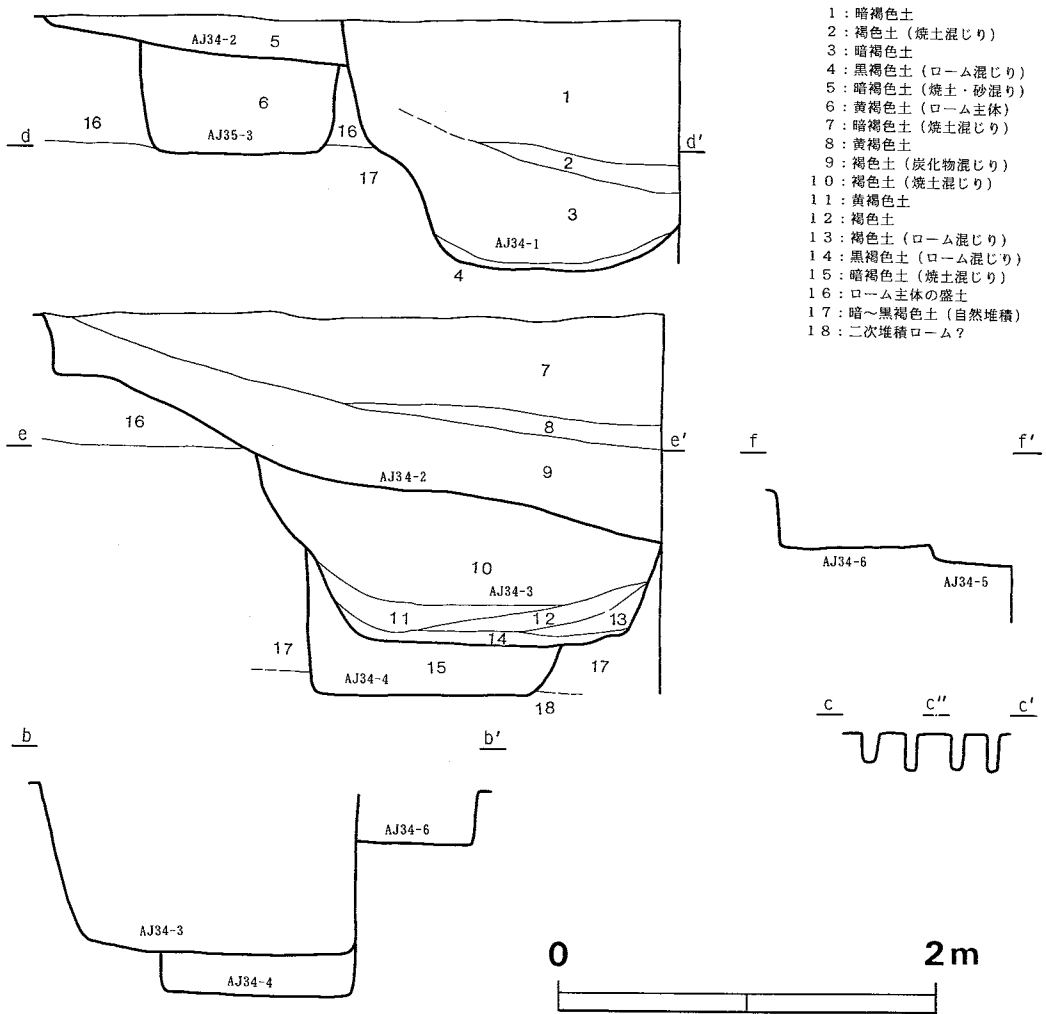
第三章 江戸時代の遺構

5は東西が1.5mであるが、あとは規模不明。埋土は 5が焼土混じりの暗褐色土が上部に、炭化物混じりの黄褐色土が下部にある。6は暗褐色土が埋土になっている。両者とも性格は不明である。

**AJ35-1** 6.6mの長軸を東西にもつ楕円形の大型の土坑である(III-256・257図)。北側が一段深くなっていて1.8mの深さがある。埋土は焼土とローム混じりの暗褐色土であり、多量の遺物を含み、厚く堆積している。深いところではこの下に暗～黄褐色土の層が4枚ある。北端近くに杭穴があるが、埋土が異なるので直接の関連はないであろう。ゴミ穴であろう。

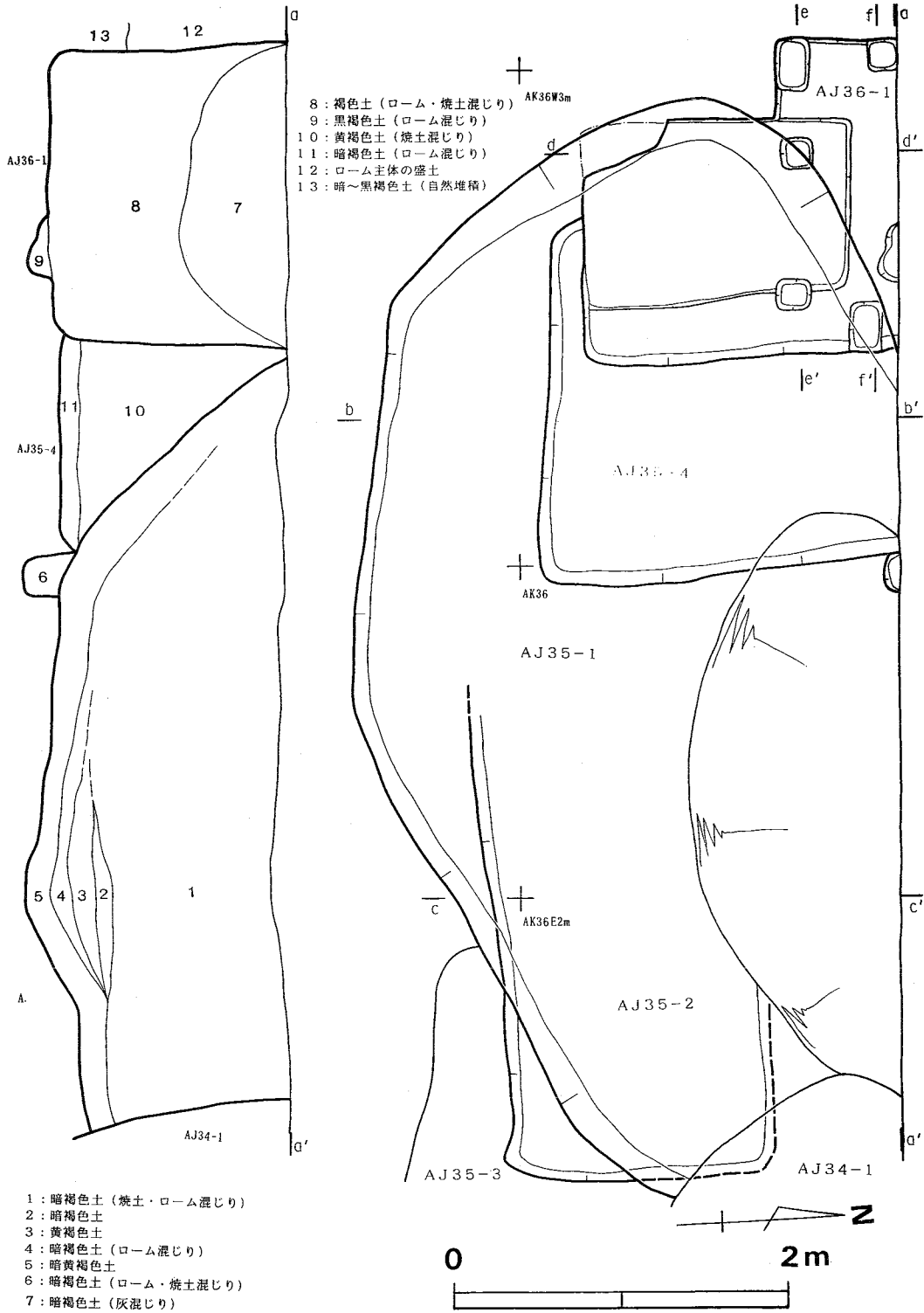
**AJ35-2** AJ35-1にほとんど切られ、短軸が1.6mとわかるだけである(III-256・257図)。長方形であったのであろうが、AJ35-1が西になるにつれ深くなるので、形が明確でなくなり、ついには消えてしまう。埋土はローム・焼土混じりの褐色土である。性格は不明である。

**AJ35-3** 長軸2.8m、短軸1.2mの不整な杓子形の土坑である(III-254図)。埋土はロームを主体



III-255図 AJ34-1～6、AJ35-3土層図(水準:14.0m、c-c':14.2m)

第四節 給水設備棟建設地点の遺構

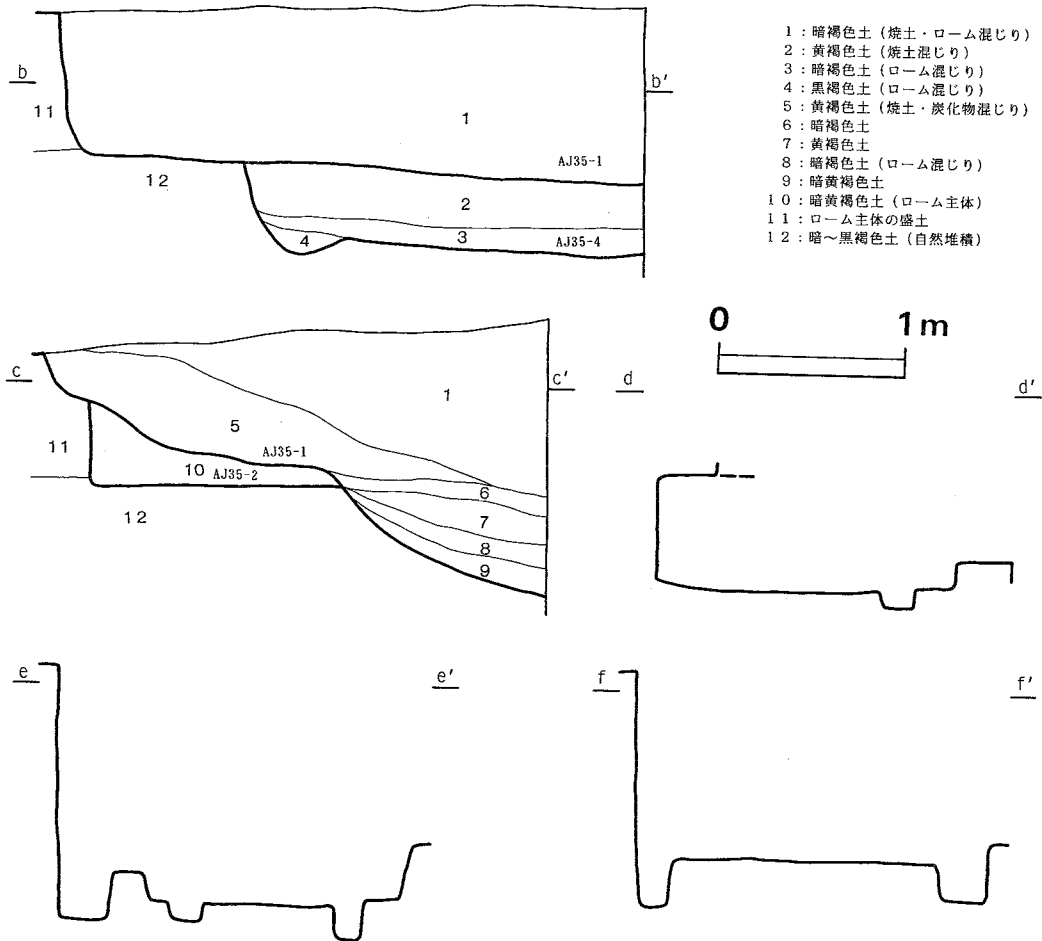


第三章 江戸時代の遺構

にする黄褐色土である。性格は不明である。

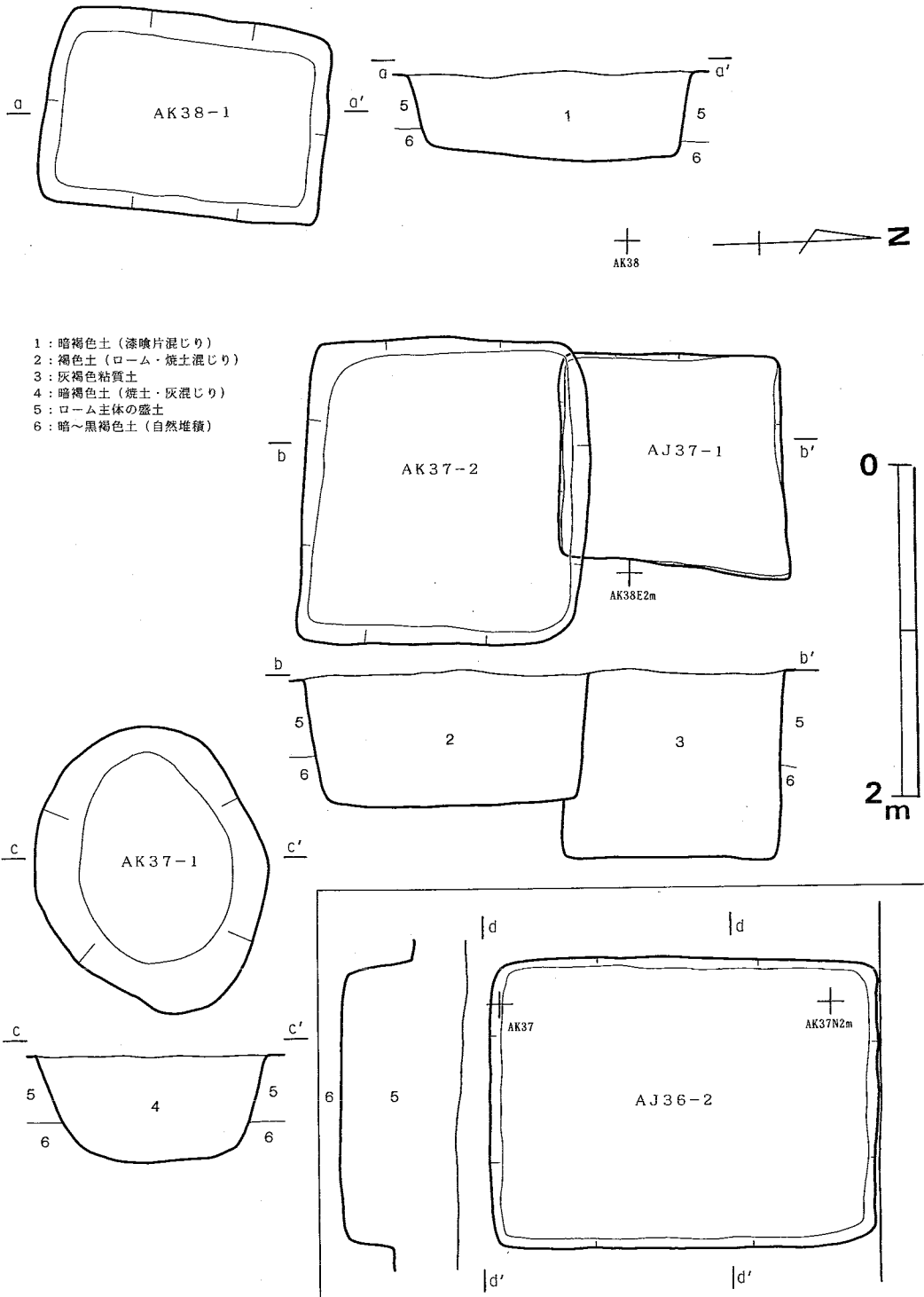
**AJ35-4** 方形の平面形をもっていたのであろうが、AJ35-1・AJ36-1に大きく切られているので明確ではない(III-256・257図)。南の壁は2.2mくらいある。焼土混じりの黄褐色土が上部の、ローム混じり暗褐色土が下部の埋土になっている。性格は不明である。

**AJ36-1** 上部をAJ35-1に切られ全容は不明であるが、複雑な構造をした土坑である。南西の隅には土の天井もあり、底は2段になっている。南に張り出し部と底の深い部分がある。張り出し部は東西1.5m、南北1.2mで、底の深いところは東西1.1m、南北1.6mである(III-256図)。10~20cmの深さの方形の杭穴5がある。配置・埋土の状況からこの土坑に伴うものと考えられる。北端の完全には調査できなかったひさご形の杭穴は埋土が異なる。土坑の埋土は上部が灰を含む暗褐色土、下部がローム・焼土混じりの褐色土である。自然に堆積したと考えられる状況である。土の天井があることを考えると地下式土坑ともいえるかもしれない。機能はどうであったのであろうか。また杭穴がどのように機能していたのか個々のケースを基礎に詰めていく必要があろう。



III-257図 AJ35-1・2・4, AJ36-1土層図 (水準:14.5m)

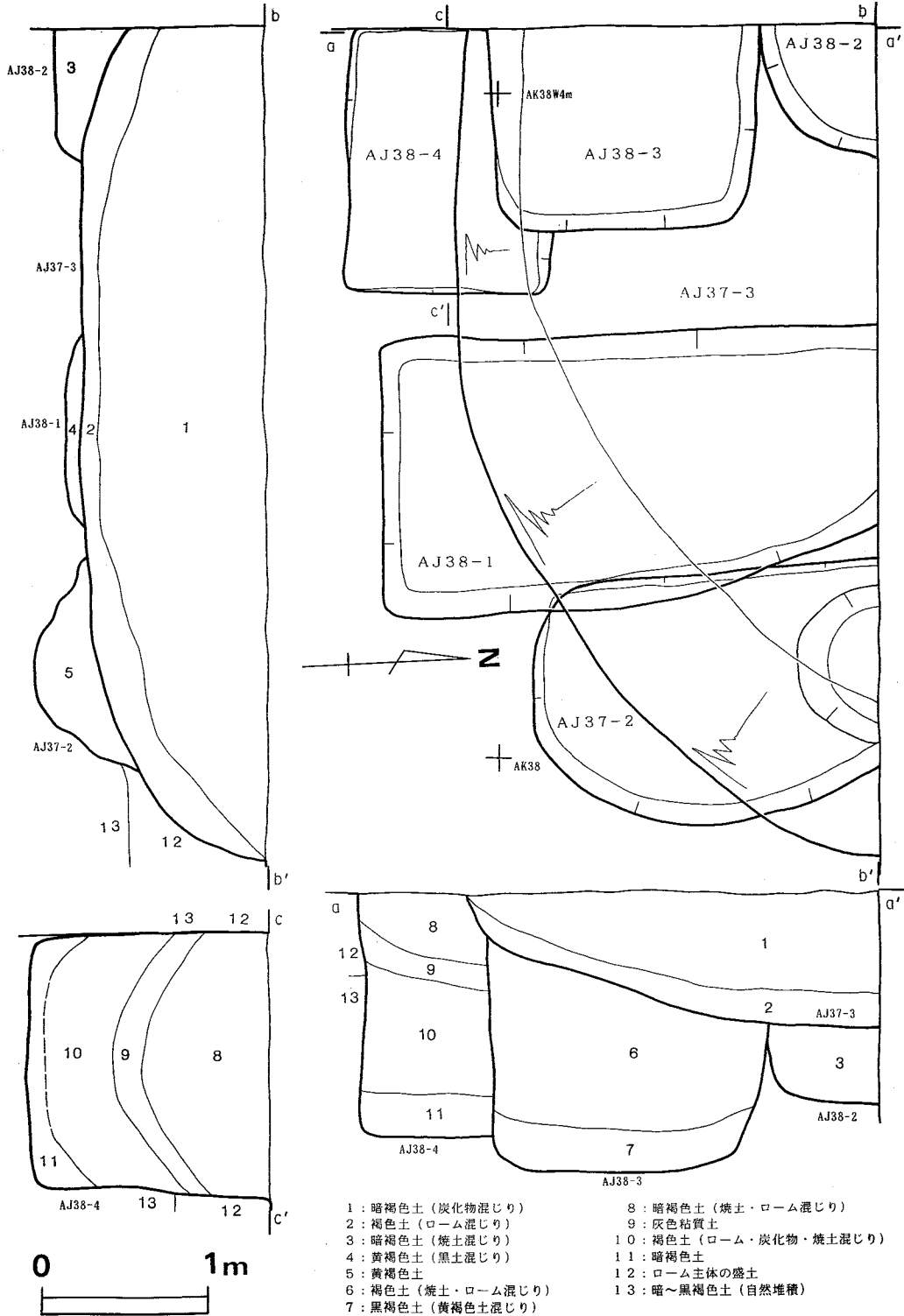
第四節 給水設備棟建設地点の遺構



- 1 : 暗褐色土 (漆喰片混じり)
- 2 : 褐色土 (ローム・焼土混じり)
- 3 : 灰褐色粘質土
- 4 : 暗褐色土 (焼土・灰混じり)
- 5 : ローム主体の盛土
- 6 : 暗~黒褐色土 (自然堆積)

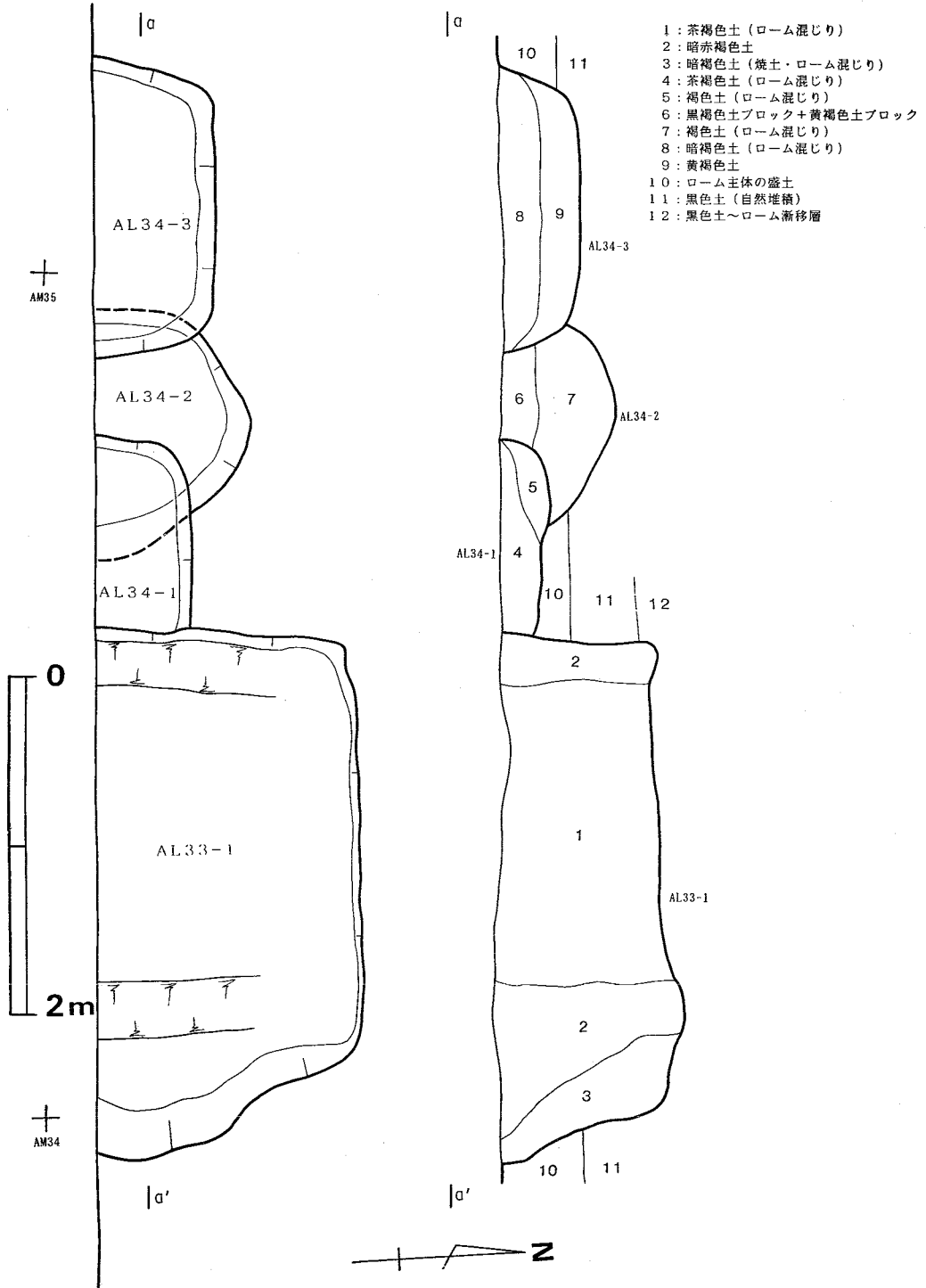
III-258図 AJ36-2, AJ37-1, AK37-1・2, AK38-1実測図 (土層図の水準:14.7m)

第三章 江戸時代の遺構



III-259図 AJ37-2・3, AJ38-1~4 実測図 (土層図の水準:15.0m)

第四節 給水設備棟建設地点の遺構



III-260図 AL33-1, AL34-1~3 実測図 (土層図の水準:15.0m)

### 第三章 江戸時代の遺構

AJ36-2 ただ一つのロームの盛土以前の土坑である。ロームの盛土が底まで詰まっているので時間的には正に直前に放棄されたということになろう。南北2.3m, 東西1.8m 弱の方形の土坑で、深さは0.4m である (III-258図)。性格はわからない。

AJ37-1 一辺1.3mの方形の土坑である (III-258図)。埋土は灰褐色粘質土である。一部AK37-2に切られている。性格は不明。

AJ37-2 AJ37-3・AJ38-1 に切られ、長楕円形をしているが、きわめて不整である (III-259図)。北端に深い部分がある。深い部分を含め、同一の埋土で黄褐色土である。性格は不明。

AJ37-3 平面形は楕円形になるであろう大型の鍋底状の土坑である (III-259図)。規模は調査区外に中心があるため不明である。埋土は上部に炭化物混じりの暗褐色土が、下部はローム混じりの褐色土がある。西北部の遺構のなかではもっとも新しい。深さは1.1m ほどで、遺物は多量に出土している。ゴミ穴である。

AJ38-1 短軸1.7mほどの不整な長方形の土坑であろう (III-259図)。上部はAJ37-3に切られている。埋土は黒土混じりの黄褐色土である。壁は緩やかに立ち上がっている。性格は不明。

AJ38-2・3・4 調査区の西北端の土坑である (III-259図)。3は2・4を切っており、南北1.7mほどの長方形の土坑であったものであろうが、調査区の外にかかるため明らかではない。4はこれに切られている東西1.6m, 南北1.2mの長方形の土坑である。2は一部のみが発見されたもので規模・形状・性格は不明である。埋土は2が焼土混じりの暗褐色土、3は上部がローム・焼土混じりの褐色土、下部は黒褐色土、4は種々のものを含む暗褐色土が主になっている。性格は不明である。

AK37-1 AK37区の東よりにある東西1.7m 強, 南北1.4m, 深さ0.65mの楕円形の土坑である (III-258図)。埋土は焼土・灰混じりの暗褐色土であり、一様である。性格は不明。

AK37-2 一辺1.8m~1.9m, 深さ0.8mほどの方形の土坑である (III-258図)。埋土はローム・焼土混じりの褐色土である。AJ37-1を切っている。性格は不明。

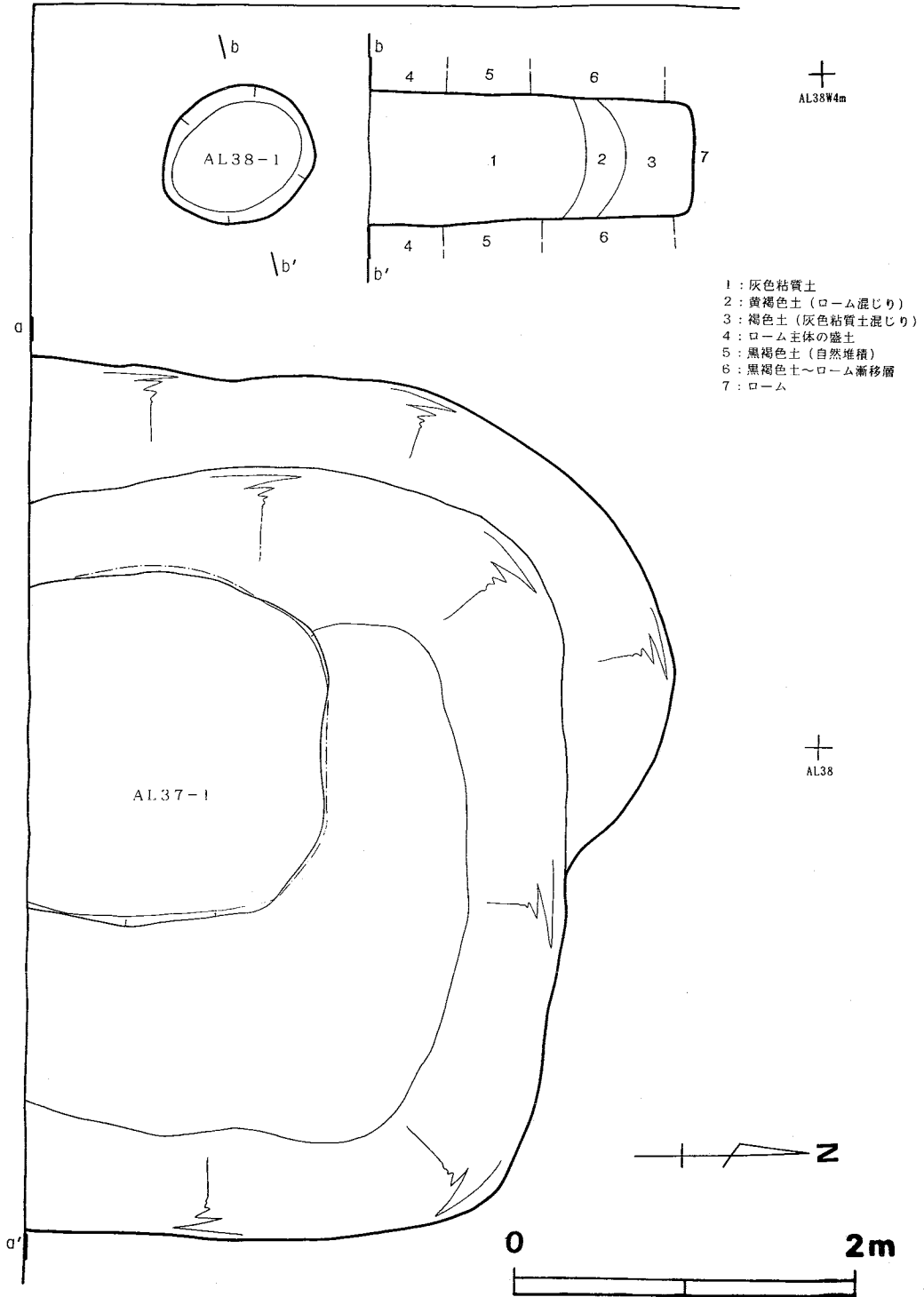
AK38-1 AK38区の東よりにある、南北1.7m 強, 東西1.2m, 深さ0.5mほどの長方形の土坑である (III-258図)。埋土は暗褐色土であり、瓦の小破片・漆喰片をかなり含んでいる。性格は不明。

AL33-1 調査区の東南隅に発見された土坑で南側は調査区の外にある。東西3m 強の不整な形をしている (III-260図)。深さは1m 強である。埋土は特異な堆積をしている。中央にはローム混じりの茶褐色土が堆積し、西と東の端では垂直な焼土を含む堆積がある。この堆積から考えると、まず全体を一度掘り、その後東側には焼土・ローム混じりの暗褐色土を、西側には焼土を多量に含む暗赤褐色土を詰めたものと考えられる。この両端の部分は掘りくぼめられている。明らかに人為的な堆積であるが、何を目的にしたものかはわからない。北にはみられない。遺構の性格は不明。

AL34-1・2・3 いずれも南側は調査区の外にある (III-260図)。1は方形であろうが、規模・形状は不明。2は径1.5mほどの略円形の土坑であろうが、明確ではない。3は長軸1.8mの六角形になるようにも思われるがはっきりしない。いずれの土坑もローム混じりの黒~黄褐色土が埋土になっている。性格は不明である。

AL37-1 東西5.2m, 南北現存4m 弱の大型土坑である (III-261・262図)。複数の段のある複雑な構造になっている。あるいは時期を異にして利用されたのかとも思われるが、埋土の堆積はそれを

第四節 給水設備棟建設地点の遺構



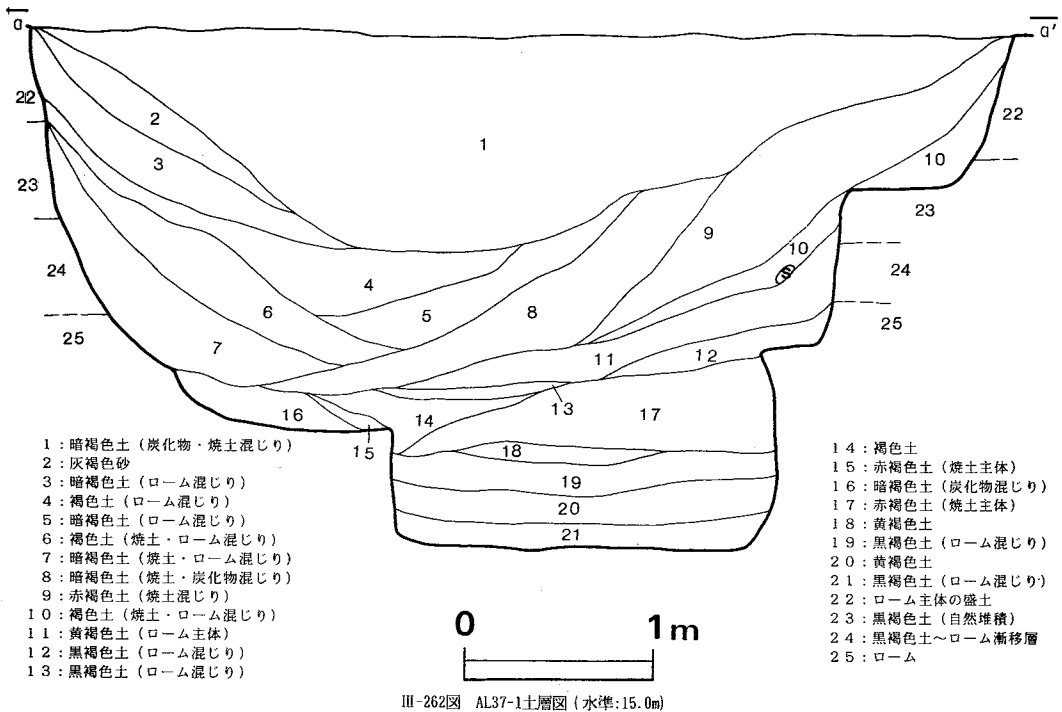
III-261図 AL37-1、AL38-1実測図 (土層図の水準:15.0m)



### 第三章 江戸時代の遺構

積極的に跡づけてはいない。深さは2.7mと深い。炭化物・焼土混じりの暗褐色土である最上層からは明治になってからのものではないかと考えられる遺物が多量に出土している。くぼみを利用して投げ込んだものと考えられよう。その下はかなり複雑な堆積をしている。周囲から繰り返し投げ入れたものとできよう。最終的にはゴミ穴に利用されたのであろうが、そもそも何を目的にして作られたのかは不明である。

AL38-1 調査区西南隅近くで発見された長径1m弱、短径0.8m、深さ2m弱の楕円形の土坑である(III-261図)。埋土は灰色粘質土、ローム混じり黄褐色土、灰色粘質土混じり褐色土と続く。灰色粘質土の存在、その形・規模から厠の下穴であった可能性が高い。(藤本 強)



## 第五節 共同溝建設地点などの遺構

### 1 調査の経過と概要

医学部附属病院の全面改築にともない、共同溝・排水管の新たな建設・移設が必要となった。排水管は構内の排水本管の一本がこの地区を通っていることもあり、建設・移設はかなり大がかりなものであった。共同溝も病院全体に光熱水道関係をすべて供給するものであり、大型の共同溝の必要があり、大がかりなものが予定されていた。当初の予定では、3000m<sup>2</sup>に近い面積の調査が必要とされた。施設部との話し合いを重ね、埋蔵文化財保存の見地と発掘調査面積を極力減少させようと

## 第五節 共同溝建設地点などの遺構

することから、建設工事に費用はかかるが、必要最小限の竖坑を開け、そこから地下深くを推進工法によって、排水管、共同溝を設置することになった。

調査は工事の進行にあわせ進めることにしたため、概ね4期にわけて実施した。以下に調査した時期・位置・面積を列挙する。

1985年 7月

U・V =31・32区：25.8m<sup>2</sup>， U・V =33区：7.8m<sup>2</sup>， U・V =37・38区：7.1m<sup>2</sup>， U・V =40・41区：26.4m<sup>2</sup>， V・W =44区：9.4m<sup>2</sup>， Y40区：5.3m<sup>2</sup>， AE40区：7.1m<sup>2</sup> 計88.9m<sup>2</sup>

1986年 1月 X～AE =33 区・AF～AL =32・33区：137.6m<sup>2</sup>

1986年11月 U・V =48・49区：24.6m<sup>2</sup>， J～M =38・39 区：93.2m<sup>2</sup> 計117.8m<sup>2</sup>

1987年 2・3月

V～X =45～47区：125.7m<sup>2</sup>， V・W =52・53区：49.7m<sup>2</sup>， X・Y =48・49区：5.8m<sup>2</sup> 計181.2m<sup>2</sup>

これらを合計すると525.5m<sup>2</sup>になる。これらの地点は建物は比較的少ないところではあるが、電気・ガス・上水道・排水管・共同溝などの建設によってかなり破壊されている部分もあった。間がとびとびであるので、また破壊されている部分があるので全体像は把握し難いが、重要な発見も含んでいる。U・V =31・32区と V～X =45～47区を除くと遺構の数は少なく、遺物の量も少ない。これらを除くと主要な建築空間ではなかった可能性が強い。むしろ通路・空地として利用されていた部分であろう。

1985年7月の調査は排水管移設に伴うものであり、Vラインを中心にして、それから派生する地点の調査であった。U・V =31・32区を除くと比較的簡単な調査であった。1986年1月の調査は給水設備棟と設備管理棟を結ぶ共同溝建設地点の調査であり、この地点の北側は破壊がひどくほとんど調査不能であった。1986年11月の調査はU・V =48・49区が排水管移設のため、J～M =38・39区が中央診療棟と設備管理棟を結ぶ共同溝の竖坑部分の調査であった。前者はあまり破壊されておらず、遺構も少なかったため、比較的順調に調査できたが、後者は破壊がひどく調査できたのは限られた部分であった。1987年2・3月の調査は設備管理棟からの共同溝と大学の共同溝本溝とを接続する共同溝の竖坑部分の調査であった。かなりの数の遺構が出現した。

この地点の調査はとびとびであり、遺構から復元することは困難である。しかしとびとびではあっても広い範囲にいわばテストピットを掘った形になっている。絵図面の助けを借り、遺構と屋敷の利用の仕方に関係づけておくことも今後の調査の目安になるであろう。

『大聖寺藩史』（1938年 大聖寺藩史編纂会）に掲載されている絵図（文化年間）、「天保図」によると現在の本富士警察署から竜岡門にむかって北進する道、竜岡門のまえで東に曲がる道、さらに北に曲がる道は江戸時代の様相を留めている。現在の道の幅も「天保図」と一致しており、これは少なくとも天和三年までは遡ることが確実である。現在道はもう一度東に曲がり、さらに北に曲がり、突き当たって東に下る無縁坂に入るが、この部分は明治40年代に新たに大学用地が広がった結果設けられた道であり、明治年間に作られた部分である。江戸時代の道は竜岡門のまえから東に曲がり、さらに北に曲がったまま直進してもう一度東に曲がって、無縁坂に至っていた。現在の無縁坂に続く道の痕跡は設備管理棟の調査で確認している。無縁坂は絵図では四間であるが、現存す

### 第三章 江戸時代の遺構

る道もほぼ四間である。江戸時代の様相をよく留めているとみてよかろう。大学の境界の塀の下にある組石もここで江戸時代の様相を留めているとした部分に関しては、古相をしている。調査した地点で出土した組石同様の組み方をしており、明治年間以降に大学用地になった部分とは明らかに違う組み方である。一つの傍証になろう。南北の境界はこれでまず間違いはないと考えられるが、東西はいささか問題がある。絵図相互でかならずしも一致しない。現状ともっともよく一致すると考えられるのはこれらの道で現状と合せることである。そうすると現在の文京区立「たんぼぼ保育園」の東端が江戸時代の講安寺との境界と一致していると考えられる。ここには五間の幅の道があり、この西が天和三年以降の大聖寺藩の屋敷地になる。

現状と絵図をこのようにしてあわせると、無縁坂の北端は調査区のAAラインの南1.5mになり、天和三年以降の無縁坂に面した大聖寺藩の屋敷と加賀藩上屋敷の境界は43ラインの東1m~2mにあったものと推測できる。この境界の両側には大聖寺藩の裏門と加賀藩の「御作事御門」とがある。天和三年以前には、この境界はずっと西にあり、竜岡門の前で東に曲がり、さらに北に曲がった道の延長線上にあった。東端は既に見ているように、6号組石南北部分であった。

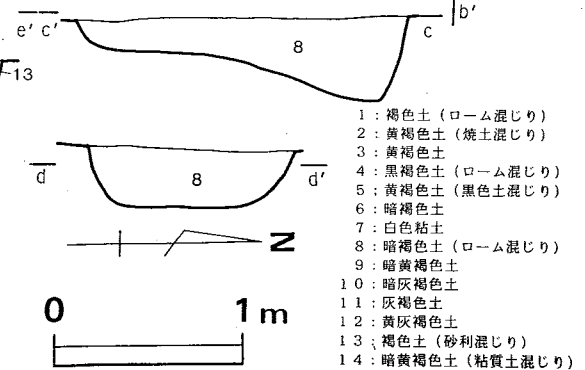
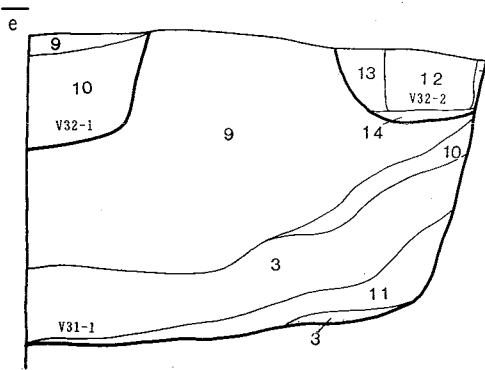
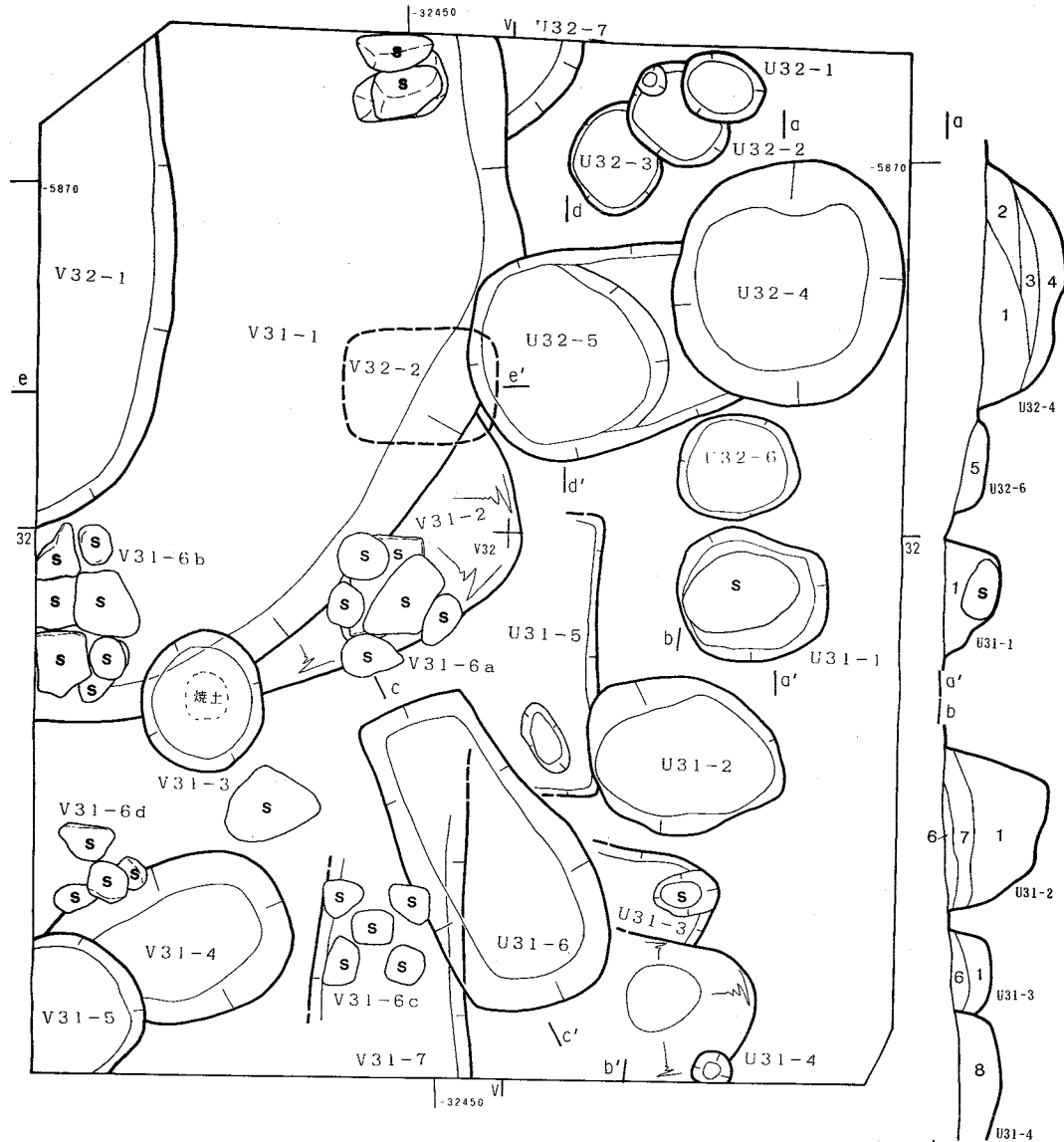
今回の調査地点で言うと U・V=37・38区、U・V=40・41区、Y40区は天和三年以降の大聖寺藩の裏門の進入地点に近いところにあたっており、V・W=44区は加賀藩の「御作事御門」の進入部分に近い。さらに V・W=52・53区と X・Y=48・49区も進入口関連の通路部分にあっている。今回の調査でもこれらの地点は遺構の少ないところであった。絵図で建物が少なく、発掘調査によっても遺構の確認が少ないのは一致している。天和三年以前については、屋敷内の土地利用についての情報がなく、発掘調査によってもほとんど情報が得られていないため、明らかではない。U・V=31・32区、U・V33区は設備管理棟建設地点の東北部と一連のものであり、門の東側の居住部分であったものと考えられる。建物の礎石の根石、植栽の跡、多くの土坑などが生活の場であったことを示している。そうした遺構のあるなかで、明確に把握できているわけではないが、設備管理棟建設地点の遺構を含む X37-3、V37-1、V33-3、V31-7と連なる可能性のある溝は重要である。底の高さもほぼ一致しており、幅も類似している。もしこれらが一連のものであるとするならば、天和三年以降の大聖寺藩の屋敷の裏門の東側にあった居住区を画する地境の溝であった可能性が強い。溝の上に板塀などがあったのであろう。溝の南側・東側には居住に関連する遺構が集中し、北側・西側には遺構がほとんど見られない。通路であったからであろう。

V~X=45~47区は天和三年以降の加賀藩上屋敷の「御作事御門」に関係する建物とそれを取り巻く一連の遺構であろう。はっきりとした礎石はないが、大型の地下式土坑、ゴミ穴、植栽痕を含む多くの土坑がある。こうした一連の遺構の存在は建物を中心にしたものと考えることができよう。J~M=38・39区は破壊がひどく、地境の溝かと考えられるものを確認したに留まるが、これは大聖寺藩の屋敷内の区画を目的にした溝であろう。絵図とも符合する可能性がある。

X~AE=33区、AF~AL=32・33区は北半が破壊がひどく、ほとんど調査できなかった。南半は給水設備棟建設地点に連なる榊原家の屋敷内の土坑を中心にした一連の遺構群ということができよう。

以上のようにきわめて不十分ではあるが、絵図との対比をして、共同溝を中心にした遺構群のあ

第五節 共同溝建設地点などの遺構



- 1: 褐色土 (ローム混じり)
- 2: 黄褐色土 (焼土混じり)
- 3: 黄褐色土
- 4: 黒褐色土 (ローム混じり)
- 5: 黄褐色土 (黒色土混じり)
- 6: 暗褐色土
- 7: 白色粘土
- 8: 暗褐色土 (ローム混じり)
- 9: 暗黄褐色土
- 10: 暗灰褐色土
- 11: 灰褐色土
- 12: 黄灰褐色土
- 13: 褐色土 (砂利混じり)
- 14: 暗黄褐色土 (粘質土混じり)

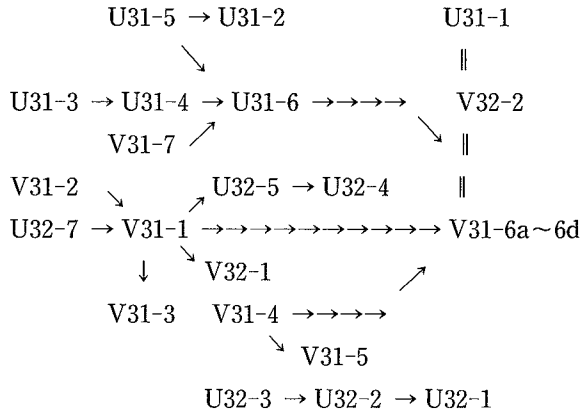
III-263図 U31-1~6、U32-1~7、V31-1~7、V32-1、2実測図 (a-a'・b-b':15.0m、c-c'~e-e':14.7m) (国土座標系I系)

り方をみてきた。今後実施されるであろう調査によって補正し、時期ごとのあり方を探り、その土地利用を明らかにしていく必要がある。その目安になればと思っている。(藤本 強)

## 2 遺構各説

### U・V=31・32区の調査

南北4.6m、東西5.6mの範囲の調査である。排水管の推進工法の起点となる大型の竪坑部分の調査である。ここはかなり錯綜した様相をみせており、大小とりまぜ22の遺構が確認されている。北側では近代以降の攪乱のすぐ下にロームがあるが、南側では大型の遺構があること、南東隅には大正時代に掘られたいわゆるいたち掘りの土管があり、それが一部壊れて天井が落ち込み、かなり掘らないとロームは出現しなかった。調査は北から南に進めたが難航した。北側は植栽の跡かと思われる土坑が多く簡単であったが、南側には建物の礎石の根石かと思われるものももっとも新しい段階で出現している。礎石の抜き穴かと思われるものを含め7例あり、建物があつた可能性が高い。さらに大型の土坑もあり、この底は地表下3m以下である。北と南はV31-7を境にして変わる。V31-7の北は植栽の跡が主体であるのたいし、南は生活に関連する遺構が多い。地境的な意味があつたのであろう。遺物は少なく、V31-1、V32-2で若干の出土がみられる。切りあい関係は下記の通り。



**U31-1** 0.8m×0.7m、深さ0.3mの土坑の中央に0.6m×0.4mの円礫が置かれている(III-263図)。埋土はローム混じりの褐色土である。石の上面の高さは14.9mであり、後述するV31-6a~6dとほぼ一致している。位置はV31-6b・6aの延長線上にある。距離もV31-6aから1.8mほどであり、礎石の根石の可能性がある。難点は東に対応するものがないことである。またV31-6aと6bは少なくとも三段にわたって石が積まれているが、ここは一段である。V31-6a・6bが土坑の埋土に置かれているからかもしれない。U31-1はロームの上に直接石が置かれているので、しっかりと安定しているのて、一段にしたとも考えられる。狭い範囲なので確実なことはいえないが、建物の礎石の根石であつた可能性があることを指摘するに留める。遺物はない。

**U31-2・3・4** いずれも植栽に関係するものであり、不整な楕円形であつたのであろう(III-263図)。埋土もロームを混じえた暗~褐色土であり、深さも2が0.6mとやや深いが、他は0.2mほどと

## 第五節 共同溝建設地点などの遺構

浅い。U31-4 の東北隅に深さ10cm の杭穴がある。植栽の支えでもあったのであろう。3の北側にあるピットには石が入っている。性格は不明。いずれからも遺物はない。

**U31-5** 1.7mほどの一辺をもつ土坑の一部である(III-263図)。深さは0.2mほどであり、南は破壊が深くなるため確認不能になる。なかに深さ10cmほどのピットがあるが、この遺構に伴うものかわからない。埋土は暗褐色土である。性格は不明。

**U31-6** 長軸1.7m, 短軸0.9m, 深さ0.4mの不整形の土坑である(III-263図)。埋土はロームを混じえた暗褐色土であり、植栽の跡に類似するが形が異なる。遺物はなく、性格は不明。

**U32-1・2・3** いずれも楕円形であり、深さは1・2が25cm, 3が10cmである(III-263図)。埋土はローム混じりの暗～褐色土である。植栽の跡であろう。2の南西にあるのは支えの杭穴であろう。

**U32-4・5** 4は径1.3mの略円形で深さ0.5m, 5は長径1.7m, 短径1.1mの楕円形で深さ0.3mの土坑である(III-263図)。埋土はロームを混じえた暗褐色土である。植栽の跡であろう。

**U32-6・7** 6は0.6mほどの楕円形で深さ0.2m, 7は全形は不明の深さ0.4mの土坑である(III-263図)。埋土はローム混じりの黒～暗褐色土である。植栽の跡であろう。

**V31-1** 調査区の南西に大きくある土坑である。切りあい関係は複雑である。上部にV31-6a・6bが作られている。現存部分は3.8mあり、深さも1.7mと深い(III-263図)。埋土はいずれもロームを混じえており、レンズ状の堆積をしている。西北端に大型の石が3ある。上面の高さは14.7mでV31-6a～6dと比べると若干低いが、上部の石が一段なくなっているとするとV31-6a～6dと一連のものであった可能性がある。距離は2.7m離れていて6aと6cを結ぶ線の延長上にある。この石の掘り方ははっきり確認することはできなかった。後述するV32-2も掘り方をつかむことができなかったことを考えると根石であったものと思われる。この石、V32-2, V31-6a・6cが江戸間の一間、半間、一間の距離で並ぶことになる。やや確実さに欠けるが、この石から4.5mはなれてV33-4がある。V33-4もこれらと一連の遺構とできる可能性がある。この土坑からは18世紀前半が中心の陶器若干が出土している。磁器の出土は少ない。この土坑の性格は不明である。

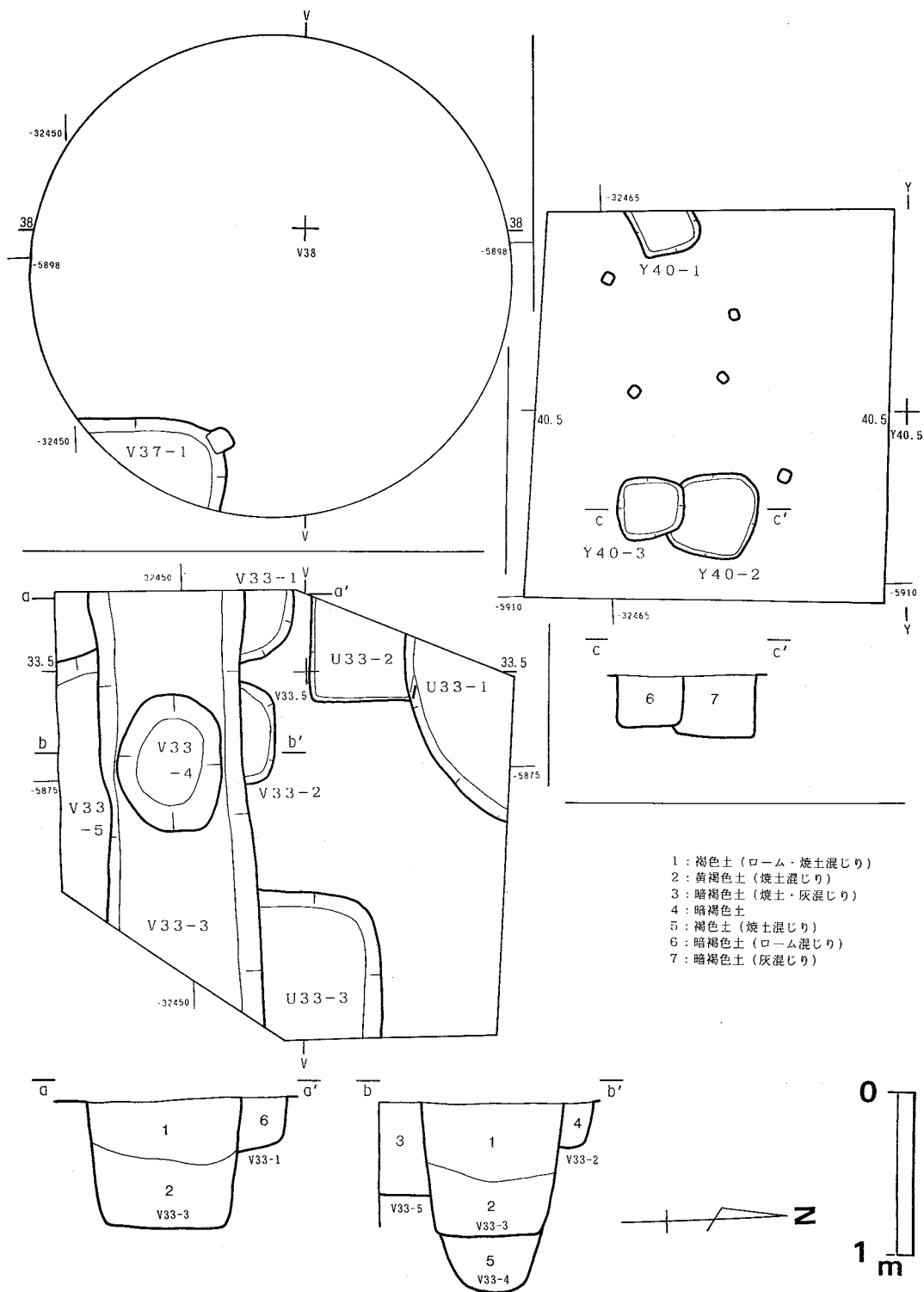
**V31-2** V31-1に大きく切られている大型の土坑である(III-263図)。暗褐色土を埋土にしており、深さは1.3mあり、遺物の出土はない。性格は不明。

**V31-3・4・5** 3は径0.8m, 深さ0.4mの円形, 4は深さ0.4m, 5は深さ0.6mの楕円形であったものと考えられる(III-263図)。埋土はローム混じりの黒～暗褐色土である。植栽の跡であろう。

**V31-6a・b・c・d** ほぼ一間ずつはなれてある積み石である(III-263図)。aとbは三段に0.6m～0.7mの石が積んである。その下部は上面から1mに達している。掘り方は明確には確認できなかった。cは一段で5個の石からなっている。dは下にある土管の穴のせいか乱れているようである。aとbの延長線上にはU31-1が、aとcの延長線上にはV32-2とV31-1の西端の石さらにV33-4がある。これらの八つの石はともにある建物の礎石の根石あるいはその抜き穴であった可能性が高い。狭い範囲なので確言はできないが、これらの上に建物があったのであろう。U31-1の東西の延長線上にそれらしいものを確認できなかった。今後の調査の際に留意する必要がある。

**V31-7** 東西に走る溝状の遺構の一部であろう(III-263図)。幅0.8m, 深さは0.5mほどで、底の標高は14.2mである。形と方向から、U・V33区にあるV33-3に連なる可能性、さらにV37-1・

第三章 江戸時代の遺構



III-264図 U33-1~3, V33-1~5, V37-1, U40-1~3 実測図 (土層図の水準: 15.2m) (国土地標系IX系)

## 第五節 共同溝建設地点などの遺構

X37-3に連なり、地境の溝であった可能性がある。屋敷の地割の復元に重要な役割をする可能性がある。

V32-1 大半は調査区の外にある土坑である。埋土は貝殻を混じえる暗灰褐色土である。陶器など少量の遺物が出土している。性格は不明である。

V32-2 平面的にはっきり把握することができなかったが、0.8m×0.6mほどの土坑であろう。土層図にもみられるように特殊な堆積をしている。底には根固め用かと思われる灰色の粘質土の薄層があり、南側には砂利混じりでよくつき固められた土がみられる。位置はV31-6aの西0.9m、V31-1西端の石の東1.8mである。この位置およびその特殊な堆積の状況から礎石の根石の抜き穴と考えるのがもっとも妥当であろう。V31-6a～6d・V31-1の西端の石・U31-1さらにV33-4とともに建物の礎石と関係する一連の遺構となろう。(藤本 強)

### U・V=33区の調査

ここもU・V=31・32区と同様にかなり錯綜するかにみえたが、さほど複雑にはならなかった。8遺構が確認できたが、完全な例は一つもない。うち北側の5例は植栽の跡である可能性が高い。1例は溝、1例は大型の土坑の一部である。残る1例は礎石の抜き穴の可能性のあるものである。溝状の遺構であるV33-1はV31-7・V37-1・X37-3に連なる可能性がある。

U33-1・2・3, V33-1・2 いずれも部分的にしか調査できていない(III-264図)。深さも0.2m～0.3mと浅く、埋土はローム混じりの暗～暗黄褐色土である。植栽の跡であろう。遺物はない。

V33-3 幅1m～0.8m、深さ0.8mの溝である(III-264図)。埋土はローム・焼土の混じる褐色土である。走向、形状からV31-7に連なる可能性が強い。V37-1・X37-3に連なる可能性もある。そのもつ意味については調査の経過と概要の項で触れた。底にV33-4がある。新旧関係は明確ではない。

V33-4 V33-3の底になって発見したものであるが、埋土が酷似していたため、新旧関係は不明である。0.8m強×0.6m強の規模であり(III-264図)、V31-6c---V31-6a---V32-2---V31-1内西端の石の延長上にありV31-1内西端の石から4.5mの距離にある。これらと一連の遺構である可能性が高い。ただV32-2のような特殊な土の堆積はみられない。もし一連の遺構ということが明確になればV33-3より新しいことになる。今後の調査で明らかになろう。

V33-5 V33-3に切られ、わずかに残っている大型土坑である(III-264図)。深さは0.6m弱である。埋土は灰・焼土混じりの暗褐色土である。遺物はなく、性格は不明である。(藤本 強)

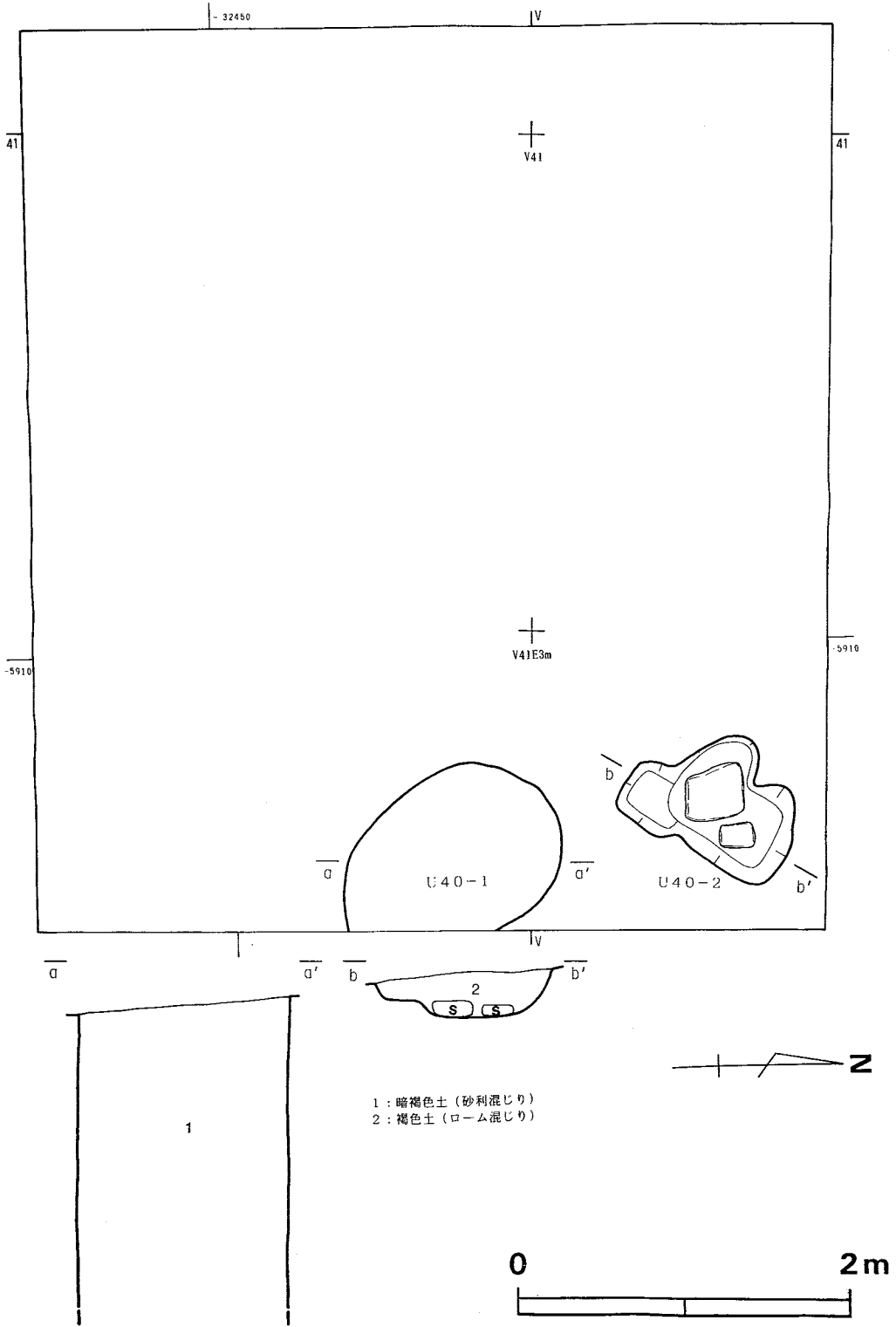
### U・V=37・38区の調査

直径3mの円形の部分の調査である。南北に走る大型の排水管が3本あり、その掘り方によりほとんどの部分が地表下3mまで破壊されていた。わずかに南西の隅に破壊されていない部分があり、ここにV37-1がある。

V37-1 深さ0.55mほどの土坑もしくは溝の一部である(III-264図)。ごく一部が調査区のなかにあり、大部分が調査区の外にあるのではっきりしない。埋土は灰色土混じりの黄褐色土である。土坑であれば隅丸方形になろう。遺構の北西隅に一辺12cm、深さ60cmの杭穴がある。遺構に伴うものと考えられる。溝であるとすれば、設備管理棟建設地点の南北に走るX37-3に連なり、この遺

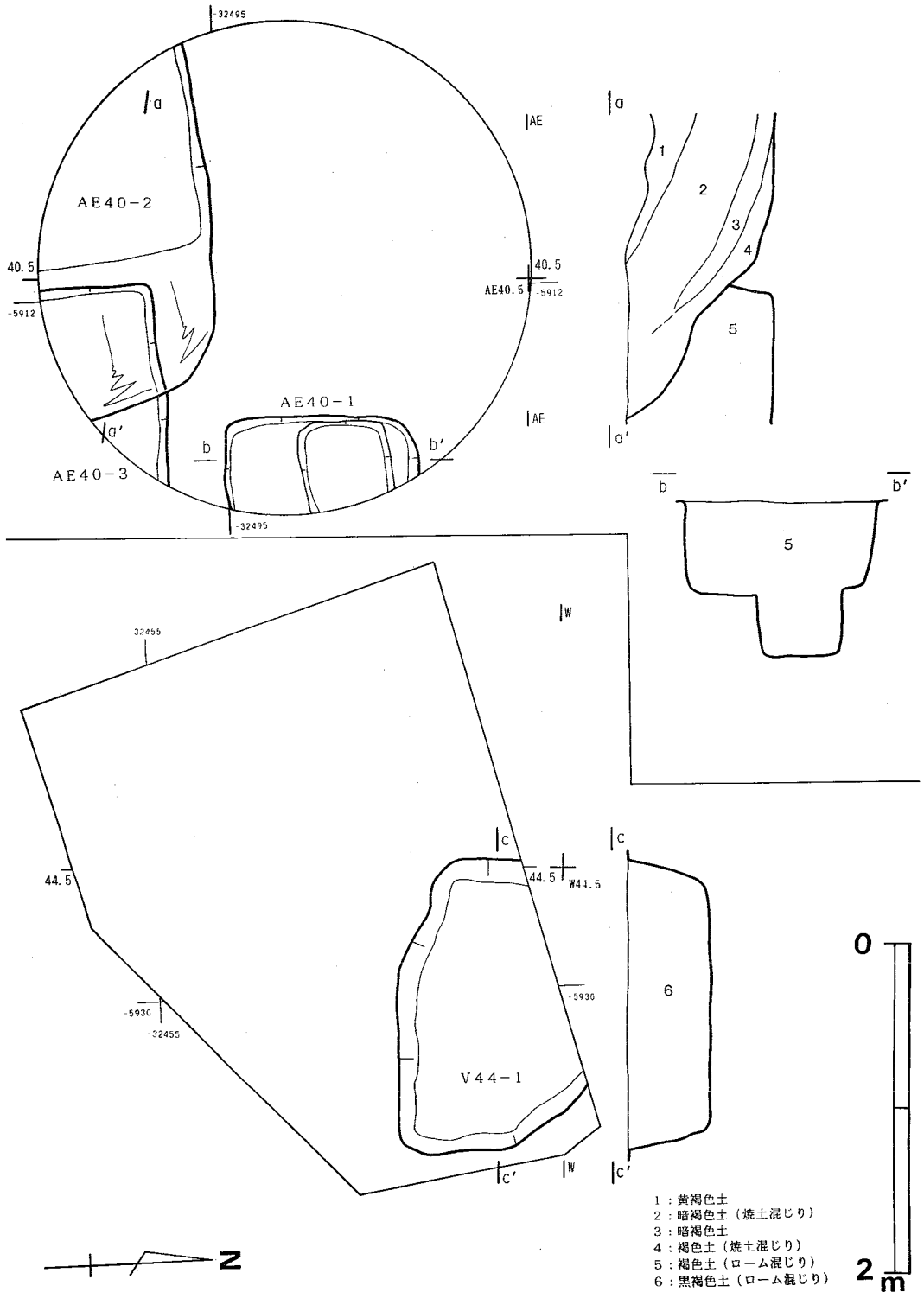


第三章 江戸時代の遺構



III-265図 U40-1・2実測図 (土層図の水準:15.2m) (国土座標系IX系)

第五節 共同溝建設地点などの遺構



III-266図 V44-1, AE40-1・2・3実測図 (土層図の水準:15.3m) (国土地標系IX系)

### 第三章 江戸時代の遺構

溝を西北の角とし、ここから東に向かい、V33-3さらに V31-7につながるものとする考え方である。V33-3・V31-7とは底の標高にほとんど差がなく、可能性は高い。X37-3との底のレベル差は30cmある。溝の走向・形状からみて可能性の高い推測と考えられる。文化年間に作成されたとされる大聖寺藩上屋敷の絵図（『大聖寺藩史』所収）によるとこの付近に地境の塀様のものがあり、塀の南側・東側には建物がかなりあることになっている。この地境の塀に関連した溝であるように思われるが、将来の調査を待ちたい。（藤本 強）

#### U・V=40・41区の調査

4.8m×5.6mの長方形の調査区である。西北の隅は大きく荒れており、調査はできなかった。電気の配管も東西に入っていたが、これはあまり破壊していなかった。井戸と平な石の入った土坑があるだけであり、そもそも遺構の少なかった地点である。遺物はきわめて少ない。

U40-1 長軸1.3m、短軸1.1m~1.2mほどの井戸である(III-265図)。素掘りであり、枠その他の構造は不明である。砂利混じりの暗褐色土で埋められている。

U40-2 1.1m×0.7mほどの不整多角形の土坑であり、深さは0.3mである(III-264図)。なかには石が2個あり、土坑の底についている。埋土はローム混じりの褐色土であり、何らかの建物の礎石に関連したものかと考えられるがはっきりしない。（藤本 強）

#### Y40区の調査

2.5mの方形の調査区である。表土から1mほどでロームの面になる。ローム面で土坑3と杭穴5が発見された。遺物はほとんどない。そもそも遺構の少ない地点であろう。杭穴は一辺5~7cmで、深さも8~12cmとほぼ斉一である。向きはかならずしも一様ではないが、5のうち4までが土坑を結ぶ線にある。関係があるとみてよかろう。板塀のようなものと関係するものであろうか。

Y40-1・2・3 一辺0.4m~0.5m、深さ0.3m~0.4mの不整形の土坑である(III-264図)。埋土はローム粒・灰・焼土の混じる暗褐色土である。1と2および3の間は約1.8mである。板塀に関係する穴かと思われるがはっきりしない。遺物はない。（藤本 強）

#### V・W=44区の調査

3.6m×2.6mの長方形の調査区である。遺構は少なかったものであろう。かなり破壊はされているが、多数の遺構があるならば、その痕跡がつかめる深さで大部分のところは調査している。しかし発見できたのは東北隅に土坑1を発見したに留まる。遺物はない。

V44-1 調査区東北隅近くにある土坑であるが、大部分は調査区の外にある。東西1.8m、深さ0.5mほどである(III-266図)。埋土はローム混じりの黒褐色土である。性格は不明。（藤本 強）

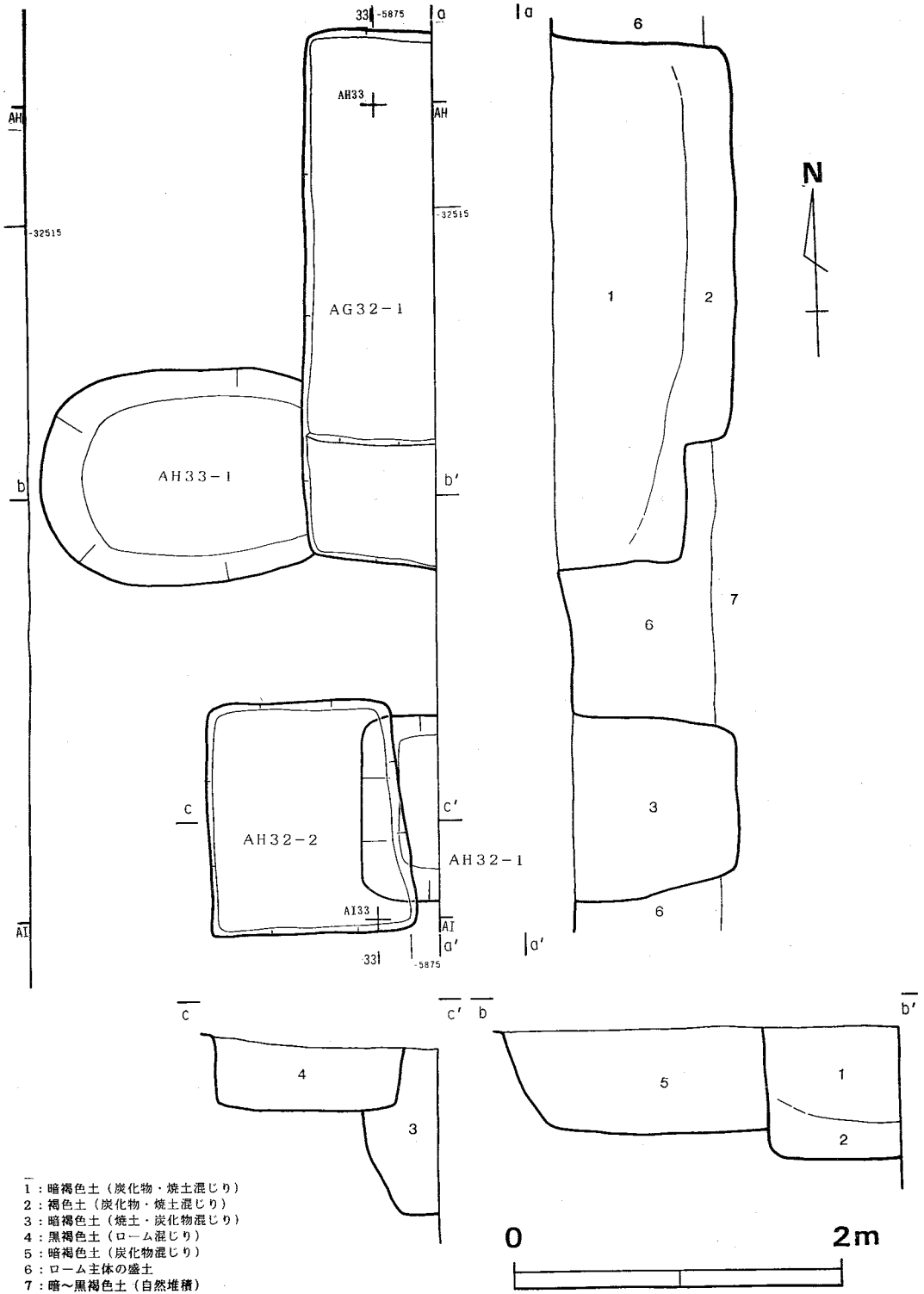
#### AE40区の調査

径3mの円形の調査区である。地表下0.9mで黒褐色土~ロームへの漸移層になる。東と南にはこれがなく、土坑3があった。遺物は少なく、性格は不明である。

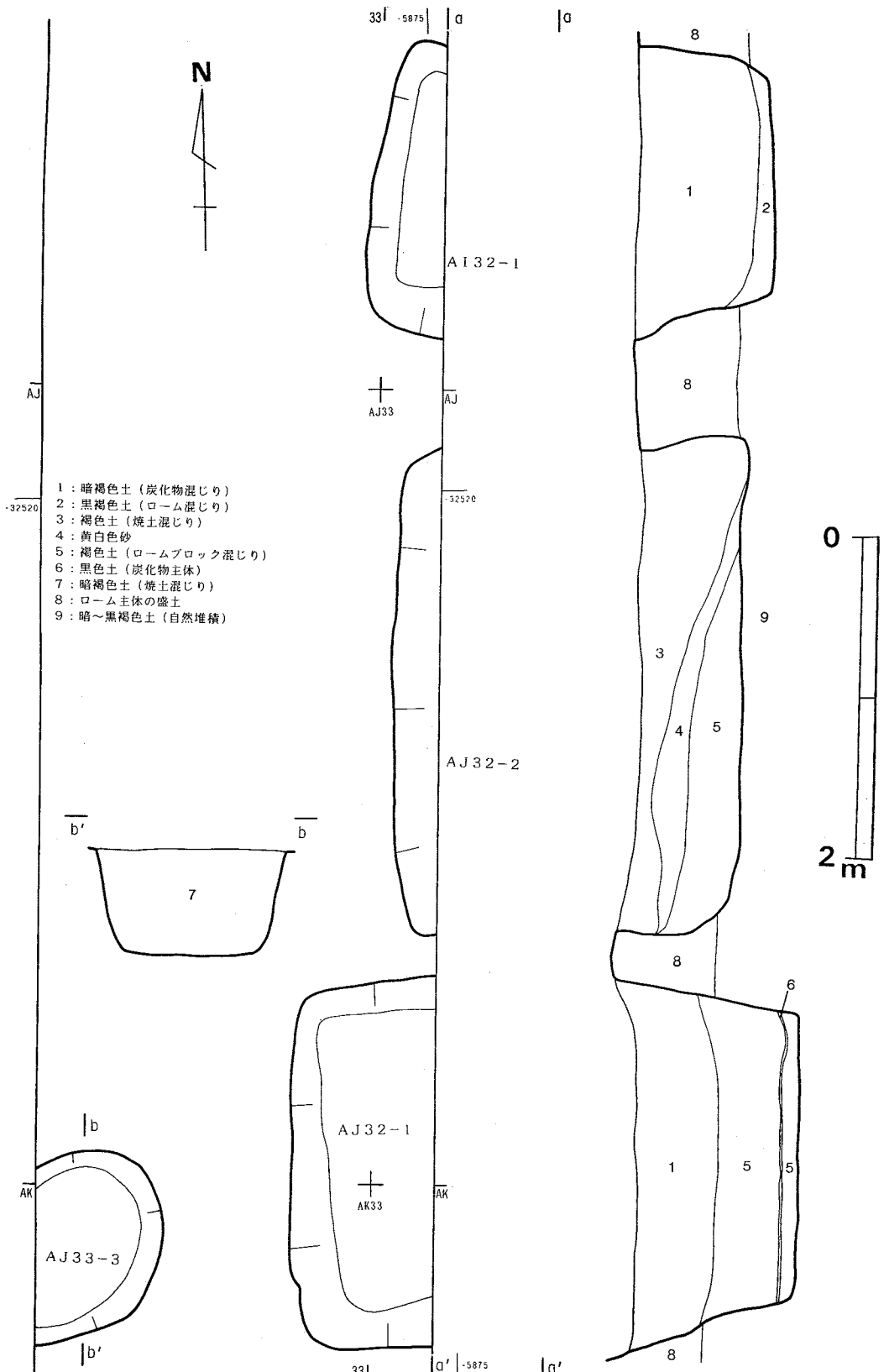
AE40-1 中央部が深い方形と思われる土坑である。南北1.2mほど深さは深いところで0.9mである(III-266図)。埋土はローム混じりの褐色土である。遺物は少量の磁器が出土している。

AE40-2・3 調査区南端の切りあった土坑である(III-266図)。2が新しく、3が古い。両者とも方形であろうが、大部分は調査区の外にある。埋土は2が黄~暗褐色土であり、3がローム混じりの

第五節 共同溝建設地点などの遺構



III-267図 AG32-1, AH33-1, AH32-1-2実測図 (土層図の水準: 15.0m) (国土座標系IX系)



III-268図 AI32-1, AJ32-1・2, AJ33-3実測図 (土層図の水準: 15.0m) (国土地標系IX系)

## 第五節 共同溝建設地点などの遺構

褐色土である。2から瓦の小片が若干出土している。

(藤本 強)

### X～AL=32・33区の調査

給水設備棟と設備管理棟をむすぶ共同溝の建設地の事前調査である。共同溝は X から AE まで幅2m, それより南は幅2.5mになるが, AF より北は破壊が深部にまで及んでいて調査不能であった。総延長 62m のうち調査ができたのは南の 22m である。点々とあるロームの上面は AD から南で急激に落ち始める。給水設備棟にみられた沢の続きである。AD が沢の北端になる。南端は AK あたりであり中心は AI もしくは AJ にある。共同溝と沢が斜めに交わるため沢の幅は大きくなる。AF より南は部分的に破壊がひどいところもあるが, 何とか調査することができた。基本的な層位は給水設備棟・設備管理棟地点と同一である。ここでは 8遺構が確認されているが, ロームを主体にする盛土を切って作られていて方形の土坑が多い。

AG32-1 南北3.2mの方形と思われる土坑である(III-267図)。中心は調査区の外であろう。底は二段になっていて, 深いところで1.1m, 浅いところで0.8m である。AH33-1を切っている。埋土は暗～褐色土である。性格は不明。

AH32-1・2 1は南北1.2m, 深さ1mの方形の土坑, 2は一辺1.2m～1.4m, 深さ0.4mの土坑である(III-267図)。2が1を切っている。埋土は1が暗褐色土, 2は黒褐色土である。18世紀代の陶磁器などの遺物若干がある。性格は不明。

AH33-1 AG32-1に切られている長軸1.8m, 短軸1.3m, 深さ0.6mの土坑である(III-267図)。埋土は炭化物混じりの黒褐色土である。19世紀代の陶磁器などの遺物がかなり多量にある。

AI32-1 土坑の西端がわずかにある。南北1.8m, 深さ0.9mの土坑である(III-268図)。暗～黒褐色土が埋土になっている。

AJ32-1・2 1は南北2.3m, 深さ1.1mの土坑, 2は南北3.1m, 深さ0.6mの土坑である(III-268図)。どちらも中心は調査区の外にある。埋土はどちらも焼土・炭化物を含む褐色土が上部に, ローム混じりの褐色土が下部にある。1は底の上10cmに炭化物主体の薄層がある。性格は不明。

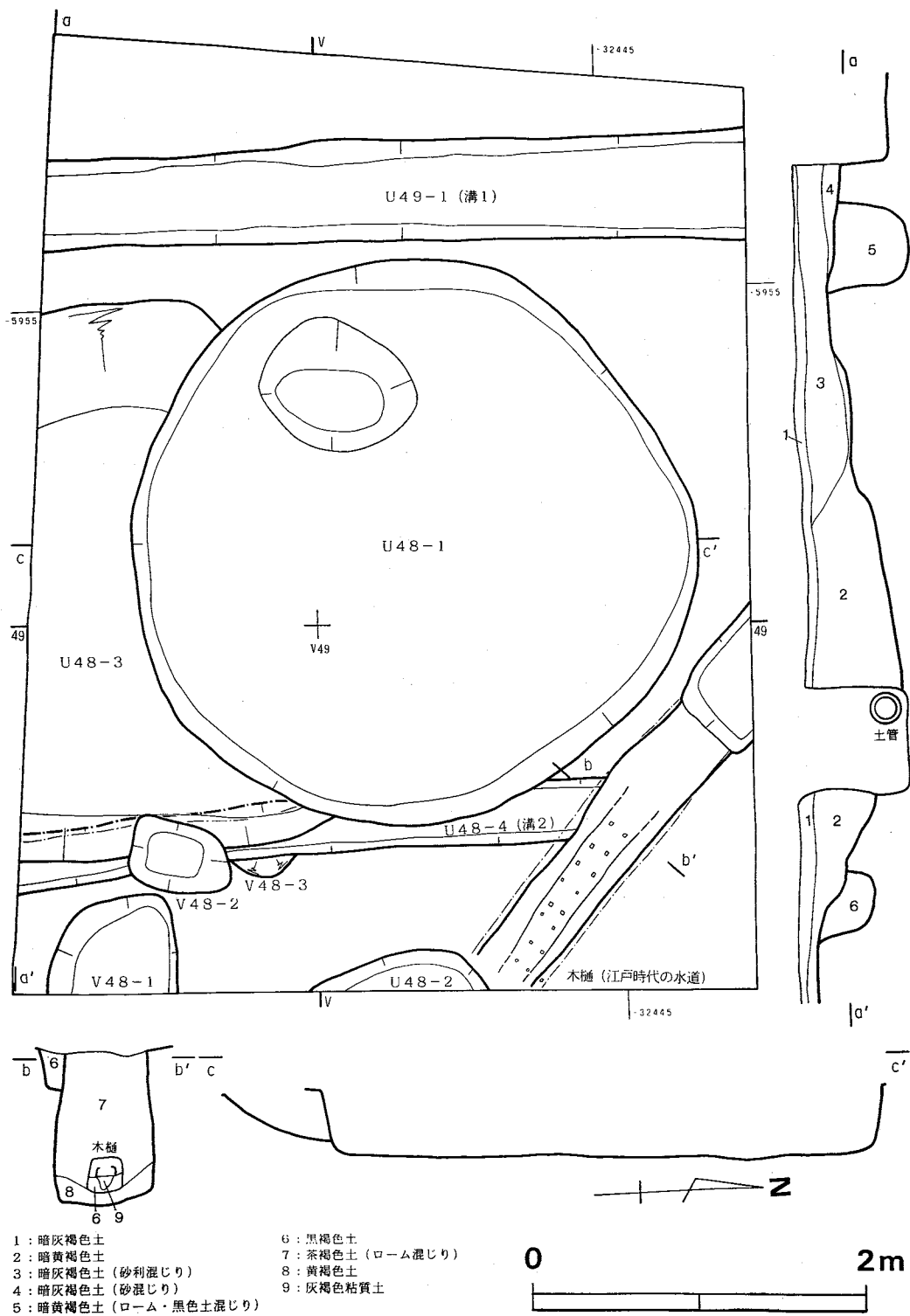
AJ33-3 給水設備棟建設地点のAJ33-1を切っている。1.4m×1.1m, 深さ0.7mの楕円形の土坑である(III-268図)。焼土混じりの暗褐色土が埋土になっている。性格は不明。なお, AJ33-1は明確な形では平面形がとらえられなかった。この区では攪乱がやや深部まで及んでいたこと, AJ33-1が周辺では浅くなるのが理由であろう。(藤本 強)

### U・V=48・49区の調査

4.5mに5.6mの不整な長方形をした調査区である(III-269図)。近代以降の土を取るとロームの面になる。9遺構が確認されている。遺構の数は少ない。土坑6, 溝2, 水道1である。遺物の数も少ない。絵図から考えると加賀藩の上屋敷のなかの通用門的性格のあった「御作事御門」に連なる通路に近いところかと考えられる。水道はあるが, 他は生活の匂いのあまり感じられない遺構である。したがって, 遺物も少数なのであろう。(藤本 強)

U48-1・2・3 1・3は大型の土坑で(III-269図), 切りあい関係があり, 1が新しい。1は径3.4m, 深さ70cmの円形の土坑で, 埋土はローム混じりの暗黄褐色土である。底の西側に掘り込みがある。遺物のごく少量であり, 植栽に関係するものかとも思うが, 壁が垂直に近いこと, 大型であること

第三章 江戸時代の遺構



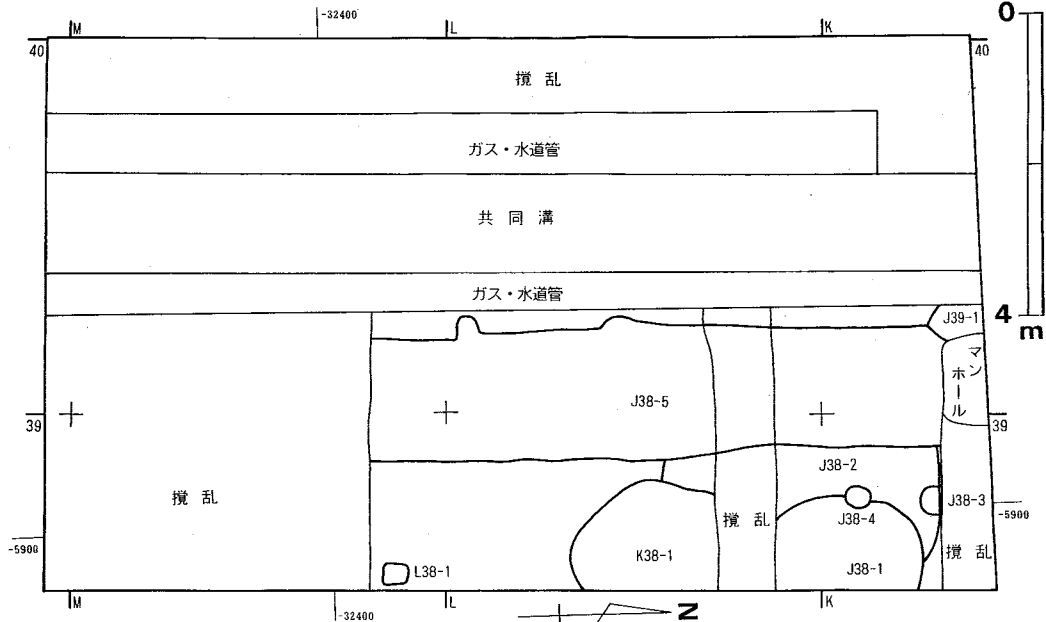
第五節 共同溝建設地点などの遺構

など植栽に関係するものと異なる要素が多く、性格はわからない。2は調査区の東端にある土坑で一部が調査されているに過ぎない。水道を切っている。埋土は暗黄褐色土で、1と類似する。深さは50cmである。3は1とV48-2に切られている。埋土はやはり暗黄褐色土で、深さは50cmである。2・3ともに1によく似た土坑で、少量の遺物がある。切りあい関係の新しいところで出現しており、類似の時期・性格をもっていたと考えられるが、それを特定することはできなかった。(小川 望)

**U48-4, U49-1** どちらも南北方向の溝である(III-269図)。幅・深さに若干の差がある。4は幅40cm, 深さ30cm, 1は幅60cm, 深さ65cmで1が若干大きい。この調査区のなかでは古い遺構である。埋土は4が黒褐色土, 1が暗黄褐色土である。両者の中心の距離は3.8mであり、六尺三寸間の二間にあたる。遺物はなく、性格は地境の溝もしくは建物の基礎に関連するものの可能性が考えられる。前者の可能性がより強い。六尺三寸間であるので、天和三年以前の大聖寺藩の屋敷に関する遺構であった可能性が高い。(小川 望)

**V48-1・2・3** 本調査区の東にある土坑である(III-269図)。3はU48-4に切られ, 2はU46-3を切っている。1の埋土は暗灰褐色土, 2は暗褐色土, 3は黒褐色土である。深さは1・2が50cm前後, 3は6cmと浅い。1を除き遺物はなく、性格は不明である。(小川 望)

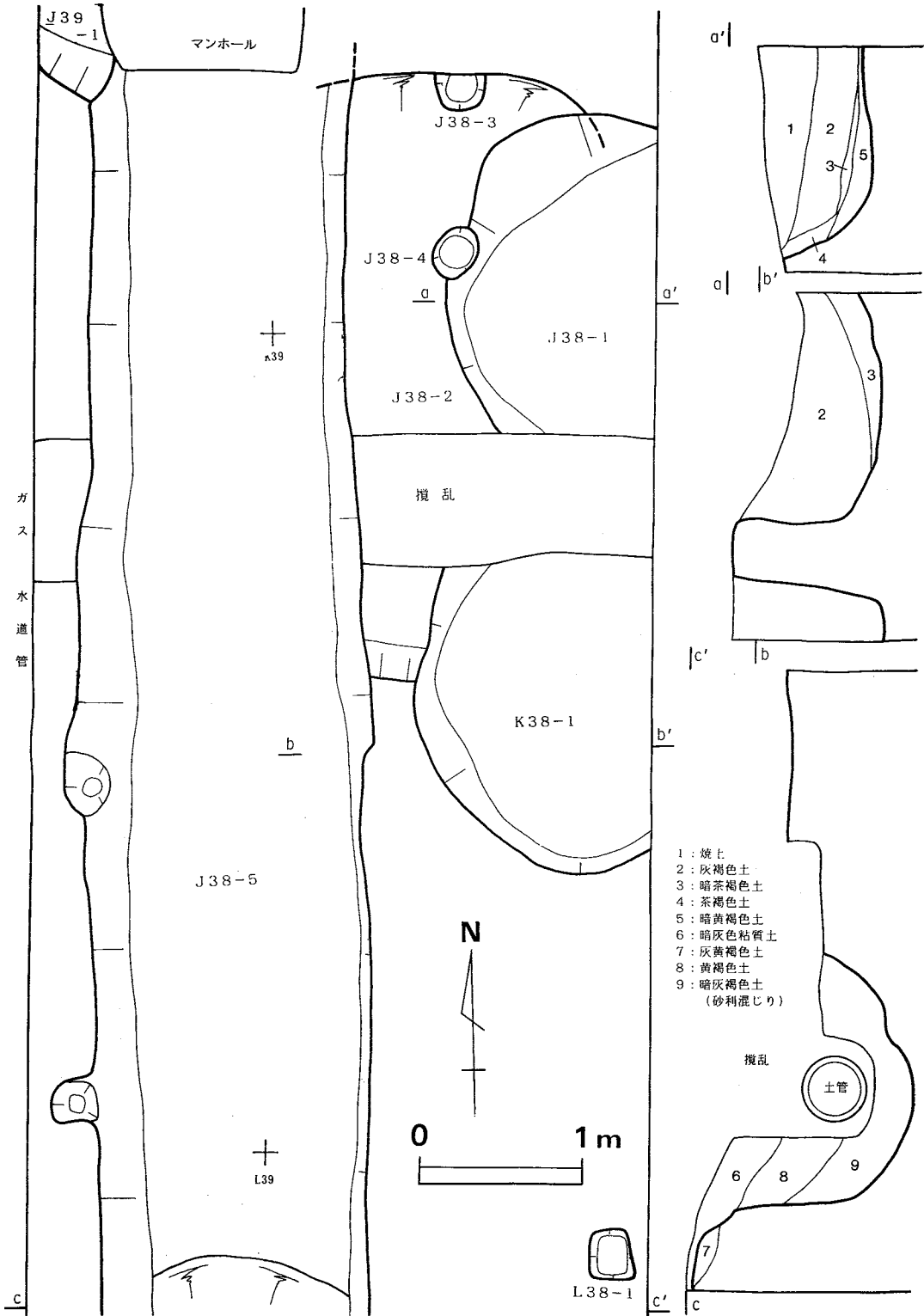
**江戸時代の水道** U48・W47・X46区で発見されている遺構である(III-269・272・276・277図)。間違いない一つの遺構であると考えられる。規模・レベル・形態が一致し、北西から南東に一直線に並んでいる。すべてロームの面で確認しており、掘り方の幅は50cm, 深さは区々であるが、水道の底の標高で比べると、北西側が高く、その差は10cmほどである。溝はところどころに幅の広がった部分がある。幅の広い部分は底の高さは周辺と同じであるが、底が上面より広がっているところと上面と同じ幅で底が掘り下げられているところとがある。底にはロームが主になる黄褐色土が



III-270図 J-K-38・39区平面図(国土地標系IX系)



第III章 江戸時代の遺構



III-271図 J38-1~5, J39-1, K38-1, L38-1 実測図 (土層図の水準: 15.6m)

## 第五節 共同溝建設地点などの遺構

あり、その上に空洞、木樋状のもの、釘などが発見された。この上には、茶～暗褐色土が堆積している。木樋と考えられるものは、断面が一辺20cmの方形のもので、四枚の板で作られていたものであろう。両端から4から5cmなかに入ったところに15～20cmおきに釘穴と考えられるものが検出された。細部の構造については腐食が進んでおり確認することができなかった。木樋状のものの存在、特殊な形態の釘や鏝が木質に包まれるようにして検出されることから、江戸時代に作られた水道と考えられる。この付近には神田上水などの上水道の引かれた記録はないので、東京大学の本郷構内ではまだ確認されていないが、上水井戸の水道部の可能性もある。(小川 望)

### J～M=38・39区の調査

7.5m弱と12.5m強のやや不整な方形の調査区である(III-270図)。東北の四分の一を除いて破壊がひどく調査不能であった。東北の部分でも上部はかなり破壊されている。近代以降の遺物の入っている土を取るとロームになる。8遺構が確認されているが、性格不明の遺構が多く、性格が推測できるのはJ38-5のみである。破壊されている部分が多いとはいえ、遺構の数は少ない。遺構の少ない部分であったのであろう。(藤本 強)

J38-1・2・3・4, K38-1 J・K38区にある切りあい関係のある遺構である(III-271図)。J38-2がもっとも古く、J38-5を含む他の遺構はこれを切っている。J38-1・2, K38-1は比較的大型の土坑でありJ38-3・4は小型の土坑である。埋土は暗～灰褐色土のものが多く、遺物はほとんどない。時期・性格は不明である。(小川 望)

J38-5 39ライン上を南北に走る大型の溝である(III-271図)。J38-2, J39-1を切っている。幅1.8m深さ1.2mの断面U字形の溝である。L39の南に一段深くなる場所がある。溝の西の上面に杭穴が2ある。深さは45cmあり、相互の距離は2m弱であり、六尺三寸間の一間の可能性がある。溝の方向は真南北であり、地境に関するものと考えられるが、調査した範囲が狭いので、確言はできない。埋土は暗灰～黄褐色土であり、水が流れていたもしくは溜っていた痕跡は認められない。遺物はほとんど出土していない。V区1号溝と類似した規模・形であるので、屋敷の境の溝かと考えられるが、絵図などによって推定される大聖寺藩の上屋敷と加賀藩の上屋敷の境界は15mほど西になるので、大聖寺藩の屋敷のなかにおける地境の溝と考えるのが妥当であろう。(小川 望)

J39-1 調査区の北端にわずかにかかる遺構で(III-271図)、J38-5にも切られているため、内容はほとんどわからない。暗灰褐色粘質土を埋土にし、若干の遺物がある。(小川 望)

L38-1 方形の小型の土坑である(III-271図)。深さは13cm、埋土は暗灰色土であり、少量の遺物が出土している。(小川 望)

### V～X=45～47区の調査

11m四方の調査区であり、多くの遺構があり、錯綜した状況を呈している(III-272図)。ほぼ中央には古い共同溝があり、深いところまで破壊していた。さらに北側にも排水本管の掘り方があり、これまた深くまで破壊している。近代以降の土を取ると、ところによって厚さは異なるが、厚さ20cmまでの盛土があり、この下はローム面になっている。68の遺構が確認されている。多くは植栽に関係する土坑であろうが、きわめて多数の遺構である。地下式土坑もあり、生活に関連する遺構もある。この地点は絵図によると天和三年以降の加賀藩の上屋敷のいわば通用門であった「御作事御

第三章 江戸時代の遺構

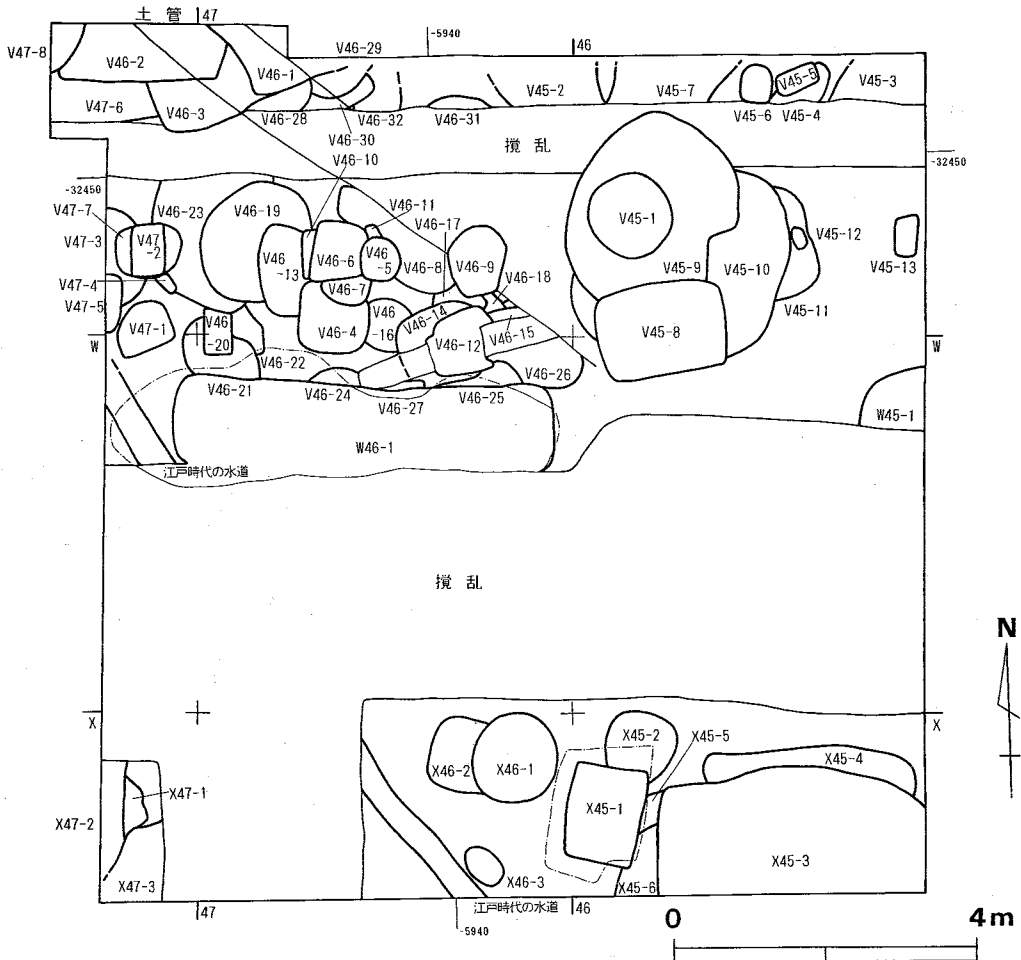
門」に関連する建物があったと考えられるところであり、それらに関係する人々の生活の匂いのする遺構があったものと推測することができよう。(藤本 強)

**V45-1・8・9・10・11・12** V45 区西南を中心にして相互に切りあう土坑である(III-274図)。長方形である 8を除き、楕円もしくは円形である。埋土は 1が木質の残る、有機質を多く含む暗灰褐色土であり、8も暗灰褐色土を主にするものである。他は暗褐色土を基調にする。深さは1・9・10が50cm前後、8は1.1m、11・12が15cm前後である。遺物はほとんどなく、時期・性格は不明。(萩尾昌枝)

**V45-2・3・4・5・6・7・13** V45 区にある土坑である(III-273・274図)。2~7 は相互に切りあい関係がある。暗~黄褐色土を埋土にしており、40cm 前後の深さのものが多い。遺物はほとんどなく、植栽に関係するものが多いと思われる。(萩尾昌枝)

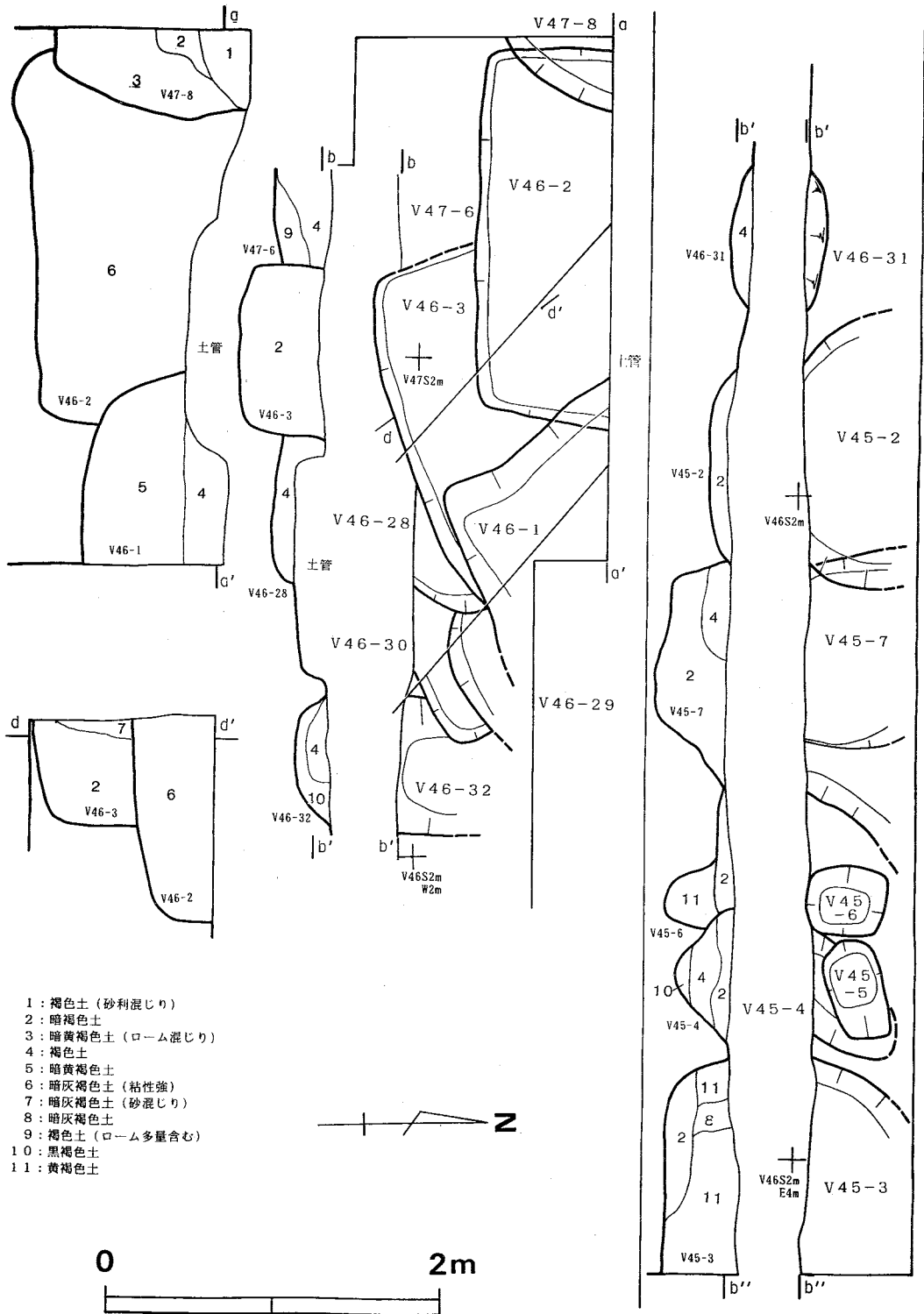
**V46-1** V46 区にあり、大部分は調査区の外にある土坑である(III-273図)。埋土は褐色土と暗褐色土であり、深さは80cmが確認できている。遺物もなく、時期・性格は不明。(小川 望)

**V46-2・3** V46 区にあるおそらく長方形になるであろう土坑である(III-273図)。他の土坑に切



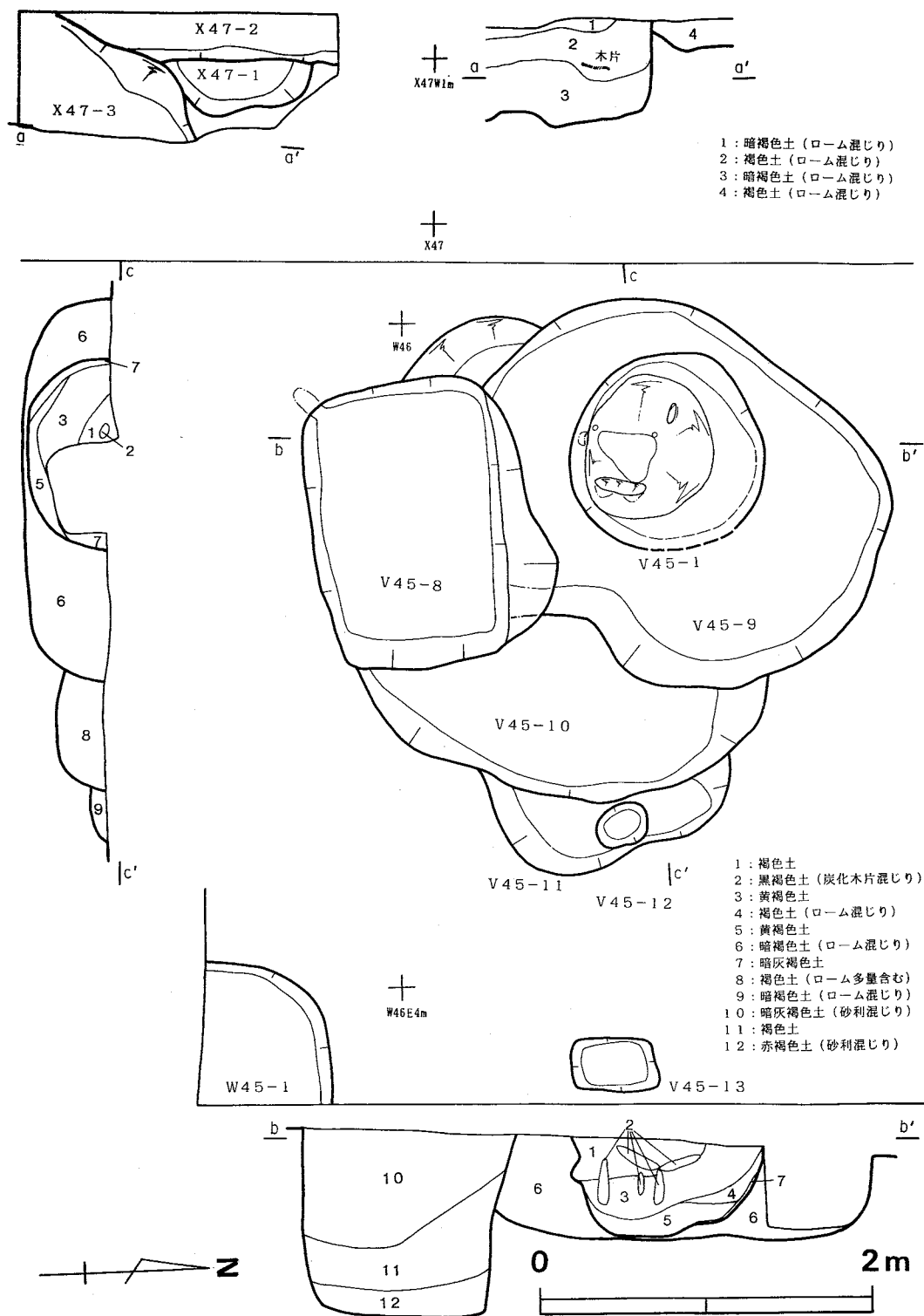
III-272図 V~X=45~47区平面図(国土地標系IX系)

第五節 共同溝建設地点などの遺構



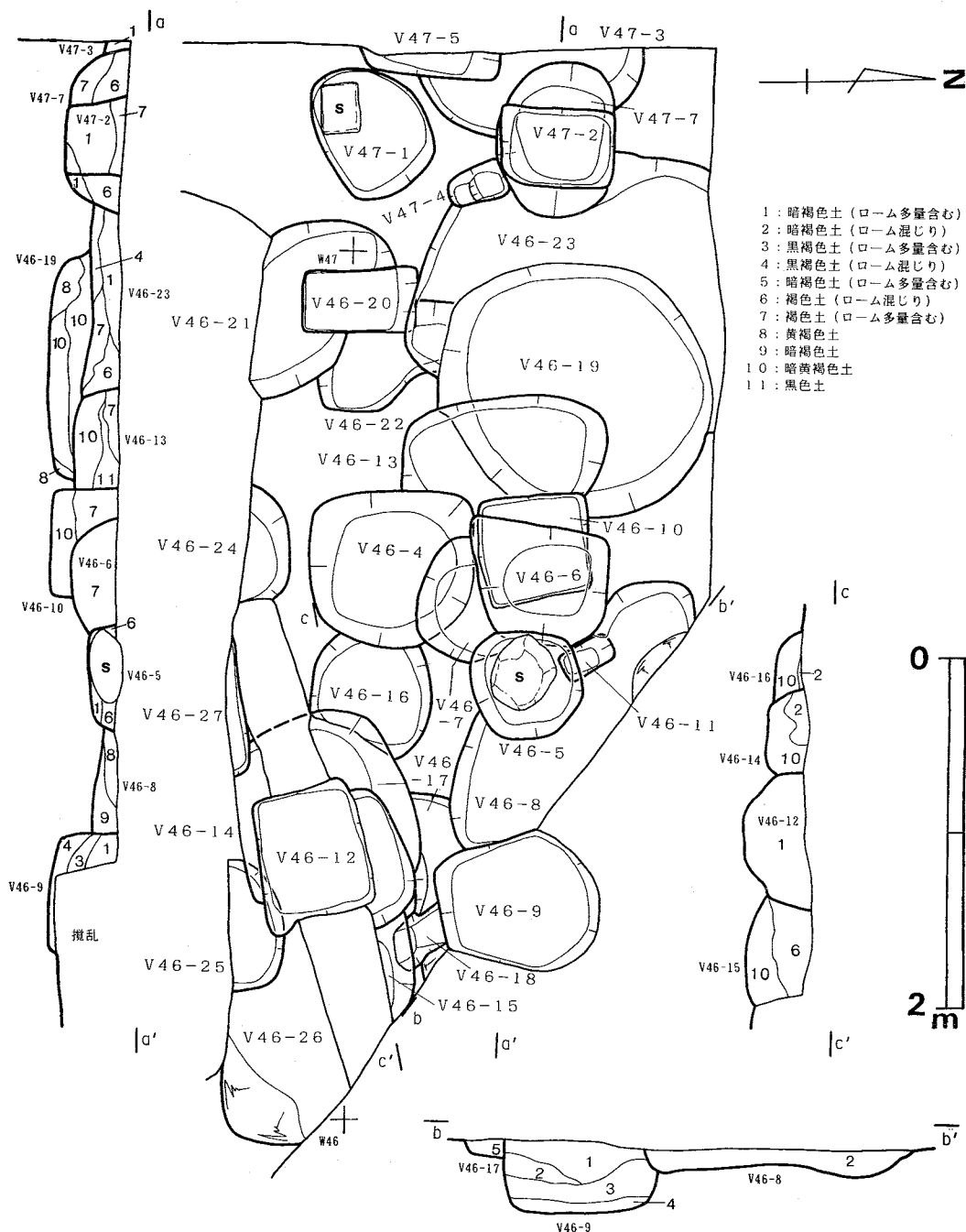
III-273図 V45-2~7、V46-1~3-28~32、V47-6・8実測図 (土層図の水準:15.5m)

### 第三章 江戸時代の遺構



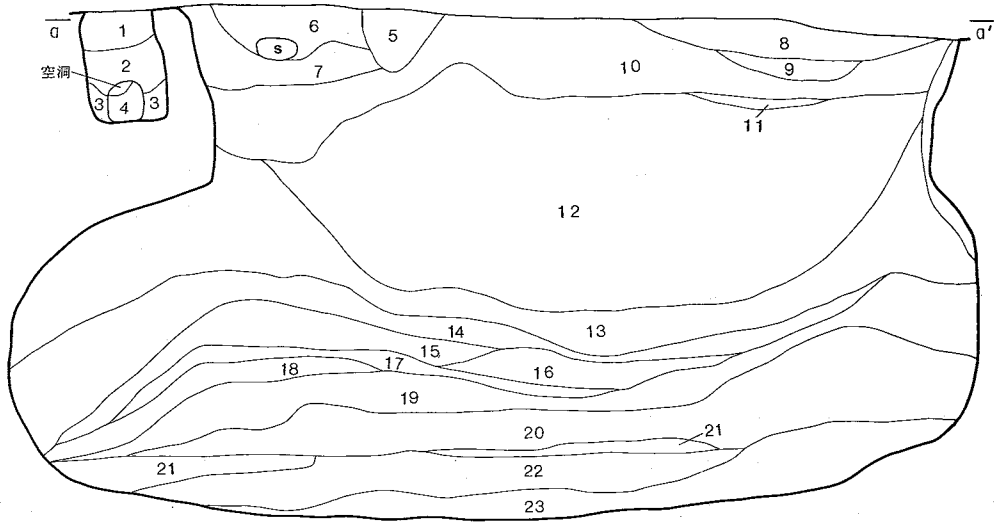
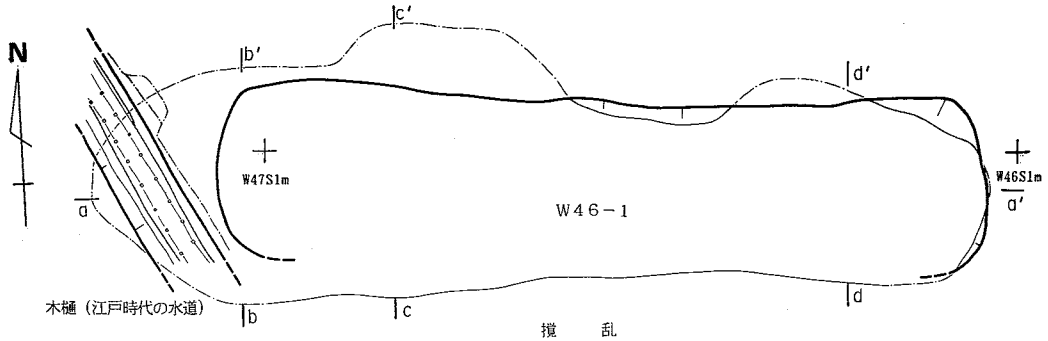
第五節 共同溝建設地点などの遺構

られ調査区の外に広がるなどして全容は不明である。2の深さは1.3m弱, 3は0.6mほどである。2は暗灰褐色土, 3は暗褐色土を埋土にしている。3は大量の, 2は若干量の18世紀末から幕末にかけての陶磁器を主にする遺物がある。周辺の土坑とは深さ, 形で異なるが, 性格は不明である。(成瀬晃司)

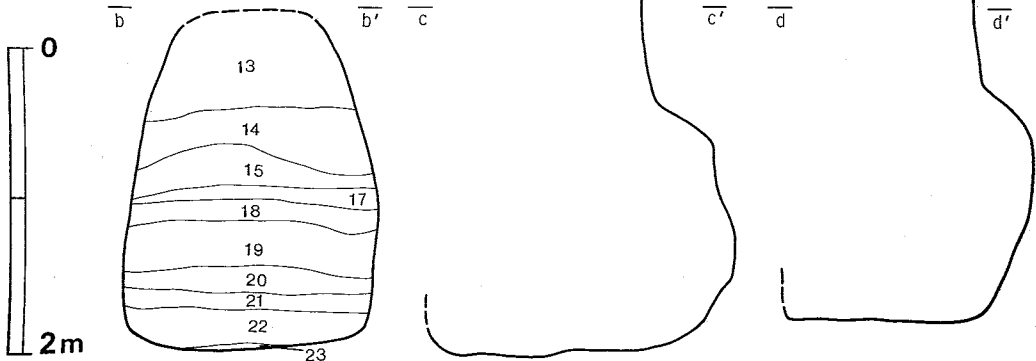


III-275図 V45-4~27, V47-1~7実測図 (土層図の水準:15.7m)

### 第三章 江戸時代の遺構



- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1: 暗褐色土 (砂利混じり)  | 13: 暗赤色土 (砂利混じり) |
| 2: 暗黄褐色土 (砂利混じり) | 14: 灰赤褐色土        |
| 3: 黄褐色土          | 15: 暗灰褐色土        |
| 4: 黒褐色粘質土        | 16: 黄褐色土 (ローム主体) |
| 5: 暗灰色粘質土        | 17: 灰黄褐色土        |
| 6: 暗赤褐色土         | 18: 灰褐色土         |
| 7: 暗灰褐色土         | 19: 暗黄褐色土        |
| 8: 暗黄褐色土         | 20: 灰褐色土         |
| 9: ロームブロック       | 21: 灰色粘質土        |
| 10: 茶褐色土         | 22: 黄褐色土 (ローム主体) |
| 11: 灰色粘質土        | 23: 暗黄褐色土        |
| 12: 暗赤色土 (焼土混じり) |                  |



III-276図 W46-1. 水道実測図 (土層図の水準: 14.5m, a-a': 15.5m)

## 第五節 共同溝建設地点などの遺構

V46-4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19 V46 区に中心のある土坑である (III-275 図)。相互に切りあったり、破壊されたりして、全形のはほとんどない。円形もしくは隅丸の長方形のものが多い。ローム混じりの黄～暗褐色土を埋土にするものが多く、深さも40cm以下であり、ほとんどは20～30cmである。5にはなかに平石があるが、付近に対応するものはない。遺物はないものが大部分であるが、あっても数点までである。ほとんどの土坑が植栽に関係するものであろう。(成瀬晃司)

V46-20 V・W46 区にある長方形の土坑である (III-275 図)。18世紀末から幕末にかけての陶磁器など若干が出土している。性格は不明である。(小川 望)

V46-21・22・23・24・25・26・27 V46 区に中心があり、一部 W46区などにも位置する切りあっている土坑である (III-275 図)。21・24～27は W46-1に切られている。円形もしくは楕円形であったのであろうが、全形は不明である。埋土はロームを含む褐色土が主である。ほとんどが遺物はなく、あっても1・2点である。植栽に関係するものであろう。(成瀬晃司)

V46-28・29・30・31・32 V46 区にある辛うじて残っている土坑である (III-273 図)。円形か楕円形のものであるが、全容はわからない。深さは10～20cmで浅い。ローム混じりの褐色土が埋土の主体である。遺物はない。時期はわからないが、植栽に関係するものであろう。(堀内秀樹)

V47-1・2・3・4・5・6・7 V47 区に中心のある土坑である (III-273・275 図)。ほとんどは円形であろうがはっきりしない。深さ30cm以下で、埋土はローム混じりの暗～褐色土である。遺物は6に若干量あるが、他にはほとんどない。時期は不明だが、植栽に関係するものであろう。(成瀬晃司)

V47-8 調査区の北西の隅にある土坑である (III-273 図)。一部分のみで全容は不明。埋土は暗黄褐色土・暗褐色土・褐色土であり、遺物もほとんどなく、時期・性格は不明。(小川 望)

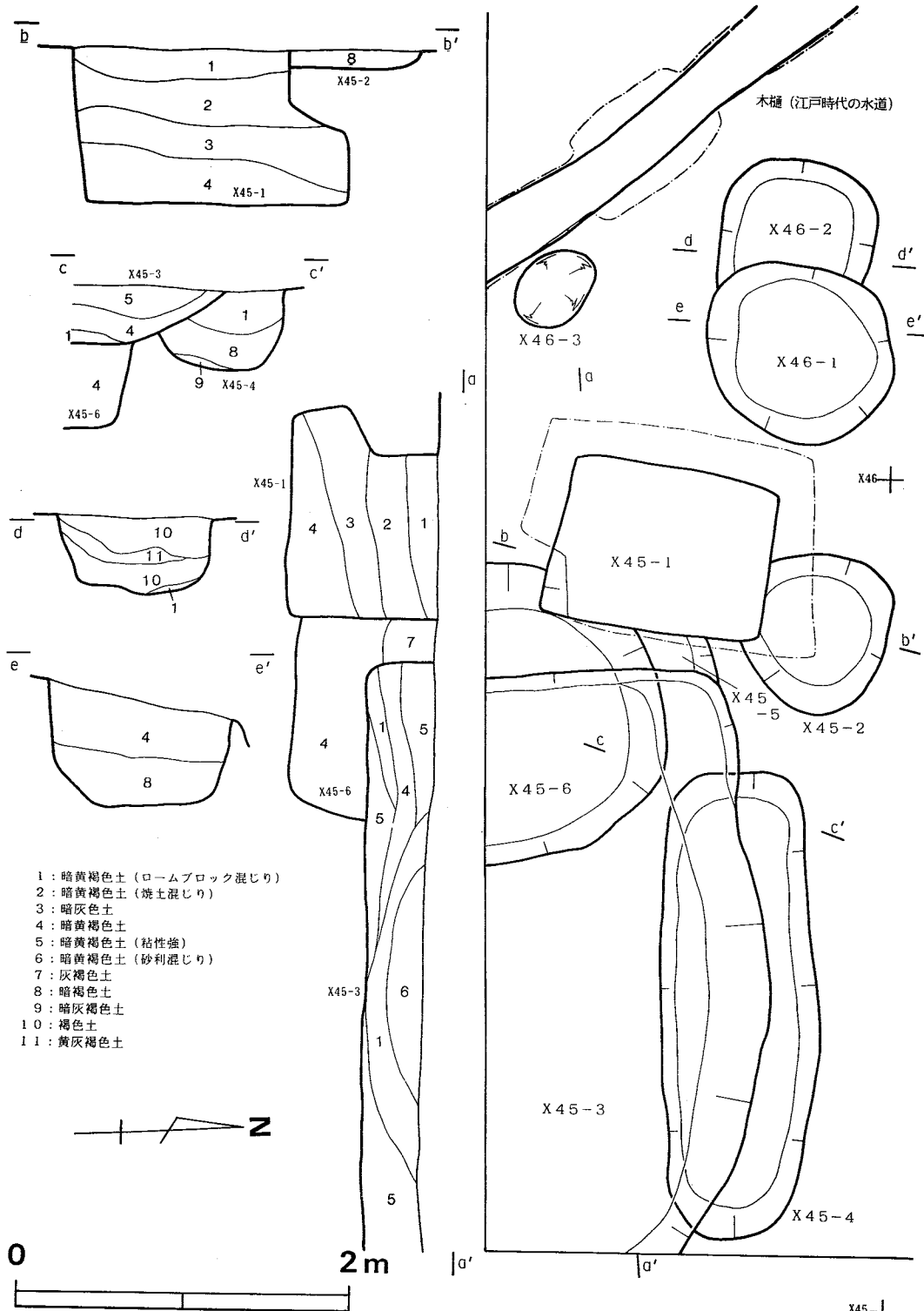
W45-1 W45 区にある土坑で、一部分が残るだけである (III-274 図)。深さは10cmしか確認されていない。遺物もなく時期・性格はわからない。植栽に関係するものか。(小川 望)

W46-1 W46 区に主要部のある地下式土坑である (III-276 図)。南側は共同溝・土管の掘り方で大きく破壊されている。この破壊された部分を取り除いている際に発見された。V46-14・21・24・25・27を切っている。江戸時代の水道とは直接の切りあいはない。入口はかなり壊れていると考えられるが調査時には東西5.1m、南北1.2mの長楕円であった。底は東西6m、南北は張り出し部分で1.8mある。二か所北に張り出す部分がある。底は平坦であるが、壁には丸みをもって移行する。天井は底から2.2mありかなり高い。天井と壁には工具の跡が残り凹凸がある。確認した面から底までは3.3mあり、底の標高は11.6mほどである。埋土は下部が灰褐色土を主にし、盛り上がるような堆積をしており、上部は焼土を混じえる暗赤褐色土で中央の低い堆積をしている。遺物は比較的多く、17世紀後半の陶磁器が中心である。この遺構は地下式土坑として構築され、廃棄に際し、ゴミ穴として利用し、最後に火事の後始末により集中的な埋め戻しをしたものと思われる。(小川 望)

X45-1 X45 区の西が中心の小規模な地下式土坑である (III-277 図)。周辺にある X45-2・5・6を切っており、付近では一番新しい遺構である。入口は南北1.3m、東西1mの長方形であり、底は南北と西の三方に広がり、南北1.8m、東西1.3mになる。天井は底から50cmしかなく、土の天井があるといっても、より高い天井をもつ地下式土坑とは機能の上で大きな違いがあろう。埋土はほとん

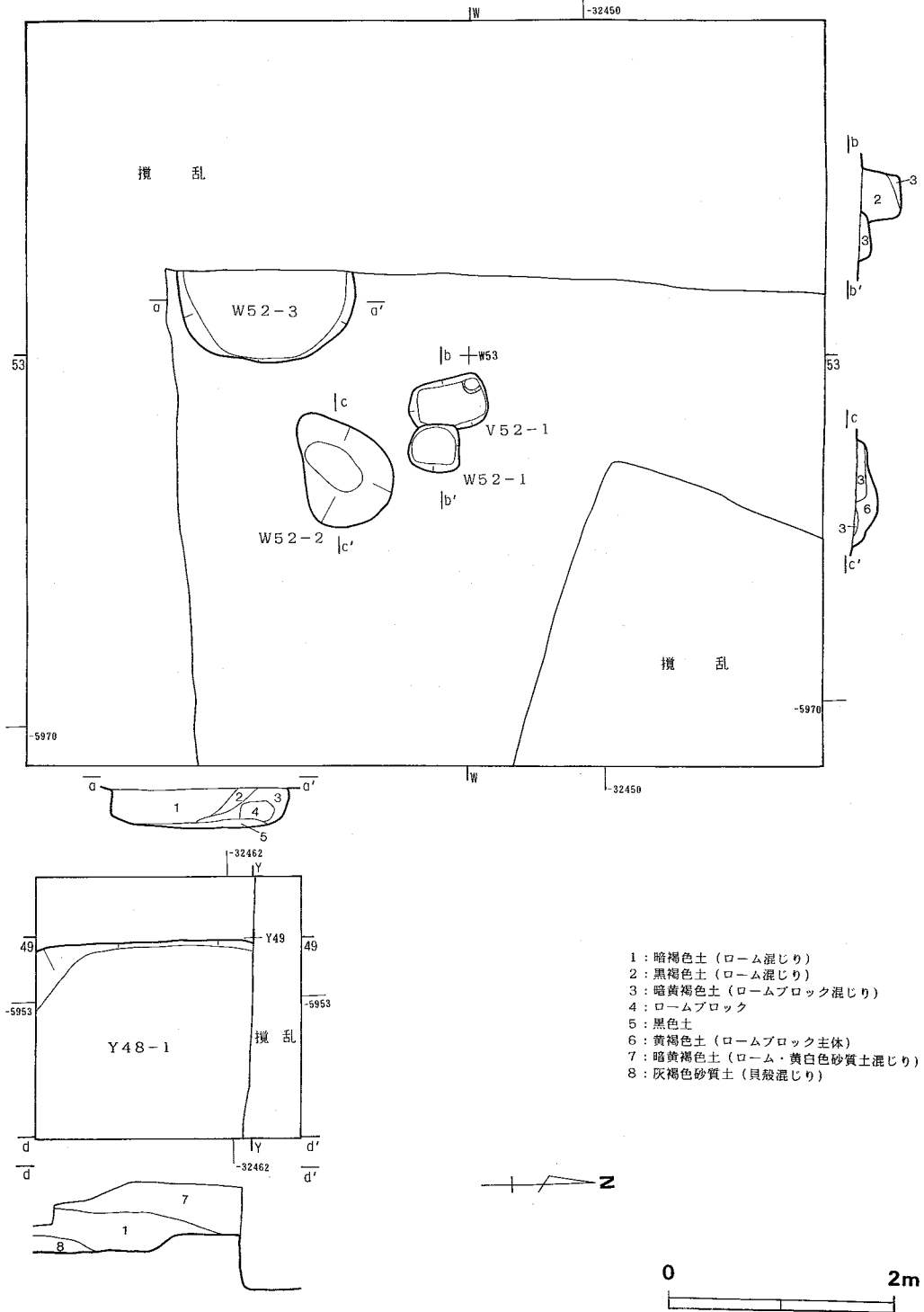


第三章 江戸時代の遺構



III-277図 X45-1~6、X46-1~3、水道実測図 (土層図の水準: 15.4m)

第五節 共同溝建設地点などの遺構



III-278図 Y48-1, V52-1, W52-1~3 実測図 (土層図の水準:15.8m) (国土座標系:Ⅱ系)

### 第三章 江戸時代の遺構

どが暗黄褐色土であり、ほぼ水平な堆積をしている。意図的に埋め戻されたものであろう。遺物はほとんどない。(小川 望)

**X45-2・3・4・5・6** X45 区にある各種の土坑である(III-277図)。2・4は調査区のなかにあるが、他は調査区の外もしくは他に切られて全形は不明である。2・6は円形、3・4は隅丸の長方形であろう。5は周辺のものに切られて一部が残っているに過ぎない。切りあい関係では1・3が新しく、3は4・5・6を切り、6は5を切っている。埋土は暗黄褐色土を主にするものが多い。2・5は10cm内外、3・4は50cm内外、6は90cmの深さがある。遺物はほとんどなく、性格・時期は不明である。(小川 望)

**X46-1・2・3** X46 区にある土坑である(III-277図)。いずれも小規模なものであり、埋土は暗黄褐色土～褐色土である。1が40cm、2が20cm強、3が10cmの深さである。遺物もほとんどなく、時期・性格はわからない。(萩尾昌枝)

**X47-1・2・3** X47 区にある切りあい関係のある土坑である(III-274図)。1がもっとも古く、3が一番新しい。埋土は褐色土を主にするものである。植栽に関係する土坑かと思われるが、はっきりしない。(萩尾昌枝)

#### V・W=52・53区の調査

病院地区でもっとも西の調査区である。ここでは現在のバス道路に取りつけるため、近代以降の盛土が厚くなっている。その下はいきなりロームの面になる。ここも近代以降の種々の要因によって、破壊されている部分がほとんどである。わずかに残ったところで土坑4が発見されたのみである。そもそも遺構の少ないところであったのであろう。加賀藩の上屋敷の通路部分にあたる場所であるからであろう。(藤本 強)

**V52-1, W52-1・2・3** W53 ポイント周辺にある土坑である(III-278図)。ロームがかなり削られた面での発見である。W52-3はやや大きい、他は小土坑である。埋土はV52-1が黒褐色土を主にする以外は暗褐色土を主にするものである。深さは1が10cm、2が20cm、3・4は40cmである。遺物はなく、時期・性格ともに不明である。(小川 望)

#### X・Y=48・49区の調査

2.4m四方の小さな調査区である。近代以降の土を取るとローム面が現われる。北側は破壊されている。土坑の一部があるのみである。

**Y48-1** 土坑の一部が発見されている(III-278図)。西壁だけが確認されているだけで、あとは調査区の外に広がっている。埋土は暗褐色土を主にしている。深さは60cmある。遺物は初期伊万里のいわゆる芙蓉手の大皿がある。時期・性格はわからない。(小川 望)

